
DESTINY **第一章 ~それぞれの路へ~**

把 多摩子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DESTINY 第一章「それぞれの路へ」

【Nコード】

N1747U

【作者名】

把 多摩子

【あらすじ】

絶世の美少女である主人公・アサギ。小学校の友達六人と、勇者として異界へ召喚された。それは、勇者になりたいと願っていたアサギにとっては、非常に嬉しい出来事だった。片想いの相手も一緒に勇者になったが、彼は以前からアサギを嫌っていた。それは、学校中で知らない人はいない真実だ。

魔王は四人存在すると知り、各々強くなろうと努力する中、魅惑の美少年トビイが現れる。何やら、アサギを知っている様子だった。そして次々と現れる、不可解な事を言う魔族達。”勇者は、勇者に

あらず？”

そんな中で魔王ハイは勇者アサギに一目惚れをし、ついに魔界へと攫ってしまう。26歳の暗黒神官の初恋の相手は、12歳の勇者だった。こうして勇者の要は、魔界で生活をする破目に。

魔王と勇者。

魔王と破壊の姫君。

破壊の姫君と次期魔王。

”異界から召喚された小さな勇者は、何を見極めればよいのだろう”

そして、仲間達に忍び寄る不穏な動き。

離れ離れになった小学生の勇者達は、必死にもがいて、あがく。

その先に、何が待ち受けているかなど知る由もなく。

勇者になって……世界を救えば、きっと。

『どう足掻こうとも、もう未来はすでに決まっている。運命の歯車が終焉を告げるまで滑稽に、足掻くが良いよ』

他サイトからの転載です。

外伝を先に読まれている場合、誰が誰の過去なのか解っていただければ幸いです。

幸せに、なれるといいね……

【登場人物紹介 及び 地名等設定資料集】（前書き）

極力、作品を更新するたびに、こちらでも更新していきたいと思っています。

夢は、全キャラどたん絵掲載！

あいうえお順にしたほうがいいのか、登場順にしたほうがいいのか悩んでいます。

困りました。今は、登場順になってます

登場人物が異様に多いので、「誰コイツ」と思われましてらば、こちらのページを見ていただけると幸いです。

現在、” 退屈凌ぎに、弄ぶ ” まで更新済み。

【登場人物紹介 及び 地名等設定資料集】

【現時点での登場人物】

特に重要な人物には がつきます。最重要人物には がついています。

尚、年齢はDESTINY第一章が完結時となっております。

『勇者』

アサギ（田上浅葱）：

4星の勇者。主人公。

絶世の美少女で身長は150センチとやや小柄だが胸がすでにBカップ、腰は細く小尻だが太腿は眩しく（以下略）。ともかく完璧な容姿でおまけにやたらと強い。六年一組。生徒会副会長。

ミノルに片思い中。

謎多き人物。

ケンイチ（大石健一）：

> i 2 6 2 6 9 — 3 3 9 7 <

2星の勇者。六年三組。サッカー部。身長はアサギと同レベル、魔法が使えなくて悩んでいる。

アサギが気になっている。

ダイキ（中川大樹）：

3星の勇者。六年二組。剣道部。身長が170センチ有り、小学生に見てもらえないのが悩み。

アサギに片思い中。

トモハル（松下朋玄）：

> i 2 6 0 7 9 — 3 3 9 7 <

4星の勇者。ミノルの幼馴染（家が隣）、六年二組。生徒会長。サッカー部。結構整った顔立ちをしているので憧れる少女も多い優等生。だが、時折キザで、アサギとやたら仲がいいので大半の女子は諦める。158?でスタイルは良い。
アサギがお気に入り。

ミノル（門脇実）：

> i 2 6 2 6 8 — 3 3 9 7 <

1星の勇者。六年四組、サッカー部。トモハルとは幼馴染（隣人）。途轍もない問題児。アサギ嫌いとして有名だが、本当は……。155cm。
アサギに片想い中。

アサギに片想い中。

ユキ（松浦友紀）：

> i 2 6 2 7 4 — 3 3 9 7 <

1星の勇者。アサギの親友、美少女。六年二組。ピアノが得意な物静かな少女。151cmで貧乳。
トモハルに片想い中。

『仲間達』

サマルト：

2星ハンニバルのシーザー城第一王子、蜂蜜色の髪に紺碧の瞳。口が悪いのが欠点。得意な魔法は火炎系、剣の腕はそこそこ、の平均タイプ。165?の16歳。
アサギが非常にお気に入り。

ムーン：

2星ハンニバルのジャンヌ城第一王女。国は壊滅、非常に気品有る正統派姫君。淡紫色のストレートに
紺碧の瞳。回復と真空の魔法を得意とし、死んだロシア王子に片想

い中だった。 152cm、16歳。

アーサー：

3星チュザールのボルジア城お抱えの賢者。イケメンだが気障なのが問題。淡青色のセミロングに黒い瞳、非常に自信家。 177cm、19歳。多彩な魔法を操るスペシャリスト。

アサギが非常にお気に入り。

マダーニ：

4星クレオからの使者。エキゾチック美女。きつめの性格に見えるが、実は涙もろい面倒見の良いお姉さん。グラビアアイドル並の抜群の身体を持つ。火炎の魔法が得意。紫の流れるような髪に、金色の瞳。 161cm、19歳。

ミシア：

4星クレオからの使者。マダーニの妹。物静かな控え目美女……？
弓矢と真空及び回復魔法を操る。また、占いにも長けており時折妙な予言をする謎めいた人。紫の流れるような髪に、金色の瞳。 160cm、17歳。

ついに本性を現し、トビイを愛するあまりに目障りな女を潰したい衝動に駆られている。

死者を操る事ができる、ネクロマンサー。

トビイに激情を抱いている。

ライアン：

4星クレオからの使者。元軍事国家ジヨリロシヤの騎士。濃紺の髪に深紅の瞳、体格の良い気さくな人。 187cm、23歳。

アリナ：

4星クレオからの使者。一人称がボク、で同性愛者。顔立ち是非常

に可愛らしいのに、勿体無い。橙の髪に朱色の瞳で猫の様にすばいっこい武術家。実は巨乳である。162cm、17歳。
アサギにラブアタック中。

ブジャタ：

4星クレオからの使者、ご高齢。最も知恵ある人物と思われるが何分体力がないのが欠点。真空の魔法及び、回復、攻撃補助を得意とする。髪ははげているので色彩不明、瞳は紫。163cm、75歳。

クラフト：

4星クレオからの使者。草食系男子。非常に影が薄いので稀に作者に忘れ去られている、気の毒な人。一通り攻撃も回復も攻撃補助も扱える魔法が得意な、アリナの幼馴染。ブジャタには頭が上がりない。175cm、20歳。空色の髪に濃紺の瞳。
アリナに淡い想いを抱いている。

トビイ：

4星クレオの住人である十人中九人が振り返るであろう極上の美形。ただし、性格は良くない。水竜の加護を持つ神器並みの剣”ブリュンヒルデ”を所持。剣の腕前も一流。紫銀の長い髪を後方で一つに束ね、額には不思議な模様の布を巻いている。瞳は濃紫で鋭く切れ長。179cm、17歳。

基本アサギ以外どうでも良い人。ドラゴンナイトで、三体の竜を所持している屈指のツワモノ。

クレシダ：

トビイの相棒の風竜。雄。

>i26278—3397<

オークス：

4星クレオの魔族。

マダーニと接触し、味方であると明かした謎の魔族だが、嘘は言っていない。

碧い髪に、杜若色の氷を連想させる冷たい瞳。だが、表情は温和。身長182cm。丁寧な青年。人間換算年齢約25歳。

ラキ：

4星クレオの魔族。

アサギ達と接触した少女。

漆黒の短髪に、紅蓮の瞳で、背には蝙蝠のような羽。

言葉使いは悪い。身長145センチ、貧相な身体つき。

人間換算年齢13歳。

オフィーリア：

トビイの相棒の水竜。雄。

デズデモーナ：

トビイの相棒の黒竜。雄。

ナスタチューム・ローファン・ディアルゴ：

魔王アレクの従兄弟。野菜を作って自給自足の生活をしているが、”聖魔族”の長を務める。

黒髪を後ろで一つに縛り、瞳は垂れ目の紫色。薄幸の青年。人間年齢約二十歳。

フェンネル：

ナスタチュームの元にいる少年。魔族。

水色の髪に、金の瞳。人間年齢約7歳。マスコット代わりに、可愛がられている。

サーラ：

オークスの親友にして”紅蓮の覇者”の異名を持つ炎を司る魔族。深紅の長い髪に、深緑の瞳で、女のような顔立ち。

ナスタチュームの参謀も勤める。

過去に愛した人間の姫が、勇者に転生していることを願い、それだけで生きている。

外伝8にて、その勇士を見ることが出来る。

ジークムント：

聖魔族の中で、最も頼られている無骨な男。人間との間に出来た子を魔族に殺され、イヴァンから離脱した。武器職人。

『 出逢った人々 』

”最後の夢”のマスター：

酒場”最後の夢”を経営するマダーニの知り合い。裏の顔は情報屋で、世界の状況を秘密裏に探っている。

信頼できる人物であり、店自体も一見普通だが、頼る人物は少ない。

ザーク：

最後の夢のマスターが保護している、シポラから逃走してきたらしい男。

26歳だが、やつれて50代にしか見えない。記憶が抜けている。

殺害された。

ポール：

ミシアに心酔した、船員。

生真面目な青年だったが、狂ってしまった。
夜な夜な、ミシアと秘め事をしている。
ミシアに翻弄されて、死亡。

『魔王及びその配下、または魔界イヴァンに住まう者』

リュウ：

1 星ネロの魔王。先の勇者を殺したとされている。頭部に二本の角
苺が大好きで語尾が「〜ぐ」の良く分からない魔王。人間換算年齢
24 歳程度、身長191?。漆黒の髪に漆黒の瞳、”もしくは”銀
髪に金色の瞳。攻撃能力は不明。

ハイ・ラウ・シュリップ：

2 星ハンニバルの魔王。もとは神官だったが人間に悪意を抱いて暗
黒神官へと転落した。非常に冷酷な男だが、アサギを見てから奇怪
な人物に。死霊を召喚できる。身長189cm、26歳。ロリコン
だと発覚。特技は裁縫。地球でいうチャイナっぽい衣服を身に纏っ
ている。

アサギに熱烈な片思い中。

テンザ：

ハイの部下で、悪魔。金髪に淡緑の瞳、無表情。

ミラボー：

3 星チュザールの魔王。非常に醜いイボ蛙のような容姿、宝石が大
好物。

エーア：

> i 2 6 2 7 7 — 3 3 9 7 <

3 星チュザールの魔王ミラボーの傍らに居る人間の美女。能力は不

明。

艶やかな肩ほどの黒髪に深紅の瞳。木で出来た杖を所持している。

アレク：

4星クレオの魔王。非常に美形な男だが、寡黙で何を考えているのか不明。異界からやってきた魔王達の相手もしている謎多き魔王。銀髪に深紅の瞳、人間換算年齢23歳、身長185cm。
ロシファという名の恋人が居る。

ロシファ・リサ：

4星クレオの魔王アレクの恋人。父が魔族で母がエルフの混血だが、血筋ゆえにエルフの長。

若干ウエーブがかかった金髪に緑青色の瞳、質素なワンピースを常に着用。

格闘技が非常に得意な、好戦的なエルフの姫君で、魔王アレクを尻に敷く。

身長161cm、スレンダーな健康的美女。

マビル・ルツカ・シーザ：

4星クレオの魔界イヴァンに住む美少女。

アサギと瓜二つ。

魔力が非常に高く、兄や両親の結界によって幽閉されている。

美形な男を誘い込んで、日々身体を合わせて愉しむが、飽きると殺す。

スリザ・ランフォア・ウルティムム：

4星クレオの魔王アレクに代々仕えている魔族騎士団一番隊隊長にして騎士団長。元騎士団長である父親に、長女であったが男として育てられた男勝り。魔界で最も女性にもてる、中性的美女。ほとんど

ど、男性用の衣服を着用。

黒髪短髪、金の瞳。腹筋は割れている。178cmの長身で細身、胸はAAカップ。二刀『カストール』『ポルックス』を操る。人間年齢換算約28歳。アレクを慕っている。

アイセル・ルツカ・シーザ：

黄緑のセミデイ、やくせつ毛。深緑の瞳。179cm、筋肉質。額に一角獣の飾りを填めている。

手甲『ランボルキーニ』を装備する、魔界の武術師。

スリザに恋をしている、マビルの兄。

サイゴンとは幼馴染で親友、ホーチミンとは悪友。

魔界における秘密裏な予言家の長男にして最期の跡継ぎ、女好きで通している。

人間年齢換算約25歳。

ホーチミン『レグザ：

魔界の王宮魔術師。長い金髪を一つに束ねている事が多い。瞳は吊りあがり気味の濃藍色。

美女のようだが、男。

サイゴンに熱烈片想いをしている。サイゴンの姉のマドリードを尊敬していた。

人間年齢換算約21歳。身長は176cmで華奢。

サイゴン『ディエナ：

濃紺の長髪に、緑の肌、漆黒の瞳。額にバンダナを巻いている、長身の剣士。

スリザの下で働く、真面目な魔族。

姉がマドリードで、アイセルとは親友。

ホーチミンをミンと呼び、対応に困っている。彼女募集中。

身長は187センチ、魔界での剣捌きは三本の指に入る。トビイとモ良き親友。

『神及び天界人』

2星の神：

精霊神エアリー。美女らしい。

4星の神：

クレロ。

濃紺の長き髪に金の瞳、人間年齢約28歳。

耳が長いが、人間とほぼ同じ。

天界に住み、勇者達の行動を把握しているようだ。

ソレル：

深緑の髪と瞳の、ハープと唄の使い手。

クレロの側近である少女。背に大きな羽がある。

マグワート：

漆黒のウェーブかった髪と、深紅の瞳の天界人。

クレロの側近で、ソレルの親友。背に大きな羽がある。

『敵』

クーバー：

ミノルに化けた変態吸血鬼。若くて可愛い女の子が大好き。

トビイによって斬滅。

墮落の魔法使い：

森林を毒で怪我して、人間に復讐しようとしていた魔法使い。エルフを喰らい、魔力の飛躍を遂げていた。

アサギによって、斬滅。

ビアンカ：

トビイの育ての親、マドリードと交えて死んだ魔族。

巨大な斧を操る。尚、外伝8にて姿を見ることが出来る。

オジロン：

ビアンカの部下にして、ドラゴンナイトを目指す下卑た魔族。

美しく強いトビイに、激しい嫉妬の念を抱き邪魔をする。

外伝8にて、その貧弱な姿を見ることが出来る。

イエン・アイ：

薄桃の髪で、幼い顔立ちの魔族。深紅の瞳が人を惑わす誘惑めいた光を放っているなかなかの美形。

破壊の姫君を盲目的に崇拜している教祖の一人。双子の弟にイエン・タイがいる。

身長は低く168センチ程度。

双子の兄弟だが、タイと近親相姦。

イエン・タイ：

薄桃の髪で、凛々しく大人びた顔立ちの魔族。トビイに若干雰囲気
が似ている（ミシア談）なので、なかなかの美形。瞳と髪は双子の
兄であるアイと同色。こちらも教祖。

身長は兄よりも高く179センチ程度、低めのボイスが女性を翻弄
する。

アイを愛している。

『故人』

ロシア：

ムーンの想い人で、サマルトの兄貴分であった2星ハンニバルの王子の一人。

リーダー格であったが、途中で戦死した。

ケニイチに面影が似ているらしい。

シャルマ・ドライ・レイジ：

マダーニとミシアの亡くなった母。非常に多彩な人だったようだが、何者かに殺されたと思われる。

マドリード：

トビイが船上で出逢った美女。

ミシアの手によって、死亡。

ロザリンド：

トビイを育てた魔族、美女。

サイゴンの姉であり、ホーチミンが慕う人物でもある。

また、能力が高くアレクの配下として隠密に行動していた。

ジュリエッタ：

トビイに懐いていた水竜。

卑劣なオジロンの手に係り、死んだ。

が、その一角はトビイの手の”ブリュンヒルデ”として今も傍らに寄り添っている。

バリイ：

辺境の村の生き残り。家族を助ける為にとある組織の命令で危険な球体を造っていた。

剣士と魔術師のサラブレッドでなかなかの腕前だったか、改心し死亡。

『地球居残り組み』

田上友則；

アサギの弟。小学四年生。

田上久志；

アサギの末弟。小学一年生。

三河亮；

アサギの幼馴染、小学六年、1組。サッカー部。身長150cm。
ミノルの代理で勇者に渴望した人物。

奈留；

転んでいた児童に飴を渡した女性。当分出番はないので、今のところ脇役。

> i 2 6 2 7 5 — 3 3 9 7 <

【単語説明】

破壊の姫君；

邪教徒達が崇めている人物。

とてつもない魔力と、類稀なる美貌の持ち主。誰しもが魅了されたいまい、本気を出せば、すぐにでも世界が破滅へと追いやられるとの噂。

教祖はイエン・アイ&タイの二人で、シポラに本拠地を構えている。ミシアを姫君として出迎えたが、“偽者”として扱う気だった。

『惑星』

1 星ネロ：

魔王リュウによって牛耳られている。主要国は”カエサル”。信仰神はエアリー。

2 星ハンニバル：

魔王ハイによって壊滅状態。生き残りの主要国は”シーザー”。信仰神はエアリー。

3 星チユザレ：

魔王ミラボアの支配下にある。信仰神はエアリー。

4 星クレオ：

現在勇者達が居る場所、魔王はアレク。信仰神はクレロ。

地球：

地球。勇者達が居た場所。

『武器』

セントラヴァーズ：

4 星クレオの勇者が所持すべき神器の片割れ。ピョートルに保管されている、アサギの武器。

セントガーディアン：

4 星クレオの勇者が所持すべき神器の片割れ。神聖城クリストバルにてトモハルが授かり、現在所持している。一メートルほどで柄に不死鳥が施されているが、現在真の力を発揮していない。

ブリュンヒルデ：

トビイが所持している水竜の角で作られた、水属性の剣。見た目麗

しく、最強ランクの剣。

グラムドリンク：

サーラが所持している、亡国の宝剣。

霊剣・火鳥：

バリイが所持していた、火の属性の剣。ケンイチに渡っている。

『4星クレオの地名及び都市名』

神聖城クリストバル：

クレオにあるクレロ神を崇拝する巨大な教会。勇者達が最初に訪れた。

ジエノヴァ：

クレオにある、最大都市。娯楽が揃っており、観光名所でもある。魔族達も訪れるほどである。

ピョートル：

クレオにあるアサギが所持すべき勇者の神器がある場所。現在のトモハル・ミノル・ライアン・マダーニの目標地点。

ドウルモ：

クレオにある、ジエノヴァに次ぐ都市。マダーニとミシアが旅立ち前に居た場所。

シポラ：

クレオの地名。不穏な噂が飛び交っており、調査しなければならぬ謎の場所。

邪教徒の本部との噂。

ジヨリロシヤ：

クレオにある軍国。ライアンの前の勤め先。

イヴァン：

クレオの魔界の総称。魔王達の所在地であり、勇者アサギが現在滞在中。

アレクセイ：

ナスタチュームを筆頭とする、聖魔族が住まう島。

カナリア大陸：

シポラヤドウルモのある大陸。

インバアネス：

天界の中心部の地名。クレロが住んでいる。

ディアス：アリナの父が治めている街、巨大。

『3星チユザーレの地名及び都市名』

カーツ：

3星チユザーレの港町の名。

『魔物』

巨大ネズミ：

サマルトとムーンを追って地球にやってきたネズミ。結構凶暴。人間を食い散らかす。攻撃はなんでも効果あり。

レイブン：

体長約二メートル、地獄の使い魔と呼ばれる観ての通り飛行タイプの肉食魔物。鋭い爪は一掻きで肉をもぎ取る。

見た目、巨大カラス。(ミノル談)

野犬の成れの果て：

闇の力で甦った為に腐敗したまま動く、ゾンビ。火炎系、光の浄化系の魔法に弱い。

吸血蝙蝠：

洞窟に住み着く、血液が好物な蝙蝠。火炎系に弱い。

ゴブリン：

下級の魔物。攻撃は何でも効果有り。

狡賢い岩山の洞窟などに住まう種族、夜行性です。集団で行動する。

タモトスズメ：

翼だけが妙に大きな奇怪な鳥。血走った真紅の瞳、黄金の姿。

蛇のように長い尻尾がついており、羽音が亡者の嘆きを連想させる。敵を呼び寄せる能力を持つ、偵察飛行タイプ。

雷系の魔法に特性があり、効果なし。

白ウサギ：

一見、ウサギ。

だが、森の魔物で見た目に反して凶暴な肉食。

アサギとハイが遭遇した白ウサギは、進化を遂げた。

白ウサギ・改：

金色へと変化し、耳の長いタイガーの様に成長した白ウサギ。

塩酸を吐き出す。

ガーゴイル：

紫の変色した皮膚、真っ赤に燃え盛る瞳、蝙蝠のような羽、細長い尻尾を持つ。

飛行タイプの魔物。

カマウエト：

体長五メートルのタツノオトシゴ、肉食。

茶色く硬い皮膚、鮫のような瞳、すなわち凶暴。

セイレーン：

上半身が美しい女性、下半身が猛禽類の姿の飛行タイプの魔物。集団で行動。

男を歌で惑わし、喰らうという。

クエーロ：

牛ほどの体長の烏賊。触手で海に獲物を引きずり込み、喰らう。

大蛇：

エメラルドのような光を放つその大蛇の外皮、真っ赤に燃え盛る瞳、大きく口を開き、鋭利な牙をむき出しにして酸を飛ばす。球体から出現する。

バンシー：

髪だけが美しい、老婆の魔物。攻撃能力はともかくとして、人の死の香りを嗅ぎ付けて現れる。

サンダーバード：

発光している巨大な鳥。一人が乗れるほどのサイズで、雷を落と

して攻撃して来る。
嘴も非常に鋭い。

大百足：

巨大な百足。体長二十メートルという巨体だが幅は15センチ程度の細長いぺらぺらな魔物。火に弱い。

『?????』

ベシユタ：

クーバーが見た、アサギの脳内での夢に出てきた名前。
アサギに似た少女が、呟いていた。

外伝1参照の事。

アース：

クーバーが見た、アサギの脳内での夢に出てきた名前。
アサギに似ている。

外伝1参照の事。

トロイ：

クーバーが見た、アサギの脳内での夢に出てきた名前。
トビイに似ている。

外伝1参照の事。

空を見上げて思うのは

とある、小学校の校庭。

現在昼休み中、校庭は生徒達で賑わっている。

色とりどりの衣服が校庭全体に散らばり、騒がしいほどだ。

その校庭の隅に、二つに並んだ鉄棒があった。支柱は赤のペンキで塗られている。

百六十センチ程のその鉄棒に、一人の少女が腰掛けている。

風に髪を揺らす、気持ち良さそうにゆっくりと瞬きをしながら空を見上げて微笑んでいた。

柔らかく艶やかな髪に、温かみのある光を帯びた大きな瞳、軽く頬を桃色に染めて、熟れたさくらんぼの様な唇を持ち。

まるで少女達の夢物語、御伽噺の中のお姫様のような容姿。

愛くるしい顔立ちは、見る者全てを魅了してしまうと言っても過言ではなかった。

そこらのテレビに出ているアイドルより、人目を引く美しさである。

華奢な手足に、小顔、幼いながらも発達して膨らむ胸、括れた腰。非の打ち所が見当たらないような、完璧に近い容姿だった。

見る者を魅了し、すれ違い様に振り返らずにはいられない美少女。容姿だけでなく、何故か彼女からは不思議な安心感を与える癒しの空気がやんわりと流れ出ているような……そんな雰囲気。

そんな鉄棒に座り込んで、空を見上げて呆けている彼女の名は、
たがみあさひ田上浅葱。

小学六年生、生徒会副会長。

当校にて、知らないものは存在しない、圧倒的な存在感を放つ娘だった。

「ねえねえ、見てる、友紀？ 今日空もとっても綺麗。透き通る

ような青空に、ぼつかり浮かんだ綿菓子みたいな純白の雲。……素敵」

「見てるよ。綺麗だよねー」

浅葱の隣、鉄棒の支柱に凭れ掛かってうつとりと呟いた少女。

浅葱の親友の松長友紀、まつながゆきという。

彼女もまた可愛らしく、品の良いストレートロング正統派美少女。美少女は美少女だ、こちらもテレビに出ているアイドル顔負けである。

だが、瞬間的に「可愛いな」と思えるが、別に見続けていよう、とは特に思わせない普通の美少女。

当校二大美少女、である。

この二人、出会ったのは今から二年前の小学四年生の時であった。互いに存在だけは目立つ為知っていたのだが、会話したのは同じクラスになってから。

たまたま席が近く、遠慮がちに話しかけてみたら趣味が同じ、好きなものが同じ、理解できて、言いたいこともはっきり告げられる。初めて打ち解けあった友達……親友だった。

そんな二人はクラスが別れてしまったけれど、こうして時折昼休みには二人で居る時間を作っていた。

家も近い部類に入る為、登下校でも一緒になれる可能性はあるし、休日は二人で買い物へ行くこともしばしばだ。

お互いクラスに親しい友人がいない、というわけではなく、こうして二人で居ると心が落ち着く。

顔を見るだけで安堵出来る、頼もしい存在。

そんな二人は空を見上げて気持ち良さそうに風に身を任せるのが、大好きだった。

キーンコーンカーンコーン……

校庭に響き渡る、休み時間終了の鐘の音。

それと同時に校内放送が流れ、生徒達は渋々と各々の教室へ戻っていく。

「終わりー。休憩タイム終了ー。せっかく綺麗な空だったのに」

頬を膨らませ、残念そうに呟く浅葱に、友紀が小さく笑う。

「仕方ないでしょ、私達のお仕事は『学校で勉強すること』。そういう世界にいるんだから。さ、教室へ戻る」

促されて、浅葱はようやく鉄棒から滑り降りる。

明らかに不服そうだが、駄々をこねても仕方がない。

「つまらない世界ーっ。私、勇者になりたいの。それで、大勢の人を救うの！」

「はいはい、そのうちね、そのうち。さ、行こっ」

無理やり浅葱を引っ張って、友紀は強引に校舎へ進んだ。

名残惜しそうに、空を見上げたまま、浅葱は友紀に腕を任せている。

余程今日の空に未練があるらしい。

やがて、校庭から人影が消えた。

先程までその場にあった笑い声が掻き消え、静まり返っている。

廻る齒車、死の城

「あー、来た来た、浅葱ちゃんっ！ 宿題見せて宿題っ。私当てられるの、絶対っ」

友紀と別れて教室に入ると、数人の友達が駆け寄ってくる。

どうやら休み時間中浅葱を探していたようだが、まさか校庭の鉄棒で空を見ていたとは思えない。

理沙が、顔を大袈裟に顰めて浅葱に詰め寄った。

「いいよー。はい、どうぞ」

「わーい、ありがとうっ」

浅葱は笑ってノートを差し出す。

飛び跳ねてそれを受け取ると、理沙はそのまま自分の机へ戻り、一気にノートに写し出した。

様子を見て、数人の男子が近寄ってくる。

「田上、そいつらに玉には勉強させないと……」

「困った時は、お互い様なんだよ」

そう言っただけでニコリと笑う浅葱に、思わず同意してしまう男子数名。

常に、友達が周りに居た。

浅葱は大勢で過ごす時間がとても好きだった。

このクラスは仲が皆良く、大きな一つの輪になって会話出来る。

そんな様子を廊下から、他クラスの数名の男子生徒が見ていた。

サッカーをしていた休み時間帰り、廊下を通って笑い声の聞こえる浅葱のクラス『6 - 1』を覗き込んだのだった。

「あ、田上だ」

「いいな」、1組の奴等。小学校生活最後なら、一緒のクラスになりたかったよ」

「俺なんか、六年間一度も同じクラスになったことないんだけど」

羨ましそうに、校内アイドルの近くに居る同級生を軽く睨み付けた。

しかし、その言葉を漏らす友人に舌打ちする少年が、一人。

忌々しそうに友人達を見てから、クラスを一瞥し、再度舌打ちする。

楽しそうに大勢に取り囲まれた輪の中で、会話している浅葱の姿を確認すると、その少年はつまらなそうにその場から立ち去った。

気づいた友人が慌てて後を追う。

「待てよ、実!」

「なんだあ、実の奴……」

「ああ、実、田上のこと嫌いなんだよね。だからじゃない?」

「へー、そんな奴、居たんだ」

信じられない、と大袈裟に肩を震わす友人達を置き去りにし、実は舌打ちを何度もしながら苛立ちつつ廊下を歩いた。

実のクラスは4組である、行く途中に2組から聴き慣れた声が。

「朋玄君、自習なんでしょ? 何するの?」

「先生からプリントを預かってる、これやるよ。その後夏休みについての説明。」

大樹、配るの手伝って。あ、友紀。書記よろしく」

幼馴染の優等生朋玄が張り切って教壇に立っていた、無表情で立

ち上がった大樹と、多少身動きしながらの友紀を満足そうに見つめている。

実は、ベランダの壁に蹴りを入れた。

前方から走ってきた同じサッカー部の健一が、その行動にすっとなきような声を上げ。

健一には何かと頭が上がらない実は、苦笑いで教室に入っていく。

キィィィ、カトン……。

「行って来ます！ さ、行こう友則、久志」

浅葱は元気良く玄関の扉を押し、そのまま飛び出した。

ドアに飾ってあるバラのドライフラワーが小さく揺れ、微かに甘い香りが漂う。

浅葱の弟達が、慌てふためきながらその後が続いて出てきた。

兄の友則が眠たそうに瞼を擦りながら、大きな欠伸をして歩く。

弟の久志が平然とそれを追い越し、姉の浅葱に追いついた。

そっと手を伸ばし、手を繋いで貰って学校へと上機嫌で向かう。

その後ろを未だに寝ぼけているのか、ふらつきながら、必死で後を追う友則である。

登校中の小学生で溢れ返っている通学路は、朝から賑わしい。

そんな中でも浅葱の姿を見つけ、親しい幼馴染が駆け寄ってきた。

浅葱は例の如く、空を見つめている。

今日も綺麗な空だった、ぽっかりと浮かぶ雲が可愛らしい。

現在6月下旬、梅雨明け宣言間近だった。

「田上、何呆けてるんだ？」

後ろからそう声をかけられ、小突かれると、浅葱は嬉しそうに振り返る。

「おはよう、みーちゃん」

「おまえそれ、答えになってないだろ」

浅葱と同じ背丈の幼馴染、みかわりょう三河亮。

四年生の時にこの街に越してきた亮は、車を降りて新しい街を堪能しようと背伸びをしていた矢先、たまたま買い物帰りで自転車を漕いでいる浅葱を見た。

風になびく髪、ゆつたりと笑みを浮かべて漕いでいる浅葱に、瞳を奪われた。

ちなみにこの時、浅葱はお気に入りのケーキ屋さんで、大好きなミルクレープを買った帰りで、食べるのが待ち遠しくて嬉しかったらしい。

ので、始終笑顔だった。

亮の存在に不意に気がついて浅葱は自転車を止め、声をかける。

太陽のように眩しい笑顔、亮は瞬間心奪われてしまった。

引越して来て、不安な気持ちもあったが、その笑顔で心の雲は消え去った。

この子と、友達になりたいな、亮はそう願った。

「引越して来た子だよ。初めまして、私、田上浅葱です」

「あ、えっと、初めまして。僕は、三河亮」

「私の家はあそこなの。よかったら遊びに来てね、同じ年なんだよ。話は聞いてたから、どんな子かと思って」

見慣れない少年に、浅葱は直様直感で引越して来た子だ、と。だから、声をかけたのだ。

浅葱が指差した先は、なんのことはない、亮の家から直線で徒歩

二分ほど。

あまりの偶然に亮は驚きを隠せなかった。

「よろしくね！」

「うん、よろしくな！」

風が、二人を柔らかく包み込むように吹いた、青空広がる二年前の初夏。

こんな出会いをした二人は暫くすると『喧嘩友達』になっていた。気軽に言い合えるのだろうか、喧嘩するほど仲が良い、なのか。

それでも、亮はそんな立場である自分が嬉しかった、何故ならば浅葱と喧嘩出来る人物が自分以外に存在しなかったからだ。

浅葱にとって、特別な存在になったのである。

学校へ通いだしてみれば、浅葱のあまりの有名ぶりに驚いたものだった。

学級委員に、生徒会、友人多く、下級生から尊敬されて先生からの人望も厚い。

勉強も出来れば体育も得意、芸術関係も秀でており、苦手科目が見つけられない。

なんだ、この女……人並み外れすぎじゃないか！？

呆然とする亮、とても亮にはそんな風に浅葱が見えないのだが。

同時にそんな浅葱の自宅近所に引越して来たおかげで、亮自身も一躍時の人となってしまう。

特に男子生徒から羨望と嫉妬の目で見られた、いとも簡単に誰もが喉から手が出るほど欲した”幼馴染”の称号を手に入れた亮。

亮は知らなかったのだが、二人の家の建つ土地は結構高いらしく、あまり買い手がつかないのだ。

浅葱の自宅へ遊びに行くようになった亮だが、自分の家と比較して頭を抱える。

豪邸、というべきサイズの家だ。

金持ちっぽい雰囲気、滲み出ている。

亮はおどおどと浅葱の後をついて回るしか、出来なかった。

浅葱の祖父が剣道道場を、祖母が日舞教室を開いている家とは別の建物が敷地内にあっただけで度肝を抜かれた。

車が四台綺麗に並べて駐車しており、池あり、ウサギ小屋ありの庭である。

部屋に案内されてみれば浅葱の部屋は、雑誌に載っている様なお洒落な部屋だった。

ぬいぐるみがいたるところに置いてあり、部屋は薄桃色のチエックで大体統一されていた。

客室も高そうな絵は飾ってあるし、置物も壊したら弁償しなければいけないような代物で。

産まれて初めて、亮は「豪邸」に足を踏み入れたのだ。

豪邸を通り越して、何処かの城な気もしてきた。

慣れなかった亮だが、半年も経てば堂々と居座れるようになったのは、浅葱の家族が優しいからだろう。

すっかり亮は田上家に馴染んでしまっていた。

「あー、ねむ！ 昨日ゲームやりすぎた」

「何か新しいの買ったの？ 私もやりたい」

「おう、今日行くよ。久志も友則も一緒に遊ぼうな」

ぞろぞろと一列で歩く小学生達を見つめる、男子高校生達が居る。

「うっはー、浅葱ちゃんだー」

「畜生、妹に欲しいぜ」

自転車を止めて、毎朝この時間浅葱を待ち伏せしているファンクラブ……一歩間違えればストーカーの男子校に通う高校生。

うっとうしと浅葱を見つめる数人の高校生を、井戸端会議中の主婦

達が潜めき合う。

……そんな、日常。

浅葱は全く持って気にする様子もなく、そのまま亮とゲームの会話をしながら登校した。

キイイイ、カトン……。

何処かで、何かが回った音が聞こえる。

浅葱と亮が不意に顔を見合わせたか、首を傾げて気にせず歩いた。二人は確かに、音を聞いた。

同刻。

霧に包まれ浮かび上がった、白亜の宮廷。

静まり返ったその中で、夥しいほどの鮮血が床に壁に天井に飛び散り、見れば肉の破片までもが混じっている。

生首が転がり、半分千切れた顔、眼球が引き抜かれた死体、ご丁寧に身体を分解されて他の人間のパーツと混ぜ合わせ、パズルのように遊んでいた形跡。

内臓が引きずり出され、心臓が転がり、地獄絵図が広がっていた。その最下部の一室に、『人間』の生存者達が数人辛うじて生き残っていた。

静寂、そして闇。

その闇の中に、淡く光輝く部分が一箇所存在した。

光が宙へと巻き上げられていく泉の中に、髪を、衣服を揺らめかせながら少年と少女が手を繋いで立っている。

幼さの残るその表情には、少年には焦燥感と緊張感が。

少女には強気で頑なに意志を決意した鋭さが、あった。

蜂蜜色の髪に紺碧の瞳、少年は泉の周りを囲んで立っている人物達に堪えきれず声をかけた。

瞳が慣れないと分からないのだが、闇に紛れる程の漆黒のフード

を被った者達がその不思議な泉を囲んでいる。
初めて静寂が破られる。

「お前達も来るんだ！ 必ず助かる。ここには無駄死にするだけだぞ」

焦りの声、その中に混じる恐怖、不安、怒り、そして責任感。

一番近くの者に手を伸ばし、フードを掴む。

泉から湧き出ていた光が跳ね上がり、一瞬途切れた。

その者は嬉しそうに少年を見返すと、恭しく丁寧に少年の指を外していく。

「嬉しく思います、王子。あなた様はとても優しく、責任感の強いお方でした。わたくしはお仕え出来てとても光栄でしたよ」

思いのほか若い声、フードの間から一瞬顔が見えた。

少年だ、二人と歳の変わらない少年だ。

王子、と呼んだ少年は瞳に迷いのない光を宿し自分達の運命を正面から受け止めるつもりだった。

何をするべきなのか、悟っている。

「自分の部下を護れなくていて、何が王子だ！ 一緒に、一緒に！」

そう叫んだ王子は、誰か賛同者はいないか辺りを見回す、が、誰もそれに応じない。

静まり返る室内。

期待をこめて懸命に一人一人に目を向けるが、誰も頷かない。
鋭く、少女が囁く。

「いけないわ、サマルト。私達の役目は分かっているでしょう。落

ち着いて」

淡い紫の長い髪を絹のように揺らして、少女は王子サマルトを見つめる。

サマルトよりも大人びた感じのするその声には、威圧感と高貴な雰囲気、迷いのない決意が込められていた。

「しかし、ムーン！ 見殺しにするのか、人間だぞ、仲間だぞ!？」

少女・ムーンが答えるより早く、フードの男が反論した。

先程とはうって変わり、しゃがれた年寄りの声だった。

「サマルト王子、ムーン王女は我らを見殺しにするわけではございませんぞ。我らの決意をお許しに、お認めになられたのです。正直、勇者に会いに行くのには簡単にはいかないでしょう。逢えたとしても更に過酷な試練が待っているでしょう。我らはそんな困難をあなた方に託したのですじゃ。お許しください。我らは最期までこの城を、愛した我が国と共に滅ぶつもりです」

「本望です。王子、無事戻られ、国を再建してください。さすれば、我らの魂も安息の地へと辿り着けましょう。それまで、お待ちしております」

中年の、どっしりとした重みのある声も、そう穏やかに語る。

思わず言葉を失い、黙り込んだサマルト。

瞳を硬く閉じ、代わりにムーンが深く大きく息を吸い込み、右手の中にある紅珠が先端に詰め込んである杖を握り締めた。

ギリ、と音が鳴る。

息をゆっくりと吐き出しながら、震える声を必死で押さえ、ムーンは瞳を開いて一言。

「私達を、勇者のもとへと」

爆音。

少女がそう言い終わると同時に、頑丈な鉄で出来た、術が施してある壁を破壊し、無数の魔物が攻め寄せてきた。

サマルトが慌てて腰に下げていた細身剣を手にしたのだが、ムーンが押し止めた。

気にせずフードの者達……2星ハンニバルのジャンヌ城・宮廷魔導師達は一斉に魔力を解放し、詠唱に入った。

それが使命、そして希望。

「我らが守護神、精霊神エアリーよ！ この者たちを貴女様の御手で優しく抱きとめ、彼の地へと導きたまえ！ 希望の産まれし星、勇者の下へと！」

泉の光が二人の身体を包み込み、光が溢れ返り部屋中を照らした。手を頭上に掲げながら、宮廷魔導師達は晴れ渡る笑顔で満足そうにその光を眩しそうに見つめる。

見える。

王子と王女は勇者に出会い、魔を打ち砕く。

希望が、見える。

二人の姿は忽然と消え、宙へと巻き上がった水が魔力を失くして音を立てて床に自然に落下した。

光が消え失せ、再度闇が支配する。

しかし静寂は戻らず、魔物の荒い呼吸が部屋に響き渡り、人間の絶叫が響き渡った。

ジャンヌ城・全滅。

暗闇に浮かび上がる無数の赤い光は魔物の瞳、血生臭く、死の香りが充満する部屋。

床が大量の血液で埋めつくされ、ぬめりを帯びている。

魔物がそれを、旨そうに嘗め、骨を噛み砕き、肉と皮を剥いで、首を投げて、遊んでいた。

廻る歯車、死の城（後書き）

【現時点での登場人物】

大石健一：小学六年、三組。実と同じサッカー部。

門脇実：小学六年生。4組、サッカー部所属。

田上浅葱：主人公。絶世の美少女。小学六年生。1組

田上友則：主人公の弟。小学四年生。

田上久志：主人公の末弟。小学一年生。

中川大樹：朋玄と友紀と同じクラス、小学六年、2組。

松浦友紀：主人公の親友、美少女。小学六年、2組。

松下朋玄：実の幼馴染、小学六年生。2組。

三河亮：浅葱の幼馴染、小学六年、1組。

サマルト王子：亡国の王子

ムーン王女：亡国の王女

闇は光の眩しさに慣れず

校庭では現在、朝の朝礼中である。

校長の長い話にうんざりしている生徒及び、教育者・

他愛のない話をこの初夏の暑い日ざしの中、延々と聞かされているのだから、仕方ない。

生徒達が不満気に校長の顔を見つめるが、瞳を閉じて優越感に浸りながら自分の演説に酔いしれている校長には生憎全く効果がなかった。

生徒の大半は話を聞いておらず、近くの友達と会話し、つま先で校庭に落書きをし、欠伸を漏らした。

この暑い中、せめて座らせて話を聞かせて欲しいものだ。

誰かが倒れるんだよな、こういう時って……亮はそう思って、何気なく隣を見た。

隣には浅葱が居た。

その浅葱、ゆっくりと苦しそうに前のめりになって倒れていく。

一瞬不意を突かれたものの、亮の身体は顔面蒼白の浅葱を見て脳からの指令を待たず反射的に動いていた。

「浅葱!!」

大声で名を叫んで直ぐ様抱き起こし、その額に掌をおいて、熱を確かめる。

その騒ぎが波紋のように広がっていった。

” 田上浅葱が、倒れたらしい ”

心配そうに不安そうに、徐々に拡散する喧騒。

保険医が駆けつけ、亮の腕の中の浅葱を診る。

浅葱は異様なまでの圧迫感に包まれて、荒い呼吸を繰り返した。

一瞬目の前が真っ暗になった、次の瞬間誰かの声を聴いた。

思い出せないが良く知った声だった。

その声が悲痛で、涙声で、怒気を含んでいたものだから、苦しくて、哀しくて、愚かで、可哀想で。

浅葱は薄っすらと瞳を開いて、耳鳴りするまま、ぼやけた視界のまま周りを見つめる。

声は聞こえたけれど、何を言ったのか、肝心のこと分からない。誰の声だった、あれは？

思い出して、良く聞く声でしょうか？

……誰だった？

浅葱は胸を鷲掴みにされたような痛みにも、小さく悲鳴を漏らす。

考えがまとまるよりも先に、次の瞬間眩すぎる目に痛い光が、右から差し込んできた。

地球上には様々な光があるが、ここまで強烈な光を受けるのは初めてだった。

その眩さに慣れない瞳が悲鳴を上げる、硬く閉じて鋭い叫び声を皆が一斉に上げた。

例えばそれは、社会の時間で習った広島原爆のようなものなのだろうか？

体験したことがない為比較は出来ないが、最も表現しやすい。

亮は懸命に浅葱を抱きかかえながら、光から遠ざけるように覆い被さり必死で堪える。

目を開くことが出来ず、閉じても瞳に焼き付いてくる光に、全員瞳を掌で覆い隠し、叫び声を上げてその場に蹲る。

校庭の眩い光の中、二つの影が揺らめいた。

ゆっくりとその影は歩み出て、辺りを見回す。

見れば大勢の人々が口々に何か喚きたてながら、伏せている光景だ。

見慣れない建物、見慣れない器具、良いとは言えない空気。

二つの影の一つ、少女・ムーンは袖口を口元に当て、顔を顰め空気を吸う。

「……何かに汚染されているのかしら、息苦しいわ」

軽く咳き込んで、隣に立っているサマルトを見やった。

サマルトは物珍しそうに前後左右を身体を回転させて、様子を窺っている。

光が徐々に力を弱めていき、ようやく人々は頭を抑え、呻きながら起き上がった。

今の、何だった？

そう口々に言い合いながら周囲にようやく目を向けた、校庭の端に、誰かが居る。

見たことのない髪の色、服装、手にしている武器。

二人の姿を見た者達は、啞然と口を開いて見つめるより他なく。

皆言葉を失って、二人の訪問者を見ていた。

恐る恐る、固唾を飲み込み誰一人声を発するものなく、時が止まったかのように。

サマルトとムーンは、互いに顔を見合わせるとゆっくりと足を動かし、探るように目の前の停止したような人々を見つつ歩む。

弾かれたように一人の少女が鋭く叫ぶと、連呼して叫び声があちらこちらで上がった。

別に二人に恐怖したわけではない、その後ろ、空から数匹のネズミが降ってきたのだ。

もちろん小さくはない、サイズ的には中型犬程で、前足や口元に真っ赤な鮮血を滴らせて唸りながら身体を低くしている。

ただでさえ小さくても苦手な人々のほうが多いのに、その巨大ネズミは思いの外素早い速さで尻尾を振り回すと、只管唸る。

「私達についてきてしまったんだわ！」

ムーンが唇を噛み締めながら、手にしていた杖をネズミに向けた。

サマルトが慌てて細身剣に手をかけ、そのまま勢い良く引き抜くと構える。

ムーンは両手で杖を硬く握り締め、ネズミを睨みつけるとそのまま呪文を詠唱する。

「生命を運ぶ風よ、死を運ぶ風と変貌し、私の敵を刃となりて切り裂き給え！ 真撃っ！」

その言葉を言い終えると、杖の先から目に見えないがヒュヒュッと空を切る音だけが聞こえ、それはネズミの二匹を巻き込みながら、これでもか、というほど引き裂いていく。

血が、肉が、内臓が、まるでミキサーにかけた果物のようにゴリゴリと音を立てながら大雑把に碎かれていく。

その光景に卒倒する者、数十名。
当たり前だ、明らかにそこらのスプラッタ映画よりも生々しかった。

生徒だけでなく、職員の女性達も悲鳴を上げることなく、その場に倒れ込む。

サマルトが手にしていた剣で、突進してきたネズミと攻防戦を繰り広げつつ、ムーンが間合いを取りながら呪文の詠唱を繰り返す。

そんな頃、浅葱は小さく呻きながら瞳を開いた。

覆い被さっていて微動だしない亮、その腕の隙間から浅葱は状況を確認しようと軽い抵抗を試みる。

隙間を作って、様子を見てみたならば。

あれは、なんだろう。

髪を染めれば別として、地球上には存在しない色の髪を靡かせている杖を掲げる少女と、剣を巧みに操りながら素早い動きで宙を舞う『何か』と戦っている少年。

凝視して浅葱は宙を飛び交う物体を、目に捕らえた。

紅蓮の瞳の巨大ネズミだ。

凶暴そうな鋭利な歯をむき出しにしながら、二人に襲い掛かっている。

「え……」

胸が、跳ね上がった。

身体が急速に熱を帯びて、瞳がその光景を捕らえたまま、動こうとしない。

それは、浅葱が待ち焦がれていた光景だった。

勇者になったらみんなを助けられる？　なら、私……勇者になるの。

抱いた夢は消えることなく、望んだ世界が目の前に広がる。地球上では、決して叶えられることがないであろうと思っていた世界。

悪い奴を倒して、仲間と幸せになるそんな物語。

浅葱は急に亮を懸命に起こし、もがきながら必死でその腕から抜け出すと、そのままネズミの方向へと走り出した。

「待て、浅葱っ！」

亮が慌てふためきながら腕からすり抜けてしまった浅葱を追う為に足を踏み出そうとする、だが、力が入らず転倒した。

足が竦んでしまい、動けないのだ。

情けない、何やってるんだ、僕！

地面に倒れこんだまま、駆けて行く浅葱の後姿を悔しそうに見つめる。

追いかけるなければ、浅葱が危ない。

追いかけて前に立たなければ、浅葱を護る為に。

浅葱を護ること、それが僕の……。

亮は辛うじて動く両腕で、地面を懸命に這う。

亮は正常だ、情けなくはないだろう。

誰しも恐怖を感じる、まして予測しなかった事態には簡単には適応できない。

浅葱だけが、その場で……異質だった。

ネズミの一匹が浅葱の存在に気がついたのだが、浅葱はそれより先に右足を思い切り空へと蹴り上げ、ネズミを宙に浮かせた。

宙に浮いたネズミを追い駆けて、目の高さにまで落下した時に、両手を組んで拳を作り思い切り頭上から振り下ろして地面へと叩き落す。

「えいつ！」

威勢の良い掛け声、叩きつけられて身を硬直させたネズミを、更に浅葱は蹴り上げる。

おぼつかないが、なかなかのコンボ、浅葱は両足を肩幅まで広げながら、ネズミの前で構えを取った。

小さい身体で素早く動き、まるで舞を踊るかのようなそんな一連の流れ。

浅葱の姿が徐々に遠く、小さくなっていく。

鏡の中に吸い込まれる……静寂。

「……なんだ、この娘は？」

一人の男が小さく呟いた。

何気ない一言に含まれる、様々な感情。

微かな衝撃、驚きを隠せずに思わず声を発した。

男は自分の背丈ほどある鏡を見つめていた。

二十代半ばのその男、艶やかな漆黒の長い髪、妖しく仄かに光る蒼い瞳、適度な美貌の持ち主だ。

左目は前髪が長すぎて見えないが、右目は訝しそうに、忌々しそうにその鏡を睨みつけている。

髪とは対照的な純白の衣装に身を包み、それが部屋の暗闇に良く映えていた。

薄暗いこの部屋には、その鏡しか置かれていないように思えた。広さはあるそうなのだが、中央にその鏡のみ、あとは暗くて見えないが、ただの空間。

「偵察用の魔道眼球をこの生物に取り付けておいてよかったな、思わぬ収穫だ」

魔道眼球を取り付けられた物が見た風景全てが、この男の目の前に設置されている『暗黒鏡』に映し出される。

男は腕を組み、軽く笑みを浮かべて鏡を見た。

映っているのは浅葱、別にこの男が見ようと思って故意に見ているわけではない。

取り付けられたネズミが、目の前の敵と認識した浅葱を見ているので映っている。

驚きと怒り、体勢を立て直した先程のネズミは、耳障りな啼き声を上げると猛然と浅葱へ突進する。

男は思わず、自身の腕を爪が食い込むほどに握り締めた。

興奮気味に、溜息を零し、食い入るように鏡を見つめる。

ネズミの攻撃に臆することなく、大地に足をしっかりとつけ、真正面からネズミを迎え撃つ浅葱。

それは、華麗で強烈な視線だった。

そう、男は自分が見られているような錯覚に陥った。

凜々しく力強く、その愛らしい容姿が男を魅了する。

胸が跳ね上がり、男は唇を噛み締める。

震える身体、思わず鏡に手を伸ばした。
頭に噛み付こうとして跳躍したのか、浅葱の表情が鏡全体に映し出される。

思わず音を立てて固唾を飲み込み、啞然と成り行きを見つめた。
詳しくは分からないが、浅葱の放った右腕が、ネズミを横一直線に払いのけられたのではないだろう か、ふつと浅葱の姿が消え、地面が鏡に映し出された。

「早く起き上がれ、何をしているっ」

男は興奮気味に届くことのない言葉を、ネズミへ送った。
苛立つ声、浅葱の力量を見たいのか……それとも。
浅葱という存在を見ていたのか？

男の思いとは正反対に、地面が映し出されたまま変わらない。
ネズミは、今の一撃で死んでしまったのだろうか？

「ちっ、役立たずめがっ」

舌打ちして、地面を足で踏鳴らす。

男はそれでも、鏡を見つめた。
まだ、まだ映るかもしれない。

男の思いが届いたのか、ゆっくりと地面が揺れ、視線が高くなっ
ていく。

浅葱の足を捕らえた。

徐々に、ふらつきながらも、視線は浅葱の後姿を捕らえていた。
どうやらネズミを倒したと安堵したのだろう、他の事に意識を集
中させているらしく、全く立ち上がったネズミの存在に気がついて
いないようだ。

「何をしている、気づかないとその魔物に殺られてしまうぞ」

男はそう漏らしてから、思わず自身の口を手で塞いだ、信じられないというように、頭を振った。

殺られれば良いではないか、相手は人間だぞ！？

自分が浅葱を心配してしまったという、その事実に関心をもち、顔を赤らめる。

「何故この私が、初めて見た人間の娘の心配をせねばならんのだっ腹が立った。

今の自分の言葉で自覚してしまい、腹が立った。

その鏡に映る娘が、魔物に怪我を、殺されるところを見たくなかった。

寧ろ……生きたままの姿を、もう一度見たいと思ってしまった。

歯軋りして、胸を押さえる。

なんだ、この感情はっ。

苛立ちで鏡をがむしゃらに揺すってみる、が、気は晴れない。

鏡に、浅葱とは違う人物が映し出された。

男は忌々しそくにその見覚えのある少年に舌打ちし、右手を硬く握る。

「サマルト王子、やはりそうか。となると、この娘は、もしか」

鏡に映る浅葱とサマルト。

サマルトの手が浅葱の手を握り締め、何か興奮気味に会話しているようだ。

声までは聞こえてこないこの鏡、何を話しているのかが気になった。

というよりも、胸に渦巻くこの苛立ちを隠せない感情……浅葱の手を優しく握っているサマルトに腹が立った。

非常に、不愉快な光景だった。

見ていたくないのが本音だが、そういうわけにもいかない。
目を凝らせば、サマルトの手に何か淡く光る物がある。

「勇者の石か!？」

碧色の珠が詰め込んだ腕輪、それをサマルトが嬉々としてア
サギの腕へと詰めようとしている。

と、それがいきなり眩い光を放った。

鏡越しとはいえ正面からその光を受け止め、男は低く呻くと思わ
ず瞳を硬く閉じ、鏡に背を向ける。

その光の波動に、男は耐えられなかったのだ。

光が弱まったことを背で確認すると、男は再度鏡に振り返る。

浅葱が不思議そうに空に透かして、腕輪を見つめていた。

サマルトが男に……いや、ネズミに近寄り、手にしていた剣で躊
躇せずに身体を貫く。

鏡に映る映像が大きく歪んで、次の瞬間掻き消えた。

どうやら、サマルトがネズミに止めをさしたらしい。

「勇者に、辿り着いたのだな王子達よ。泳がせておいた甲斐があっ
たというものだ」

勇者。

口にした単語と、浅葱の表情が重なる。

「あの娘、勇者なのか」

信じられぬ、というように落胆し、瞳を伏せる。

哀愁漂う声、男は覚束無い足取りで部屋の片隅の壁にもたれた。

冷たい壁が、思考回路を正常に戻してくれる。

あの娘は勇者だ。

可愛らしいと思ってしまった、心配になってしまった、護りたいと、そう思ってしまった。

瞳を閉じると浮かび上がる浅葱の表情。

真剣に真っ直ぐな瞳で見つめてくる、その姿が目には焼きついて離れないのだ。

何だ、この感情は。

男は苦しそうに何も映し出さない鏡を見つめると、息を大きく吸い込んだ。

「テンザ」

「私はここにあります」

何処からともなく、漆黒の闇を思わせる衣を身に纏った男が、まるで控えていたかのような速さで呼びに応じてくれた。

室内には、この男以外存在しなかったはずなのだが……。

長いストレートの金髪を揺らしながら現われた男は、跪き次の指令を待つ。

「三人に連絡を取ってほしい、早急に」

「承知いたしました」

答えるなり、音もなく消えるテンザ。

一人になったその部屋で、男は瞳を軽く閉じる。

暫しして、男はゆっくりと立ち上がると、足を引き摺って鏡の前に立つ。

その冷たい鏡に触れてみる、切なそうに、悲痛な叫び声を漏らす男。

浅葱の凜々しい表情が見たい、ふわふわの髪に触れてみたい……。

「美しい娘だ……名は、名はなんという？」

男は届きもしない台詞を、鏡に向かって呟いた。

先程の無謀なほど勇敢な小さな娘、その瞳に心が射抜かれて。

勇者だと分かった、自分とは敵対する立場の娘。

男の名はハイ・ラウ・シュリツプ。

2星ハンニバルの魔王と呼ばれる男。

魔王は、勇者に恋焦がれた。

眩しい程の存在感と、真っ直ぐな瞳に囚われた。

自分には全くないものだったので、強烈な印象となって全身を駆け巡った。

闇は光の眩しさに慣れず（後書き）

【現時点での登場人物】

大石健一：小学六年、三組。実と同じサッカー部。

門脇実：小学六年生。4組、サッカー部所属。

田上浅葱：主人公。絶世の美少女。小学六年生。1組

田上友則：主人公の弟。小学四年生。

田上久志：主人公の末弟。小学一年生。

中川大樹：朋玄と友紀と同じクラス、小学六年、2組。

松浦友紀：主人公の親友、美少女。小学六年、2組。

松下朋玄：実の幼馴染、小学六年生。2組。

三河亮：浅葱の幼馴染、小学六年、1組。

サマルト王子：亡国の王子

ムーン王女：亡国の王女

ハイ・ラウ・シュリップ：浅葱を見ていた謎の男

テンザ：ハイの部下

”勇者”

ネズミの身体を一突きにしたサマルト、見ればムーンも粗方敵を一掃したようだった。

興奮気味でサマルトはアサギの手を取り、力強く振り回す。

「お会いできてよかった、オレはサマルト。2星ハンニバルのシーザー城第一王子・サマルトと申します」

「初めまして、私は田上浅葱といいます」

宜しくお願ひします、飛び切りの笑顔で浅葱は深々とお辞儀をする。

ぺこりん。

そんな擬音が似合いそうだった、可愛らしい子犬を見たときのような胸を締め付けられる愛おしさ。

その笑顔に、思わずサマルトも思わず笑顔になる。

姿を見た時は、あまりにも小柄な少女だったので勇者ではないと思っただ。

というか、勇者であっては困ると思っただ。

が、勇猛果敢に、怯むことなく敵へと突撃し、見事な連鎖攻撃を繰り返していた。

あれだけ見れば、信じざるを得ない。

そして、サマルトが自国より丁重に運んできた「碧い勇者の石」が、浅葱に反応したのだ。

勇者にのみ、反応するといわれている伝説の石。

銀細工の腕輪に石が詰め込まれている為、一見装飾品にしか思えない。

サマルトが懐からそれを取り出すと、真っ直ぐに石は浅葱を指し示し、腕輪はサマルトの手によって浅葱の手首へと収まった。

「タガミ、アサギ。アサギ、と呼ばば良いのでしょうか」
「あ、はい、アサギで良いのです」

アサギは再度深々とお辞儀をした。

照れ笑いを浮かべているサマルトに首を傾げつつ、一度整理してみようと浅葱は頭を回転させる。

突然光の中から、サマルトとムーンが現われた、追うような形でネズミが降って来た。

ムーンは魔法を唱えて攻撃し、サマルトは細身剣で攻撃をし、今勝利した。

とくん……。

アサギの胸が跳ね上がる、今になってようやく『戦った』という実感が湧いて来る。

ネズミを素手で攻撃した時は然程気にならなかったのだが、急に足が震え始めた。

これから起こるであろう出来事への武者震いなのか、それとも恐怖を我慢していたのか。

不意に訪れた異世界からの訪問者、夢ではない筈である。

……自分は勇者らしい、ということが発覚した。

願っていた事だった、勇者になったら、やりたいことがあったのだ。

地球上には魔物もいないし、魔法も使えない、友達に夢を話すと笑われて頭を撫でられた。

ほら、やっぱり、実在したでしょこんな世界。

嬉しそうに呟くと、アサギは思わず不敵に笑ってしまう。

「お会いできて光栄です、共に戦ってくださいますね勇者」

ゆっくりとした口調、柔らかな物腰のムーンが歩いてきた。

なんて、綺麗な人。

アサギはそう思ってムーンを見つめる。

お姫様、とはこういう人物の事をいうのだろう、行動全てが気品に満ちている。

「私の名は、ムーンと申します。サマルトとは幼馴染です。ジャン又城の第一王女でした」

傍まで歩き、ムーンが丁寧にお辞儀をした。

慌ててアサギもお辞儀を返す、あたふた、と見様見真似で。

「一先ず、説明いたしましたしょう。この場所は私達の住んでいた場所と違う様子ですから、上手く話酔ことが出来るか不安を感じますが」

ムーンは軽く咳き込むと、口元に手を当てたまま語りだす。

神妙な顔でアサギは頷いていた、聞いておかなければいけない事だ。

「私達は2星・ハンニバルと呼ばれる惑星出身です。ご存知ですか？」

「……その様子ですとご存じないようですね、続けます。数年前から急に『魔王』と呼ばれる存在が現われました、名をハイ・ラウ・シユリップ、と申します。彼の残虐性の高い愚行によつて、五国存在した大国が滅ぼされていきました。先程、私の国ジャンヌが落城いたしました。サマルトの国だけが辛うじて残っている筈……です」

そう、筈だった。

しかし、現在サマルトの国の現状など知る由もない。

最悪、同じ様に亡国となっている。

「オレ達は各々国に同年の仲間が居たから、仲間にも術く片っ端から捜しに行ったのだけれど……オレ達二人しか……」

2星ハンニバルの魔王、ハイ・ラウ・シュリッブ。

アサギは脳裏に叩き込むべく、復唱する。

「勇者の石はムーンの国に保管されていたので、そこが集合場所となったのです。予言がありまして。『世界が混沌の危機に陥った時、伝説の勇者が石に選ばれ世界に光をもたらす』」

「私とサマルトは、その予言を信じてここまで辿り着きました。大勢の命が失われましたが、共に魔王を倒せば救われると信じています。どうか、勇者アサギ。私達と共に魔王ハイを倒し、世界に平和を」

大体話は理解した、アサギは神妙に頷くと二人の手を取る。

「私、頑張ります！ 魔法も使えないし、剣も使ったことないけど、頑張りますっ！」

素直な言葉である、素直すぎた。

その台詞に二人は思わず眩暈を覚えたが、先程の戦闘を見ていると素質は十分だからすぐに覚えられるだろう、と思った。

思い込みたくもなるだろう、石が導いたのだから間違いはない筈である。

三人はその場で、笑みを零した。

若干、サマルトとムーンの笑顔が引き攣っていたようにも見えるが。

何はともあれ、勇者が見つかった安堵に肩の荷を下ろす。

素質があり、受け答えがはっきりしている目の前の小さな勇者。

成長するまで誠意一杯見守ろう、彼女とならば何でも出来る気が

してくる。

サマルトとムーンは空を仰ぎ、死した仲間達を思い出した。

勇者に、逢えたよ。

黙祷し、静かに祈りを捧げる。

勇者に会う為に払った尊い犠牲を無駄にしないように、祈る。

同刻。

4星クレオ、神聖城クリストバルに集結した者達。

服装も年齢も区々で、全く共通点が見つからなさそうな6人だったが、唯一の共通点は『勇者を探すこと』。

大きな水晶玉に映っているアサギとサマルトを見つめ、一人が神官に叫んだ。

「早く、早く！ 勇者が奪われる前にお願ひします！」

そう叫んだ少女の手中には、翠色した石の填まった腕輪が二つあった。

言うなり、6人の姿が掻き消える。

更に同刻。

3星チユザレ、ボルジア城内。

紅石を手にしている頭の回転の速そうな男が一人、魔方陣の中に立っていた。

「急ぎませんと」

それだけ呟くと、瞬間的に姿は掻き消える。

選ばれた”6人”の勇者

手を取り合い、和気藹々と語り続けるサマルト、ムーン、アサギの三人。

が、突如後方から眩い光に照らされ、小さく悲鳴を上げた。

「ちっ、また追手か！」

腕で辛うじて光を遮りつつ、サマルトがアサギを庇う様に前に出る。

眩い光は巨大だった、それは徐々に弱まっていく。

最初は一つだと思ったのだが薄れていくうちに、二つあるのだと解り始めた。

その光で、校庭に散乱していた魔物の死骸はまるで原子に還るように消えていった。

剣を構えながら、必死で威嚇するサマルトの後方、ムーンが驚愕の瞳で光を見る。

魔物の死骸を打ち消した時点で、憶測だがムーンには追っ手ではないと思った。

二つの光の中に、人影。

万が一に備えて攻撃態勢は崩す事無く、しかしムーンは強張らせていた身体の力を抜く。

「大丈夫よ、サマルト。あれは敵ではなさそう」

緊張を解いて、サマルトの肩に手を置くムーン、怪訝にサマルトも瞳を細めて光を見る。

不機嫌そうにサマルトは渋々剣を鞘に戻した、眩しそうに光を見つめるアサギを、未だ背に隠しながら。

徐々に光が薄れていき、ムーンは迷う事無くそちらへと歩み寄る。光の中から、人影が7、現れた。

「やはり、ムーン王女。久しゅう御座います、憶えておられますか？」

「ああ、やっぱりアーサー殿でしたか。本当に御久し振りです」

うち、一人が歩み寄るムーンを見つめ、弾かれたように笑みを浮かべて話し掛ける。

安堵し、先程とは違ってまだ幼さの残る笑顔でムーンもそれに応えた。

「アーサー殿がこちらへ来た目的は。……やはり、勇者を？」

「ええ、お察しの通り。ムーン王女もですね？ それから……あちらの方々もその様子」

アーサーが一瞥した先には、ムーンが知らない人間が立っている。何処となく雰囲気から気品漂うアーサーと違い、その6人は粗野な感じがした。

恭しく膝きムーンの手を取ると、その右手に口付けをするアーサー。

そのもう一組の団体を気にする様子もなく、サマルトの背から顔を覗かせたアサギへと視線を移す。

「あの子が、勇者ですか」

「そのようです」

成程、アーサーには勇者の片鱗が見えたのだろう、即座に言い当てる事に関しムーンは満足そうに頷く。

アーサーは傍らのムーンの返事を聞くと、柔らかな物腰でアサギ

に礼をした。

ムーンの手を恭しく引きながらアサギに近づき、アーサーはそつと跪く。

「一目でわかりました、勇者殿。初めてお目にかかります、私は3星チユザレのアーサーと申します。ボルジア城で賢者をしております。お会いできて光栄です」

「あ、えっと、初めましてっ。浅葱といいます。よろしく願います」

慌てて頭を下げるアサギ、初々しい動作に軽く吹き出して頭をそつと撫でるアーサー。

右手をそつと掴み、下から覗き込む形でアサギに微笑する。

「ですが、あまりにアサギの手首は細く、折れてしまいそう。華奢な花の茎、大事に大切に、この私が御守致します」

ただの、ヤサ男にしか見えない。

咳払いするムーンには、お構いなしである。

困ったように俯くアサギ、テレビで見た海外のラブロマンスドラマに出てくる男性の様だ、無論こんな扱いを受けるのは初めての事。その隣で、不貞腐れ気味のサマルトを見つつ、ムーンは呆れて項垂れた。

確かにこのアーサーという男、若くして賢者の地位に登り詰めただけあって、実力は目を見張るものがある。

それはムーンにも解っているのだが、どうも女性に対しての態度がいけ好かない。

誰にでも大袈裟に姫扱い、軟派な感じがする。

舌打ちしてサマルトが、困惑気味のアサギと手を離さないアーサーの間に割って入った。

胸を張り、大声で声高らかに叫ぶ。

「オレはサマルト。何度か会った事もあるだろう。よろしく」

「はあ」

暫し考え込むように宙の一点を見つめていたアーサー、その末に出た言葉は。

「思い出しました、各国の王子の中で一番尻の青いガキ臭い王子。乱暴物で無頓着、目に余る行為……の、サマルト王子ですね」

「うっわあー、すげえコイツむかつく」

穏やかな笑みを浮かべたまま淡々と言葉を紡いだアーサーに、サマルトは憤慨して思わず拳を強く握った。

確かに頭に血が上りやすいサマルトもいけないのだが、それでもそのアーサーの表現の仕方はどうなのか。

挑発したのか、素で出た言葉なのかムーンには見当がつかない。歯軋りしながらアーサーに身体を震わせるサマルトの傍ら、ムーンが最も深く長い溜息を吐く。

「サマルトには勝てない相手よ。彼、口が達者だもの」

サマルトの耳元で、そう囁く。

しかし、仮にも王子である。

亡国の王子だが、一応王子である。

そんな様子を遠目にしながら、すっかり放置されていたもう一組の団体が近寄ってきた。

先頭の妖艶な美女は、アサギに真っ直ぐ進んでくる。

重たい腰を上げ、慥然とアーサーがその美女の正面に立ちはだかっ

「ちよつとお、話を進めないでくれる、勝手に。勇者を祭り上げないで、その子は私達の勇者なのだから」

紫の流れるような髪、暗闇で光る猫のような鋭い瞳、抜群の豊富な身体、瞼にたつぷり光る粉、唇は魅惑の真紅。

アサギは海外モデルのようなその美女に、思わず感嘆の溜息を漏らす。

挑発的にその美女は、サマルト、ムーン、アーサーを交互に見やっつた。

最後にアサギで視線を止める。

「この子は、私達4星クレオの大事な勇者。奪わないで」

「はあ！？ 何を勝手に！ オレ達2星の勇者の証である、この碧石が証拠。何を根拠に」

サマルトが慌てふためいてアサギの手首に嵌っている光る石を、堂々と美女に見せ付けた。

自信たつぷりに、美女がアサギの手を取る。

「よく観て頂戴。彼女に相応しいのはこちらの石。翠の石、4星クレオの勇者の石」

高笑いしながら、勝ち誇った様にサマルトにアサギの手首を見せて付けた。

カシャン……。

碧石が虚しく地面へと落下し、代わりにアサギの手首には翠の石が埋め込まれた腕輪が。

サマルトの引きつった叫び声、地面に落ちた大事な腕輪を慌てて拾い上げる。

「馬鹿なっ、この子にちゃんとオレ達の腕輪が填まっただろっ!?
何故外れた」

「先に2星のあなた方がこの子に遭遇した。4星勇者であるにもか
かわらず、2星の石に反応した。勇者としての器が、あまりに巨大
すぎて、反応してしまった……と考えるわ、私は」

勇者としての器が、あまりにも巨大すぎて。

シン、と静まり返った中で、一人アサギだけが首を傾げる。

「あの一、すいません。質問しても良いですか？」

「どうぞ」

微笑んで、アサギの視線へとしゃがみ込む美女。

「勇者って、そんなにたくさん存在するものなんですか？」

率直な質問だった。

話を聞いた限りでは、自分以外にも勇者が居るらしい。

勇者というのは、一人だけだと思ってた。

アサギは混乱気味に、自分の手首に填まっている腕輪を見つめる。
美女はゆっくりと微笑むと、共に来た団体の一人を手招きする。

「説明、するわね。まずは、私はマダーニ。そのひよる長い戦士が
ライオン。巨乳の娘がアリナで、後ろのじーさんがブジャタ、女の
子みたいな線の細い男がクラフトで……」

解りやすいような解りにくいような、そんな説明をされたメンバ
ーは苦笑いしている。

手招きされて近寄ってきたマダーニに似た容姿の少女が、微笑し

てお辞儀をした。

「この子が私の妹のミシア。というわけで、ミシア、交代」

ぼん、と肩を叩いて一歩下がると、ミシアを前面に出す。

物静かそうな少女は遠慮がちに軽く礼をし、アサギに微笑みかけた。

「勇者を渴望している星が、現時点で4つ、存在します。1星・ネロ。2星・ハンニバル。3星・チュザール。4星・クレオ。話を聞いていた限りでは、サマルトさん、ムーンさんが2星、アーサーさんが3星……合ってますよね？」

三人を見て、同意を得るとミシアは安堵した様に溜息を吐いた。

「勇者、は『世界が混沌の危機に陥った時、伝説の勇者が石に選ばれ世界に光をもたらす』とされています。石は各星に存在します。だから、勇者が数人存在するのです」

ミシアがゆっくりと、手にしていた直径10センチほどの水晶球を胸で優しく抱きとめる。

瞳を閉じ、何かしら詠唱すると、その水晶球が淡く光り始めた。

それは煙のように何本か白い帯を発し、ふわり、と風に流されるように宙を舞う、何かを探るように。

一本はアサギの目の前で静止した。

残る帯は……5本。

アサギの前の帯は白から翠へと色彩を変えている、丁度腕輪の石と同じ色だった。

息を飲み込み、その帯を見つめる一同、ゆっくり、ゆっくり、帯は伸びる。

やがて帯は生徒達の間を掻い潜って、終点を探し当てたようだ。
アサギは思わず声を張り上げて、名を叫んでしまう。

「友紀っ」

「浅葱ちゃんっ」

親友の友紀、その目の前に伸びた帯は銀色で、何時の間にもやらの琥珀色の石が填まっている首飾りが帯の先端に浮かんでいた。

友紀はそれを恐る恐る手に取ると、ごく自然な動作でそれを首へと。

「1星の、勇者の片割れ」

小さく呟いたミシアに、アサギは思わず友紀へと駆け寄る。

見れば他のメンバーも顔見知りばかりだ、全員、同級生。

友紀と同じ琥珀色の石が詰め込まれた腕輪を、怪訝に見つめている実。

先程までアサギの手首に填まっていた碧の腕輪を手にしているのは、健一。

紅の腕輪を左手に填めて健一と会話しているのは、大樹。

そしてアサギと同じ翠の石の腕輪を填めているのが、朋玄。

実は、忌々しそうにその腕輪を見つめたまま、動かない。

健一、大樹、朋玄は三人で集まって何かしら会話していた。

「実君も勇者みたいだね」

あまり勇者の意味を理解していない友紀が、笑顔でアサギに語りかけた。

不安そうに小さく友紀を見るアサギ、実を気にしながら友紀に小

声で語る。

「なんだか、機嫌悪そう」

「そんなことないよ、みんな友達なもの。大丈夫」

親友のアサギと同じだったことが嬉しくて、友紀は安心感に包まれていた。

その為、実を心配するアサギを励ました、彼女にはまだ余裕があった。

「浅葱、お揃い」

弾かれたように駆け寄ってきたのは朋玄だった、アサギの石の色と全く同じ石を持っている。

生徒会長・朋玄。

茶色気味のさらさらな髪、校内で美少年といえば名の上がる、勉強も体育も得意な少年だ。

故に、優等生のアサギとは何かと仲が良かった。

ちなみに朋玄もそんな環境からアサギと釣り合えるのは自分しかない、と思い込んでおり、付き合っている気である多少自信過剰な少年。

「石で、どの星の勇者か判別出来るみたいだね」

「浅葱と俺が一緒。実と友紀が一緒。健一と大樹は違ってみたいだね」

二人も合流し、互いに石を見せ合う。

健一は純粋な黒髪の大きな瞳が印象的な、まだまだ可愛らしい顔立ちの少年だ。

背も低く、アサギや友紀と大して変わらない。

大樹が小学校6年生にしては長身で、大人びた少年だった。

170センチ近い為、電車の運賃が子供料金で乗ろうとすると止められる……という本人にしたら傍迷惑な、けれども少年達から見たら羨ましい身長を持ち主。

一番落ち着いて見える。

集合し始めた異世界の勇者達をしげしげと見つめていた一同だが、健一を見るなり、ムーンとサマルトが同時に鋭く叫んでいた。

「ロシア!？」

「似てる、ロシアに……。数年前のロシアにそっくりだ……」

驚いて健一は二人を交互に見つめていたが、どうしてよいか分からず軽く頭を下げる。

挨拶のつもりだった、ロシア、と言われても地球の国名しか思い出せない。

ムーンとサマルトが指すものは無論国家ではない、人名だった。

健一の腕には碧石、間違いなく2星の勇者。

先程まで、アサギがその腕に填めていたものだ。

低く唸るサマルト、ムーンが微かに身体を震わせて、知らず涙を零しながら健一を見つめる。

ああ、そうだ、ムーンはロシアに片思いをしていた。

サマルトはそう思い出し、似ている健一を見つめる。

ロシアは数ヶ月前、魔物に襲われたムーンを庇って息絶えていた。本来ならばロシアもこの場に居る筈だったのだ、五力国の若い王族の中で最もリーダー意識の高かった一番年上の王子である。

「認めざるを得ない、か。わかった、彼が2星の勇者だ」

呟いたサマルトに、ムーンが神妙に頷く。

隣では、アーサーが大樹を見つめている。

大樹の腕には紅石、あれは3星チュザールの勇者の証。

「彼が我らの星の勇者、ですか」

何処となく、残念そうに呟いたアーサー。

勇者は、”6人”。

マダーニが中心に躍り出ると、綺麗な透き通るソプラノの声で語り出す。

「揃いし6人の勇者様。あなた方を御守りし、共に魔王を倒すこと、それを約束いたします。どうか、共に戦ってください、準備は宜しいですか」

ミシアが水晶を掲げて詠唱に入った、空間が歪み校庭に一箇所、摩訶不思議な空間が出来上がる。

ぼんやりと、向こう側に純白の建物が浮かび上がっていたのだ。空間の歪、映画の世界だ皆息を飲むしかない。

足が震えだす、これは現実だ。

「4星クレオ・神聖城クリストバルへの道です」

マダーニ、ミシア、アリナ、クラフト、ブジャタ、ライアン、6人が左右に別れて道を作った。

「私、行きます。お願いします」

躊躇なくアサギがそう答え、足を動かし、その道へと進んでいった。

断る理由がアサギには見当たらない、待ち焦がれた世界が目の前に存在するのだから。

「なんだか、とっても懐かしい空気」

呟いた台詞に皆微笑んだが、現時点でアサギの言葉を理解した者等いない。

もし、居たらば。

……物語は別の話になっていた。

勇者と呼ばれた、勇者に選ばれた、なら、応えよう。

サマルトとムーンが現れて、魔物と対峙した時点でアサギは決めていた。

この世界に、足を踏み入れよう。

幼い頃から、夢があった、勇者になりたかった。

勇者になりたかったのは、誰かを救えるから、大勢の人を救えるから。

大勢の人を笑顔にしたら、自分にも良いことが返って来るはずだから。

だから勇者になる、私は勇者になる。

良いことをすれば、良いことをしていれば、いつか、きっと……。

「いつか、きっと」

無意識のうちにアサギは唇を動かすが、それは誰にも聞こえない。アサギが行くなら、と友紀が続いた。

スカートの裾を引っ張って、友紀が戸惑いながら進んでいく。

無論、朋玄も胸を張り堂々と二人の後方から進んでいった。

釣られるように、健一と大樹がその後ろをついてく。

その様子を見つめながら、慌てふためき道を遮ろうとしたのはサマルト、ムーン、アーサーだ。

勇者が全員4星へ行こうとしている、それは困る。

「ちょ、ちょっと待った！ 待った、待ったっ」

「言いたいことは解るわ。安心して、サマルト君。あなた方も4星クレオへ来て貰うのよ」

マダーニのその発言に、絶句し大人しくなるサマルト。

ムーンが怪訝にマダーニに詰め寄っていく。

「ハイ、だった？ あなた方2星の魔王の名前。そいつも、3星の魔王、ミラボーってのも、すっごい迷惑なんだけどクレオに来ちゃったの」

「な、なんだって!？」

心底嫌そうに舌打ちしながら、マダーニは髪を掻き揚げる。

訝しみながらも、腕を組んで小さく頷くアーサー。

「……ここ最近、魔物の動きに変化が生じていたのは、私達も気にかかっていたのですが。魔王が星を移動？ 本当ならば、私もクレオへ行かなければなりませんね」

「どうやってソレを知ったんだ？ 宣戦布告に来たわけじゃないだろ、魔王が」

反発するサマルトに、気だるくマダーニは告げる。

「魔王自身の姿を確認したわけじゃない。けれど、魔物の種類が増加して、明らかに別世界の魔物が徘徊している。今から行く神聖城クリストバルの神官達が、魔王の集結を予言して。現在に至るわけ」
「何より、こうして別の星の勇者達が一同に集まり、その場所に我らが集結した……そう、まるで不可思議な運命の路に足を踏み入れて導かれたような、そんな状況ですじゃ。信じてください」

押し黙っていた最年長のブジャタ、咳き込みながらそう語る。

「身内を誉めるのもなんだけど、妹のミシア。この子もそんな夢を見た。この子の力は信用していいと思う」

ムーンが意を決してマダーニに頭を下げる、認めたらしい。

面白くなさそうにサマルトも、それでも同意した。

アーサーも、神妙に頷くと決意する。

皆が全員、次の路へと進もうとした時だった。

アサギが弾かれたように一点を見つめる、そう、あと一人、足りない。

「お前らさ、何考えてんの」

名を呼ぶアサギ、ぎゅっと友紀の手を握って、実を見つめる。

そう、実だけが輪を離れてこちらを睨んでいた。

その視線は、こうなることの元になったアサギを睨みつけているように、アサギは申し訳なく肩を竦ませる。

「新しいソフトを買った、ゲーム機に差し込んだ。名前をつけて冒険の旅に出た、レベルが上がって、敵を倒した。……なら、いくらでも俺もやるよ。でもさ、勇者って俺達だろ？ どうやって戦うわけ？ 死んだらどうなるわけ？ なんでそんな簡単についていつちまうかな。俺は絶対行かない」

アサギを鋭く睨みつけ、怒鳴る実。

視線に耐えられなくて、後退するアサギを庇ってか、朋玄が前に出た。

アサギが行くと言い出し、それに釣られて皆が行くと言い出したのだから、実にとってアサギが最も邪魔な存在。

それに、実がアサギのことを嫌悪しているというのも、朋玄は知っている。

自分の意思とは裏腹に、勇者に仕立て上げられた現状が実には気に食わないのだろう。

誰かに釣られて同じ行動をするのが、実は大嫌いだった、幼馴染の朋玄だからこそ、解る。

「実は来なくてもいいよ。俺は行くけど」

「朋玄が行くのってさあ、田上が行くからだろ？ 勇者ってそんな動機で動いていいわけ？」

実の挑発に怯む事無く、自身有り気に微笑む朋玄。

「浅葱と俺は同じ星の勇者らしい。浅葱を護ることこそ、勇者である俺の使命な気がするんだ。それに、大事な浅葱を一人で行かせるわけにはいかないからね」

「あつそ、勝手にすれば？」

よくもまあ恥ずかしげもなくぽんぽんと言葉が出るよな、朋玄。悪態ずいて石を放り投げると、実は他の生徒達の輪へと戻っていた。

呆然と、立ち尽くしてアサギは実を見つめる。

同じ勇者の中に実の姿を見つけた時、アサギはとても嬉しかったのだ。

親友の友紀しか知りえない事実、アサギは実が気になっていた。気になっていた、というか片想いをしていた。

実に嫌われているという自覚はあったけれど、勇者になって色々な冒険をしていたら『また』前のように仲良くなれるのではないかと、淡い期待を抱いてしまった。

あさぎちゃん、おつきくなっても、なかよしでいようね

幼稚園、小学校へ行く前、アサギは実ととても仲が良かった、多分実には憶えていない。

小学校へ行ったら、実がいなかった。

引越していた事を知らなかったのだが、小学四年生になったら、転校生として実が戻ってきたのだ。

アサギは一瞬で幼稚園で仲が良かった実だ、と、解ったのだが実は全くアサギの事を憶えてはいなかったのだ。

もともとアサギは優等生で誰からも好かれているのだが、実は問題児で先生に叱られ、先月は線路に石を置いたとかで警察に呼び出され、正反対である。

優等生と、問題児。

アサギは優等生の朋玄とは、何かしら噂されていたが、周りも実との噂は当然してくれない。

実際、アサギは実の口から「田上浅葱が嫌い」と聞いている。

五年生、違うクラスだったアサギと実。

実のアサギ嫌いは有名で、男子生徒が一体何故か、と聞いた。

「実って変わってるよな」。田上の何処が嫌いなわけ？」

「お高くしてるとこ、優等生ぶってること、自分が正しいと思ってること。誰にでも好かれてると思ってること、などなど」

さらに、とまるで聞かれるのを待っていた様に実は友達に言った。そうかー？ と首を傾げる友達に、実は面白くなさそうに吐き捨てる。

そら見る、お前らだつて田上浅葱主義者じゃないか、そういうのが気に食わないんだよ。

「嫌いなもんは、嫌い。大嫌い。俺は田上浅葱が大嫌い」

その実の肩を、友達が揺さぶって叫び声を上げたのだが、遅い。教室の入り口、アサギ本人が突っ立っていた。唾然とその姿を見つめ、実は急速に青褪める。居るなんて知らなかった、クラスが違うから、来るなんて思っていなかったから。

アサギは静かに、沈黙するクラスの中、同じ生徒会役員の朋玄を呼び、気にするわけでもなく笑顔でノートを手渡していた。

生徒会の次の議題が書かれているノートだ、それを届けに来ていたらしい。

泣きもせず、怒りもせず、アサギは普段通り手を振って教室から離れていく。

慌てふためく一同、けれども実は窓から空を見ている。

雨が朝から降り続けていた、豪雨だった。

「お、おい、いいのかよ、実」

「全部聞いてたみたいだけど……あれは拙いよ」

反論するとか激怒するとか、泣くとか……何かリアクションしてくれればよかったのに。

実は小さくそう呟く。

「いいよ、別に。クラスだって違うしさ、顔を合わせる機会なんてないし。俺に嫌われててもどうってことないんだよ、相手にしてないんだよ」

「は？」

小声で言い終えたら急に苛立ちが増した、椅子を蹴り上げる。

椅子が盛大な音を立てて倒れ、女子が悲鳴を上げた。

朋玄が近寄って来て説教をしている、言い争う気にもなれなくて

実は無視した。

……いいんだよ、別に。

だから、実は知らなかった。

廊下に出てゆつくりと自分の教室へ戻っていたアサギが、号泣していたことを。

そんな、過去が合ったからこそアサギは、今、実に声をかけられないのだった。

一緒に行こうよ、そう言いたかったけれど、言ったところでどうにもならないのは、十分承知の上だ。

声をかけても拒絶されて反発するだけだろう、出掛かった言葉をアサギは飲み込む。

今は幼馴染の朋玄が、頼みの綱、祈るような気持ちで見つめる。それしか、アサギには出来なかった。

「うん、じゃあいいや。一人くらい勇者が居なくても平気だろうし。その分俺が頑張ればいいよね、じゃ、意気地なしの実。また何処かで」

そんな言葉！？ アサギは絶望的で友紀の手を硬く握る、もう、駄目だ、と思った。

眩暈がする、狼狽して健一と大樹も朋玄に言い直すように説得を始めたようだ。

「誰が意気地なしだ！」

案の定火に油を注いだらしい、実は憤慨して朋玄に詰め寄る。

結果的に、実は戻ってきた。

気に食わないと、言葉より力で返すタイプだった、今にも殴りかかろうとしている。

「えー、本当のことだろ。怖いんだろ？」

「怖くはないけど、簡単に受け入れるのが変だって言ってるんだよ」

「受け入れられないのは、怖くて自信がないからだろ？」

「違うって言ってるだろっ」

「じゃあ来ればいいじゃん、怖くないなら来いよ」

「あーあー、解ったよ、行くよ、行くっつつってるだろっ！」

捨てた勇者の石を拾い上げる、実は大股で朋玄に近寄ると、右手の拳で殴りつけた。

が、それを難なく受け止める朋玄。

「意気地なしでないことを証明してやるよ」

「精々頑張れば」

鼻で笑い、朋玄はマダーニに向き直った。

「そういうわけで、勇者、全員行きます」

安堵し、アサギは友紀に凭れ掛かる。

朋玄なりの、実の説得の仕方だった。

勇者一同、深い溜息。

健一と大樹に話し掛けられ、幾分か実は冷静さを取り戻したようである。

そして軽く青褪めた、朋玄の策略にまんまと嵌められたことに。

舌打ちして睨みつける実だが、朋玄は勝ち誇ったように腰に手を当てて満足そうだ。

ようやくアサギも張り詰めていた緊張を解くと、笑みを零した。

「何？ 実が来たほうがよかった？」

「も、もちろん。みんなで仲良く協力しなきゃ」

話しかけてきた朋玄、不意に本心を突かれて、アサギは狼狽えて返事をする。

朋玄はそんなアサギを気にする様子でもなく、アサギに微笑んだ。こうなることは見透かしていたように、マダーニは軽く笑うと、仲間達と頷き合う。

「じゃあ、行くわよ！」

声を合図に、光が全員を包み込んでいった。

校庭に残る、教師、生徒、啞然とその光景を見守る。

理解し難い状況で、何をどうすればよいのだろう、これは夢だ夢に違いない。

一人、その中で全力で走り出す少年が居た、三河亮、アサギの幼馴染。

「浅葱っ！」

「みーちゃん、行ってくるね！」

アサギはまるで旅行へ出向くかのように、楽しそうに亮に手を振る。

光の中で、薄れていく中で。

「待て、行くな！ 僕も行くから！」

無我夢中で亮は手を伸ばす、光の中へと手を伸ばす、だが、無常にもそれは弾かれた。

勇者でない者は、立ち入るべからず。

亮は目の前で掻き消えていくアサギを見つめながら、啞然と、自

身の手を見た。

「どうして、どうして僕は選ばれなかった……？」

残された全員に、その言葉が届けられた。

勇者の器って、なんだろう、何を基準に選ばれたのだろう。

悔しそうに顔を歪めて、校庭を踏み鳴らす亮。

アサギの傍に、いなければいけないのにつ！

傍を離れてはいけない気がしていた、けれども、一緒にいられない。

誰か、勇者を代わって欲しかった、実が行かないのなら自分が行くつもりだったのに。

捨てられていた勇者の石を拾うため、亮は近くにまで歩み寄っていたのだ。

実に、行って欲しくなかった。

どうか、どうか、誰か、彼女を護ってくれ。

僕が傍にいられないのなら、誰か別の人間が、彼女を護ってくれ。

亮の周りを風が吹き荒れる。

砂塵が舞って、校庭に残された一同が再び叫び声を上げた。

風が、物悲しく地を這う。

離れてしまった大事な娘を捜すように、一陣の風が舞う。

亮の身体から、風が、巻き起こって吹き荒ぶ。

「浅葱っ！」

選ばれた”6人”の勇者（後書き）

【現時点での登場人物】

- 大石健一：2星の勇者。小学六年、三組。実と同じサッカー部。
門脇実：1星の勇者。小学六年生。4組、サッカー部所属。
アサギ（田上浅葱）：4星の勇者。主人公。絶世の美少女。小学六年生。1組
中川大樹：3星の勇者。朋玄と友紀と同じクラス、小学六年、2組。
松浦友紀：1星の勇者。主人公の親友、美少女。小学六年、2組。
松下朋玄：4星の勇者。実の幼馴染、小学六年生。2組。
田上友則：主人公の弟。小学四年生。
田上久志：主人公の末弟。小学一年生。
三河亮：浅葱の幼馴染、小学六年、1組。
サマルト：2星の亡国の王子
ムーン：2星の亡国の王女
アーサー：3星からの使者。イケメンだが気障。
マダーニ：4星からの使者、美女。
ミシア：4星からの使者、マダーニの妹。
ライアン：4星からの使者
アリナ：4星からの使者
ブジャタ：4星からの使者、ごく高齢。
クラフト：4星からの使者。

ハイ・ラウ・シュリップ・アサギを見ていた魔王
テンザ：ハイの部下

4星クレオ・神聖城クリストバル（前書き）

【現時点での登場人物】

- 大石健一：2星の勇者。小学六年、三組。実と同じサッカー部。
門脇実：1星の勇者。小学六年生。4組、サッカー部所属。
アサギ（田上浅葱）：4星の勇者。主人公。絶世の美少女。小学六年生。1組
中川大樹：3星の勇者。朋玄と友紀と同じクラス、小学六年、2組。
松浦友紀：1星の勇者。主人公の親友、美少女。小学六年、2組。
松下朋玄：4星の勇者。実の幼馴染、小学六年生。2組。
田上友則：主人公の弟。小学四年生。
田上久志：主人公の末弟。小学一年生。
三河亮：浅葱の幼馴染、小学六年、1組。
サマルト：2星の亡国の王子
ムーン：2星の亡国の王女
アーサー：3星からの使者。イケメンだが気障。
マダーニ：4星からの使者、美女。
ミシア：4星からの使者、マダーニの妹。
ライアン：4星からの使者
アリナ：4星からの使者
ブジャタ：4星からの使者、ごく高齢。
クラフト：4星からの使者。

ハイ・ラウ・シュリップ・アサギを見ていた2星の魔王
テンザ：ハイの部下

ミラボー：3星の魔王

4 星クレオ・神聖城クリストバル

光の中は心地良くて、穏やかな波に揺られているような、夢心地だった。

真っ白なその中で、幼い勇者達は呆然と佇んでいた。

気がつけば、そこはすでに異世界だったのだ。

何時の間にもこちらへ来たのだろう、見上げれば純白の天井、見渡せば純白の壁、全てが『純白』。

床だけが、靴の裏についた土で汚されていく。

歩くのが申し訳ないような、まるで積もりたての雪の広場だ。

勇者達は軽い刺激を瞳に受け、瞬きを何度も繰り返して瞳を慣れさせようとする。

何もかも純白のその世界、瞳には眩し過ぎる。

慣れてくると、その場所が大きな部屋の中だということが判明した。

正面にドアらしきものがある、ノブだけが銀色に輝いていたから辛うじて解った。

「さ、行きましょう」

連れ立って歩いていく一行。

ドアを開くと幅の広い廊下が長く続いていた、壁には絵画が何枚も飾ってある。

歩きながら観て行くと、その絵画が一つの物語になっていることが判明した。

天使が地上を見下ろしている場景から始まり、地上に降りた天使達が人々に知恵と祝福を与え、人々はそこから国家を築き上げた。

天使達は舞い降り、それを永久に見守り続ける……というような内容に取れる。

そこから先の絵画はない。

まるで外国の美術館、アサギと友紀は手を繋ぎながら感嘆の声を漏らす。

やがて巨大な扉に行き着いた、左右に開くことが出来るその扉は、片方ずつに男女の彫刻が施されていた。

荘厳で逞しくも優しく、凛々しい面影のその男女は、4星クレオの勇者を指す。

今で言うアサギと朋玄になるわけだ。

重そうなの扉に手をかける、が意外に軽く簡単に開いた。

「お待ちしておりました、勇者様」

開いた先に、横に並んで一斉に深く礼をする人々。

その中央に、高貴な雰囲気のある老人が一人立っていた。

透き通ったその声は、勇者達に安堵と、緊張感を同時にもたらした。

高年齢とは思えない声色だ、神秘的である。

「ここは神聖城クリストバル。どうしてここへいらしたかは、お解かりですね？」

淡い水色の長いワンピースを着込んだ巫女達、若草色のワンピースに身を包んだ神官達が、顔を上げる。

思わず勇者達は後退りした、その無駄のない、ばらつきのない動作に怯む。

が、アサギだけが正面を捉えたまま、一歩進んで唇を軽く嘗めると緊張気味に言葉を発した。

「勇者としてここへ来ました。魔王がこの世界を脅かしているということも、ある程度把握出来ました。詳しいことはまだ聞いていま

せんが、理解していきたいと思います」

アサギの声が響き渡った、曇りのない声だ、はっきりとしたその口調に、マダーニは満足そうに薄く微笑む。

穏やかに老人は微笑んで小さく頷くと、傍らに控えていた巫女から、細長い箱を受け取る。

「ここは4星クレオですよ。2星ハンニバル、3星チュザーレの魔王であるハイとミラボーが何故か移動してきた、というのは本当ですか？」

凜とした声が響き渡る、堂々としたそのアサギの姿に、他の勇者は圧倒された。

聴いた内容を、単語を全て理解し、質問している。

「本当のようです。さあ、その前に。来なさい、クレオの勇者の片割れ。……そう、その少年」

老人は一步足を踏み出し、アサギを静かに見つめると朋玄に視線を移した。

朋玄は、多少怯んだが唇を噛み締めると自信を持って颯爽と歩み出る。

この少年は、人前に出ることに慣れており、どんな時も自信を失わないで行くだろう……。

老人は瞳を細めて、朋玄を頼もしそうに見つめた。箱を開き、朋玄に中身を確認させる。

「4星クレオに伝わる伝説の勇者の剣。その片割れです。お持ちなされ」

柄に鳥……不死鳥だろうか彫刻が施されており、見た目一メートル程の剣だった。

一瞬狼狽し老人を見る朋玄だが、神妙に頷いた老人に、深く頷くと息を大きく吸い込んで震える手で朋玄はその剣を取る。

見た目よりもずつと軽量のその剣、持った瞬間に武者震いが来た。

「い、いきなり最強クラスの剣が貰えるんだ……。ついてるね、俺」
想定外だった、面食らう。

朋玄が強がって言ってみたのだが、やはり足も手も声すらも震えていた。

伝説の、勇者の剣。

それを持たされて平常心でいられる者が、いるだろうか。

しかし硬く握り締め、恭しく掲げると誇らしげに勇者達に見せる。胸の高鳴り、手にした瞬間湧き上がる興奮。

他にも箱に丁重に仕舞われていた、籠手と肩あてが運ばれてきた。もちろんそれらも朋玄の所有すべき物であり、勇者の片割れであるアサギの物ではないようだ。

察して、申し訳なさそうに老人は謝罪する。

「もう一人の勇者よ。ここにはそなたの剣がない。剣はピョートルに保管されている」

箱が他に見当たらなかったのも、アサギは自分の分がここになんことを予感していた。

ので、特に気落ちしていない。

軽く微笑むと、はい、と返事をする。

「ピョートル、ですね」

聞き取った単語を復唱するアサギ、それは何処かの地名を指すの
だろう、胸で硬く拳を握る。

老人は静かにそんな様子のアサギを見つめ、ただただ、凝視して
いた。

沈黙が流れ、気まずそうに勇者達が身動きしているのをアサギは
感じ取る。

瞳を更に細め、老人は深い溜息を吐いた。

その一連の行動に不信感を抱く者が、多からず存在してしまう。

今の溜息は、何を指す？

最も高等な神官であるこの老人、何故アサギを見て溜息を吐いた

？ 今の沈黙は？

気にした様子も無く、老人は懐から丸められた羊紙を取り出し、
アサギへと差し出した。

地図である。

近寄ってきた他の勇者達へとそれを見せているアサギを見つめ、
老人は神妙に頷く。

「ここが現在地クリストバル。ここがピョートル。万が一に備えて、
剣の保管場所を二つに分けたのです」

片方が敵の手に落ちてても、片方さえ無事ならば……勝機はあると
いう計算だろうか。

地図で指し示された場所は、予想以上に掛け離れていた為、不満
の声が上がった。

この地図が示す規模が、日本なのか世界レベルなのかすら解らな
いが、それでもほぼ正反対の位置である。

「それを取りにいかなければいけないわけよね、アサギちゃんの為
に、アサギちゃんの所有すべき武器だから」

マダーニがアサギの肩に手を置き、微笑みかける。

深く頷くと、アサギは一生懸命地図を握って位置の把握を急いだ。この地図がどれほど縮小されたものか分からないが、クリストバルとピョートルが直線で結んだとしても遠距離であることは明らか
な為だ。

直線では行けないだろうし、全く検討がつかない。

しかし、考えただけでアサギは鳥肌が立った、血が騒ぐ、胸が躍る。

ふと。

気になる箇所を発見し、食い入る様に見つめているアサギ。

その地図には何も描かれていないのだが、妙にアサギはその一点
が気になっている。

> i 2 6 0 7 8 — 3 3 9 7 <

旅立つ勇者に（前書き）

【現時点での登場人物】

- 大石健一：2星の勇者。小学六年、三組。実と同じサッカー部。
門脇実：1星の勇者。小学六年生。4組、サッカー部所属。
アサギ（田上浅葱）：4星の勇者。主人公。絶世の美少女。小学六年生。1組
中川大樹：3星の勇者。朋玄と友紀と同じクラス、小学六年、2組。
松浦友紀：1星の勇者。主人公の親友、美少女。小学六年、2組。
松下朋玄：4星の勇者。実の幼馴染、小学六年生。2組。
田上友則：主人公の弟。小学四年生。
田上久志：主人公の末弟。小学一年生。
三河亮：浅葱の幼馴染、小学六年、1組。
サマルト：2星の亡国の王子
ムーン：2星の亡国の王女
アーサー：3星からの使者。イケメンだが気障。
マダーニ：4星からの使者、美女。
ミシア：4星からの使者、マダーニの妹。
ライアン：4星からの使者
アリナ：4星からの使者
ブジャタ：4星からの使者、ごく高齢。
クラフト：4星からの使者。

ハイ・ラウ・シュリップ・アサギを見ていた2星の魔王
テンザ：ハイの部下

ミラボー：3星の魔王

旅立つ勇者に

「お行きなさい、勇者達よ。あなた方の進むべき路は……自ずと見えてくるでしょう」

それは用意されていた、安直な台詞だった。

実は唇を尖らせ、自分達では何も始めなくせに、よくもまあ俺達にそんな適当なことが言えるもんだなと捨て台詞を吐く。

その声が小さすぎて、誰にも届かなかったけれど。

実の言う通り、余りにも簡単な旅立ちへの言葉であった。

異界からやってきた小さな勇者達に、投げかけられたその言葉は、漠然としている。

無言で歩く一行、直進で進んでその間三つの扉を抜けて、そこから一般客が礼拝する広間へ。

人々の間を割って、進んでいく。

神に助けを求め絶える人々を横目で見ながら、マダーニは軽く溜息を吐いた。

まさか、この少年と少女達が世界を救うことになる勇者であるとは、誰も思わないだろう。

一目でこの子達を勇者、と見破るものが存在したのなら、その者も共に行くべき仲間だろう。

伝説の勇者、と呼ばれる容姿には到底思えないし、実力も今はまだない。

マダーニとて、本当にこの子等を勇者としてよいかどうか、時折迷っている。

石が指し示したのだから間違いはないのだろうが、あまりにもか弱過ぎる。

それでも、護り続けて成長してもらうより、手立てはなかった。外に出て、日差しに痛い位に照りつけられ、一向は軽く瞳を細め

て空を見上げた。

アサギは陽の光を浴び、大きく息を吸い込むと親友の友紀に笑いかける。

「来れちゃった、勇者になれちゃった」

そうだね、と微笑んで友紀はアサギの手を握る、そう、いつものように。

ハーブが咲き乱れる庭園を抜け、純白の門を潜り抜け、ようやく神聖城クリストバルの外へと。

ところが、二人の巫女に止められ一向は振り返った。

「こちらをお渡しするようにと、仰せつかっております」

何冊かの本を、巫女はマダーニへと差し出した。

「初歩的な魔導書、ね」

中身も見ずにマダーニはそう巫女へと告げた、深く頷く巫女。

初歩的かつ、有効的で実用性の高い魔法が数多く掲載されていた、マダーニとてこれを手にした時期があった。

表紙の色は、赤、青、黄、緑、茶、白の計六色で魔法の系統によって分かれて掲載されている筈。

「馬車も二台、用意して御座います。どうかお使いください」

馬車つ、楽しそうに叫んだ友紀に、一行が苦笑いを漏らすのだが、アサギと二人で小走りに外へと駆け、馬車を覗き込む。

何処までも続く海原のように、青々と茂る草が風によって波打つ最高の景色の中、純白の馬が引く馬車が二台存在した。

見かけは豪華ではないが、耐久性に富んだ造りになっている。馬車自体に興奮している友紀にとって、見た目は特に気にならなかった。

「かつこいいよねっ、馬車だよ、馬車っ」

アサギも嬉しそうに飛び跳ねて友紀とはしゃぎ回る、それを微笑ましく見守る一行の中に。

ばかみてえ、うるさい。

小さくそう呟いた者が居た。

もちろん、実だった、浮かれている二人の同級生を尻目に、一人冷めた様子でそれを見つめる。

アサギには聞こえないだろう、と思った。

だから、アサギが大人しくなったのを見ても、自分のせいだとは思わなかった。

届くはずのない実の声を、アサギは彼の表情から、感じ取ってしまっただ。

故に、急に静かになると地平線の向こうへと視線を移す。

一行も馬車へと近づき、造りやら装備品を確かめた。

食料に飲料水、夜露を凌ぐ毛布などが積まれており、それに混じって勇者達への武器も用意されていた。

それは何処でも手に入るような、粗悪な造りの一般的な物であったが、それでも勇者達は自分達の装備出来るものを目にし、喜ぶ。

「いやー、俺、道とかに落ちてる武器を探すのかと思ってた」

「僕も思ってた」

大樹と健一がそんな会話をしていたので、思わず朋玄は苦笑い。

幾らなんでも簡単に道端に武器など、落ちていないだろう。

朋玄だけは、先程手に入れた自分専用の武器を誇らしげに持って

いる。

用意された物を見つめながら、ブジャタは嘲笑うように神聖城を見つめた。

仮にも命をかけた戦いに、こんな幼子らを放り込むのだ、それでこの程度か、と皮肉めいて呟く。

もつと全面的に協力をしても良いと思った、確かに人間とは誰かに頼り、極力自分では動きたくない生き物なのかもしれないが。

言葉を投げかけることが出来ても、態度で示すものはそう多く存在しない。

「わしとて……同じかもしれないがのお」

確かに勇者に同行する、が打倒魔王という厳しく過酷な試練をたかが石に選ばれた、というだけで会って数時間しか経過していない子供達に任せてしまっている。

まだ、その力量は定かではない、真の勇者かも分からない、途中で死ぬかもしれない、勇者と呼べるに値しないかもしれない。

人間とは弱いもんじゃ、何かに縋って生きてしまうからのお。

小さく呟くブジャタの隣で、クラフトが怪訝に眉を顰める。

なんのことはない、クラフトも同じことを思っていたからだった、小さく溜息を吐く。

しかし、こうするより他ない、それは百も承知、勇者に選ばれた子供達を守り抜く、それこそが課せられた使命であると。

二人は目配せし、深く深く、頷いた。

互いの決意を確認する為に。

後れを取ったが、二人も馬車へと近づいた、二台の馬車に乗り込む時点で、いきなり問題が発生した事に気がつく。

馬車を操ることが出来る人物が、現在ライアン一人しか存在しないという致命的な問題。

「いきなりダメじゃん！ どーすんの」

朋玄が呆れて叫ぶ前方で、ライアンが馬を撫でつつ苦笑い。

「徐々に憶えていくしかないだろうな、簡単そうにみえるかもしれないが、結構難しいから、ゆっくり、慣れていこう」

「じゃあ、一台の馬車でいきます？」

アサギの問いに、ライアンは首を横に振った。

「それでは馬車が重さに耐えられないな、上手くできるかどうかやってみないと分からないが、ちよっと俺に考えが」

ライアンは一人、手馴れた手つきで馬車の周りを動き回る、一台に二頭の馬がいるわけだが、それを四頭にして、二台の馬車を連結し、引かせるつもりらしい。

「速度は落ちるが、暫くはこれで進もうか。その間に俺が誰かに教えよう」

「あー、ボクやるよ。こういうの得意だから。乗馬は昔からやってたし」

「私も立候補しておきましょうか」

ライアンが周りを見渡すと、アリナとアーサーが名乗り出る。

三人は力強く頷くと、馬車へと乗り込んだ。

「さ、じゃあいきましたっか！ まずはここ、ジェノヴァ！」

受け取った地図を盛大に宙にはためかせて、マダーニはにっこりと微笑んだ。

長い指で、神聖城クリストバルからジェノヴァまでの道のりを辿っていく。

途中に何かマークがある、山に穴が開いてるそのマークは、勇者達が見ても何かが明確に分かった。

そう、洞窟だ。

それぞれの思いを胸に抱いて、ようやく小さな勇者達と守護すべき者は今、一步を踏み出した。

連結させた馬車はマダーニとミシアが、二人掛りでそれぞれの顔を見られるように幌を縛り調節してくれた。

現時点では、まるで観光気分のような勇者達である、まだ危険を感知するほどの心構えが出来ていない。

馬車がゆっくりと遠ざかっていくのを見つめていた巫女達は、やがて地平線の向こうへと消えていくとようやく中へと入る。

擦れ違つ巡拝者と礼を交わしながら、ひたすら奥を目指す。

重たい扉を開き、巫女達は神官とその周りに集まっていた者達に深々と頭を下げた。

「勇者様方、無事旅立たれました」

「ふむ、そうか」

顎の白い長い髭を擦りながら、小さく頷く老人に、無表情の巫女が一人躊躇つことなく進み出た。

「何故あのような曖昧な事を。勇者達のすべき事は決まっているでしょうに」

6人揃いし勇者の意味を、今は未だ誰も知らず (前書き)

【現時点での登場人物】

- 大石健一：2星の勇者。小学六年、三組。実と同じサッカー部。
門脇実：1星の勇者。小学六年生。4組、サッカー部所属。
アサギ（田上浅葱）：4星の勇者。主人公。絶世の美少女。小学六年生。1組
中川大樹：3星の勇者。朋玄と友紀と同じクラス、小学六年、2組。
松浦友紀：1星の勇者。主人公の親友、美少女。小学六年、2組。
松下朋玄：4星の勇者。実の幼馴染、小学六年生。2組。
田上友則：主人公の弟。小学四年生。
田上久志：主人公の末弟。小学一年生。
三河亮：浅葱の幼馴染、小学六年、1組。
サマルト：2星の亡国の王子
ムーン：2星の亡国の王女
アーサー：3星からの使者。イケメンだが気障。
マダーニ：4星からの使者、美女。
ミシア：4星からの使者、マダーニの妹。
ライアン：4星からの使者
アリナ：4星からの使者
ブジャタ：4星からの使者、ごく高齢。
クラフト：4星からの使者。

ハイ・ラウ・シュリップ・アサギを見ていた2星の魔王
テンザ：ハイの部下

ミラボー：3星の魔王

6人揃いし勇者の意味を、今は未だ誰も知らず

低く溜息を吐き、老人は困ったような顔を見せ、返答した。

「はつきりと、『魔王を殺せ』と言ったほうがよかつただろうか？
しかし、解決策はそれだけではないのも確かじゃろう？ 方法はあるのだ、しかし、それはあの小さな勇者らが決めること。自らの意思で選択し、出した答えに向かうか向かわないかは、彼ら次第」
「お言葉ですが、私にはあの子供らが勇者には思えませんでしたが、石を所持していたからこそ、そう思うより他なかつただけのこと。全く、力の欠片すら見えませんでした。……一人を除いて」

一人、その単語を聞き、周りがざわめく。

鋭い視線を投げかけた老人、しかし何も口にはしない。

淡々と表情を、口調を変えることなく巫女は言葉を紡いだ。

「ですが、私にはその子の『力の欠片』が勇者のものであるのかどうか、判別が出来ませんでした」

更にざわめきは大きくなる、眉を顰めてその巫女を皆が指差した。老人が片手を掲げ、その場の騒音を鎮める、困惑気味に咳き込みながら老人は口を開いた。

「あの石は、クレロ神とエアリー神の意思。我ら人間には到底解り得ぬことじゃろうよ。あの子供達が内に秘めた想いをどう表しているかが楽しみじゃ。」

預言書通り、勇者は6人であつたしのお。”4つ”の星を合わせたの勇者が……”6人”……”

老人は最後のほうだけ声を微かに、そのまま小さく笑いながら去っていく。

再び広がるざわめき、今の言葉は、あまりにもその場に居た者たちにとって衝撃的であった。

そう、勇者は6人現われたのだ。

1星ネロから2人、2星ハンニバルから1人、3星チユザーレから1人、そして4星クレオから2人。

「そういえば……何故6人なの？」

1人の巫女が全員の疑問を口にし、音として空気へと伝える。

そう、4人でも、8人でもなく、何故か6人。

互いに顔を見合わせながら、不安げに小声で会話をする。

勇者が現われたというのに、未来は明るいはずなのに。

何故かしら……突如空に浮かんだ不幸の星に照らされるかのよう
に、ゆっくりじんわりと、心に暗雲が立ち込めていく。

4星クレオには、二つの勇者の神器が存在する事など百も承知。

「まさか、2人が死……」

言いかけて1人の巫女が慌てて自身の口を塞ぎ、肩を竦める。

縁起でもないことを、隣に居た巫女がきつめの口調で顔も見ずに吐き捨てる。

「2人が寝返る可能性もあるわよね」

先程老人と臆することなく会話をしていたあの巫女が、そう簡単に言っただけだ。

巫女達は身体を振るわせて寄り添い、その巫女を怯えた瞳で見つめる。

それらを一瞥すると、興味なさそうにその異端の巫女は1人で部屋から出て行った。

勇者は、”6人”。

各星から1人づつ選定されるのではなく、何故か6人。

巫女達は、顔を見合わせたまま、それでも何も言葉に出来ず、ただただ沈黙を護り続ける。

1人、歩き続ける異端の巫女は、壁に描かれていた勇者の絵画を見つめて、僅かに口元を吊り上げた。

1人部屋に戻った老人は、深い溜息を吐きながら、ベッドに腰掛けると胸の前で手を組み瞳を閉じて祈った。

勇者が出現したというのに、不穏な雰囲気にも包まれてしまった神聖城クリストバル。

そんな神聖城クリストバルの様子など露知らず、勇者達一行は馬車を走らせている。

変わり行く景色、大自然の色彩を堪能しつつ、アサギと友紀はうつとりとその光景に酔いしれていた。

「何か珍しいものでも？」

不思議そうに声をかけてきたアーサーに、アサギはにこりと笑顔で返答する。

「私達の世界は、こういう場所が年々減ってきているんです。えーっと。自然がなくなってきたて……」

この世界には電柱も看板も信号も電灯もなにも、ない。自然、そのものだ。

地球にとて、未知の海域はあるのだろうが平素生活している中ではお見え出来ない。

勇者達が暮らしている地区は、そこまで都会ではないので足を伸ばせば直ぐそこに田舎の風景は広がっている。

しかし、山にしろ川にしろ、歩道があったり鉄筋の橋があったり設備されているものだ。

はしゃいでいる少女二人を眺めつつ、不意にアーサーは低く唸って腕を組む。

そういえば、先程のアサギ達の世界は、空気が異様に汚れていたと。

そして不思議な建物が聳え立ち、鉄格子のような網が張り巡らせていた場所に、アサギ達は居た。

決して新しいとは言えない校舎、敷地内は金網で包囲されており、確かにアーサーから見ればまるで囚人を入れておくための要塞のよう。

それが当たり前の世界にいるアサギ達には、連想しがたいイメージだったが。

ふと、アーサーは勇者達の生い立ちが気になり始めたのだ。

途中適当に食事を取り、馬を休ませるために小川を探し、束の間の休息を取りつつ一行はようやくここへ来て自己紹介を始めることにした。

アサギと友紀のはしゃぎ振りを見て気が引けていたらしく、こうして自己紹介を伸ばしていたのだった。

「そろそろ、お互いの事を深く話しましょうか？　まずは、勇者ちゃん達よろしく」

マダーニが拍手しながら勇者達を見つめる。

その視線に他の者も興味深々で、顔を赤らめて縮こまる勇者達を見た。

それでも1人、意を決し息を大きく吸い込んで、アサギは軽くお辞儀をする。

「どうやらアサギが最初に自己紹介を始めるようだ。」

「えっと、アサギといいます。石の色が翠なので、4星クレオの勇者みたいです。宜しくお願いします」

勇者の疑問

お辞儀をして、明るい笑顔。

一行は拍手でそれを褒め称えた、実に子供らしく素直な自己紹介である。

まあ、勇者の要で間違いないわよね、この子が。

マダーニは拍手をしながら、薄らと微笑んでアサギを見つめていた。

応対が他の勇者に比べて適切で速い、肝が据わっているし状況把握も完璧なようだった。

知りたいのは現時点での戦闘能力である、それによって教える科目が異なる。

「歳は？」

アリナが口を開き、にっこりとアサギに微笑む。

「えっと、今11歳です。来年の1月11日で12歳です」

「若いなーっ、ボク、アリナ。君みたいな可愛い子と旅が出来てうれしーよ。ボクが全力で護るから、よろしくね。マダーニ、この子にはボクが専属でつくよ」

四つんばいで馬車を移動し、アサギの目の前まで移動してくると頭を撫でた。

それはもう、過剰に。

困ったような顔でアサギは大人しく撫でられていた、まあ確かにどう対応してよいやらわからない。

「あは、近くで見たほうがボク好みで可愛いやー」

と嬉しそうに呟きながら、アリナはアサギの頭部から腕に脚、太腿を触りまくっている。

「……あのさ、アリナ。あんまり大事な勇者ちゃんに手を出さないでね?」

「だいじょーぶだよん。女同士の絆を深める大事な大事な愛撫だから」

「あ、愛撫!」

マダーニに腕を引っ張られ、アリナは不服そうに唸りながらも、アサギに流し目しつつ片目を瞑った。

乾いた笑い声で、手を振ってみるアサギ。

「気をつけて、アサギちゃん。アリナのストライクゾーンみたいだから」

「えーと、どう気をつければ」

「決して一人にならないで。……喰われるわよ」

「!?!? 喰われてしまいますか?」

喰われる、の意味をアサギはイマイチ把握していない。

悪びれた様子もなく、アサギを視姦しつつ、にこやかに手を振るアリナ。

彼女、同性愛者だった。

「さ、自己紹介を再開しましょ。お次は?」

「あ、じゃあ俺が。俺は朋玄。アサギと同じで4星クレオの勇者らしいです。現在11歳。預かった大事なこの剣に相応しい勇者になるうと思います」

「トモハル君、ね。了解。ところで、勇者ちゃん達は全員顔見知り

なわけ？」

「あ、そうです。友達です」

先頭で馬車を操作していたライアンが何か叫んでいたので、サマルトが代わりに言葉を挟んだ。

「ライアンさんが、トモハルの剣の名前が『セントガーディアン』っていうって叫んでるよ」

セントガーディアン、判明した名を誇らしげに呟きトモハルは徐に剣を取り出すと、そっと引き抜いて輝きを見つめた。

そういえば名前は神聖城で聞いていなかったのだ、ようやく自身の武器の名が発覚し、興奮度が増す。

「アサギの武器の名前は何だろうな？ 俺と対だし、似た名前の武器かもね」

「そうだね。楽しみだね」

アサギとトモハルは2人でにこやかに笑いあう、もともと生徒会でも一緒であるし、気が知れているのだ。

面白くなさそうに、実1人が舌打ちする。

サマルトが再びライアンからの伝言を聞いたようで、話に割って入った。

「そのトモハルの所持している『セントガーディアン』は、護るべき者が増えれば増えるほど、力を増していくという剣だと言い伝えられているらしい。4星クレオの勇者のみが扱ふことの出来る所謂『神器』で、他にも特殊効果があるらしい。属性は光、慣れてくると呪文発動の糧にもなるそうだ。……え？ 何？ ……このくらいしか解ってないって。後は使っていくうちに、トモハル自身がその

剣の価値を見出すしかないみたいだね」

「ライアンさん、詳しいなあ」

ぼそり、と呟いたトモハルの独り言に、ライアンが叫んだ。

この言葉はサマルトを介さなくても、皆に届いた。

「オレは一応元騎士なんだ、趣味でそういった武器の事を調べた時期もあったんだよ」

元、というところが気になったが、あえて皆口には出さない。

マダーニが視線を移す、次は。

「私、友紀といます。アサギちゃんとは親友です。1星の勇者みたいです、よ、宜しくお願いします」

聞こえないような小さな声で、顔を赤らめながらアサギの服にしがみ付き、そう友紀は告げる。

勇者というよりは、囚われの姫役のほうが似合っている気もするのだが、石に選ばれたのだし彼女にも秘めたる力があるに違いない。震えている友紀に、多少の不安を覚える一行。

「ユキちゃん、ね。了解。じゃあ次は同じ1星の勇者ちゃん、よろしくね」

マダーニが実に視線をうつしたので、全員そちらを見つめた。不機嫌そうに、腕を組みながら、暫しの沈黙後、語りだす。

「実。……よろしく」

それだけであった、シンプルな自己紹介である。

不穏な空気を読み取り、慌ててトモハルがフォローに入る。

「俺の幼馴染で、ええと、口が悪いんだ。態度も悪いけれど、強がりだけは一人前で」

「うるせえっ！」

「えー、ホントのことだろ」

「お前はイチイチ、口を出すなっ」

馬車の中で片膝立てて、言い争う2人を見つつ、解ったことは「この2人の仲が悪い」ということだった。

仲が悪いのか、反して仲が良いのか。

一緒に勉強させないほうが良いのか、それとも刺激させるために敢えて一緒に勉強させるべきか……マダーニは2人を眉間にしわ寄せで見つめる。

言い争う2人を尻目に、淡々と語りだしたのは大樹である。

「3星の……チュザーレ？ ……の、勇者らしい大樹です。どうぞよろしく」

困惑気味にそれでも落ち着きながら語りだした、大樹。

「よろしくね、ダイキ君。君が一番大人びてる感じね。……みんなと同年よね？」

「あ、はい。歳は一緒ですね。まあ、良く大人っぽいとは言われません。そう言われるのが苦手ですけど」

身体つきもだが、口調が浮ついた感じがしない為、他の勇者よりも二、三歳ほど年上に見えた。

「最後は僕かな。健一です、よろしく。2星ハンニバルの勇者です」

ダイキの影から顔を出して、にっこり笑う健一、人懐っこそうだ。

「はい、よろしくケンイチ君。君はなんだかすばしっこそうだね」

「うん、足なら自信があるよ。サッカー部だから」

「……さっかー？」

「あ、そうか、この世界にはサッカーないんだ」

ケンイチは困ってトモハルに助けを求めた、トモハルとミノルもサッカー部である。

「えーっと、二つのチームに分かれて、ボールを蹴りあいながら敵のゴールまで運ぶゲーム……みたいな感じ？」

サッカーを説明しろ、なんて言われたことがなかったので、トモハルは首を捻りながらなんとか説明を形にする。

勇者達も、首を傾げながら個々に賛同。

苦笑いしつつ、マダーニがそれを制する。

「そのうち、実演してみてちょうだい。さ、勇者ちゃん達の自己紹介は終わりね。軽くまとめるわよ？」

勇者ちゃんたちは、みんなお友達。お友達ならば助け合い、励ましあいながらこれから頑張っていけるわよね。

1 星ネ口の勇者が2人で、ミノルちゃんと、ユキちゃん。

2 星ハンニバルの勇者が、ケンイチ君。

3 星チュザーレの勇者が、ダイキ君。

4 星クレオの勇者が2人で、アサギちゃんと、トモハル君。

さあ、何か質問のある人いるかしら？」

見渡しながらマダーニが全員の顔を探るように、瞳を光らせてい

る。

暫　しの沈黙の後、控えめにアサギが手を上げた。

「ひとつ、気になっていたんですけどいいですか？」

表情が曇り、困惑気味に、マダーニを見つめる。

マダーニは優しく頷いた、質問が上がるということは、話を真剣に聞いて理解した証拠でもある。

質問してくるのならこの子だろうな、と思っていたのでマダーニは大して驚かなかった。

「どうぞ、アサギちゃん」

「あの。……1星ネロの人はいないんですね、ここに」

そう、誰しもが思っていた事だった。

「2、3、4星の人はこうしてやってきて、今一緒にいますよね。1星の人は？　来ていないのに何故石が存在して、勇者が2人も居るんですか？」

「ソレを言うなら、どうして2、3星は勇者が1人なのか、も気になるな」

「うん、私もそう思ったの。やっぱりトモハルとは気が合うね」

仲間達の各々の事情

マダーニとて、それは薄々思っていたことだ、しかし考えても解らなかった、解るわけがなかった。

苦笑い、小さく溜息、困ったように妹のミシアを見つめたが、俯いたままのミシア。

アサギが再度口を開く。

「2星からはムーンさんと、サマルトさん。3星からはアーサーさん。4星からはマダーニさん達。1星は勇者がもう必要ないから来なかった、とかでしょうか。それならそれでよいと思います」

「……それは違うはね。1星の魔王も4星に来てはいるらしいから。魔王の手中に入ってしまったって身動きが取れない、と考える方が自然かも。」

で、石なんだけど、『世界が混沌の危機に陥った時、伝説の勇者が石に選ばれ世界に光をもたらす』って言い伝えがあるのね。

それから解る様に1星にも危機が迫っているだろうし、石は多分何処にあると、勇者を発見したら反応して飛んでくるのだと思うわ。憶測だけどね。

それから、何故勇者が中途半端に6人なのかっていうのは……私にも解らないわね。4星クレオの勇者は代々男女一人っていう言い伝えなら何かの本で読んだことがあるかな」

マダーニは皆の表情を伺うが、それ以上の回答は出ない様子である。

「実際、私はクレオ以外の星の住人に会うのは初めてだし」

「……私は以前ムーン殿、サマルト殿にもお会いしておりますね。ハンニバルとチュザーレは古来より交流があったと聞いております。」

まあ、魔王が活発に動いていない時でしたが。

2星の魔王ハイが突如現れたのが約10年ほど前でしたかねえ……。

それでネロの話ですが。魔王が現れるより以前に、勇者が存在していた地ですね。ですがその勇者は魔王リュウによって破れ、彼の愛する姫君も亡くなられたと聞いております。主要国は『カエサル』。今から何百年も前の話です。以上の点を踏まえまして私の勝手な憶測でしかありませんが……今回二人現れた勇者と言うのは、過去において魔王に敗れた勇者と、その姫君の生まれ変わりなのかもしれません。姫君は常に勇者に寄り添い、共に励ましていたと聞いています」

アーサーが口を開いた、特に感情を込めずに淡々と語りだしたが内容はあまりにも衝撃的である。

勇者全員が声を揃えて素っ頓狂に叫んだが、それもそのはずだ。

「え、今なんて言った!? 勇者が亡くなっただって!?!」

ミノルが立ち上がりアーサーに掴みかかるうとする、それをトモハルが制した。

全員動揺したが、一番大きく動揺したのは他でもないミノルだろう、1星ネロの勇者は現在ミノルとユキなのだから。

「勇者が死ぬなんて聞いたことないっ! 何とかなるんじゃないのか!?!」

「勇者は人間です、人間は何れ死にます。死なない保障は何処にもありません」

「はー!? 俺は帰るっ! 今すぐ地球に帰るっ! 冗談じゃないっ」

青褪めた後に憤慨して真っ赤になったミノルは、ダイキとケンイチに宥められつつも、必死にアーサーに掴みかかっていた。

手に取るように解るミノルの行動、後悔の波、落ち込む代わりに他人に当り散らす……トモハルは溜息を吐く。

しかし、ミノルの感情が普通だろう。

そんな話を聞かされて、どうして平常心を保っていられるだろうか。

「あの、確認しますね。ネロの魔王が『リュウ』で、ハンニバルの魔王が『ハイ・ラウ・シュリップ』、チュザーレの魔王が『ミラボ』で、ええとクレオの魔王は？」

アサギが小声でマダーニに詰め寄って聞いた、トモハルとユキが密かに聞き耳を立てる。

「魔王アレク。高貴なる魔族の長、風の噂によると美形の男らしいわよ。噂では、ね」

すんなりとアサギの問いに返答するマダーニ、口元は勝気に微笑んでいた。

教えたわけでもないのに、会話から魔王の名を記憶し完璧に把握している。

積極的に話に加わるのは、最初に選ばれた責任感からなのか、それとも。

マダーニはユキとトモハルと三人で会話を始めたアサギを、探るように見つめ続ける。

この三人は頭の回転が良さそうだった、そして非常に前向きだ。

「俺とアサギの敵がアレク、って男なわけだ」

「そうだね。どんな人だろうね」

「あ、アサギちゃん。私の敵はリュウって人だよ。怖いかなあ」
敵について語り始めた3人と、暴れるミノルを必死で押さえつけているダイキ、ケンイチ。
ミノルは恨めしそうに唇を噛み締めながら、元凶になったアサギを睨みつけていた。

「もつと他に情報ないの？ 仲間の事も知りたいしさ」

トモハルがマダーニにそう告げる、どうやら勇者間では考えるのが限界に達したらしい。

照れくさそうにマダーニは、トモハルの頭を撫でた。

「じゃあ、折角なので私達から話しましょうか。私はマダーニ、そしてミシアが妹」

しなやかに流れる紫の髪を軽く掻き揚げながら、マダーニはそつと瞳を閉じる。

「辛気臭い話でごめんね」

マダーニとミシア、二人は当然ここ、4星クレオに存在する二番目に大きな都市ドウルモで生活していた。

確か産まれは違うのだが、物心ついていなかった為記憶がない。父はおらず、母と2人姉妹の3人暮らし、父の話は母から聞いた記憶もなく生きているのか死んでいるのか、詳細は不明のままだった。

母は娘達から見ても自慢の美人で明るく、逞しい人だった。

少々乱暴な物言いで、近所の同じ年頃の娘を持つお堅い母親達は、そんな自由奔放な母の事を悪く言っていたようだが、それが姉妹に

は滑稽に思えた。

きつと羨ましいのだ、自分達には出来ないことだから、皮肉を言っているだけだろう。

人間は自分自身の負けを素直に認められない生き物だということを、微かに感じ取る。

そんな母の職業はなんだったかというのと、踊り子なのか歌い手なのか、はたまた傭兵なのか占い師なのか、多彩な能力を持つ不思議な人だった。

数多の顔を持つ母親に憧れ、姉妹は揃って羨望した。

故に自分達も将来はそうなるべく、母親の真似をすることにしたのである。

マダーニは踊りながら歌を、ミシアは占いを憶え始める。

せめて二人で一つの、二人揃えば母と同等の事が出来るようになるうと、それぞれ違う事を憶え始めた。

姉妹でありながら、まるで双子のように顔の作りが似た二人は自分達の役柄を分担し始める。

姉のマダーニが派手で豪快、大雑把な盛り上げ役を。

妹のミシアが清楚で神秘的、御淑やかな癒し役を。

幸い最高の先生は母親なのだから、厳しく辛く、それでも全力で教える母に、必死で二人ともついていった。

今覚えばその時何故母が『傭兵』までもやっていたのか、疑問に思っべきだった。

家計が苦しいわけではない、呪文が使えたのも、剣が使いこなせられたのも、全てはある目的の為であったのだが、そんなこと姉妹は知らなかった。

母の七光りで舞台に立ったマダーニも、天性の度胸、持ち前の愛嬌、そして母譲りの豊満な身体つきに、男性客を虜にする。

母と違って野生的で粗野な部分もあるが、それがまた彼女の魅力となる。

同じ踊り手は、2人といらない。

ミシアのほうも、そこそこ仕事は上場で持ち前の器用さから、服の仕立て屋を開いたり、家計をやりくりし、家族3人で満足な生活をしていたのである。

そんな生活が崩れたのが約1年前のこと。

新年を向かえ、世間が騒ぎたち、人々が裕福な時期。

連日の疲れから、ミシアがマダーニよりも先に心身ともに疲れ果てて自宅へ帰宅した。

月が雲隠れをし、露天の店では明かりが足りずに満足に占いができなくなった為、多少早目に切り上げたその日。

疲れた身体に鞭打って、ミシアは3人で購入した高級茶を煎れた、1人で暖かな茶を啜る。

「マダーニ姉さんは朝方帰宅だろうから……母さんは今日は何やってるのかしら。そういえば予定を聞いてなかった」

姉妹が立派に成長したので、母は最近は家事に精を出していたはずだが、今日に限って家にいない。

古くからの友人と呑みに行っているのだろうか？

近所の子供に魔法の指導もしていたけれど、こんな夜分遅くまでそんなことはしないだろう。

ミシアは急に焦りを感じて、席を立った、母親の部屋の前へと歩く。

……ドアが微かに開いたままだった。

几帳面な母は、決してドアを開いて出掛けることはない、ので、もしかして帰宅していたのだろうか、とミシアは首を傾げた。

いや、帰宅していたとしても、部屋の中にいるのならドアが閉まっているはずだ。

部屋の中から微かな光の漏れ、ミシアは乾いた唇を舌で湿らせた。

「誰？ 誰かいるの？」

緊張し、震える手でそつち近づくとミシアは右手で壁に立てかけてあつた箒を手にし、勢い良くドアを開く。

両の手で箒を硬く握り締めて振りかぶるが、中には何も無い、誰もいない。

消えかけの蝋燭が、不気味に揺らめいている。

安堵したのも束の間、ミシアは机の上の光る球体……水晶球に釘付けになった。

眩暈がする、足が竦む、なぜならば母は絶対に水晶球を置いて出掛けたりはしない。

急速に顔が青褪めるのがわかった、別のものがミシアの視界に入る。

水晶の隣にタロットカード、きちんと重ねられていたそれを見つめ、啞然とミシアはその場に座り込んだ。

間違いない、おかしい、異常な光景だ。

ミシアは震える足で立ち上がると何か手がかりを掴むべく、部屋を搜索する。

ミシアの胸に渦巻く小さな黒い影が、焦りとともに広がっていく。逸る気持ちで机の引き出しを盛大に引き抜き、引っ掻き回し、クローゼットを開いた。

「ない」

母の傭兵時の戦闘服が、一式丸々存在しない。

防具と、紫水晶が先端に施された杖がない。

誰かに仕事を依頼されたのか？ いや、そんな話は聞いてないし、何よりあの机の上の水晶とタロットカードは何だ。

ミシアは水晶とタロットを抱き締めて、姉を捜しに街へと飛び出した。

何処にいるか分からなかった、それでも行きそうな酒場を渡り歩

いて姉の姿を追いかける。

「マダーニ姉さんっ」

「ミシア！？ どしたの、その格好」

部屋履きのまま息を切らせて走ってきた妹の姿を視界に入れるなり、マダーニは手にしていたワイングラスを乱暴にテーブルに置くと、共に飲んでいた仲間に会釈を軽くし、輪を抜ける。

後ろから悲痛な仲間達の声が聞こえてきたが、それどころではなさそうだった。

あの妹の、こんな姿を見ては一大事にしか取れない。

姉妹揃って無言で自宅へ帰り、母の部屋へと。

「母さんの傭兵時の服がないの。それから、机の上に水晶とタロット」

怯えて微かに涙交じりの声の妹に代わり、マダーニが家の中を捜索した、誰か来た形跡はないのか。

母の部屋からは、何も見つからなかった。

「落ち着いて考えよう。ここ最近何か母さんに変わったことあった？」

「私、占ってみようと思うの母さんの行方。落ち着いてきたし、なんとか占えそうだから」

「よし、無理ない程度にね。私は思い出してみるからさ」

ミシアはマダーニに御茶を煎れ、そのまま自室に消えた。

頂垂れつつマダーニは茶を啜る、瞳を閉じて天井へと顔を向けた。

「朝、母さんに『いつてらっしやい』と声をかけられた。そう、身

体を壊さないようにね、って言われた。昨日、近所の人に魔法を教
えてた。一昨日、一昨日……そういえば、手紙が来てた……？」

椅子を倒して勢い良く母の部屋へと戻り、隈なく手紙を探す。
が、案の定何の収穫もないまま再び部屋を後にすると、茶を啜っ
た。

すっかり冷え切ってしまった、不味い。

「姉さん、出たわ。水晶から、母さんが知らない男の人と会話して
る姿が見えたの。タロットからは『過去の過ち、愚かな行動』なん
て意味が出てるんだけど……」

「その男の顔、憶えてな。絶対後で役に立つ」

自室から出てきたミシアの占い結果、それを聞いてから2人は向
かい合って椅子に座り頂垂れる。

唇を噛み締めて2人は、その場で浅い眠りについた。

朝方、名前を呼ぶ声が聞こえたので、2人はぼんやりと起き上
がる。

ドアを叩く音、2人は慌てて立ち上がると勢い良くドアを開く。

「ああ、よかつた留守かと」

黒い服を着た数人の男達に眉を顰める姉妹、一礼をして男達は何
かを運んできた。

母が、戻ってきたのだ、死体となって。

旅の商人が道中で見つけ、顔の広い母を知っていた為にこうして
届けられたらしい。

「何処で母を？」

「シポラからの途中の道端に、うつ伏せで倒れていたそうですが」

質問しながら、マダーニはミシアに例の男はこの中にいるかどうかを探らせる、が、ミシアは小さく首を横に振った。

火葬の儀が伝わっているこの地では、遺体を街の一角へと運び香草、木の実、遺品を亡骸の周りに敷き詰めて一気に焼く。

燃え上がる炎を見つめながら二人の姉妹は、手を握り締める。

一瞬、妹の瞳が大きく見開かれたのをマダーニは見逃さなかった。天へと上る火と煙、姉妹は別れの唄を紡ぐ。

姉妹は静まり返った自宅へと戻ったが、お茶を煎れる気にもならずぼんやりと虚無の瞳で天井を見つめる。

やがてミシアが力なく立ち上がり、自室へと引きこもったが、声をかけることもできずその動作を目で追うばかり。

自分も部屋へと戻ろうか、そう情けなく呟いてマダーニが椅子を引いた時、微かな音と共にミシアが部屋から出てきて徐に紙を差し出した。

怪訝にそれを受け取る。

『シャルマ・ドライ・レイジ殿

お久しぶりで御座います、お元気だと便りで伺っております。

さて、今回はお願いがありました。こうして連絡を取らせていただきました。そろそろ返していただきたいのです、もともとアレは私達の主人のものでしてあなたの所有物ではありません。

何かと言いたい事もあるでしょうから、二日後村の外れの墓地にてお待ちいたしております』

「……………ミシア、何これ？」

震える手で読み終えたマダーニは、乾いた声を出した。

シャルマとは、母の名だ。

「母さんからさっきこれを受け取ったの、言霊として。それを文面
にしてみたのだけど」

「この間来てた手紙の内容、かな」

「あともう一つ。……勇者様を捜して共に居なさい、って」

ミシアが困惑気味にそう吐き出す。

マダーニとて、瞳を白黒させてすっとんきょうな声を上げた。

「大掛かりな話しになってきたね。勇者？ 伝説の？ なんでまた
？」

「母さんがそう言ったの、だから、私は行くわよ」

「いや、私も行くけどさ……。勇者様って、何処にいるのさ」

そんな事、誰も知らない。

引き攣った表情で、ミシアは慌しく旅の準備を始める。

「勇者は石に選ばれし者、まず最初に『神聖城クリストバル』へ訪
れると言われてるの。だからそこへ行きましょう」

「よしっ。早速行動を開始しようか！」

2人は溜め込んだ金を全額懐に仕舞い込み、家の鍵を閉めて旅立
ちの用意をする。

控え目に旅の馬車の待合室で、ミシアがマダーニの服を引っ張っ
た。

何か言いたいことがあるらしい、言葉を飲み込むべきか、吐き出
すべきか困惑気味な様子だ。

優しくマダーニはミシアの髪を撫でる。

「言うてごらん。2人で共有しようよ。今度の秘密は何？」

「母さんは、父さんを助けに行ったらしいの。生きてるみたい」

「じゃ、父さん捜さないかね。ほら、辛気臭い顔しない、前を向いていきまっしょいっ」

長い旅路を得て、ようやく姉妹は神聖城クリストバルへと到着した。

そこで初めて先に同じように勇者と出会うべく、そこに立ち寄っていたライアン、アリナ、クラフト、ブジャタの4人に会ったのだという。

「で、現在に至る、と。ごめんね、暗くってさー。あ、気は遣わなくていいからね、遣われると困るし」

どう声をかけてよいか分からずに沈黙したままの一同に、マダーニアがあはは、と大声で笑った。

「私達は。父さんの居所と母さんの死の真相が知りたいです。

それから手紙に書かれていた『返すもの』ですが、全く心当たりがなくて」

「まあ、あれだよな。勇者と共にってことは、なんだ、うちの追っているものは魔王の手先である可能性もあるよね」

深い溜息を吐くミシア、爪を噛むマダーニ。

マダーニは視線をアリナに移した、きよとん、と首を傾げてアリナは隣に座り込んでいたクラフトを突く。

「どうやら代わりに説明しろ、ということらしい。

クラフトは頂垂れながら、軽くお辞儀をした。

「えー……あまり人と話すことが得意ではありませんが……ご了承を。我々は」

話し始めてから、急にアリナがクラフトを勢い良く引つ張る。
「はっ、と小さく叫んでクラフトは後ろに転がった。」

「やっぱ、ボクが話すー。えっと、ボクがアリナね。で、これがクラフト、ボクの幼馴染。で、ブジャタが保護者。よろしく。他、話すこと何もなしっ」

自身の事を明らかにしたくないのだろうか、あまりにも簡単すぎる自己紹介だった。

え、それだけ？ とトモハルが呟く。

頭を掻きながら、再度アリナが口を開いた。

「あー、ボクが打撃系の戦闘家で、クラフトが回復呪文を得意とする男で、ブジャタが攻撃補助呪文が得意なじーちゃん。悪いけどこの中で一番強いのはボクだと思っんだ」

「で、アリナさんは何故勇者を捜してたわけ？」

トモハルの突っ込みに、アリナがたじろぐ。

言葉は男言葉だが、声は綺麗な女性の声のアリナ。

髪とて荒れているが、手入れすれば艶やかな色合いになりそうなのに。

衣服も男物である、非常に愛らしい顔立ちをしているのに勿体無い。

「……そうストレートに聞かれると困るんだー。暇潰しっていうか、退屈しのぎっていうか、面白いこと捜してたらさ、こうなっちゃったんだよね」

「なんですか、その言い草はっ」

苛立ちながら聞いていたムーンが、アリナの胸座を掴みかかる勢

いで馬車の中で立ち上がる。

それもそうだろう、ムーンは故郷を滅ぼされ、魔王を倒すべく勇者を捜していたのだから。

安易なただの気まぐれで共にしているアリナに、嫌悪感を覚えても仕方がない。

「あー、ごめんごめん。勘に触ったのなら謝るよ」

長くふわふわな亜麻色の髪を無造作に掻きあげ、情熱的な真紅の瞳で、申し訳なさそうにムーンに謝るアリナ。

後方でクラフトとブジャタが平謝りをしている。

「じゃ、ボクの好きなものでも。可愛い女の子と、同等に戦ってくれる男、かな」

言うなりアサギのほうを向いて、嬉しそうに手を振るアリナ。

こんないい加減な人と旅をしなきゃいけないなんてっ、と憤慨しながらぶつぶつ小声で身体を震わせるムーンに、サマルトが宿めに入った。

「ライアンは、軍国ジョリロシヤの宮廷騎士団第二部隊隊長、だったらしいわ」

馬車を操っているライアンに代わり、マダーニが紹介を始める。

「その地位を捨てて、勇者を捜してここへ来たみたいね」

マダーニの説明を聞いて、大きく頷くライアン、何故そのような行動に出たのかはマダーニも知らない。

まあ、話したところでもどうにもならないしな、とライアンが零し

たのをサマルトが聞き取った。

彼にも何か事情があるようだったので、それ以上詮索しなかった。どうやら一通り4星クレオの者達の紹介が終わったので、アーサーが軽く周りを見渡しながら右手を上げた。

「では、次は私が。まずは3星チュザールの現状をお伝えしましょう。見た限り、聞いた限り。クレオは安全で羨ましく思いますね、本当に魔王の侵略を受けているのかすら疑問です」

口調に微かな怒気が含まれていたのを、大体の人間が感じ取った、がアーサーの立場を尊重し言葉を飲み込む。

「チュザールの魔王の名はミラボー。闇の奥底欲望渦巻く破壊と混沌の邪悪なモノ、大の男でもその姿に恐怖に怯える……そんなモノに支配されつつあります、チュザールは、ね」

アーサーはもともと、王朝に使えてきた家系の産まれなのだが、それは魔導ではなく剣技のほうであった。

父親、兄、共に騎士である。

が、アーサーは自分の進むべき路は騎士ではなく魔導であると幼い頃から悟っており、父親の反対を受けながらも必死に勤勉に励み、異例の若さで『賢者』の称号を得た。

その称号を得たことで、父親からも騎士の道を外れたことを許されたのである。

騎士道を選択すると何かと兄と比較され、面倒でもあっただろうし、それならば違う道で共に褒め称えられたほうが何かと気分も良い、そう思っただけで必死になった。

賢者の称号は魔導学校を定められた成績で卒業し、卒業後の社会への貢献及び指示で魔導協会が認めた者に与えられる。

アーサーの場合、学校始まって以来の優秀な成績、そして卒論の

文献、禁呪の解読が認められ得ることが出来た。

随分と稀なのだが現在、アーサーと同じ歳で賢者の称号を得た少女がいた。

幼馴染のナスカである。

彼女の場合は両親が共に位の高い魔導師であったので、期待も高く、そうなる道が最初から決まっていたように思えた。

しかし、どれだけ有能な人材が生まれてこようとも、ミラボー率いる魔王軍の前には歯が立たず、それでも人間たちは懸命に戦い続ける。

やがて、ミラボーが人間たちの崇拜している、精霊神エアリーを祀っている神殿プロセインを攻め落とそうとしていることが判明し、なんとしても死守すべきだという結論に達した。

精神的に人間達を闇の底へと葬り去るつもりなのだろうか、人間たちの崇拜している神が如何に無力か思い知らせるために、魔王軍はそこを標的としたのだろう。

実際、精神的打撃を受ける人間が世界に溢れかえることも目に見えていた。

確かに、精霊神に祈りを捧げてきたとしても、全く意味を成してはいなかった。

奇跡が起こってきたわけではなく、ただ心の拠り所ではない。

それでも、阻止するべく精鋭部隊を派遣する。

無論、その中にはアーサーの顔馴染みの者も数名いた。

幼馴染のナスカを筆頭に、口喧嘩相手の武術家ココ、何処か哀愁漂う剣士リンに、滅ぼされた名も無き村の唯一の生き残りメアリ。

異性の友人がアーサーに多かったのは、ナスカと共に行動していたからだった。

同姓からはその地位や性格ゆえに、敬遠されていたのだ。

その派遣をアーサーは断固として反対していたのだが、その願いは虚しく、仲間達は城を出て行く。

それから暫くして最初の伝令が戻ってきたかと思えば、『全滅』

という内容だった。

静まり返った王宮の一室で、アーサーの声が無常に響く。

「生存者はっ」

「ですから、全滅です。恐らく」

少数で編成された伝令部隊、本体の部隊とは遠く離れて戦況を見守っていた。

幾日も続く爆音、立ち上る煙り、焼き払われる森、やがて賢者ナス力が所持していた光の玉が、空中で破裂したのと同時に、伝令部隊は諦めて引き返してきたらしい。

光の玉は『逃げる』の意味、窮地に立たされるまで使用しない筈の代物。

それが使われたという事は……言わずも。

故にアーサーは1人、勇者を捜すことを決意した。

城の者はもはや諦めつつある空気で、一人湧き上がる怒りを胸に、最終的に望みを『勇者』にかけた。

御伽噺の、勇者。

もっと早くに勇者なら駆けつけて欲しかった。

何故、勇者は自ら危機になったら現れないのか。

何故、迎えに行かなければいけないのか。

こうして、伝説は真実だと証明されたのだが、納得がいかない。

処女戦

重苦しい雰囲気、広がる。

沈黙するアーサーに、言葉をかけられる者もおらず、気まずい空気が一行を覆い尽くした。

打破したのは、マダーニだ。

「確かに、そうなのよね。どうして勇者を探しに行かなきゃいけないのかしら。勇者の器であるべき人物が、現われてもいいと思う」「はい。捜しに行くだけで時間が消費されてしまいます。まあ……今回は」

マダーニの素直に出た台詞に、アーサーもようやく軽い笑みを浮かべた。

皆、安堵の溜息を吐いて強張っていた表情が柔らかく。

アーサーは、アサギを見つめる。

視線に気付き、アサギが顔を上げれば当然視線が交差した。

「アサギに出会えて、安堵しました。アサギは間違いなく大いなる力を秘めている。確かに今はまだ小さな小さな力です。しかし、アサギ自身は気づいていないでしょうが私には解ります。本来ならば神憑りのな能力を秘めています」

「え、そうですか？」

「はい。ですから、私はアサギに出逢い、希望を持ちました。さあ、早く能力の開花を急ぎましょうか。必ず私が力になります」

困惑気味に俯くアサギに、アーサーはひたすら優しく微笑み続ける。

……ただ単に自分好みの女の子だからじゃないのか、コイツ。

と、数人が思ったのだがあえて誰も口にしなかった。苦笑いしつつも、確かにそろそろ魔法の練習を始めておいたほうが良さそうだ。

マダーニは先程受け取った魔道書を、それぞれ勇者達に配る。

「ええと、サマルト君とムーンちゃん。あなた達の自己紹介は……」
「手短に話すと、オレの城以外はハンニバルも壊滅状態。ハイがこちらの星に来ているのなら、少しは時間稼ぎが出来るな。シーザー城王子・サマルトと」

サマルトの発言が終わると同時に、隣に居たムーンが、優雅に会釈する。

「ジャンヌ城王女。ムーンです。よろしくお願いいたします。真空の魔法及び攻撃補助、回復魔法が得意です」

2人は揃って頭を下げる、王子だろうが王女だろうが、この際関係ない。

「ムーンちゃんはかなりの魔法の達人っばいわよね。さ、勇者ちゃん達に担当をつけるわね」

魔道書を物珍しそうに眺めている勇者達を一瞥し、マダーニは師匠となるべく人物達に目を移した。

把握できた魔法が扱える人物の人数と、勇者の人数。

マダーニは直様、自分の考えをまとめ始めた。

思案中のマダーニに元気良く、悪びれない声が発せられる。アリナだ。

「あー、マダーニ、マダーニ、ボク、アサギの組み手相手でヨロシ

ク。主に寝技の」

「……ちよつと黙って」

流石に頬をひくつかせ、マダーニはこめかみを押さえて低く呻いた。

まとまっていた考えが、今の発言により若干乱れてしまった。

ちえー、と、不貞腐れて腹いせにクラフトに殴りかかるアリナ。

とばつちりを受けたクラフトは、非常に気の毒である。

気を取り直し、咳を一つマダーニは皆の顔を見渡した。

「ミノルちゃんには、サマルト君」

うげー、と、双方から声上がり、一発触発お互い反発しあったまま隣同士になる。

2人とも青筋立てながら、魔道書を開いた。

気が合わないのは百も承知、だが、勤勉が苦手そうなミノルに、

窮屈そうな魔法スペシャリストをつけても伸びないだろう、とマダ

ーニの判断。

鋭い視察だ、確かにミノルにブジャタやミシアがつこつものならば、窮屈すぎてすぐに投げ出すだろう。

「ユキちゃんには、ムーンちゃん」

よろしくね、よろしくお願いします、と穏やかな2人の挨拶。

ローペースの2人は、仲良く魔道書を開いた。

ここは、問題なく進むだろう。

最も相性の良い二人になれそうな気がするので、マダーニは問題視していない。

「ケンイチ君にはクラフトで」

穏やかに微笑んで近寄ってきたクラフトに、緊張気味にケンイチはお辞儀をした。

慌てふためきながら、ケンイチは魔道書を開いた。

素直そうなケンイチに、自己主張が苦手そうなクラフトならば、
ここも上手く進むだろう。

「ダイキ君にミシアで」

優しく微笑んで近寄ってきたミシアに、戸惑い気味にダイキは会釈をした。

並んで魔道書を開いた、年上の美貌の女性に若干戸惑っているダイキだが、ここも問題はないだろう。

「トモハル君には、ブジャタかしらね」

ブジャタが高齢の為、気を利かせてトモハルが移動した。

丁寧にお辞儀を述べ、魔道書を開き、早速読みふける。

ここも、非常に期待が高い。

「で、アサギちゃんが私ね。よろしく」

「はい、よろしくお願ひします」

そして、アサギ。

勇者の要であろうアサギの教育を、マダーニはしてみたかった。

現時点での力量を、定めておきたかった。

意気込んで魔道書を開いたアサギ、満足そうにゆっくりとマダー

ニは微笑む。

アサギに教える前に、マダーニは手を叩いて注目を集め、意図を語る。

「現状では、勇者ちゃん達はあまりに無力。各自戦闘に入ったら担当の勇者を全力で護って。最悪身代わり。他の勇者の面倒はみないこと、責任持って自分の魔法を勇者に全部伝授する勢いで。」

「よいよね、それで」

「マダーニの重い言葉に、それでも一行は頷く。」

「固唾を飲む勇者達、言葉の重みは計り知れない。」

「同意を得て、マダーニは担当をつけなかったアリナとアーサー、ライアンに向き直った。」

「そちらは馬車操作をよろしく。各自、どんな時も全力で」

「アーサーの英知は惜しいが、馬車操作に力を注いで貰いたかったのであえて外した。」

「それが行動の合図だった、一斉に各々やるべきことを始める。」

「馬車の中で魔道書を読み、最初の戦闘でどれだけ使いこなす事が出来るか魔法を使わせてみる予定だった。」

「初歩の魔法は身を護るのに役に立つ、剣の練習が馬車の中では出来ないのも、今は魔法が優先だ。」

「無論電気がないので暗くなったら就寝になる、代わりに早朝は地球では起きることのなかった時間に起きて、再び魔道書に没頭した。」

「洞窟までは馬車だと二日ほどでしたかのう。洞窟を抜けてからも結界が張ってあるのじゃ、最初の戦闘はまだ先じゃよ。慌てずとも良い」

「ブジャタにそう言われ、戦闘に何時遭遇するか気が気でない勇者達はぎこちなく頷く。」

「異世界へ来てから、二日目の朝の光景である。」

馬車の揺れで昨晩は上手く寝られず、些か勇者達は寝不足気味であり、塩辛い干し肉にビスケットに水が毎食。

非常に、ストレスが溜まっていた。

日本には、食事が手を伸ばせば届く位置にある。

家で冷蔵庫を開けば、何かが入っている。

冷凍庫にはレンジで解凍し直様戴けるレトルト物があり、徒歩で、自転車で進めばコンビニやスーパー。

カフェも点在し、デパートにはフードコート。

食に悩んだことなど、一度たりともない現代っ子の勇者達である。食べたいものを、いつでも好きなときに食べることが出来た。

最初の食事はよかったのだ、無添加の干し肉にビスケット、そして天然水の美味さに皆感動である。

だが、こう連続で食べても嫌気が差した。

食事でありつける幸せなど、勇者達はまだ、判らない。

しかし、勇者達の苛立ちを見かねて二日昼前、馬車を降り剣の練習にも励む事にした。

適度な運動でストレスを発散し、勇者を飽きさせない為に。

ただ、ここへ来て明確に差が出てしまった。

勇者の要と推測されたアサギは二日目の昼過ぎ、予想通りに火炎呪文の初歩を習得、立て続けに氷水呪文、電雷呪文、爆発呪文、真空呪文を一気に成功させた。

啞然と見守る勇者はもちろん、一行。

まさかここまで幅広い属性の魔法を覚えてしまつとは、と絶句である。

人には得手不得手があるというのに、この勇者は……。

更に、「聖光」と呼ばれる邪悪なもののみ有効な光の魔法を会得しつつあった。

成り行きを、啞然と見守るしかない状況である。

この子……何？

あまりの急な成長ぶりに、マダーニの背筋を汗が伝った。

勇者とは、そういうものなのか？

異界の地では、勇者達は魔法など使っていなかったと聞いた。だから、皆同じスタートラインだったのだ。

しかし、僅か一日で魔法を数種類覚えてしまったアサギ。

両親共に有能な魔法使いならばともかくとして、そんな人間の話など、聞いたことがなかった。

また、アサギは剣技のほうでも身軽に剣を使いこなしている。

剣は腕に自信の有るライオンに全員の勇者が習ったのだが、明らかに秀でていた。

アサギの次に剣が上達していたのはダイキである、聞けば”剣道なるものを異界でやっていたとのこと。

最初から構えが一人違っていたので、ライオンが思わず聞いたのだった。

剣道など、無論ライオン達は知らない。

真剣ではなく、竹刀でのスポーツであるが、きびきびとした動きにライオンは嬉しそうに微笑んだ。

だが、アサギは。

ライオンの指導をすんなりと柔軟に受け入れて、剣道の形に填まっているダイキ以上の成長を見せたのだ。

吸収能力が人一倍高い、としかいい様子がない。

三日目の朝になって、トモハルとダイキが電雷の初歩呪文を取得ユキが初歩の回復呪文を取得、辛うじてミノルが電雷の初歩呪文を不安定だが習得した。

ケンイチのみが、焦っているのか芽が出てこない。

焦って、半泣きである。

クラフトも自分の指導が間違っているのか、と自信を失くし始めアリナに蹴りを入れられる。

そんな様子に、気まずそうにムーンが声をかけていた。

「あの、もしかして。私達の仲間、ロシアが、ケンイチに似ている

のです。

彼は武術の国の生まれで、魔法が使いこなせず、代わりに大剣を振るっていました。ひよつとして、ケンイチも剣に絶大な能力を持っているのかもしれませんが」

ケンイチが勇者である2星ハンニバルの、死んだロシアという名の王子。

ムーンは軽く自嘲気味にそう語る、聞きながらサマルトも軽く頷いた。

ロシアと同質ならば、魔法が使えない……ので、気に病むことはない、と言いたかったらしい。

代わりに、剣を使いこなせばいいのだ、と。

それでも、ケンイチは懸命に覚えようと必死であった。

やはり、1人だけ魔法が使えないという劣等感に焦りを感じずにはいられない。

泣き出したいのを堪えながら、震える手でケンイチは魔道書を眺め続ける。

「っ！？ みんな、武器を手に取れっ」

三日目、夕刻。

急に大声を出すライアンに、馬車の中のメンバーは硬直した。

その声色から何かしら敵に遭遇したように思えるのだが、まさか、と口元から言葉が零れた。

神聖城クリストバルから洞窟までの道のりは、結界が張られているはずなのだ。

故に、魔物には襲われない。

だから、こうして勇者達に十分の魔法の知識と剣の扱いを教え、洞窟を抜けた後に実戦に入ろうとしていたのである。

計算が、狂った。

舌打ちするマダーニと、顔色を変えるブジャタ、アリナは愉快そうにポキポキと首を鳴らしている。

「勇者を護れ、馬車から極力出るなっ！」

ライアンの姿が消える。

先陣切って、敵に攻撃を加えるべく馬車を降りたようだった。

代わりにアーサーが手綱を握っている、が、馬上からアーサーも己の杖を掲げて参戦だ。

慌ててトモハルが伝説の剣を手にした、しかし手が震えて上手く握れない。

率先してマダーニ、アリナ、サマルト、ムーンが馬車から飛び出して行く。

残った者達は、そつと隙間から様子を伺った。

万が一に備え、飛び出したいのを堪えてミシアとクラフト、ブジャタが勇者の警護に当たっている。

三人とも、後方支援が得意な者達だ、馬車からでも十分応戦が出来るだろう。

「で、でかいカラス!!!」

隙間から見えた敵を、ミノルはそう表現した。

隣でクラフトが詠唱を始めつつ、返答する。

「違います、レイブンといいます。体長約二メートル、地獄の使い魔と呼ばれる観ての通り飛行タイプの肉食魔物です。鋭い爪は一掻きで肉をもぎ取ります」

「……………」

淡々とした敵の説明に、啞然とミノルはクラフトを見上げた。

「馬車に簡易な防御壁を張りました、数回の攻撃ならこれで凌げます。あとは早急に一掃しましょうか」

言うなり、軽くミシアとブジャタに微笑んでクラフトは馬車を降りていった。

残された勇者達は、呆然と座り込んでいる。

覗き見をしたが、とても今出て行ける状態ではなかった。

まだ、この世界へ来て三日目、そうだ、戦えなくて当然だ。

……それでいいのか、勇者なのに。

……それでいいんだよ、死んだら元も子もないのだから。

皆がそう思い始めた、地球の日本に魔物は存在しない。

山中で熊やら猪やらに遭遇したとしても、戦えない。

銃があれば、戦えるかもしれないが。

大人しくしていよう、仲間達は強いから暫くはここに居よう。

勇者達、口にせずとも馬車で縮こまって大人しく。

不意にアサギが意を決したように剣を手を取った、その様子を見

つめていたトモハルが、軽く微笑んで立ち上がった。

「行こう、アサギ。大丈夫だ」

「うん。私、行く」

啞然。

他の勇者が止めるのも聞かずに、アサギとトモハルは馬車から飛び出す。

「ミシア殿、二人の援護を！ 魔法の用意は良いですかな！？」

「お任せください、ブジャタさん」

飛び出した勇者二人を追うことなく、馬車からミシアとブジャタ

は呪文の詠唱に入る。

長距離になるが、先に勇者に近づく敵を排除するつもりだった。駆け出した二人の勇者、死骸が散乱する道を、顔を顰めながら進む。

状況は無論こちらが優勢だが、まだ数羽空中にレイブンが漂っていた。

アサギは剣を空に掲げ、魔法の詠唱に入る。

アサギと背を合わせ、トモハルも詠唱に入った。

瞬間、その場に居た者全員が二人の勇者を目にした。

クレオの勇者、男女で対の勇者。

「天より来たれ、我の手中に」

「その裁きの雷で、我の敵を貫きたまえ」

憶え立ての魔法を同時に詠唱し、二人は互いの前方に居たレイブンを目掛けて魔法を同時に放つ。

「雷撃っ！」

声が揃う、二つの雷がレイブンを目掛けて天から一直線に落下した。

魔王達の戯言

暗黒の中に、微かに浮かび上がる建物。

昨夜より降り続いた雨によって発生した霧が、不気味にその建物……城を包み込んでいる。

その城の中心、厳重に魔族達に警護された一室から、妙に高いトーンの声が漏れている。

けれども、警護している者達は顔色一つ変えずに、その内容を聞き取るわけでもなく、ただ神経を張り巡らしていた。

今、各星の魔王達がこの一室に集結しているのである。

部屋の外で武装し、張り詰めた空気に包まれている魔族達とは裏腹に、中で若干愉快そうに熱弁しているのは魔王ハイだった。

艶やかな長い黒髪を揺らめかせつつ、数日前まで淀んでいた瞳に、小さな光を甦らせてハイは口元に笑みを浮かべていた。

勇者アサギを、魅入った男。

他の魔王達と連絡が付き、召集出来たのは数日後だった。

「というわけだ、私はどうしても、あの娘が欲しい」

他の魔王達にアサギの事を話していたようだ、一気に語ったのか軽く呼吸が荒い。

「ふーん」

流れる髪を鬱陶しそうにかき上げながら、もう一人の黒髪の男が気だるそうに返事をした。

頭部から突き出た二本の角が印象的だ、この男が1星ネ口の魔王・リュウ。

聞いていたのかいないのか、リュウは手元に持っている皿から、

何かを摘んで口元に運んだ。

軽く瞳を閉じて味わってから、嬉しそうに微笑んで、再度摘んで口に運ぶ。

中身は毒である、リュウは毒が好物だった。

全く話に乗る気のない魔王達に微かな苛立ちを感じながら、それでもハイは再び熱弁を振るう。

2星ハンニバルの魔王、ハイ・ラウ・シュリップは何処をどう見ても、何の変哲も無い人間である。

リュウの様に角もなければ、耳とて普通の人間の形、当たり前だハイは人間なのだから。

その人間であるはずのハイが、何故魔王と呼ばれ人間達を恐怖に貶めているのか。

ハイは、2星ハンニバルのある高位な神官の家系に産まれた、だが、産まれながらにしてその身体に宿っていた魔力は闇の属性。

けれども、誰もそんなことに気がつかなかった、由緒ある神官の子供なのだから、考えもしなかったのだろう。

賢かったハイは、自分が神官の子供であると悟っていたし、その闇の力を表に出そうともせず、周囲の期待通り勤勉に励んだ。

もしかしたら、ハイには魔王になる道と、最高位の神官の座を手に入れる道が用意されていたのかもしれない。

今となつては悔やんでも仕方が無いのだが、『あの出来事』さえなければ、ハイは魔王ではなく、聖王になっていた。

彼は、優し過ぎた。

彼は、許せなかった。

彼は、人間が嫌いになった。

14歳の時だった、子供から大人への儀式の年齢、2星ハンニバルでは14歳で執り行う。

成人の儀を家庭で祝うのが常識である。

その時、既にハイは邪の道に堕ちていた。

ハイ程名の知れ渡っている者ならば、その儀式は盛大なものだった。

各大陸から由緒ある神官の自慢の1人息子を見る為に、大勢の人々が続々と訪れた。

そう、手を煩わせることなく有数の神官や聖職者達が一箇所に集まってきたのだ。

こんな機会は滅多にない、一網打尽にする絶好の状況である。

神官である両親も勿論の事、周りの聖職者達も汚れて、墮落し、偽善者ぶっている様子が、ハイには解ってしまったのだ。

そもそも、自分とて父親の息子ではない、母の浮気相手の別の神官がハイの本当の父親だった。

一回りほど違う、端正な顔立ちをした神官が、自分の父親だと知ってしまった。

自分と同じ年頃の時、母親に誘惑されたのか自ら願ったのかは定かではないが身体を重ねて出来た子がハイである。

父親は、そんな妻の不貞は知らないのです、ハイを本当の子供の様に育ててくれた。

だが、父親とて金を溜め込み、若い巫女らに夜な夜な淫らな行為をしている。

……だから私が闇の属性なのだ、不埒な母の罪の結果がこの私なのだから。

育ての父とて、愚行に溺れている始末、そんな中で子が成長する筈がない。

ハイの中に眠っていた闇の力が、快楽や怠惰、憎悪、偽善という周囲の人間の持つ罪によって眠りから覚めていく。

両親はハイを可愛がりながらも、その愛情は如何に将来、自分達の名を轟かせるかという名誉と地位の為にだけに注がれた。

祝いの席の真っ只中、冷めた瞳で客観的に傍観しているハイ。

「……せいぜい束の間この時間を、楽しむが良い」

皮肉めいて、微かに笑う。

立派になったわねえ、と話しかけてきた神官の女、清楚に振舞っているが彼女は夜な夜な若い男を寢所に連れ込んでいる。

あの司祭は相当なサディストで、いたいけな巫女を甚振っていた。向こうの姉妹の巫女は同性愛者、祭壇の下で秘め事を。

純粹そうなああの巫女とて、処女ではない。

胸の中で爆笑する、唾を吐き捨てる、罵声を浴びさせる。

ハイは一人一人をゴミでも見るように、ゆっくりと見下した。

無機質に流れいく時間を、ハイは退屈そうにそれでも微かに頷き、会話に適当に対応しながら過ごす。

そろそろ会場の流れが変わる、奈落の底へ落ちた神官達は、ハイの許婚にと娘達を露骨なほど売り込んできた。

容姿端麗で、有能な神官・ハイ。

娘達とて乗り気だった、自ら色気を出し、稀に清純に振る舞い、ハイに群がる。

酒に溺れ、その場は無防備な聖職者達で溢れている。

ハイはいい加減嫌気が差し、一人輪を離れて、遠くへ歩いた。縋りつくように娘達が、ハイの後を追った。

非常に、面倒だ。

舌打ちすると、ハイは足を止め、小さく詠唱を始める。

「……闇より来たれ、我の守護者……」

気分が高揚しており、ハイの僅かな魔力の高まりに気がつかない聖職者達。

必死にその魔力を最大限押し殺しながら、詠唱を完成させる。

「……我に応えよ、その力を示せ、存分に喰らい尽くせ……」

詠唱が完成に近づき、ようやくほんの一握りの聖職者がそれに気がついた。

ハイの魔力の高揚に気がついた、暗雲が立ち込めた空、生ぬるい空気、寄って来たカラスの群れ。

純白の衣装を風にはためかせながら、ハイはゆっくりと微笑む。

その笑顔が、あまりにも無邪気で、それでいて残忍で、しかし瞳に光を宿すことなくハイは振り向いた。

それは、余りにも美しい光景だった。

けれども、背後には漆黒の闇。

どこかで叫び声が上がった、呆然とハイを見つめ続ける聖職者達。彼を、止めるんだ！

誰かが叫んだ、が、酒に酔った者達は正確に歩くことも、まして詠唱に入ることも出来ない。

「我の名において許す！ 来たれ死霊、叫び狂え恐怖の風を巻き起こせ。混沌と絶望の場をここにっ」

引き攣った人々の顔を見つめ、ハイは満足そうに爆笑しながら呪文を完成させた。

死霊召喚。

魂を喰らう奈落の底の住人達をこの世に召喚する、暗黒魔法である。

術者のレベルによって、当然召喚できる死霊の数が変化する、ハイは自身の全魔力を駆使して多大な来訪者を招き寄せた。

闇から姿を現し、手当たり次第喰らい尽くす死霊に、その場はハイの望んだとおり混沌の場と化す。

魔王達の結論

両親が、驚愕の瞳でハイを見つめていた。唇が「なぜ」と、動いたのを確認しハイは嘲り笑う。

「胸に手を当てれば解ることだろうに？」

断末魔がいくつも耳に届くが、興味を持たずハイは満足そうにその場を悠然と歩き回る。

眼球がずるりと抜け落ちる、髪が抜ける、腕がもげる、腹に穴が開く。

こうなってしまうては聖職者だろうがなんであろうが、関係ない。その場に残ったのは無数の無残な死骸でしかなく、ハイは愉快そうにその場で高笑いをしていた。

心底、愉快だと思った。
が。

不意に笑い声を止めて、ある方向へと歩き出す、ゆっくりと、拍手をする。

次第に大きく手を叩き、辺りに小気味良い音が響き渡った。

「素晴らしいな、君。立派だ」

1人の人間に向かって、近寄っていくハイ。

そう、この場で1人生存者が存在した。

喰われながら、嘆き苦しみながら死んでいった人間達ばかりかと思えば、正常に脳が働いた聖職者が存在したのだ。

彼女は必死に防御壁を張り巡らせ、迫り来る亡者達から身を護っている。

宴の酒を飲まず、浮かれていた者達と離れ、一人で居た故に状況

把握が出来たようだった。

明るい金髪、全てを見透かす様な碧い瞳、髪を後ろで一つに束ねた、質素な衣服の少女が立っている。

歳はハイと同じくらいだろうが、化粧もせずにいるため、子供に見えなくもない。

足元に転がっていた、高等な神官の銀の杖を右手に、首から提げていた十字架を左手で掲げ、懸命に亡者を撃退していた。

彼女自身はそう対して魔力が高くはない、だが、手にしている装備品が優れている為に亡者と対等に戦っているようだ。

相当の疲労である、辛うじて立っているような状況だ。

近寄ってきたハイに、彼女は力なく微笑むと全神経を杖へ集中し、ハイ目掛けて杖を突き出した。

「何の真似だ」

解ってはいしたが、念の為聞いてみる。

元凶であるハイと一戦交えようというのだろう、ただハイはこんな娘にやられるつもりもなかったので反撃の態勢はとらなかった。

彼女の意思が正気か確認する為に口を開いた、全くの無駄足であるのだと教えるために。

「勝てないのは百も承知。ですが残った神官としてはこうするのが義務では？ ハイ様を巨大な魔力の持ち主だと痛感していたとして

も」

「立派だな、神官の義務。そうか、腐った神官しか存在しないと思っていた」

彼女が杖を振り下ろした、ハイの周囲の亡者が一瞬で掻き消えていったが、ハイは薄く微笑むばかり。

渾身の禱りだった、全神経を集中させての少女の攻撃だ。

長い黒髪が風になびいて揺れながら、余裕の笑みでハイは右手を前に突き出す。

「さようなら、名もなき神官の娘。最期に良い言葉を有難う」

全く、効果がなかったと判り、少女が目の前で悔しそうに、切なそうに顔を歪めた。

力なく倒れこんでいく、少女。

ハイの後方から新たな亡者が疾風のように現れ、無常にも少女に襲い掛かった。

無数の黒い塊、懸命に張られた防御壁を幾度も打ち付けて彼女に負荷をかけていく。

手にした十字架をハイ目掛けて最期の足掻きとして投げつけたが、生憎ハイには全く効果がなかった。

闇の属性だが、神官である彼にはそんなもの効果がない。

穏やかに微笑むハイを最期に、彼女の絶叫が周囲に響き渡る。

防御壁が破壊され、彼女の身体を無数の亡者が取り囲み、魂を食らっている。

綺麗な神官の魂は、亡者にとって麻薬のようなご馳走であり。

死に際に彼女は何か唇を動かしたのだが、全くハイには届かなかった。

彼女の言葉は、「ハイ様、お慕いしていたのです」。

汚れた瞳で人間を見ることが出来なかったハイは、彼女の澄んだ心を汲み取ることが出来なかった。

彼女の両親は確かに墮落していたかもしれない、けれどもその娘までが墮落しているとは限らない。

彼女は弱き人々を助け、誠意で弱き者と共にし、懸命に神に祈りを捧げていた。

ハイを数年前に見かけ、綺麗な容姿と優しそうな瞳に心を奪われた。

昨今の神官が墮落していることは、彼女とて知っていた、故にハイに期待をしていたのだ。

彼ならば、正すことが出来るのではないか、彼ならば人々を導けるのではないかと。

確かに彼は人々を導いた、破滅の道へと。

彼女の軀が崩れ落ち、屍が散乱したその場をつまらなそうに一瞥すると、ハイは踵を返す。

用意されていた祝いの食事を館で食べた、譲り受けた聖衣を羽織ってみた、受け継がれてきた銀の杖を手に見てみた。

笑う、ただ、笑う。

一人きりの館で、ハイは笑った。

外は、死体の山だった。

14歳の誕生日、ハイはこのようにして暗黒神官に即位した。

暗黒面が強かったが、聖なる力も多少は兼ね備えていたため、特に弱点が見当たらず、悪魔すらその力量に魅了されて数名が集ってきた。

何度か人間が攻めてきたのだが、数年経過した後のことであり、その時はすでにハイの元に有能な悪魔達が揃っていた為人間達は手も足も出すことが出来ず惨敗。

こうして魔王ハイという呼び名がハンニバルへと流れ始めた。

ある日、ハイは館の一角で封印された異空間への道を発見した。

両親すらその存在を教えることがなかった、作為的に閉鎖された場所。

もしかすると、成人の儀の終了後、ハイに教えるつもりだったのかも知れない。

しかし、今となっては不明だ。

好奇心ではなく、単調になっていた生活に何か変化を、と思いつの封印を解除した。

別に死を怖がることはなかった、むしろ死を望んでいたハイにとって何も恐怖はなく、真つ暗なその道を進む。

生活は、あまりにも退屈だったのだ。

辿り着いた先にハイの瞳に飛び込んできた風景は、見るからに不気味な城。

目の前に薄い青白い膜のようなものが張っている、それに手を伸ばすと、奇妙な感覚に襲われた。

肌に纏わりつく生暖かいへどろのような、決して気分の良いものではない感覚に眉を潜めるハイ。

けれどもその膜に身体を投げ、怯む事無く突き抜けた。

この場所が何処かは解らなかったが、その威圧感に包まれた城が、この場所の支配者の住処でありハイと同等、もしくはそれ以上の力の持ち主であることは理解した。

城の正面の扉を開き、中へと進入した。

階段までの道に左右に数人の人間、いや、魔族だろうか、微動出せずにそこに佇んでいるのだが、その前をハイは通り抜けた。

無関心でその者達はハイを通らせた、別に人形ではないが、態勢を崩さずに立ったまま。

階段を上って達したのは、大きな広間であり、そこにこの城の所有者が居た。

「客人」

遠い場所で、豪華な椅子に深く腰掛けていた人物が、一言そう呟いた。

静か過ぎるその場所は、声が良く通る。

椅子に座っている男は、自分と同じ漆黒の瞳と長い髪で、頭部から二本角が生えていた。

雰囲氣的に何か似たものを感じたハイ、何をしてもなくゆつくりとその大広間を歩き回りながら鑑賞した。

男にも瞳を走らせ、真紅の簡単な衣に身を包んでいるが、その整った顔立ちと品格の漂う仕草、微かに口元に笑みを浮かべているそ

の男に軽く興味を持った。

「茶菓子でも、どうぞ」

男が椅子を立ち、ハイから向かって右側の一角を指した、小さなテーブルがあり、上に何か乗っている。

すたすたとテーブルへと移動した男は、ティーポットから液体をカップに流し入れるとハイを手招きした。
折角なので、と疑いもせずハイも同意する。

「私は、リュウというんだ」

カップを近寄ってきたハイに差し出す、にこやかに微笑んでいる男。

受け取り、まあ無難に返答をするかと思い、とハイは口を開いた。

「私はハイ。2星ハンニバルの神官」

聴くなり、瞳を丸くして興味深そうにリュウは小さく笑う。

「神官？ 暗黒神官の間違いだろ？ 久しぶりに可笑しな冗談を聞いたよ。そうか、2星の魔王かな。私は1星の魔王なんだ。多分同質で同位」

ほう、瞳を細めて腕を組み、壁にもたれたハイは居心地良さそうに笑みを浮かべた。

まさかここが1星ネロとは思いつたが、当面退屈しのぎは出来そうだった。

受け取ったカップの中身を口に含む、やたらと甘い液体にハイは眉を顰める。

「ああ、ごめん。私甘党なんだ」

「これはなんだ？」

「苺のフレバーティー。砂糖たっぷり、蜂蜜多目。あ、苺もあるよ」
「……………」

にこやかに苺を勧めるリュウに、苦笑いでハイは丁重に断った。残念そうに肩を竦めるが、退屈しのぎなのかリュウは語りだす。人間が嫌いで、人間の城を攻め落とした、ここは主力国だったカエサル。

ここには勇者の称号を得た勇者・ナチスという若者と、その妻のマリイという姫が居たのだが、思ったより弱かった。

「人間って身勝手だなー。勇者が殺されては不甲斐無いつて彼の墓を作るどころか弔いもなくてね。勇者の彼に同情したよ」

「人間とは墮落すると底まで落ちる。ある意味、我らよりも心が病んでいるのだよ」

「ぶはっ。ハイとて人間だろうにー」

「私は人間だが、人間ではない。人間という種族を放棄した。ハイという名の個別な生物だ」

「へーえ、面白いな」

けたけた笑うリュウに、何かハイは違和感を感じたが口には出さなかった、二人の魔王は特に張り合うこともなく意気投合し、他愛のない話を楽しむ。

未練も興味も全くない1星ネロのカエサル城を後にして、ハイが通ってきた異空間を使用し、リュウは2星へと移住する。

数人の従者を連れて、リュウは物珍しそうに2星ハンニバルの地を踏んだ。

館の部屋は腐るほど余っている、部屋を幾つか貰ってリュウは勝

手気ままに暮らし始めた。

1星の魔王であるリュウが移住してきた、という噂は流れなかったが、代わりに1星が壊滅状態である、という真実は流れ始める。人間達の中には絶望し、自ら命を絶つ者も増えてきた。

リュウを尻目に、ハイは退屈しのぎにと、残り少ない聖職者達を抹消すべく、集ってきた魔族や魔物に主要国を襲わせ始めた。

人間達も抵抗していたが、ハイ率いる邪悪な軍と対等に戦える力量は持ち合わせておらず、統括された魔王軍の前にはなすすべがない。

故にいと簡単に主要国を3つ、攻め落とすとした。

残りは2つ、うち、片方は時間の問題だろう。

砂浜に作った砂の城を、波が崩して持ち帰るように、自然に簡単に。

残りは一国、楽しみを失くさない為に、別に苦戦しているとかそういうことではなくて、放置している。

このまま潰してしまったら、何もすることがなくなってしまおう、それ故に。

余興として気にかかっていた”伝説の勇者”の存在も確かめたかった。

1星の勇者は、魔王リュウの元へ現れたという、ならばハイの前にも現れても良いはずだ。

神官だったハイとて、勇者の話は聞かされた。

人間達に最大の屈辱を味わってもらう為、勇者を見つけ出す為、ハイは気まぐれで選んだ一国を極稀に襲わせながら、しかし壊滅させることなく残している。

その国には若い王子が1人居た、彼に勇者を捜してもらおうのだ。

手間が省けるし、何より工程を見ているのは面白そうだ。

勇者が見つかったら、適当に殺してしまおう、公開処刑してしまおう。

勇者の力なんて特に怯えていないが、芽が伸びる前に潰してしま

え、ハイはそう思っていた。

その王子、右往左往し仲間を探していることは知っている。

亡国となった国の仲間達と懸命に生き抜いていたのだが、残りは二人きりになった。

殺そうと思えば二人とも殺すことが出来たが、それでは面白くない。

一国の王子が勇者を探し出すのには時間がかかる、暇な時間を弄び、二人の魔王は別の星への移住計画を思いついた。

1星と2星が通じていたのだから、他の星にも行ける気がする、と二人は思っていた。

思惑通り、二人の力量からなのか偶然にも異界への道を難なく手に入れてしまったのだ。

見つけたのは、3・4星への通路であり、二人は他の星の魔王達に遭遇した。

そして現在この場に終結した魔王が、四人、正確には三人と一体1星の魔王リュウ、2星の魔王ハイ、3星の魔王ミラボー、4星の魔王アレク。

人型のリュウ、ハイ、アレクに反してミラボーだけが明らかに人外な容貌だ。

イボ蛙が巨大化した感じだろうか、腐敗した緑色、毒々しく光る真紅の瞳、背丈は人間の少年程だが、横が広く肥満なのかそういう種族なのか、幅をやたら取る。

頭部の触角らしきものが、時折何かを探るように動くのが不気味である。

アレクは非常に美男子で、正真正銘、4星の魔族の長であり正当な魔王だった。

後に魔王と呼ばれることになったハイとは、全く持って経緯が違う。

魔王を名乗るには歳が若いのかもれないが、それでも残った王族はアレク1人であり、従兄弟がいたのだが消息不明となっている。

血縁から成り行きで即位した魔王かと思いきや、類まれなる魔力も兼ね備えており、無口で虚無の瞳、静かに佇む沈黙の魔王である。

「美しいだろう、可愛いのだ、この娘」

絵描きに描かせたアサギの肖像画を手にし、熱弁を止めないハイに、いい加減うんざりしてきたリュウは毒を食べていた手を休めると、話をする為に向き直る。

アレクは窓から外を見下ろしているばかりで、ミラポーは自身の洋服に縫い付けてある煌びやかな宝石を、うっとり見つめていた。誰も話を聞いていない。

「で、名前は？」

「知らん。寧ろ知りたい」

「今何処にいるの？」

「知らん。寧ろ知りたい」

「ハイは、勇者に見つけたら公開処刑って言ってたよね？ するんだよねー？」

「しない。寧ろ会いたい」

腹を抱えて爆笑するリュウに、怪訝にハイは青筋立てて悔しそうに眉顰める。

そのリュウの態度がハイを苛立たせるものでしがなく、拳を握り締め身体を小刻みに震わし齒軋りして必死に怒鳴りたいのを堪えていた。

リュウは涙を流しながら、ハイの背を勢い良く平手打ちしている。

「壮健そうな美しい娘じゃないかー。いや、ハイに色恋ごことがあるなんて思いもしなかったよー」

「でも、勇者なんだろう？」

不意に窓を見つめていたアレクが喋った。

静まり返る一室、まさかアレクが何も問いかけていないのに、会話に参加するとは誰も思わなかった。

意外そうに好奇心を丸出しにしてアレクを見つめていたリュウだが、どう返答するのかとハイに視線を移す。

話を聞いていたことにも、驚きだ。

寧ろ会いたい、と言い放った魔王、会いたいののは勇者。

ああそうだね、公開処刑よりもっと魅力的な愉快な出来事が起こりそうだよ、リュウは口元に笑みを浮かべ、妖しく光る瞳でハイの言葉が口から飛び出るその前に。

「勇者を手に入れてみるのも、一種の余興なんじゃないかなー、なんて？」

「退屈凌ぎに、魔王が勇者を手に入れる。」

それは非常に愉快な事だった。

洞窟の出入口で

馬車を飛び出し呪文を放った二人の勇者、アサギとトモハルの姿を確認し、一行は護るべく徐々に二人へと近寄りつつあった。

呪文で二羽のレイブンを地上へ落下させた二人は、剣を引き抜いて身構えると、止めを刺すべく互いに反対方向へ走っていく。

「っ、あまり前に出ないでっ」

マダーニが叫びながら後方から飛んできたレイブんに火球を投げつけるのだが、二人は言葉を聞かずにそのまま突き進んでいた。

自分達の力を過信しているのか、迷いが全くない。

もともとトモハルは自信家なので、三日間の戦闘訓練で見につけた力を、そして受け取った伝説の剣の威力を一刻も早く試したかったのかもしれない。

颯爽と剣を振りかぶり、地面でのた打ち回っていたレイブンへ剣を突き刺すトモハル、蛋白質が焦げる嫌な匂いを漂わせながらレイブンは耳を塞ぎたくなる高音で鳴き叫んだ。

胴体に剣を地面ごと突き刺しそれでも尚、嘴を大きく開き抵抗していたレイブんに、トモハルは瞬時足を振るわせる。

生き物を殺す瞬間、初めての感覚に流石のトモハルも怖気づいたのだろっ、周囲をよく確認せず震える手で剣を突き刺したままだった。

故に後方から何か奇怪な鳴き声を聞いたときは、すでに一羽のレイブンがトモハル目掛けて急降下してきていたのである。

「っ、っわあああっ！！」

鳴き声に気がつき、そちらを見たトモハルは防御の態勢がとれな

い。

叫び、トモハルは思わず瞳を閉じてその場に蹲った。レイブンの迫力に足が竦んだのだろう、動けそうもない。

馬車の中で勇者達が口々に悲鳴をあげてトモハルの名を叫んだと同時に、ミシアとブジャタが魔法をレイブン目掛けて放った。

距離が遠く、威力に期待があまり出来ないのだが、レイブンの勢いを止める事ならば出来るだろう。

後は馬車外の仲間に任せるしかない。

二人の放った魔法は風の属性、真空の刃が馬車を飛び出し、一直線にレイブンへと突き進む。

綺麗に胴体の横に刃は打ち付けられ、その勢いでレイブンは跳ね飛ばされた。

胸を押さえてしゃがみ込んでいたトモハルを、ライオンが駆け寄って肩を支え抱き起こす。

飛んできたアリナが、刃を受けて鳴き喚いていたレイブンの首に強烈な蹴りを繰り出した。

安堵の溜息を吐いた馬車のメンバー、ミノルは吹き出る汗を拭いながら、馬車に居ればあんな目に合わなくていいのに、とつい本音を零す。

まあ、確かにそうだった、ここならば、安全だ。

ユキは我に返るとアサギを捜した、そうだ、トモハルは無事だがアサギは？

身乗り出し、親友の姿を捜すユキ、ケンイチとダイキも思わず顔を出す。

「やあっ！」

それは優雅に、煌びやかに。

何か武芸を舞うかのように、手にしていた剣で軽やかに宙に浮いていたレイブンの羽を切り落としているアサギの姿だった。

翼を傷つければ、天高く飛んで上から奇襲をかけられる事もない、
そう考え執拗に翼を狙い続けていたアサギ。

鋭い嘴を剣で受け止め、弾き返すと同時に羽を切り落とす。

啞然と、皆見守る。

例えばそれは映画のワンシーンの様であり、無駄のない動きにその場の全員が見惚れた。

「呼びかけに応じるは無数の光、宙に漂う小さな破片よ、私の元へと集まり増幅せよ。砕撃っ」

空中に漂っていたレイブン目掛けて新たな呪文を繰り出し、落下させる。

光の玉が花火のように弾け飛び、アサギは呪文を食らって力なく落下してきたレイブンを真横に斬り付けた。

「馬鹿な……」

ミノルの唇から、零れた言葉。

実戦でも全く動じないアサギ、あのトモハルですら窮地に立たされ助けられたのに、アサギは1人で戦闘をこなしている。

ありえない、変だ、だから、絶対おかしいって！

まるでずっとこの場で生活していた、剣と魔法を生活の一部としてきた星の住人のように、そんなものとは無縁だったはずのアサギは、見事に溶け込んでいた。

馬車の中で口を開いて、呆気に取られたまま残された勇者達はアサギを見ていた。

やがて、戦闘を終えて一行が戻ってきたところでようやく我に返る。

「トモハル、大丈夫!？」

未だ足取りがふらついていたトモハルに、ケンイチは水を差し出した。

苦笑いして受け取ると一気に水を飲み干す、喉は渴き切っており、そこでようやく言葉を発した。

「ああ、大丈夫。ちょっと……驚いたただだよ」

無理するな、と声をかけたかったのだが、トモハルはプライドが高いので言葉をケンイチは飲み込んだ。

多分励まされたりする事に慣れていないので、余計機嫌を悪くするだけだろうと判断したのだ。

アサギがアリナと共に戻ってきた、気まずそうに視線を逸らす勇者達、が、トモハルが意外にも声をかける。

「アサギは無事？」

そうか、トモハルはアサギのあの身のこなしを見ていないのだ、畏怖の念を抱く事無くアサギに手を伸ばした。

「うん、大丈夫だよ。心臓がどきどきしてるけど、なんとか」

「そうか、アサギが無事なら俺はそれで」

笑い合う二人、他の勇者の気も知らず、上気した頬に手を当てて冷やしている。

「とりあえず、この場を離れる。妙だな、結界はどうなっているんだろう」

ライアンが馬を走らせた、ブジャタが馬車から先程のレイブンの

死骸を見つめながら、皮肉めいた声を出した。

「まあ、結界が破壊されたのじゃろつて。いつからじゃろつな、来た時は完璧だったはずじゃが」

「確かに、参拝者の姿を見ておりませんね」

結界が崩壊しているのなら、一般人にはこの道のりはあまりに危険極まりない。

恐らく、何人もの参拝者が犠牲になっていると思われた。

一刻も早く、結界を直すべきなのだろうが神聖城クリストバルの神官達はそれすら知らないのではなかるうか。

結界がない、故に何時魔物に襲われるか解らない、そんな状況だと認知したので早目の食事を取る事にした。

馬車の幌を極力開いて周りの状況に目を凝らし、ライアンの隣にもアーサーとアリナがつき、左右前後方から敵の襲撃に備える。

その中で、食べられる者からビスケットと水を口にした。

いい加減飽きてきたのだが、これしかないので仕方が無い。

正直、食べるのも見るのも嫌だった。

地球に居た頃は食べ物も豊富で何も不自由しなかったのに、給食の味に文句が言えたのに。

今はもう、その給食がいかに豪華で美味しかったことか。

家族と共に食べる夕飯が、コンビニで手軽に買えたお菓子が、フーストフードがもはや、懐かしい。

「栄養失調になる」

ぼそつ、とミノルが愚痴を零し、それでも無理やりビスケットを喉の奥に押し込む。

静まり返る馬車の中、ミノルはトモハルを見た。

未だ微かに震えているように思える、まああんな危険な目に合え

ば当然だろう。

問題は、アサギだった。

視線を移すと、黙々と魔道書を読み続けている。

どんな時でも努力を怠らないつもりだろう、だが、それがミノルには忌々しく思えた。

馬車から出なかつた自分とユキ、ダイキ、ケンイチ。

正常だと思う、親近感も沸いた。

馬車から飛び出したが、上手くいかなかったトモハル。

目立とうとしたようにしか思えないが、失態を見せたのでなんとなく同情。

トモハルとて、正常なこちら側の人間だとそう思えてきた。

けれど、アサギは。

絶対おかしい、異常だと思えなかつた。

優等生にも限度がある、どうして大人しくしてられないのか、何故率先して飛び出していくのか、どうして難なくこなしてしまうのか。

鬱陶しい、自分の理解を超えるアサギにが、ただ腹立たしい。

何処までも自分と同じ立場にならないアサギを、ミノルはどうしても受け入れられない。

「何か、居ますね」

ミシアが凜とした声を発し、徐に弓矢を手にする。

ヒュン、と小気味良い音が聞こえ、緊張する一同の耳に何か動物の鳴き声が届く。

聞いたことのある鳴き声、勇者達は顔を見合わせる。

「犬？」

キャン、と鳴いた。

勇者達は様子を瞳を凝らして森の中を凝視する、葉が擦れる音が聞こえる。

「思いのほか、数が多そうだぞ」

ライアンが乾いた声を出しながら、馬車の速度を上げた。

ガサガサ、と音を立ててついてくる森の中の生き物に、威嚇の為再度ミシアが弓矢を放つ。

ブジャタが、アーサーが、真空の魔法を唱えた。

左右の森から、幾多の気配。

「とりあえず、囲まれつつあるみたいね」

マダーニが敵の正体を伺うべく馬車から身を乗り出し、右手に魔力を溜め込み始める。

先制攻撃をすべきか、相手の出方を見るべきか。

道は先程より狭い、故に戦いにくいという不利な点があり、迂闊に攻撃が仕掛けられないのだ。

「あの、森の中ではどうやって戦うものですか？」

剣を手にし、アサギが、隣のサマルトに問いかけた。

舌打ちするミノル、また外へ出て戦闘に参加する気であるアサギを睨みつける。

どうして大人しく護られていないんだろう、いくらなんでも自分の力を過信し過ぎだ。

危ないじゃないか、怪我したらどうするつもりだろう。

強いのは分かった、けれどこれ以上強くなると困るんだよ。

「俺が護れないから」

思わず口に出した言葉にミノルは慌てて口を塞ぎ、辺りを伺う。安堵する、誰も聞いてなかったらしい。

冷や汗を拭いながら、赤面しつつミノルは一人俯いた。

そつだ、アサギが強すぎるとイラつくのは。

自分が護ってあげられないから、下手すると自分が護って貰う側になるから。

そんな情けない事態に陥るのは嫌だ、間抜け以外の何者でもない。好きな女の子に護って貰うなんて、冗談にも程がある。

……好きな女の子に。

思ってから、ミノルは焦って顔を塞いだ。

「な、何言ってたんだ、俺！」

「? どうしたの、ミノル。なんか、変だよ」

怪訝に振り返ったケンイチに、ミノルは慌てて首を振って俯いた。顔が熱い、何か変だ。

アサギを見上げる、真剣にサマルトから話を聞いている。

小さく頷きながら、剣を手にして、外を気にしていた。

戦いに、行くつもりなんだろう。

ミノルは剣を手に取り、深く息を吸い込む。

何かが急かすんだ、アサギと共に行け、と。

火照る頬をそのままに、ミノルはその時が来るのを待つ。

「もうすぐ洞窟の入り口だ！ 道が開ける、そこで一気に畳み掛けるぞー！」

ライアンの怒鳴り声に、馬車の中全員が武器を取った。

遅れをとるまいと、勇者達も全員震える手で武器を手にする。

先程のトモハルとアサギを見て、やってみる気になったらしい。

青褪めているユキに、アサギが手を伸ばした。
軽く微笑んで、ゆっくり頷くとユキの不安が嘘のように消えてい
く。

大丈夫、アサギちゃんがいるから大丈夫……。

暗示をかけ、ユキは汗ばむ手で杖を硬く握り締めた。

洞窟の入り口が遠くに見え始めた、左右の森が大きく揺れ、木陰
から一匹が姿を現した。

低く唸りながら接近してきた魔物を見て、ミノルが悲鳴に近い声
で叫ぶ。

「な、なんだあれっ」

勇者一行が洞窟を前にして、魔物に襲われていた頃、その洞窟の
反対側に一人の男が居た。

「ふう」

石畳が真っ直ぐ伸びるその森を、一人で歩いてきた。

紫銀の長い髪を後ろで一つに束ね、額に変わった模様の布を巻き、
整った顔立ちと鋭い視線、相当な美丈夫である。

まだ、若い。

その背に何かしら魔力を放つ長剣を携え、黙々と歩いていた。

神聖城クリストバルへの道には聖なる結界が張られているはずな
のに、先程から稀に魔物に遭遇するのは、どういったことだろうか。

「魔王の影響、か」

男は誰にというでもなく小さく呟く。

零した瞬間、左から何かが飛び出してきた。

それを慌てることなく手馴れた動作で剣を引き抜き、無造作に叩

き落す。

何事も無かったかのようにそのまま剣を鞘に収めると、速度を落とすことなく速めることなく歩いた。

小刻みに痙攣している兎型の魔物に視線を落とさず、正面を向いたまま。

目指しているのはクリストバル、神託なんて信じないが、今は藁に縋る思いでその場所へと進んでいる。

男は、人を捜していた。

何処にいるのか検討がつかないのだが、捜さなければいけなかった。

クリストバルには高等な神官が集っていると聞き、手がかりを掴む為立ち寄ることにしたのだ。

捜しているのは、愛しい緑の髪の娘。

大丈夫、またすぐに逢えますから

そう言っただけで笑ったのを最後に、離れ離れになったわけだが、その娘を捜して、早一月。

何処から来たのか、何処へ行ったのか。

謎だらけのその娘、名前は教えてくれた、『アサギ』と名乗った。アサギ、と名乗ったその娘を捜している。

痛いぐらいの熱い日差し、男は軽く溜息を吐きながら不意に立ち止まる。

「……誰だ」

低く警戒しながら剣の柄に手を伸ばし、辺りの様子を伺う。

何かしらの気配を感じた、それがなんなのか分からないが男は神経を研ぎ澄ます。

気配はする、が、姿は見えない。

舌打ちして、剣を引き抜いたまま再び歩き出す。
注意深く鋭利な視線を森の中へと移していくが、やはり誰もいな
い。

その時、風が舞った。

石畳に落ちていた葉が数枚巻き上がり、マントを靡かせる。

再び足を止め、怪訝に宙にふわり、と浮きながら落下していく落
ち葉を見ていた。

風が、優しく頬を撫でる。

剣の構えを解き、鞘へと戻すと険しい表情のまま、振り返った。

何処かで、水滴が何かに落ちる音がした。

音が幾重にも重なって、曲を奏でる。

優しく、慈しみながら、大事なものに水を与える、そんな音。

乾いた大地に、溢れるほど注ぎ込まれる潤いの水の音。

「大丈夫だ、オレがなんとかする」

無意識のうちに、そう誰かへと言葉を発する。

それを聞き届けると、風は安堵したかのように徐々に消えていく。
足元に咲く花を見つめると、軽く屈んでその花を愛でる様に撫で
る。

そこでようやく男は優しそうな笑みを零した。

先程までの近寄りがたい雰囲気はなく、唯ひたすらに、愛情を注
ぎ続ける笑みを見せる。

それを護りながら、ゆつくりと風が男を包み込んだ。

風の呼びかけに応えた水に、絶対の護りを。

水の姿を見て、風はようやく安堵した。

ああ、彼なら大丈夫。必ず彼女を護ってくれるから。

風の声が聞こえた、青空を見上げ、男は眩しそうに瞳を細める。

風が傍に居られなくとも、芽の傍には水が居る。
最も芽を可愛がり、最も近づける水が居る。
小さな芽を護る為に、水は再び歩き出した。
目指すは神聖城クリストバル、その手前にある洞窟。
逢える気がする、緑の髪の愛しい娘・アサギに。

「必ず、出遭える」

男は、洞窟へと足を踏み入れた。

キィイ……カトン……。

何処かで、歯車が回った音が聞こえた。

洞窟の出入口で
(後書き)

孤高の氷壁トトビイ・サング・レジョン

姿を現した魔物は、確かに勇者達も見知った姿をしていた。徐々に森から飛び出してくるその魔物に、勇者達は言葉を失う。というのも。

「ア、アサギちゃん。私はちょっと……無理」

顔面蒼白のユキは馬車の中で軽い眩暈を起こし、その場で硬直してしまう。

口元を押さえたトモハル、啞然と魔物を見続けるケンイチ、絶叫するミノル。

「野犬の成れの果てですね。闇の力で甦った為に腐敗したまま、そうですね……火炎系の魔法が効果的です」

ミシアが隣に居たダイキにそう教えた、深く頷くダイキであるが、放心状態で言葉を聞き流しているようだ。

その魔物はミシアの説明通り、群れで生息していた野犬が餓えや天災で命を落とし、手っ取り早く闇の配下にと甦らせられた魔物である。

魂の抜け殻であり、ただ動き回るだけの存在は最も扱いやすく大量生産が可能な為、頻繁に姿を見せる。

よくも動き回れるな、というほどに皮膚が爛れ落ちている魔物や、骨が飛び出しているもの、足が一本足りないもの、など容姿は様々だ。

ホラー映画のゾンビなど目ではない、実物がこうして動き回っている。

思わず視線を逸らす、凝視していると見たくないものまで見えて

しまう。

姿を現した死犬の数は、約10匹。
もちろん腐敗臭も漂って来る訳で、蠅も集っているし、蛆だって湧いている。

自分の意思とは裏腹に動くものを標的に攻撃するよう、使命を与えられている死犬。

恐怖など感じない、こちらが叩きのめすまで彼らは攻撃を加えてくるだろう。

「無理をして戦わなくてもいい！ みんなは馬を護りつつ、撃退して欲しい」

ライアンが剣を引き抜いて操縦席から飛び降りた、アーサーが代わりに手綱を握りつつ、左手で杖を構え魔法の詠唱に入った。

続々と仲間が馬車から飛び出していく様子を、呆然と眺めている勇者達。

なんとかなるよね、と視線を送る勇者の中で、やはりアサギだけが異なる行動を起こす。

剣を片手に、馬車を飛び降りた。

「ちよ、待てアサギ！」

飛び出したアサギに釣られて、トモハルも転げ落ちるように馬車から出た。

伝説の剣を右手に、腐敗臭に咳き込みながらアサギの後を追う。

「トモハル、危ないっ！」

「え？」

馬車からケンイチの悲鳴に似た叫び声、予想以上に素早い死犬の

動きにトモハルの目は追いつかず、左から来た死犬に成す術もない。一直線に向かってきた死犬を唾然と見つめる、脳が身体に動くよう指示を出した時は遅かった。

迫り来る恐怖に、トモハルは歯を鳴らして瞳を閉じてしまう。

悲鳴が聞こえる中でトモハルが恐る恐る瞳を開くと、クラフトが銀の杖を死犬に突き立てていた。

「恐れているのは、何も始まりません。勇気は買います、ですが、無謀です。戦いの最中は瞳を閉じないでください」

ザシュツ、と間近で音がして杖が死犬から抜かれたと同時に、灰になって消えていく。

一度生命を落としたモノに効果的な『銀』の武器、額の汗を拭いながらクラフトは微かに乱れた呼吸をしつつトモハルに振り返った。手を、差し伸べる。

「焦らなくとも良いのです。今は確実に敵の攻撃を読めるようにしましょう」

銀の杖を構えながらそう言うクラフトに、トモハルは申し訳なさそうに謝るしかなかった。

震える手の中にある伝説の剣・セントガーディアン。

トモハルは力強く、助けを求めて縋るように剣を胸に抱き締めながら、魔法の詠唱を始めた。

杖を回転させ、正面からの敵の攻撃を無効化するクラフトの後ろで、深呼吸で息を整えるとトモハルは電雷の呪文を完成させる。

が、動きが速過ぎて上手い様に敵に当たらない。焦って舌打ちするトモハルを宥めながら、クラフトは防御に徹した。

トモハルを護りつつ、実戦で呪文の練習をさせているのである。

プライドが高く、今まで勝ち組だったトモハルにとっては先程と
いい今回といい、屈辱的なことばかりである。

上手くいかなくて当然だ、馬車で見ている他の勇者に比べればト
モハルの動きは大したものだろう。

けれども納得がいかない、自身への怒りで身体を震わせる。

深呼吸を繰り返し返す、気持ちを落ち着かせる。

そうすることで、冷静さを取り戻し本来の自分に戻るのだ。

完璧な自分に、戻る。

そうすれば、上手く出来るはずだ、自信が湧くはずだ。

トモハルはゆっくりと剣を構えた、気がつきクラフトが横に避け
る。

「瞳を、開いて」

トモハルが低く、呟いた。

恐れるな、敵を見極める、大丈夫だ、頑張れ俺。

トモハルは、全速力で駆けて来た一匹の死犬を見つめる。

確かに怖い、落ちて着いて剣を突き立てられればこちらの勝ちで
あるはずだ。

「行くぞっ!」

気合を入れて叫ぶトモハルの隣で、クラフトが万が一に備え魔法
詠唱に入った。

死体にしては力強い強脚力で跳ね上がった死犬、トモハルは掛け
声と共に剣を振り振り、そのまま一直線に叩き落した。

ピリピリと痺れる感覚が腕に襲い掛かる、が、歯を食いしばって
それに耐え、反動で犬を押し返す。

骨に剣が当たる音、ゴリツ、と聴きなれない音がしてから死犬は
勢いよく地面に跳ね飛ばされ、そのまま灰化していく。

「たお、した？」

「はい。一匹撃破ですね」

啞然と風に流されていく灰を見つつ、トモハルは歓喜とは似つかぬ声を発した。

実感が湧いてこないが、確かに倒した。

クラフトに肩を叩かれ、身体を大きく跳ね上がらせる。

「この調子で頑張りましょう。トモハル殿は冷静になれば事が上手く運べそうです、先程の呼吸を整える方法はよかったですよ」
「あり、ありがとうございますっ」

伝説の剣が微かに震えている、クラフトは微笑すると杖を再度構え直した。

残る死犬は6匹であった、が、気配に気づき集まってきたのか、先程より多くの死犬に囲まれているではないか。

面倒ですね、小さく呟きクラフトは他の仲間達の状況を把握する。あまり道幅が広くないこの場所では、森の木々を配慮し火の魔法を使うことが好ましくない。

馬を護りながらの戦闘は皆不慣れで戸惑っている、という状態でもあり。

クラフトとて、トモハルに細心の注意を張りながらの行動、思うように攻撃が出来なかった。

「アサギ、アサギは!？」

トモハルが不意にアサギの名を呼ぶ、クラフトもはっとして周囲に目を走らせた。

マダーニに背を預けて、何やら魔法の詠唱をしていた。

馬車の勇者達もアサギを見つめる、仲間達もアサギを見つめていた。

「闇に打ち勝つ光よ来たれ、慈愛の光を天より降り注ぎ浄化せよ。聖光っ」

気丈な瞳で右手を掲げ、集まってきた死犬達に魔法を唱えるアサギ。

「あれは！」

クラフトが呆然と呟いたのをトモハルは間近で聴いた、その呪文は『邪悪なものにのみ有効な光の魔法』であり、今相手にしている死犬にとつては最大の効果がある。

響き渡る声、何年も前から会得していたようにしか思えない度胸と自信と確信に満ちたその声に皆が聞き惚れる。

その魔法によって降り注がれた光によって、その場にいた死犬達は一斉に灰化していった。

完璧な、魔法詠唱である。

しん、と静まり返ったその場の沈黙を破ったのは背後にいたマダーニであり、戸惑いがちにアサギの頭を撫でて笑った。

「よく……完璧に出来たわ。凄い、冗談抜きで」

「良かったです、ちゃんと発動しました」

無邪気に笑うアサギに、ほっとマダーニは胸を撫で下ろした。

愛嬌よくマダーニに飛びついて笑っているアサギを、皆緊張を解き見つめている。

けれど。

不可解だ、何故こうも簡単に敵と対峙できるのか、失敗も恐れも

なく行動できるのか。

確かに地球に居た時からアサギは優秀だった、勉強も体育だって美術だって完璧だった。

それでも。

「絶対、おかしい。何かある」

ミノルは馬車の隅で膝を抱えてぶつぶつ、と小さく呟き続ける。納得いかない、あのトモハルでさえ失敗しているのに。

馬車に乗り込んできたアサギを、畏怖の念で見つめるミノル。

見た目が可愛いのに、どうも何か秘密がある気がしてならなかったが、多分そこもアサギの魅力なのだろう。

ミノルは、歓声を上げて褒め称える他の勇者達に混じることもし出ず、一人で唯膝を抱えて蹲る。

マダーニも、驚愕の効果だ。

数匹消滅なら理解出来るが、まさかあの場に居た全てを消し去ってしまうとは。

よほど、先程の死犬が貧弱だったのか？

それとも、アサギの光属性の魔法が強力すぎたのか。

「さあ、ようやく洞窟の入口だ」

ライアンの声に一行は馬車から顔を出す、目に飛び込んできたのは看板である。

『ここより先ジエノヴァ』

そう書かれた看板に、一先ずの安堵を憶える一行達であった。

最初の目的ポイントに到達出来たわけで、伸びをしながら馬車を降りる勇者達。

山一つ分掘ってあるこの洞窟、看板にツル草が巻きつき、長年からそこに立っている古めかしい雰囲気醸し出していた。

「ここを抜ければ大都市・ジェノヴァ。そこに着いて今後の方針を再確認する予定だ、あと少し頑張ろうか。洞窟は数時間もあれば通り抜けられる」

馬車二台が擦れ違えるだけの余裕のあるその洞窟は、通行量も多い為道も頑丈に出来ている。

神聖城クリストバルへの手段が陸路でしかない為、必然的にここを通過せねばならない。

無論、ライアンやマダー二達とて、ここを通過してクリストバルへきたわけである。

「洞窟内は空気も薄い、閉鎖された空間でもあるから今のうちに休息を取る。食事も済ませておこう」

洞窟を前に湧き水で喉を潤し、焚き火を起こして鍋でスープを作る。

持ってきた簡単なスパイスに、ライアンが調達してきたキノコ、山菜を投げ込んでから干し肉を入れてコクを出した。

これと小麦粉を水で練って火の中に放り込んでいた石で焼いた、簡素なパンのようなものを腹に入れて、多少はまともな食事にありつくことが出来た勇者達は皆で笑いあった。

緊張が解れたのか、笑顔が戻ってくる。

食事の効果は、偉大だ。

「後はお風呂に入りたいね」

「うん」

「ジェノヴァに到着したら温泉へ行きましょうね。それまでの辛抱よ」

一日はお風呂を我慢できるが流石に三日目である、ユキとアサギは不慣れなその環境に簡単に順応出来なかった。

川で水浴びしたいくらいだ。

しかし、少しの休憩後、整備された洞窟に足を踏み入れる。

興奮気味の勇者達を尻目に、ブジャタがしかめっ面で髭を撫でながら低く呻いた。

「どうしました？ 勇者達に合わせましょうよ、あんなに楽しそうですね」

クラフトに声をかけられても、ブジャタは低く呻いたままだった。洞窟、という響きに子供の冒険心が暴れだす、足を踏み入れて歓喜の声を上げていた。

「腑に落ちん。道中の結界が破られていたのじゃ、この洞窟とて」「やめてくださいよ」「行くも帰るも、人間を見ておらん。魔物には二回も出くわしたが、な」

ブジャタに同意し、クラフトも最後尾で緊張を走らせる。

「洞窟内部も気が抜けない、ということですね」「無論」

洞窟内部には古来からの魔法のランプが壁に一定間隔で吊るされているので、適度に明るかった。

燃料が入っていないランプに、永久的に火が灯っている代物、誰が開発したのか知らないが非常に便利なものだった。

馬車に乗って進む者、降りて洞窟内部を物珍しそうに散策している者、様々な行動を取る。

一方通行であるが故に迷子になる可能性はない、ので安心して勇者達もわらわらと洞窟を走り回った。

マダーニに話を聞きながら歩くアサギとユキ、この世界の話をしてもらっている。

「クレオの神の名は、『クレロ』というの」

「クレロ？ ややこしいですね」

「でしょ、ややこしいのよ。クレロが絶対神ね。例外で人間にも魔王アレクを崇拜している人もいるみたいだけど」

顔を顰めたマダーニに気づくことの無いアサギとユキ、マダーニは魔王に傾いた人間を知っていた。

特に仲が良かったわけではないのだが、魔王側につけば殺されずに済むと思っただ人物が突如魔王に忠誠を誓い始めたのだ。

街を追放されたため、何処へ居たのかは不明だが。

「それも、考え方によっては仕方の無いことですよね。生きたかったのだと思います。苦しめない方法がそれしか見つけれなかったんだと思うのです。考え方って十人十色ですし」

アサギが淡々と語る。

時折この子は大人びたことを言うな、とは思っていたがマダーニは一つの行動を悪い、と最初から判断するのではなくどうしてそうなったのかを発言したアサギに衝撃を覚えた。

思想の自由とでもいうのだろうか。

「ところで、クレロってどんなカタチをしているのですか？」

「むかーしの勇者の発言によると、巨大な鳥？ みたいな感じ？ とかなんとか」

鳥の神様素敵、を連呼し始めるユキを苦笑いしつつマダーニは見つめる。

「鳥ってというか、背中に羽が生えてて。飛び回って私達を見下ろしているんだって。天空にはクレロの城があるんだそーよ。ホントかどうかは知らないけどね」

「きゃー、素敵素敵っ！」

髪を掻きあげて気だるそうにマダーニは歩き続ける、ユキは変わらず「素敵」を連呼していた。

「まあ、実際それを見たって人もいないわけで。ただの幻想かもよ」
「もし。本当に神様がいるのなら、どうして助けてくれないのかな」

ぼつり、とアサギが呟いた。

同感だ、と聞いていた他の勇者達も頷く。

「ボクらもそう思うよ。神のしたことといえば、こうしてアサギ達を勇者としてこの世界へ連れてこられたっていう現実だけ。実際姿を現してもいないし、魔王に対抗出来る人間なんて早々いないし。クラフト曰く、『人間の危機は、人間によって回避すべきだ』ってことらしいけどさー。出来ないことだってあるよねー」

アリナが加わり、アサギの隣に寄り添うと肩に手を廻して歩く。
ミシアとムーンも参加しようと、集まってきた。

洞窟内は平らなので歩くのも楽だし、このまま喋り続けていけばあつという間に出られてしまいそんな気さえしてくる。

「神が直接手を下し魔王をねじ伏せるのではなく、その使途として勇者を遣わしているのでしょうね。やはり私達の世界は、私達人間

の手で護るべきものだと思いますから」

「ミシアさんの意見に同意です。人間は恥ずかしいですけど何とかに縋って生きていかなくはない存在です。けれども頼り続けると墮落していくのも事実。」

神の手で魔王を倒してしまえば人間は神に全部を預けて生活し、墮落してしまうのでしょうか。これは神からの試練なのかもしれませ
ん」

ふーん、と気のない返答をするアリナは、面白くなさそうな表情をしていた。

「ムーンの星の神はなんて名前？」

「エアリー様です。精霊神・エアリー様。女性神で才色兼備な非の打ち所の無いお方です」

「でも、誰も見たことないんだろー？ 誰がそんなこと言い始めたんだろーね」

穏やかに話していたムーンの様子が、アリナの挑発的な意地の悪い台詞に強張った。

「そうですけど、私は信じていますから」

「別にいいけど。ボクはさ、目に見えるものしか信じないから。神に祈って何かイイことあった？ 疑いたくならない？」

「有体に言えばそうなりますがっ。私は」

口ごもったムーンに、微かにアリナは反省の色を見せるように苦笑いをした。

沈黙。

洞窟内に急に拍手の音が響き渡る。

「はい、はい。話題を変えましょ。これから行く街の情報でも話そうかしら」

マダーニだ、ほっと胸を撫で下ろし、互いに顔を見合わせるアサギとユキ。

この緊迫した空気は居心地が悪い、ムーンも気まずそうに壁を見つめて歩いている。

「何も出てこないし、この洞窟内は結界が正常に動いているみたいね」

大きく伸びをして、豪快に笑うマダーニにつられて皆も欠伸びをしたり伸びをしたりする。

どれくらい歩いたのだろうか、中間地点にまでは到達したのだろうか。

緊張を解き、油断を招いてしまった。

「アサギちゃん、あれ何だろ？ 光ってるよ」

不意にユキが右前方に何やら赤く発光する物体を発見し、それが単独ではなく複数であった為に興味を示す。

ユキの手をとってそれを見ようと駆け出すアサギに、馬を連れて歩いていたライアンが首を傾げた。

「そんなもの、来た時あったか？」

隣に居たマダーニにそう問いかけた。

「さあ？ 気にも留めずに歩いてたし。ミシア、記憶ある？」

「急に振らないですよ。私も知らない」

ここまで会話してから顔を見合わせ、不用意に近づくな、と言おうとライアン、マダーニ、ミシアは口を開いた。が、時既に遅し、である。

目の前を走っていたアサギとユキの姿がふつ、と、まるでシャボン玉が消えるように瞬間的に掻き消えた。

呆気にとられ、口を開いたまま硬直していた三人に、アーサーが怪訝そうに後ろから声をかけた。

それで我に返る三人。

「ちよっ！？ アサギちゃん、ユキちゃん！？」

緊急事態に気づいたアリナとムーン、それに目撃者のミシアが慌てて後を追うかのように走り出したが、やはり忽然と掻き消えた。何事かと集まってきた他の一行は、呆気にとられて微動だするこゝとが出来なかった。

顔を引くつかせながら、マダーニはゆっくりと瞬きを繰り返す。

静寂。

皆の足音が反響しない、聞こえない。のだが。

「……なんか聞こえる」

ケンイチが隣のダイキを引っ張って耳を澄ませる、何処からか大量の羽音が聞こえてくる。

沈黙を破って、徐々に大きくなる羽音は不快だ。

「アサギー！」

大声で喚きだしたトモハルの声も諸共せず、接近してくる羽音に

皆は無言で武器を手にとると攻撃態勢をとった。

「やな雰囲気」

ミノルが頭を掻きながら、初めて戦闘に参加しなければいけないこの状況を呪う。

そして、トモハルのようにアサギの身を案じて名を呼べない自分の性格を呪う。

増加していく羽音を聞きながら、消えたメンバーを心配しつつすぐに救出に迎えないこの事態。

まるで用意されていたかのような、そんな状況に苦笑い。

嵌められた、のかな。

マダーニが小さく呟いた。

その頃、忽然と姿を消した五人は一緒になって純白の部屋の中に呆けて座り込んでいた。

お互いの顔を見ながら、それでも首を傾げたまま立たない。

状況が把握できていないのだった。

沈黙を破ったのはミシアだった、とにかくここで助けを待ちましよう、と一言。

「あのさ、ミシア。悪いけどこの洞窟一方通行じゃんね。待ってても来なくね？」

「そうですね、では移動します？」

二人のやり取りを聞き終えたムーンが金切り声で叫ぶ、スカート裾を掴んでアリナを睨み付けた。

「ここは何処ですか！？ 洞窟とは思えないこの風景、私には部屋にしか思えませんがつ」

「落下した感覚があるんだけど。落とし穴に落ちたら部屋があった、みたいない」

「地下の秘密部屋みたいな、そんな感じかな」

「そんなことより、ここから脱出する方法を考えましようっ。嫌な予感がします」

アサギの発言に深く頷いた、アリナとユキ。

それを見ていたムーンが、両手を振り上げて苛立ちながら床に手を叩きつけようとした。

「いてっ」

沈黙。

事態は確実に悪化しつつある、皆暗黙の了解で顔を見合わせる。

今の声、誰のものでもない。

何故ならばその声は、男の声だったからだ。

誰が言うでもなく五人は手を繋ぐ、アサギ、ユキ、アリナ、ムーン、ミシアの順で繋いだ手、ミシアとアサギは繋がらない。

「い、今の声出した人っ、返事して」

半ばヤケクソ気味にアリナがそう叫んだ、案の定誰も声を発しない。

静寂が訪れるが、遅れて頭上から妙に軽快な声で返答があった。

「俺でーす」

その声を聴いた途端、一目散に立ち上がって走り出す五人。

しっかりと手を繋いで逸れない様に横一列で猛然と駆け出す。

純白の中、唯走る、風景が変わらないため走っているのか進んで

いるのか、錯覚を起こす。

苛立ったアリナは急に立ち止まると、振り返って手を離しその場で構えた。

「逃げても無駄みたいだね、ついてきてるよ」

威嚇するように鋭い視線を張り巡らせる、唯々諸々、五人が背をあわせ円になる。

残念なことに誰一人として武器を所持していなかった、戦闘態勢をとってもあまりにも無防備。

身の安泰が保障されていた洞窟、馬車の中に置いて来てしまったのだ。

息詰る中、憤りを感じたムーンが叫んだ。

「姿を現しなさい、何者ですか！」

「はい、ここにいます。ちなみに吸血鬼です」

拍子抜けするような脱力感のある声、けれども頭上に感じた気配に気がつき、アリナが見上げる。

他のメンバーもつられて天井を見た。

自分達の上に覆い被さる形で全身を広げ、にっこりと微笑んでいる男が一人居た。

人懐っこそうに見えるのだが、それは余裕の笑みだった。

その男は勝気に鼻で笑うと、アサギの目の前へと降り立ち、満足そうに頷いている。

「こんにちはは、若くて可愛いお嬢さん方。お腹が空いたので食べさせてください」

それだけ言うと紫のマントを大きく広げて、目の前のアサギを覆

い隠した。

金の髪に、青い瞳、口元から除く光る八重歯、紫のマントに首に赤いリボン。

アリナがアサギの名を呼んだ、がアサギは激痛を伴う耳鳴りに襲われて思わず両手で耳を塞ぐ。

反射的に瞳を閉じ、丸くなるように体を縮こませその痛みに耐える。

耳鳴りが徐々に引いていく、五分ほど痛みに堪えていたような気がするのだが、薄れた耳鳴りに小さな溜息を吐き、アサギは瞳をゆっくりと開いた。

鼻につく甘い香りに、アサギは数回瞬きを繰り返す。

目が、慣れない。

「大丈夫？」

どこかで聴いた声にアサギは弾かれて顔を上げた、虚ろな瞳でその声の主を見つめる。

知っている人物だった、腑に落ちないが。

「ミノル？　なんで？　ここにいるの？」

呆然と見つめるアサギ、目の前にはミノルが心配そうに自分を覗き込んでいたのだ。

服装は朦朧とする意識の前に見た、紫のマントを羽織った姿なのだが、顔がミノルだった。

ミノルを知っている者が見たら、あまりにも不釣り合いな衣装で思わず吹き出すのだろうが、今のアサギはそれどころではなかった。

甘い香り、ミノルの後方で立ち上っている煙が原因だとは分かったのだが、脳が溶けてく気だるい、重い感覚に正常に判断が出来ない。

思考能力、停止。

「うん、ミノルなんだよ」

さらさらとアサギの髪を撫でながら、間近で悪戯っぽく笑うミノルもどき。

面白がるように、優しく魅惑的な声で耳元でそう囁いた。

焦点の合わない瞳のアサギを、そっと部屋のソファに座らせると、うっとりとしてミノルもどきは八重歯を見せて笑う。

すでに夢の中のアサギは、全くミノルもどきの声が耳に入っていない。なかった。

動かない身体、けれども力を解放して心地良い気だるさに、身を委ねる。

「いやー、今日は上玉が手に入った。この子が一番美味しそうかな。俺は好物を先に食べるのが趣味だから、やっぱり今日のディナーはこの子にしよう。」

……にしても、この子は男の趣味が悪いなあ」

ぶつぶつとにやけながらアサギを見ていたミノルもどき、不意に全身鏡に映った自分を見て怪訝に眉を潜める。

アサギの額に手を置いて、軽く瞳を閉じると掌に神経を集中させた。

ミノルもどきの顔が、ミノルからトモハル、アーサーへと変化していく。

「どうせ化けるなら美形の男に化けたいよなっ、このアーサーって奴はなかなかの美形だけど。」

この子はミノルが好きなんだな。趣味悪いなあ。何がいいんだろ」

このアサギが連れて来られた部屋。

中央にソファ、壁際に巨大なベッド、反対側の壁に銅製のドアが一つ、一輪挿ししてある野花が飾ってあるテーブルに、食器棚。

浮き立つ足取りでミノルもどきは棚から紅茶の葉を取り出し、お茶の時間を愉しむための用意を始めた。

ソファのアサギをにんまりと厭らしい笑みを浮かべ、見つめながらマントを颯爽と脱ぎ去る。

木製の紅茶入れに葉は半分ほど入っており、予め用意してあったと思われるやかんに向けて火の魔法を唱えた。

やかんの水を沸騰させるまで火の魔法を使い続けていた、恐るべき生活の知恵。

落ち着かない雰囲気、眠っているアサギの髪を撫でる。

「早く紅茶飲みたいな」

湧き出る唾液を必死に喉に押し込みながら、ミノルもどきはアサギと紅茶を交互に見比べていた。

不意に気がついたアサギの左腕、先程の戦闘でケガをしたのか肌が切れて血が出ていた。

固まりつつあるのだが、血の香りにミノルもどきは目を釘付けにしてそこを見つめる。

高鳴る胸の鼓動、理性が保てなくなる、ミノルもどきの好物の香りがしている。

「おいしそー。ちょっと味見を」

ミノルもどきは、ひょいっと、アサギの左腕を丁寧に取ると、そっと、傷口に舌を這わせた。

ピクリ、とアサギの身体が動いたが、そのままゆっくりと血を味わう。

ミノルもどき、正体は変化能力のある吸血鬼なのだ。
変態的な。

口に含んでから、驚愕の眼でアサギの顔を見つめる。

「な、なんて美味しいんだ!? 五本、いや、三本の指に入る美味
さ! 素晴らしいっ! 最高級だぞこれはっ」

再度、傷口を嘗め上げる。

恍惚の笑みを浮かべて、夢中で傷口を開く勢いで嘗め続ける。

アサギの顔が痛みの為、微かに歪んだ。

「っていうか、今までで一番美味しいかも。しかし、はて? 何処
かで味わったことがある血の味だな」

ミノルもどき、もとい変態吸血鬼のクーバーは、腑に落ちない様
子で湧いたお湯で紅茶を煎れると、紅茶を飲みながらアサギを見つ
め続ける。

記憶を辿って、血の味を思い出す。

「……エルフ? ああ、エルフの血に似てる気がする。人間の血
にしては妙に甘いんだよな、この子」

紅茶の香りと、血の香り、クーバーの脳を刺激する二つの香りに、
満足そうに至福の笑みを浮かべる。

嘗め回すようにアサギの全身をつま先から頭部まで、ゆっくりと
見上げ。

「血も美味しいけど、身体も美味しそうだね。我慢できないから、
食べちゃおうっ」

ミノルの姿のままのクーバーは、ひょいっ、とアサギを抱えるとベッドに移動した。

優しく寝かせて、覆い被さるうとするクーバー。

傍から見たら、アサギを襲おうとしているミノルであり、知り合いが見たら卒倒しそうだ。

色欲に溺れた瞳で、うつとりと眠っているアサギに吸い寄せられるように近づいていく。

刹那、ひゅ、と音がしてクーバーは間抜けな悲鳴を上げた。

「すぴー」

アサギの右足が蹴りを放ったのだ、偶然にもクーバーの鳩尾にヒツトする。

夢の中で魔物と戦っているのだろうか、妙に力の入った蹴りである。

いたたたた……情けなく項垂れながら、それでもめげずにクーバーはアサギに忍び寄る。

気を取り直して鼻歌交じりに、アサギの衣服に手をかけた。そこへ。

がちゃん、ぎいいいいい……。

勢いよく反応して振り返るクーバー、明らかにドアが開いた音だった。

首の骨が軋むほどに、物凄い曲げっぷりである。

「な、何奴っ」

部屋と外部の唯一の移動手段であるドアが開いた、ということは何者かが侵入してきたということだ。

ドアが開き、そこに立っていたのは少年と青年の境目の男。絶世の美少年と言っても過言ではない程の、美貌の持ち主だった。どのくらい美形かという通り過ぎた女性の九割が振り返って、再度魅入ってしまうほど。

見事なまでの紫銀の長髪は後ろで一つに結っており、濃紫の瞳は全てを見透かす様な鋭い光を放ち、長身でバランスのとれたかなりの美丈夫。

額に布が巻いてあり、無表情のその男は無言で部屋を一瞥している。

顔立ちからして大人びているのだが、歳は10代後半位だろう。

男のクーパーが見て、瞬時に敗北を悟る相手である。

更に、その男の背後の剣が妙な冷気を漂わせていた為に、身震いした。

剣もだが、その男自身も妙に能力が高いような気配がしてしまう。狼狽するクーパーに対し、全く冷静、いや冷ややか過ぎる程の視線を浴びせながら訪問者は鼻で笑った。

言葉を発していないのに、威圧感を痛いほどに感じる。

落ちて着ころ、こいつは人間だ。

「な、何者だ！ 何処から来たっ」

「見てたんだろ？ このドアから来たんだが」

「ふむむむむぬうう！」

しれつ、と言い放たれ低く唸るクーパー、隠然たる迫力の訪問者は呆れたように深い溜息を吐いた。

再度部屋全体を見回していた訪問者は、ベッドに寝かされているアサギに気がついた。

「勝手に洞窟を改造し、部屋を造り。何をしているのかと思えば女を連れ込んでいるのか？ 淫靡な洞窟になったんだな。この洞窟の

行き着く先が神聖城だなんて、笑わせる」

額の布を軽く持ち上げ、挑戦的に笑みを浮かべる訪問者に鳥肌が立つ。

無駄の無い鍛えられた身体に、背負っている剣が妙に合っていた。

「な、名は！？ 名はなんというっ」

搾り出したクーバーの声が震えていた、目の前にいるのは人間の男なはずなのに、吸血鬼であるクーバーより遙か上の強さを持っている気がして、恐怖で舌が上手く動かない。

訪問者から見て、ただ威勢だけで今まで生きてきたようなクーバーは相手にもならない。

全く力量が感じられず、相手にするほどでもない雑魚だと判断する。

名前を問われたが答えずに部屋を出ようと踵を返しかけたのだが、不意に思いとどまった。

ゆっくりと唇を開く。

「トビィ。トビィ・サング・レジョン。どうぞ、よろしく？」

喉の奥で笑い、訪問者……トビィは堂々と腕を組んだままクーバーを見下ろしていた。

その一方で、再会を

増加する羽音、馬車を護るように円を組んで、勇者同士を隣にせずには構える。

「この洞窟狭いから、派手な呪文が使えないのよね。ああ、面倒！
武器を大きく振り回す事も邪魔になるし、危ないし。あー、まあ、ホント面倒っ！」

マダーニがぶつぶつと小言を言いながら小剣を引き抜いた、呆れた様に吐き捨てたその言葉を待っていたかのように、ようやく敵の姿が見える。

予想はしていたが、蝙蝠だった。

洞窟に住み着く羽音の持ち主なんて、限定されるのだから当然だ。数が多く、標的が小さい為苦戦を強いられるであろうことは必須、まして、戦闘初参加の勇者が三人居る。

「無理だと思つたら迷わず馬車に乗り込んでくれ！」

隣のダイキに叫びながら、ライアンが大剣を振り数匹の蝙蝠を風圧で叩き落す。

それでも耳障りな羽音をたてながら、押し掛かる勢いで蝙蝠達は迫ってきた。

目晦まし程度で、マダーニ、ブジャタ、アーサーが火炎の呪文を唱えてみる、明るくして蝙蝠の行動を鈍らせる。

流石に火には近づきたくないのか、突進してきた蝙蝠に若干の乱れが生じた。

真似て、ケンイチ以外の勇者も必死に火炎の呪文を唱え始める。傍に寄って来ないのなら、それに越した事はない、皆必死だ。

「血吸うよ、こいつらっ！」

唯一呪文が使えないケンイチが悲鳴に近い声を発して、右腕に噛み付いてきた蝙蝠を必死で振り払っていた。

標的になっっているケンイチの護衛の為、左右のクラフトとブジャタが庇うように前に出る。

その血液の香りが空气中に混じり、他の蝙蝠達を誘き寄せている様子、ブジャター一人の火炎の呪文では追いつかない。

舌打ちして駆け寄ってきたサマルトは、中級の火炎の呪文を詠唱し、巨大な火球を蝙蝠の大群へと投げつける。

焦げ落ちた蝙蝠もいたのだが、何匹かは燃えたまま宙を飛び交っていた。

「ぎゃー！ あっつーっ！」

ミノルの叫び声、火達磨になった蝙蝠に突進されたらしく、軽い火傷を負ったようだ。

地面に落ちるまで飛び続ける火達磨蝙蝠、厄介である。

興奮して馬が暴れているのも、また輪をかけて厄介だった。

目を吊り上げマダーニが火達磨蝙蝠を叩き落していく、「これだから洞窟はっ」と苛立ちを隠さずがむしやらに剣を振るった。

不意に、マダーニの耳元で何やら男の声が聞こえた……気がした。

『若くて可愛いお嬢さん方』

若くて可愛いお嬢さん方。

唇を動かし、復唱してみる。

マダーニに誰かがそう呟いたわけではない、言われた対象は？

脳裏に何故か消えた五人の少女達が浮かんだ、呆けて立ち止まる

マダーニ。

わなわなと身体を小刻みに震わし、マダーニは齒軋りをする。

ギリギリ、と擦れる音が異様に大きく聞こえる、齒が折れるのではないか、というほどの力を込めて齒同土を擦り合わせているのだ。消えたのは五人とも女の子、マダーニより若い女の子。

「ちょっとまってえええいつ!! 私は何くも可愛くもないっていうのかーっ!! 私はまだ19歳だーっ!!」

絶叫するマダーニ、皆が一斉に注目する。

なんとなく、何処かで誰かに侮辱された気がしてならないマダーニは、青筋立てながら両手に意識を集中させる。

空中に火花が散り始めた、アーサーとブジャタが血相変えて止めに走るのだが、どうも間に合わなかったらしい。

マダーニは両手を掲げると、大声で自棄を起こしながら呪文を発動させた。

そう、怒りに任せて、何も考える事無く勢いで。

「巡る鼓動、照らす紅き火、闇夜を切り裂き、灼熱の炎を絶える事無く。我の敵は目の前に、奈落の業火を呼び起こせ!」

「な、バカな!? 火炎の呪文の最上級!? そんなものこの場で唱えたらっ!」

アーサーがマダーニに飛び掛り、背後から飛びつくのだが、豪快に振り払われてしまった。

他の皆には何故マダーニがこうも激怒しているのか、さっぱり解らないのだが、マダーニの逆鱗に触れたのは、何処かで誰かが呟いた言葉だった。

消えた五人の共通点は『若くて可愛い女の子』らしい。

自分がある中に含まれなかった事が、マダーニにとって最大の屈

辱だった。

くくく……、と乾いた声で笑いながら、狂気の瞳でマダーニは呪文を完成させた。

「全てを灰に、跡形もなく燃え尽くせっ！ 爆熱大火撃っ」

洞窟内に迸る眩しい閃光は、巨大に膨れ上がってマダーニの両手から洞窟内へと暴走するように飛び出していく。

「うわっ、本当に唱えたのですか!？」

珍しく慌てふためくアーサー、高く鳴く馬達の興奮を抑えるように指示を出し、自分はマダーニを止めに入る。

「あーっはっはっはっ！ 燃えてしまえ、燃えてしまえっ！ 私はまだ19歳で可愛い部類に入れると訂正しろっ」

……何を言っているのか理解し難い、とアーサーは頭を抱えた、が、止めなければ空気の温度も上昇しているし酸素の確保が厳しくなる。

確かに蝙蝠は瞬時に灰になっていくのだが、敵を一掃出来てもこちらの身が危ない。

「オレに任せろ、アーサー」

「ライアン殿。マダーニ殿に何があつたのです?」

「よくわからないが、彼女の場合は」

馬をクラフトとブジャタに任せ、ライアンはマダーニに近寄ると和やかにぼんぼん、と肩を叩いた。

こちらにも呪文を唱えてきそうな勢いで振り向き、ギラついた瞳

で睨むマダーニに、ライアンは怯む事無く笑顔で話しかける。

「マダーニは、若くて可愛いし、綺麗だから安心しろ」

それだけ。

ただ、その言葉を聞いた瞬間にマダーニは露骨に嬉しそうに声を上げると、ライアンに飛びついてごろごろと擦り寄る。

啞然。

ブスブス、と燃えていく蝙蝠達を背に、潤んだ瞳でマダーニはライアンを見上げている。

「私、若くて可愛くて綺麗？」

「ああ、誰よりも若くて可愛くて綺麗だよ」

「まつ！ 嬉しいっ」

誰よりも若くて……というのには無理があると思いますが、とアーサーは心の中で突っ込みをしたがあえて口には出さなかった。

とりあえず、こんな解決の仕方は納得がいかないが蝙蝠達も一掃出来た事だし、消えた五人を捜しに行く事にする。

発狂の原因はなんだったのか、と尋ねられると、マダーニはむすっ、と不貞腐れながら口を閉じた。

もうこれ以上触れるな、ということらしい。

軽い火傷を負ったミノルと、蝙蝠に噛まれたケンイチの手当てをしてから、五人が消えた箇所を隈なく調べる。

特にこれといって不可解な様子は、全く見受けられない。

よって、仕掛けがあるわけではなく、何者かの術によって消えた可能性が高かった。

「進みながら、何か不審な場所がないか搜索しましょう。気を緩めず」

アーサーの言葉に一同は深く頷き、ゆっくりと洞窟内を進んでいった。

『男の趣味が悪いなあ。どうせ化けるなら美形な男に化けたいよな』

ミノルの耳に、聞いた事のない男の声が聞こえてきた。

その言葉が自分について言われているようで、思わず立ち止まって様子を伺う。

「悪かったなつ、美形じゃなくて！」

突然大声で叫んだミノルに、一同が怪訝に振り返った。

マダーニの次はミノルが、何かしらの幻聴によって精神に支障をきたしているようで。

「だ、大丈夫かミノル？」

ダイキに声をかけられ、ミノルは苛立ちながら壁を叩いた。

「なんか、何処かで誰かに自分の悪口を言われた気がした」

「悪口？」

「美景じゃない俺を選ぶと趣味が悪いんだとよ」

ぶはつ、と吹き出したダイキの隣でトモハルが「本当の事じゃないか」と淡々と呟く。

それにミノルは更に激怒し、その場で取っ組み合いを始めた。

そんなことしてる場合じゃないよつ、と必死で仲裁に入るケンイチだが、二人は止める気配がない。

地面に転がりながら、上の位置を取ろうと必死に二人とも攻防戦

を繰り広げる。

「ぎゃーっ!? やめてくれーっ!」

急にミノルが顔面蒼白でそう叫んで顔を両手で覆い隠した、勢い余ってトモハルは一発殴ってしまふ。

いきなりやめてくれ、って言われても……と苦笑いするトモハル。右のストレートが容赦なくミノルの頬にヒットしたわけだが、ミノルは低く呻いただけでトモハルに構う事無く、両手を覆い隠したまま何やら喚いている。

「今度は何だ」

ライアンが苦笑いをしながら歩み寄り、ミノルを片手で引つ張り起こすと、無理やりミノルの両手をこじ開ける。

現れたミノルは、何故か茹で蛸のように真っ赤だった。

上手く言葉が口から出ないらしく、小刻みに身体を震わせて口を鯉のようにぱくぱくさせていた。

「落ち着け、一体どうした」

ライアンに肩を揺すられても全く反応しない、困り果ててライアンは首を竦める。

トモハルに殴られて反撃しないなんて尋常じゃないっ、と駆け寄るケンイチにもミノルは反応しない。

やがて、ミノルは荒い呼吸を繰り返しながら、咳き込み始めてしまった。

「だ、え、わ」

「は?」

ミノルがようやく声にならない声を発し、半泣きで縋る様にケンイチに助けを求める。

慌てて駆け寄るケンイチにダイキ、そしてトモハル。口元に耳を寄せて、懸命に言葉を聞き取ろうとした。

「俺が、アサギを」

「ミノルが、アサギを!？」

「俺が、アサギを、押し倒してるっ」

「ミノルが、アサギを、押し倒してる!？ ……えー!？」

聞き取った言葉をケンイチが発してから、絶叫。聴き終えたミノルもダイキもトモハルも、絶叫。

「解りやすく説明しろっ、どうしたんだ!？」

「な、なんか今、俺の偽者が、アサギを押し倒してるんだよっ」

「えー!？ えー!？」

ミノルには、どうやらアサギとクーバーの映像が脳に流れ込んできた様だ。

自分で言ってから恥ずかしさのあまり、大声で喚くミノル。

啞然とアーサーとクラフトが、ミノルの様子を見つめている。

「どういふことだと思います？」

「彼の言う事が真実ならば、アサギが危ないということです。敵に捕まっている可能性が。急ぎましょう、こんなところでくだらない事に時間を割いている余裕はありません」

馬車を連れて先を急ぐアーサーの後を、慌てて皆追った。

ミノルだけが、悶絶を繰り返しながら遅れて歩く。

彼らは知らなかったが、現在この真下に造られた部屋に、アサギとクーバーとトビイが居たのだ。

その頃、アサギが消えてしまった故に慌てていた『若くて可愛い女の子』チーム。

純白の部屋を隅から隅まで走り回り、何か手がかりを捜した。

吸血鬼と名乗った敵に攫われたアサギ、泣きじゃくるユキの手を引いてムーンは目で見えるものではなく、微かな空気の乱れ、魔力の鼓動を探していた。

「ミシアさん！ この位置を！」

何か見つけたらしく、ムーンは自分と同等の魔力を感じるミシアを呼ぶ。

駆け寄ったミシアに、何の変哲もない壁を指し示した。

手を壁に当て、継ぎ目がないか捜してみるが、もちろん何もなければ、両手を壁につけて瞳を閉じ、魔力を注ぎ込むと、確かに何かを感じる。

「この位置、何かあるわ。ムーンさん、一緒に魔力を解除してみましよう」

「はいっ」

ユキをアリナに任せ、二人は同時に瞳を閉じると壁に手を当てて神経を集中させる。

冷たい壁の向こう側に、光が見える。

額に汗を浮かべながら懸命に二人は念じ続けた。

パキン、音が何処かで聞こえ、それまで見えなかった扉が浮かび上がる。

歓声を上げる二人、拍手するアリナ。

「アサギちゃんは、アサギちゃんは!？」

「大丈夫、さ、捜しに行こう!」

徐々に現れる扉、ノブが自分達の頭よりも高い位置にあった為、アリナがムーンを肩車し扉を開けさせる。

宙に浮かぶドアの先へと、アリナが皆を肩車で運んだ。

異性もないことであるし、この際スカートがどうか、足を広げてよじ登ろうが関係ない。

ムーンが進み、ミシアが進み、ユキが進み終わるとアリナはその場で軽くジャンプを繰り返して、徐々に後ろへと下がっていった。

ターン、ターン、小気味良いリズムカルな音、アリナは息を大きく吸い込むとそのまま全力で駆け出し、扉目掛けて大きく跳躍した。地面を力強く踏み込んで、扉の中へと転がり込む。

成功! につこりと余裕の笑みを浮かべるアリナに、ユキが手を差し伸べて安堵の溜息を漏らす。

扉の先は階段があった、四人は大きく頷くとアリナを先頭にして階段を上る。

行き止まりだったが、それもムーンとミシアが二人掛りで魔力を注ぎ込み再び幻覚を打ち破った。

先はあの敵の住処か、それとも別の場所なのか。

勢いよくドアを蹴り上げてアリナが飛び出ると、そこは。

「ありや?」

微かな炎の揺らめき、洞窟へと戻ってきたようだ。

地面に焦げたものが大量に転がっている、何かの死骸らしい。

四人は、右へ行くべきか左へ行くべきか解らず、その場で立ち止まる。

「一方通行ですから、どちらかに行けばジェノヴァ、どちらかがクリストバル。考えている暇などありませんし、進みましょう」

「そうだね、クリストバルに出れば引き返せばいい。でも、アサギが心配だから道は間違えたくないな。ボクは右だと思っんだ」

「根拠は？」

「地面に落ちてる焦げた死骸、これが右側のほうが多い。右から敵が来た可能性の方が高いだろ？」

「なるほど、進む先から敵が来たのほうが、しっくりきますね。右へ行きましょう」

四人は早足で右へと洞窟を進んだ。

何が現れてもいいように、逸れないように、速度は落ちるが手を繋いで横一列で歩く。

やがて、別の足音が聞こえ始めたのでアリナが焦って皆を引き摺り駆け出した。

「あ、みんなだ！」

「あぁっ、お嬢！　そして皆さんっ！　よくぞご無事でっ」

離れ離れになっていた一行は、洞窟内で再会した。

一人、アサギを除いて。

「あとは、アサギだけですな」

アーサーの投げかけに、皆が神妙に頷く。

もうすぐ出口らしく、先程から前から空気が流れてきている。

「この洞窟は、幻覚で造られています。魔力で探り当てていけば、別の空間を発見できます。アサギはそこにいるのでしよう。やってみましょう」

ムーンの意見に魔力を使える者達が賛同し、バラバラと洞窟内に散って行った。

勇者が1人行方不明、彼女が居ないと意味がない。

勇者達も1人欠けた五人で、揃って見様見真似で魔力を集中させて何かを探す。

アサギが、いない。

アサギを、捜さねば。

忘却の花冠くアサギ

トビイの威圧感に怯えているクーバー、小物の敵にトビイは戦闘意欲すら沸かず。

「人の愉しみを邪魔するほど、性根は腐ってない。まあ勝手にやってくれ、急ぎの用なんで、じゃ」

暫く部屋を特に興味なさそうに軽く眺めていたのだが、トビイはそれだけ言つと踵を返し、ドアに手をかけた。

なら最初から帰ってくれよ！ と叫びたかったクーバーであったが、生憎この人間の男に勝てる気が全く無かったので言葉を飲み込む。

人間である筈なのに、魔族である自分よりも遥かに超越した力を秘めている様な気がして、この場をやり過ぎたほうが自分の為である気がして。

確かにクーバーは吸血一族の中でも魔力が格段に低かった、それは自身でも分かっている。

唯一の能力といえ、他人の記憶からその知り合いの名前と顔を読み取ることが出来、その人物に変化することが出来る……というあまり役には立たない能力だった。

それも、最初は声色しか使えなかった。

が、ある時一族が捕らえた娘がエルフでクーバーもお零れを授かり血を飲んだところ今の能力が開花しただけ。

エルフの血は、魔力増幅に繋がると確かに聞いたことがあったが真実だった。

他の仲間は夜な夜な堂々と人間を襲っていたが、クーバーにはその度胸もなかった。

故に戦闘には参加せずに、こうしてひっそりと自分好みな『若く

て可愛い女の子』を攫っていたのだ。

これくらいならば、造作も無いことだ。

抵抗されるのが面倒だし、嫌がる娘を無理やり……というのはクーバーの性に合わず、娘が好意を抱く相手になりすまして、恋人気分を味わったほうが好きだ、というクーバーの考え方から過去に何度も同じ手口で娘達を喰らってきた。

今回は久々の上玉だ、トビイの台詞を聞いて胸を撫で下ろし安堵したクーバーは、再びアサギに向き直る。

腕の中で小さな寝息をたてているアサギを見て、ほくそ笑むと傷が疼く様なもどかしい感覚に襲われた。

早く、この娘をご馳走にならなくては！ 身体が欲しているっ。

細くて白い首筋を見つめ、舌舐めずり。

その時、偶然にも踵を返したトビイが何かしらの気配を感じて振り返り、アサギの顔を捕らえた。

キィィ、カトン……。

先程も耳に届いた不可解な音、アサギを瞳に入れた瞬間に脳内で鳴り響く。

変態男の腕の中に居る少女を見て、啞然とするトビイ。

アサギ、だ。

小さく漏らした声は、驚愕の瞳と共に。

「アサギ……？」

今度は明確に声を発したが、クーバーには届かない。

凝視するが、間違いなかった、見間違えるはずもなかった、アサギだ、アサギが居る。

約一月捜し続けていた、愛しの娘・アサギが目の前にいるではないか！

ただ、髪の色がトビイの知っているアサギと違っていた。
トビイが知っているアサギは、髪が緑色だった、新緑を思わせる
鮮やかな緑色だったのだ。

だが、この目の前のアサギは漆黒の髪、けれども、人違いである
はずがない。

見間違えるはずがなかった、どれだけ遠くに居ても、どんな人混
みに紛れていても、探し出せる自信があった。

髪の色が違うのなら、普通ならば人違いだと思うだろう。

けれどもその少女から発せられる空気が『アサギ』のものであっ
た。

「っー！」

髪の色のことを考えている余裕はない、今その瞬間にもアサギは変
態男に何やらいかかわしいことをされようとしている。

トビイの視線を感じ、クーバーは振り返ると鬱陶しそうに眉を顰
め、手を蠅を追い払うごとく振る。

早く出て行け、そういう意味合いだったが、クーバーは血相
抱えてアサギを抱きかかえたまま宙に飛び上がった。

「貴様あつ、アサギに汚い手で触るなっ」

大声でトビイが叫ぶ、そのまま一直線に駆け出し、背の魔力を放
ち続ける長剣を勢いよく引き抜き斬りかかって来た。

その気迫に思わず喉の奥で悲鳴を上げて、クーバーは辛うじて紙
一重で攻撃を避けた。

宙に浮かび安堵の溜息を漏らしたのも束の間、直様地面を雄雄し
く蹴り上げて素早く斬りかかってくるトビイに再度悲鳴を上げる。

「ちいっ！」

紙一重で避けられ、トビイが舌打ちした。

繰り出される剣のその速さに、激震せずにはいられないクーバー。コイツ、本当に人間なのか？ 下手な魔族よりも余程慣れた動きをしているっ。

訝しげにトビイを見つめ、「ちよつと待った！」とクーバーは休戦を申し出ることに。

「落ち着け、トビイ・サング・レジョン君」

右手を突き出し、爽やかに笑ってみるクーバー、だが、トビイは顔色変えず何度も斬りかかって来る。

必死にそれをかわしながら、なんとか話し合いの場を作ろうと懸命にクーバーは天井付近を浮遊した。

「こ、この子はつい先程恋人になったばかりの娘なんだ。これからお愉しみの時間なんだ、邪魔しないでくれないか？ 人の愉しみは邪魔しないと云ったじゃないか」

確かにトビイは数分前そう言った。

男に二言はあるまい？ クーバーは一か八かの賭けに出る。

「相手による。貴様ごときがアサギと愉しむだと？ ふざけるなあっ！」

火に油を注いだらしい、怒りに身体を震わせながらトビイが跳躍し、剣先でクーバーの瞳を狙う。

全速力で天井の端へと移動し、荒い呼吸を繰り返すクーバーだったが、そのトビイの言葉に違和感を感じ、遠のく意識で懸命に『違和感』を考えた。

ああ、そつだ。

トビイはこの少女・アサギを知っているらしい。

けれども、アサギは？

クーバーはアサギの額に掌を置き、きつく瞳を閉じて何かを探る。そう、アサギの記憶には、この『トビイ』という存在がないのだ。片隅にも残っていない、アサギはトビイを知らない。

アサギの記憶を見続けるクーバー、呼び戻した記憶から現われる男達の顔、やはり何処を見てもトビイが存在しない。

「トビイ君とやら、何故この子を知っている？ 人違いじゃないか？ それとも何処かで擦れ違ったのか？ この子の記憶にトビイ君は存在しないんだ」

「ふっ、戯言を。アサギはオレの命の恩人で約一月前の一週間、四六時中付き添って看病してくれたんだ。別れ際に再会を約束して、な。」

オレがアサギを見間違えるはずもなく、貴様がアサギに触れてよいわけもなく」

聞きながらクーバーはそつと涙する、気の毒過ぎるのだ、そんな強烈な出来事があつてもアサギにはそんな記憶がないのだから。

しかし、幾らなんでもそこまでの記憶、少しくらい残っていても良い気がするのだが……クーバーは再度探るべく掌に神経を手中させた。

が、やはり何度見ても結果は同じだ、アサギの記憶に『トビイ』は存在していない。

こんなに美形なのに、忘れられることもあるんだな……クーバーは悲恋だね、と鼻をすすった。

アサギの安らかな寝顔を見つめ、勝ち誇った様にトビイに皮肉めいて笑う。

ああ、そうせ化けるならこんなガキより、トビイ君みたいな美男

子に化けたかったよ、と精一杯の皮肉。

化けたくとも化けられなかった、アサギの記憶に居ないのだから、その刹那。

突如クーバーの脳裏に多大な量の記憶の断片が、洪水の如く流れ込んできた。

「な、なんだ!？」

それはアサギから流れってくる映像のようだ、掌に電撃が走り、痺れて来る。

外したくとも何故か掌が動かなくて外せない、小刻みに震えている掌が、カマイタチに襲われたのごとく軽く斬られた。

膨大な映像、見知らぬ男達が数人そこにいる。

その中に、一人だけ見知った男が居た、そう、トビイだ。

居た!

思わずクーバーは叫んだ、瞳を凝らすとトビイ以外に男が三人居る。

流れ込む映像を振り払う如く、クーバーは自身の頭を激しく振った、けれども意に反して映像は更に鮮明になっていく。

ついに、音声まで聞こえ始めた。

「ば、ばかな!？ 俺はこんな能力持ってないぞ!？」

宙で身悶えているクーバーの様子に、トビイは剣の構えを解かず見上げている。

以前戦った魔族に、姿を変貌させると格段に魔力が向上した厄介な敵が居た、ソイツと同類か？

冷静に相手を見定めながらも、何かから逃げようと怯えているようなクーバーに眉を顰める。

クーバーは、恐怖心に襲われていた。

何故かしらその先の映像を見るのが、怖かった。

知らない人物達だ、たかが他人の記憶のはずなのに、戦慄に身体を震わす。

映像が激しい光を放ち、クーバーを襲う。

……花畑だ。

色とりどりの花が咲き乱れる、美しい光景である。

その中央に、クーバーは突っ立っていた。

啞然と周囲を窺う、やがて手を繋いで仲睦まじそうな二人が歩いてきた。

アサギだ。

アサギとトビィに若干雰囲気似ている男が、笑みを絶やさずに歩いている。

別に、何も不自然な箇所は無い、有り触れた羨ましい気もする恋人同士だ。

「これを」

「？ これは？ 綺麗な深紅の宝石！」

「こ、これさ、あげる。に、似合うと思って」

「ホント！？ ありがとう！ ずっと、つけててもいい？」

「うん。ずっと、持ってなよ」

男がアサギに似た少女に首飾りを手渡したようだ、小さいながらも品良く装飾してあるルビーが、淡く輝いている。

愛おしそうに、隣の少女を見つめている男。

時折触れることに抵抗を覚えながらも、ぎこちなくぶつきらぼうに、震えながら手を握り、髪を撫で、頬に手を触れ。

不可侵の聖域のごとく、敬いつつ恐怖に焦がれつつ、思うように少女に触れられないらしい。

恐怖に怯える映像ではない、けれどもクーバーは背中に嫌な汗をかいていた。

後方を見てはいけない、闇に引きずり込まれ、何かで全身を骨ごと砕かれるようなそんな感覚が消えない。

男は足元の花を一輪、恭しく摘み取るとアサギに似た少女の髪にそつと挿した。

新緑の髪の少女、顔を赤らめて笑う。

純白の花が可愛らしく少女の髪を飾り、二人は笑い合つと再び手を繋いで花畑を歩き回つた。

知りたくない、聞きたくない、観たくない、この先は観たくない！！

産まれて初めて味わう感覚は絶望と悲哀、胸を切り裂かれる苦痛、闇に属するクーバーすら恐れる巨大な暗黒の塊が迫ってきていた。

急に映像が一転した、仄暗い小屋の中、二人がひっそりと佇んでいた。

少女が頬を桃色に染めながら、そつと手を胸の前で組み、何か呟いている。

「愛して、います」

愛しています。

少女はうつとりと目の前の男にそう告げていた。

愛の告白、想いを込めて、その言葉に全ての想いを詰め込んで。

「愛しています」

再度、少女は呟いて嬉しそうに小さく笑つた。

そんな少女とは裏腹に、男の表情は晴れない、というより冷淡な眼差しで少女を見下している。

「はっ……」

長過ぎる沈黙の後、男が搾り出した声に少女は瞳を軽く見開いた。次の瞬間、後方のベッドまで突き飛ばされ少女は軽く呻く。あまり柔らかくはないベッド、衝撃に混乱を憶えながら少女は瞳を開く。

目の前に男が居た、押し倒される格好で覆い被さられている。赤面するどころか、男の雰囲気少女は身を竦ませて声を出せなかった。

髪を無理やり握られ、強く引つ張られる。

「ひあつ!？」

「愛してる、ねえ? お前はオレを馬鹿にしてるのか!? ああ!？」

身体を震わせている男、どうやらそれは怒りだ。

男の変貌についていけないのか、少女は小さく身体を窄めると、髪が引き抜かれる痛み耐えながら言葉を繰るし紛れに発する。

「教えてもらったの。ベシユタ様に教えてもらったの。胸がとくんつて脈打つて。観ているだけで心が震えて。名前を何度も呼びびたくなって。触れていたくて触れてもらいたくて。声が聞きたくて、一緒に居たくて。笑ってる顔が観たくて隣に居ると安心できる。

それを、愛してるって」

「ああそうか、そうか、よかったな! 本当にお前は狡賢く生き延びていける女だよ。まあ、そうだろうなあ、ベシユタは貴族だもんな? オレなんかより余程地位が上だし、取り入って損は無い相手だよな?」

「……馬鹿にしゃがってっ」

胸倉を掴み、右手で容赦なく少女の頬を殴る男、鈍い音がして少女は大きく叫び声を上げた。

「なんで、なんで怒ってるの」
「うるせえっ」

左頬を殴られる、口内が切れて血が唇から伝った、咽ながら涙を
うつすらと浮かべる。

わけがわからず、震える手で男に触れようと手を伸ばすのだが、
痛々しい音がして手は撥ね退けられた。

「触るな、気持ち悪い」

汚らしいものを見る目だった、その視線には嫌悪感しか感じら
れない。

その視線を投げかけられているのは自分なのだど理解し、少女は
口を震わせながら何か言葉を探す。

「観るな、気持ち悪い」

びくう、と身体を更に縮込ませると少女はもう何も、言えなかつ
た。

脳に与えられた衝撃は、少女の思考をほぼ停止させた。

触るな、観るな、気持ち悪い。

どうしたらよいのか分からず、少女は大粒の涙を幾つも流す。

この間まで、四六時中手を繋いで居たのに、飽きることなく二人
で見詰め合ったのに。

「ああ、本当にお前は立派だよ、どうすれば相手に気に入られるか
解ってるよ。身体を使って取り入るなんてお前もやるよな」

男が何を言っているのか理解が出来なかった、少女は虚ろな瞳で

男を見ている。

「この阿婆擦れが。何が土の精霊最大の女、だ。笑わせるよな？
ただの色欲に駆られた愚者だろう！？ 何が女神だ、笑わせるっ」

罵声を浴びせられながら、少女はそれでも懸命に男に言われた言葉の意味を考えていた。

愛しています、そう言うてはいけなかったのか？

教えて貰った素敵な言葉を、一番大好きな大切な人に伝えただけなのに、これは一体どういうことだろう？

手を、繋いで。

一緒に、笑って。

ずっと、居て。

触らせて、観させて。

「あ、あの、わたし、わたし。愛して」

「うるせえ！ 意味も解らずにお前ごときがそんなこと言うなっ」

バキィっ、男はベッドに少女を打ち付け、何度も何度も可愛らしい顔を殴りつけた。

容赦なく強打され、少女は幾度も悲鳴を上げるのだが徐々に声すら発せられなくなっていく。

血が男の拳に滲んだ、鈍い音が小屋に響き渡る。

「可哀想なおれ達、とんだ茶番に付き合わされていい迷惑だ。時間返せよ、おれ達の時間を返せよ！ お前に出会ったせいで、無茶

苦茶なんだよ！ くそったれ」

ぐったりと動かない少女に、それでも男は手を緩めない。

気が治まらないのか暴行は全く止まらなかった、少女は只管それ

を受け止める。

抵抗する気力もないらしく、ただなすがまま。

「で？ 抱かれた感想は？ 快楽に溺れて後はどうでもいいって？
そんなに好きならオレも教えてやるうか、お前が言ってる『愛』
っての」

男は動かない少女をうつ伏せにすると、シーツを破り裂いて両手をベッドに縛り付ける。

切れて血まみれになった口に、無理やりシーツを詰め込む。

不慣れな感覚に、ようやくうつすらと瞳を開いた少女に気づいて、唾を吐きかけ憎悪の瞳を痛いほど浴びせた男は。

「死ねよ。消えろよ。お前が居なくても誰も困りゃしないんだから」

口を塞がれている為、悲鳴は部屋に響かない。

細い腰を持ち上げた男は、無造作に、憎しみを籠めて自分を少女の中に突き入れた。

少女は。

少女が痛かったのは。

何度も殴られた顔でもなく、無理やり開かれた身体でもなく。

ただ。

その男に言われた言葉で胸が痛くて。

ただ、『愛している』と伝えたかった。

自分の抱いていた想いを伝えられる言葉を教えてもらったので、男に言いたかったのだ。

「今後二度とオレの前に姿を見せるな」

小屋に一人きり、傷ついた少女を残して、身体を自由を奪ったま

ま男は出て行った。

行かないで。

行かないで。

虚ろな瞳でドアが閉まり、消えていった男の背を追いかける。

光が徐々に小さくなり、パタン、という音と共に男の姿は完全に消えた。

「……………えぐっ」

口から、シートを吐き出すと、止め処なく溢れる涙と嗚咽に埋もれて、少女は絶叫する。

「うあ、うわあああっああっ！」

行かないで、行かないで。

傍にいて、傍にいて。

笑って、笑って。

手を握って、握って。

名前を呼んで、呼んで。

名前を呼ばせて、呼ばせて。

カシャン……………。

首から、何かが零れ落ちた。

ぎこちなく視線を移すと、男が以前くれた首飾りだった。

大好きな男の存在を表すような、深紅の宝石の首飾り。

遠い昔の記憶のよう、少しはにかみながら、大好きな柔らかな笑顔でこれを渡してくれた男。

その笑顔が好きだった、傍に居ると心がじんわり暖かくなって、安らぐことが出来て。

『うん。ずっと、持ってなよ』

髪をくしゃっ、とかき上げて不慣れな手つきで首にこれをつけてくれた。

似合うよ、と笑ってくれたその男は。

その男は。

「いか、ないで」

自由の利かない身体で懸命に腕を伸ばそうとする、消えて行ったドアの向こう側、男を求めて手を伸ばした。

「いつちゃ、やだ」

涙で薄れていく風景、追いかけては二度と会えないかもしれない。

少女は足を動かした、痺れているが動けないこともない、ずるずると這うようにベッドを移動する。

「一人に、しないで。行かないで、そばに、いて」

ベッドから転げ落ち、床で頭部を打つ、低く呻きながらも少女は自由の利かない腕に力を込めてドアを目指す。

『今後二度とオレの前に姿を見せるな』

不意に先程男に言われた言葉が甦る、少女は身体を凍りつかせて仰け反った。

あの、視線が怖かった。

本当に、憎まれているのだと思った。
追いかけては、いけない気がしてしまった。

「きらわ、ないで」

いい子にするから、嫌いにならないで。

役に立ってみせるから、嫌いにならないで。

「ひ、ひあっ」

頭の中で男の言葉が甦る、『気持ち悪い』『見るな』『触るな』、少女の心に幾つも幾つも言葉の破片が突き刺さる。

半狂乱で少女は床をのた打ち回った、恐怖で身体を震わせて、胸の痛みから逃れようと悶える。

クーバーは少女を見ながら、足を震わせていた。

その少女が抱え込んでしまった巨大で鋭利な破片、極めて凶悪な暗黒に覆われており、絶望しか生み出さない。

知らずクーバーは胸を押さえた、瞳から一筋の涙が零れる。

少女は、何故あの男をそこまで追い求めるのだろう。

もう、いいじゃないか、酷いことを言われたのならもう、離れればいいじゃないか。

けれども、少女はクーバーの目の前でドアに向かって這って行く。

ただ、少女は。

その、男の傍に居たかったのだと。

ただ、自分の想いを伝えたかったただけなのだ。

願わくば。

「いつしよに、い、て」

少女の渾身の願いに応えたのか、ドアがゆっくりと開く。

クーバーは開きかけたドアを見つめ、安堵の溜息を漏らした。先程の男が戻ってきたのだろうか？ 助けに戻ってきたのだろうか？

現われた男を見て、クーバーは瞬きを数度繰り返す、知っている顔だ。

「トビイ？」

漏らしたクーバー、入ってきたのはトビイだった。

「っ！？ どうした、何があったアース！ しっかりしろっ」

「トロイ……トロイ？ たすけ、て、トロイ」

焦燥感に駆られ、トロイと呼ばれたトビイに似た男は床の少女を抱き起こす。

何度も『アース』と少女を呼びながら、抱きかかえたままトロイは小屋を飛び出し、川の水でアースを丁寧に洗っていく。

「たすけ、て。トロイ、たすけ、て」

「しっかりしろっ！ どうした、何があったんだっ」

うわ言の様に助けて、としか繰り返さないアース、舌打ちしてトロイは川の水を自身の口に含むと、アースに口付け口内を洗浄する。血の味がする、トロイは繰り返し口付けをしては、水をアースへと運んだ。

冷えた水が、アースの体内へ送り込まれ、ビクリと身体を引き攣らせる。

感覚が次第に戻ってくる、戻ってきたと同時に再度、あの男の声が言葉が視線が甦った。

驕慢な態度、振るわれた暴力。

「あ、あぁっ！ ごめんなさ、ごめんなさっ！！」
「アース、どうした、しっかりしろっ」

絶叫。

アースはトロイにしがみ付きながら、何かから逃れたくて声を張り上げた。

押し潰される、悲哀の想いは極限に達する。

男はもう、笑わない。

男はもう、傍にいない。

それは。

……私がかかしてしまったから。機嫌を損ねてしまったから。でも、原因がわからない……

それとも。

最初から、嫌われていたのだろうか。

最初から。

偽りの関係、通じていた想いは誤り。

身勝手な妄想、独り善がりな執着。

あの日の花畑は、忘却の彼方。

髪に挿してくれた一輪の花は、幻惑。

忘却の果てで見たものは、鮮やかな大輪の花。

一輪の花が喜びで咲き乱れ、花冠になった遠いあの日は。

……少女の、幻覚だったのか。

一人、漆黒の闇の中で緑の髪の少女は泣いていた。

周囲に何もなく、誰もいなくて、一人で泣いている。

何かを探して傷ついた足で歩き回っていたが、何もない虚無の空間。

それでも、ないとわかっていても少女は探し求める。

探し求めているものは、少女が欲しかったものは。

哀しくて。

寂しくて。

辛くて。

焦がれて。

欲して。

求めて。

手に入らないと解っていても。

それでも追い求める。

声を聞かせて。

姿を見させて。

笑顔が見たい。

笑った声が聞きたい。

元気に走り回って。

無邪気に、生きて。

幸せに、なつて。

出来れば、私を。

……嫌わないで。

少女が不意に顔を上げた。

目を見張るほどの豊潤な新緑の髪、神秘的な光を灯す深緑の瞳。

桃色の頬、濡れた赤いサクラランボの唇。

けれど。

外見が眩く美しくても。

心から血を滴らせ、息が詰まるほどの重圧が少女の身体を覆い尽くしている。

纏わりつく深い悲しみの中、小さく光を放つ少女。

見るもの全てを魅了する少女、涙が頬を伝いはらはらと流れ落ちる。

それすらも、綺麗で。

抱え込んだ悲しみが苦痛でも、少女は綺麗で瞳が逸らせない。

「さむいよう」

いかないで、ひとりにしないで、そばにいて、さむいよ。

徐々に、少女の身体が崩れていった。

風に舞って宙に浮かび上がる木の葉のように、ざあっ、と消えていく。

「うわああああああっ！」

クーバーは絶叫した。

この世の終わり、生命の死。

森羅万象全てのものが、消え失せる感覚。

花畑は、死の荒野に。

乾いた大地が惑星を覆い、生き物は逃げ場を失い死に絶える。

大地は芽を生む力もなく、罅割れ乾き、物言わない。

遠い未来。

それは、遠い未来の映像？

クーバーの身体が、砂のように崩れ落ちていった。

泣き喚いて零れる身体を必死で救い上げるが、指の隙間からクーバーの身体はさらさらと落下する。

「グワアアアアッ！」

手が、消えていく。

ボロボロと零れながら、風化していく。

クーバーは錯乱状態に陥った、誰でもいいからここから出してくれ。

これは、夢だ、幻覚だ。

この少女の夢の映像に入ってしまったただけなはずなのにつ！？

「ギヤアアアアッ」

絶叫。

眼をカッと開き、クーバーは口から唾液を吐いた。

腕が痛い、左腕が痛い。

見ればクーバーの左腕がなかった。

気がつけばそこは、もとの部屋。

クーバーが改造した洞窟の一室に、ようやく戻ってきたようだ。

現実に戻ってこれたのだ、クーバーは乾いた声で笑う。

状況把握に時間を要した、左腕で支えていたアサギが消えている。

見ればトビイが落下したアサギを華麗に受け止め、優しく抱きとめている。

床に転がる一本の腕、クーバーのものだ。

どうやらトビイに腕を斬られたらしい、その激痛で映像から現実へと引き戻されたようだ。

深紅の血液が、盛大にシートに、部屋に、降りかかっていた。

トビイと、視線が交差した。

慈愛も何もない、アサギに向けていた時とは一変し、冷淡な視線がクーバーに投げかけられている。

殺される、と直感した。

「答える、アサギに何をした。何故目を覚まさない」

「っ、な、何もしていない！ その香は若い娘の思考を停止させ、身体的自由を奪うんだ。べ、別に何もしていない」

狼狽するクーバーの台詞を通り、視線を辿ると煙を上げている香炉に気づいた。

トビイは忌々しそうに舌打ちすると、剣を素早く振り風圧で火を

消しさる。

「他に何をした。オレのアサギに何をした」

凜と響く、威圧感のある声、クーバーは歯を震わせて首を横に振る。

「そ、それからっ。それから、ち、血を。その子がケガをしていたから、血を、嘗めた。それだけだっ」

アサギの左腕に、確かに出血した痕がある、トビイは害虫を見るような視線でクーバーを睨み付けた。

「そうか、じゃ、死ね」

次の瞬間、待ってくれ、と言おうと口を開きかけたクーバーの視界に、隼の様な優雅で敏速な剣の舞が映った。

アサギを優しく床に下ろしトビイは地面を蹴り上げ跳躍すると、クーバーの胸を一突きする。

回避出来なかった。

血走った瞳で身体を仰け反らせ、クーバーは絶命する。

停止寸前の思考、吐き出される血と共に、言葉が投げ出される。

「この娘、人間じゃな」

最期に、この言葉を。

逆流する血に紛れて出た言葉を、トビイは聞き取ることが出来なかった。

クーバーが現実に取り戻される瞬間、泣いていた少女を見て痛感したこと。

それは。

……この娘、人間ではない、魔族でもない、もつと別の存在だ。魂が、そう感じてしまった。

艶やかな花畑、楽園と呼ぶに相応しいその場所に、一人の少女が立っている。

色取り取りの花冠を頭上に、寂しそうに微笑んでいる。

忘却の果てで、一人花冠を抱いたまま。

クーバーは安堵した、何故か、安心感に包まれた。

記憶なき、母の腹にいた時の様に、何かからも護られているまどろみの中。

アナタ様八誰デスカ

クーバーは少女に、話しかけた。

少女は、何も答えなかった。

ただ、哀しそうに寂しそうに、微笑んだままだった。

調和の風音／リョウ・ミカワ

勇者達が、異世界へ旅立ってから地球の日本、某校庭にて。

「どうして、どうして僕は選ばれなかった……？」

亮が呟いた、その言葉。

共に居られないのなら、アサギの傍を離れなければならないのならば。

亮のその強い想いが内に秘める力を呼び起こすのに、時間はかからなかった。

勇者としてその場で選ばれなくても、その器は十分過ぎる程彼にはあったのだ、けれどもそれぞれの石は、彼を指し示さない。

最初は小さな風が亮の頬を撫でた、優しく、やんわりと。徐々に速く強くなる風、砂塵が校庭を舞い、鳥達が怯えて遠くへと飛び立っていく。

「誰か、誰か！　どうか、アサギをっ」

自分が共に居られないなら、同等の力を持つべき者へと、せめて託そう。

このもどかしい想いを、誰かに託さなければ。

誰か、誰に？

「アサギの守護をっ！」

亮の叫び声が校庭に響き渡る、風に乗って、声が駆け抜けていく。その願いは、想いは、誓いは、遠く遠く離れた地へと、風に乗ったまま届けられた。

風は呼びかける、今はまだ知らぬ、過去の仲間へと。

亮は、見知った男の姿を確認した、瞬間歡喜の笑みを浮かべる。見知っているのは『魂』がそう震えたからだ、見たことが無い男だが、過去から知っている気がした。

紫銀の流れる髪、濃紫の瞳、端正な顔立ちの水を連想させる男を姿を確認したのだ。

亮は、自身の風を彼へと送り届けた。

風に想いを乗せて、最も信頼できる男へと望みを託す。

僕の代わりに、アサギを護って。

大事なアサギを、護って。

近い未来、その男はアサギと出会っだろう。

「もう、大丈夫だ」

亮は校庭で一人、穏やかに微笑んだまま空を見上げる。

暫しの後、校庭は騒乱に包まれたのだが亮には関係のないことだった。

子供達が隣同士で叩きあい、教師達が叫び声を上げ、校長を頼るべく詰め寄る。

そう、目の前で不可解な事件が起きた。

眩い光と共に、御伽噺の使者がやってきた、巨大なネズミも降ってきた。

やがて生徒が六名、使者と共に消えていった。

夢ではない、皆が見ていた。

校長の頭は錯乱状態である、未だかつてこんなケースはない。

『校長マニュアル』にも掲載されていない事態が起こってしまった。

どうするべきだ、様子を見るべきなのか？ 誘拐事件として世間に公表すべきものなのか！？

なんと説明する？ 光の中に消えていきました、と説明をするの

か!?

親御さんにはどう説明する!? P T Aからの攻撃にはどう対応する!?

テレビの取材が来たら、どう謝れば!? いや、謝るようなことしたのか!?

そんな時、大人より子供のほうが順応が速かった、生徒達は整列し直すと教師の言葉を待ったのである。

副校長の指示で、今にも倒れそうな校長は教壇に登るところ告げた。

見ているこちらが気の毒になるほど、顔面蒼白、泡を吹いて倒れそうな校長、もうすぐ定年。

「あーうーおーえーあー。本日はー、休みとしますー。自宅へ皆で戻り、明日の準備をしてくださいー!」

各自教室で宿題を聞き、元気な顔で明日登校してくださいねー!。
以上」

わぁ!

校庭で子供達の歓声が上がった。

学校が休みになればそれは嬉しいだろう、手を取り合って喜び、はしゃぎ回る。

数時間後、各自教室で宿題を出されながらも生徒達は帰宅して行った。
給食だけは食べたようだ。

「どーするんですか、校長っ!」

職員室では校長がハンカチで口元を押さえながら、机に突っ伏しつつ教師達のわめき声を聴いている。

聞いているというか、聞き流しているというか。

皆総出でネットで検索をかける、『生徒達が目の前で姿を消した場合』『目の前に不可解な生物が現われた場合』『うんぬんかんぬんそれらの対応策など出てこない、だが起きたことは現実だ。』

消えた生徒は『6 - 1 : 田上浅葱』『6 - 2 : 松長友紀』『6 - 2 : 松下朋玄』『6 - 2 : 中川大樹』『6 - 3 : 大石健一』『6 - 4 : 門脇実』以上六名。

両親に連絡を取らなければならない、しかしなんと説明をすべきだ!?

ここは慎重に電話を……、いやいや、行動が遅れる程マスコミに標的にされる!

教師達は一斉に脳裏にある映像が浮かんだ。

『こちらは、生徒達が行方不明になった小学校の校庭です! あ、校長です、教師達です! すいません、すいません、何故早くご両親に連絡をしなかったのですか!? 子供を心配する親へと冒涇だと思いませんか!?!』

報道陣達に塞がれ、身動きできない映像。

一生のうち、体験できる人間は数少ないはずだった、が、数日後には経験しざるを得ないだろう。

『本当にねー、困るわよねー。こっちは信賴して学校に預けているのに、子供を行方不明にされちゃあねー! 音声は変えてあります』

関係ない近所のおばさんやらが、捲くし立て、ここぞとばかり文句を言っている。

教師達は身を震わせた、冗談ではない、こんな事態は避けなければ!!

頭を盛大に横に振ると、校長は跳ね起きて「電話だー! とりあ

えず、消えた生徒達の両親へ電話だーっ」と叫んだ。

慌てて教師達は、各生徒達への連絡網を開いた。

電話をかける教師も気が重い、罵声を浴びせられるか信じてもらえず不振がられるか。

混沌とした職員室、6月26日、初夏の出来事。

亮は近所の子供達を連れて下校する、アサギがない以上、この地区の引率を任されるのは自分だと解っていた。

横断歩道を低学年から渡らせて、自分は最後に。

止まってくれた車に礼をして、亮は歩いていく。

と、目の前で低学年がすっ転んだ。

バランス感覚がない年頃、石に躓いた訳でもなく、前にころりんと。

間が空いて大声で泣き出す、慌てて亮は駆け寄ると抱き起こして膝についた小石を払い除ける。

特に怪我はないが、痛みではなく驚きで泣き出したのだろう、泣き止まない。

困り果てて背負って帰ろうと、ランドセルを下ろしかけた。

「どうしたの。大丈夫!？」

何処からともなく声が聞こえる、見れば車道から一台の車がこちらへ向かってきて、亮の前すれすれで停車した。

その近すぎる距離に亮は小さく悲鳴を上げる、が、降りてきた女性はそのようなことお構いなし。

「転んだの？ ケガは？」

「あ、はい、大丈夫みたいです」

「そっか、ならよかった。じゃあ、これを」

女性は車内へ戻ると、何やら漁り始め、戻ってきた。手に握られていたのは、飴。

「ほら、甘い飴嘗めよっか。おいしーよ。苺味だよー。元気出るよー」

女性は泣いている子に、飴を渡す。

白い包み紙に、可愛らしい苺の絵。

にっこり笑って、頭を撫でて、ほっぺをぶにぶに、触り続ける。

きやはは、と笑い始めた自動に安堵し、女性は立ち去ろうとした。ありがとございまして、声を張り上げてお礼をする亮に、女性は振り返る。

「いえいえ、どういたしましてー。気をつけて帰るんだよー」

ばいばい、手を振って女性は車に乗り込んだ。

せめて見送ろうと亮が突っ立っていると、電話が鳴っていたのか、何やら携帯で会話し始めたその女性。

「あー、はいはい、こちら奈留ですー。今向かっている途中ですー。もう暫くお待ちくださいー」

奈留という名前らしい、亮は再度深く礼をすると、再び歩き出す。

自宅には帰らず、亮は田上家へと出向いた。

丁度用意されたおやつが出ていたところで、亮もご馳走になる。

今日はよく冷えた手作りミルクプリンだ、甘くて美味しい。

学校からアサギが消えたと言った電話が入ったらしく、今夜説明会があるとか。

「あはは、びっくりよね。浅葱、消えたのねー」

やたら暢気な母親に、亮は思わず苦笑い。
娘が消えたのに、この余裕はどうしたのか。
そんな亮の視線に気づいたのか、母親はゆっくりと笑みを浮かべる。

「浅葱、勇者になりたいって言ってたんでしょ？ 望んでいたことが現実に起きたのよね。なら、喜ばしいことじゃない？」

「でも！」

「私には解るの。あの子はちゃんと戻るわ。そう思うでしょ、亮君も」

「……確かに、そうですけど」

思うというか、戻って貰わないと困る。

願いつける、無事で戻れるようにと。

けれど確かに、亮には解っていた。

アサギがそのうち無事な姿で、怪我一つなく戻ってくることを。

アサギの弟達とゲームをしながら考える、確かに不安が消えた。

アサギの姿が見えなくなった時は、不安で苦しくて押しつぶされそうな空気だったのに。

今は妙に軽い、何故か安心している。

「大丈夫、アサギは大丈夫だ」

そう、大丈夫。

護り続けよう、願いつけよう、祈り続けよう。

何処に居ても僕がアサギを護れるように、風を送ろう。

キィィィ、カトン。

亮は何処かで、歯車が回った音を聞いた。
微かに顔を上げる、が、歯車など田上家には存在しない。
気のせいか、呟いた。

一度目と二度目の出会い、真実は先に

絶命したクーバーを見下ろし、トビイはアサギへと近寄っていく。未だ健やかな寝息を立てているアサギに、トビイは安堵の笑みを零した。

例の香りの効果で眠っているらしいが、あの吸血鬼の言うことを全面的に信用してよいか解らない。

トビイはソファまでアサギを抱き上げて運ぶと、そっと寝かせる。額に手を当てる、特に高温ではない。

脈拍を計ってみる、特に異常はない。

小さく力を抜いて溜息、アサギの頬を優しく撫でると、徐に立ち上がった。

剣についた血液を、シートで拭い取ると鞘へと仕舞いこむ。

自身に先程の吸血鬼の血がついていないかを確認めた、多少衣服には付着したようで、眉を顰める。

汚らわしい、あとで洗濯せねばと口走り、トビイはソファのアサギのもとへと戻っていった。

腰に下げている水袋に、口を当てる。

水を口に含むと、跪いてアサギの顔へと近づいていく。

軽く右腕でアサギを抱き起こし、左腕でしっかりと身体を抱き締めながら唇を触れ合わせた。

そこから舌を上手く使い、器用にアサギの口内へと水を移していく。

慎重に、零れないように、優しく。

アサギの体温を感じながら、ゆっくりと全ての水をアサギへと。移し切ると唇を躊躇いがちに離れた、少し離れたが惜しくなったのか再び口付ける。

「……もう、離しはしないから」

小さく呟き、何度も口付けを交わす、トビイの腕の中で小さくアサギが身動きした。

と、不意に部屋の照明である蝋燭の炎が一斉に燃え盛る。

バチバチツと音を豪快にたて、その音に怪訝に振り返ったトビイの瞳には、まるで怒りを表すような炎が映った。

何処からか酸素が多く入り込んだわけでもなく、ただ、突如蝋燭の炎が盛んに燃え上がっている。

気にせず口づけを続けようとしたのだが、音は大きくなるばかりだった。

影が部屋に揺らめく、怒り狂った蝋燭の炎が今にも襲い掛かる勢いだ。

「ちっ」

舌打ちし、トビイは奇妙な邪魔に身体を起こし、アサギの肩を揺さぶる。

「アサギ、アサギ」

揺すられ、頬を触られ、アサギは小さく呻き、眉を顰める。

が、次第に瞳を擦りながら、重たそうに瞼を開いた。

瞬きを何度も繰り返し、欠伸をする。

「ふにゃー」

どうやら寝ぼけているらしい、そんな様子のアサギを微笑ましく見ていたトビイだが、微かに笑いながら正面から抱き締めた。

あったかいなー、と暫しそのまま身動きしないアサギであったが、上を向いて、言葉を失う。

誰だろう、この人。

唖然と見つめているアサギを不思議そうに見つめ、トビイは満面の笑みを零し、髪を撫でていた。

「目は、覚めた？」

目が覚めたら、イケメンに抱き締められていた……という少女マンガにでも有りそうな展開に、目を覚まさずにはいられない。

瞬きを繰り返して、小首傾げて、考える。

気がついたらユキ達五人で妙な部屋に居た、突然現れた吸血鬼に攫われた。

……と思っただらミノルが似合わない格好で、何故か居た、そして今現在、この状況。

さっぱり意味が解らない、整理したら余計意味不明だった。

あの吸血鬼がいない、目の前のこのイケメンは、雰囲気からして吸血鬼ではないだろう。

というか、絶対の自信を持って言える、このイケメンは味方だ。つまり、このイケメンが吸血鬼から助けてくれたのだろうか。

腕の中、アサギはトビイを見上げて、戸惑いがちに微笑んだ。不思議と、懐かしい感覚に陥るのは何故だろう。

以前から知っている暖かさ、心地よさを感じてしまうのは何故だろう。

トビイは真っ直ぐに、アサギを見つめている。

徐々にアサギの顔が近くなってきているのは、気のせいだろうか？

まるで、恋人が目覚めのキスをするように、今にも唇が触れてしまいそうな距離。

先程まで口付けを交わしていたのだが、アサギはそんな事知らない。

知らない内にアサギのファーストキスは奪われていたのだが、本人は気の毒な事に全く知らない。

アサギは思わず顔を赤らめた、軽い混乱、胸が跳ね上がる。吸い込まれそうな瞳、不快感はなく、不思議と安堵の溜息を漏らしたくなる。

けれども、やっぱり恥ずかしい。

「あ、の」

「ん？」

アサギはようやく口を開いた、なるべく顔を離しつつ、誤って触れ合ってしまったように。

「あなたが、助けてくれたの？」

これが4星の勇者・アサギと、ドラゴンナイト・トビイの出会い。幾度も転生を繰り返して、片時も絆が離れなかった二人の、”何度目か”の、出会い。

”アサギ”にとっては、一度目の。

”トビイ”にとっては、二度目の、出会い。

悠久なる水は、か弱き芽を見つけた、護り抜く事を誓った。

必ず二人は巡り逢う、引き寄せられて巡り逢う、互いの願いを叶える為に、必要不可欠な存在。

互いに見つめ合いながら、二人は暫し沈黙の時を過ごした。

長年引き裂かれていた恋人の様に、いや、むしろ肉親の様に。

トビイがそっと、アサギの髪に口づけをする。

愛しそくに、恭しく、視線はアサギの瞳を捕らえたまま外す事無く。

キィイ、カトン……。

何処かで歯車が回る音が聞こえる、二人の耳に、届く。

ガシャン！

室内で妙な音がした、驚いて身体を竦めるアサギと怪訝に音の原因を探すトビイ。

蝋燭だ、蝋燭の一つが何故か部屋に落下した。

火が絨毯に燃え移っている、小さく叫んだアサギを見てトビイは名残惜しそうに腕からアサギを解放すると、火を消すために歩いた。忌々しそうに靴で火を揉み消す、良い雰囲気だったのに、と舌を鳴らした。

妙な音に視線を移すと、トビイの近くの蝋燭が、業火となって燃え盛っている。

眉を潜めるトビイ、先程からこの蝋燭たちは何なのか、まるで邪魔をするように、意思があるように動いていないか？

トビイは踵を返すと一直線にアサギの元へと歩いた、跪いて優しく頭を撫でながら、先程の問いに答える。

「そつだよ、オレがあいつを倒した」

耳に心地よい、高くも低くもない澄んだ声、自然と落ち着く。

思わず聞き惚れてしまふ、囁くように言われて、アサギは思わず一言。

「す、凄く綺麗な声ですね」

「そつか？」

「そ、それから、とても素敵だと思いますっ。芸能人でも類を見ない位の美形さんですっ」

「？ それはよかった」

芸能人、の意味がトビイには理解出来なかったのだが、自分を誉

めているであろうことは理解できたので、瞳を細めて微笑む。

「それからそれから、とても……優しい方です」

溢れるように口から飛び出る言葉、アサギは穏やかに微笑むと俯いた。

そう、優しい人だと直感した、気遣い方が、触れる指が、見せる笑顔が、とても優しくして落ち着くのだ。

「それは、アサギ限定だが」

「え？」

トビイの呟きにアサギは思わず声を上げる、限定、と聞こえたが気のせいだろうか？

きょとんとしているアサギの前髪を優しくかき上げると、露になった額にそっと口付ける。

「っー!？」

「いきなりそこまで誉められるのも、悪くはないかな。お褒めの言葉、光荣だ」

思わず額を掌で覆い隠す、ようやく引きかけていた顔の赤らみが、逆戻り。

「え、あの、その、ええとー」

「ん？」

慌てふためくアサギの反応を楽しむかのように、トビイは業とらしく更に顔を近づけた。

逃げようとするアサギの腰を優しく引き寄せ、視線の高さを合わ

せて笑う。

「それはそうと、アサギ。身体は大丈夫か？ 気分は？」

不意に真顔になるトビイ、ぎこちなくだが返答する。

「え、えと。だ、大丈夫、です。あんまり記憶がないのですが」

「なら良い。とりあえずここを出たほうが良いな。で、何故こんな場所に」

「旅の途中です、ジエノヴァへ行く予定でした」

「旅？ 一人で？」

旅をしていたのか……小さく呟くトビイに、アサギは不思議そうに首を傾げる。

「いえ、仲間がたくさんいます。はぐれてしまったので、捜したいんです」

軽く瞳を開くトビイ、怪訝眉を寄せる。

折角出会えたので、どうせなら二人で旅をしたい。

旅の目的は追々聞き出せばよいから、面倒だ、このまま二人で何処かへ行こう。

トビイの結論『このまま逃亡』。

探す振りして、捜さない、二人きりで居たいんだ……という身勝手極まりないトビイの本音である。

「とりあえず、仲間を捜しに行こうか。ジエノヴァで待っているかもしれないし、な」

喜んで笑顔でお礼を言うアサギに、トビイは微笑んだ。

全く持つて心底喜ぶアサギには申し訳ないのだが、トビイの言葉は嘘八百である。

軽々とアサギの身体を持ち上げ、慌てふためくアサギをお姫様抱っこ。

「体調が戻ってないかもしれないから、念の為」

有無を言わず微笑まれ、アサギは大人しく抱っこされる羽目になる。

扉を開き、歩き出す。

軽すぎて実感が無いが、トビイの身体にアサギの体温が伝わる事で、共に居るといふ安心感が得られた。

ふわり、と懐かしい香りがする。

甘く爽やかで柔らかな、香り。

トビイは、一月前からアサギを捜していた、黙々と一人きりで。

本来ならばくれた相棒のドラゴン三体を捜さねばいけなかったのだが、それよりもアサギを優先した。

ただ、アサギの言葉を信じて。

『いつか、一緒に居られる日が来ます。その時まで暫しお別れなのです。また、会いましょう』

そう言ったアサギの安心した、切なそうな笑みを忘れる事無く、捜し続けた。

言葉は現実になった、こうしてアサギと出会えたのだから。

トビイはアサギに恋をしていた、一ヶ月ほど前のあの日から。

何故恋をしたって？ そんなの知らない、自分が求めるものがアサギだと痛感した、それだけ。

命をかけて護りたいと思う存在だと瞬時に感じたのは、何故だろう。

守護する事が自分の役割、愛し抜く事が自分の存在価値。

一目惚れだろうか、いや、そうではなく。

以前から、生まれる前から、おそらく前世も自分は彼女を護っていた、愛していた。

やっと、見つけた。

ようやく、出会えた。

何度も名前を呼びたい。

狂おしいほど愛しくて、一晩中抱き締めて居たい。

笑顔をずっと、見ていたい。

そっと、トビイは切なく瞳を閉じ、アサギの髪に口付ける。

アサギも不思議と嫌悪感すらなく、大人しくトビイの腕の中に居た。

甘い空気が漂う中、二度目の扉を開くトビイ、先程もここから進入してきた。

洞窟を歩いていたら不快な感覚に気がつき、その場所をトビイは力任せに押したのだ。

そうしたら突如扉が現れたので、退屈凌ぎに手を伸ばし突き進めば、アサギに出会えた。

クーバーが仕掛けた洞窟からの出入り口の扉を、偶然にもトビイは発見したのである。

巧みに魔力で隠されていたはずなのに、そんなことは露知らず、トビイは造作もなく解除したようだ。

洞窟へと足を踏み出したトビイ、何やら人の声が聞こえてきた。

「アサギー！」

「アサギちゃんっ！」

嫌な予感が、する。

が、足を止めても仕方がないのでトビイは突き進んだ。

隠されていた扉が音を立てて姿を見せる、洞窟内部の様子が見え

る。

「あ

……」

トビイは舌打ちした、物凄く忌々しそうに洞窟内部を睨み付けた。そこには、仲間達が居たわけで。

つまり、トビイの逃亡計画はいきなり台無しになったわけで。

アサギをお姫様抱っこして現れた美形の男に、一同は釘付けになった。

性質の悪い男である、不機嫌な様子の男は同姓から見ても美形だった、足もすらりと長く、長身。

敵に回したら厄介以外の何者でもない男が、アサギを丁重にお姫様抱っこ。

それはそれで非常に絵になっているわけだが、不審人物である事に違いない。

思わず身構える一同、敵だと判断。

その緊迫した様子に、慌ててアサギが止めに入る。

「こ、この人に助けて貰ったの！ 凄く強いの！」

物凄い形相で睨みつけている男だが、アサギを助けてくれたのなら、まあ……と、渋々了解する一同。

咳き一つ、アーサーが徐にアサギに近寄ると、宣戦布告するかのようにトビイに怒りの瞳で微笑む。

瞳が全く笑っていない、小刻みに身体を震わしつつ。

「アサギを助けて頂いた様で、有難う御座います。それはともかく、何故彼女を抱き締めているのでしょうか？」

「敵の妙な香りにやられていた、今離すと危ない」

「では、私が代わりましょう」
「断る」

周囲に発生した冷氣、二人の間に亀裂が生じ、背筋が凍るかつてない冷戦が巻き起こる。

後方で、出るに出不らなかつた一同が成り行きを見守つた。

「つーか、あのロリコン賢者もアサギを抱き締めただけじゃん」
「だなっ」

面白くなさそうに吐き捨てたアリナ、同意するサマルト。
参戦すべく歩き出す、余計複雑になりそうな気配だった。

目的地は目前に

沸いて出てくる仲間達にトビイは心底呆れ返った、数人だと思っ
ていたのだが結構な人数である。

こんなに大勢での旅など、一体何をしているのかとトビイはアサ
ギを見下ろした。

ざっと目を通す、年齢も様々だ、どんな集まりなのか把握不能。
不意に視線が通り過ぎて止まる、先程倒した吸血鬼に似た男が、
儼然とこちらを見ていた。

「アサギ、あれは？」

トビイの小声にアサギが我に返った、ミノルの事を言っているの
だ。

慌ててアサギは殺気を放ち始めたトビイを押し止める、あれはミ
ノルだ、先程の吸血鬼ではない。

「あの人が本物なの。あの人に化けていたのですっ」

「成程？ 知り合いに化けて油断させていたというわけか」

若干違うが、まあそんなところだろう。

トビイはすっ、と殺気を消すとわらわらと近寄ってくる仲間達に
目を向けた。

「で。何故こんな大人数で旅を？」

「気がついたらこんな人数になっていたのです」

勇者が六人、仲間が九人、合計十五人。

あまり集団行動が得意ではないトビイ、顔を顰めて面倒なのでこ

のままアサギだけつれて逃亡すべきか本気で悩んだ。

突破出来ると判断するが、アサギに何か言われそうだったので諦める。

肩を窄め観念して一言、かなりの妥協である。

「あまり強そうな奴がない、な。アサギが心配だ、同行させてもらおう」

さらり、と言い放つとすたすと周りを無視してそのまま洞窟を進む。

呆気にとられ口を開いたまま立ち尽くす仲間達だが、先頭に居たマダーニに呼び止められた。

「お名前は？」

「トビイ。よろしく」

「私はマダーニ。よろしくね。顔は良いけど性格は良くなさそうね」

「初対面でそう言い放つ貴女ほど、悪くはないつもりですが」

立ち止まってトビイとマダーニはにっこりと爽やかに笑いあった、腹の中では黒いものが蠢いており爽やかではないが。

ライアンだけは軽やかに歓迎の笑みを浮かべて、握手を求める。

「オレはライアン。よろしく。見たところ剣士だろうか、オレも一応そうだ」

「あんたが一番まともそうだな、よかった」

会話を聞きつつ名前を確認するアサギ、そうか、この人の名前はトビイというらしい、と小さく頷く。

そう、名前を聞いていなかった。

でも何故だろう、トビイはアサギの名前を最初から知っていた。

アサギは腕の中で首を傾げる、そういえば、ずっと名前を呼ばれてた。

何故、知っていたんだろう。

何故、呼んでくれていたのだろう。

「強そうな奴がいないとは、心外ですね。トビイ殿がどれ程の腕前か存じませんが」

青筋引くつかせながら歩み寄るアーサー、彼は賢者だ、滅多に受け取る事が出来る称号ではない。

コイツが一番厄介そうだ、と深い溜息を吐くトビイ。

二人の間で火花が激突する、その中心にアリナがひょっこり顔を出した。

「ボクはアリナ。よろしく！。一度手合わせ願いたいな、腕に自信あるみたいだし」

「女と手合わせは苦手なんだ」

「ああ、ボクのことには男扱いして貰ったほうが助かるかな。色々と」

言うなりアサギの頬に口付けるアリナ、女だからと気を抜いていたトビイを見上げて挑戦的に笑う。

こついうこと、と唇を小さく動かし、アリナはアサギの髪を撫でる。

喉の奥で笑うと不敵に笑い返したトビイは、そつとアリナの手を避けるように離れていく。

これまた、敵が多いことで。

小さく呟くトビイだが、特に敵視するつもりはない、負ける気がしないからだ。

「ジエノヴァに行くんだろ？ 早くしろ」

洞窟の出口手前で踵を返し、軽く振り返っての一言。

行くぞーと楽しそうに叫んだライアンに、渋々同意する仲間達。物凄く気に喰わない男が仲間に加わった……と、一部頭を抱える。けれども、アサギは嬉しかった。

とても強そうだから、そして、共に居なければいけない気がするから。

共に、いなければいけない。

どうしても、そんな気がして仕方がない。

それはともかく、一向に下ろしてくれないトビイに、アサギは顔を赤らめてもそもそと動く。

いい加減下ろして貰えないだろうか、流石に恥ずかしい。

「あの、そろそろ自分で歩きます」

「無理はしないほうが良い。もう少しだけこのままで」

「はぁ……いい」

穏やかに微笑む、有無を言わせないトビイの態度にアサギは恐縮して返事をした。

全員が洞窟を出たところで、馬の体調管理をしつつ馬に乗り込む。再び馬車の中での勇者達への、魔法教育が始まった。

アサギの隣を離れようとしないうとトビイを、嫉妬の視線が幾つも襲うのだが、本人はお構いなしである。

アーサーとアリナが馬車操作を担当し、ようやく解放されたライアンが軽い伸びをして馬車の中へと戻ってきた。

同じ剣士として気になるのか、トビイの隣に座り込むと、傍らの剣を指差す。

「その剣、凄いな。見せてもらっても良いだろうか」

「あぁ、どつぞ」

トビイはライアンに剣を手渡す、有難う、と笑みを浮かべてライアンは繁々とそれを見つめた。
見た時から興味をそそられたらしく、鞘から抜いて、瞳を細めて真剣に眺めた。

「これは、一体」

「水竜の一本角から出来ている、世界で一本しか存在しない剣だ。ブリュンヒルデ、という」

「水竜！？ それで不可思議なモノを感じたのか……。ありがとう、一度手合わせ願いたいね」

「ライアンの剣は、何処かの王宮のものだな。その紋章は……」

「ああ、元ジヨリロシヤの騎士だったんだ。剣だけは脱退した今も愛用しているよ。慣れていくからな」

剣士同士の会話を楽しみつつ、ライアンはトビイに耳打ちした。本人には聞こえないように、そっと。

「一つ訊きたい、あの剣はどう思う？」

「あの剣？」

ライアンの視線を追う、終着点はトモハルがブジャタと魔法の勉強中の光景である。

トモハルの傍らの剣を見つめる、瞳を細めて、ライアンに耳打ちを返すトビイ。

「別に？ あれが何か」

「……あれは伝説の勇者の剣・セントガーディアン、らしいんだが」

「あれが？ まさか。何も感じない」

「……だよな」

「というか、待て。何故勇者の剣が？」

「知らないのか、この子達は勇者なんだ」

「っ、アサギも、なのか？」

「そう。あの子が一番剣技にも魔法にも飛びぬけた才能を発揮している。アサギが4星の勇者の片割れだ」

絶句するトビィ、記憶の中のアサギと見比べた。

どちらかというところ、勇者と言うよりはどこそその貴族の娘にも思えるような雰囲気だった。

穏やかに微笑み、献身的に世話をしてくれていた緑の髪のアサギ。勇者、だって？

啞然とアサギを見つめる、勇者だとしたら尚更傍で護らなければいけない。

それで旅をしていたのか、ようやく納得できた。

「ともかく、神聖城クリストバルであれを受け取った。が、どうにも気に入らないんだよ」

「偽者、か」

「有り得るな。オレ1人の感覚なら間違いかと思っていたが、トビィ君もそう思うのなら」

「何れにせよ、オレは伝説の剣について詳しくはないが。あれではそこらに売っている高値の張る剣と大差ない」

二人してトモハルの剣を再度見つめた、そんな様子に気がつかないままトモハルは懸命に魔導書に目を通している。

洞窟を出てジェノヴァまでは約三日、そろそろ夕刻である。

暗闇が辺りを覆い隠すが、松明で辺りを照らし進んだ。

どうも、無理をしても辿り着きたい場所がライアンにはあるらしい。

「身体を清める温泉場があるんだよ」

温泉、と聞いて勇者達は盛大に喜んだ。

月が照らす森の中を馬車が駆け抜ける、やがて立ち上る煙が見え始めた。

硫黄の香り、嬉々として馬車から顔を覗かせる勇者達。

着いた先は旅人用に設備されているらしく、脱衣所もあれば焚き火を起こした形跡もあるキャンプ場の様な雰囲気だった。

伸びをして馬車から降り、一斉に再び伸びをする。

急いで夕食の支度に取り掛かる、薪を広い集め、火を起こしながら街まであと数日の為食材をほとんど使い切る勢いで、鍋に押し込む。

簡易な畑もあり、トマトとズッキーニが元気に熟れていた。

豪快にニンニクを使って、トマトとズッキーニ、干し肉のパスタをライアンが作ってくれた。

見ているだけで涎が垂れそうだが、勇者達は挙ってそれを平らげた。なんとという美味、涙が出そうなくらい、旨い。

食後は紅茶、こっぴどしていると本当にキャンプに来たようである。

暫し、勇者達は戦闘を忘れた。

女性陣が温泉に浸かっている間、男性陣はライアンを筆頭に今後の作戦会議である。

「三日後ジェノヴァ到着予定。予定通り長旅の支度をし、ピョートルヘアサギの武器を取りに出向く。滞在期間は到着時刻にも因るが大体一日、今のうちに皆で買い物リストを作りたい」

ライアンとアーサー、それにブジャタで薬草や食材の会話が始まった。

地図を広げ、途中に立ち寄る街を調べる。

それまでの期間を検討し、買い揃えるつもりだ。

不意にトビイが剣を引き抜いた、次いでアーサーとライアンが顔を上げる。

「構える。来る」

啞然としている勇者達に吐き捨てるように投げかけたトビイ、温泉の方向を見やり、そちらには存在を確認できなかった様で安堵した。

森の中から雄たけびも上げずに、小柄な二本足の生物が突進してきた。

「こ、今度はなんだよっ」

慌てて剣を構える勇者達、人型の魔物に悲鳴を上げる。

「ゴブリンですね、狡賢い岩山の洞窟などに住まう種族です。夜行性です。戦い易いと思えますよ」

淡々と説明するクラフト、闇の中で光る黄色い瞳の、自分達の腰ほどの背丈のゴブリンを見つめる勇者達。

ゴブリンといえば、RPGで下級の敵である。

勇者達は多少安堵した、暗くて良く見えないが、とりあえず黄色い瞳を狙えば良いだろう。

「魔法も使用してきません、魔法の耐久性もありません。ただ、集団で動く可能性があります」

言うが早い黄色い瞳が多々増え始める、流石に闇夜にこれだけの数が押し寄せてくると恐怖以外の何者でもなく。

案の定悲鳴を上げる勇者達。

その情けない様子に、傍らのライアンにトビイは怒気を含んで訊ねた。

「本当に勇者なのか？」

「未だ戦闘に不慣れだ、守護しながら覚えさせる予定なんだよ。回数もこれで4回目だ」

舌打ちしてトビイは先制攻撃に出た、来るのを待つのは苦手だ、素早く剣を振ると数匹を吹き飛ばす。

先人切ったトビイ以外、勇者達の隣に1人ずつ立つと構える一同。極力援護に回り、勇者を戦闘に慣れさせるつもりだった。

甘い、な。

呟き、トビイは面倒だったので剣を振るい続けた、勇者育成になんぞ構ってられない。

この道を突破されなければ、温泉へは行くことは出来ない、ここさえ守護すればアサギは安全だ。

闇夜に、冷気を漂わせる剣が白く発光しながら浮かび上がった。

素早く飛ぶように動く剣先、感嘆の溜息を思わず漏らしてしまう仲間達。

ここまでの剣技とは驚きだ、ライアンも斬りかかりながら見惚れてしまった。

剣の師が相当な腕前だろう、達人クラスといっても過言ではなさそうだ。

魔法を使える者は極力火の呪文で応戦し、辺りを明るくしながら戦い続ける。

思いの他沸いて出てくるゴブリンに、トビイは顔を顰めた。

幾らなんでも数が多すぎやしないだろうか、別に疲労もないし負ける気もないが妙だと直感が働いた。

「気に喰わない」

小さく零す、まるで力量を遠くで誰かが測っているようだ。

トビイは視線をゴブリンから他へと移した、何か、誰か、他に気配は？

森へは侵入しない程度で切り込んでいくトビイ、不意に背後からアサギの声が聞こえる。

「加勢しますっ」

温泉から戻ってきたらしく、トビイの隣まで駆け寄ってきてアサギは剣を軽やかに振るった。

確かにまだきこえない、が、磨けば相当のものになるアサギの剣技、軽く笑うとトビイはアサギの肩を引き寄せる。

「無理はするな、だがオレの後についておいで」

「はいっ」

「良い返事だ」

成程、ただ護ってもらっただけではなさそうな子だ。

アサギを気遣いながら、トビイは剣を舞わせた、徹底的に援護に回る。

先程とは大違いなトビイの態度である、ライアンは思わず吹き出した。

「敵の動きを読めば、自分がどう剣先を変えればよいか解る。動きの法則を見破れ」

「はいっ」

「背後に気をつける、正面以上に気を許すな。二人居るならば背を預けるのが一番だ」

「はいっ」

「魔法は発動に時間を要する、剣に頼れ、魔法は万が一だ。間合いを見極めて唱える」
「はいっ」

アサギにゴブリンを任せつつ、トビイは様子を伺った。
不意に木の上に妙な気配を感じ、月明かりに照らされていた『モノ』を見つめる。

巨大な鳥が一羽、木の天辺に停まっていた、真紅の瞳をぎよろつかせ、じつとこちらを見つめている。

距離が遠い、弓矢か魔法の射程に入るか入らないか、だ。
見渡してトビイはミシアが手にしていた弓矢に着目する、一か八かやってみる。

「おい」
「え？」

急に呼ばれて身体を硬直するミシア、顎で指図され木の上の鳥を視線に入れる。

「あれに弓を放て。届くか？」
「無理だと思います。けれど、一度やってみます」
「そうしてくれ」

緊張した面持ちでミシアはゆっくりと弓先を鳥へと合わせる、精一杯力を込めて。

震える腕、この射程は狙ったことがない。
ヒュン、と小気味良い風を射る音、弓矢は高く高く木の上へと上っていく。

が、やはり標的には到達出来なかった、ミシアは悔しそうに弓矢を再度放つ。

二本目の弓矢も届かない、トビイは軽く溜息を吐きつつ鳥を睨み付けた。

鳥は。

一際耳障りな啼き声を発すると、そのまま翼を広げて浮かび上がる。

チチチチチ、と雀の様な啼き声だがもっと低く、非常に可愛くない声だ。

「アサギ、あれまで魔法は届くか？」

「やってみますっ」

翼だけが妙に大きな奇怪な鳥だった、血走った真紅の瞳、月夜に浮かぶその姿は黄金。

蛇のように長い尻尾がついており、羽音が亡者の嘆きを連想させる。

「天より来たれ、我の手中に。その裁きの雷で、我の敵を貫きたまえっ。雷撃っ」

唱える事が出来る魔法で、最も遠くまで届きそうなものを選択して唱えたアサギ。

一筋の雷が、その鳥を貫く。

明るい笑顔を見せるアサギだが、ブジャタが舌打ちすると叫んだ。

「アレには雷系統が効きませんぞっ！ タモトスズメ、他の魔物を呼び寄せる魔物ですじゃ！」

チチチチチチチ、啼き喚くタモトスズメ、ゴブリンは増えていく。そういうことかっ！ 舌打ちしてトビイは闇から湧き出るようなゴブリンに暇なく攻撃を与える。

森の番人、監視役といったところだろうか？ あの鳥がここへゴブリンを呼び込んでいるのだろう。

「こうなると、クレシダ達が必要だな……」

呟くトビイだが、”クレシダ達”はいない。

ゴブリンの研ぎ澄まされた爪の攻撃を必死に受け止めていたアサギを抱えると、トビイは一旦後方へ下がった。

仲間達は魔法でゴブリンを蹴散らしてはいる、しかし、あのタモトスズメの声を止めたほうが早そうだ。

魔法を得意とする仲間が横一列に並ぶ、迫り来るゴブリンを前に、一斉に強力な魔法を発動した。

アーサー、マダーニ、ムーン、ブジャタを筆頭に、勇者達も確実に発動する魔法を唱える。

トビイはミシアから弓を強引に借りると、一人、タモトスズメ目掛けて矢を放った。

ミシアの力では無理でも、トビイの力ならば届くかも知れなかったのだ。

矢はタモトスズメを射抜きはしなかったが、それでも羽を翳めた。驚いたらしく、羽を不器用にバタつかせて落下してくる。

弓矢をミシアに着き返すと、トビイは落下との時間差を計算し、岩に駆け上りそこから跳躍した。

「悪く思っな」

喉の奥で笑うと、計算通り落下してきたタモトスズメをそのまま剣で突き刺した。

小さい胴体を狙って確実に剣が捕らえる、チチチチチ……別の場所まで遠ざかっていくもう一羽のタモトスズメ。

その声と同様に生き残りのゴブリンは戦意を喪失して、森の中へ

と慌てふためき戻っていった。

軽々と地面に着地し、突き刺さっていたタモトスズメを振り払うトビイ。

「想像以上に強いな、トビイ君」

「これくらいは、当然」

ライアンが拍手し近寄ってきた、速度が飛びぬけて速い、そして状況判断が得意。

一流の腕前に、心底ライアンは感心し、そして胸を躍らせる。

「何処かにもう一羽居た様だな、最後に啼いた」

「敵意を喪失したならばそれで良いさ。それにしても、ここも結界が崩れているようだな、一般人はとも先へ進めないだろう」

「いや、正確には崩されていないかもしれない、ここから先へはゴブリンが来ていないから」

言うなりトビイは木の棒を拾い上げると、地面に線を引く。

攻防戦を繰り広げていた位置、阻まれるように近づいてきていないのだ。

成程ね、と大きく頷くライアン。

簡素な結界を念の為四方に張り巡らせると、男性陣が万が一に備えて交代で温泉に入り、その場で睡眠を取る。

一応交代で見張りをつけたが、朝まで何も来襲しなかった。夜が、明ける。

アサギは早朝、スカートに入っていた小さな手帳を取り出した。

ペンが生憎なかつたので、爪で印をつけている。

日付の把握をしているのだった、几帳面なアサギらしい。

手帳に気がついた勇者達が代わる代わる覗き込み、六人同時にあ

ることに気がつく。

「夏休みっ！ 夏休みまでには帰らないとっ」

そう、このままいくと、夏休みである。

時間の流れが同じとは考えにくい……というか、きっと地球で時間が止まっているだろうから大丈夫、と乾いた笑い声を出す勇者達。

「これで時が止まってなかったら、俺達行方不明の搜索願出されてるよ」

笑い転げて語るトモハル、だが地球は現実、そうになっていた。……ということ、勇者達は知らない、知るはずもなかった。

地球日付、7月1日。

アサギの手帳に爪の印が増えていく、明るい早朝、遠くまで透き通って見える。

青空が広がり、真っ白な雲がふんわりと浮かんでいる快晴。

「お、城が観えたぞー」

馬車を操作していたライアンが嬉々として叫ぶ、こぞって歓声を上げると勇者達が馬車から顔を出した。

「すごーい、お城だお城っ」

「きゃー、おっきいーっ」

アサギとユキが興奮気味に手を叩いて喜んだ、他の勇者達も感嘆の声を漏らしている。

遠くからでもはっきりと解る巨大さ、その威圧感にただただ声を

張り上げる。

目前に迫る最初の城下街・ジエノヴァ。

「大きい公園が中心にあつて、そこが憩いの場だな。飲食店が盛んで公園を中心にぐるりと店が立ち並ぶ。港街でも有るから、旅人も多く滞在する。」

自分の店を持ちたい人々がこぞつて集まる場所だ。王宮も安定しており、王も好かれている、理想的な場所だな」

「そうね、世界一盛んな大都市よね。劇場に闘技場、遊技場、面白いわよ」

胸が躍る、勇者達は魔道書を放り出して、馬車から外を見つめていた。

魔王、旅立つ

花の香を含む風が窓から入り込み、男の頬を優しく撫でた。鼻先を撫る甘い良い香り、長身の男が深く溜息を吐く。

「はああああああ……」

深すぎる、大袈裟な溜息。

ここは4星クレオの魔界の地・イヴァンである。

その中心に位置する魔王アレクの居城、とある一室。

元来客室であったその場所に、1人の男が滞在している。

彼の名はハイ・ラウ・シュリツプ、2星ハンニバルの魔王である。ハイは先日から、遠い昔に忘れ去ったはずの苦悩と対面していた。だが、それはハイが味わった事のない種類の苦悩であり、そこから抜け出す術をハイは知らない。

苦悩だなんて、今更なんだというのだろう。

好き勝手生きてきて、何故今頃苦悩を味わう羽目になってしまったのだろうか。

見事な黒髪を風に靡かせて憂いめいた瞳で、溜息。

切ない恋に悩む青年、魔王と言うよりはそんな雰囲気。

そう、切ない恋心を体験中の魔王なのである。

26歳にして初恋中、初の苦悩。

虚ろな瞳で鏡に映って、にっこりと微笑んでいる少女に手を伸ばした。

冷たい鏡の彼女の唇に、そっと指を這わせて戸惑いがちに声をかけた。

「名は、名はなんといいのだ、美しい娘。私の心を掴んだまま離さない誘惑の悪魔のような天使よ」

多少芝居がかりすぎな台詞を吐いている魔王、冗談でもなんでもなく、ハイは真剣だった。

遅すぎた初恋は、極度の胸の痛みを伴う。

恋愛の存在自体は知っていたが、生憎ハイの周囲に対象となるべく相手が今まで存在しなかったのが事実であり、まして自分も他人も嫌いなハイには誰かを好くという行為は無に等しかった。

そんな魔王ハイが恋をした相手が、勇者アサギだったわけだ。

一目見て、恋に落ちてしまった。

ふぉーりんらぶ、である。

歳の差なんて関係ない、この世界では26歳と12歳でも、犯罪ではない。

ハイにとつての運命のあの日。

王子と王女を追っていた使い魔の視線が捕らえた映像、勇者の姿を確認できたところまではよかったのだが。

想像していた勇者とは違い、可愛らしい小柄な少女だった。

そう、可愛らしいと思ってしまったのだ、勇者を。

そこまでもまだよかった、問題はそこから数日後である。

恋しているとは思っていなかったのだ、ただ、可愛らしくて会いたいと思っただけだと。

けれど、どうやら瞬時にハイの心をアサギが射抜いていたらしく、今頃になって自覚症状、切なくて重苦しい事態に。

ハイが人間を見て『可愛い』やら『気に入った』と言った時点で、同じ魔王のリユウはこの展開を予測していたのだが。

ご丁寧な勇者の姿を魔王仲間に見せびらかしてまで、自慢していたあの日。

異常である、魔王が勇者に恋をした。

絶望的な恋以外の、なにものでもなく。

勇者はまだ、魔王を知らない、ハイを見つけ次第挑んでくるだろう。

そうなった場合、果たしてハイが勇者に対して攻撃できるかどうか問題だ。

いや、確実にこの状態では出来まい。

むしろ、攻撃される事を喜んで受け入れそうな勢いだ。

それくらいハイとて解っていた、頑なに心で決めたのだ、もし、対峙する事があつたらあの勇者に胸を一突きにしてみたらどうと。

心に秘めたこの想いを、彼女に打ち明ける気はない。

それで良い、勇者は魔王を打ち砕くだろう、いいじゃないか、それで。

寧ろ、本望。

ハイは窓際に立って、再度溜息を吐いた。

ハイは人間が嫌いだった、故に人間の自分も大嫌いだった。

人間の滅亡を渴望し、人間を最も憎む魔王だったハイ。

冷たい態度、言葉、表情、全てが真冬の凍てつく空気を思わせ、残忍で鋭く、近寄りがたい魔王・ハイ。

……だったはずが、この数日間で豹変した。

弱気で伏目がちな瞳、窓から何処か遠くを見つめて上の空、溜息を吐き続ける。

聞けば食事も然程摂っていないとか、明らかな典型的恋の病。

あの勇者の少女が原因であるとは、魔王達の中で周知の事だ。

あの日、勇者が彼女でなければ、こんなことには。

魔王ハイの右腕の中には、可愛らしいお人形。

どうみても、勇者アサギを象ったしか思えない人形、それを愛しそつに抱き締めている。

顔だけのアップならば憂いを秘めた、少しダークな美形のお兄さんだ。

が、胸辺りまで映すと人形までも映ってしまつて、かなり危ない雰囲気のお兄さんに豹変してしまう。

「名前が知りたい、名は、名はなんというんだ？ 私はハイ」

愛しそうに人形に語りかけるハイ、非常に変態染みた危ない構図である。

微笑みながら、髪を撫で続ける。

……という同僚の魔王の姿を数日前から目撃している魔王リュウは、助けの手を差し出す事にした。

元来部屋に閉じ籠りの気があったハイだが、ますます外出から遠のいていたし、話によると食事もあり摂っていないとか。

たまに廊下でふわついて歩いている姿を目撃するのだが、何かを探すように目の焦点が合っていない。

ハイの心は、あの勇者のもとへと飛んでいってしまったのだ。

部屋の中でハイが勇者人形と戯れている頃、リュウは小瓶を幾つも抱えて、上機嫌でハイの部屋に足を向けている。

鼻歌交じり、何処となく愉快そうなりリュウの姿は、とても今から手助けにいくとは思えない。

けれども一応リュウ的には真剣に手助けをするつもりだった、方法はどうであれ。

リュウを知っている人ならば助けを遠慮するだろう、顔を引き寄せさせて。

そう、リュウが絡むとろくな事が起こらないのだ。

全く別の問題に発展する可能性が有り過ぎた、只管迷惑な話である。

本人には、悪気はない。

そんなリュウが自室に向かっているとは露知らず、ハイは届けられた食事を口にするため、テーブルへ向かう。

目の前には大人の男にしては極端に少な過ぎる、そして似つかわしくないものが置いてあった。

けれどもこの量すら、今のハイにとって精一杯なのである。

「いただきます」

傍らに置かれたフォークに手を伸ばす。

本日の夕食は、ミートソースの Pasta（たこさんウィンナーつき）、キャベツとキュウリのサラダに、小さなハンバーグ（目玉焼きつき）、オレンジゼリーだ。

それらが一つのお皿に乗せてある、つまり、お子様ランチ風。もぐもぐ、とハイは必死で喉に食べ物を通していく。

降り積もって硬くなる柔らかな雪のように、心に降り積もる愛しさと切なさの想いは、ハイの胸を支えきれず。

重苦しい溜息を吐きながら、膝に乗せている人形を見た。

ハイがこの部屋から出たがらないのは、ここに居ればアサギの姿をいつでも見ていられるからである。

部屋の中心にある鏡、それにアサギが映し出されていた。

『勇者を手に入れてみるのも、一種の余興なんじゃないかなー、なんて?』

昨日の緊急魔王会議、勇者を見つけました、可愛いですは、リユウの一言で思わぬ方向へと話が動いた。

勇者を、手に入れる。

その発言によって、勇者の居場所を探り出す事になったのだ。

勇者は神聖城クリストバルに最初に訪れる、という伝承を知っていたアレクがハイにそう告げ、監視の名目で魔道眼球を取り付けた飛行タイプの魔物をそちらに数羽向かわせた。

その中の一羽が洞窟へ入る前の勇者一行を発見し、四六時中張り付いているのである。

その映像が、ハイのこの自室へと届けられていた。

洞窟内部は映像が途切れたのだが、出てきた途端ハイの瞳は釘付けになる。

恋焦がれたアサギが映像として届いてきたから、感動のあまり身

体を震わして瞳を潤ませ。

そこからずつと、この鏡だけを見つめていた。

プライバシーの侵害満載、ある意味盗撮だ。

勇者をストーキングする魔王。

「うお!？」

ハイは思わず叫んで、フォークを床に落としてしまった。

というのも、アサギが衣服を脱ぎだしたからである。

温泉に浸かるのだ、後ろから湯気が立ち上っている。

ハイは顔を赤らめて椅子をなぎ倒し立ち上がる、腕を組んで部屋中をぐるぐると歩き回る。

「み、見てしまつては変態だ!」

いや、今でも十分変態めいているのだが、一応理性は残っていたらしく入浴を覗くという卑劣な真似はハイには出来なかつたらしく。

「わ、私は絶対に見ない! そう決めたんだっ」

鏡に背を向けて、床にどっかりと座り込むと自身に言い聞かせるように叫ぶ。

丁度その時、リュウがハイの部屋に到達しノックもせず勝手に勝手に進入していた。

ハイの姿が見えないので続く部屋のドアノブに手をかけて、勢いよくドアを開く。

「ハイーっ! ……って、あれ? 何してんの?」

その部屋の中には、涙を零して座り込んでいるハイの姿があった。

啞然と見つめるリュウ、膝を抱えて鼻を齧り、涙を拭わず必死に動き出そうとする身体と格闘しているハイの姿である。

魔王の威厳もあつたものではない、なんともまあ、情けない姿である。

眩暈を覚えたリュウは、眉を顰めて原因を探した。

ハイの背後にある鏡を見て瞬時に納得、そこにはハイのお気に入りの勇者が数人の女性と楽しそうに入浴している映像が映っている。恥ずかしくて、見られないのか？

流石に悪いと思つて、見ていないのか？

ああ、でも、本当は見たいんだ？

「見たいんだろ？ 見ればいいのにー」

普通自分の入浴姿を赤の他人に見られて喜ぶ人は、いない。

けれど、自分達は魔王だから他人の嫌がることを率先しても許されるんだぞー、と意味不明な解釈を続けるリュウ。

「嫌われてしまう」

くぐもつた声で反論するハイ、ぐすつ、と鼻を齧る音。

深い溜息、呆れた声、みすばらしい同僚を見つめつつリュウはおかまいなしに鏡を見る。

「やれやれ、情けない魔王ハイ。……ふん、顔が幼いわりに胸は結構なかなか膨らんで良い感じに」

しげしげ、と近寄つて鏡を見つめるリュウ、台詞を聞いてハイは思い切り顔を赤らめた。

が、その言葉の意味に気がつき血相抱えて立ち上がる。

「そ、そうなのかって納得してる場合ではないっ、何故お前が見ているんだ！？ 待て、見るな！」

当然のことながらリュウに掴みかかる、大事に取って置いた好物のお菓子を横取りされたかのごとく。

我慢していたのに、リュウは悩みも躊躇もなく、見てしまっていた。

「こ、この私がどれほど我慢していたか！ やって良い事と、悪い事があるだろう」

「知らないのだ」

「殺してやるううううう！」

激怒しているハイに掴みかかれても、リュウは平然としていた。寧ろ微かに笑みを浮かべて、非常に楽しそうである。

「素直に見ればいいのにー。はい、どーぞ」

ハイの両手から不穏な風が巻き起こる、互いの長い髪が揺れて宙に浮かび上がる。

最大級の風の呪文だ、リュウは軽い溜息一つハイが詠唱を終えるより先に行動に出た。

髪を振り乱し、鬼神のごとく形相のハイの前で冷静に立っている人物は、リュウくらいだろう。

この何事にも動揺しないリュウの態度は、尊敬に値する。リュウを見ているということは、その背後の鏡の方向を見ているということ。

一歩進んで鏡がハイの真正面に来るように仕向けたリュウは、さあどうぞ、と手を差し伸べた。

ハイの目の前に鏡、入浴しているアサギの全裸。

偶然にも温泉から出たところだったらしく、全裸で暑そうにしていた。

差し出されたタオルで身体をすぐに包んだのだが、ばっちりといは見てしまったのである。

「わわわわわわわわわわ私は、そ、そんなこと」

詠唱しかけの呪文が忽ち消え失せる、急に弱々しくなると赤面して俯いた。

「いっはあっ」

ぶしゅう。

盛大に鼻血を吹き出して、けれども何処となく満足げに床に倒れるハイ。

生きていて、よかった……、満足そうなハイの呟きである。

鯨の潮吹きのように吹き出した鼻血、呆れ返って倒れたハイを足でリュウはつついた。

「情けないのだー」

ひっくり返ったまま微動だしないハイを見下ろして、暫し無表情でいたのだが、不意に軽く唇の端を持ち上げてゆっくりと笑ったりユウ。

その笑顔、なんと恐ろしい事か！

数分後。

「で。何の用だ」

回復したハイは、一応客のリユウに機嫌悪そうに紅茶を差し出す。大好きな鏡鑑賞を邪魔されたのだ、不機嫌にもなるだろう。おまけにこの客室には鏡がない、のでアサギの姿が観えないわけだ。

形ばかりのもてなしを受けたリユウも、不服そうに唇を尖らせる。甘党のリユウは、砂糖が入っていないその紅茶を渋々口に含んだ。不満な待遇にリユウは眉を顰めるのだが、砂糖と茶菓子が無い、ということだけではなかった。

ハイが先程から大事そうに抱いている人形、視線が釘付けになる。重苦しい沈黙の後、ようやくリユウが切り出す。

「その人形、ハイが作ったぐ？」

「当然。可愛いだろう、触らせないからな。こう見えても幼い頃から裁縫は得意で」

いや、得意かどうかは訊いてないのだが、と心で叫ぶリユウ。

嫌悪感の瞳でリユウを睨みつけるハイ、その視線で人形を大事にしている度合いが判明した。

魔王ハイに真正面から凄まれる原因が、人形である事に頭痛しつつ。

「や、触らないから安心するのだ」

苦笑いでそう告げると、ハイは安堵して人形をぎゅう、と抱き締めた。

呆然、怖いよ、ハイ。

本物に触れないから人の道を誤ったようだ、人形を愛でる事にしたのだろうか。

「今日は、ハイを助けようと思ってきたのだ。イイモノをわざわざ

調達してやったんだから、感謝するようにだぐ」

「イイモノ？」

助けてやる、とリュウに言われても胡散臭い。

アレクに言われれば喜んで聞き入れていたのだろうが、生憎相手はリュウだった。

俄かに信じられない、当然である。

親身になって考えてくれそうもない相手である、不機嫌な声で紅茶を啜りながら返答するハイ。

「惚れ薬を持ってきたのだ」

「不要だ。そんな外道な物は使わない」

予想以上の即答に多少リュウはたじろいだ、明確に呟きのほほんとして紅茶を啜っているハイを見つめつつ軽く仰け反って次の手を考える。

「ふーん。じゃあこれは？ 媚薬、効果抜群」

ハイの目の前に小瓶を差し出す、中身は紫、毒々しいほどの紫。軽く振ると、ねっとりとした感じの液体らしく、ゆっくりと動いた。

「びやく？ なんだそれは？」

「え、知らないの？ 口にすれば誰でも淫乱になってしまうという便利な代物なのだぐ」

先程の惚れ薬よりも性質が悪い物体である。

別にリュウの所持品で、毎回フル活用しているわけではなく、わざわざハイ用に取り寄せた媚薬。

特に男女の色恋ごとに興味のないリュウにとって、それこそこの薬は不要だ。

低く唸って軽く睨みつけるように自分を見てくるハイに、リュウは苛立ちを覚える。

「いいじゃん、魔王だから。奪っちゃえ。勇者をこれでモノにすればいいのだく」

「モノにするだなんて、そんなこと」

顔は赤らめずに、遺憾を憶えて唇を噛み締めるハイに、不服そうにリュウは頬を膨らませる。

「モノにしちゃえば、ハイが飽きるまで傍にいるぐーよ」

「そんなことして傍に居て貰っても私は嬉しくないっ！ あの子の意志で私の傍にいて欲しいと思う」

「でも、魔王と勇者だぐ。無理だぐ」

「私は、力でどうこうするのではなく、私自身を知ってもらって心を通わせたい。それが、『愛』というものであると思う」

「愛？ いつから聖職者になったく、ハイ？」

「……もういい、帰ってくれ」

力なくリュウを見つめると、ハイは悔しそうに唇を噛み締め頂垂れる。

精神的に疲労が激しい、魔王と勇者だなんて、他人に言われなくてもわかっていた。

おまけに、自分の口から『愛』なんて甘ったるい単語が飛び出た事にも激震。

更に聖職者と言われた事にも、動揺。

テーブルに突っ伏してそれ以上何も語ろうとしないハイに、深い溜息一つ零してリュウは部屋を後にする。

「これは、重症なのだから。手に負えないかも」

リュウは廊下の壁に持たれて、持参した小瓶たちを忌々しそうに見つめる。

まあでも、ちょっと、楽しいかもしれない、かな。

ハイのあんな姿を見るのは初めてだった、余裕がなさ過ぎる。

翌日、噂を聞きつけて今度は魔王ミラボーがやってきた。

勇者を攫ってしまえばよい、と。

直接ハイが出向いて、魔界へ連れてこればいいのではないかと。

「勇者を魔界へ連れて来い、と？ 確かに逢いたいけど……」

魔王自ら勇者をご招待、というのは如何なものか。

苦笑いするハイに、ミラボーは妙に親身になる。

「逢う方法はこれしかないのでは？ 多少強引かもしれないが、そ

こはハイ、説得すれば良い。ハイ次第だ」

「うんうん。本当にハイがああ勇者のことを大事に思っているのなら、説得すればいいんだくよ」

いつの間にもやらリュウも参加し、ミラボーに同意している。

勇者が魔界へ来るとしたら、魔王を倒しに来る時だけだろう。

それ以外にどんな用事があったら訪れるものか。

「拒否されたら、耐えられない」

女々しい事を言い出したハイに、頭を抱えるミラボーとリュウ。

「攫ってしまえばいい、拒否されても強引に」

「うんうん、攫ってきてから説得すればいいのだぐー」

「そんな無茶苦茶な！ 自害でもされたらどうすれば!?!?」

混乱と焦燥感、ハイは部屋をうろつきながら、頭を捻っている。
ええい、優柔不断な魔王め！ 先日までの冷酷な威勢はどうしたんだ。

「ここで実行しないと、永遠に逢えない。というか、逢うとしたら決戦の場になる」

「良く考えるんだぐ、説得が成功するかしないかはハイ次第なのだぐー。今が大事、まずは実行実行！」

必死に願ったら、勇者は快く魔界へ来てくれるだろうか？

敵意がないことを誠意を持って話せば、理解してくれるだろうか？ 魔界へ連れてこれば、一緒に話が出来るし、散歩だって出来る。

全ては自分次第、自分の行動で運命が決まる。

ハイは徐に顔を上げると、決意の思いを宿した瞳で深く大きく頷いた。

腹をくくったらしい。

「よし……解った、私が出向いてみよう」

「そうかそうか、よく決意した！ 早速行くがいい」

「ハイ、頑張れー」

ミラボーが嬉しそうに頷いて不気味な笑顔を浮かべた、これでも本人は心底喜んでるらしい。

けれども、ハイは首を横に振った、怪訝に眉を潜めるミラボーとリュウ。

未だ何か問題が!?!? 二人の魔王は顔を見合わせた。

「何故なのだろう？」

釈然としないハイに微かな苛立ちを見せるリュウ、足を踏み鳴らす。

が、ハイは今まで誰にも見せなかった爽やか過ぎる笑顔を浮かべて、頬を赤く染めるところ言い放った。

「あの子に部屋を一つ用意したい。衣装とか、家具も揃えて。

……可愛いから、たくさん洋服を買ってあげたくて」

あ、そう。

リュウは項垂れて、勢い余ってやる気満々のハイをそっと見つめた。

物凄い勢いで部屋を飛び出し、アレクの元へと出向くハイを力なく見送る。

アレクに直談判し、ハイの隣の部屋を貰い受け、直様大掃除が始まった。

若い魔族の少女達を調査し、『あなたが憧れる住みたいお部屋』を造り出す。

洋服も流行のものを取り揃えた、あとはハイの趣味で何やら色々買い足される。

ハイ監修の元、豪華で可愛い部屋が徐々に完成していった。

数日経過したが、ハイ的には満足だったようで人形を胸に抱きつつその完成した部屋を感激して見つめた。

「気に入ってくれれば良いのだが」

もうすぐ、逢える。

人形を抱き締めて、感動に打ち震え。

嬉しくて堪らない、説得が成功してこの部屋に連れてきて、それで。

『ごらん、ここが君の部屋だよ』

『まあ、なんて素敵なお部屋！ 感激ですっ』

『いやいや、礼には及ばないよ。気に入って貰えたのなら十分だ』

『ハイ様、ありがとうございます、大好きっ』

『いやいや、そんな、あーっはっはっはっはっは……』

あーっはっはっは……！

五月蠅いほどのハイの笑い声が部屋中に響き渡る、未だ作業をしていた数人の魔族が青褪めた顔でそっと部屋から出て行った。

鋭意妄想中のハイ、リュウすら声をかける事ができず、薄ら笑いを浮かべていた。

くるくると舞いながら、人形と踊るハイ、魔王の威厳、0。

ああもう、この人ダメだ。

頭を抱えて流石のリュウも何もかも放り出したくなった、テンションが高すぎてついていけない。

「ハイ、ハイ。いい加減迎えに行かなくていいぐー？ 主役がいないぐーよ、この部屋に」

絶賛妄想中、大声で叫ぶリュウに、ハイはようやく我に返る。

照れ笑いを浮かべて、ふふふ、と含み笑い。

「よし、では準備も整った事だし出向こうか」
「いつてらっしやーい」

高笑いを残してハイは城を後にした、さあ、勇者を迎えに行こうか！

けれども。

「……………」

城から出て数歩、何処へ行けばよいのかわからない事に気がついたハイ。

この城から出るのも初めてだった、この星の地理を全く知らない。慌てて頼みの綱のアレクの部屋へと出向いたのだが、生憎留守である。

仕方ないので渋々リュウの元へと戻ったのだが、「自分で頑張れー」と笑顔で追い返された。

廻り廻ってミラボーを尋ねるハイ、リュウに対しての文句をぶつぶつと声に出しながら歩いた。

ミラボーの部屋は妙に湿気が多い上に、日光が入っていないので正直苦手な場所である。

が、今は一大事だ、それどころではない。

快く地図と宝石を数個手渡されて、簡単な説明を受けた。

「城の屋上に『港行きドラゴン乗り場』があるから、それに乗ってまずは港へ。そこから人間の街『ジェノヴァ』行きの船が出ている。勇者達もジェノヴァを目指しているようだし、そこで出遭えるはずだ」

「そうか、ありがとう。助かる」

親切にしてもらって、はにかみながら会釈するハイ。

部屋を飛び出し屋上へと向かう、踝までも覆い隠すハイの衣服が初めて邪魔だと思った。

上手く走る事が出来ず、裾を引っ張り上げて真剣な面持ちで駆け抜ける。

屋上に飛び出し、港へ行きたいことを告げると魔王ただけあって

直様一体のドラゴンが用意された。

まだ若いドラゴンナイトが緊張した様子で、硬直気味に手を差し伸べる。

貧乏くじを引いたらしい、何が哀しくて魔王を送り届けなければいけないのか。

「このドラゴンで私を、ジェノヴァという場所まで連れて行ってくれないか？」

「む、無茶言わないでくださいよ！ 僕とこのドラゴンでは長距離の飛行が出来ません。精々この魔界の一周が出来くらいです」

「なんだ、役に立たないではないか」

「うう。ぼ、僕はまだ未熟なので。隊長クラスのドラゴンナイトならば可能でしょうけど。」

そもそも、このドラゴンとて長距離の移動は不可能です。互いが信頼しあつた真のドラゴンナイトと相棒のドラゴンでないと、あんな場所へは」

「では、隊長クラスのドラゴンナイトとやらを出せ」

「い、今不在なんですつ。あー」

困り果て嫌な汗をかいている若いドラゴンナイト、隣にいて気の毒そうに自分を見ていた同僚に思わず声をかける。

こっちへ振るな、と後退りする同僚。

「トビイは？ 今何処に居るっけ？」

「トビイはこの間から旅に出てて不在だよ。連絡もないらしいし」

聴いていたハイは首を傾げる、トビイという人物ならば可能なのだろうか？

淡い期待を胸に抱きつつ、二人の会話を聞く。

溜息一つ、ハイに結論を語ったドラゴンナイト。

「今は不在ですので。最近まで人間の凄腕のドラゴンナイトがいますね、彼ならば可能でした。人間であるが故に、隊長にはなることが出来ませんでした。腕は確かです。僕も憧れてましたから」

「トビイとやらを呼び戻せ」
「行方不明で、居場所が掴めません。申し訳ありませんが大人しく港から船で出発してくださいっ」

悲鳴に近い声で強引にハイをドラゴンの背に乗せると、不満そうに喚き散らすハイを無視してドラゴンが浮かび上がる。

暫し文句を言い続けていたハイだったが、初めての空中散歩に啞然と下を見下ろし、大人しくなる。

緑の木々が何処までも茂り、風になびいて大きく揺れる。

壮大で雄大な景色、言葉を忘れてハイは圧倒されていた。

流れる雲に見え隠れしている太陽、その光が眩しくて思わず瞳を閉じ。

木々の合間から突然見えた大きな湖に歓声を上げて、その透き通るような美しさに見惚れ。

次は海を見た、地平線の向こうにも続く広大な風景である。

初めての経験で暫し放心状態だったハイだが、我に返ると到着した港に啞然とする。

何処から湧いて出たのか魔族が溢れていた、何処を見ても、魔族だらけ。

ハイは知らなかったのだが、魔界で最も栄えている場所はここなのだ、故に多くの魔族たちが集まっている。

興味深そうに眺めるハイ、まだ昼間なのに酒の香りと陽気な歌声が聞こえてくる居酒屋。

新鮮な野菜を自慢げに売る店、妖しげな道具を売っている店、洋服を並べて褒めちぎって買わせている店。

そう、ハイは店を初めて見た。

順に皆がひれ伏していく、徐々にハイを中心にして広がる輪。

最初は少年、それから聞いていた周りの魔族達、噂が噂を呼んで波紋は続くよ何処までも。

啞然とその光景を見つめていたハイだが、我に返る。

「頭なぞ下げなくてもいい！ そんな時間はないから、一刻も早く船を出せっ」

「わかりましたあああああ！！！！」

魔王ハイの初めての船旅（前書き）

【それは遠い過去からの因縁、紡がれた魂の嘆き】

雪が降る、降って積もって凍えてしまった

春の息吹を待ち侘びる、暖かな日差しはその季節

健やかに全てが育つ、生命の息吹を感じて

大樹となりし、もとはか弱きただの芽は

実を幾つも幾つも、恩恵を受けてならせたもう

浅葱色した、綺麗な花が咲き誇る

焦がれて欲する私の楽園

そこで咲きましょう、永遠に咲き誇りましょう

勇気を下さい、そこで咲き誇れる勇気を下さい

者は極き、臆病の者

弱くて、強く、反した者達の楽園を

【運命の歯車が、音をたてて廻り続ける。 全ては回帰する、”願
い”へと】

魔王ハイの初めての船旅

魔王ハイの船旅が始まった。

魔王の一喝にそれまでのんびりと乗船していた魔族達であったが、機敏な動きに早変わり。

魔王が即座に船を出せ、と叫んだのだ、従わなければ殺されると思い込んだのだろう。

我先に、と押し合いながら乗船していく。

ハイは最も豪華な船室を当然のように用意され、丁寧に持成された。

魔族達の知り得る魔王ハイといえば、現在四人揃った魔王の中で最も残虐性の高い非道な魔王である。

闇の属性魔法に関して右に出る者がなく、とても人間とは思えない魔力である、と噂されていた。

その為出港して船旅が始まったわけだが、魔族達はハイを恐れて誰一人として近寄らなかつた。

まあ、当然だろう。

ハイは船が物珍しかったので、緊張し逃げ惑う魔族達にお構いなく、毎日探索である。

勝手に厨房に侵入し、無断で操縦室へ出向き、甲板で日光浴。

魔王なので例え邪魔だろうとも誰も咎められない、機嫌を損ねないように愛想笑いで一目散に通り返る。

ところが。

暫くして急に退屈になったのだろう、甲板でぼけーっと海を眺めていたハイの足元に、小さな鞆が転がり込んできた昼下がり。

魔族の小さな少年が遊んでいた鞆らしく、転がった先に立っていたハイの姿を見て小さく叫んだ両親とは反対に、少年は臆する事無く近寄った。

ハイは鞆を拾い上げると、近寄ってきて手を伸ばした少年に屈ん

で鞆を返し、徐にその頭を撫でる。

「ありがとう、ハイ様っ」

「それは、面白いか？」

「うん、これはね、誕生日にお父さんが買ってくれた宝物の鞆なんだよ」

「ほう、良い事だ」

瞳を細めて、少年の視線に合わせて語るハイ、その光景を恐る恐る見つめていた魔族達は首を傾げる。

魔王ハイが、穏やかに笑った。

……魔王ハイ、笑えたんだ。

……あの少年、殺されるかと思ったのに。

唾然と事の成り行きを見守っていた魔族達、目の前で少年とハイは、鞆で遊んでいる。

極自然に。

少年は勿論、ハイも無邪気に笑っている。

恐る恐る顔を見合わせ、両親は周りが固唾を飲んで見守る中、震える足を懸命に動かし近寄る。

「あ、の。魔王ハイ様っ」

「ん？」

「お父さん、お母さん！ ハイ様とっても優しいね！」

近寄ってきた両親の元に駆け寄った少年、ハイはその様子を見つめて衣服の皺を直している。

恐怖に打ち勝った両親は遅れてハイに語りかけた、間近で見て、ハイが噂とは違うのではと直感。

息子を抱きとめて、深く礼をする両親にハイは口元を綻ばせたままだった。

「楽しかった、ありがとう。また遊んでみたいものだ」

「うん、ハイ様！ また一緒に遊んでね」

「ああ、約束しよう」

少年はすっかりハイが気に入ったらしく、両親から離れ足に抱き

ついてきた。

そんな光景後、徐々にハイに語りかける魔族達が増加していった。別に嫌な顔一つせず、ハイは同僚の魔王達の話を集まった魔族達に聞かせた。

普段は雲の上の存在である魔王達、その日常を聞いて騒然となる。特にリュウの話は人気があり、困惑しながら語るハイの表情が愉快で、魔族達は毎日話を聞きにハイの元へ集まった。

勇者を見てから、ハイは変わった。

魔王と呼ばれる幼かった神官ハイは、実際今の様子と変わらなかつた。

このように人の中心で会話し、真面目で笑顔も堪えることない愛される神官だった。

とある事件を切欠に、全てを拒絶し、近寄り難い雰囲気を出していたのだ。

船内では魔王ハイに心酔する魔族達も少なくはなく、いつの間にか人気者である。

以前のハイのイメージは掻き消され、親しみやすい魔王のイメージが固定される。

毎日毎日、朝から晩まで、ハイの元には魔族達が耐える事無く通い詰める。

ハイとて、久しぶりに大勢と会話するので、多少の疲労感はあるものの楽しかったので気にも留めなかった。

ところでこの船、原動力は魔導師達が創った人型の霊体。

甲板下で漕いでいるわけで、疲労も感じない為常に進み続ける。

人間達の操縦する船とは大きさも速度も断然優れているわけなのだが、ハイに解る訳もなく。

「おい、まだ到着しないのか？」

魔界からジェノヴァまでの距離すら知らないハイは、時間の合間を見ては船長に詰め寄っていた。

その度に血相抱えて謝罪をする船長、気の毒である。

遅いから責任とって死ぬ……という台詞は吐かないにしろ、相手は魔王なのだ、応えたいのは山々である。

今も甲板では船長である中年の魔族が、懸命に謝罪しつつ宥めていた。

「申し訳有りません、ハイ様。これでも予定よりは進みが速いのです。えー、地図を見て下さい。現在この付近を航海中です。目的地はここです」

「遠いな」

「遠いですね」

「急いでくれ、あの子が移動してしまうのだ、なんとかしてくれ」「どうにもなりませんよ」

むっすりと膨れ返るハイ、苦笑いしつつ必死で説得を繰り返す船長。

が、不意に思い立ったように船長は腕を組んで考え込んだ。

ここで魔王のご機嫌を取れば昇格できるかもしれない、と多少の期待を籠めて。

暫くして、戸惑いがちにハイに声をかける。

「ハイ様、上手く行くかは保障できませんが、試してみる価値はあるかもしれません」

「何が？」

「風系の呪文は、得意ですか？」

「ああ、一通りは」

「……やってみましょうか」

船長はハイを連れて船尾へと歩いて行く、海原を見つめながら神妙に頷いて、説明を開始する。

「速度を、上げてみましょうか。実際行った験しがありませんので、再度言いますが保障は出来ません。風の呪文の衝撃で、この船体に力を加えて……」

「説明は良い、私はどうすれば良いのだ？ 結論を言え、結論を」
せつかちなハイに、苦笑いの船長。

咳を一つ、語り始める。

「えーっとですね。海目掛けて風の呪文をお願いします。次いで、帆が破れない程度に帆に向かって風を。成功すれば速度が上がります」

多分。

「よし、解った。真空大激波」

船長の言葉が言い終わらないうちに、ハイは最大の風の魔法を發動する。

短時間での詠唱であったが、その辺りは魔王ハイである、威力もそこらの術者よりも格段に上であった。

風が吹き荒れる、ハイの突き出した両手から巻き起こった疾風の波動によって、微かに空気の流れが変わる。

次いで帆へ向けて、軽めに唱えてみたハイ。

帆が不自然な風に煽られたと思ったら、突如船体は大きく傾き、次の瞬間海の上を走るかの如く疾走し始めた。

「うわーっ！」

船内に居た魔族達が壁に叩きつけられる、甲板に居た魔族達が悲鳴を上げて吹き飛ばされた。

幸いにも海へと放り出される事はなかったようだが、大勢何かしらの痛手を負った。

悲惨なのは船長である、是ほどまでとは予測していなかったが為に、ギリギリのところ得手すりに捉まって居た。

鯉幟の様にひらひらとはためく船長。

悲鳴が出せない、船長の証である帽子を吹き飛ばされ、けれども必死に命を繋ぎ止める為両腕は手すりを離さずに。

ハイは自身だけ、空気抵抗を和らげる防御の呪文を身に纏っており、何食わぬ顔で海を眺めている。

理不尽な速さで進む船体、甲板下では霊体がオールに巻き込まれるという異常事態。

阿鼻叫喚。

叫び声と共に前進する船、この日、人間の船がこの様子を捉えたのだがとても船には見えなかったらしい。

水しぶきを盛大に上げて海を走る巨大な生物、そのようにしか見えなかったので全員武装の態勢をとった。

おまけに津波を巻き起こし周囲の海域を襲う、非常に傍迷惑である。

「よし、結構結構。これならば速く到着出来そうだな」

豪快に笑うハイ、船上では未だに悲鳴は消えていない。

ハイはのんびりと強い日差しを浴びながら、水しぶきで作られた虹をうつとりと見ていた。

何度も言うが、BGMは魔族達の盛大な悲鳴である。

海中でも魚達がその衝撃で気絶をし、時折甲板に打ち上げられていた。

この調子で、毎日船は目的地へと向かう。

そう、魔王が勇者に会う為に。

底闇の邪神（ミラボー）

闇の中で、何かが蠢いた。

豪快に笑い出すそれ、蛙の潰れた様な耳障りな、声。

魔王ミラボー、ただ暗黒の中に身を潜めているその魔王。

妖しく光り輝く水晶を見つめながら、この世のものとは思えないほどの不快な笑い声を発している。

発狂しそうな位に、耳を塞いでも脳に直接響いてしまうような、笑い声。

目を凝らせば傍らに女性が1人、立っていた。

黒髪で無気力な瞳の、なかなか整った顔立ちの……人間だ。

彼女は顔色一つ変える事無く、ミラボーの傍らに仕えている。

「ハイが勇者を迎えに行つた。愉快愉快」

眼下の水晶に映っているのは、紛れもなく勇者アサギである。

次いで、ハイが映し出される。

「この娘、面白いな。あのハイを短期間で心変わりさせた。逢わずともただ、一目見ただけで、あそこまで変えた。強力な”魅力”が常に発動しているのだろくな、あの娘」

重低音で笑うミラボー、身に纏っている宝石が、煌びやかに光る。

あの洞窟内にて、ハイこそ知り得なかったのだがミラボーは内密に音声を拾い上げていた。

ハイよりも先に勇者達に手下を接触させ、映像は見る事が出来なかったが音声を聴き取っていたのだ。

それこそ、勇者達が先に戦闘した死犬である。

常闇の権力者ミラボーは、張り巡らせておいた屍人形達を動かした。

元は、別の目的に使用する為だったのだが幸運だった。

犬達はアサギの魔法によって浄化されたが、勇者の一把握は出来たミラボー。

直様別の部隊を仕向け、静かに尾行したのだ。

『この娘、人間じゃな』

聞き取り歓声を上げたのは、吸血鬼クーバーが最期に漏らした言葉である。

人間ではない娘。

魔王すら一瞬で虜にした娘。

勇者、アサギ。

「確信はない、あくまで憶測だ」

傍らの女に、含み笑いで語る。

「魔王を一目で虜に出来る”魅力”の持ち主で、勇者。そして音声からこの娘の血液が何やら特殊であるという。」

以上を踏まえてエルフに近い存在とみてとった」

『エルフ？ ああ、エルフの血に似てる気がするー。人間の血にしては妙に甘いんだよな、この子』

クーバーの言葉を自身で口にして、笑うミラボー。

エルフ。

一般的に姿を見せる事無く、ひっそりと何処かの山奥で結界を張り、外部からの進入を極力拒んで生活している種族である。

その容姿は皆美しく、誰もが瞳を、心を奪われる。

エルフの血肉は、魔力増幅の秘薬であるという事実も今は知り得る者も少ない。

血液を体内に取り込めば、かなり魔力の飛躍になるのだが、それよりも一滴残らず血も肉も喰らい尽くしたほうが当然飛躍率は高い。故にエルフをその目的で捕らえた邪な者達は、全員エルフを喰らい尽くした。

時代に名を轟かせた魔導師達ほとんどが、実際のところエルフの血肉を取り込んでいた、といっても過言ではない。

エルフ達とて喰われるだけの存在ではない、その為手に入れたくとも容易くは手に入らない。

ミラボーとて例外ではなく、3星にてエルフを喰らい今の魔王の

地位を手に入れたのだ。

その数は、10を越える。

ただ己の欲望の為に、自身の魔力を高める為だけに。

魔王として君臨するために、人間達を、そして神をも支配下に置く為に。

ミラボアの産まれは非常に低級な、ただの邪な一固体だった。

現在の地位を手に入れるまでには、部下達が知り得ないミラボアなりの努力があったのだ。

3星を制圧したといっても過言ではないミラボア、4星へと足を踏み入れた。

理由は単調だ、今の惑星には最早何も愉しみが無い。

人間等壊滅的だ、多少抵抗があればまだ退屈凌ぎにもなるのだが、全くなかった。

出世を愉しんだ、何時しかミラボアを蔑んでいた者達が自分に平伏す姿が面白かった。

自己満足の為だけに、ミラボアは強大になったのだ。

欲望は尽きない、今の惑星にミラボアの求める刺激も優越もなかった。

故に、新しい自分の舞台を探してやってきたミラボア。

傍らに有能な美しい人間の女を、一人。

最初に異空間を移動したのは。若干一体と一名のみだったのだ。

新たな惑星で、再び君臨する自分を想像したら異常な興奮状態になった。

他惑星の状況など、全く知らない。

自分以上の魔王が存在するかもしれないが、それを凌駕してしまえば良いだけだと妙な自信があった。

だからこそ、面白いのだと。

万が一敗北に至れば、3星チュザールに帰還し力を蓄えれば良いだけだと。

4星クレオの魔王アレクは至って穏やかな青年だった、瞬時に虫

唾が走った。

全く人間を制圧するという意思が見られず、変革を期待していない無能な魔王だと判断。

そのような魔王ならば潰して成り代わってしまおう、ミラボーはその意図でアレクに近づいた。

けれども内に秘める魔力は本物、ミラボーとは互角であると判断する。

冷汗が、伝った。

何も物言わず、ただじつと来訪者であるミラボーを見つめていたアレクに恐怖を感じた。

腸が煮えくり返る思いだった、久方ぶりの屈辱である。

こんな、若憎ごときに。

しかし、アレクはミラボーを邪険に扱わず、かといって優遇するでもなく一言。

「居たいのならば、好きにすればいい」

一言、呟いた。

相手にされていないだけなのか、ただ、他人と関わるのが面倒な魔王なのか。

アレクの無表情ぶりにミラボーは意図が掴めず、齒軋りする羽目になる。

非常に癢に障る魔王だった、何もかも全てにおいて。

部下からの信頼が厚い事も、ミラボー的に釈然としない。

あの、綺麗な鼻っ柱を折ってやりたい……ミラボーがその考えに行き着くまでに時間はかからず。

好意的に振る舞い、アレクにも積極的に話しかけている滑稽な自分。

しかし、胸の内には反逆の思い。

今のままでは勝てないことなど百も承知だったミラボー、不服そうに傍らの女が囁く。

「ミラボー様でしたらば、アレクなど赤子の手を捻るように」

「エーアや、真に賢く強き偉大な者は。このように万全を期してから行動するものだ」

ミラボーは水面下でエルフを捜した、悟られないように単独で。アレク的能力を超える為には、エルフを喰らうのが最も手っ取り早い。

絶対的な力でアレクを抹殺する為に、最低でも二人だと判断。

4星クレオを手中にする……ミラボーの現在の欲望である。

3星チュザールのエルフは、全滅していたのでこの惑星で探し出すより、他なかった。

「二人が、どこまで魔力増幅の糧になるかは解らないが、血統書きではあるかな」

笑う、笑う、ただ、笑う。

ミラボーは心底愉快そうに、涙を流してその不恰好な身体で床を転げまわっている。

ミシミシ、と壁が軋むがお構いなしだ。

掲げてある、暗黒水晶に映るのはアサギと、もう一人。

金の長い髪、明快な美しい女性が映っている、エルフだ。

アレクが時折城を留守にしていたる事は、以前から気になっていた。

不審に思い幾多の魔族を唆して調べ上げたらば、ミラボーには予期せぬ歓喜の事実が判明する。

魔王アレクの出向く先は、恋人の元。

その恋人がよもやエルフだったとは、ミラボーの嬉しい誤算である。

ただ、エルフと魔族の混血らしく、生粋のエルフではなかった。

ハーフェルフである、けれども、エルフの王族の血を引いている事が発覚した。

何処までが真実かは定かではないが、ミラボーが突き止めた過去はこうだ。

エルフの里を抜け出した1人の王女は、森の中で水浴びをしてい

たという。

偶然通りかかった魔族の青年は、その王女に心を奪われて欲望のまま王女を犯してしまう。

その結果、王女はその魔族の青年の子供を身籠ったわけだ。子供に罪はなく、魔族の青年を放り出しエルフ達はひっそりと混血の子を育てる事にした。

が、王女もまた、魔族の青年に心惹かれており、反対されながらもエルフの里で魔族の青年も暮らす事が許された。

混血の王女、名をロシファという。

他種族と交わった為か、寿命短く両親は他界したのだが、非難を浴びる事無く愛されて育ったロシファ。

魔族の父も繊細な顔立ちをしていた為、当然外見も美しく成長する。

蝶よ花よと甘やかされて育てられた為だろうか、多少元気が良すぎるのが周囲の悩みの種である。

そんな予感的中し、エルフの里を好奇心で飛び出したロシファ、血相変えて連れ戻しに出たエルフ達であるが、母親と同じく魔族の青年に出会ってしまう。

そう、運命に導かれるがままに。

銀髪の長い髪を風に靡かせ、聡明なその魔族の長である青年アレクと。

金髪の長い髪を風に靡かせた、可憐なエルフの少女。

金と銀の長い艶やかな髪が、光に反射し混ざり合う。

一目で互いに恋に落ちた二人は、魔族の王とエルフの王女。

母親と同じように魔族の男に見惚れたエルフの王女に、案の定周りは反対した。しかし、父親と同じくアレクは純粹で真面目な青年だった。

とても、魔王として一族を率いているとは思えないほど、健気でどちらかというと弱々しくすら思える。

一方ロシファは、天真爛漫で怖いもの知らずの無鉄砲、アレクに

対しても遠慮がない。

アレクが魔王だとするならば、上手くいけば魔族とは協定を結びひっそりとエルフ一族が暮らさずともよくなるかもしれない、と至福の未来を描き始めたエルフ達は二人の仲を許可した。

仲睦まじく共に過ごす二人を見ているのは心地よく、またアレクの人柄もエルフ達は好いていた。

エルフの里では魔王アレクを受け入れ、時間を見つけては無理をして訪れるアレクを持成しているという。

最近ではそのエルフの里、何故かロシファと乳母の二人のエルフのみになったとの情報も得た。

好機だった、まるでミラボーに味方したとしか思えなかった。

何処へ行ったのかはミラボーの知ったことではないが、少なくともロシファと乳母、二人のエルフを喰らえるだろう。

混血のエルフの王女・ロシファを喰らうことが、ミラボーの願望だった。

そして、予期しなかった勇者の娘。

「エルフの可能性は無きに等しいだろう、だが、その血に増幅効果があるのならば喰らってやろう」

勇者には特殊な血でも流れているのだろうか？ ミラボーとて勇者を見たのは初めてのことである。

増幅にならずとも、喰らった時点で勇者は消滅、葬り去れるのだからどちらに転んでもミラボーに損はない。

魔王アレクの恋人・エルフの王女ロシファ。

魔王ハイの想い人・勇者アサギ。

この二人を喰らってしまいたい、喰らって自身の力を無限にしてみたい。

「さらばだ、エルフの王女と勇者の娘。恨むなら己の血を憎むが良い。」

そしてアレクとハイよ、娘らと出遭ってしまった己の不幸を嘆くが良い」

愉快である、笑いが止まらない。

魔王アレクと魔王ハイが愕然として、自分に成す術もなく朽ち落ちる瞬間を見てみたい。

想像しただけで、恍惚の笑みが零れてしまう。

問題は、残る魔王リユウだった。

しかし、そこまで他人に関心を示していないように見て取れるので、干渉はしてこないだろう。

流石に三人の魔王を同時には相手に出来ない、だが単独ならば順次抹殺できそうだった。

”あと二人以上、エルフを喰らえさえすれば。”

魔王ハイは、勇者を迎えに行った、唆されて、迎えに行ってしまった。

近いうちに勇者を連れて戻ってくるだろう、隙を見て喰らってしまえばいいのだ。

「さて、どちらの娘を先に喰らうべきかねえ」

愉快そうに含み笑い、「エア」とミラポーは呟く。

傍らの女が、短く返事をした。

「どちらの娘を喰らうのが得策だ？」

「エルフの王女ではないでしょうか？　ハイが連れて来る娘には隙がないように思えます。片時もハイが離れないでしょうから。とするならばやはり王女のほうかと」

透き通った声で、淡々と語るエア。

表所を変えずに意見を述べると、一礼して下がっていく。

「そうだな、それが良いだろうな。くくく・・・ハイ、早く勇者を連れて来い。」

アサギという名の勇者を連れて来い。可哀想なハイ、何も知らずに

闇の中でミラポーが腹を抱えて笑い転げる、延々と、笑い転げる。エアは無言で、そのミラポーを見つめていた。

意志なき、瞳で。

若干ミラボアの把握した事実と、真実は違つが、然程問題ではな
かつた。

最大都市ジェノヴァ

流石は大都市である、外部からの侵入を悉く欺くかのような要塞造りである。

検問に、数十分要した。「盗賊団から護る為よ」と説明されたが勇者達は退屈だ。

ようやく重々しい門を開けてもらい、馬車ごと街へと侵入した。入ってすぐ、右側の『馬車一時預かり所』にて申請を行い、ここで滞在期間によって料金は異なるが馬の飼育に体調管理、馬車の補修などを行ってもらえるらしい。

有り難い事である。

一行は馬車から降りると大きく伸びをした、窮屈だった馬車は宛らエコノミー症候群。

身体が小さく悲鳴を上げる。個々に屈伸を行い、徐々に身体を慣らしていった。

「まずは食事にしようか。そこで今後の予定を手短に話す」
ライアンの発言に大きく同意する一向、マダーニが行きつけの店があるとのこと、そこへ出向く事にした。

歩きながら呆けるアサギとユキ。

そこは見て恋焦がれた外国の情景のようだ、よく二人は旅行会社の店に置いてある海外旅行のパンフレットを持ち帰っては眺めていた。

大きくなったら旅行へ行こう、という子供ながらの約束事である。卒業旅行は国内の某テーマパーク、中学校は一泊二日の遠出旅行、高校ならば奮発して海外旅行。

行きたい場所は多々あった、最も憧れたのはフランスだ。どの一角を見てもお洒落だった、何をしても絵になってしまう。

その憧れに似た風景が目の前にあるのだ、興奮しないわけがない。荷馬車で野菜や果物を売るおじさん、お洒落な感じだ。日本とは

また違った雰囲気である。

籠に入れた花を売り歩く娘、少なくとも、アサギとユキが生活している日本の街にはそんな少女は居なかった。

ほぼ沿岸沿いに造られているここ、ジェノヴァ。城壁に囲まれながらも窮屈さは微塵も感じられないのは、人々の活気ある笑顔の為か。

潮風が、香る。

城壁に上がるか、小高い丘の公園へ出向けば無論眼下には紺碧の海が悠々と広がる。

海外旅行気分である、はしゃぎながら進むアサギとユキを、慌ててトビイが捕まえた。

人通りも多い、はぐれでもしたらその時点で終わりだ。この世界に迷子放送など、あるわけがない。

地の利のない勇者達、保護者感覚で皆目を光らせて監視している。男の勇者達も例外ではなかった、久々に戦闘と休憩以外で地面に足をつけて歩く感覚に安堵を感じ。森林風景から一転してのこの賑わいに、胸を躍らせる。

アサギはトビイと手を繋ぎながら、マダーニを先頭に一同は歩き続けた。

やがて噴水が見えてきた、石畳の大通りから幾つもの中通りへの道が枝分かれしている。洋服屋に、武器屋、防具屋、道具屋、宝石店、宿屋、雑貨屋、時折カフェ。

大通りを真っ直ぐ突き進むと、城へと到着出来るのだがその途中に広大な公園が広がっている。中心地だ。

道行く人々は皆忙しそうだが、活気に溢れており笑顔が多い。人ごみを掻き分けて、進み続ける。

「おい、マダーニ！ 何処まで行くつもりだ」

ひたすら進み続けるマダーニに、ライアンが呆れ気味に声をかけた。

「もー、何処でもいいから何か食べさせてくれ」

ケンイチと手を繋ぎながら、ミノルが情けない声を出していた。腹が、先程から鳴り止まない。

今は歩いている道には、飲食店が数多く存在した。立ち並ぶ露店からは美味しそうな香りが漂ってきており、空腹を刺激してしまうのだ。

情けないほど腹の虫が叫んでいるのは、ミノルだけではなかった。この状況では仕方がないだろう。

そんな必死の訴えに気づく事もなく、マダーニは足を止めない。「うにゃー……、美味しそう」

通り過ぎつつも、気になって見てしまう屋台、アサギはついふらふらとそちらに行ってしまうそうだった。

魚を串で刺し、焼いている店のおじさんは気が良さそうで豪快。パンに秘伝のたれ（と、店ののれんに書いてある）で焼いた肉と野菜を、挟み込んだものを売っているおばさん。

新鮮な果物を潰してジュースにした、フレッシュジュース売り場は少女達で溢れている。

「この街は海に面しているうえに、地は肥えている。様々なものが新鮮なまま手に入るから、美味しいと思う。腕も確かな料理人が多い」

丁寧にトビイがアサギに食べ物の説明をしている、後方で聞きつつ不貞腐れるサマルト。

「くっそー、オレだってクレオ出身なら、アサギに詳しく説明出来たのに」

「といたしますか、何故彼はああも容易くアサギの手を握って歩いているのでしょうか。そもそも彼は何者ですか。信頼出来る人物ですか？」

今更な質問だった。忌々しそうにアーサーが吐き棄てる、鋭い視線で睨みつけるが負け犬の遠吠え。

馬車内でトビイに様々な質問をぶつければ良かったのだが、生憎口を聞くのにも嫌悪を感じたアーサーはトビイと接していなかった。

人当たりの悪い賢者である、サマルトは同感だが皮肉めいて笑うしかない。

トビイとて、訊かれたところで安易に答えなかっただろうが。道を外れて、細い路地に入っていくとようやくマダーニが前方で立ち止まった。安堵の溜息を漏らす一行に、怒鳴り声に近い声を出す。

「こらー！ 早く来なさいよね、お腹空いてるのっ」
連れまわしたマダーニに、同じ言葉を繰り返したかった一行だがもはやそんな気力もなく、渋々店の中に連れ立って入っていく。

が、店構えを見たライアン。途端に血相変えて、慌ててマダーニの腕を引っ張った。

「待て待て、なんか高そうな店だぞ！？ あまり所持金ないからな！？」

妙に立派な造りだ、品が良さそうなのは分かるのだが裕福な旅をしているわけではない。高級料理店は出来れば避けたい。

ライアン的には一刻も早く勇者達の身体を休めたかったし、何より今後の作戦会議を開きたかったので手頃な店で食事を済ませたかった。

それこそ、今通ってきた露店でよかったのだ、腹の足しになれば。「大丈夫、顔見知りの店だから負けてもらう。ついでに、思っているより高くないのよ」

ホントかよつ、と突っ込みを入れたくなるライアンだったが背中を押されて店の中に足を踏み入れた。

店内は昼食時を過ぎていた為、比較的空いていた。店内の一番奥、何個かのテーブルを繋げて貰い大人数用の配置へ。

ガタガタと音を立てて一斉に座り出す一同、アサギの両隣と正面が取り合いになったわけだが、隣をトビイとユキが確保し、正面にアリナが座り込んだ。

トビイはアサギの椅子を引くと、笑みを浮かべて座るように促す。椅子を引いてもらうなど、家族で食べに行ったフランス料理屋以外

なかったもので、思わずアサギは赤面した。
慣れない。

「えーっと、ありがとうございます」

「いえ、お構いなく」

気障な奴、とミノルは顔を顰めるのだが、照れながらも嬉しそうなアサギに腹が立った。

……女つてのは、どーして甘ったるい奴が好きなんだろうな。小声で呟くミノル。

多少暗めの店内、壁に飾られている絵画と花が美しい。観葉植物も並んでおり、確かに居心地の良い場所だった。そこまで敷居は高くなさそうだ。

厨房から漂ってくる香りが、また空腹に堪える。

数分後、メニューと共に店員が衝立を運んできて、一行を覆い隠した。

「ね、こんな感じで周囲から孤立してもらえるの。いいでしょ？」
マダーニが耳打ちし、ライアンが成程、と低く唸った。これならば周囲の目を気にする事無く会話が出来ると、それでマダーニはこの店を推薦したのだ。

上機嫌でマダーニはメニューを開くと、慣れているのも手伝つて間を攔かずに注文である。

何冊かのメニューを数人で見つめる、勇者達も挙って真剣に見ていた。

何しろ、クレオへ来てからまともな料理は洞窟へ入る前のスープと、この間のキャンプでのパスタのみなのだ。育ち盛りの子供達、食料に裕福な日本で生まれた小学生にとって、それは苦痛な毎日だった。

意気揚々とメニューを開いて、何を食べようか胸を躍らせていたのだが。

「なんじゃこりゃー！ こんな文字読めるかあっ！」

珍しく仲良くメニューを見つめていたミノルとトモハルが、同時

に声を張り上げる。ダイキとケンイチ、ユキもまた然り、頂垂れていた。

「ええ！？ あなた達、魔導書読んでたでしょ？ 同じ字よ」

怪訝に眉を潜めるマダーニ、だがムーンが顔を上げて微かに苦笑い。

「多分あの魔導書は、どの星から勇者が来ても良い様に、手に取った者が読める文字で書かれているような、そんな何かしらの呪文がかけてられているのだと思います。」

私もこのメニューは読む事が出来ません」

「そのようですね、私もムーン殿に同じです」

アーサーも同意する、啞然とマダーニがメニューを見つめた。

「なんていうか、言葉が通じて良かったわよね……」

「いや、ホントだな……」

衝撃の事実。引き攣った笑いを浮かべる一行、静まり返るしかない。

読めない他星のメンバーの為、空腹状態のまま膨大な量のメニューを読み上げていくマダーニ。澁々読み出すが途中で面倒になった、自分の好物だけをワザと読み上げた。それが解ったライアン達4星クレオメンバーは、呆れ返るしかない。

しかし、思わぬ人物がそこにいた。

「これは……お魚ですか？」

「そう。近海で獲れる白身魚だな。淡泊で美味しい」

「では、これは……？」

「ああ、地鶏だ。バターとガーリックで炒めた料理だ、香りでまず食欲がそそられる」

「えーっと、どれもこれも美味しそうで迷ってしまうので。トビイさんに決めてもらおうかな、って」

「なら、二人で食べようか？ そうだな、オレの見立てになるけど気に入ってもらえるように選択しよう」

トビイとアサギの会話である、隣でユキが引き攣った笑みを浮か

べそのやり取りを見ていた。

「アサギちゃんには読めるみたいだよ」

絶句である。完璧ではないが、なんとなく分かるらしいアサギ、勇者達は静まり返るしかない。

何故、どうしてアサギだけ？ と、そんなことを考えても仕方がないので適当に皆注文する。

疑問は浮かぶが、今は空腹でそれどころではない。

勇者達はマダーニに読み上げてもらっていたメニューの中から、トモハルとユキに全権を託し届くのを待つ事にした。トモハルは以前からイカスミを食べたいと思っていたらしく、ユキと相談した結果イカスミパエリア……らしきものを注文。

「パエリアって何？」

「えと、スペイン料理で、平たく言えばチャーハンみたいな感じかな」

無論、日本で言うならば、である。首を傾げていたミノルに、控え目にユキが返答する。炒飯ならば、とミノルは大いに乗り気で頷いた。

待ちわびる事数十分、勇者達の目の前に真っ黒いご飯が届けられる。

近海・ガボン海で今朝方水揚げされたばかりの烏賊をメインに、ニンニク、唐辛子、塩胡椒で味付けされたシンプルなパエリアだ。

あまりに黒すぎて口に入れるのを躊躇ったミノルだが、一口食べて隣のケンイチと瞳を輝かせる。

「う、うまいっ！ イカスミすっげー！」

他にトマトの冷たいスープ、パンも出てきて勇者達は上機嫌である。どうやらパエリアセットをマダーニが、気を利かせて注文してくれたようだ。

がつがつと食い散らす勇者達に、満足そうにマダーニは胸を撫で下ろした。

上機嫌で優雅にスープを口に運ぶユキの傍らで、アサギはトビイ

と仲良く食べている。

海老のサラダに、牛肉の炭火焼、アーモンドを挽いて粉にし砂糖と練り上げて焼いた甘い菓子パンのようなもの、ジャガイモの冷製スープ、おまけでワイン。

とても数日前が初対面とは思えない仲の良さである、楽しそうに談笑しながらトビイが小皿に手早く取り分けていた。

「このワインが結構いける。何度か呑んだ事があるんだ」

「ワイン、私呑んでも大丈夫なのかな……」

「度を越さなければ大丈夫。少量ならば身体に良い薬みたいなものだよ。呑んでごらん」

この男、アサギにワインを吞ませて酔わせて何処かへ連れ去る気じゃないだろうな!? 血の気が引いた一行だが、そんな気はトビイに全くなかった。

「とりあえず、食べながらで良いから今後の計画を聞いてくれないか? 実は所持金がないんだ」

言うライアンの前に、ずらりと並んでいる食事。ハーブ入りオムレツ、ジャガイモとニンジンのスープに、玄米パンの蜂蜜添え、おまけに鴨のソテーバルサミソースにて。

所持金がないと言う割りには結構注文していたライアンに、思わずマダーニは盛大に吹き出した。

「私は国王から資金を頂いております。どうぞ」

アーサーが懐から金貨を五枚取り出して、ライアンの前へと置いた。ただ、通貨が違う為役に立つかどうか些か不安である。

「一応宝石を持参したんだけど」

サマルトが腰に下げていた皮袋に手を入れる、触ったものを手にとってライアンの前へと置いた。エメラルドと、ルビーだろうか?

換金すれば結構な額になりそうだ。

当然勇者達は何も持っていない、売り払えるものがあるとするれば、地球産の衣服くらいだ。珍しい為、高値で買い取ってもらえるかもしれない。

「あー、情けなくて申し訳ないんだが、こちらは」

ライアンは、ジョリロシャからの長旅で所持金はほぼ底をついた。アリナ、ブジャタ、クラフトにおいては、管理していたブジャタの目を盗んでアリナが使用していたらしく底を尽きつつある。何に使ったのか、不明。

マダーニ、ミシアは、マダーニの酒代へと消えていった……らしい。

「かたじけない」

平謝りしてライアンはアーサー達に礼を述べた、まさか資金不足で旅が出来ないでは洒落にならない。

ここは4星クレオ、しかしその住人達が一文無しとは非常に気まぐずい雰囲気である。

「トビイ君、は……」

「オレの所持金は、オレの物」

「……だろうな」

ならばこの料理代は、自分の分だけでも払って欲しいものである。

アサギと至福の食事を進めているトビイ、これ以上話かけたら攻撃されそうな勢いだったのでライアンは気を取り直して本題に入った。

「この店を出てからは、別れて行動する事になる。オレとトビイ君で宿の手配を。」

マダーニはアサギとユキと共に衣服の買出しだ、流石にその服装はマントをしているとはいえ目立つ。クラフトと共にトモハル、ダイキ、ケンイチ、ミノルも衣服の買出しな。

ミシアとムーンとアーサーで、ここに書き出してある道具を買い揃えてくれないだろうか？ それ以外に必要な物を思いついたらその都度購入を。

アリナとサマルトは船を調べてきて欲しい、ジョアン行きかコスルプ行きが近日出航予定かどうかを。ブジャタさんは、クリスト

バル行きあの洞窟について役所に報告を。結界を直して貰うべきだと思っからな」

一人一人の顔を確認しながらゆっくりと説明していくライアンに視線が合った者は順に神妙に頷く。

「了解、時間が余ったら資金調達にでも出掛けようかな。ところで集合場所と時間は？」

アリナがサマルトと頷き合い、ライアンに向き直るとそう問う。皆も耳を澄ます、それが一番重要だろう。

「ジェノヴァでは18時に鐘が鳴り響く、その時間に先程の門を入つてすぐの噴水で落ち合おう。街の至る箇所に日時計が設置されているから、それも目安にしてくれ。四時間くらいはあると思っ」

この振り分けはソツがなかった、必ずクレオ出身の者が一人はついているので迷子になることもないだろう。

席を立つ一行、暫しの別れになるのでトビイはそつとアサギの髪に口付けた。その時間すら惜しむように、出来れば引率したいくらいなのだから。「というか、どうしてオレまで宿の手配に」「はっはっ、気にするなトビイ君」

会計ではマダーニが店長を呼び出し、無理やり値切っていた。

「お待たせ、アサギちゃん、ユキちゃん。行きましようか」

泣き喚く店長に余裕の笑みを見せて立ち去るマダーニ、手を繋いで貰つて三人は歩き出す。

洋服屋の立ち並ぶ路地へと到着し、一通り店先に飾つてある衣服を眺めながら気に入ったものを捜す。

現在は勇者達、クリストバルで頂いたマントを羽織つて地球の衣服を隠しているのだが、ずっとこれを着ているわけにもいかない。

一応簡単な服はクリストバルでも貰えたのだが、やはり上等な布でもないので耐久性がなかった。ついでにサイズが大きい、子供用ではない。

アサギとユキなど、着用してみればほぼワンピースだ。

「気に入ったのがあつたら手に取るのよ？」

「はいつ。わー、どれもこれも可愛いね」

「うん、コスプレみたいだね！」

はしゃぎながら歩く二人を見て、マダーニは微笑むのだが、不意に表情が翳った。

何故、このような若い少女が勇者に？

未だに、理解不能である。確かに魔法を数日で使いこなす事が出来るのだから、勇者の素質があるのだろう。

けれども、腑に落ちない点は幾つか残った。

買い物最中の、来訪者

ぼんやりと歩きながら、不意にマダーニは妙な視線を感じて唇を噛む。二人の勇者に悟られないように、注意深くさり気無く、辺りを見回した。

先程から幾多の視線は感じていたのだ、それは知っているし当然だ。何しろ人目を引く美女と美少女が二人いるのだから、女達からは軽い嫉妬と羨望の眼差し、男達からは邪な視線と興味の眼差しを受ける。

他人の視線は刺激的でマダーニは好きだった、何故ならば自分がどう見られているのか感じて今後に役立てるからである。

下心のある男からの絡みつくような視線は鬱陶しいのだが、それすらも自分が魅力的だからであり。

度を過ぎると、得意の魔法と小剣捌きでその男を懲らしめた。

マダーニは自分が好きだった、他人に媚びない自分が、やりたい様に行動する自分が、楽しい事を見つける自分が。自由気ままに過ごしたかったが、母親殺しの件だけは許す事が出来ない。

例えば生活が豹変する事になろうとも、マダーニは敵を討つと心に決めた。相手が誰なのか、今はまだ全く分からないが徐々に判明していくだろう。

怯む事はない、突き進むだけだ。

思い出して唇を噛み締めたマダーニ、けれども我に返る。そう、奇妙な視線が先程から着いて来ている。

誰？ 何処のどいつだ？

顔を動かさずに瞳を動かして捜すが、後方までは当然の事だが瞳は動かない。

アサギとユキは一つの店先に留まって、二人して楽しそうに洋服選びをしている。

安堵し、微かに笑みを浮かべたマダーニ。力を抜いたその瞬間に、

突如フードを深く被った者が目の前に現れた。

突然すぎて声が出なければ、小剣へと手を伸ばす事も出来ず、まして攻撃態勢などとれやしない。

「あなたの連れのあの少女、何者ですか」

「あんだね、さつきから妙な視線投げかけていたのは。あんだこそ、何者？」

人が行きかう通り、強がって額に汗を浮かべながらマダーニは言葉をつき棄てる。

「そうですね、彼女を見ていました。気になったので。私達の捜しているお方かと思っただのです」

声から相手が男だという事が判明した、気配が上手く読み取れない事から凡人ではない。

敵なのか、味方なのか、それすらも分からないが『勇者』を捜していたのだろうか、と軽く気を緩めた。同じ様な目的を持った人物かもしれない、今からクリストバルへ出向く予定なのかもしれない。けれども、まず表情を隠している時点で信用ならなかったマダーニは、背の後ろで魔法の詠唱をする為に手で印を結ぶ。

「このような人気がある場所では、あなたは魔法など使えないと思います。被害を考えてしまうでしょうから」

小馬鹿にされたような台詞に、頭に血が上ったマダーニが言う通りだった。

万が一の為の魔法詠唱だが極力使用は避けたい、だが、勇者を護る為ならば多少の犠牲も……。

考え、軽く唇を噛むマダーニ。命は、例え勇者であろうとも一般人であろうとも同等だと思う。

命の重さに変わりはない、代えの命など存在しない。

「被害を出さずにあなたを撃退する予定なのよ。下手な動きをあなたにするのなら、ね」

「ご心配には及びません、下手な動きはしませんよ。私はオークスといいます」

不意に自身を名乗る男に、マダーニは拍子抜けした、俄然構えは解かないが。

「私はマダーニ。あの子達と旅をしているの」

二人の間に沈黙が流れる、オークスは口を開きかけて何か躊躇している。じんわりと額に浮かび上がる汗、マダーニは拭うことなく攻撃態勢へと入っていった。

落ち着き払い、オークスがマダーニを制するように神妙に頷く。

「危害は加えません、ご安心を。あの子、やはり勇者ですか。4星クレオの勇者と、1星ネロの勇者、ですね？」

「……………」

「彼女達の所持する勇者の石、あれを人目につかせるのは避けたほうが良いでしょう、直にでも隠させてください。事実を知りえる者として少なくともはないのですから」

「アンタ、何者？」

淡々と語るオークスと名乗った男、勇者を探していたのだという事は解ったのだが、目的は未だ不明だ。

「あの子を、御守り下さい。こちらも全力で守護いたしますが、何分表立って動けないので」

「はあ！？ 言われなくても護るけど、アンタは何者かって訊いてるの」

敵ではないようだが、味方なのかが不明だ。オークスの言葉は曖昧すぎて真意がとれない、表情が判らないので事実かどうかも判らない。

「時期が来れば、いつれ再会出来ましょう。その時には必ずお力になります」

「今は敵でも味方でもない、ってコト？」

「味方、です。信じていただけないかもしれませんが。こちらの予測と食い違いがありましたので、本来ならば声をかけることもなかったのですが」

「く、食い違い？」

眉を潜めるマダーニに、オークスは微笑した。

「はい。まさか、勇者が。マダーニさん、あの子を、邪な魔族達と、卑劣な邪教徒達と、貪欲な魔術師達から……護ってください。」

決して、あの方の存在を消さない様に。あの方が消えてしまえば、全ては崩壊へと」

「ちょ、待った、待って。一から順に説明してくれない!? あの子って、どっちの!？」

「あの子は、あの方です。俺が会えたのがマダーニさんでよかった、勇者を護る為に他の人間が消えても良い、という考え方でしたら会話しないつもりだったのですが。」

良いですか『必ずあの方を御守り下さい』。では」

深くお辞儀をするオークス、口を開いて呆気にとられているマダーニだが、一瞬フードから彼の耳が見えた。人間の耳ではない、もっと長くて尖った……。

「アンタ、人間じゃないの?」

マダーニの質問には答えることなく、オークスは再度微笑むと忽然と姿を消す。

伸ばした手が、宙を捕まえた。行き交う人々の声はマダーニの耳を通り抜ける、何かを掴もうと伸ばした手がそのままの状態で、暫し放心。

「どういう、こと? 一体、何なの?」

困惑気味に我に返るマダーニ、背筋を汗が伝う、身体が小刻みに震えだす。

あの子、あの方。

あの方。

勇者を、あの方と呼んだのだろう、恭しく呼んだのだろう。しかし、どうも引つかかる、『あの方』と呼んだ事が気にかかる。

不可解な言葉が多すぎた、オークスは一人で納得していたようだが、単語を並べられただけのマダーニには意図が全く掴めていない。

「マダーニお姉さん、マダーニお姉さん。服決めましたっ」

急に服を引つ張られ、慌ててマダーニはそちらを見下ろす。

観ればアサギが近寄ってきて、店先に居るユキを指していた。ユキは両手に二人分の洋服を抱えて、嬉しそうに微笑んでいる。

大きな瞳に覗き込まれて、マダーニはぎこちなく笑った。心配を
かけまいと、無理やり笑顔を浮かべたが、逆に引き攣ってしまった。
「どうかしましたかー？」

「う、ううん。なんでもないわ。若いつていいいわね、あたしには
着られなさそうなデザインよ。さ、買いましょうか」

「私は大きくなったら、マダーニお姉さんみたいな服が着てみたい
な」

「アサギちゃんなら着られるわよ、きつと美人になるわ。どちらが
綺麗か競争ね」

もつとも、アサギが成長する頃にはマダーニは三十路が近づいて
しまっわけだが。

手を繋いでユキのもとへと駆け寄る二人を、路地裏からそつと見
ているオークス。微笑ましい光景に、口元を綻ばせてしかし軽く溜
息を吐いた。

「人間と、接触してしまいました……。さて、帰りますか」
そつと踵を返し、フードを深く被り直す。

「またお遭いいたしましょう、マダーニさん。そして、アサギ様」

一軒の宿から出てきたライアンとトビイ、人数が多い為宿の手配
に些か戸惑ったが運よく安目の宿の予約が出来た。

今のところ、ライアンの計画通りだ。金銭袋を覗き込めば、上々。
「集合まで時間があるな。話でもしないか、トビイ君」

「少し、行きたい場所がある」

「そうか。ではオレは気になるからアリナ達と合流してくる。あの
二人は無茶しそっだし。じゃあ後ほど噴水前で」

「ああ」

一人で居たそうなたびを察すると、最もらしい理由を並べてライアンは快く離れていく。

トビイは軽く笑みを零すと若干感謝し、迷うことなくライアンとは反対の道へと足を進めた。

歩くだけで異性からの注目を集めるトビイだが、周りの黄色い声など気にしている暇はない。露店が多く並ぶ通りでは、同姓の年頃の娘や恋人達で賑わっていた。

「よお、その色男。よかつたら店覗いていかないかい？」

一軒の露店の中年男が声をかけてきた。他の露店は若い者が経営していたが、この店だけは違った。

とてもトビイが探している物を買っているとは思えないような外見の主、酒場の親父にしか見えない。トビイは眉を顰めつつも、何故か律儀に足を止めて近づく。

「……女の子に何かあげられる物、売ってないか？」

真っ直ぐな瞳でそう訊いたトビイ、店主は目を白黒させる。

「女の子あ！？ こりゃ一大事だな、街中に嵐が起ころぞ！ どんな子だ？ さつきからあんだ、女の子達の視線を独り占めじゃないか。一体どんな子が幸運を掴んだんだろうなっ」

「御託はいい、何か見せてくれ」

微かに苛立ちの意味合いを含めて、トビイは眉を顰める。

へへ、悪いなあ、と頭を掻きながら店主は黒のケースを取り出した。出てきた。

「ほれ、女の子用のアクセサリーだ。どうだ？ 気になるのはあるか？」

ケースを開くと、成る程、煌びやかなアクセサリーが所狭しと並んでいる。大した金額ではないのだろうが、作りは粗悪でもデザインは悪くない。

意外だった、まさかこんな店主の店にこのような可愛らしい物が売っているとは。

「これを、一つ」

トビイは暫し眺めてから、一つのネックレスを指差した。淡水色の石が涙型に加工してある代物だ。

「まいどありー」

嬉しそうに店主は豪快に笑う、繊細なそのネックレスを丁寧に紙に包み手渡す。

不意に首を傾げる店主、しげしげとトビイを見た。

「なんだ」

じろじろと中年男に見られては、誰だつて気を悪くするだろう。

トビイは不愉快そうに店主を睨みつけている、狼狽し、店主は頭を掻いた。

「や。あ、あはは。

あー……その、なんだ。あんた以前も買ってくれたか？ そのネックレス」

「いいや、今日が初めてだが。会う事自体、初めてだろ？」

「だよ、なー……。いや、あんたを何処かで見た気がして。あんたにそれを売った気がして。

あんたに、何か別の物をあげた気がして」

腕を組んで低く唸る店主、トビイは無言で踵を返すと立ち去る。

が、迷いもせずに振り返るところ付け加えた。

「奇遇だな、オレもそう思った」

素っ頓狂な声を出した店主に、軽く右手を上げるトビイ。

自分でも意外だった、まさか初対面の人間とここまで話すとは。

しかし、事実トビイとて奇妙な違和感を感じていたのだ。

見覚えが、ある。

トビイは、購入したネックレスを大事そうに懐に仕舞うと、次に向かう。

時間はまだあるだろう、今宵の為に、トビイにはすべき事があったのだ。

時は過ぎ、ジェノヴァに鐘が鳴り響いた。

噴水前にぞくぞくと集まってくる一行は、ライアンに連れられて宿へと向かう。地球の衣服を脱ぎ捨て、すっかりファンタジー世界の住人になった勇者達。

着ている物が違うだけで、気持ちが高揚してくる。

ユキは地球と変わらず、レースが大量に施されたワンピースを買って貰っていた。全部パステルカラーで、膝下10cmの貴族の娘風の衣装だ。

アサギは対照的に、比較的露出が高い衣装を買って貰っていた。動きやすさを優先した結果、そうならしい。

「せ、折角だから、地球じゃあんまり着られない服にしようと思つて」

暑いこともあって、ホルターネックで胸を覆い隠しているだけの上半身、下のスカートもやたら短い。

どちらかというとき水着のような感覚だ、似合ってはいるのだが勇者らしくはない。マントを羽織れば、それらしくも見えそうだが。

「いや、いや！ 似合うよアサギ、サイコーっ」

興奮気味に捲くし立てるトモハル、中年親父のようである。

宿のダイニングルームに到着した一行は、そのまま夕飯の用意をして貰った。歩き疲れてお腹も空腹気味、料理が運ばれるまで昼間の情報交換である。

一行以外に客は未だ到着していないようで、気楽に会話ができる。その前に先程のオークスの忠告の件もあり、マダーニは直様勇者達に石を隠すように促した。

「じゃ、まずボク達からね。ジョアンへも、コスルプへも現在休航中。コスルプ行きの航路に、三体の竜が目撃されてる。特に襲ってきた事実はないらしいけど、動かないみたいでさ。

危険視されてて当分出航しないって。で、ジョアンへは早くて二カ月後みたいだよ。わかんないけどね」

トビイが微かに顔を上げるが、誰も気にする様子もない。低く呻

いてライオンが首を傾げる。

「竜か、厄介だな。海路での旅は難しいということか。当初の予定通り、陸路で行くか」

「しかもそのドラゴン、三体とも種類が違うらしくってさ。まあ真相はどうだか知らないけど、黒竜、風竜、水竜らしくって。三体と一緒に行動してるらしーんだな、これが。」

ボクは竜には詳しくないけど、種族違うのに行動を共にするなんてこと、あるんだね」

「ほほー、珍しいですな。本来竜は同種族でしか行動しないのがのう。こと、黒竜に関しては成人すると単独で行動する筈ですよ」

運ばれてきたパンに手を伸ばしたアリナは、以後口を開かない。焼き立てのパンにオリブオイルと塩を振り掛け、ジャガイモを挟んで食べている。

食事に夢中になったアリナに代わって、サマルトが口を開いた。「とりあえず、時間が余ったからアリナがストリートファイトっていうの？ それに参加して数人ぶっ飛ばしたから賞金貰ったんだけど」

ライオンに硬貨が入っているとされる袋を渡すサマルト、悲鳴を上げるクラフトとブジャタ。

成程アリナの衣服に汚れが目立つと思っただらそうということか、苦笑いする一行である。

アリナは無心でパンを頬張りつつワインで流し込んでいる、悪びれた様子もない。

「宿代くらいは稼げたと思うよ」

「うん、十分すぎるよ、これなら」

どれだけの相手を叩きのめしたのか見当がつかないが、袋は重い。ありがたいことである。

「こちらは順調に買い物を終えました。なかなか質が良い薬草が売っていますね」

アーサーがミシア、ムーンと共に頷いた。皆満足そうな表情だ、ライアンも自ずと笑みを零す。

その後、一行は夕食をのんびりと取り、暫しの休息に浸ることに。「今後の予定だが。明日から再び旅が開始だ、次は街まで遠いので馬車での生活が苦になるだろう。」

今のうちに羽を休めておくように。昼過ぎにはこちらを立つ予定だ」

二人の魔族と、トビイの最大の誤算

部屋の場所だけ教えてもらい、まだ明るいのので街へと繰り出す元気な者達。骨休めをする為に室内に入っていた者達。

アサギは同室のユキとアリナと、海岸を散歩することにした。

砂浜は静まり返っており、波の音がやけに大きく聞こえる。海に光る太陽に暫し見とれていた三人であったが、暗くなり始めたので三人は宿へと踵を返す。

星が、月が顔を出し始めたその頃、何処かで鋭い叫び声が発せられた。

「女の子!?!」

アリナが振り返ると、一直線にその声の方角へと駆け出す。

砂浜が柔らかくて、思うように走れない。声の主の姿が見えず焦りを感じる、後ろからついてくるアサギとユキを気にしながら、アリナは人を探した。

やがて、人影が見えてきた、どうやら数人居るようだ。漆黒の短髪、小柄な少女が男達に組み敷かれ、暴れている。

舌打ちしてアリナはその場を目指した、これだから男はっ、と吐き捨てつつ。

「あまり暴れるなよ、小娘」

一人の男が少女の衣服に手をかけ……

「ざけんなよ、この腐り果てた人間どもっ」

……られなかった。

気合で組み敷いていた男達を吹き飛ばした少女、ゆっくりと砂浜から身体を起こすと腕を組んで仁王立ち。

吹き飛ばされた男達は、口から砂を吐き出し剣を引き抜く。

「このアマア！ 優しくしてやりや、つけあがりやがって」

どの辺りが優しくしていたのか理解に苦しむが、ドスのきいた野太い声に普通の少女なら怯えそうだが、この少女はのんびりと欠伸

をしている。腕を振り回し威嚇する男達を見下し、少女は笑った。
「あたいはさ、あんまり心広くないんだよねー。あんたらみたいなのが居るから、魔族が人間を滅ぼそうって考えるんだよ。判る？」
眉を潜めて首を傾げる男達、何が言いたいのか判らないようだ。
前髪を掻き揚げ、ゆっくりと残忍そうに笑う少女。すっかり男達を見下している。

「あたいに触れていいのは、あたいが愛した男だけなんだぞ」
言うなり、右手を空へと掲げてなにやら呟く。瞬間、一気に彼女の身体が発光した。

悲鳴を上げる男達と、追いついたアリナは慌てて後ろを向いてアサギとユキを覆つように抱きしめた。

「まずいな、これはちよつとボクの予想外かもー」

助けに来た筈だったが明らかに少女のほうが強そうだ、立場が逆転している。情けなく砂浜を逃げ惑う男達、アリナは少女を見据えた。

そう、彼女は。

「あつははー、ばいばーい」

その背に生えるコウモリのような羽、紅蓮の瞳、後方の月が妙に似合う少女は、悠然と宙に浮かんでいる。その右手が男達に向かつて繰り出された、風が舞う、男達の身体を瞬時に切り裂く。

魔法だった、ユキが小さく悲鳴を上げると同時に、アリナは腰に下げていた二本の小剣を抜き放つと、アサギとユキの前に庇うようにして立ちはだかる。

どう見ても彼女、人間ではない。なんと夜空が似合うことだろう。ようやく少女が三人の存在に気がついた、面倒そうに唇を尖らせる。

「なんだ、他にも人間が居たのか。可哀想だけど、忘れてもらおう
ふわり、と移動する少女。

「初めて見たよ、人型の魔物は。魔族って奴かな」

「人聞き悪いな、魔物だなんて。お察しの通りあたいは魔族」

慣れない砂浜の感覚、相手は人間では比べ物にならない魔族。

ミスった、苦笑いするアリナはそれでも後方のアサギとユキを気にしていた。

まさか街中で魔族に遭遇するなんて、思いも寄らなかったのだ。計算外もいいところである、街の警護なんて杜撰なものだ。

アリナが緊張し、額に汗を浮かべている中、アサギはその背から飛び出して宙に浮いている少女を見上げる。

「こ、こらアサギ！ 危ないからボクの背に隠れてっ」

狼狽するアリナにお構いなしに一心不乱に少女を見つめるアサギ、微かに微笑んでいる。一方少女は突如顔を出した美少女に見つめられ、顔を赤らめると腕で自分の身体を覆い隠した。

「な、なんで見てくるんだよ、馬鹿っ。て、照れるじゃないかつ」

アサギの視線と交差する、身体が仰け反って、震えだした。

「み、見るなよっ。なんだよ、お前っ」

熱い眼差しに慣れていないのか、あっちへ行け、と手を振る少女。それでもアサギは動じない。

にっこりと微笑んで手を伸ばすアサギ、アリナが唇を噛み締めた。危険の度合いが解っていないのだろう。

「空、飛んでる」

それだけ呟くアサギ。呆気にとられアリナが若干肩の荷を下ろした。

「いいな、いいな。空飛べていいな」

そう、それだけ。

無邪気に少女に手を伸ばしたアサギに、アリナは口元を緩ませる。少女も強張らせていた身体を脱力し、頭を掻きながら地面へと降り立った。

「調子狂う奴だなー。戦う気が削げた。びっくりさせて悪かったよ」
砂浜を移動し、三人に近づいてきた少女は頬を膨らませてアサギを見る。

会話は普通に出て来そうである、戦う石がないと判断したアリナも

剣を仕舞った。

「あたいは、ラキ。特別出血大サービス、名前を教えてやるよ」

「ボクはアリナ。この子がアサギで、この子がユキ。こんなトコで何してんの、魔族さん」

「ちよつと用事でさ、ついてきたんだ。別に人間の虐殺に来てるわけじゃないよ。ただ」

口を開きかけたラキは、慌てて自身の口を塞ぐ。明らかに何か言いかけて止めた様子に、アリナは眉を潜めた。

「ナイシヨだった。ごめん、言うにあたいの立場が悪くなる」

「そんなこと言われたら気になるね」

ひゅ、と射程範囲に入ったラキの喉元へと直様剣を抜いて向けるアリナ。が、慌ててアサギがそれを制した。

「ダメだよ、アリナ。この子、悪い子じゃないよ」

「でも、何か隠してる」

「隠し事だつて人にはあるよ。でも、私達を殺そうとしてないし名前を教えてくれた。大丈夫だよ」

懸命に引き止めるアサギに、不貞腐れて渋々剣を仕舞う。意外そうに、ラキはアサギを見据えた。

「変なニンゲン」

「あの、空を飛ぶつて、どんな感じ？」

興味深々に身を乗り出し訊いて来るアサギ、動じなさ過ぎてたじろぐラキは、一歩後退した。

その瞬間、後ろにつんのめつて熱を含んで熱くなった砂浜に倒れこんだラキ。昼間の太陽の熱を吸収した砂は、思いのほか熱い、顔を顰めた。

立ち上がりかけると、急に声が振ってくる。

「ラキ」

溜息交じりの声の主、突如姿を現したフードを被った者に三人は釘付けになった。

ラキの後方に突っ立っている、何時の間に現われたのか。顔を引

き攣らせて、喉から震える声を振り絞ったラキ。

「お、オークス、カナ？ な、なんでここが」

「あれだけ魔力を放出すれば、嫌でも判る」

情けない声を出し深い溜息を吐いたオークスに、勢いよく立ち上がって振り向き様に弁解を始めたラキ。

「こ、これには色々と理由があつて！ 変な男に絡まれたものだからっ」

「いいわけはしなくていい、ラキ」

落胆気味に見つめてくるオークスに、ラキは半泣きで俯くと小さくすすり泣く。肩を震わせているラキに、容赦なく言葉をかけるオークス。

「失敗だった、約束したじゃないか。人間には接しない、それが第一条件だと」

言いつつも、徐々にそのオークスの表情は何処か優しくそうに微笑み始める。けれど、それを見ていないラキは知る由もなく、ただ謝り続けた。

「ごめん、なさい」

「皆様方、申し訳なかつたですね。驚いたでしょう」

「ラキよりも、ボクはあなたのほうに驚いてますけど」

状況把握が出来ていないアリナは、乾いた笑い声と共に皮肉めいてみる。

「こちらも、魔族だろう。」

おまけに、ラキ以上の力があることは、会話から把握できる。ここまで魔族が人間界に溢れている事実には、驚きを隠せない。

「そうですか、申し訳ないですね」

フードをオークスが取る。氷のような透き通った瞳、宝石のタンザナイトを連想させる瞳だ。けれど、冷たいわけではない、心地良い温かみがある。

碧い髪を一つに束ねてゆったりと微笑むその姿、何処かしら威厳があつた。

「オークス、と申します」

「ご丁寧にどうも。アリナとアサギとユキです。で、魔族さんが何用？」

「ヤボ用です」

「……………」

につこりと微笑み、決して手の内明かさなないオークス、苦手な夕イブだとアリナは直感した。

オークスは静かにアサギを見つめ続ける、首を傾げて微笑むアサギ。ラキは右往左往している。

「お邪魔しました。では」

「待てよ、何しに来てたんだよっ」

魔族が人間の街に来るのならば、それ相応の理由があるはずだ。まさか観光というわけではないだろう。

アリナの剣幕に苦笑いするオークス、なんでもありませんよ、と静かに口を開いた。

「なんでもない、で済む訳ないだろうっ」

「様子を観に来たのです。それだけです、敵意はありませんよ」

「なんの様子か、はつきり言って貰いたいねっ」

不安そうに見つめるラキの側、オークスが小さく笑う。まるで、アリナとの会話を愉しむように。

一瞬躊躇したが、オークスのはつきりと答えた。

「勇者の様子です」

「え」

「では、また。何れお遭いできましょう。味方として」

「ええ」

オークスはアリナから視線をアサギへと移した、恭しく一礼したオークスに、慌てて弾かれたように礼をするラキ。

二人は羽を広げると、夜空へと飛び立つ。

「ま、待てっ。勇者、味方!？」

混乱するアリナの隣、月に向かって飛ぶような二人の魔族にアサ

ギは見惚れていた。

空を飛ぶ、二人。

いいな、と思ったのだ。飛んでみたいと思うのは、人間ゆえ。

「空が飛べたら、探しに行ける。何処へでも、探しに行けるのに」
小さく呟くアサギの声は、誰にも聞こえることなく。

砂浜に風が吹き抜ける、啞然と見送るアリナと、切なそうに見つめるアサギ。

暫し、その不思議な情景に見惚れていたが 後方で呻いた男達の存在に我に返った三人は、直様駆け寄った。

余程恐ろしかったのか、口々に悲鳴を上げている男達。けれど悪いのはラキを組み敷いていた男達だ、自業自得である。

「殺されなかっただけ、よしとしなきゃ」

アリナは足先で腰が抜け、倒れこんでいる男達を蹴り上げた。

すっかり時は過ぎ暗くなった夜道を宿へと戻った三人、心配されて出迎えられる。

あの後、その男達が実は婦女暴行の容疑で指名手配されていたと知り、役所に突き出していたら時間が遅くなったのだ。

謝礼金も受け取ったので、帰路までの屋台で三人は冷えたパインを買って食べ歩きしていた。上機嫌だ。

「いっやー、良いことした後は気分がいいねっ。酒でも呑みたいなあ、アサギ、ユキ、ど？」

遠慮する二人を詰まらなそうに唇尖らせ見つめるアリナ、だが、仕方がない。

ので、こうして大人しく宿に戻ったのだが、アリナは重要な事を言うのを忘れていた。

” 魔族に出会った ” だ。

その報告をすっかり忘れていたのだ、パイんが甘くて冷たくて。大失態である。

修学旅行並みに点呼の多いこの一行、全員揃ったのでライオンは

安堵した。保護者気分だ。

すっかり、夜も更けた。

勇者達は就寝だ。宿の共同風呂で身を洗い、久々の寝間着に着替える。

勿論、男女別である。

就寝しようとした矢先、アサギは不意に廊下で誰かに引き止められた。

気付いて、声をかけたアサギ。

「トビイさん、こんばんは。おやすみなさい」

「おやすみ、アサギ。と、言いたいところだけれどもまだ歩く元気はある？」

「ありますよー。お風呂が気持ちよかったです」

「それはよかった。手間は取らせないから、連れて行きたい場所がある」

「あ、はい」

アサギは部屋に戻るとマントを手にして部屋を後にした、先に風呂を出ていたユキが首を傾げる。

「どっか行くの？」

「うん、トビイさんとお散歩」

「いつてらっしゃい」

「はい」

ユキは一人、布団に入る。女性陣で一つの部屋だが、ユキ以外誰もいなかった。

正直、歩き疲れていた。ドライヤーがないので、先に風呂から上がって懸命に髪を乾かしていたユキ。髪の手入れは欠かすわけにはいかない。

水も飲んだし、ゆっくり眠れそうだと瞳を閉じる。

ムーンとミシアは二人でロビーで地図を見ていたし、マダーニとアリナは居酒屋に出掛けた。

一人の時間を過ごすのも、悪くはない。

だが、ドアをノックする音が聞こえ、渋々ユキは布団から這い出る。

「アサギは居ますか？」

「アーサーだ、ユキは苦笑いで丁重に返答。」

「トビイさんと出掛けましたよ」

布団に入ろうとした矢先、次いでサマルトがやってくる。

「アサギ居る？」

「トビイさんと出掛けました」

若干笑顔が引き攣っていたが、勢い良くドアを閉めると再び布団へ。しかし、次いでトモハルがやってきた。

「アサギは？」

「……トビイさんと以下略っ」

ユキは、会話も途中でドアを閉めるとそのまま布団に潜り込む。もう、出ることはないだろう。

ドアの外では三人が何やら喚いていたが、同じ方向へ走り去って行ったようだ。探しに行くのだろう。

再びドアを叩く音、無視を決めるがノックは終わらない。うんざりして今度は誰かと、ユキは不機嫌な顔でドアを開く。

「あれ、一人？ 寝てた？」

ケンイチが立っている、後ろにダイキも居た。思わず、他の三人と違った発言に安堵。

「ミノルは爆睡、トモハルはアーサーやサマルトとクラフトを引き摺って出て行ったけど。折角だからみんなでゆっくりしない？ 昼間にお菓子買って貰ったんだ」

ダイキが笑ってユキにお菓子を見せた、クッキーのようだ。嬉しそうに頷いてユキは部屋に二人を招きいれる、テーブルにお菓子を広げて三人は楽しく談笑した。

思えばこの世界に来てからゆっくりみんなと話すことも出来なかった、こんな時間は久し振りだ。

飲み物は部屋に用意されていた水だが、地球でいうミネラルウォーター

「ターだ、軟水で美味しい。」

「地球、どうなっていると思う？」

「トモハルがいうように、時間が止まってくれているといいよね」

「無事、魔王倒せるかな？」

「倒さないと帰れないよね」

本当に修学旅行みたい、ユキは可笑しそうに笑う。不意にケンイチと視線が交差した、微笑まれて、微笑み返す。

毎日、こうならいいのにと。

あまり会話した記憶がないが、ユキは自然にケンイチとダイキと、会話を愉しんだ。

その頃、トビイに手を引かれてアサギは公園に来ていた。

静まり返る空気、時折恋人が同じ様に手を引いて歩いていたり、ベンチに腰掛けていたりする。

七月上旬、蒸し暑い夜である。遠くで波の音が聞こえる、夜空に輝く満点の星の下、二人はあてもなく歩いた。

この時期はあまり雨が降らない、と説明してくれたトビイに軽く頷くアサギ。

公園には見渡す限り草花が植えられており、様々な色彩の花が咲き乱れている。その向こうに、月に照らされキラキラと光る海が広がっていた。

「きれいですよね」

うつとりと呟いたアサギの頭を撫で、満足そうにトビイは微笑む。

「喜んでもらえたかな？ この景色が見せたくて。星々の煌きの中で咲き乱れる花の色合い、微かに届く波の音。アサギが好きそうだったから」

「とても、素敵です」

笑顔で返すアサギに満足そうに頷くと、トビイはベンチを見つけて、そこならば身体を休めて観賞できそうだった。

二人で並んで腰掛けると、アサギはぼお、と風に揺れる木々を眺める。葉の揺れる音が、心地良い。

「疲れてない？」

気を利かせてトビイはそう囁き、顔を覗きこむがアサギは飾らない笑顔だ。

「全然大丈夫です」

「ああ、そうだ。これを」

安堵したトビイはそっと包み紙をアサギへと手渡した、不思議そうにそれを見つめるアサギ。促されゆっくりと開くと小さく歓喜の声を上げる、丁寧な手で掬う。

「あ、あの、これっ」

「似合いそうだったから、買った。よければ身につけて」

「わあ、ありがとうございますっ。嬉しいです、可愛い」

早速出てきたネックレスを身につけるアサギ、もたついていたので吹き出してトビイがつけてくれる。

アサギが髪を上げる、トビイが綺麗なうなじに一瞬見惚れるが丁寧に首にネックレスを。

「似合います？」

「ああ、見立て通りだ、似合ってる」

嬉しそうに淡水色の石を見つめているアサギの髪を、そっと撫でて愛しそうに一言。

「アサギは、綺麗だな」

「？ そ、そうですか？」

思わず身体を硬直させるアサギ、トビイの視線があまりにも真っ直ぐで、思わず息を飲む。

忘れていたが、大層な美形だ。おまけに身体は密着している、思わず胸が高鳴る。

「なんだろうな、優しいけれど芯が強く。明るいけれど時折憂いを見せるね。初々しいけど、稀に妙に妖艶な仕草をする。不思議だ」

あまり言われない単語を並べられてアサギは混乱気味に額を押さ

える、とりあえず、小さくおじぎをするしかない。誉められている事は、解るのだが。

どう反応して良いのか判らず慌てふためくアサギを、そのまま抱きしめようかとも思ったのだが、トビイは堪えた。

風が吹く度に、髪がかき上げられ風呂上りの良い香りがトビイの鼻をくすぐる。

顔を赤らめて視線をわざと外しているアサギ、その全てが愛しくて、戸惑う様子が可愛らしくて、笑みが零れるトビイ。

やっと、二人きりになれた。

仲間達と居ると、騒がしい事この上ない。

「好きだよ、大好きだ」

トビイの口から飛び出した言葉、有りの俣の想いを込めて。他人にそんな言葉を投げかけた事など、一度もない。

その言葉は、アサギの為に、アサギの為にこそ伝えるべき言葉だと。約一ヶ月前に出会って、伝えたかった言葉を、ようやく。

君が好きだ、大好きだ。狂おしいくらいに、愛している。君を護る為だけに産まれてきた、そう思うんだ。全ては君を護る為に、君の笑顔を見続ける為に。叶えたい願いは、そう君の

「私も、大好きです」

思いのほか、アサギから早く返事が来た。

目の前でアサギはくすぐったそうに笑っている、大きな瞳で視線をようやく逸らさず見つめてくる。

その言葉を聞き、安堵したトビイはそのまま抱き締めた。微かに身じろいだアサギだが、照れながらもトビイを見上げる。

静かな公園、絶景の風景だった。

そっと、頬に手を触れ唇を近づけるトビイ。

だが。誤算であった。

アサギの言う『好き』とトビイの言う『好き』の種類が違ったのである。

「あの、厚かましいと思うかもしれませんが『お兄様』って呼んで

もいーですか？」

「は？」

腰に手を廻し、顔を見上げさせてどうみても口付けする気であったトビイは、珍しく素っ頓狂な声を出す。一瞬脳を叩かれたような衝撃、状況把握に時間を要した。

この状況下で、この子は何を言い出した。

「ですから、お兄様になつて欲しいんです。あの、弟が二人居るのです。昔からお兄さんの存在に憧れてて。トビイさんは強いですし頼りがいがありますし、優しいし。

お兄さんみたいだな、つて思ったのです。トビイお兄さん、より、トビイお兄様のほうが、なんだかしくりくるので。……だめ、ですか？」

「……………」

面食らつたトビイ、言葉が出てこない。

『お兄さん』である、『恋人』とは程遠くないか？

冗談ではない、それは恋愛対象として見られていないということではないのか？

夜に連れ出し二人でムード漂う公園のデート、夜景も綺麗で耳に届くは波の音、香る花の甘い誘惑、星の祝福の真下で口付けを……のトビイ的計画が台無しである。

わざわざ、ライアンと離れてからこの場所を見つけておいたというのに。

途中までは完璧だったはずだ、今でもこうしていつでも口付け出来る状態である。

が、アサギは不安そうに潤む瞳で懇願している。

口付けではなくて、『お兄様』というその格付けを。

トビイには、選択の余地がなかった。ああ、唇まであと少し、少しの距離なのに。

「……………トビイお兄様」

思考回路、停止。

なんとという甘美な響きだろうか、上目遣いの美少女の誘惑だ。

トビイは、アサギの頬から手を離すと、ゆっくりと頭を撫でた。

「ああ、いいよ。今からオレがアサギのお兄さんだ」

そう、選択の余地がなくなかったのだ。

あの視線からは逃れられない、草食動物の丸くて大きな瞳でおねだりされたならば。……受け入れるしかない。

強引に唇を奪うことも出来ただろう、トビイの脳内で想像以上の葛藤が起きた。

ほんの、数センチの唇。柔らかく、熟す前の潤うサクラランボのようなアサギの唇。

塞いでしまい、丁寧に音を立てて唇を吸い。アサギは驚いて瞳を開けたままだろうが、徐々にうつとりと瞳を閉じるに違いない。

震える身体を抱き寄せて、力緩めて開いた唇に舌をそつと入れる。跳ね上がる身体を、力で押し付けてそのままゆっくりと舌で唇を味わうように。

やがて、紅潮するアサギの頬と身体、時折唇を離せば切なそうな声を漏らすだろう。震える手で、トビイの衣服を掴むだろう。

恥じて顔を伏せようとしても、再び顎を持ち上げて唇を塞ぐ。何度も繰り返せば自然にアサギと舌を絡めるだろう、おぼつかないが。

それがまた初々しい、上気する息遣いのアサギの眩しい太腿にそつと指を這わせれば小さく震えて、鳴く。

……だろう。

「ホントですか！？ わあい、やったあ！ ……トビイお兄様っ」

アサギは嬉しそうに笑うと、そのままトビイの首に抱きつき弾む声でそつと囁く。

そう、耳元で。

「トビイお兄様、だーいすき」

思わず、トビイの背がぞくりと波打つ。なんとという色気のある、破壊力ある台詞だったろう。

……まずいな、これは。

苦笑いして無邪気にじゃれてくるアサギの背を、撫でながら苦笑い。思った以上の、小悪魔だった天然の。

意図がないから、性質が悪い。溜息吐きつつトビイはそれでも微笑した。

アサギの温もりは、すぐ傍に。星の廻りは、そのままに。離れることなく、ずっと隣に。

お兄様でも、まあいいだろう。片っ端から兄の権限で近寄ってきた男を蹴散らす事が出来る、そう判断した。

前向きに考えると、重要なポジションだ。

キイイ、カトン……。

二人は、歯車が廻った音を聞いた。公園内に、歯車などない。

星空の真下で、誓う事は。

「アサギ。必ずオレの傍を離れるな。護り続けるから」

「護られるだけは嫌いです、一緒に戦います」

「ああ、そうだよ。共に居続けよう」

「はいっ」

「良い子だ」

無邪気に微笑むアサギの頬に、そっと口付けるトビイ。

驚いて顔を背けたアサギだが、そっと耳元でトビイはこう、呟いた。

「今日は、ここまで」

「え、う……………」

実は、非常にロマンチックな恋人の宿も見つけておいたトビイだったが、仕方がない。

また、後日だ。

今は、腕の中で赤面しているアサギを見ているだけでも、十分だ。困惑し、身動きしている可愛い可愛い義妹。愛おしくて再び頬に口付ける。チュ、と音を立てて何度か口付ければ。

「ひゃんっ」

アサギの高い、声だった。

「……前言撤回したい、な」

感度が良さそうだが、震える身体を押さえ、トビィは我慢した。

兄だ、兄だ、兄だ、オレは兄だ。

夜は、更ける。

「好きな奴に好きななんて言えないんだよ！」

異世界クレオへ到着してから数日が経過したが、初めてベッドで眠りに就く事が出来た勇者達。

馬車の中で眠った事がある、地球の日本の同世代など数人しか居ないだろう。これは自慢できることなのだろうか。

明日からまた旅が始まる、馬車で移動し、野宿をし、の繰り返しだ。束の間の休息である。

次の目的地までは、クリストバルからジェノヴァまでよりも更に長い距離である。比ではない。

辛い、厳しい旅なのだが、仲間が居るといっただけで妙に安心できた。一人で来ていたら音を上げていただろうが、音を上げてても叱咤する友達が居るといっなのは心強い。

早朝、一人ミノルは目が冷めて暖かな布団の中でもぞもぞ、と動く。周りは眠っているようだ、昨夜一番乗りで就寝した為、起床が早かったようである。

喉が渴いたが、起き上がる気にもなれないので、そのまま寝返りをうつ。

「マ」

「？」

ふと、寝言が聞こえた。トモハルだ、何か言っているが全く聞き取れない。

「マ……好き……す」

「？」

無視を決めたミノル、”アサギ”とは聞き取れないので安堵した。再び眠るうかとも思ったが目が冴えた。仕方なく、枕の下に手を入れて弄り、あるものを取り出す。

そこには一昨年の勇者達が写っている写真入りの、プラケースがあった。プラケースに入れる際に、端際に居たトモハルを半分隠で

切ったのだが、それはよしとして。

文化祭のクラスの出し物で、劇を披露したのだが、その時の集合写真である。

そう、去年、今年は違ったが一昨年は勇者達は偶然にも、全員同じクラスだったのだ。

思えば、奇怪な。全員顔見知りだが、ミノルが手にしているその写真に勇者が全員写っている。

それはアサギの直ぐ傍で撮る事が出来た唯一の写真である、これ以後運動会でも遠足でも、ミノルはアサギと写る事が出来なかった。唯一の一緒に写っている写真を、大事にプラケースに入れて、誰にも見つからないようにポケットに忍ばせていたのだった。誰も知らない事実だ。

劇の題名は『ロミオとジュリエット』、定番悲劇である。

当然ジュリエットがアサギだ、そしてユキが付き添いの娘役。ロミオがトモハルで、ミノルとケンイチ、ダイキはアサギ……もといジュリエット側の兵士である。

ジュリエットのアサギは当然、煌びやかなドレスを着ていた。本物のお姫様のようで、とても可愛らしい。

早朝とはいえ微かに明るく、光に透かしてその写真をまじまじと見つめていたミノルは、不意に顔を赤らめた。

実はこの劇、本番中にミノルは大失敗をしたのだ。

『ジュリエット様に触れるな!』というたった一つだけの台詞を任されたミノル、緊張していたのだらう誤って「俺のアサギに触るな!」と言ってしまった。

公衆の面前でそのような発言をしたものならば、通常冷やかしが巻き起こるのだが、生憎ミノルの相手はアサギである。上級生からその後締め上げられる、同級生から憎しみの籠った目で見られる等、大惨事を引き起こした。

翌日怪我をして登校してきたミノルに、アサギが慌てて駆け寄ってきたがミノルは苛立ちも伴って口を利かず、荒々しく机を叩き。

アサギを睨みつけて勢い良く立ち上がると、そのまま教室を出てしまった。

それは照れ隠しだったのかもしれない、があの時のミノルには素直にアサギと対面する勇気がなかった。アサギの手にはバンドエイドが握られていた、怪我を見て心配して駆けつけたのだろう。

何も悪くないアサギに八つ当たりをし、結果、好意を無にしたミノル。もしかしたら仲良く会話出来たかもしれないのに、上手く接する事が出来ないまま、二年が経過していた。

トモハルのように、気の利いた台詞なんて言えない。

ケンイチのように、人懐っこく誰とでも仲良く出来ない。

ダイキのように、落ち着いて物事を考えるなんて無理。

ミノルは不意に苛立ちを覚え、枕を殴りつけて小さく笑った。自嘲気味に笑うしかない。

今回もそうだ、何も二年前と進歩していない自分に腹が立つ。

こちらへ来てから何かアサギと話をしただろうか？ いや、会話した記憶がない。

トモハルなど、アサギにほぼ付きっ切りだ。今年はクラスが違うから一緒に居られて嬉しいのだろう、非常に親しくなっている。

ケンイチにしても、ダイキにしてもアサギに話しかけ魔法のコツを教えて貰っていた。ミノルは、見ていただけだった。

深い溜息一つ、枕にボスツと顔を埋めて再び眠りに就く。プラケースを握り締めたまま、唇を噛み締めて浅い眠りへと落ちていった。

「いいんだ、酷い事たくさんしたから、嫌われてるだろうし」

トモハルのようにアサギと会話出来たらいいのに、まどろみながらそんな事を考える。

そうしたら、いつも見ている様にアサギは笑ってくれるだろう。写真の中の様に真っ直ぐに見つめて、名前を呼んでくれるだろう。

アサギはトモハルが好きなんだろうと、思っていた。

だから二人は同じ星の勇者なのだろうと、思っていた。しかし、

もし仮にそうだとするならばミノルとユキもそうではなくてはならないが、歴然として”NO”である。

ユキの心理など知らないが、少なくともミノルが好きなのはユキではなく、アサギだ。

「マ」

再び、トモハルの寝言である。うるさそうにミノルはトモハルを睨みつけた、が、当の本人は非常に安らかな笑顔だった。

なんだよ、”マ”って。瞳を閉じると、トビイが浮かぶ。

恐ろしく美形の男だった、何処からどう見ても誰も勝てない。顔にしる身長にしる、強さにしてもだ。おまけにすでにアサギにぞっこんである、美男美少女、お似合いだった。

トビイにしる、トモハルにしる、アーサーにしる、アサギに積極的に会話出来るところが、ミノルには羨ましいがそんなこと誰も知らない。

「……好きな奴に、好きだ、なんて……言えないんだよ、俺」
そういうことだった。

だが、言わなければ想いなど伝わらない。

疑問の音

太陽が昇り始め、一行は朝食を済ませる。早朝だったが、マダーニに連れられて直様近くの酒場を回ることになった。

「早く寝ると言ったのに」

寝不足気味のマダーニとアリナの姿を見るなり、ライアンは落胆して頭を抱える。二人が眠りに就いたのは、二時間ほど前だった寝ていないに等しい。

けれども、足元ふらつかせつつマダーニは歩く。責任感はあるらしい、アリナなど駄々をこねてクラフトにもたれかかっているというのに。

早朝なので酒場は静まり返っている、酔い潰れた客が店先で眠っていたりはするが。

ジェノヴァへはマダーニは約三週間ぶりに戻ってきた、馴染みの店で最新情報を聞きだすつもりだ。

客の多く滞在する夜より、早朝ひっそりと聞くことを選んだマダーニ。昨夜もアリナと二人で何軒か梯子し、呑みながら様々な話に耳を済ませていた。

決して、自己の為だけに酒を呑んでいたわけではない。……恐らく。

マダーニは『最後の夢』と書かれた看板がぶら下がっている、綺麗とは言えない店へと入っていく。

薄暗い店内、奥にマスターと思しき人物と、屈強な男達が数人何か潜めきあっている。入ってきた一行に一瞥をくれ、その屈強な男達は脇をすり抜けて店から出て行った。

異様な雰囲気、アサギにしがみつくユキ。酒の香りが店内にまだ残っているその場所、マダーニは手身近な椅子を引くと腰掛けた。それを見て一行たちも、ガタガタを音をたてて椅子に座る。

全員が座ったところでマスターが一言。

「あいつらに警護は任せた、安心してくれ」

「ありがとう、マスター。さて本題に入るうか？ 何か情報があるってことだよな」

マスターが神妙に頷く、マダーニの表情から笑みが消え失せる、声のトーンが低くなる。

「シポラの情報だ、あそこは邪教徒の本部だそうだ」

「……いきなりそんな確信めいた情報なわけ？ 何処が出元？」

嘲る様に吹き出し、微かにマスターを睨みつけるマダーニ、その情報を信じていない様子だ。

しかし、マスターは喉の奥で笑うと、机に突っ伏して頭を抱えているマダーニに自信を持って話を続ける。

「逃げてきた教徒が居るんだよ。ほら、出ておいで」

店の奥に声をかけるマスター、中年の男がよろめきながらゆつくりと歩いてきた。血色が悪く、立っているのがやつとな程のその男は、糞れ細っている。出てきてもらったのが、申し訳ない容貌である。

「この男、まだ26歳だそうだ」

「にじゅうろく！」

とてもそうは見えない、驚いて声を口々に上げる一行、どう見ても50代前半だろう。白髪まみれだというのに。

顔を上げ、マダーニは瞳を細めると疑り深くその男に視線を投げかけた。

「教祖は魔族、崇めているのは”破壊の姫君”。姫君だから、女性だな。

その姫君とやらは今この世界に実在するそうだ」

「ちょっと待って、何でそんなこと解るわけ？ 俄かに信じ難い」

マスターの口から飛び出る言葉に、マダーニは乾いた笑い声を出す。

マダーニはジェノヴァを訪れてから、情報をマスターに求めている。母の事を知っていたこの男を信用し、シポラ関連の情報を探っ

て貰うように頼んでいたのだ。

だが、こつもあつさりと解るものなのか？ 都合よく行き過ぎではないか？

「この男・ザークというらしいのだが、シポラに行ったところまでの記憶はあるそうだが、だか中で何をしていたのかが欠けている。それでも、何度も繰り返される”破壊の姫君”という単語と、像に向かつて平伏していた様な感覚、そしてその像の左右に立っていた魔族二人だけが不意に甦るそうだ」

「……………」

それでも疑心難儀でマダーニは低く唸り続ける、畏の可能性はないのだろうか？ よく逃げ出すことが出来たなこの男……そう思ってしまうのだ。

「催眠、でしょうかー？ 記憶がないというのは、誰かに操作されているからでは」

後ろで控えめにアサギが発言する、弾かれた様にマダーニは振り返った。声を聞いて一気にアルコールが抜けた。

「忘れてた。昨日逢った魔族が『邪教徒から護ってください』とか何とか言ってた。邪教徒の存在はあながち嘘じゃないかもね。不思議な男でオークスつて名乗ったけど……関係あるのかしら？」

「あー、オークスならボクも昨日逢った。魔族だろ」

アリナが寝ぼけながらそう発言する、ぎょつとして一斉に二人を交互に見る一行。アサギとユキだけが、軽く頷いていアリナに同意している。

「何故大事な事を言わないんだ！」

立ち上がって怒鳴るライアンに、しれつと二人は声を揃えて反論した。

「え、忘れてたから」

全く悪びれている様子がない二人、項垂れて机に倒れこんだライアンに代わって、マスターが戸惑い気味に声をかけてくる。この人も苦勞が耐えないのだろうか、と哀れみを浮かべつつ。

「魔族は他になんとか？」

「味方だけど、今は動けない。予測と食い違いがあった。えっと、魔族やら邪教徒やらから”あの方”を護って下さい」

「勇者の様子を観に来てた……とかなんとか」

マダー二とアリナが首を捻って、たどたどしく思い出した事を口走る。

血相変えてライアンが跳ね起き、二人に詰め寄るが生憎これが二人の知り得る全ての事である。一行は顔を見合わせ首を傾げ、眉を潜める他なかった。

あまりにも謎めいている魔族の言葉、信用して良いのか検討がつかない。

「その魔族を信用するのなら”勇者の所在が見つかってしまった”ということじゃな。……何故知りえたのじゃろう」

ブジャタが静かに言葉を紡ぐ、皆唾を飲み込む。静まり返った室内、空気が重い。

「クリストバルに勇者が現れて、次に行く場所は確かにここ、ジェノヴァの確率が高いということなら、大概の情報を集めれば解るわでも、時期が一致しているのが、ね」

「味方なら何も問題はないでしょうね、勇者が知られても。ただ、魔族が勇者の味方をしますか？ 魔王アレクに報告は？ むしろ、魔王アレクからの指示で観に来たのでは？」

「一概に信用は出来ないけれど、嘘でもないと思うんだボク。殺そうと思えば何時でも殺せただろうに」

「敵なら……『護れ』とは言わないわよね」

口々に意見を出し始め、空気は重いが室内は急に騒がしくなった。困惑気味に顔を見合わせて肩を竦めていた勇者達、魔族に知られたという時点で恐怖を覚えてしまうのは仕方の無いことだ。ただ、アサギとユキにはどうしても出会えた二人の魔族が、敵とは思えない。

「あの。あの二人、オークスさんとラキちゃんは大丈夫だと思いま

す、悪い人じゃないです、絶対」

控え目だが、アサギが立ち上がって叫ぶように発言した。一斉に皆がアサギを見る。

「根拠はないんです、でも、断言してもいいです、敵じゃないです」

「ええと……君が勇者かな？ ひどく美少女な可愛らしい勇者さんだなあ」

「あ、はい。アサギと申します」

マスターは瞳を丸くしてアサギを見つめる、勇者がまさか少女だとは思ひもしなかったのだろう。ついでに、こんな幼いとは。これではどこぞの貴族の姫だ。

言葉が出てこず、固唾を飲み込み狼狽しつつマダーニを見たマスター。

「大凡、私もアサギちゃんに同意見かな、私は一人しか見てないけど。邪悪な感じはしなかったね」

「ああ、敵意が全く感じられなかった。不可解な点は残るけどさ」
マスターの視線は苦笑いで返し、アリナと深く頷いたマダーニは髪をかき上げる。

「つまり、普通なら勇者とは思えない人物を魔族のその二人は、見抜いたと」

マスターがようやく口にする、客観的に見ればそういう判断が的確だ。軽く首を振るマダーニ。

「彼女達の腕に、勇者の石が昨日まであったの。魔力を探れて、勇者の石の波動を掴む事ができればそれで判別出来るわ。彼に忠告されて、今は隠してもらっている」

「ほお？ 隠せ、と忠告してくれたのなら本当は味方やもしれませんなあ……」

ブジャタが髭を撫でつつそう言えば、再度静まり返る一行。意を決したのか、ザークが一步前へ進み出ると俯き気味にか細い声で口を開いた。

「その姫君はとてつもない魔力と、類稀なる美貌の持ち主だそうで

す。誰しもが魅了されてしまうと。その姫君が本気を出せば、すぐにでも世界が破滅へと追いやられるとか」

「何でそんな危ないのを崇めてるのかしらね？ 世界の再編でもしようっていうの？ 魔王軍とは別物、ってことだものね」

それきり口を開かないザーク、マダーニは軽い溜息一つ数分思索していたようだが、これ以上の長居は無用と悟り、マスターに礼を述べると先頭切って店を後にした。

納得のいかない、不安と疑問が増した一行の最後尾。黙って聞いていたトビイが、マスターに歩み寄る。

「竜が航路に出現したと聞いたが、知っているか？」

「ああ、その話ね」

「何時からだ？」

「んー、一月前くらいじゃないかなあ？」

「三体で間違いないのか？」

「ああ、そう聞いているね。黒竜、風竜、水竜の三体だと。あくまで『噂』だが」

「有難う」

顔色一つ変えず、質問を手短にするとトビイは何事もなかったかのように店を出る。アサギに追いつき、手を握って歩きながらトビイは軽く空を見上げた。

「間違いない、な。クレシダ達だ」

・・・竜は、オレを探している。大事な相棒達、オレを待ってその近辺を動かないのだろう。・・・

考えつつトビイは軽く唇を噛み締める、直ぐにでも再会したいところだが大海原に居ては簡単に辿り着けない。

「早いとこ迎えに行かないと」

小さく零すと手に知らず力が籠ったらしく、アサギが微動だした。"ドラゴンナイト：トビイ・サング・レジョン"、一行が知らない、本当のトビイの姿である。

一行は市場で食料を買い漁ると、そのまま昼前に街を後にした。

「ここにいるから、出ておいで」

太陽が、昇る。暑い日差しに皆が頂垂れる中、馬車は進む。

「ここ一帯は森に囲まれているが、ジオアンまでの道がしつかりと舗装されている。それ程通行には不便を感じないだろうが……」

ライアンはマダーニと地図を広げていた、現在馬車はアリナとアーサーが二人で操作中だ。不慣れな二人ではあるが、馬が一定の速度を保たずに走るだけで、道は逸れる事はない。

「ジオアンまでの道程に、村が存在するみたいね」

「ああ、だが魔物の奇襲を受け廃墟と化している事も視野に入れておこう」

次の休憩ポイントを探す。食料調達と無論薬草も調達しておきたい、重要な事だった。

二人がそんな話をしている間、他の者は数日前と同じ様に魔導書に目を通していている。武器の手入れをしているのはトビイだ、アサギに魔法を教える事が出来ないので暇な様子である。時折アサギを気にして隣を見つめた。

マダーニが不在の為、アサギは一人で真剣に魔導書に没頭しており、他に目をくれない。その真剣な様子が、トビイの口元を綻ばせる。

街を出て約三時間が経過した、豊かな森は太陽の光すら遮断しており、ひんやりと日中なのに涼しい。先程より気温が下がったので皆居心地良さそうである。

道は青々とした苔がびっしりと生えており、まるで緑の絨毯を進んでいるかのよう、稀に漏れる木漏れ日が小さな花を照らし出す。馬車から顔を時折出し、思い切り空気を吸い込むアサギは瞳にその風景を焼き付ける。

美味しい空気、汚れない清らかな空気、胸いっぱい大きく深呼吸を繰り返し、そっと瞳を閉じながら、思うことは”地球”である。

地球は、空気が汚れている。空気だけではない、土壌とて、海とて、年々汚染が広がるばかりだ。

科学で善処しようとしているけれど、そんなことは不可能だとアサギは常々思っていた。

発達した頭脳で生き抜いて行けるだろうと、思い上がった人間はいつか神様から天罰を喰らうだろう。そうなった時、壮健で荘厳な自然の法律に身を任せ、逆行しない命あるモノ達が、世界を護りながら修復していくのだ。

眩しそつに木漏れ日を見つめるアサギ、瞳を細めて輝く光の筋を目で追う。

地球も、これくらい綺麗だったらいいのにね

地球の場所にも寄るのだが、ここまで澄んだ空気にはそうそうお目にかかれない。アサギの思った言葉が、脳内で木霊した。

地球ガ、痛イッテ言ッテルノ、病ンデイル星々ガアルノ。助けナキヤ、……私ガヤラネバ。

「地球が、痛い、って言ってるの」

「アサギちゃん？」

隣に居たユキに肩を揺さ振られ我に返るアサギ、動揺しながらも笑みを零す。

何だった、今の言葉は。自身の口から零れた言葉を、アサギは再度心で唱えてみた「地球が、痛いって言ってるの、病んでいる星々があるの。助けなきゃ、……私がやらねば？」。

微かに自嘲気味に笑うと、アサギは再び魔導書に瞳を落として没頭した。

魔法を覚えたい、剣を使いこなしたい、強くなりたい。何故そう願うかというと、勇者だからなのだが。一概にそうとも言えない気さえてくるのは何故だろうか、もっと別の理由がある気がして仕方ない。

うすうす自分でも気がついて、知らない間に自分が『何か』を渴望していることを、その為に強くなりたいと願う事を。

アサギは不意に隣に居たトビイに視線を移した、黙々と剣を磨いている。輝きを放つ、不思議な剣だ、目利きの出来ないアサギですら、その剣が他と違う光を放っている事に気づいてしまう。

「トビイお兄様、その剣はずっと一緒なのですか？」

「ああ、ブリュンヒルデと名付けた。数年前からオレの愛剣だ」

微笑んでトビイは剣をアサギへと手渡した、ずしり、と見た目より重い。重そうに抱えたアサギに吹き出し、トビイは直ぐに自分が持ち直す。

はにかんで笑い、再び新しい魔法習得に没頭を始めたアサギを、トビイが側から優しく見守り続けるそんな馬車。

魔物にも出くわすことなく、一気に夜が更けていく。先を急ぐので、不眠不休で進みたいところだが、生憎馬とて睡眠なしでは生きていけない。手ごろな場所で焚き火を起こし、交代で就寝する。

早朝、簡単な食事を済ませた一行は軽く素振り運動して馬車に乗り込み、旅を再開する。

満開の花に彩られた森を進み、ブナ林へと到った。知らず歓喜の溜息を吐き、アサギは変化していく鮮やかな森の色彩に心を躍らせる。馬車から顔を出しては、うっとり瞳を細めて一心不乱に景色を眺めた。

勇者達は流石に自覚が出てきたのか、本腰を入れて魔法習得に取り掛かっている。使用可能な魔法が増えた為に自信もついたのでろう、新しい魔法を覚えたいという欲求も出てくる。出来ないと思えば苦痛な事だが、出来ると思えばやる気とて沸いてくるものである。昼食ついでに身体を動かそうと、太陽が真上に来る前に一行は道の脇に馬車を止めた。昨日市場で購入した鶏肉を下ろし、野菜を用意し、準備に取り掛かる。

勇者達は顔を揃えて笑顔ではしゃいだ、キャンプのようで楽しいのだらう。魔物の襲来もないので、気楽なのかもしれない。ライア

ンにマダーニ、アーサーやトビイは常に周囲に気を張り詰めているが。

浮き足立つ勇者達、差し詰め、ライアンが引率の教師だろう。勇者達は指示を待つ。

生物はムーンが氷の魔法で上手に冷凍してくれた、初めての試みであつたが傷つけることなく氷で包み込んだのである。他にも冷凍した食材が幾つかあるのだが、溶けてしまふ前に再度氷付けにした。

ムーンだけでなく、練習の為にアサギとマダーニも参加である。多少手間取つたが成功した、これで当分食料には事欠かないだろう。魔法とは、非常に便利である。冷蔵庫代わりになるなんて、地球で使えたら便利だろうなあと勇者達は己の手を見つめた。

「水はオレとアーサー、それにクラフトで汲んで来よう。マダーニにミシア、ムーンは野菜や肉を切ってくれないか？ 後は適当に寛ぐか薪でも拾つて来てくれ」

ライアンの言葉が言い終わらないうちに、トビイはさつさとアサギの手を引いて森の奥へと消えていった。啞然、と口を開いてトビイを見つめる一行である。

一足先に薪拾いへと森へ入つたトビイとアサギは、乾燥しきつた小枝を拾いながら歩いた。

時折黄色の小さな花が可憐に咲いており、アサギは思わず口元を綻ばせる。そんな様子を幸せそうに眺めるトビイ、アサギの行動一つ一つが愛らしい様だ。

「結構拾えましたよね、戻りますか？」

両手に抱えた薪を満足そうに見つめ、アサギはそう問いかける。苦笑いでトビイは仕方なしに了承したのだが、まだ帰りたくないのが本音だ。

二人きりで居る時間が、どれだけ貴重な事だろうか。例え恋人ではないにしろ、共に居られるというだけで心が温かくなる。

残念だが馬車へと二人は戻り始める、仲良く並んで他愛のない話をし始めた。薪を探しながら、結構遠くまで進入してしまつたよう

だ、馬車が見えてこない。

食事を心待ちにしながら歩くアサギの隣、トビイは警戒心を強め周囲の様子を窺う。

「妙だ。ここまで離れたつもりはない」

「え？」

トビイを見上げると、アサギも慌てて森を見回した、確かに妙だ。何時の間にやら冷えた紫色の霧が立ち込めており、露出した肌が寒い。

それは気温のせいだけではないようにも思える、鳥肌がぞわり、と立つ。

トビイはそつとアサギが腕に抱えていた薪を地面へと下ろす、静か過ぎる大地に乾燥した木がカラカラと音を立てて落下した。正面からアサギを抱き締めると、小声で囁きながら瞳は鋭く森を見つめる。

「オレから離れるな」

「はい」

静まりかえる森、けれども鳥の囀りもなければ、風に揺られる木の葉の音も聞こえない。無音が不気味だった、トビイは音もなく剣を引き抜いた。

「多分、何者かの領域に入ったと推測する。目的は分からないが歓迎はされていないだろう、な。その者を説得、或いは倒さないと出られなさそうだ」

二人は間違いなく幻惑の森へと侵入してしまったのだ、踏み込んでしまったならば仕方ない。

容赦なく左右を見据えるトビイは、左手でアサギを抱き抱えながら右手で剣を隙の無く構える。

突如、張り詰めた空気と流れを感じてその方向へと顔を向けたトビイ。躊躇せずには身体を翻し、剣を真横に振り払うと金属音がぶつかる音が森に響き渡った。

思わず瞳を閉じたアサギ、おそるおそる開いてみればトビイが微

かに皮肉めいて笑っている。

「上等だ」

ザクザクツ、と鈍い音がし、何処からか飛んで来た小剣が数本地面に突き刺さった。トビイが弾き返した為だ。

忌々しそうにトビイは唾を吐き捨て、一瞬瞳を閉じるとアサギの手を引き走り出した。

木と木の間隔が狭くなった場所に留まると、木を楯に再度飛んで来た小剣を余裕で地面へと叩き落す。武器を所持していなかったアサギは、その敵が投下した小剣を一本拾い上げて構えた。

「さつさと姿を現してもらおうか、お前に付き合えるほど暇じゃないんだが」

トビイを見上げたアサギは、木の葉の不自然な揺れを見、慌ててトビイを突き飛ばす。上空から降ってきた小剣が数本、深々と地面に突き刺さった。

「トビイお兄様、離れましょう。私は一人で大丈夫です」

「駄目だ、危ない」

「でも、固まっていると狙われやすいです。私勇者ですから、大丈夫ですよ」

一度言い出したら聞かないアサギである、断固として意志を変えない様子にとビイは軽く溜息を吐いた。渋々頷くとアサギに注意をしつつ神経を研ぎ澄ませる、何時までも防御に徹するわけには行かない。

トビイ一人ならば、難なく敵を発見し対処できただろうが、アサギを守護しながらの戦闘ではそう上手くは行かない。人を護りながらの戦闘が難しいと思ったのは、初めてだ。そんな戦い方した事がない。

ゴウ、と不気味な風が上空で舞う、太陽の光に反射し、小剣が輝く。

舌打ちし、トビイは離れたアサギへと駆け寄った。自分の真上から降り注がれる小剣に気づくのが遅れたアサギに、地面を蹴り上げ

て思い切り手を伸ばすトビイ。

そのまま勢いで抱きかかえて地面を転がったが、左足を負傷したらしくじんわりと血が滲み始める。

一本の小剣が脹脛をえぐった様だ、鮮血に染まりゆく衣服を見て愕然と言葉を失うアサギにトビイは顔色一つ変えない。

小刻みに恐怖で身体を震わせるアサギを優しく抱き締め落ち着くように、髪をゆっくりと撫でる。

「怪我はないな？」

暖かな声、聴いた瞬間思わずアサギは号泣した。今までの戦闘では目立った傷など誰も負っていない、初めて恐怖を感じたのだろう。耳元で大丈夫だ、と繰り返し涙を指で掬い上げるトビイに、更に泣き喚くアサギ。

トビイが負傷したのは自分のせいだ。自分が上空からの攻撃に全く気がつかなかったから、庇ったトビイが負傷したのだ。

勇者だと、一人で離れたばかりにこんな自体に。アサギは荒い呼吸でトビイの傷を見つめて、涙を零す。

「立てるね、攻撃に備える」

繰り返される敵からの攻撃、それでもトビイは横から飛んで来た小剣を華麗に叩き落とす。

泣き止まないアサギを安心させるように背中をゆっくりと擦る、頬に軽く口付けをし、右足に体重をかけて立ち上がったトビイだが、左足を地面につけた際に多少顔を歪めた。

それを見てしまったアサギは、急に泣くのを止めた。泣いている場合ではない、と悔しそうに唇を噛み締めて震える手を無理やりきつく握り締める。

軽く瞳を閉じ、呼吸を整えて自己暗示をかけたのだ、唇を微かに動かしながら「しっかりしなきゃ」と震える身体を押し止める。「私、勇者だもの」と呟きつつ。

瞳を開くとそこに現れたのは、涙で濡れながらも光り輝く芯の強い決意の瞳。

「ここで休んでいてください、私が倒してきます」

「無茶だ、この程度の怪我ならば気にするな」

笑うトビイだが、不意に眩暈を感じ身体をぐらつかせる、どうやら剣に毒が塗ってあったようだ。

悟られないようにとアサギの髪を撫でるトビイだが、無理やりトビイを座らせると、習いたての回復魔法を唱えるアサギ。

「魔法があります、お願いです、やらせてください」

霧の中、何処か遠くを睨み付けたアサギは、手を伸ばし止めさせようとしたトビイの手を払い除け駆け出していた。

「待てアサギ！ 行くなっ」

しかし、苦悶の表情を浮かべるトビイ、左足に力が入らない。痺れ薬か、即効性のある毒なのか、用意周到な敵の攻撃に胸がイラついて仕方ない。

それでも気合でトビイは立ち上がった、多少アサギのかけた魔法が効いているのだろう。左足を引き摺りアサギの後を追う、離れてはいけないのだ二人は。

トビイにとって、アサギとは無くてはならない存在、心の拠り所。全身全霊をかけて護るべき存在、身体も心も笑顔を護り続けるべき相手である。

「嫌なんだ、これ以上傷つかせるのは嫌なんだ」

毒で意識が朦朧としてくる中、トビイはそう呟いた。時折見えてしまう妙な映像、幾度も幾度も過去アサギを助けるために、護る為に必死だった自分。

何かから、”誰かから”アサギを護ってきたようなのだ。

故にトビイは苦痛を伴ってもアサギを追う、アサギが負傷したらそれこそ耐えられない。

暫く走り続け、アサギは広い奇妙な空間に辿り着く。森から抜けたその先は、何故か木も草も生えていないただの空間、500メートル平方程だろうか。

中心に朽ち落ちた大木が転がっているのだが、地球で森林伐採した跡地のような奇妙な感覚を受けた。一步、足を踏み出し砂の上を音を立てて歩く。大木に腰掛けているフードを被った人物を睨みつけながら、アサギは右手で剣を握り締めた。

「ここから、攻撃していたんですね」

敵は後ろを向いているので顔が全く分からない、が、突如しわがれた声で笑い転げ始める。

「あの男はちと厄介そうだったが、お前一人出向いてくれたのなら好都合。……二人目じゃて」

言つが早いかその者の左右に浮遊した小剣が四本、アサギ目掛けて正面から直進してくる。辛うじて避けたものの、右手が刃に触れたのか宙に深紅の血が僅かに舞った、砂の上に飛び散る。

ひゃひゃひゃと潰れた声で笑うソレ、ようやくこちらを向く。喉の奥で小さく叫び、思わずアサギは後退りをした、骨と皮しかない、まるで生きた骸骨である。

しかし、歯を食い縛り決死の覚悟でアサギは精一杯睨みつけた。

「ずっと、ここで待っておった。二人目のエルフに遭遇する為に、その力を手中にする為に」

歡喜の笑い声を上げるソレは、よくまあこれだけの小剣を集めたなというくらいしつこく飛ばしてくる。幻覚ではないこと、それはトビイとアサギが身をもって実感した。

「……………」

無言でアサギは右手を大きく振り被った、アサギの手前で砂に埋もれていく小剣。意外そうにソレはぎよろりと剥き出した瞳を丸くし、豪快に笑う。

思ったより腕が使えると判断したのだろう、それでも未熟だと思いい愉快に感じたソレ。

「トビイお兄様が、怪我をしました。あなたが放ったこの小剣で怪我をしました」

「お前を庇って負傷したようじゃな」

「それから、気になって居たのですけど。……何故ここだけ植物が生えていないのですか？」

前進を続けるアサギ、下卑た声で笑いながら、枯れ枝のような腕を組んでソレは喋る。

「実験じゃ。こちらの大地に調合した毒を流した、徐々に広がり、何時しか森林全体は毒に染まる。河に流れ出し、下流へと運ばれる。人間達も生きてはおれまい。元には戻らぬ、永遠に」

「何の為に」

「わしの力の証明に。エルフを喰らって飛躍したわしを、異端児だと追放した王都の者に復讐と制裁を。全ての人間に恐怖と絶望を。見えぬ敵に怯える姿が観てみたい、ひゃひゃ！」

「……ただ、それだけですか」

ふわり、とアサギの髪が風に揺れる。静かに大地を見つめていた瞳から、ぽたり、と涙が零れ砂を濡らした。

ただ、そんな事の為にここに居た植物達は毒を撒かれたのか。自己満足の横暴なこの目の前の男か女かすらわからない人間の為に、多大な犠牲が出たのか。

そこは、死の大地だった。森林伐採というより、火災や土砂で抉り取られたかのような。

『痛い、痛い、痛い。ああ、痛い』

声が、聞こえた気がしてアサギは再度、目の前のニンゲンらしい人物を睨みつける。

「誰に断って、こんな馬鹿げたことをしているのです？ 赦免は出来ません、裁かせて頂きます」

「面白い事言う娘だな」

顔を上げるアサギ、瞳が漆黒から、大地を支える大樹の豊かな葉の様な緑になったことに、ソレは気づいていない。

「大地と大気、ここで押さえられて眠りに就いている全てのイノチある植物から許可を貰いました」

「ほう？」

「先程あなた、『元には戻らぬ、永遠に』と言いましたね。それは違います、植物達の力強い生命の息吹は誰にも止められません。時間ばかりですが、息を吹き返します。人間とは違います」

自分の唇から溢れるように出てくる言葉、その意味を脳内で復唱しながらアサギはソレを睨みつける。

「痛いそうです、苦しいそうです。あなたには声が、聴こえませんか？ 有能な魔法使いか何かなのでしょうか？ どうして聴こえないんです？」

「はっ、植物がかね？ つくづく、面白い娘だな。エルフは確かに植物や動物達と心を通わす事が出来るそうだが」

「私、エルフじゃないです。地球という異界から来た人間です」

「しかし、その身に纏わりつく空気が」

言葉が途切れた。目の前のアサギの容貌が変化していることに、ようやく気付いたのだ。声にならない叫び声を上げ、間を置いてから恐怖のあまりソレは魔法詠唱に入る。

ふわり、と軽く宙に浮く娘。新緑を思わせる綺麗な緑の髪に、濃い緑の全てを見透かす不思議な光の瞳。アサギである、先程までは漆黒だった髪と瞳が、今は。

見た瞬間、寒気がした。背筋に伝う汗は本能で恐怖を感じ、身体が拒否反応を起こしているからだ。

それでも魅入った、魅入ってしまったこの目の前の娘に。

そして勝てないと悟った、次元が違いすぎると”人一倍魔力が高い”ソレは直感してしまったのだ。

「き、きき貴様、何者だっ！」

「アサギ、といます。植物達はあなたよりも、とても強かなモノ。あなたの非力さ、見せてあげます」

右手を空高く掲げるアサギ、沸々と怒りが込み上げて来るのか、瞳の鋭さが増している。先程森へ入ってきたときの獲物の目など、していない。寧ろ狩る側だ。

反射的にソレは魔法を放った、叫び声に近い魔法詠唱である。

「巡る鼓動、照らす紅き火、闇夜を切り裂き、灼熱の炎を絶える事無く。私の敵は目の前に、奈落の業火を呼び起こせ、全てを灰に、跡形もなく燃え尽くさん！ 爆熱大火撃」

詠唱を聞く以前に、すでにアサギの周りの空気が微妙に変わった。薄紫がかつた靄が、アサギを包み込んでいる。

唱えられた魔法は禁呪を除き火炎系最大の呪文である、両手から放たれた巨大な火炎が一直線に眩い光を放ちつつアサギに襲い掛かる。ソレは、完璧な魔法詠唱にようやく安堵の笑みを漏らした。

が、アサギへ届く前に瞬時に掻き消えてしまった。

灼熱の炎、徐々に弱まるとかそういう類ではない、何事も無かつたかのように消去された。目の前のアサギはただ、冷静にソレを真っ直ぐに見つめている。僅かに口元が上がっている気がした。

「ば、馬鹿な！ わしの得意呪文が、こんな、こんな小娘にっ」

呪文を防ぐ者は過去にも居た、相殺しようとする魔法を放ってくる者もいた。が、何も発動しないまま、瞬時に掻き消したのはアサギが初めてだ。

勝てるわけがない、殺される！ 見当違いだっ！

狼狽し、一步、また一步と退却を始めるソレ。だが、ゆっくりとアサギは距離を縮めるように近づいていった。

左手を空高く掲げ、揃った両手を軽やかにしならせると、微笑。なんと妖艶なことか。

「ここにいるから、出ておいで。大丈夫」

その言葉。一瞬理解し難い意味だが、ソレは絶叫した。

毒を撒き散らし、生命を死に絶えさせたはずのその空間、その柔らかない声に導かれるようにアサギの足元から緑の芽が顔を出したのだ。

「ヒイイイイイ」

次々と土から顔を出す小さな草花、踏み潰すことが出来る貧弱なその存在。しかし遅しく大地に根を張りそれは育つ、その様子に畏怖の念を抱かざるをえない。

「ば、馬鹿な！？ わ、わしの、わしのっ醸成がっ」

アサギの身体から溢れる温和の光、大地に降り注がれ小さな芽達は急速に伸びていく。まるで一つの植物の成長過程を、早送りで見ているようだった。

数分と経たない内に、その虚無の空間は周囲の森と同じ風景を描いた。さわさわと出来たばかりの森を風が吹き抜ける、緩やかな新緑の香りが鼻先を撫る。

腰が抜けて、その場から逃げようにも逃げられないソレ、木漏れ日が降り注いでいるアサギをただ見つめることしか出来ない。もはや、認めたくはないが神の領域だ。

何者だ、この娘。何者でもこうなれば構わない、逃げなければ殺される。人間ではない、エルフでもない。じゃあ、何だ？

光の粒子を身に纏い、類稀なる美貌を持った、絶対的な能力を持つ荘厳な娘。

としか、形容出来なかった。

「力、貸してくれるかな」

地面にトン、と降り立つとアサギは両手を真横に開きつつ、優しく大地に語り掛ける。

その場に存在する全てのイノチから、何かを受け取るように恭しく胸の前で両腕を使い抱きとめるように。創製するように腕をくると回しながら、ソレの目の前でアサギは小さく呟いた。

まるで、舞いを披露している様である。神々しい、まさしく女神の舞いだ。

「フィリコ」

パン、と空気が弾ける、閃光が辺りを覆いつくし、目を直撃されたソレは絶叫した。地面を転げまわるソレの耳に、何やら音が届いた。目がやられてしまい見ることが出来ないのだが、奇妙な音。

アサギの右手に何時しか握られていた武器、純白の鞭である。棘が幾つも付属されており、時折虹色に輝くその鞭を、硬く握り締め掌に馴染ませる。

潰れた瞳を、気配を感じアサギへと向けた。

自分に向けられる冷淡な表情、無情の瞳、この世のものとは思えない程美麗なその姿が瞬時に脳に転送される。

アサギが鞭を軽く一振りすると、それが一本の直線へと変化する。まるで長い槍のような、細くも鋭い鞭とはもはや呼べない代物だった。

躊躇することなくアサギは地面を蹴って、蹲っているソレへと突進すると、両手で突き刺す。斬る事は出来ない、だが、先端が鋭利に尖っている為当たれば一突きで敵に重症を与えられる。棘が付属されているので、抜く際にも棘が体内を傷つけるのだろう。

瞬間だった、鞭らしきものが変貌したと思えば身体が激痛を襲った。

ガクガクと身体を震わせるとソレは何か言いたげに口を開こうとしたのだが、もはや力が残っていない。微量の血を口から滴らせ、そのまま息絶える。

アサギはフィリコを引き寄せるが、抜くのには力が要ると解ると左手を真っ直ぐソレへと向け。詠唱なしで火炎の呪文を放ち、死体の焼却を始めた。

ミイラのような身体が、紅蓮の炎で包まれて消えていく最中。アサギは瞳を閉じると鞭を掲げる、大気へと返還したのだ。

すう、と溶け込むように掻き消える鞭・フィリコ。

「ありがとう」

空を見上げて微笑むと、急に力を無くしてその場に崩れ落ちるアサギ。意識が消えた途端に髪と瞳の色が漆黒へと戻っていく。今の出来事は、森だけの秘密だ。

数分後、耳元に柔らかな物が触れているのを感じたアサギは慌てて目を覚ました。起き上がるとリスやらウサギ、小鹿などが集まって来ている。啞然と周囲を見渡す。

警戒することなく集まってくる森の住人達、嬉しそうにアサギが手を伸ばすと、上空から小鳥が飛んできてその手に留まった。おそ

るおそる顔の近くまで手を動かせば、頬に擦り寄るように小鳥はくつついてきた。

アリガトウ、アサギサマ。

「もう、大丈夫だよ」

そう、大丈夫だと確信する。若干の頭痛に眉を顰めたが、大きく深呼吸を繰り返せば痛みも取れた。しかし、どうやって今の状況になったのか記憶がない。ミイラのような魔法使いを見つけ、恐怖を覚えたのは自覚があった。が、それ以降だ。敵は何処へ行った？逃げたようには思えない。

首を傾げながらも苔の生えた柔らかな大地に腰を下ろし、アサギは暫しそこで戯れる。

やがて後を追ってきたトビイが、その姿を見つけて息を飲んだ。

追いかけている最中、眩い光が目の前から迫って来た為不安で胸が押し潰されそうだったが、アサギは元気なようだ。安堵と歓喜の溜息を零し、無事な姿に駆け寄って抱き締めたかったのだが、その姿に見惚れてしまい一歩も動けないトビイ。美しすぎた。

どれ程魅入っていたのだろう。

「トビイお兄様」

気づいたアサギが小走りで駆け寄ってくる、頬を膨らませて一言。「動いちゃ駄目です、って言ったのに」

硬直気味のトビイを大木の根元に無理やり座らせ、アサギはトビイの傷口に掌を重ねて息を吸い込んだ。傷口に暖かなものが流れ込む、然程大した毒ではなかったようで今は気分も悪くないのだが、アサギの懸命な回復魔法によって傷口が塞がれていた。

即効性はあるが、持続性はなかったらしい。

トビイは周囲を見渡す、不穏な気配がない為もしや、とは思っていたが。

「敵はどうした」

「倒せました、大丈夫です」

この上ない可愛らしい笑顔でトビイに笑いかけたアサギだが、不

審に思ったトビイはアサギの身体を見つめていく。

右手で視線を止めたトビイ、弾かれたように起き上がった。思わずアサギの手首を掴み引き寄せると、頬に手を添えて珍しく怒気を含んだような口調で語る。

「怪我してるだろう、自分を治せ。オレはもう大丈夫だ」

「これくらい、へつきですよ？ 痛くないですし、動かないで下さい」

言い出したら頑固アサギが聞くはずも無く、トビイは苦笑いで頭を撫でる。

「わかった、だがその代わり消毒だけはさせてもらう」

返事を待たず左腕で強引に抱き寄せると、出血は止まっているのだが右腕の傷口にトビイは舌を這わせる。その時、トビイの顔が微かに歪んだ。

……なんだ、この味。

近づいて解った、甘く眩暈を覚える不思議な香りの血である。口に含み、甘美で清らかな舌触りの良いその血を喉へと唾液と共に流し込む。

傷口が沁みたのかアサギは身体を跳ね上がらせると、トビイの胸の中で小刻みに震える。

時折聞こえるアサギの微かな呻き声が、妙に悩ましくトビイの脳を刺激した。小鳥達の囁りに混じって、夢中で傷口を嘗め続けるその音が、森に響き渡る。

「っ、ふ、あ、あの、もう大丈夫です。離して下さい」

「あ、ああ、すまない」

貪る様に無心だったトビイは、じたばたともがくアサギにようやく我に返ると腕の力を和らげる。アサギの頬は赤く色づき、気まずそうにトビイを見上げた。

恥ずかしかったのか、痛かったのか、瞳が微かに潤んでいたのので思わず唾を飲み込むトビイ。

アサギの吐く息が、薄桃色をしているようで、このまま抱き締め

てしまおうかという考えが横切ったわけだが、強引に押し留めた。

「まずいな、妙な色気がありすぎる」

「ほえ？」

トビイは苦笑いすると髪をくしゃくしゃと撫で上げ、不貞腐れてそっぽを向くアサギを立たせると、馬車へと戻るように歩き出した。残酷なくらい挑発的で、それでいて疎い。トビイは無意識の内に言葉を紡ぎ、軽く頭を振る。

「あの、足大丈夫ですか？」

「ああ、完治した。ありがとう」

自由の利くようになった足を微笑しながらアサギに見せると、二人は手を繋いで歩いた。

そう、完璧に完治していた。

覚束無い、憶え立ての回復魔法でトビイの傷が修復したのだ、異常なまでに綺麗に。

二人は森を抜ける、先程の魔導師が消え幻惑の空間が消滅したので馬車までの道程は然程遠くも無い。

マダーニが目くじら立てて怒りながら駆け寄ってきた、が、事情を話すと表情を強張らせる。

「二人とも無事？」

「大丈夫だ、オレがついてる」

「ま、トビイちゃんが一緒ならね。さ、ご飯出来てるわよ。食べましょっ」

腹を刺激する鍋の良い香り、香辛料と共に野菜と鶏肉が煮込んであるようだ。二人を待っていたらしく、空腹の一行は文句を言いながらも歓迎し輪になって食べ始める。

「いただきまーすっ」

こうしていると、本当にキャンプに来ている様だ。

トビイは美味しそうに鍋を食べているアサギを見つめる、不思議な子だ、と。外見が綺麗なのは確かなのだが、それだけではない、妙に人を惹きつけてやまない空気を持っている。

危険な媚薬のように、一度堕ちたら戻れないほどの、誘惑の空気を。

今廻り合つは、魔王と勇者

一行がジエノヴァを発つたその一日後の事、魔族の船は近辺の海岸付近へ到着した。

そこから降りたい魔族のみが、小型の竜で岸へと運ばれる。もちろん飛行能力を所持している魔族は自身で降りていくのだが、当然魔王ハイは飛ぶことができず竜で岸へと運ばれた。

親しくなつた魔族達に笑顔で、時折別れを惜しんだ涙で見送られ、照れくさそうに手を振りながらハイは数人の魔族達を歩き出す。あの鞠の少年は泣き喚き大変だったが、ハイとて胸が熱くなる別れだ。魔界イヴァンに戻つた時は、城に訪ねてくるがよい、とハイが必死に説得しどうか泣き止ませた。こんな気分になるのは、本当に何十年ぶりだつたらうか。思い出せない。

フードを深く被り、魔族だと悟られないように各々目的を果たす為進む。ふと、ハイは気になつたので同行している魔族達に訊いてみた。

「人間の街に何か用が？」

「人間とは実に面白く、特にあの街には興味深い物が多々あるのですよ」

「ほう？ 例えば」

「私は食べ歩きが大好きなので、滞在中は全ての新メニューを平らげるつもりです」

「わたしは新しく出来た『めいど喫茶』なるものに興味がありました。可愛らしい女の子達が可愛らしい服に身を包んで、世話を焼いてくれるのだそうです。うへへ」

「……そ、そうか、よかつたな」

人間を虐殺に行くとか、偵察に行くとか、そういう類の事ではない様だ。人間達の魔族にはない、変わった文化に興味があるのだから、皆心を躍らせているのがハイにも解る。

数人の魔族と共に街へと入った、が、直様散らばって行ったのでハイは軽く手を振ると一人歩き出した。4星クレオの人間の街へ来たのは初めてだ、賑やかで煌びやかな街の雰囲気酔いつつ、ハイは歩き回る。

だが歩き回るだけで探し出せるわけもなく、『黒髪で小さな背丈の可愛らしい少女を知らないか』と聞き込みを開始するが、それだけでは普通わからないだろう。

腹が減り、気になったので露店で冷やしパインを購入したハイだが、偶然にもその店主がアサギを覚えていた。

「あー、あの子かな？ とびきりの美少女だろ？ その子なら昨日ジョアンへ向けて旅立ってる筈だよ。昨日店であんたと同じパインを買ってくれて、美味しそうに食べてた」

ハイは、人間が嫌いだった、汚く醜いものだと思っていた。歪んだ心しか存在しない、生きていくに値しない種族だと思っていた。

無論自分とて人間だ、全ての人間を抹消したら自身も死ぬつもりだった。穢れた子、偽りの聖職、墮落と怠惰のその中で生きてきたけれどもこの街で人間に話しかけると、皆笑顔で快く親身になって答えてくれたのだ。わからないにしても「探し出せるといいな」など、励ましの言葉をくれる。その言葉が、何よりハイの心に温かさ届けた。

忘れかけていた『人の温もり』、妙に心に何か揺さ振りかけるじんわりと胸の奥が暖かくなって、思わず笑みが零れてしまう。

嬉しい、と思った。見知らぬ自分にも丁寧な返事をくれて、笑顔で手を振って別れてくれる人間に、よかった、と思った。

船に居た魔族達となんら変わらない、人間も魔族も関係ない。初めて隔たりがないことにハイは気付いた。

人に聞く度、ミラボーから受け取った宝石を手渡していくハイ。

感謝の意を込めて、である。役に立つのかがハイには解らなかったのだが手持ちがそれしかなかった為、贈った。

丁寧に地図でジョアンの位置を教えてもらい、大体把握出来る

馬で追いかけたほうが速いと言われ、馬を購入する。

乗馬は初めてだ、けれども動物好きのハイの心を汲み取ったのか、馬は自ら走り出す。

「もうすぐ、もうすぐあの子に会えるのだな」

幸せそうに、軽く頬を染めて呟いたハイ。応えるように馬がヒヒーン！ と高らかに嘶く。

軽快に道を走る馬の背を撫でながら、ハイは瞳を閉じて打ち震える胸を必死で堪えていた。

ところで後日、ハイから宝石を受け取った人間の一人が、冗談で宝石屋にそれを持っていった。

誰も本物だなんて認識していない、尋ねられたから返答したまでのこと、まさか宝石が貰えるなんて思わないだろう。けれども当然それは本物である、呆然と男は大金を受け取って店を後にした。

困っていた人間は宝石を売りに出した、が、余程の事が無い限り家宝として扱おうとそのハイが手渡した宝石は丁重に仕舞われる。

その宝石は家宝として、代々受け継がれていった……というそんな話が近い未来語られるだろう。

その頃一行は、順調に旅を続けていた。誰も魔王の急襲など予測できない、出来るわけがない。

休憩中に剣の腕を磨き、移動中は魔導書を読み続け、魔物と一度遭遇したがようやく勇者全員が戦闘に参加した。

回数をこなせばそれだけ様にもなってくるもので、アサギはもとより、トモハルの成長が目まぐるしい。やはりそれは伝説の剣のお陰であると思われるが、本人が気分上々なのであえて口に出さず。

その日、昼食を摂っていた一行。

不意にアリナがジェノヴァの方角に身体を向けて怪訝に眉を顰めると、近くに居たクラフトを手招きして呼びつける。

「なんかさ、馬の音聞こえない？」

「あー……あ。聞こえますね。」

耳を澄ませ、瞳を閉じると確かに馬が駆けている音が近づいてきている。ようやく姿が小さく見え始め、瞳を細めて黙視すれば乗っているのは長髪の男。

「なんか暑そうな服装の男だなあ。旅の人かな」

「にしては、旅の準備がなされてないようですが」

踝までであると思われる、長い異国の服に身を包み、顔色悪くそれでも馬にしがみ付いている男。

アリナは大きく手を振って、おーい！ と叫んでみた。

意識を失っているかと思われたが、男はよろめきながら起き上がると弱弱しく手を上げる。

アリナの目の前で馬が停止し、隣のクラフトが叫び声を上げるのだが、乗っていた男はそれどころではない。

「ちよつと、アナタ！ 危ないじゃないですか、うちのお嬢に怪我でもさせたらどう落とし前をつけてくれるんですっ」

堂々と微動だしなかったアリナに拍手ものだが、クラフトが凄いい剣幕で怒鳴り始める。睨みつけるが、顔をあげた男は柔らかな瞳に、丁寧そうな物腰、悪気はなかったように思えてきて慌てて口を噤んだ。

「すまなか、つた。人を、探して……その、飲まず食わずの不眠続きで……。申し訳ない」

それで顔色が悪いのか、とアリナとクラフトは慌てて馬から男を引きずり下ろす。クラフトが馬車から水と干し肉にビスケットを出してきて、差し出した。

小さく礼を言い、震える手で受け取ると口に運び続ける男。

アリナは呆れ返って溜息を吐くと、地面に座り込んだ男の正面に胡坐をかいて座り込む。正直、心配で放っておけない人種だ。

「で、何？ 人を探してそんな装備で馬に乗って駆けて来た訳？

どんだけ無謀なのさ、あんた。とりあえず、会ったのも何かの縁だし。どんな人探してるの？」

クラフトも隣にしゃがみ込んで深く頷いた、協力しよう、と。
「その人の名前は？」

口を必死に動かし、食事を取る男の全身を見つめながら、アリナはそう問う。どこぞの貴族だろうか、世間知らずにも程があると思う。

「名前が分かれば苦労しない……。肩位の黒い髪で、こつ……。くるりん、と毛先が巻いてあるような。大きい瞳も真っ黒で、小柄。とても可愛らしい容姿の女の子だ」

名前を知らないって、一体どういう理由で探しているのだからこの男、と思いきや軽く項垂れたアリナ、だが。聞く度に鮮明に一人の人物が思い当たり、クラフトを顔を見合わせる。

「もしかして、それ。アサギのこと？」

そう、アサギがびたり、と当てはまった。いや、他にも居るだろうがアリナの知る限りはアサギだ。

疑惑の瞳でクラフトを見やるアリナの正面で、男は急に頬を赤らめると興奮気味に叫ぶ。持っていた干し肉を放り出し、嬉しそうに身を乗り出してきたので顔を強張らせて仰け反る2人。

「アサギ！？ アサギというのか！？ 会わせてくれ、是非会わせてくれ！ ああ、ようやくっ」

馬に乗ってやってきた男とは、もちろん魔王ハイである。

『2星の魔王ハイ・ラウ・シュリッブ』だと知っていれば、アリナもクラフトもアサギをハイに会わせたりはしなかった。

だが、まさか魔王が瀕死の状態で馬に乗って、よもや単独でやってくるとは、誰も思わないだろう。

何より顔を知らない二人、そして邪悪な気配を微塵も感じさせない男を、どう魔王を結びつけよう。

「違うかもしれないけど。アサギー！」

気迫負けてアリナがアサギを呼んだ、はーいつ、と元気な声がハイの耳に届く。

硬直するハイ、こちらへ走ってくる音が聞こえてきたので、更に

緊張と興奮で銅像並みに硬直。ただ、視線だけは音を捉えて、瞳で追う。

馬車の向こう側から、あの優しい瞳の温かな空気で包み込まれた少女が……姿を現すだろう。

どうしようもなく高まる胸を押さえる事が出来ずに、ハイは手短にあつたものを力強く握り締めると豪快に振り回す。

徐々に激しくなるその行為、実はクラフトの腕を掴んでいた。ガクガクと身体を揺らすクラフトは、始め平然としていたのだがこれはあまりに酷すぎる。

「な、なんなんですか、あなたはっ」

腕を振り払って、軽く睨みつけるクラフト。面目なさそうに頭をかきながら拗ねた子供のように俯くハイ、素直に謝る。

「すまない、いや、興奮してしまって」

溜息一つ、クラフトは苦笑いでハイに向き直った。自分より年上の男だろうが、妙に行動が子供らしい。見た目とは裏腹に、まだ精神が成熟していないような、そんな。

「ひよっとして、何処かでアサギちゃんを見かけて一目惚れした、とかでしょうか。気持ちは解らないでもないですが、無謀ですよ」

あながち間違っではないないクラフトの言葉、ハイは軽く瞳を開くとまじまじとクラフトを見つめ。穏やかな、木漏れ日のような柔らかな眼差しで微笑んだ。

昨日から、人間と会話してばかりだ。

と、不意に我に返るハイ。思えば物心ついたときから、人間を憎み、忌み嫌ってきた。

小さな動物の命を踏みにじり、殺して笑っていた残酷で無慈悲な人間達。その愚劣な様に身体は嫌悪感に打ち震え、自分が人間である事に吐き気を覚え。

あの日、冷たくなつた小鳥の亡骸を埋葬した時の悔しさ、その時流した涙を忘れる事はなく。

それ以来、見下した態度で人間と接してきたハイは、自分の存在

意義とは人間を滅ぼす為であると思ひ込んだ。高等な神官の家に産まれた、強大な魔力を秘めた子。

その力は人間を護る為でなく、人間を滅ぼす為に。

ハイは、クラフトに控え目に微笑みかけると、不思議そうに自分を見た視線に口を開く。

「お前、いい奴そうだな」

「？ いい奴ですか？ んー、どうでしょうね。ただ、私は確かに共に歩んでいる仲間達は好きですよ。出会って日も浅いですが皆個性的で。やはり人間出逢いが大切です、日々勉強させていただいてますよ」

暫しの沈黙の後、ハイは寂しそうにぼそり、と呟いた。

「仲間か。お前が羨ましいよ」

「はあ」

風がハイの黒髪を舞い上がらせる、憂いを含んだ表情が露になった。

この人は一体何者だろうか？ 雰囲気だけならば権威的な人物に見えなくもないが。クラフトは、横顔を見つつ首を傾げる。

「アリナ、どうかした？」

心地良い風にあたりながらハイは考え事をしていたが、その声と共にハイの瞳は大きく開かれた。馬車の陰から姿を現したアサギに、視線が釘付けになる。

顎に添えられていた手が動くことなく、瞳は瞬きを忘れ、下手したら呼吸も忘れて。

再び硬直。

「ああ、アサギちゃん。この人が探していたようなんですよ」

クラフトがそんなハイの様子に気づくことなく、左肩を叩いて顔を覗き込む。

「？」

アサギは不思議そうに、確かに自分を見つめていると思われる目の前の男に近寄った。見上げて首を傾げる。全く動かない男だ、そ

れは完璧な精巧な蠟人形のように。

アリナもクラフトも、異変を感じハイを見た、が、微動だしない。アサギの後方からは例の如くトビイが保護者のごとくついて来ているのだが、足を止め怪訝に軽く睨みつけた。男は俯いているので表情が明確に見えない、が。その身に纏っている、非常に特長のある衣服に見覚えがあった。

この暑いのに、長袖長丈のワンピースに身を包み、何処となく光沢のある異国の衣服である。

「まさか」

トビイは啞然と言葉を漏らした、再度目の前の男と記憶の男を比較する。漆黒の右目だけ前髪で隠れている独特の髪型、長髪、その装束、冷淡で厳格そうな雰囲気……それだけで十分だった。

剣の柄に手をかけつつ、用心深く男へと近づいていく。冷や汗が頬を伝う、もし、トビイの知り得る男と一致してしまうならば、

最悪だ。

唇を噛み締める、手に汗が滲む。らしくないとは思いが、相手は、相手は。

トビイが、舌打ちした。

「あ、あの、ど、どちらさまですか？」

若干たどたどしくハイに語りかけてみるアサギ、見つめ続けても何も言わないのだから正直どうしてよいやら。

「へ。あ、あああ。わた、たしかーあ」

奇妙な裏返った声を出す目の前の男、思わずアサギは身体を強張らせて後退りする。そんな様子が眼に入ったのかいないのか、お構いなしにさ錆付いていたロボットのごとく、ギギギギ……と軋みながら両手を動かし。

「あ、会いたかったぞーっ！」

いきなりそのまま、ガバア、と両腕でアサギを抱き締めた。アサギの悲鳴が、瞬時に口から漏れる。当然だろう。

その行動に啞然とするクラフトと、逆上するトビイ。アサギは驚

いて逃げようとしたが逃げられず、怖くて苦しくて腕の中でもがき続けていた。

見知らぬ年配の男に突然強い抱きつかれたら、恐怖である。

「わわわわわ。わたしはっくわたしはーわ・た・し・はっ」

妙なメロディーで自己紹介を始めるように、歌い出したハイ。奇妙な言葉を連呼し、血走った瞳で、微かに涙を滲ませアサギが潰れてしまうほど抱き締めている。

これ以上力を入れられてしまつては、アサギは確実に窒息死していた。が、寸でのところでトビイが剣を引き抜くと勢いよく斬りかかっていった。

そう、トビイは知っているのだ『魔王ハイ』の姿を。

魔王が現れたから斬りかかった、とみせかけて大半は「オレの許可なしで何アサギに抱きついてんだ、ゴラア」な感情の問題なのだが、それはさておき。

意識が飛んでいた奇怪な魔王、それでも、一応は魔王である。

トビイの渾身の一撃の剣先をするり、と紙一重で交わすとアサギを片手に抱いたまま後方へと下がった。

「何やつてるんですか、トビイさん。駄目ですよ、私情で斬りかかっては！」

クラフトはトビイが嫉妬で斬りかかったと思つたのだろう、確かにそうなのだが唾を吐き捨てるトビイ。嫉妬、という単語に些か苛立ちを覚えたが、今はそんなことどうでも良い。

クラフトを無視して、目の前のハイへと怒鳴り声で叫んだ。

「貴様っ、何故アサギの前に現れたっ！ ハイ・ラウ・シュリッブ！」

ハイ・ラウ・シュリッブ。

クラフトがトビイの放つた名前を再度繰り返し、打ちのめされてハイを見やる。驚愕の瞳、愕然としたまま立ち尽くし、それでも頭の何処かで否定の声が聞こえた。

数分前の出会い、僅かな接触、それでも。哀愁溢れる、何処か高

貴な雰囲気の男が……魔王。

言葉を失ってクラフトはただ立ち尽くしていた、混乱で整理がつかないのだ。魔王のはずがない、と言い切る自分が居る。

「ハイ!? この男がハイ!?!」

当然トビイの大声に、一行が続々と集まってくる。武器を構え、怒気を含んだ様子なのはムーンとサマルトの両名だ。仲間を、両親を、家臣を、民を殺されている。

そう、魔王ハイが手にかけていたハンニバルの住人の生き残りである2人。

憎悪を含み半分泣きながら叫び、杖を振りかざしているのはムーンだった。いつもの冷静な様子などない、怒涛の勢いで喚き散らしながら詠唱を開始。

ムーンもサマルトも、ハイの顔など知らなかった、名前しか知らなかった。

2星ハンニバルを絶望に陥れた張本人の、魔王ハイを正面に2人は冷静さを失いトビイの隣に立ちはだかる。

包囲され、魔王であると暴露され、今にも攻撃を受けそうなその状態。舌打ちするハイはようやく自身を取り戻した、遅かったが間に合った。

この状態で話し合いの場に持ち込めるだろうかと問われれば、否。説得など不可能である、よもや自分が魔王だと知り得る人物がこの場に居様とは思わなかった。

何者だ、あの若造。忌々しそうにハイはトビイを睨みつける、が、負けじとトビイも憤慨した様子でこちらを見据えている。

ハイの瞳から、温和な光が消えていく。長い黒髪が風になびき、その瞳は冷淡な光を灯し、かつての『魔王ハイ』を彷彿とさせた。

右腕にはもがくアサギを抱え、どう見ても姫を掻っ攫う悪者の凶だ。

「アサギを離して貰おうか」

そのハイの威圧感を気迫で押し返し、トビイが半ば怒鳴り気味に

叫んだ。鋭くハイを睨みつけながら剣を構え、徐々に距離を縮めていく。

「……アサギは。私が貰い受ける」

空気が凍りつくようなハイの声、無機質な瞳には何も写らず、ただ、絶対的な言葉を呟いた。

弾かれたようにトビイが斬りかかった、追ってムーンとサマルトが同時に呪文を発動する。跳躍して勢いに任せて剣を振り下ろす、が、ハイの防御壁の前に弾かれ空中で回転しながらトビイは地面に舞い戻った。額に汗が浮かぶ、想像以上に強いと判断出来てしまい思わず右手が引き攣った。

その頭上を2人の呪文が通り過ぎる、火炎の呪文と真空の呪文である、共鳴し合って熱風となるのだが。ハイの左腕が振り下ろされると同時に魔法の防御壁が出現し、難なく魔法は掻き消された。

その隙を狙ってトビイが再度斬りかかるも、瞬時に防御壁を繰り出し紙一重で受け流す。

間合いを取って一呼吸、再度突進してくるトビイへと左手を突き出し、ハイは別の呪文を唱えた。

「廻る宵闇、覆い隠すは冷たき霧。視界は永久に消え行く定め、光の入る隙もなく。幻影残虚」

無造作に繰り出した呪文、辺りに霧が立ち込め、視界が遮られる。「しまっ！」

トビイの声も虚しく、迂闊に切りかかる事が出来ない状態、逸る気持ちも精神統一の邪魔をする。

「アサギ、何処だ、アサギっ」

アサギの声が、聞こえない。

濃い霧は、自身の位置すら把握できず。

「アサギ、アサギ！」

トビイの必死の声だけが、霧の中で木霊した。

分岐点、最終的に一つの路へと願いつつ

動こうにも動けない、どうしようもない絶望感に皆支配された。必死に各々気配を探り、アサギを捜すが濃い霧は晴れる事なく。

焦燥感に駆り立てられ、トビイは唇を噛んだ、血が噴出してきたがお構いなしに神経を研ぎ澄ませる。まさか魔王自ら襲撃してくるとは流石のトビイも、思わなかった。

実際、襲撃ではないのだが今の状況だと勇者が拉致された以外の何者でもない。

「アサギ、返事をしろ、アサギッ！」

アサギの声が聞こえない。

そもそも、何故いきなり魔王が現れて勇者を攫っていったのか？数日前聞かされた、シポラでの『破壊の姫君』の噂の件もあり途方にくれる一行。

実際、アサギに一目惚れしたハイの身勝手な行動なわけだが、誰もそんなこと思わなかった。当然だ。

「くそっ」

苛立ちながらトビイは地面を蹴り上げる、記憶が正しければトビイの知る魔王ハイは、冷淡で残虐な男。相手の目的が解らない以上不安で仕方がない。

実際、ハイがアサギに危害を加えることはないのだが、誰もそんな事思っまい。

自分の剣を握り締め、何も出来ない無力さに嘲り笑うトビイ。我武者羅に剣を振り回した、が若干霧が晴れたくらいか。せめて呪文の一つでも扱う事が出来れば、何かしら対抗できただろうか、と自己嫌悪。

やがて霧が晴れ、辺りを見回すことが出来るようになった。地面に倒れ込んでいる者、泣いている者、呆然と立ち尽くしている者…様々だが気持ちは皆一緒だ。

”勇者が攫われた、魔王に攫われた、どうすれば”

当然、晴れた霧の中にハイとアサギの姿はなかった。100%望みはなかった、が、その状況に固唾を飲んで深い溜息。現実を突きつけられた。

絶望しか、残らない。

静まり返った不気味な森の中、遣り切れない悔しさが人一倍のトビイは木を殴りつける。木の葉がさわさわ、と舞い落ちてきた。

誰もトビイに声をかけることが出来ない、アサギが攫われたのは誰の責任でもなかった。が、トビイは一人で抱え込んでしまう。用意周到に奇襲をかけるべきだった、と。先手を打てたはずなのに、と。あの時何度も踏み込むべきだった、と。

「もう……離さないとあの時、誓ったのに」

何度も激しく、木を殴りつける。自身の拳が痛んでも、薄っすらと手袋から血が滲んでも、トビイはやめようとしなかった。

荒い呼吸が森に響き渡り、ようやくトビイは我に返る。徐に振り返り、口を嚙んだままある一定の方向へ無言で進んだ。やるべきことを、思い出したのだ。こんな木に苛立ちをぶつけている場合ではない。

その瞳は、先程のハイと同じ様な冷酷さの光を放つ。憎悪の瞳だ、誰も声がかげられない。

トビイの身体から放たれる殺気が、特に魔力の高い者達に容赦なく注がれる。窒息しそうなほど息苦しいその空気に、吐き気を覚えて俯く者数名。

「どうするつもりだ、トビイ」

ライアンが一直線に歩くトビイに声をかけた、眼下に立ち塞がる。この一行の長として、身勝手な行動は赦さないともいうべきか。途中で旅に加わったトビイとはいえ、ライアンは非常に気に入っている。

「アサギを追う。別行動だ」

そう言うと、ハイが乗ってきた馬へと飛び乗り、軽く馬の背を撫

でる。「まだ、走れるな？」と馬に確認したトビイは、手綱を取った。

「待つて、トビイさん！ どうしてあなたは魔王ハイの姿を知っていたのですか！？ 私達ですら見たこともなかったのに」

弾かれたようにムーンが叫んだ、冷静さを取り戻しようやく気がついた事は”トビイが何故ハイを知っているか”。

知り得る筈がないのだが、ハイ本人で間違いなかった為ムーンは疑念を抱えトビイを見つめている。

トビイは無表情のままムーンを馬上から一瞥し、一言。

「オレが魔界育ちだから」

「えー！？」

そのまま、ジェノヴァへと引き返すため、馬を走らせる。

「トビイちゃん、待ちなさいっ」

マダーニの声も虚しく、恐ろしい速度で疾走するトビイ。

啞然とする一行、今度はアーサーが一人奇妙な行動を取り始めた。地に何やら描き、薬草やら小瓶やらを丁寧に並べているではないか、何をしようというのか。

アリナがアーサーを睨みつけ、近寄る。気付いたもののアーサーは視線はアリナへ向けず、淡々と答え始めた。質問される前に、自分で片付けたらしい。

「私は一度、チュザールへと戻らせて頂きます」

呆然とアーサーを奇怪な生き物でも見るかのような、侮蔑の視線で見つめる皆。が、気にせずアーサーは作業を続けている。

いい加減過ぎやしないだろうか、勇者は他にもいるのだから一刻も早く作戦会議が必要だろう。

まさか気に入っているアサギが拉致され、やる気をなくしたのだろうか。だとするならば、賢者とは言いがたい、とアリナはあからさまに顔を引き攣らせている。

「そういうわけで、私は気にせず先へお進み下さい」

「あんたさ、どうやって戻るわけ？ それに、帰ってこられるの？」

マダーニに背中を叩かれ、アーサーは悪びれた様子もなく笑顔で答える。

「アサギを救出する策でも考えてきますよ、大事な勇者ですからね」
いや、一緒にいてこっちで考えればっ！　と言葉が出掛かったが
アーサーは言い終えるなり描き終えた魔法陣の中央に足を踏み入れ、
何やら唱え始めた。

徐々に透けていくアーサーの身体、転移魔法である。

数分後に完璧にアーサーの身体は、陣の中から忽然と姿を消した。
残された者に、風が吹き抜けていく。

……なんていい加減な賢者だっ……！

皆同じ事を思っていたが口には出さなかった、ぐつと言葉を飲み
込むしかない。何しろ本人が消えたのだ、言っても仕方がない。お
まけに、マダーニの質問に答えていない。

「どうしようか、これから」

乾いた笑い声を出すマダーニ、何時までもこの場で立ち往生して
いるわけにもいかない、行動を起こさねば。だが、想定外過ぎで何
をしたら良いのやら完全に頭は錯乱中である。

「計画が丸潰れだ。……そうだな、ここからは別れて行動しよう」
苦笑いで返答したライアンの考えはこうだ。皆、注目する。

ピョートルへ予定通りアサギの武器を取りに行くのは、ライアン・
マダーニ・ミノル・トモハルの四人。

アリナ・クラフト・サマルト・ダイキ・ミシアはカナリア大陸へ
と渡り、例のシポラ城の情報を探る。

そしてブジャタ・ムーン・ユキ・ケンイチの四人がジェノヴァへ
と舞い戻り、世界の情報収集及び訓練に励む。

最終的にライアン達がアサギの武器を手にした時点で集合、そこ
から魔界へと向かう手筈だ。対魔王戦において、アサギの武器は必
要不可欠だろう、トモハルと対の武器の筈だった。

また、シポラ城の動きも気になるので同時に調査を開始、どの道
放っては置けない問題である。マダーニとミシアにも関わってくる

事件だ、蔑ろには出来ないし、何処でアサギと繋がるかも判らない。そしてジェノヴァに滞在チームを作ったのは、あの場が最も情報流出に富んでおり、先日も魔族に遭遇した地である。何かしら起こりそうな予感がしたからだった。

また、戦士育成に援助している道場も数多くあり、未熟な勇者の教育には持つてこいでもある。そこには歳を召したブジャタが筆頭となつて、体力に負担のかからない様に配慮。

各チームごとに、必ずクレオの住人が入っていることを前提に、このようなチーム分けになった。

「では、また会おう。それまで」

魔王ハイの乱入により、一行は別々の路を歩む事になった。勇者達も離れ離れ、ダイキなど一人きりである。不安を隠せずに俯く勇者達、けれどもやらねばならない。

アサギが攫われた。友達のアサギが、攫われてしまったから。愛する人であり、親友であり、羨望の相手であり、友達であり、可愛い妹分であり、そして希望の光であり。

「俺、もうやだ……帰りたい」

ミノルが呆然と口に出してしまったその言葉に、勇者達は唇を噛み締めた。

それは、言うてはならない言葉だ。ダムが決壊したかのごとく、ユキの頬を涙が流れ落ちる。

「トモハル、ミノルを頼んだ」

ダイキが小声でトモハルに囁き、肩を軽く叩く。

「ああ、判ってる。あいつはどうしようもなく短期で弱音吐きで、人に迷惑をかけることに関しては天才的な奴だからな。判ってるよ」「少しはフォローしてやれよ……」

平素ならばここで2人で爆笑するのだろうが、生憎今はそんな気分になれるわけもなく。

苦笑いしか、出来なかった。

「待って、待って！ その間、アサギちゃんは大丈夫なんですか！

？ 先に救出に皆で向かうのが先決なんじゃないですか！？」

アサギの親友ユキは、身の上を案じ涙ながらに訴える。ライアンに詰め寄り、物凄い剣幕で服を掴むと大きく揺さ振った。後半は何を言っているのか判らない程、聞き取れない声は泣いて咽て悲鳴に近く。

そんなユキの様子に、反論する事もなくただ聞き入るライアン。やがてユキが力を消耗しすぎたのか、その場にぺたり、と座り込み涙を拭いながら嘔吐を繰り返す。

「帰りたい……」

ユキもミノルと同じ様に呟く、弾かれたように硬直する勇者達。だが、ケンイチが詰め寄ってユキの手首を強引に掴むと立たせた。泣いているユキを、じっと見つめた。人一倍世話焼きのケンイチだ、慰めでもするのかと思えば。

平手打ち。

森に小気味良いパン、という音が響き渡り、勇者達は啞然とケンイチを見た。

驚いて瞳を丸くしたユキだが、叩かれた左の頬にそつと左手を乗せて呆然とケンイチを眺める。

が、反射的に右手でケンイチの頬を思い切りひっぱたいた。バシッ、先程よりも痛そうな音だ、軽くよるめいたケンイチ。

とても反撃するような子に見えなかったユキだが、余程頭に血が上ったらしい、憤慨している。

けれども、反かをきつたのはケンイチだった。それもまた、意外である。

「ライアンさんの気持ちも汲み取れ！ アサギのことだって、みんなちゃんと分かってる、今すぐにも助けに行きたいんだ。でも、出来ない。なら、少しでも早く助けに行けるように、今出来る事をしなきゃ。さっきの魔王を見ただろ？ とても敵う相手じゃない。なら、対等に戦えるように強くなるう。アサギならきっと大丈夫だ、だってアサギだよ？ ユキの親友だろ？ みんなで揃って地球に帰

るんだろ？ ……さ、行こうよ。話はそれからだ」

人に説教される事なかった、頬を叩かれた記憶もなかった。ユキは無表情でケンイチを睨みつけるとライアンに振り返り、深くお辞儀をする。

「ごめんなさい、私、身勝手でした。何もライアンさんは悪くないのに」

「気にするな、ユキがアサギを大事に思っているってことだよ。優しい子だ、そして、偉い子だ」

ライアンが軽く微笑んでユキの頭に手を乗せる、照れたようにユキは笑った。

次いでケンイチに向き直ると鼻で笑うユキ、腕を組んで見下すように言葉を放つ。

「そうね、私が悪かったわ。でもね、女の子を叩くなんて非常識よ。アサギちゃんが居たら絶対怒られてる。さ、早く行きましょ。それが私達に出来る事なんだから」

ケンイチに手を伸ばして笑いかけるユキに、はにかみながら返答。「ユキなら、平手打ちを返してくると思ったんだ。僕も弱音を吐きそうだったから気合を入れて欲しくて、つい。ごめんね、痛かったね」

「じゃあ私じゃなくて、ミノル君にしてよ」

「ミノルが叩き返してきたら、痛いだよ」

「私のも痛かったんじゃない？」

「まあ。……思いのほか」

思いの外、というか、実際頬が赤いのはケンイチである。よほどユキの平手が強力だったらしい。

悪戯っぽく笑って、ユキは伸びてきたケンイチの手を取り、握手。完全に立ち直り、自身のすべき事が見つかったユキに安堵し、ライアンとマダーニは微笑みあう。

流石この辺りは勇者だ、自覚があるのだろう。普通の子供なら気落ちして泣いたままだろうに。肝が据わっているユキに、ただ感心

する。

「よし、では！」 離別に、多くの光が待ち受けることを。再会に、多くの光が満ちる事を”」

武器を掲げて皆、笑顔で、それでも瞳は鋭く。

絶望は、まだ早い。希望を胸に抱いて、離れていく。それぞれの、路へと別れていく。

しかし現時点で最も弱かったのはユキではない、ミノルだった。

トモハルの後ろをついて歩くミノル、俯いたまま暗い表情。泣きたい、喚きたい、投げ出したい、夢だと思いたい。

家に帰ってゲームをして、おやつを食べて眠って、サッカーをして。

”アサギがない”

アサギという存在が不在なだけで、ここまで心が気落ちするとは思わなかったミノルは自嘲気味に笑った。

「アサギを返してくれ」

小声で呟く、何度も呟く。涙を拭う、しゃっくりを上げる。

トモハルが不安げにミノルを見つめるが、声をかけるのを我慢し、拳を硬く握り締めた。

頑張れ、ミノル。

声をかけても気休めにしかならない、ならば見守り続けよう。トモハルはそう心に近い、せめてミノルの代わりで自分が動き回れるように決意を固めた。

それは、7月6日の事だった。

相容れぬ運命なのか、魔王と勇者

仲間達から遠ざかり、気配が感じられなくなったのを確認したハイは、一息つく。

「少し待っていてくれないか？　今、私の部屋への転送陣を創るから」

ハイは上機嫌でアサギを手頃な岩の上に下ろし、そのまま座らせると頭を躊躇いがちに撫で。

懐から取り出した小瓶やら妙な薬草やらを、地面に設置し始めた。小瓶の粘り気のある液体で地面に円を描き、軽く呪文を唱える。

アサギは一人、岩の上で咳き込んでいた。というのも、先程から窒息しそうなくらい胸に押し付けられて、呼吸がままならなかった為である。酸素が脳に不足中、涙を瞳に浮かべて朦朧とする意識の中で、必死で頭を働かせていた。何がどうして、攫われた？

この人は”魔王ハイ”らしい。そうは見えないが。

……ということは一応判っているのだが、何故自分が攫われたのか検討がつかなかった。勇者を攫って何か得が？　殺せば良いのに、殺さない。では、魔王ではないのでは？

そうでないにしろ、自分を連れ去って仲間達に何やら呪文を放っていたのは、事実。

とすると、敵だろう。

そして一体ここは、何処だろう？　そう長く走ったわけではない、森の中だ。路に出る事さえ出来れば、仲間達と合流できる筈である。幸いにも、先日の戦闘が原因でトビイに、武器を常に所持しておくように、と言われていた。

故に、今こうして左の腰には剣が装着されている。

いざとなれば……戦える。

アサギは鼻歌しつつ、未だに陣を創っているハイを軽く睨みつけて、その場をゆっくりと離れていった。

「ゆ、勇者が攫われた、なんて聞いたことないよ！ 冗談じゃない、早く逃げないって」

森の中は昼間だというのに薄暗く、木漏れ日を頼りに走るしかない。地面には剥き出しになった木の根が多数はびこっており、何度もそれに躓いた。

その都度アサギは焦って唇を噛み締める、全身から嫌な汗が流れ落ちていく。

だが、当然一人で魔王ハイ（仮）に戦いを挑むほど、アサギは無謀ではないのだ。自身の力量を弁えている。

「早く、合流しなきゃ」

勝ち目などあるわけがない、相手は魔王（仮）だ。

口の中で鉄分の味がする、乾いた口内が、妙な咳を吐き出させる、涙が軽く瞳に滲む。それでも、懸命に走り続ける。

合流できれば戦える、一人では無理でも仲間がいれば、戦える。

大好きな仲間の笑顔を思い浮かべると、アサギは棒のようになった足で、跳ね上がる心臓を堪えて、森の中を駆け巡っていた。

暫くして、啞然とアサギが居た筈の場所を見つめるハイ。

夢中で転送陣を創っていた為、逃げ出した事に全く気づかなかつた。思わず手にしていた小瓶を手からするり、と落としてしまう。

「そ、そんな」

愕然として立ち尽くしていたハイだが、顔面蒼白で走り始める。

あのような連れ去り方をしたので、怯えているのだろう、誤解されているのだろう。

「ま、待ってくれ、逃げないでくれ！ 何もしないから」

台詞自体が怪しい気もするが、ハイは必死だ。

アサギとて、ハイが追って来ていることなど百も承知である。振り返るのはただの時間ロス、そして恐怖を煽るだけの行為。アサギの荒い呼吸が森林に響き渡った、苦しいが走るのは止めない。

と、目の前に何かが飛び出してきた。

危つくそれを踏み潰しそうになり、アサギは慌てて足を止めたがその拍子で後方へ転倒する。

お尻を擦りながら起き上がって見てみれば、綺麗な純白のウサギが一羽、目の前で不思議そうにこちらを見ているではないか。

逃げないそのウサギ、あまりの可愛らしさにハイが追ってきているという事態だが、思わず手を差し伸べる。ふわふわの毛、ルビーのような瞳、胸がきゅーん、となる可愛らしさだ。

が、その宝石のような瞳が鋭く光ったかと思えば、差し伸べた右手に激痛が走る。ウサギがその鋭い歯を、アサギの甲に突き立てたのだ。

「あう、怖がらなくてもいいんだよ」

宥める様にそう言っ、左手で撫でようとした時。今度は左手に激痛が走る、深く噛み付いたらしく、思わずアサギは左手を振ってウサギを跳ね飛ばした。

白い身体がぼん、と弾んで地に落ちる、体勢を立て直したウサギは、喉の奥で不気味な低い唸り声を上げながら、アサギへと近寄った。

獲物を狙う、野生の獣の瞳だ。剣を引き抜こうと、思った。

が、アサギにはそれがどうしても出来ずに、狼狽する。

そうしている間にもウサギはグルグルルル、と唸り声を上げてそのまま一気に駆けてくるとアサギの左腕に鋭利な爪と歯を突き立てた。確実に捕らえられたアサギの左腕、激痛に耐え切れず、アサギは叫び声を上げる。声を出せば、居場所をハイに知られる恐れがあった、故に堪えてきたのだが、限界だった。

それは、ウサギではない。ウサギによく似た、魔物だったのである。

悲痛なアサギの叫び声は、当然ハイの耳に届いた。

「アサギ!？」

嫌な予感がするっ、ハイは聞こえた悲鳴を頼りに死に物狂いで駆け出した。

「私が目を離した際に」

自分を責めるハイ、明らかに非常事態である。微かに鼻につく血液の香り、血相変えて懸命に走った。

やがて瞳に飛び込んだのは、血を流しているアサギと、その周りに飛び交う白の物体。

瞬時に敵だと悟ったハイは、凄まじい形相で魔物を睨みつけると込み上げてきた怒りに身体を震わし、右手から衝撃波を放った。

流石魔王だ、何者も寄せ付けない邪悪なオーラを纏い、アサギの後方へと立つ。

魔物が直撃を受け、弱々しくキュウン、と鳴くとその勢いで地面へと叩きつけられる。

唖然と、アサギは魔物を見つめ。

「アサギを、傷つけたな！」

地面でキュウキュウと鳴き続ける魔物、アサギは慌てて駆け寄ると助け起こそうとする。そう、アサギは未だそれが魔物だと知らないのだ、知っていても庇うかもしれないが。

が、大きく跳ね上がった魔物は、アサギの腕を擦り抜けて数メートル先に吹き飛ばされた。

何時の間にやらハイがアサギの隣に立っていた、右手から立ち上る煙で、何かしらの呪文を放ったのだということが解る。

「あれは危険だ、今始末する」

そう言い放つとハイは再び手を魔物へと向け、詠唱を始めた。アサギは、思わず剣を勢いよく引き抜いた。魔物を護ろうとしたのだ、ハイへと斬りかかる。

驚いたのはハイだった、何故攻撃されたのかが理解できない。剣を紙一重で避けると、両腕をアサギへと向って広げて必死に叫ぶ。

「ま、待ってくれ。何故だ、何故私に斬りかかる！？ 私はそなたを……アサギを傷つける気など全くない。寧ろ護りたい！」

「あなたが、あのウサギさんを攻撃したからですっ。それに、あなたは敵なんでしょう！？ 魔王ハイなんでしょう！？」

「魔王ハイは間違っていない、だがアサギの敵ではないんだ！ それに、あれはウサギではなくて魔物で」

何を言っているのか理解不能、アサギはハイを睨みつけ、攻撃態勢へと入った。勝てないと十分承知していても、ウサギを護る為に戦いを挑む決意をした。重心を低く、深く息を吐きながらタイミン
グを見極める。

トビイが、剣を教えてくれた。間合いの取り方を習った。

「トビイお兄様、力を貸して」

小さく、アサギは呟く。汗が額から地面に落ち、幾つもしみをつくっていた。

しかし、どうにも吹っ切れない、何故か脳内で「この人は敵じゃないの」と言っている自分がいる。

故に、両腕を広げられては躊躇してしまふ、言葉を聞いたら信じなくなってしまう。けれども、敵でないのなら、一体なんだというのだろうか？

というか、魔王が敵ではないとするならば誰が敵なのか。

「それはウサギではない、魔物なのだ、森の魔物なのだ。私はアサギの敵ではない、どうか、どうかっ」

再度懇願するように、訴えてくるハイを見つめ、挑むような視線を送っていたアサギは思わず剣を下げかけた。

考え始めるが、答えが見つからない。頭がぼう、と霧がかかる、意識が薄れて目の前が真っ暗になっていく。

ふらり、とアサギはハイの目の前で地面に倒れこんだ。

「あいつの毒か！？」

慌ててハイは駆け寄ると、アサギを丁寧に抱き起こして、傷口に回復の魔法を施し始める。

ハイのお陰で、傷口の出血は止まり、アサギの顔色も軽く笑みを浮かべて明るくなった。安堵の溜息を吐き、そつと髪を撫でる。

しかし、ハイは油断していた。

魔物はハイの強力な魔力を身体で受け止め、本来ならば死に絶え

ている筈の弱々しい魔物である。

が、身体を大きく震わせながら魔物は立ち上がった。身体が数倍に膨れ上がり、先程からは連想できないほどに変貌した。白い身体は純白から金色へと変化し、耳の長いタイガーの様だ。

その魔物の変貌等知る由もなく、懸命にアサギに治療を施していたハイ。頭上から妙な雄叫びが降り注がれ、ようやく来襲に気付く。耳に不愉快な低い唸り声を聞き、空を仰ぎ見れば木々の間から金色の物体が飛び掛ってきたのだ。

間一髪でアサギと共にそれを避ける、辺りの状況を伺い、得体の知れない魔物を見据えて簡易な魔法を詠唱した。

「廻る宵闇、覆い隠すは冷たき霧。視界は永久に消え行く定め、光の入る隙もなく。幻影残虚」

先程逃亡用を使用した、霧で辺りを覆い隠す呪文である。その隙に態勢を整え、攻撃準備を進めるハイ、傍らにアサギを優しく抱きとめて。

空気が揺らぎ、唸り声と共に幾つかの液体が飛んで来た、妙な音に視線を地面に落とすと、煙を上げて石が溶けている。

塩酸か？

地面から視線を外し、僅かな空気の振動を読む、飛び交う生命の反応を捕らえ、ハイは迷わず呪文を発動した。溜め込んでいた魔力を、一気に放出する。

「我に集いし、異界の死霊達よ、そなたらに血肉を与えよう。目先の生命、喰い散らかせ！」

躊躇せずに叩き込んだ呪文、死霊達が一丸となってハイの指し示した方向へ突進していく。

断末魔が聞こえる、魔物が死霊に喰われているのだろう。ハイは憮然とそれを聴きながらアサギの傷の具合を見つめていた、死にいく魔物に興味はない。

やがて霧が晴れ、死霊に喰われた成れの果ての魔物を見て、ハイは低く呻く。

何故か巨大な邪悪な魔力を死骸から感知し、軽く頭を押さえた。後程ゆっくり調査してやろうと、その姿を脳内に焼き付けて、気を失ったアサギを優しく抱きながら陣へと戻っていった。

躊躇してから、陣へと進み、深い溜息と共に詠唱を始める。

「すまないな……」

腕の中に居るアサギは、何処となくしかめっ面だった。嫌がっているのだろうか？

本当に魔界へ連れて行っても良いのか、不安で仕方がないハイ、それでも。

唇を噛締め、決断する。今更後には引けない、決めたのだ。

「すまないな……どうしても、どうしても」

一緒に居たいと願う。魔王と勇者でも、共に居たいと思う。

二人の身体が徐々に透けていく、完全に姿が消えても、陣の中では青白い光が揺らめいていた。

やがてそれも消えゆき、静寂に包まれる森林。

艶色の乱花くマビル・ルツカ・シーザー

魔界イヴァンの森林にて、一人の少女がくすくす、と小さくだが愉快そうに笑った。

宙に軽く浮かんで、髪をかき上げ笑う。

妖艶で悩ましい声、すらりとした細長い手足、形の良い胸、くびれた腰、そして魅力的な顔立ち。漆黒の髪に、深紅の薔薇の様な唇、少しきつめのブラックオパールのような神秘的な光を放つ瞳。

全てが魅惑的。

「おねーちゃん？ おねーちゃんだよね」

足元に、魔族の男が一人転がっていた。

息がない、死んでいるようだ。その少女が何かしら呪文を唱え、炎を繰り出し死体を焼却する。

瞬時焼け焦げた死体を一瞥すると、森林の奥へと視線を移した。誰かがこちらに向っているようだ、心当たりのある気配に薄っすらと笑みを零す。

やがて、予想通りの人物が姿を現した。

「マビル！」

「ご苦労様、おにーちゃん」

全速力で駆けて来たのだろう、息が上がっている。少女・マビルの目の前で立ち止まると肩を大きく上下に揺らして、呼吸を整えた。深呼吸を繰り返す、じつとりと浮かぶ汗を拭う。マビルはそんな兄を見ながら、皮肉めいて笑った。

黄緑色の肩ほどまでの髪に、新緑を思わせる瞳、マビルとは似ても似つかない風貌の兄である。

兄の呼吸が整ってきたところで、マビルは声をかけた。

「おねーちゃんが来たんでしょ？ 判ったよ。でもさ、弱弱しくない？ ホントに合ってる？ ホントにあたしのおねーちゃん？ 次の魔王で合ってる？」

マビルの言葉を聞くなり、苦笑いをした兄。名前をアイセル、と
いった。頭をかきながら、ようやく落ち着いた呼吸でぎこちなく返
答を始める。

「オレもまだお会いしていないが、間違いないだろう。現に非力な
魔力であっても、オレもお前も気づいたんだ。間違いないだろうな」
「名前は？」

「だから、今到着したばかりだろう。オレがこれから調べるから、
お前は今まで通り大人しくしているんだぞ？」

「つまらないね」

徐々に険しくなっていくマビルの表情に、内心アイセルは冷や汗
ものだった。

魔力だけでいえば、格段にアイセルよりもマビルのほうが上であ
る、暴れでもしたら手がつけられない。忌々しそうに視線を地面に
落としたマビル、燃え尽きた元死体の肋骨が、微かに原型を留めて
いたから蹴り上げた。

白い粉がぶわ、っと空気に舞ったので、怪訝に眉を顰めて口を閉
じる。

啞然とその様子を見つめていたアイセルだが、我に返るとマビル
の肩に手を置いて揺さ振った。

「マビル、これは何だ？　というか、ちょっと待て、お前……」

辺りを見回して絶句、死体が至る所に転がっていた。一心不乱で
駆けてきて気付かなかったのだ。結構な数である、アイセルは血の
気が引いた。

特に悪びれた様子もなく、寧ろ侮蔑の視線を死体に投げかけるマ
ビル。

「遊んでたら、みんな壊れちゃったの。この子はさ、腕がとれちゃ
った。あの子は眼が綺麗だったから、取り出そうとして引つ張った
ら死んじゃったの。で、あれは……なんだったかな、ああ。あたし
に贈り物くれるっていうから喜んだの。綺麗な真っ赤なお花だった
んだけどね、数日したら汚い茶色の変な物体に変わっててさ。『君

のように綺麗だから』って言うてくれたのに、そんなんになったでしょ。頭にきて、殴ったらお腹に穴が空いて死んだの。あとは、覚えてない」

何体もある死体、それはどれもこれも新しいが数体はすでに腐り始めており、独特の死臭を放っている。故に先程からマビルは魔法で焼却していたのだ、臭いに耐えられないから。

「……殺し過ぎだ」

「殺したくて殺してるわけじゃないくて、遊んでたら死んでるの！あたしのせーじゃないっ」

微かに怒気を含んだアイセルの声、そして哀れむように見つめてくる視線、マビルは舌打ちすると右手に魔力を集中させる。

アイセルのその様子が勘に触ったらしく、沸々と怒りが込み上げてきた。それは、思うように上手く事が運べずに、我武者羅に暴力を振るう子供のように。

「おにーちゃん、うっさいっ！」

「マビル、お前はっ」

マビルが呪文を発動する一瞬の隙を突いて、アイセルは後方に回り込むと首筋に手刀を喰らわせた。

一瞬引き攣った身体、次の瞬間マビルは意識を失い倒れ込む。その細い身体を優しく抱きとめ、そっと地面へ寝かせるアイセル。

「今は未だ、お前に動かれては困るんだ。全ては魔界の、魔族の未来の為に。次期が来たら必ず逢わせてやるから……少し待っててくれ」

耳元でそう告げる。意識がない為聞こえる筈もないのだが、それでも言わずにいらなかったのだ。

頭から足先まで、マビルを見つめる。外見だけならば、他に引けを取らない美貌の持ち主だ、性格に問題があるが。非常に麗しい容姿なのは間違いない。若い魔族が惹かれるのも当然だろう、殺される運命にあるようだ。

「一刻も早く、お会いしなければ」

アイセルは城の方角を仰ぎ見た、眩しい太陽の光を遮るように右手で瞳を覆い隠しながら。

先程、待ち侘びた気配を持つ人物が、あの城に現れたのだ。同時にアイセルは、森林に佇むマビルのもとへと血相変えて走っていた。

「どうか、使命を全う出来ます様に」

瞳を閉じてアイセルは祈りを捧げる、心地良い風が吹き抜けていく。

数分微動だしなかったアイセルは、ようやくゆっくりと重たい瞼を開いた。目の前に横たわっているマビルに、そっと跪いて頭を撫でる。

そのマビルの姿は……勇者アサギと瓜二つであった。

雰囲気は異なっているのだが、知らない人が見たら間違えるほどに、二人が揃っているならば確実に双子だと間違えられる程に。

温顔のアイセルは、再度マビルの頭を撫でた、子供をあやす様に撫でた。

そんなアイセルの様子など露知らず、深い眠りの中、マビルは声を聞いていた。懐かしい声だった、聞き覚えのある声だ。遠い昔、大好きな声だった筈だが……けれども、思い出せない。

夢か現か幻か。

マビルは手を伸ばした、懐かしい”それ”に手を伸ばした。

『待ってて、必ずソコから出してあげるから』

声が聞こえた、マビルは安堵の笑みを浮かべると、再度深い眠りに落ちていく。

その声は、優しく暖かく、母のようで。マビルは薄っすらと涙を浮かべていた。

「殺しすぎだ、マビル」

一頻り頭を撫でていたアイセルだが、唇を噛み締めつつ立ち上がると死体へ目を移した。瞳から微かに零れたマビルの涙など、知らず。

生憎アイセルは、火炎の呪文など覚えていない。故に死体を引き摺って同じ箇所へ運んでから、枯れ木を拾い集めて器用に火を起す。と、それで焼却にあたった。

魔法と違って火力が当然弱く、なかなか焼け焦げていかない死体。数えてみようかと思っただが、気が滅入るだけなので止めておく。

重苦しい空気だった、視線をマビルへと移すと、安らかな笑顔で眠りについていたので胸を撫で下ろす。とても死体の中で暮らしているとは思えない、確かに殺したくて殺しているわけではないのだろう……。加減を知らないのだろう。命の重さを理解できていないのだろう。

アイセルは、肩を竦めて目頭を押さえた。

「……そろそろ、世間の事を教えてやらないといけないか」

普段快活なマビル、時折残忍な様子を窺わせるのは善と悪の区別が出来ていない為だ。両親とて物心つく前に亡くなっている、以後アイセル一人で育ててきたのだが、温順な娘には育たなかった。

それでも大事で可愛い妹だ。

温情主義の娘になれば、と極力仕込みたかったのだが、何故か捻じ曲がってしまった。

「オレの育て方で改悪してしまったのなら……マビルには申し訳ないことをしたな」

燃える死体を見つめながら、アイセルは自嘲気味に笑う。煙が立ち上っていく、真つ青な空へと消えていく。

魔界イヴァン

ハイは、瞳を開く。見慣れた風景が、広がっていた。

「さて、到着したぞ。先程の怪我は大丈夫か？」

腕の中のアサギを不安そうに見つめ、控え目に声をかけた。虚ろに聞きながら、アサギは目を凝らして状況を探る。一瞬意識が飛んだが、思い出してきた。

薄暗い部屋、床には何やら得体の知れない文字で陣が描かれている、それ以外は何もない。強いて言うならば蠟燭が四本、壁に設置されており影を揺らめかせている。

様子を通り確認すると、アサギは軽く頷いてハイを見上げた。そんな様子にハイは穏健な笑みを浮かべ、満足そうにアサギの髪を撫でる。

アサギが身動きしたので、丁寧に地面へと下ろすと手を引いてドアへと向った。その手はとても暖かく心地良く、ハイを安堵させる。同時にアサギもその温もりに、僅かながら緊張を解いた。

闇に包まれ、アサギの瞳では映す事が出来なかったそのドアを押して、飛び出した先は。

眩しい光が瞳を襲う、激しい痛みを感じて顔を手で覆い隠した。

先程とは、別世界の場所だった。

「ど、どうした、傷が痛むのか!？」

顔面蒼白、アサギを揺さ振るとハイは心配そうに覗き込む。ハイはこの眩しさに慣れていているようだ、何も感じなかったのでアサギが何故手で顔を覆い隠したのか、どうやら真剣に解らないらしく。

数分後、恐る恐る顔から手を外したアサギは、自分を覗き込んでいたハイと視線を合わせて軽く首を横に振る。瞳への刺激で涙が瞳に浮かんでおり、思わずその艶っぽい表情に胸を高鳴らせたハイ、お陰様でかける言葉を一瞬忘れてしまっていた。

戸惑いがちに咳を一つ、視線を照れながら逸らして言葉を紡ぐ。

「今、アサギの部屋へと招待しよう。何か足りないものがあれば直
様言うように。何でも揃えてやるからな」

足取り軽く、ハイは別のドアへとアサギの手を引き進んだ。

ようやく明るさに慣れた瞳で部屋をぐるり、と見渡したアサギ、
窓から入り込んだ優しい光が部屋に飾っている観葉植物達を照らし
ている。

先程の闇色の部屋とは、全く持つて対照的な部屋であった。窓か
ら不意に見えた外の景色、森林が果てなく続き、河が流れ、雄大な
自然の恩恵を受けている。その光景を瞳に映した瞬間、思わずアサ
ギは空いた手でハイの衣服を思い切り握り締めていた。

興奮気味に、振り向いたハイに語りかける。

「あ、あの！　ここは一体何処ですか？」

「ここ？　私の自室だ。結構気に入っているのだが……どうした、
気に入らないか？」

余情溢れるその声に、ハイは思わず何事かと不安そうに語る。

慌ててアサギは首を振る、そうではない、逆だ。

「いえ、部屋もとても綺麗ですし素敵だと思います、が。そうでは
なくて、外です。外は一体何処ですか？」

「綺麗で素敵、か！　よかった！。整理整頓は大事だよな。アサギ
にそう言って貰えて私も嬉しいが部屋も喜んでる事だろう。外は
魔界イヴァンのカピスという地区だよ」

流暢に語りだしたハイ、驚愕の瞳でアサギは手を振り払うと、窓
へと余勢にかられて走った。

「こらこら、危ないから走るのはやめなさい。転んで怪我でもした
らどうするのかね」

後方から投げかけられる言葉を無視して、アサギは窓を開き、思
い切り息を吸い込む。

神秘的な雄大な森が、眼下に広がっている。遠くに煌く紺碧の湖
も光が反射して美しい。

「うそっ！　こんな綺麗な場所が魔界！？　本当に魔界イヴァンで

すか!？」

動揺と懐疑心の籠もった声、振り返るとハイを軽く睨みつけた。優しく微笑みながらハイは近寄ると、難なくアサギを抱き上げて窓から外を見下ろす。

「魔界だ。驚くのも無理はあるまい、私もここへ訪れた当初は面食らったものだ。大概闇に包まれた陰気臭い場所だろう? 私の星もやたら空気がよどんでいたし、リュウが居た場所も暗雲立ち込めているような場所であったし。だが、ここは自然に囲まれた雄大な場所だよ。とても気に入っているんだ」

「……自然が好きなんですか!？」

「え? ああ、そうだが」

じい、とハイを見上げて挑むような視線を突きつけるアサギに、たじろいで頬を赤らめる。

ハイの目の前に右の人差し指を一本近づけて、一言。何事かと、頭にクエスチョンマークを浮かべるハイ。

「あなた、ハイって魔王じゃないんでしょう!?! 騙されませんか。あなたは誰? ここは何処?」

気迫負けし、反論できずに居たハイだが、暫しの後ようやく口を開く。

「い、いや、私は魔王ハイ……と呼ばれている一応。で。ここは魔界イヴァンのカピス地区だ。間違いない」

「違うはずです! 嘘は駄目です! 私が子供だから、馬鹿にしますか!？」

「ば、馬鹿にするだなんてそんなことは」

間入れず切り返し、真剣に見つめてくるアサギに、ハイの心臓は停止寸前だった。

破裂しそうだ。

今気が付いたのだがアサギの着用している衣服が、スカートの丈が短かった。抱き上げた拍子にスカートがめくられて柔らかく白い太腿が露に、おまけに上から覗き込んでいるため胸の谷間が見えそう

だ。

あまりに美味し過ぎる光景である。

忘れようと脳裏に焼きついたその光景を振り払うように、懸命にハイは頭を振った。が、免疫のないハイにとってそれは刺激的過ぎたのだ。

視線を逸らしたくとも、本能で目で追う。哀しき性分だ。

「ごふっ」

鼻血を吹き出しつつ、グラリ、と揺れながら後方に倒れ込むハイ。
「ええ！？ ちょ、ちょっと、あのっ」

何故こんな状況に陥ったのか理解が出来ないアサギ、ハイに抱きかかえられたまま同じ様に床に倒れこむ。置き上がったてハイの両腕を引く張る、が、自分の体重の約二倍の男を引き上げられる事が出来るわけもなく。

困り果てて不意に視線を感じ、ドアへと目を向けた。

「あ、のー。助けてください、この方、鼻血を出して倒れてしまっ
たんです」

ハイの上にちょこん、と乗ったまま話しかけてみる。ゆっくりと
ドアが開き、そこから黒髪の男が姿を現した。

いわずとも魔王リユウである、ハイの気配を感じ取り部屋の外で
様子を窺いつつ笑いを懸命に押し殺して一部始終を見ていたのだ。
込み上げてくる笑いを必死で押し殺して、アサギの手前で上品にお
辞儀をした。

思わずアサギも礼をする、満足そうに深く頷くとリユウはアサギ
を軽々と持ち上げてハイの上から退かしつつ。

「ハイ、起きろー」
「ばこん！」

頬に殴りかかるリユウ、隣で啞然とアサギが目を見開いてその暴
行を見つめる。

「な、何しているんですか！？」

一瞬躊躇したが、慌てて止めに入るアサギ。お構いなしにリユウ

は、再度逆の頬に殴りかかった。

低く呻いてハイが瞳を擦りながら起き上がる。

アサギが小さく悲鳴を上げ、大きな瞳を更に開いて二人のやり取りを見つめていた。

「やあ、お目覚めかい、ハイ。おはよう、お久し振りでお帰りなさい、おめでとう」

「またわけのわからんことを、お前はつ。……はっ!? そんなことよりアサギは何処だ!？」

頬を擦りながら起き上がったハイ、傍らで心配そうに見ていたアサギを視界に入れた途端、強引に引き寄せて抱き締める。

「ああよかった、夢じゃなかった!」

ぎゅう、と押し付けられて苦しそうにもがくアサギ、露骨に溜息を吐いたリュウは、アサギとハイを引き離れた。

何をするんだ、と目くじら立てて怒鳴るハイの傍らでアサギが苦しそうに咳き込んでいる。危うく、再び窒息するところだった。原因はハイだが、全く悪びれた様子がない。

「ともかく、ハイ。鼻血を拭くのだ、鼻血を」

リュウがハンカチを差し出すと、渋々と受け取りそれで鼻血を拭き始めた。確かに鼻の下に違和感があったらしい。

そんな2人の様子を啞然と見つめていたアサギは、交互に見比べリュウへと視線を移す。リュウのほうの話が通じそうだと、判断しづらい。

「あの、私はアサギといいます。ここは何処ですか?」

微笑んでアサギの肩を軽く叩くリュウ、鼻血を拭きながらハイが「触るな!」と睨みつけるがお構いなしである。

「やあ、はじめまして、おぜうさん。私は1星ネロの魔王リュウ。ここは4星クレオの南半球に位置する魔界イヴァンの中心地、カピスに存在する魔王アレクの居城の一室、三階ハイの部屋だよ。理解して貰えたか?」

不安は募るが、確かに非常に解りやすい説明であった、アサギは

リュウに詰め寄る。信用してもいいのだろうか、いや、良いはずがない。

「嘘ですよ？ 魔界つてもっと、こう……闇に包まれて光の届かない、自然も何も存在しない世界ですよ？ 魔王ハイにしても、非常に悪い人だと聞きました、が、そうは見えませんか。ここ、何処ですか？」

怯えず、堂々と発言する伶俐そうな雰囲気のアサギに、思わず感嘆の溜息を漏らすリュウ。たった一人で魔王二人を相手に、大した度胸だと感嘆の笑みを漏らした。

愉快そうに笑い出したリュウに、些か眉を吊り上げるアサギ、真面目に言っているのだが全く聞き入れてもらえない様子に憤慨している。

「ここは間違いなくイヴァンだぐ。魔界らしくない、というのなら文句はアレクに直々にいうと良いのだぐ。私達は部屋を借りているだけなのだぐーよ」

納得できずに、目の前の2人を睨みつけるアサギ、だが突如騒がしくドアが開いたかと思うと緑色の丸っぽい物体が部屋へと侵入してきた。

思わず悲鳴を上げるアサギ、蛙が巨大化したような物体である。

「ミラボー！ 何やってるんだ、アサギを驚かせないでくれ。おお、可哀想に」

子供をあやす様にアサギを抱き込むと、背中を撫でて落ち着かせるハイ。その様子が堪えたのか、望まない冷遇にミラボーは絹の袋を一つ、リュウに手渡す。

「いや、驚かせてすまんかったー。これは我からのせめてもの祝いの品だ。宝石が入っており、よかつたらその子に」

手短にそれだけ告げると、ミラボーは再度けたたましい音を立てながら、部屋から立ち去っていった。

ハイとリュウはアサギを見つめる、ようやく我に返ったアサギは、恐る恐る2人に振り返ると。

「や、やっぱりここは……魔界イヴァンですか？」

二人は顔を見合わせると、ああ、と落ち着いた声で返答してきた。頭を抱えて乾いた笑い声を出すアサギ、勇者になって数日、魔界へ到着してしまった。おまけに、目の前には人の良さそうな魔王が二人。

急展開についていけない、そもそも魔界へ来たら成すべきことは唯一つ、魔王退治ではないのか？

それで召喚されたのではなかったのか？ しかし、この二人と戦うなどと。

混乱する思考回路、そんなアサギを他所に、いそいそと浮き足立つハイ。アサギの手を引き、ハイは部屋を出る。ついてきたリュウを一喝し、アサギの部屋へと足を向けた。

どれだけ罵声を浴びさせられても、睨まれても、リュウは気にする様子もなく後をつける。

アサギの部屋はハイの隣だ、そう遠くはない。歩きながらハイは部屋の説明を開始した、見立てをし、似合いそうなドレスばかりを何着も集めた、装飾品にも拘った。

アサギは聞きながら首を傾げるばかりである、何故に魔王が自分の為にここまでしてくれるのか、だ。

敵対している……はずだ。しかし、親切すぎるのだ、魔王達は二人の様子を窺いつつ、後方でリュウはにんまり、とほくそ笑んでいる。諧謔に富む図柄だよなあ、とか小声で呟きつつ。

「さあ、ここがアサギの部屋だ。気に入って貰えると嬉しいのだが……どうだ？」

緊張した面持ちでドアを開く、アサギの鼻に良い香りが届いた。些か上ずった声のハイは気にせず、興味に駆られて小走りにアサギは部屋に飛び込むと、歓声を上げた。

「す、すごい！」

圧巻だった、何処かのスイートルームのようだ。植物が置かれている日当たりの良い部屋で、品よく可愛らしく家具が揃えられてい

る。

「服も用意したんだ、サイズは大丈夫だと思うが、念のため後で着用して欲しい」

照れながらハイはクローゼットを開く、ずらり、と処狭しと並んだ衣服が飛び出してきた。色取り取りの美しい布地、もうアサギは啞然とするしかない。

「え、これ。みんな私のなんですか？」

地球の自室にある衣服よりも、こちらのほうが量が多そうだ。ここまで来ると訝しむしかない、一体魔王の目的とは何なのか、である。

「もちろん、好きに使ってくれ。アサギの為に用意したのだから」
流暢に言われ、疑心難儀の念に駆られるアサギ、そんな様子に気づいていないのかハイはそつと額に口付けた。この時ばかりはリュウもからかう事をやめて、そつと静かに部屋の外へと出て行く。

「上手くやるのだけ、折角この私が気を使ってあげたのだから」
自然に本音が流露された。壁に持たれて一人天井を見上げるリュウ、思わず懐旧の情に駆られる。そして悔恨の情にとらわれた、何処か遠くを見つめ続ける。

リュウは自嘲気味に鼻で笑うと、それでも、その”想い出”に浸った。もう、戻れない遠い日の風景、もう、何処にもない彼の地。

部屋を出ていったリュウには気づくことなく、ハイは優しく正面からアサギを抱き締めた。力の加減が出来たらしく、今回はアサギも苦しくなさそうである。

アサギは困惑気味に少し距離を置くように、一步後退した。流石に魔王だろうが誰だろうがいきなり抱き締められても、大人しくしてはいられない。しかし、何故か心地良い。胸が、微かに高鳴る。

暖かな温もり、安堵の溜息が何故か出てしまう陽の香り。

暫し、ハイは口を開かなかつた。何か言おうと躊躇しているわけでもなく、ただ、アサギの温もりを確かめる為に。

「えーっと……ハイ、さ、ま？」

初めてアサギが名前を呼んだ、戸惑いがちに名前を呼んだ。それが嬉しくて、思わず身体を跳ね上がらせる。人に名前を呼んでもらえることが、これほどまでに嬉しいことだなんて、誰が思うだろう。こそばゆい感覚だ、ハイは目頭が熱くなり、必死で堪えつつ口を開く。声が、震える。

「無理を言ってしまったって、すまないと思う。だが、私はアサギと共に居たいのだ。絶対にアサギを傷つけないし、何からも護り抜く。一緒に居てくれるだけで良い、それ以上は望まないから、こんな私の我儘を聞いてもらえないだろうか」

「？ えーっと、魔王と勇者が一緒にいると、良い事ありますか？」
「魔王と勇者、ではなくて。私とアサギ、と考えてみてはくれないだろうか」

「えーっと」

明らかに困惑気味のアサギ。いきなり連れてこられた魔界で共に過ごしてくれ、と言われてもはた迷惑な話である。それはハイとて、理解出来た。

「しかしまさか、『一目惚れしました、好きです、付き合ってください』とは言えない。」

「そのうち、順を追って話すから。今はその、なんだ。あー……ゆっくりしてくれ。旅の疲れもあるだろう」

「はあ」

勇者アサギは、魔王ハイの腕の中で首を傾げた。見上げれば、頬を赤く染めた魔王が微笑んでいる。

こうして。

勇者として異世界に召喚されたアサギは、何故か成り行きで魔界イヴァンで過ごす事になった。

勇者の隣に居るのは魔王ハイ、どうしても受け入れがたい事実である。優しい瞳と柔らかな声、とても魔王には思えないのだ。

勇者として、やるべきこととはなんだろう。目的は、世界を救うことで間違いないだろう。

世界を救うということ、魔王の存在を聞いた、魔王を倒せば世界に平和が訪れる……はずだった。

魔王なら、目の前に居る。世界を破滅に導き、劣悪な者”魔王”。本当にそうだろうか？

そもそも、城を破壊され、仲間を殺されたというサマルトとムーンとて、魔王ハイの姿すら知らなかった。本当にそれを行ったのはハイなのだろうか？ 何かの間違いではないのか。

目の前で自分を抱き締めているハイを見上げながら、アサギは唇を噛み締める。

とても、魔王には思えない。魔王なら、勇者を抱き締めたりはしないだろう。先程まで共に居た仲間達と同じだ、優しいし、暖かい。躊躇いがちに、アサギはそっと、ハイに重心を預けた。

「もしかして……私達は大きな間違いをしてる？」

小さく零した言葉。心に住み着いた疑問を、消すことが出来ない。解決するのには、時間がかかりそうな疑問である。

『勇者としての、私の目的は何なのですか？』

心で、誰かに問いかけてみた、その答えを、自分で見つけようと思った。悪行を働いているのは、もっと別の何かであって、魔王はひょっとしてただの偶像では？

とりあえず、今は。

「えーと、ハイ様。少しお時間を下さい、です。ちょっと混乱します」

「だろうな。疲れただろう、休むと良い」

気まずそうにハイはそっとアサギの身体を離し、部屋のドアへと向った。離れたくはないが、若い乙女は一人になりたいときもあるだろう。

「何かあつたらすぐ呼ぶんだぞ？」

「わかりました」

「夕食の時間になったら、また来る。おやすみ、アサギ」

「おやすみなさい……？」

軽く手を振って離れる二人、アサギはドアが閉じた音を聴いた後、首を傾げた。

何故、魔王と挨拶を？

混乱しつつ、更に首を傾げる。これ以上考えると知恵熱が出そうだ、アサギは一人くぐもった声を出しながらベッドに倒れ込んだ。ふらつきながら、必死で。何か支えを探して。

考えても解らない、何をすべきなのかが、解らない。ぼつり、ぼつり。声に出す。

「私は、勇者。」

魔王ハイと、リュウが近くに居る。

みんなとは、離れ離れ。

ここは、魔界。

すべきことは、何？」

『魔王を倒す事』

魔王を倒す？ 悪い人たちには見えないけれど、倒さなきゃいけないの？

『魔王を、倒す』

でも、私には。

『魔王は、まだ存在する。貴女が倒すべき相手は、別の魔王』

……？

いつしか、夢の中へと入っていたアサギは、夢で誰かと会話していた。誰かは解らないが、酷く懐かしい声だった。以前も聞いた気がする声だ、何処でだったか……。つい最近聞いた気がするのだが、思い出せない。

「アサギ、アサギ？ 大丈夫か？ 夕食だぞ」

揺さ振られて、重たい瞼をゆっくりと開く。見慣れない男の人に、高すぎる天井、何処か把握するのに時間がかかった。

気だるい身体、寝返りするように身体を横に向ける。そのまま、何度か瞬きをして柔らかなシーツをそっと掴んだ。

「大丈夫か？ 魔されていたが。」

「だい、じょうぶです」

優しく抱き起こされて、額に手を当てて考える。徐々に思い出す記憶、ここは魔界で、魔王の城の一室。どうも深い眠りに入っていたらしく、上手く考えがまとまらなかった。

うつろなアサギはハイに抱きかかえられて、城を歩き回り、庭へと到着。

紫陽花が咲き乱れる庭園に、ランプの淡い光が幻想的なディナーの場所である。

思わずアサギは歓声を上げた。その美しい光景に目が釘付けになる、見れば蛍も舞っている様だ。目が覚めた。

ハイが育てて作ったというマーマレード、苺のジャムをパンのお供に。羊の臓物を煮込んだというものやら、ローストビーフ、ポテトやニンジンの塩茹でも、パンに良く似合う。

先に来ていたリュウが、既に着席していたので慌ててアサギも行儀良く席に着いた。黙々と食事をする中、控え目にアサギが口を開く。

「魔王も普通に食事するんですね……」

「うん。お腹空くし」

「……ですよね」

目の前で食べ続ける二人の魔王を見つつ、アサギは軽く溜息を吐いた。

美味しいのだ、この料理。非常に場景も美しいのだが。

何故、魔王と食事をしているのか、疑問である。二人は全く気にする様子もなく、余程空腹だったのか、我先にと食べていた。

料理がなくなる前に、アサギも夢中で食べ始める。

「美味しいですよ、この料理」

「気に入ってもらえたか？ よかった、料理人を叱咤した甲斐があったものだ」

得体の知れない生物の料理が出てきたら、どうしようかと思って

いたのだが、その心配はなさそうだ。

食後になると、ハイがこれまたお手製の紅茶を煎れてくれたので、星空を見上げつつまったりとした時間を過ごす。

「ここは、何処だ？ ……魔界だ。」

考えるのも馬鹿らしくなってきたのだが、真面目なアサギはひたすら今の状況を考え続ける。

魔王と、お茶をしている。どうしてもてなされているのだろう、これではどこぞの姫様だ。

「あの。この紅茶もさっきのジャムも、ハイ様が作られたとか？」

「うむ。趣味で」

「しゅ、趣味ですか」

魔王の趣味に、ジャム作りとか、紅茶煎れとか。首を捻って低く唸るアサギ、気にする様子もなく、リュウが口を開く。

「私も苺が大好きでねー、自家栽培してるのだけー。今度自慢の苺畑に連れて行ってあげるのだけーよ」

「じ、自家栽培」

美味しい紅茶を飲みつつも、納得がいかない、と不貞腐れるアサギ。随分と魔王のイメージが変わってしまった、とても……倒せそうにない。

もじもじ、と脚を動かす。意を決して固唾を飲み込み口を開いた。

「あのー、聞いて良いのか分かりませんが、質問をいいでしょうかー？」

「いいぞ、いいぞ、どんどん聞いておくれ！」

控え目に言ったアサギだが、妙に乗り気なハイに、たじろぐ。咳を一つ、唇を湿らせて緊張した面持ちでアサギは面と向かって魔王と会話を決めた。

「普段は何をされているんですか？ 魔王のお仕事ってなんですか？」

「普段？」

ハイとリュウは顔を見合わせる、軽く首を傾げて日常を思い出し

ているようだが。

「朝起きて、畑に水をやりに行ったり、果物を収穫したり」

「木陰でお昼寝して、水遊びとかぐーか？」

「夜はこうして、まったりと星の鑑賞」

聞かなければ良かった、と頂垂れるアサギ、嬉々として語る二人を、恨めしそうに見つめる。

魔王のイメージ、型崩れである。

紅茶を飲み干すと、アサギは多少乱暴にカップをテーブルに置いた。その音に二人が軽く瞳を開き、アサギを見つめた。

「あのおっ！ 私は一応勇者です」

「うん、知ってるのだから。可愛い勇者だぐーよね」

「っ！？ 敵対してますよね!？」

「そうだろうなあ、魔王と勇者だからなあ」

「では、何故寛いでこんなふうに、星空の下で紅茶を飲んでいるんですか!？」

「そうは言われても」

立ち上がって、アサギは右手に魔力を集中させる、魔法を発動させるつもりだ。が、驚いた様子でもない二人の魔王は、困惑気味にアサギを見つめるばかり。

アサギとて非常に遣り辛い、これでは自分が悪者の様に見える。

「こ、こうやって、私が攻撃したらどうするんですか!？」

「どうしようかな、でも、アサギは攻撃しないと思うのだからよ」

リュウのその言葉に、思わず力が抜けたアサギ。そんなこと、言われるとは思わなかった。

「敵意のない人物には、自分から攻撃出来ないぐーよね、アサギは」
微笑まれて、そう言われる。一瞬呆けたが、すぐに赤面すると両手を天に掲げた。

馬鹿にされたと思ったのだ、勇者なのに。

「出来ませ、私、勇者ですからっ」

「いいよ、やってごらん。でも、アサギには、出来ないのだから」

「出来ますっ」

「出来ないぐ」

リュウがゆつくりと立ち上がる、ほくそ笑んで芝生を踏みながら、アサギへと歩く。気迫負けして一歩づつ後退するアサギに、更にリュウは微笑んだ。

「やってごらん。至近距離に入っただけだ。呪文、思い切りぶつけていいのだよー？」

「っー！」

目の前まで来られて、視線を合わせるように屈まれて、リュウが一言。

「さあ、可愛い勇者様。魔王ハイでも、魔王リュウでも、どちらでも。攻撃してみてください」

後方でハイが深い溜息を吐いている、からかいすぎだ、と言いたいらしい。

アサギは身体を小刻みに震わせながら、懸命に魔法を発動しようとした、けれど。

「……で、出来ません」

ゆつくりと、力なく腕を下ろす、涙目でリュウを見つめた。

「悪い人に、思えないので。攻撃出来ません……」

「でしょー。そうだと思ったのだから」

あはは、と軽く笑うリュウ、ぼんぼん、と肩を叩かれる。悪戯っぽく微笑まれるともう何も反論できず、そのまま手を引かれて席へと戻った。

「この際、勇者と魔王を忘れるのだから。そのほうが気も楽なのだからよー？」

「では、こちらが質問しよう。アサギのこと、教えてくれないだろうか」

「はあ……」

二人の魔王が、子供のように瞳を輝かせて身を乗り出してきたので、アサギは苦笑いしつつも小さく頷いた。

「ご趣味は？」

「趣味ですかー、お菓子を作ったりとか」

「ほう、家庭的なのだ！好きな男性のタイプは？」

「えーっと、笑うと可愛い人で、一緒に居ると楽しくて……」

「よし、ハイ、笑うのだ！可愛くない笑顔なのだぐー」

「あの、すいません。この質問、何か意味が？」

「気にしないでいいのだ、アサギ。んー、恋人にするのに年齢は関係しますか？」

「えーっと、別に」

リュウの質問に、きちんと真面目に答えるアサギ、笑い転げながらリュウは横目でハイを見ている。ハイはひやひやしながら、身体を時折硬直させながらアサギの声に耳を傾けていた。

「では、最後に。今、好きな人はいますか？」

「え」

ハイが悲鳴を上げた、リュウが先程と変わらぬ笑みでアサギを見つめている。アサギが、赤面する。

「あの、その質問の意図は何でしょう」

「細かい事は気にしちゃいけないのだぐー。で、好きな人は？」

俯いて、必死に泣き出したいのを堪えているハイ、心の中で爆笑しながら、リュウはアサギに詰め寄る。聞いておきたい情報だ、今後の展開が変わるだろう。

「す、好きな人、というか、気になっている人ならいます」

「それは、ハイだぐか？」

「いえ、ハイ様ではないですけど」

アサギの声を聞いた途端、ハイは椅子から盛大にひっくり返って泡を吹いた。当然だ。

だが、アサギにしてみても当然の返答だ。

「きゃー！？ハイ様！？」

「可哀想なハイ。まあ、でも、気になっている程度だしねー」

慌てて駆け寄って抱き起こすアサギ、リュウはそんな二人を見つ

めつつ、飲み残しの紅茶を飲み干して。明日から、面白くなりそう
だなあ、と一人呟いて、にんまり。

魔界の夜は、更けていく。勇者が訪れたその地で、ゆったりと、
時は流れる。

全ては”運命”、定められた、運命。勇者に焦がれ、勇者になっ
た異界の娘が、魔王に見初められ魔界へ来た。

そう、運命。

遠い昔に廻り始めた運命の歯車は、終焉を迎えつつある。

その時、魔界で。

魔王アレクがひっそりと自室からそんな三人を見ていた、微かに
瞳に希望を燈し。

アサギに瓜二つな魔族の少女が、沸きあがる苛立ちで魔法をがむ
しやらに連打していた。

その兄が、緊張した面持ちで親友の下へと向った。

魔王ミラボーと側近のエアアが、暗闇で笑い転げていた。

魔王ハイの側近であるテンザが、三人を見つめ歯軋りしていた。

夜空に浮かんだ星々が、唄を奏でる。煌いて、哀しく、啼く様に
奏でている。

全ては、ここへ来てしまった一人の小さな勇者の為に。勇者であ
りたいと願った、少女の為に。

廻る歯車、指し示す。

『じかんが、ないの』

『あなたは、まちがえないで』

『ねがうの、おもいえがくの、いちばんあなたがしたいこと』

不意にアサギは顔を上げた、リュウが背負ったハイの手を握りつ
つ、城内で立ち止まる。誰かに呼ばれた気がしたのだ。

魔界へ来てから、何度も聞いた気がする声である。

「誰？」

問いかけにも、答えない、その声の主。

まだ、アサギには解らない。その人物を、よく、知っているのに、解らない。

まさかの同一方向へ

トビイは単独で馬を走らせ、翌日の朝方ジエノヴァへと舞い戻った。無論、飲まず食わずの不睡眠。

目的は、ただ一つだけ”アサギ奪回”である。

その為には魔界イヴァンへ行かねばならないだろう、魔王ハイの居場所はそこしかない筈である。しかし、魔界イヴァンは南半球に位置する島である。

自分で船を借り、船員を雇い、出航する、というのが一般的な行き方だ、しかし魔界である。普通船など誰も出さない。誰が好き好んで魔界へ船を出航するだろうか？

しかし、トビイにはもう一つ、確実な方法があった。トビイにしか出来ないことだ、ドラゴンナイトであるトビイが相棒の竜達と再会し、イヴァンへと向う方法である。

数ヶ月前離れ離れになったトビイの竜達、ジエノヴァの噂ではコスルプ及びバルトロメオ周辺の海域に竜が現れる、とのことだった、そこまで辿り着けば後は簡単である。

問題はどうかやってそこまで行くか、だ。先日の会話で、コスルプ行きの船は当然休航だと知った。

物事が上手く行かず、気持ちが苛立ち、トビイは焦っていた。とりあえず冷静になり、落ち着いて考えるほかはないと判断、休息及び睡眠をとるために宿を探した。

思えば空腹でもあった、脳の回転が悪いのもそのせいだろう。無性に苛立つものそのせいだろう、宿の近くの手頃な飲食店に入ると適当に注文した。

椅子に深く腰掛け、安堵の溜息を軽く吐く。瞳を軽く閉じて、呼吸を整える。冷静になり、最短で竜に会える道を探すのだ。

本来の自分を取り戻せば、全て問題なく進むだろう。

地図を開きながら、運ばれてきた料理を口にした。危険な道でも

構わなかった、それでアサギと会う時間が短縮出来るのであれば。

出てきたものは叩いた豚肉の煮込み料理で、トマト、ニンニク、タマネギを香辛料で辛めに仕立ててある。それを小麦粉を水で練って焼いたものに添えて、食べるというものだった。辛目の料理であったが、そんなことトビイには関係がなく、脳内はクレオ全土の地図が張り巡らされており辛いかどうかすら判別出来ていない。

平然と食べ続けるトビイに、周囲が拍手を送り、気前の良いものは酒も差し出してきた。騒ぎ立てる周囲をもとせせず、地図との睨み合いを続ける。

左手に地図、右手に酒、そして悩み込む姿は周囲の女達をざわめかせた。伶俐そうな顔立ちの、美しい容貌の少年と青年の中間のトビイ。艶かしい男の色気を放ち、我先にと女達はジリジリとトビイに寄り添うように近づく。

が、トビイはそれどころではない。

バロトロメオ、とは海に浮かぶ孤島だ、広くはないが、狭くもない。現在トビイがいるフランド大陸中の港から船が出ている筈なのだが、竜騒ぎで休航中。

ジェノヴァは休航だが、他の港からはどうなのか、そこが重要な問題だ。骨折り損だけは避けなければいけない、時間の膨大な無駄である。

全航路を把握すべく、トビイは食事を終わると色めき立つ女達を他所に直様港へと直行した。

急坂を上り、緩やかな道を辿っていくと、潮の香りが漂い始める大きな道に出た。一気に下るともう港である、船員達が焚き火で獲れたての魚を焼き、豆を煎りコーヒーを飲んでいる。

船員達に行き先を告げると驚愕と好奇の瞳で見られたが、親身になって教えてくれた。

明日、カナリア大陸のドウルモへ出航予定の船があるのでそれに乗船し、到着後陸路で北の地フランドルへ赴き、そこから船でコスルプへ移動すべきだ、と指示される。圧倒的に安全で、最も敏速な

行動が出来るそうだと。

しかし地図を見つつトビイは顔を大袈裟に顰めた、結構時間がかりそうなのだ。

それでも、それが最良らしい。

「竜達がどうも南下しているらしいんだよな。だから、その経路ならば可能なんだ」

カナリア大陸と言えば、先日不穏な噂を聞いたシポラ城がある大陸でもあった。不審に思っていたトビイは、可能ならばそちらも調べようと心に決める。

本来ならば無視したいところなのだが、どうも気になる。破壊の姫君、という単語がどうも引っかかるのだ。

船員に礼だけ述べると、トビイは踵を返した。

ハイが乗ってきて、トビイがここまで乗ってきた馬も金を払えば船に乗せてもらえる、しかしこの馬を売り払い、その金でカナリア大陸で馬を購入したほうが効率が良いだろう。

船の出発は二日後朝、棒の様な足で馬を売り払い宿へ戻るとベツドに倒れ込んだ。夕方頃起きて、情報収集に向うつもりで、今は死んだように眠り続ける。

トビイよりもかなり遅れて、アリナ達はジェノヴァへと戻ってきた。

馬車は旅が一番苦しいであろうライオン達が主力で使用する事になり、一応解体して二台に分けたのだが、多少ガタのきたほうを貰い受けた。馬も、力強そうな馬をライオン達に引き渡した。

アリナとクラフトが交代で必死に馬車を操り、途中魔物との戦闘に苦戦しつつようやく到着。

明け方、太陽が地平線の彼方から顔を覗かせている。ほぼ睡眠をとらずに、馬車で移動したのだ、皆疲労はピークである。

食料もほぼライオン達へと受け渡した為に、干し肉とパンと水で我慢した。

アサギという友達がいなくなってしまう以上、勇者達は小さいとはいえ覚悟を決めたのである。誰も不平を言わなかった。

間近に城壁が迫り、夏の荒々しい太陽の光に苛立ちを覚えつつ、とりあえず身体も精神も限界に近かったが運良くジエノヴァに帰還出来た。

皆が皆、抑鬱状態、しかし。港へ赴き、カナリア大陸への出航時間を聞けば数時間後、とのこと。都合が良い。

カナリア大陸へ渡るメンバーはアリナ、クラフト、ミシア、ダイキ、サマルトの五人である。

ジエノヴァに滞在するムーン、ブジャタ、ケンイチ、ユキの四人と別れの食事を摂る。

固定式の屋台食堂で、質素だが別れを惜しむ暇すらなく。ご飯の上に並べられた好きな惣菜をかけて食べる、というセルフ式の屋台だ。

カレーや煮物、炒め物とバラエティにとんだものだった。

疲労感で食欲などなかった筈の勇者達だが、流石に鼻から美味しそうな香りを吸い込むと、無我夢中で腹に詰め込み始めた。

畏まった店よりもこういった店のほうが、子供の勇者達にとってはありがたいかもしれない。

ここで別れ、アリナ達は船に乗り込み、船室で睡眠をとることにした。ブジャタ達は手頃な宿を手配し、そこで暫く滞在することにした。

そう。

アリナ達が乗船してから数分後、トビイが同じ船に乗り込んだ。客室の場所も違う、トビイとアリナ達。

まさか同じ船に乗っていようとは、夢にも思っていなかった。

「ダイキ！ 頑張るんだよ」

「ああ、ケンイチとユキもな！」

独りきり、ダイキは緊張した面持ちでベッドに転がる。船の上か

から見送つてくれた友達に精一杯手を振った。思い出すと、泣けてくる。

知らない場所で、一人きり。急に不安が押し寄せてきたが、それでもダイキは歯を食い縛る。

アサギを思い出せば、怖くない気がしたのだ。自然と、ダイキは小学校を思い出していた。アサギを、思い出していた。

寝息を立て始めたサマルト、クラフトと同室だ。眠いはずなのに、緊張して眠れない。

一人旅もいいところである、やはり友達がいなというのは寂しい。けれども身体を横にし無理やり瞳を閉じれば、数分後には寝息が聞こえ始めていた。

疲労には、勝てなかった。

死んだように、大樹はほぼ丸一日眠った。

船は悠々と進む。波間をぬって、大海原をゆったりと。

純白の薄い雲が船旅を和ませてくれた、雲の形を見ながら色々とかかに例えてみたり。結構退屈凌ぎになる。

安穏な旅に、人々はすっかり安心していた。魔物達が人々を襲い、場合によっては魔族が村を壊滅させるといふこの時代。

ブラシを担ぎ、甲板を掃除している船員達は太陽の暑さに身を焼かれる思いで汗を流しながら働いていた。

時は正午、早々と食事を終わらせた客達がちらほらと甲板に姿を現す。午後のひと時なのか、照り返しが暑いこの時間によくやるよ、と苦笑いする船員達。

食事に行けない船員達は、満腹の笑顔でまったりとベンチに座っている姿を見ては唇を尖らせた。

酷である。船員達の食事は、客がいなくなる15時頃からだった、それまで耐えねばならない。

「腹減ったー」

船員の一人がぼやいて、ブラシに寄りかかりながら瞳を閉じる。

友人が懸命に掃除をしながら、苦笑いで我慢我慢、と呟く。滝の様に流れる汗を拭いながら、それでも必死に身体を動かす。

「なんだそのやぼったい表情は、仕事しろよ。まるで今の空みたいだぞ」

「空？ あれ？ 本当だ、曇ってきやがった」

先程の青空は何処へやら、瞬く間に暗雲立ち込め、光を遮る。

二人の船員は神妙に頷き合つと他の船員達と合流すべく駆け出し、マストの安全を確認する作業に入った。掃除は一時中断である。

ブラシを道具入れに押し込み、敏速に個々の持ち場へ向う。

「安閑としてられないぞ！ 一雨来るっ」

騒ぎ出した船員達に、客達も早々に船室へと戻っていった。うるついていた子供を抱き上げ、最後の客が甲板から姿を消すと、静まり返る甲板。

不気味である。

雲を見る為に気象予報士が甲板へ上がってきた、風と雲の動きを瞳を細めて眺めている。空は不気味な色に覆われた、間違いなく、何かの前触れだ。

「これは！ でかいぞ、大嵐だ！ 見ろ、あの空の色。今に振り出す、雨脚で終わりそうもない」

声を荒立て、気象予報士見習いが叫んだ、それをきっかけに大粒の雨が降り出す。まるで矢の様だ、露出した肌に痛いほどぶつかつてくる雨。

かなり急激に気温が下がった、非難の声を上げながら嵐に備え準備をする船員。身体を雨曝しにしたまま、作業を懸命に続ける。暑かった気温が、今は寒く歯が鳴る。

「船長、これは久々にでけえ嵐ですな！」

「覚悟しておくがいい、侮るな、嵐だけでは……すまんぞ」

甲板に上がってきた船長が、重々しく吐いた言葉に震える船員達。遙か地平線を必死で見極めようと瞳を細める、額の雨を拭いながら、遠くを睨む。

熟練された、人を圧迫する視線の先に捕らえたものはなんなのか。そしてまた、船室では不安そうな客達が絶えず話をしていった。

船の傾きが大きくなる、不気味に船体が軋む。

もちろん、船室でトビイも耳を済ませていた。身を起こし、グラスの中のワインを飲もうとしていたのだが、深紅のそれが血液のように揺れて蠢いている。

傍らで女が小さく呻いて寝返りをうつと、トビイの腰にしなやかな腕を絡ませ猫のようにじゃれついてくる。気にも留めず、トビイは一気にグラスの中のワインを飲み干すと、女の腕を払い除けてベッドから這い出た。

「待つて、トビイ。酷いわ、何処へ行くの？」

憤慨した様子で余韻の残る女は切なそうに、顔を紅潮させて叫んだ。衣服を身につけつつ、嘲笑うように振り返るとトビイはこう告げる。

「別に大したことじゃない。直ぐに戻る」

その一言に、女は安堵の溜息を漏らした。胸を撫で下ろすと艶やかに息を吐きながら、待つているわ、と小首を傾げて手を振る。

その豊満な胸を隠すことなく。部屋を出て行ったトビイを思い出しながら、ベッドに肉体的疲労で倒れ込む。

信じられない、あそこまで凄いだなんて……。咳き、うつとりと瞳を閉じると女は小さく笑った。髪をかき上げ、自分の身体を抱き締めトビイを思い出す。

「早く戻つて、トビイ」

ちなみにトビイと床を共にしているこの女、名前をロザリンドと叫んだ。

船に乗り込み、甲板で吟遊詩人の詩を聞いていたトビイ。正確には聞き流していたのだが、それはさておき。

「もし」、と声をかけられた。

怪訝に振り返るとそこには、金髪に豊満な肉体を見せ開かすような身体にフィットするドレスを身に纏った、情婦のような女が笑み

を浮かべていたのだ。

占い師だ、というその女に退屈凌ぎに、とトビイは部屋へ招かれる。出会いの記念に、と上等なワインを勧められた。

なかなか良い部屋で、とりあえず一通りワインを愉しんだトビイ、女は本当に占い師だったらしく、何やらカードを持ってきた。

それで生計を立てているのだろう、一般人には泊まれない船室だ。「何を占おうかしら？ 私達二人の未来？」

くすくす笑う女に、トビイもにこやかに笑い返して一言。

「オレと愛しい想い人、2人の未来」

啞然と口を開いて、わなわなと身体を震わす女。怪訝にトビイは立ち上がる。

「勘違いするな、悪いな、オレが本気なのはアサギだけだ。遊びの相手なら何時でもしてやるが、独占しようなどと考えるなよ」

面倒だから。呟き、冷ややかな視線を投げつけるトビイに、女は齒軋り。

こつも他の女の話を優しい笑みで言われては、こちらが恥ずかしくなる。けれども、トビイは自分が蔑まれてもそれでも必死で繋ぎとめて居たい様な男だった。

稀な美貌の持ち主、見ているだけで圧倒される存在感、思わず抱き締めたくなる引き締まった身体。

もともとこの船旅でのただの遊び相手だ、本気になる筈もないし、第一年下である。女は冷や汗を額に浮かべながら、それでも、ベツドへと誘った。

口付けを拒み、衣服も全部脱いだわけでもない、そんな扱いを受けても、尚。

女はトビイに、溺れた。

こんな男、見たことがない。まだ若いのに、全てにおいて完璧だ。唯一癪なのは、堂々と愛する女が居る、と言い放つところ。身体は許しても、唇は許さない、つまり女はトビイにとってただの欲望の捌け口でしかない。

それでも。

女はトビイを待っていた。その船室でトビイを待っていた。待ちきれなくて衣服を着ると、トビイの後を追いかける。男を追いかけてみるなんて、久し振りだった。

「不味いわね、久し振りに本気になりそう」

苦笑いした女・ロザリンドは小走りに紫銀の髪のを探す。船体が大きく傾いた。

カタチを変える不穏なモノ

船を衝撃が襲った、人々の耳を裂くような悲鳴が船内に響き渡る。昼食後のまどろみが、一変して阿鼻叫喚へ。

「な、何事だあ、クラフトっ」

未だベッドの中でぬくぬくと寝坊していたアリナは、髪もボサボサ、寝巻き姿のまま部屋を飛び出し、隣の部屋に騒がしく転がり込む。一人前のお嬢さんが、そんなはしたない格好で……と嘆くクラフト、肩をがっくりと落としたがそれどころではない。気を取り直して、咳を一つ。

「先程から騒がしかったのですが、気づかれませんでしたか？ 嵐が来たようです。しかし、それと同じくして……非常に悪い予感です」

「単刀直入に言うと、つまり嵐と共に魔物が攻めてきた、ってわけだろ！？ 行くぞっ」

「そうとは言い切れませんが、90%の確率で」

かなり高い確率じゃないかつ、と悪態つきつつアリナは部屋の中を一瞥。

クラフトの隣では緊張した面持ちのダイキが装備を整えていた、サマルトが急かすようにアリナに大きく頷いている。着替えて来い、というのだろう。それくらい、解っているアリナは唇を尖らせた。

アリナと同室のミシアも何故かちゃっかりと身支度を整え、戦いの準備をしていた。平然としていたミシアにアリナは軽く苛立ちを覚える、……起こしてくれても良いのではないか？

ミシアは起きていたのだろう、だから用意が早かったとしか思えない。装備するには部屋へ戻る筈だ、その際に起こしてくれても良いのではないか？ アリナは瞳を細め、ミシアを軽く睨みつけた。

アリナはどうも出会った時から、ミシアと馬が合わない。別にそう話す事もなかったので、お互いまだ顔見知り程度だというのも事

実だ。姉のマダーニとはかなり気の知れた間柄になっていたが、ここにミシアはいなかった。

生理的に嫌いな相手というのは、感じてしまうものである。アリナの場合、何故かしらミシアに嫌悪感を持った。あちらはどうか知らないが、謎めいていて本心が掴めない。人見知りしている割には、男ばかりの部屋に一人で居座っている時点で疑いたくもなる。

唇を尖らせたまま、自室へ大急ぎで舞い戻るとアリナは装備を整えた。

「どうせ旅するなら、マダーニかアサギがよかつたなあ」

といつても、アサギはいない。そのアサギを探す旅なのだが小言が出る程、今のミシアの態度に腹が立っている。大勢人間はいるのだから、仕方がない。アリナは舌打ちし、気持ちを入れ替えると性に長い髪を後ろで一つに縛る。大雑把に縛ったので、当然グチャグチャだ。

が、気にしない。

艶もあるし、丁寧に手入れさえすれば人の羨む美しい髪だろう、けれど生憎当の本人には邪魔以外の何者でもなかった。魔法使いならともかく、アリナは接近戦を得意とする小剣使いである。

激しく邪魔だ。

本当ならば、今すぐにも切り落としたいくらいだ。だが、幼い頃からのいいつけで、切る事無く伸ばしていた。

我俣を聞いて貰う代わりに、唯一約束した事。

”女の命、髪を絶対に切らない事”

緩く縛つてある髪を、ちよい、っと右手で揺らしてから不敵に微笑む。ベッドにたてかけてあつた愛用の細くて軽いが殺傷力の高い小剣を二本、勢い良く掴みあげ、傍らのマントを持ち上げるとドアを蹴り飛ばす勢いで開いた。

寝間着のままだが、男物なので少し大きな衣服を着ている程度だ、マントを羽織つて隠す。重装備はしないので、このまま戦闘に加わる事にした。

ドアの前では仲間が待つていた、互いに目配せのみで深く頷くとアリナを先頭にして、軋む階段を駆け上る。揺れる船体の内部を、甲板目指して走るように急いだ。

「お嬢、お腹が空いているでしょう？ 干し肉です」

「ああ、ありがとう」

傍らで寄り添うように走るクラフトから、干し肉を受け取ると一気に口に放り込み、噛み締めながら走る。

途中、小さな女の子が迷子になっていたらしく泣いていたが、すぐに母親が現れ連れて行った。胸を、撫で下ろす。

ただならぬ気配を一般市民も感じているのか、行きかう人々は逃げ惑っているようだ。部屋にじっとしていても落ちつかないのだから、廊下で右往左往している。

アリナの隣には何時の間にもやらクラフトが消え、代わりにダイキが並んで走っていた。軽くおどけて口笛を吹くアリナ、クラフトは体力の消耗を感じ、後方に下がったらしい。

「へえ、意外とやるねえ。ボクについてくるなんて」

「一応足には自信がある」

運動会ではよく、トモハル、ミノルと並んで選手に選ばれたものだ。体育は平均以上、というよりかなり上である。

「お手並み拝見、3星チユザールの勇者ダイキ」

一步早くアリナが躍り出た、足の速さを競っても仕方がないのだが、負けず嫌いなアリナ。何事も勝負事にしてしまうのだ、こんな時でも。

階段を駆け上った先に、誰かが居た。どうやら二人居るらしい、思わず後姿の男に釘付けになる。

「何故ついてきた、ロザリンド」

「あら、ついてきてはいけない理由などないでしょう？」

「今は危険だ、すぐに戻る。部屋に戻って待て」

男と女、女の色っぽい声に聞き覚えなどはないが、男の声は聞きなれた声だった。背負う眩い剣は見間違えるはずもなく、珍しい紫

銀の長髪、額のバンダナに、引き締まった身体。

「ともかく部屋に戻れ、大人しく。生憎護るのは得意分野じゃないんでね」

大袈裟すぎる深い溜息を吐いた男、わざとだ。唾然とその後姿を眺め続けるアリナ、そう、先日別れたばかりの男であるとしか思えない。

馬に乗って一人で駆けて行った、あの男である。

「アリナ、どうしたんだよ。つかえてるぞー！」

サマルトの非難の声が後方から届いた、大声に思わず男も振り返る。

アリナと視線が交差した。

「あ、やっぱりトビイだ」

トビイが珍しくきよとん、と反応できずに立ち尽くす。アリナが軽く笑って手を振った、サマルトに押されてダイキがなだれ込む、トビイを見てすつとんきよのような声を上げる。

アリナに激突したダイキ、当然アリナは足元をふらつかせて重心を崩し、トビイに倒れこんだ。

思わずアリナを抱き留め、トビイは軽い溜息と共に顔を顰める。

「何すんだよ、ダイキ！」

トビイの腕に捉まりながら、アリナが凄んでダイキを睨みつけるが迷惑そうにダイキは後ろのサマルトを指した。苦笑いで謝るサマルト、が、トビイの姿を目に入れるなり叫んだ。

「あつれー!? 何やってんだよ、お前！」

ミシアとクラフトもようやく視界が広がり、トビイの姿を捉えて小さく叫んだ。というか、クラフトの場合はトビイにアリナが寄り添っていたから、だが。

トビイの存在には、大して驚いていないようだった。

「あわわ、な、なにをお二人でっ」

男に寄りかかるアリナを生まれてこの方初めて見たクラフト、現在の船体並みに……揺れる心。動揺を隠し切れず、クラフトは混乱

気味に喚きたてている。迷惑そうにアリナは引き攣った顔で、クラフトを一瞥。別に、抱きついていただけではないし、大騒ぎする程の事でもない。

だが確かに、今まで男を馬鹿にしてきたアリナだがトビイのその無駄のない筋肉と逞しい胸板には、多少ときめいた。自分にはないものだった。

「ト、トビイさん……」

ミシアが小さくトビイの名を呼んだ、その時。

船は今までで最大の揺れに襲われた、鋭い叫び声が誰のものなのか。その揺れが鎮まった時。

何がどうしてどうなったのか、クラフトを下敷きにしてアリナが階段の中間地点まで転げ落ちていた。脳震盪を起こし、気を失っているクラフト、しかし容赦なくアリナは胸倉を掴んで揺さぶる。

「なんでボクを引つ張った、クラフト！ おい、返事しろっ」

つまりクラフトはトビイに寄り添うアリナを見ていたくなくて、我武者羅にアリナを引き寄せたのだろう。その結果、二人で階段から落下したのだ。

一方、ダイキは冷静に場所を確保していたのだが、それが原因でサマルトに抱きつかれる羽目になった。階段から落下しないように、無心で何かに掴まったのだろう、サマルトはダイキを見て唾然とす。まさか、ダイキに？まっていたとは。

「気持ち悪いから、離れて欲しい……」

「好きで掴まったわけじゃないからな！？ きーっ！」

不貞腐れてダイキから離れ、服を調えるサマルト、周囲を見渡す。取り乱したが、王子らしい振る舞いを心がけているサマルトは顔を若干赤らめて姿勢を正した。今更、だが。

苦笑いし、ダイキが階段を上ろうとした時。

「……おい」

怪訝なトビイの声が聞こえてきた。傍らに妖艶な美女・ロザリンドを護るように抱えていた、が、何故か背中にミシアがくっついて

いる。しっかりとトビイの衣服を握り締め、きゃーきゃーと叫びながら……震えていた。

「何、この娘？」

呆れた、とばかりロザリンドが溜息を吐く。振動はとうに収まった、何を怯えているのか。

トビイは嫌そうに感情を表に出し、眉間に皺をよせミシアの腕を振り払う。どう考えてもミシアがトビイに掴まっている事自体が、有り得なかった。

自然に船が揺れたくらいで、ミシアがトビイのほうへ飛んでくるのは無理がある。故意に？まるように、自ら歩くしかない。

「ちよつと、トビイ。この娘があなたが先程言っていた”想い人”？」

そんなわけではない、と思いつつも念の為聞いてみるロザリンド。流石にこの娘と比較したら自分が上だろうと、自信があった。確かに見た目は綺麗だが、行動が胡散臭い。

心底嫌そうに、トビイは唇を噛み締めて首を横に振った。悪寒が走る。

「冗談でも、嫌だ。」

低く呟くとトビイは深い溜息を吐き、ミシアを一瞥、それから数日前まで同行していた仲間を見る。

何故こいつらがここに……おまけに、とんだお荷物つきだ

声に出すのを極力押さえた、口走ってしまいそうだった。ちらりとミシアを睨みつけてから、トビイは顎でダイキとサマルトに促す。甲板へと、足を進める。

「行くぞ、戦闘開始だ」

顎で指図するトビイに、ダイキとサマルトは顔を引き攣らせる。

むっとして「言われなくても」と言い掛けたが、ロザリンドに婀娜っぽく微笑まれ「頑張っつてね」と言われては、赤面して、口を閉ざし、そそくさと後を追うしかない。年上女性の誘惑の微笑、二人

にはまだ、早すぎる。

愉快そうにロザリンドは、そんな二人を見送った。

文句を怒鳴り散らしながら階段から姿を現したアリナと、クラブト、二人にも同じように微笑むロザリンド。その麗しさに、思わずアリナは口笛を吹いた。

「流石トビイ、ちゃっかり美人なおねーさまつきだねえ」

「ふふ、有難う。あなたも素敵よ、頑張つてね」

「うおう！ 戦闘力倍増つ。やっぱり美女の声援があると気分が違
うねえ！ あなたは、安全な場所にいてくれよ？」

同性愛者のアリナ、上機嫌でロザリンドに眩しいほどの笑みを浮かべるとガッツポーズを作り、丁寧にお辞儀を繰り返すクラブトを引つ張つて甲板へと出て行く。

それを見送るロザリンド、あの娘とは上手くやっていけそう、男女関係的ではなく、トビイと親しいものね……と、薄く笑みを浮かべた。

今度の船旅は、トビイと過ごすとしたのだ、トビイの知り合いとも親しくなるのが普通だろう。

可愛らしい坊やが二人、厭味を感じさせない女が一人、生真面目な青年が一人。

だが。

ロザリンドはもう一人、その場に居た人物に視線を移すと見下すように笑った。

ミシアである。先程から何か小声ではそぼそと呟きながら、立ち尽くしたままだった。

宙を見て、焦点の合わない虚ろな瞳で、聞き取れない言葉を発している。余程トビイに邪険に扱われた事が、ショックだったのか。

その光景に顔を軽く歪め、ロザリンドは一応声をかけた。別に無視しておいてもよかったのだが、トビイの仲間ということはこの女も何かしら戦闘能力があるのだろう。

「行かなくていいの？ 役に立つのか知らないけれど、お嬢さん」

その含み笑いの声に、弾かれたように現実へと舞い戻ったミシア。すぐさまロザリンドに対して、睨みを利かせる。挑発的な視線に、負けじと嘲笑いを浮かべ、軽く壁に凭れるとロザリンドは優雅にキセルを吐いた。煙の向こうに、薄っすらとミシアの影。

しかし、それも束の間の事だ、状況は変転した。

突如ミシアの身体から目に見えないが、肌で感じる殺気……禍々しい何か湧き上がってきたのである。ロザリンドとて、ただの一般市民ではない、占いを得意とし、第六感には優れていた。

呆然とその場に立ち尽くすロザリンドだが、それでもまだ余裕があった、知らぬ振りして語りかける。引けば、良かったのだが女のプライドは高い。

「貴女、トビイの事が好きなのよね？ でも、気の毒だけど嫌われているみたいよ。それに、恋人もいるようだし」

無言でロザリンドを睨み続けるミシア。しかし、ゆっくりと口を開き始めた。地獄の底知れぬ扉が開くかのような威圧感を感じ、思わずロザリンドは後退する。

それは、ミシアにとって何気ない動作であったかもしれない。けれど、確かにロザリンドは妙な気配を直感し、背筋に言い知れぬ寒気が走ったのだ。初めて肌に痛みを感じるような、刺す威圧感を受ける。

地の底で呻き声を上げる死霊の叫びか、文字通り悪魔の声か。ミシアが、言葉を吐き出した。

「汚らしい声で減らず口を叩くんじゃない、薄汚いメス豚。あんたは気に食わない、何処かの誰かを思い出させる、私のトビイの隣でっ」

カッとミシアの瞳が開き、その背後から立ち上っていた妙なオーラが放射状に吹き荒れた。思わず身をすくめ、構えるロザリンド。その異様な光景を、気配を目の当たりにして初めて、自分が置かれている状況が非常に危険だと悟った。

な、なんなのこの娘！？ ただものじゃないわ、変よ！？

薄紫の長き髪が地獄の亡者の手腕に見える、黄色い瞳がおぞましく浮かび上がる。未だ吹き荒れ続ける暗黒のオーラ、それからは深淵の香りがする、邪悪な何かの……。

「に、人間じゃないでしょう……」

呼吸も間々ならず、苦し紛れにロザリンドが呟くと、ミシアはきよとんとして喉の奥で笑い始めた。ギラギラと光る瞳、重低音の声、見るものが見ればそれは悪魔に取り付かれた女以外の何者でもない。「ふふっ、そうかしら。そうね、ここまで完璧な容姿の女なんて、滅多にいないものね。神も鼻屑するわよねえ、こんなに他の女達と差をつけたら気の毒だわ。……哀れんであげる、メス豚さん」

「本当に自信過剰なのね、おバカさん。何処から湧き出る自信か知らないけれど、少しは謙虚にしないと嫌われるわよ」

「負けないと、わざと強がって見せたロザリンド、しかしミシアは益々厭らしい笑みを浮かべるばかりだ。

「くくくっ……やあねえ、これだから。この美の集結した私の容姿、嫉妬するのも分かるけれど。まあ、全てはあの人の為のものなのだから」

「トビイのこと？ ふふ、分からないのね、おバカさん。彼はあなたの存在自体、邪魔みたいよ？ 疎ましいのでしょうか、さっき咳いていたもの。可哀想ね、思い込みの激しい人は。嫌悪されているって分からないのなら、トビイに抱かれた事があるのかを考えればいいのに」

そこまで言い放つてから、ロザリンドは再び後ずさる。ふらふらと壁づたいに移動し、角へと追いやられると喉の奥で悲鳴を上げた。顔面蒼白、足が震える、そして……倒れこむようにしゃがみ込んでしまう。

目の前のミシアの姿、電撃が迸り、船内であるはずなのに、生暖かい風が髪を吹き上がらせ、血走った眼で憎憎しそうに睨みつけてきていた。もはや、気配が人間に思えない。

蛇に睨まれた蛙そのもの、小さくなりながら震えるロザリンドを、愉快そうに爆笑しながら見下している。

「あらあら、メス豚。どうしたの、さっきまでの威勢は？ ふふ、嘘ばかりよね、トビイと私は恋人なの、羨ましいでしょう。可哀想に相手にされないから妄想で私を蹴落とそうとしたのね？ あの人は奥手でね、本命には手を出したからないのよ、なかなか。でもね、あの人は私の身体を全て知り尽くしているの、だって何度も同じ夜を過ごしたのよ？ ああこうして思い出すだけでどうにかかなりそうだよ」

うつとりと微睡むように、ミシアは愉快そうに回転する。それは狂気の宴、異様な気配と含み笑い、この場に他の者がいたら卒倒しそうである。

現に今、ロザリンドは全ての五感で恐怖をひしひしと感じていた。助けを呼びたい、けれども喉から声が出てこないのだ、声の出し方が……分からない。呼吸の仕方が、思い出せない。

ひゅうひゅうと、息だけが口から吐き出される。「早くしないと殺される！」思ったが、動けない。脳は鮮明に視界を映すのに、行動が追いつかない。

必死のロザリンドをゆっくりと追い詰めるように、ミシアは一步一步、恍惚の笑みを浮かべながら近寄っていった。

「まさか、とは思うけど。メス豚、トビイに抱かれたなんて……戯言言わないわよね？」

口調は穏やかだった、しかし、視線は強烈だ、翻弄させるような無理やりにも返事させるような権威的な声。悔しさで、ロザリンドはほとんど動けなくなった自分の身体を無理に動かしてみる。微かな抵抗、しかしそれはミシアの魔力の高さ思い知るだけだった。何かしら呪文を唱え、ロザリンドをこの状態へと追いやったわけではない、その禍々しい気配だけでこうして圧迫しているだけだ。冷や汗を背が伝う、不気味に流れ落ちていく。

まるで長い長い時をこうして過ごしているようであった、なんと

も生きた心地がしない。

「ねえ、ちゃんと質問に答えてくれないかしら？ 常識つてものをしらないの？」

唇を尖らせながら、しかしその瞳は勝ち誇ったような満悦の光に満ちてミシアは言い放つ。

ロザリンドは、唇すら噛む事ができない己に絶望した。もう、死ぬのは覚悟した、しかし、こんなわけの分からない小娘に絶対的な力を見せ付けられたままでは……死ぬに死に切れない。

満身の力を込めて、ロザリンドは最期の力を振り絞る。喉から血が吹き出した、あまりの痛みに顔を大きく歪めるが、これだけは言わないと気がすまない。女の、意地である。

トビイに抱かれたのはロザリンド、恐らくミシアは抱かれてなどいない。狂って自分で話を作っているだけなのだ。それを、口にして声に出したい。その思いだけで、ロザリンドは声を発した。

しかし、その声すらも……耳を澄まさないと言えないほどの、そんなか細い声だった。

「この慢心女！ よくもまあぬけぬけと言いたい放題言ってくれたわね？ ええ、トビイに抱かれていたわよ先程まで。彼、閨事得意なものね、若いのに。これで……満足かしら？ 悔しい？」

「……冴えない台詞だったわね。これでメス豚も見納めだわ、その前に私の役には立ってもらうけれど」

トス、その音が聞こえた時にはすでにロザリンドは……絶命していた。

死の覚悟はもちろん、叫び声すら上げる間も無く。ミシアの放った小剣が深々とロザリンドの眉間に、そして豊満な胸に突き刺さっている。確実に、急所を仕留めていた。

剣から真紅の血が、一滴、また一滴、伝って流れ落ちていく。瞳は光を失い、半開きになっている口、それでもまだロザリンドは美しかった。彫刻の様に。

だが、ミシアにとってどうでも良い事だ。死体に語りかける、侠

気の口調で含み笑いと共に。

「妄りに私のトビイに近づくからそうなるのよ、でも喜びなさい。これから私を引き立たせる役に伝ってあげるから。光栄でしょう、ふふふ」

そして指をパチン、と鳴らす。唇を軽く舌で湿らせ、にっこりと微笑む。

軽く上下に腕を揺する、と。こんなことがありえるのか、ロザリンドの身体がゆらりと大きく傾き、そして……ぎこちなく立ち上がった。そう、死体が……動いたのだ。

慌てる様子もなく、ミシアは満足そうに微笑んでいた。

「冥利に尽きるでしょう、優しい私に殺されて。淫乱で醜悪なメス豚、幻覚だけど、トビイに抱かれたのね。トビイは私の男なんだから、気安く近づくと……こうなるのよ。その汚らしい身体で何を要求したのかしら、どんな淫乱な妄想を張り巡らせたのかしら。全く私のトビイを使うなんて」

優雅に胸の谷間から一枚のカードを取り出す、かくかくと揺れているロザリンドにゆっくりとそれを見せ付けた。無論、死体のロザリンド、瞳にそのカードが映るわけもなく。

漆黒、毒々しい程真っ赤な薔薇が描かれているカードの裏側は……塔の絵。タロット、大アルカナ16番目の塔のカードである。塔に雷が天から落とされ、人間達が崩壊している絵柄だ。

「身分を弁えなさい、身の程知らずは天罰を喰らいますよ」……あ、もう、遅かったみたいね」

ミシアはゆっくりと口の端に笑みを浮かべ、その場で優雅に、蝶が舞うようにくるり、と回ってみせる。非常に機嫌良く、始終口元に笑みを浮かべて。

「さてと、舞台の幕開けね」

唇の端を軽く上げて微笑むミシアの傍らで、ゆらゆらと揺れながら生気を感じられないロザリンドが立っていた。

船に潜む魔物

その頃、甲板の上では船員達がざわつきながら、辺りを駆け巡っていた。

木の軋む音を聞いた一人がその方向を見やる、そこにはドアを開いて甲板へ出てきたトビイ達の姿があった。船員は手を振って取り込み中だ、と迷惑そうに追い払おうとしたのだが、船長は静かに歩き出す。トビイの真正面に立つと、深く腰を曲げて礼をした。

船員が呆気にとられる中、アリナが勝気な瞳で口元に笑みを浮かべつつ船長の身を起こす。

「やだな、礼はなしですよ。ボク達は確かに乗客だけど、困った時はお互い様。それに腕には自信が有るし。な、みんなっ」

「かたじけない」

仲間を見渡し、悪戯っぽく笑うアリナに、頷くサマルト。トビイはただ、無言で空を見上げている。

安堵し微笑む船長の姿に、船員達は首を傾げ訝しがった。

「船長？ この方々は？」

何の状況も把握出来ない船員に、打って変った態度で怒鳴りつつ、け強引に頭を下げさせる船長。

「馬鹿野郎共が！ この嵐が自然のものじゃないってえぐらい、分かるようになれ！ この方々は戦士様だ、それも……とびきりのな」

そう言つと、トビイとアリナ、二人を見つめてにやりと豪快に笑う船長。見破った彼も、大したものである。

「ふーん、ボク達の強さがわかるんだ？」

と、感心するアリナ。自分に視線が送られたことに、満足そうに笑みを浮かべる。確かに現時点で強力な人物といえば、この両者だろう、船長は見抜いていた。

船旅とて安心できない、魔物の襲来は無論、海そのものとの戦いで船長も船員もそこそこに強くなければいけないのだ。故に、気配

でトビイ達の力量を見抜いたのだらう。もしくは、船長自身過去に戦士だったのかもしれない。

目配せし合うトビイとアリナ、船長が大声で指示を出した。

「いいか！ 魔物が攻めてくるぞ！ 戦闘じゅーんび！ 急いで配置につけえ！」

「いえっさー！」

その一言で訓練通り、素早く持ち場に着き、各々武器を手取る。或いは、船の調子を調べ始めた。物置に掃除道具を投げ込み、代わりに剣や弓、手製の爆弾を取り出し装備。手際よさにアリナが口笛を吹く、船長に良く訓練されているようである。

「では、ご協力を宜しくお願い致します」

船長はそう言いつつ、腰に下げた愛用の剣を引き抜いた。空を見つめて、唇を噛み締める。

「了解、まっかせてーっ」

アリナが構えた、トビイが剣を引き抜いた、サマルトとダイキが真似して後方についた、クラフトが神経を研ぎ澄ませた。

降り頻る雨の中、一筋の雷鳴が鳴り響き、それを合図に空から下卑た叫び声を上げて舞い降りてきた魔物達。紫の変色した皮膚、真っ赤に燃え盛る瞳、蝙蝠のような羽、細長い尻尾を持つ……ガーゴイルである。

空の暗さはこの魔物達が居た為なのか、かなりの数のようだ。もともとは邪悪な銅像に命が吹き込まれたのが生命誕生とされるが、今はどうでもよい。

半ば呆れつつ、しかし好戦的なアリナは嬉々としてその招かれざる客を迎え入れた。首を、コキコキと鳴らす。

「さてと。どうするトビイ？ 全滅させる？ 追い払うだけ？」

「こちらの被害を最小限に抑える、全滅させたほうが早ければそれで良いだらう。……行くぞ」

揺れ続ける船体、しかし二人は瞬間で瞳を合わせると一気に駆け出し、急降下してくる魔物の中へと突入した。

「嵐の中、どうもご苦労様だねっ」

信じられない速度で軽々と宙に舞い上がり、そして何時引き抜かれたのか腰の小剣二本を巧みに操ると魔物の羽を根元から切り落としたアリナ。無様な姿で甲板に転がったそれに、小さな悲鳴を上げた船員。くすり、と愉快そうに笑って片目を瞑ると言い放つ。

「それくらいなら、君らだってどうこう出来るだろ？」

言われて赤面する船員、もちろん自分の力量や度胸を見透かされていたからだ。飛び上がらないから、恐れる事はない。甲板から海へ放り出すことも、剣で突き刺すのも苦労しないだろう。

彼らにはガーゴイルと対等に渡り合えるだけの技量が、まだ備わっていないかった。アリナは、それを見抜き、ガーゴイルで実戦を積んでもらうつもりである。旅は、長い。

アリナの大胆かつそれでいて優美な戦闘に、皆が息を飲んだ。戦いの中でこそ、その本来の美しさを極限まで発揮出来るアリナ、戦いの女神的存在だ。

トビイとて、負けてはいなかった。張り合っているつもりは全くないのだが、目立ってしまう。妖しくも美麗な魅力の剣、その持ち主であるに相応しい者。アリナに負けず劣らず、素早い。

確実に一撃で敵の急所を貫き、生命を奪っていくのだ……死神の如く。躊躇がない、無駄がない。

そんな二人に刺激を受け、対抗して頑張っているのがダイキとサマルトである。武器の扱いはそこそこだ、しかし二人には魔法があった。揺れる足元でも、壁に寄りかかって安定した場所で魔法の詠唱が可能である。

「いっくぜえ！」

天より来たれ、我の手中に。その裁きの雷で、我の敵を貫きたまえ。眩き光と帯びる炎、互いに呼応し進化を遂げよっ！」

サマルトの放った魔法、上空から何本もの雷が魔物の群れへと落下し、直撃を受けたものが海へと落下する。甲板へと落下したならば、船員達が何人がかりかで止めを刺した。

「呼ぶは大いなる力、集めるはその源。結集せよ、我の前に。望むは強大なる力、我の敵を吹き飛ばすべく弾け飛ばせ！」

懸命に練習したダイキの魔法、空中に大人の頭ほどの電撃を走らせる黄色の球体が出現した。それを魔物の群れの中へと一気に放つ、避ける間も無く閃光を放って弾けとんだそれと共に、巻き込まれた魔物はバラバラに吹き飛ばされた。

成功した嬉しさで、飛び上がって互いの手を叩くサマルトとダイキ、しかし高度な魔法を雨の中で唱えたため精神を思いのほか消耗したようだった。もともとダイキはこのような悪天候の戦闘に慣れてはいない、地球に居た時とて雨が降れば傘をさした。

励ましあいながら、ダイキとサマルトは二人で魔法を唱え続ける。流石にトビイもアリナも上空の敵は範囲外だ、そこをサマルトとダイキが援護する形である。

クラフトは、傷ついた人々を救うべく甲板を駆けずり回っている。癒しの呪文を唱え、そしてアリナの援護をし……。

船員達も五人の姿に勇気付けられ、懸命に応戦していた。

その為だ、皮肉にもその為にミシアの姿が甲板にないことに、誰しも気づかなかったのである。

甲板で激戦が繰り広げられている中で、ミシアの心は跳ね上がっていた。今から自分は舞台に立つ、期待溢れる新人として華々しくデビューを飾るのだ。

その駒に、薄汚いメス豚のロザリンドを用いる。ミシアは、喉の奥で笑うと怪しげな微笑を浮かべて唇をそつと、舌で嘗めた。

「本当、幸運よねメス豚。美しくて優しい私に殺されて良かったわよねえ」

そう呟きながらチラリと傍らのロザリンドを見つめ、唇の端を持ち上げて薄く微笑む。

「さてと、そろそろね。いいこと、あなたはトビイの後を追って甲板へ飛び出すの。」

私は助けようとするのだけど、間に合わなくて海の底へと転落す

るあなた。自分を悔いて嘆き悲しむ私を、トビイが慰めてくれるの。……そういう筋書き、分かったかしら？」

ロザリンドは、かくかくと首を縦に振った。満足そうに笑うミシア、しかし大声を出せば気付かれるのであくまでも小声である。それが更に不気味だった。

「さあ……行きましようか」

ミシアが顎で指図すると、ロザリンドは焦点の合わない瞳でぎこちなく動き、ドアを開くと真っ直ぐに甲板へと飛び出す。多少、動きがぎこちないが幸いにも今は雨でここは甲板だ。”死体でなくとも”歩き辛いので、心配要らないだろう。

雨と風、雷の音でロザリンドがドアを開いた音など、誰にも届かない。戦闘中なことも加わり、周囲に構ってはいられないのだ。

しかし、余裕のあるトビイとアリナはその存在に気がついた。明らかに戦士でも、船員でもない姿の女が甲板を走っている。

訝しげに雨の中、その姿を見つめはつとしたアリナは行く手を阻む魔物を蹴散らし、庇おうと走った。

トビイもロザリンドのもとへと駆けつける、だが二人の中間地点ほどでロザリンドは大きく揺れた船体と、魔物の鋭い爪によって背中を引き裂かれ、荒れ狂う海へと投げ出された。

「ロザリンド！」

「ねえちゃん!?!」

トビイとアリナが同時に叫ぶ、身を乗り出して落下していくロザリンドを啞然と見つめた。ゆっくりと、頭部から海へと落ちていくその姿、あまりに美しく。金の髪がふわり、ゆらり。

船員達も何事かとその方向を見た、そう、ミシアに注目するものなど誰もいない。

平然とドアの物陰から事の成り行きを見守っていたミシアは、注意がそちらに惹きつけられたのを良い事に堂々と甲板へと足を踏み出すと、そこから一気に駆け出す、叫んだ。

「あぁっ、ロザリンドさんっ!」

やがて海に引きずりこまれるようにして、ロザリンドの姿は消えていった。眩い金の髪が、見えなくなる。海面は荒々しく、とても探すことなど出来ない。

啞然とその場に立ち尽くすトビイであったが、それでも急降下してきた魔物を視線を移す事無く、剣で一突きにした。緑色の粘つく液体がトビイの髪に、身体に降りかかる。が、それを気に留める事無く無言で、しかし憎悪の光を浮かべた瞳で残りの魔物を一掃していく。

まさに鬼神、アリナさえ声をかけられずに、唇を噛み締めながら痛々しくその姿を見つめるしかなかった。

心のざわめきを感じながら、再度戦闘に戻るアリナ。トビイは無茶をしないだろうから、と視線を外してふと。その瞳の端、青褪めた表情で立ち尽くしているミシアの姿が目飛び込んできた。

何気に見たが、そういえば戦闘中ミシアの姿を見ていなかった気がしてきた。不審に思い、敵を倒しながら見ていると、あまりにも青褪めていたせいなのか船員に声をかけられて、肩を貸されている。確かに人が死んだ、しかし今まで何度も戦闘に携わってきているであろう人物が、それくらいで眩暈を覚えるだろうか。第二の犠牲者を出さないために、少しでも戦力になる者は早めに戦闘を終わらせるべく、必死になるはずではないのか。

口元を押さえながらここからでもはつきりと分かるように、ミシアは涙を零している。

「ええい、泣くな鬱陶しい」

無意識の内に呟くアリナ。嘆く暇など、ない筈なのに。

それは戦闘が終了してからにしてもらいたい、哀情の念に耐えないのは分かる、しかし時と場合を考えて欲しい。

皆の注意力を乱しているから、そこを魔物に付け入られた。ミシアを支えている船員に、容赦なく爪を振り立てる魔物。間一髪ダイキが振りかぶった剣が見事喉元に入り、危機は切り抜けられた。

見るからに気分優れぬ様子、立っているのすらやっつであるミシ

アにダイキは心底心配して、休んでいてください、と声をかけている。

船員も同意し、ミシアを船内へと連れて行こうとするのだが、それを……拒否した。か細くも、内に情熱を秘めたような眩しい瞳、そして凜とした声ではつきりと。

「いいえ、私もお役に立たなければ……。私のせいで、あなた達を危険な目に合わせてしまいました。

ダイキが助けてくれたからよかったけれど、本当にごめんなさい。でも、大丈夫です、私、戦えます」

悪趣味だ。

先程まで悪態をつきながら人を嘲っていた人物と同一とは、全く思えない。二重人格なのか、演技が上手いのか……今は華奢だが芯のしっかりとした儂げな美女である。

ふらつく足取りで、今にも倒れてしまいそうな様子に、船員とダイキは押しとめた。だが、ミシアの決意は変わらない。

「無理しないで休んでいて下さい」

「そうだよ、この船員さんに連れて行ってもらいなよ。後はどうにかなるよ」

汗ばんでいる額、荒々しい呼吸、そんな中でも強引に笑顔を作り、微笑むミシア。しかし、顔を顰めて俯いた……ようにその場にいた二人は感じたのだが。

実際、俯きミシアは……愉快そうに笑ったのだ。

そう、全ては勿論演技である。気を失いそうな振り、心のうちでは自分の思い通りに進むこの状況が愉快で愉快で、興奮状態で見えていたのだ。

子供の頃、母と姉と行った劇場で見た女優など者ともしない自分の演技力。

呆気ないほど思い通り、この計画は完璧である。

ふふっ、まだまだ序の口だけだね？

「さあ、頑張りましょう。敵の数は減ってきていますものね」

狂喜の瞳で必死に笑い声を押し殺し……静かに、面を上げる。皆を勇気付けるかのように言ったその言葉、ダイキも船員も不安そうに見つめながらも頷いた。

この時点で船員・ポールはこの”大人しそうだが知的で、優しい心の美しい少女” ミシアに恋をしてしまったのだ。

流れるようなすべらかな髪、強き光を持った瞳、筋の通った鼻に薄くもほんのり紅に染まる唇。

横顔をぼう、っと見つめていた時、不意に瞳が交差した。そこでミシアがゆっくりと……微笑んだ。

もう、虜である。

無論、ミシアの計算である。自分に好意を寄せる男を、溺れさせることは簡単だった。一つ一つ、段階を踏んで視線を奪ってしまえば良い。あとは、最後に笑み。最上の、笑み。

アリナは舌打ちしてそんなポールの様子を見ていた、非常に気に喰わない。傍目でも分かるほど、ミシアに惹かれていた、一目瞭然だ。

マダーニの妹で、確かに頭の回転は速そうだった。しかしどうもアリナはいけ好かなかった。雰囲気が一歩下がって接してしまう、近寄り難い。それが、今日改めて再認識である。

アリナは唾を吐き捨てた。大きな瞳で睨み付けた魔物を蹴落として刺す、それは最後の一体であったようで周囲で歓声が巻き起こった。

軽く手を上げ、大きく肩で息をする。トビイの姿を捜して、近寄っていくアリナ。ミシアよりも今はトビイが心配だった。

剣に付着した魔物の体液を布で拭う、それから海を一瞥し、颯爽と立ち去るトビイ。一直線でドアに向かい、何者も寄せ付けられないような雰囲気、船内へと。

アリナは声をかけられずに遠目で見ていたが、クラフトと合流した。ようやく、額の汗を拭う。寝起きには激しすぎる運動だった、アリナは汗ばむ衣服を恨めしそうに見つめる。

周囲では魔物の死骸を、掛け声と共に海へと放り込んでいた。甲板の掃除を始め、魔物の体液を洗い流し、船員達は忙しく動いている。

此処から先は、アリナ達の出る幕ではない。

掃除をした後、聖水を丁寧に船体に撒くので、それが運ばれてきた。船を清めて、魔物との遭遇の確率を減らすのだ。

慌しく動く船員達の中、サマルトとダイキがこちらへ向かってきた。感謝の礼を述べられているらしく、照れくさそうに頭をかいている二人。多少落ち着いた気持ちでアリナは、手を上げる。

ミシアは何時の間にもやら多数の船員に取り囲まれ、治療を施していた。

そんな中、訝しげに何かを見つめていたクラフトに、アリナは小さく声をかけた。

「クラフト？ どうした」

一瞬引き攣ったクラフト。緊張の糸が解ける、安堵の様子でアリナをゆっくりと見やると悲しそうに呟いた。

「トビイ殿……かなり気落ちしてらっしゃいましたねえ。ご覧になられましたか海の中、餌を求めるものどもが……死骸を喰らっております。あれでは……」

「ああ、トビイのことは本当に気の毒だと思うよ。後でトビイに会いに行こうと思う」

「そうですね、時間を置いて訪れましょう。今は誰とも会いたくないでしょうから」

アリナとクラフトが口を嚙み、互いの表情をじっと見つめた。普段はこうするだけで赤面し、俯いてしまうクラフトだが今回ばかりはそうはいかない。

何か重要な、人目を憚らねばならない会話がある時、こうしてクラフトは常に無言になった。

言葉には出さずに、心で訴える。

アリナとて同じだった、気にかかる事が出来てしまったのだクラ

フトと内密で会話がしたい。軽く二人は頷き、ドアへと向かう。そんな二人の姿に、慌ててダイキとサマルトが後を追った。

ミシアは遠くから、そんな四人をひっそりと見つめ冷笑。

周りは自分に酔いしれている男共溢れ返っている、ミシアの先程の笑みすら、艶やかなものでしかない。溜息があちらこちらで聞こえた。

「さあ、他に怪我をなさっている方は？　どうか、あなたのその怪我を、私に治させてください」

ダメ押しに、ミシアは聖母のように船員達に微笑みかける。

笑う、笑う、心で笑う、嘲り笑う。

一人きりの勇者

地平線に太陽が沈みかけ、空が茜色に染まった頃。アリナとクラフトは「トビイの様子を見てくる」とダイキとサマルトに告げ、部屋を後にした。

ダイキとサマルトは二人して顔を見合わせどうしようか迷ったのだが、トビイのことはこれといって心配していなかったため、食事を摂る事にする。薄情にも思えるが確かに、付き合いは浅い。上に、アサギに関して良いイメージがない。

「トビイはさあ、何かこう……血が通ってないような感じだし。それにきつとあの美女だって気紛れで連れていただけだろ？ 落ち込んでないと思うんだよねー、本命アサギなわけだし。アサギにはやたら優しい雰囲気だけど」

「そういうものかな」

年上ぶって、呆れたようにトビイの悪態をつくサマルト、ダイキは軽く頷く。そういえば、トビイとサマルトはそう差のない年齢だがどちらが大人の男として相應しいかと問われれば、トビイだ。

ダイキの脳裏をそんな事が過ぎるが、あえて口にしない。

「あいつ、顔だけはいいいからな。まあ、やたらと強いしな。背も高いいし、やけにスタイルいいし。声もなかなかだし、なあ……。今頃適当に他の美女でも捜して、よろしくやってるよ」

「ふーん」

誉め言葉しか出てこなかったため、サマルトは軽く舌打ちし、自分の発言に嫌悪感を抱いたがダイキはお構いなしだ。頭をかきながら部屋を見渡す。異臭がするのだ、眉を潜めて”それ”を見た。

魔物の体液でやたら粘つく衣服、部屋の隅に三人分重ねてある。アリナにサマルト、ダイキの分だった。クラフトは自分で先程洗濯したようだ、綺麗好きらしい。

アリナは自分で洗って欲しいものだが、衣服を脱ぎ捨てそのまま

ほったらかしである。

二人は顔を見合わせると、苦笑いで重たい腰を上げた。洗濯場へ出向き洗う事にしたのだ、木の枝を結って作ってある籠にそれらを押し込めると、サマルトは持ち上げる。

鼻を悪臭が刺激する、思わず顔を顰めて鼻で息をするのをやめると大きく口で呼吸した。流石に強烈だった、よくもまあ、今まで部屋に置いておけたものである。

戦闘後の軽い興奮状態で、そこまで意識が行き届かなかったのだ。

「くっせえ！ 食事の前に嗅ぐもんじゃないな」

部屋を出て、真っ直ぐ洗濯場へと向かう二人は打ち溶け合っていた。互いに一人きり同士、常に一緒なので親密度は上がるだろう。

「持つの、代わるよ」

ダイキが声をかけるとサマルトは不思議そうに首を振り、瞳を丸くする。何気なく言ったダイキの一言だった。

「何言ってるんだ、お前は俺より年下なんだから大人しく黙ってついてこればいいよ。こういうのは年上の役目だ」

妙に『年上』を強調するが、地球だったらこういう嫌な仕事は年下の役目だ。必死で運ぶサマルトを見ながら、嬉しくなってダイキは微笑む。

初めて見た時は、すかした奴だと思っていたけど結構面倒見の良い奴なんだ……ダイキは、肩を軽く竦めると大人しくついていく。

一国の王子のはずだ、けれども進んで嫌な仕事もするし、威張り散らさない。口は確かに悪いが、可愛らしい程度である。

そんな二人の横を通りすぎる人々は、その悪臭に鼻を押さえて顔を顰めると一目散に逃げ出していった。子供達は泣き出すし、大騒ぎである。

「船内迷惑だな」

「体液が美味しい食べ物香りだったらいいのになあ」

困り果てる二人、しかし顔を見合わせると勢い良く吹き出し、足

を速めた。

ようやく到着した洗濯場で、仲良く二人で衣服を洗う。戦闘終了後水浴びをした際にこれも洗うべきだったと、後悔した。

が、疲労感で洗濯まで行き着かなかったのだから仕方がない。

魔物の体液が衣服に染み付いて頑丈な汚れとなっている、船員が見かねて洗剤をかけてくれるがそれでもなかなか汚れは落ちなかった。思わず、ダイキはばやいてしまう。

「あー、洗濯機が欲しいー。漂白剤に柔軟剤が欲しいー」

「？ 何それ？」

「俺達の世界にある、洗濯出来る便利な代物で、ボタンを押せば一気に綺麗になつて出てくるんだ」

「すっげー!!」

手で洗濯など、ダイキは産まれて初めてだ。稀に洗濯を手伝わされるぐらいである、勝手はわからないが懸命に洗濯板で布をこすった。

二人は食事のために懸命に洗濯をした、匂いが取れて、染みは限界まで落とした。干し場に男二人で不器用に干し、食堂に向かうことにする。多少歪んでいるが、仕方がない。

腹に入ればなんでもよかったので、適当にサマルトが注文してくれた。臭い香りの中に居ても、空腹だけは我慢出来ない。二人ともメニューの文字が読めなかったが、値段を見てそれらしいものを選択。

出てきたのはカレーライスだった、ビンゴである。一番安いものを選んで正解だったようだ、間違えて注文してしまったチキンソテーと共に二人はがつついて、暫く食堂で会話を楽しんだ。

初の一人きりでの戦闘後、ようやく肩の荷を降ろし安堵の溜息を漏らしたダイキ。

微かに泣きそうだった、一人ぼっちの勇者。けれど近い歳で話の合うサマルトがメンバーにいてくれて、心から感謝し、安心した。

「ありがとう」

「あ？ 何が？」

「こつちの話」

不思議そうに見てくるサマルトに、ダイキは窓から外を見上げる。星が見えてきた、先程の雨は何処へやら雲ひとつない夜空が広がっていた。

美女二人の死、覆い被さる苦痛

その頃トビイはロザリンドの部屋で一人、ワインを呑んでいた。先程の戦闘での死者はロザリンドのみだ、主を失くした部屋。だが、ロザリンドがこの部屋の支払いを済ませていた為に、トビイは自室からこちらへと移っていた。先にロザリンドからの申請もあつて、この部屋の住人となっているトビイは用意されていたワインを呑み続けている。

テーブルの上に空き瓶が二本転がっている、今三本目が空になるうとしていた。

椅子に座り、片肘をテーブルにつきながら頂垂れる。意識が朦朧としてくる、疲労で酒の回りが速いのだろう。普段ならば、ここまです泥酔はしない。トビイは酒豪だ、だが精神面も手伝つて酒に沈む。つい先程まで一緒に酒を飲み、ベッドを共にしたこの部屋の主はもう、いない。

空のワイングラスが、目の前に置いてある。それを見つめると、自然にロザリンドの顔が浮かび上がってきた。金髪に豊満な肉体の年上の美女……ロザリンド以外にもう一人、トビイは知っている。

その女性も、死んでしまった。

トビイの住んでいた村の住人を惨殺し、気紛れで魔界イヴァンへと連れ去った麗しき魔族の女”マドリード”。その人である。

息子、いや、恋人のように育て、トビイの戦闘能力を格段に引き上げたのも他でもない、マドリードだった。その弟のサイゴンに剣を鍛えられ、秘められた自分の才能を發揮させ魔族軍のドラゴンナイトの称号も得た。

マドリードの死は看取っていないが、亡骸は見た。

ロザリンドの亡骸は見えていないが、死に際は見た。

二人の死が重なる、二つの映像が脳内で再生される、思わずトビイは頭を大きく振った。鮮血が二人の身体を流れ落ちる、命の灯火

が徐々に小さくなっていき、風に吹き消された。

暗闇の中、紅が映え、二人の亡骸が無造作にトビイの前に置かれている。

しかしその亡骸は二人の美しさを失ってはいない、光り輝くように空気に溶け込んでいるのだ。

穏やかに微笑むマドリード、優しく微笑むロザリンド、思わずトビイは叫んだ。

弾かれたように二人の名前を叫んだ……返事が、返ってきた。

「トビイ！ トビイ！」

肩を揺すられ、はつとしてトビイは我に返る。そこには亜麻色の髪のアリナが立っていた、心配そうに覗き込んでいる。

「ア、リナ」

虚ろに半ば驚いてトビイは身体を起こそうとした、が、急に力が抜ける。意識が戻っていく、暗闇から薄暗い部屋へと戻っていく。

クラフトがアリナの傍らで不安そうに見つめていた、アリナが必死に名前を呼んでいる。

ドアが、見えた。その右側にトビイの剣・ブリュンヒルデが立ってかけてある。

荷物は二人分、皮の袋にはトビイの衣服や薬草などが入っているが、もう一つの高価そうなバッグはロザリンドのものだ。

視界がはつきりとしてきた、部屋で酒を飲んでいて……意識が朦朧としていたのだろう。幻覚を見た。夢か、現か、幻か。

「しっかりしろよ、大丈夫か？」

アリナの男のように無骨だが、それでもやはりか細い指がトビイの頬に当たる。首をゆっくりと振りながら軽く呻いて「大丈夫だ」、と呟いた。

クラフトが空のワインボトルを溜息混じりに片付けつつ「呑みすぎです、身体を壊しますよ」ときつい口調で言ったのが、はつきりと聞き取れる。苦笑いで頷くトビイ、ようやく意識が鮮明になった。「そう思って消化に良い、暖かなものを貰ってきましたよ。まさか

これだけをこのペースで呑んでいるとは思ってもみませんでした。大きな溜息と共に、クラフトは借りてきた籠から食事を取り出した。暖かな空気を感ずる、鼻につく美味しそうな香りにトビイは瞳を擦ってテーブルの上を見つめる。

料理に興味を示したトビイに安堵の溜息を吐いた二人、アリナはカップをとり、ポットから注ぐとベッドに腰掛けて口に含む。

中身はラベンダティーだった、精神を落ち着かせる作用がある、まだ暖かいそれは脳を安らぎへと導いた。トビイも無言でそれを飲み干した、気が楽になったような気さえする。

差し出されたのはシナモンをたっぷり振りかけた、バナナサンドイッチパンだ。バナナを軽くバターで炒めてあり、パンも焼き立てでシナモンの香りを一掃引き立てている。

無言で食べ始めたトビイ、食欲はあるようである。肩を竦めて微笑んだクラフトはようやく、自身もそつと落ち着いて近くのソファに腰掛ける。食事しながら、アリナが背中からトビイに語りかけた。「ボク、トビイは人が死んでも動揺しないと思ってたよ。意外」

薄く微笑みながら、トビイはアリナに振り返った。幾分かいつもの状態に戻ってきたようである、勝気な瞳は濁っていない。

「ふん、一応人間なんでね。知り合いが死ねば誰だって堪えるだろ？」

「ニヤリ、と笑いながらアリナがすぐさま言葉を返す。

「そうだけどさ、トビイはアサギ以外の人物なんて、目に入っていないと思っただから」

美女ロザリンドとトビイの関係など、言わなくてももお見通しだ。ただの気紛れな遊び相手だとばかり思っていた、だから然程痛手は受けていないだろう、と思っていたアリナ。

「愛してるのは、アサギだけだ。昔も今も、これから先もずっと、な。ただ、知り合いの死が以前もあって、それを思い出した。似ていたんだロザリンドと」

急にトビイの声のトーンが低くなった、アリナは思わず口を閉じ

る。先程の明るくなりかけた雰囲気、一気に壊れていってしまう。沈黙が訪れ、アリナは自分の発言に舌打ちした、が、そんな中で口を開いたのはトビイである。

「すまなかつたな、わざわざ来てくれたのに。食事、ありがとう」
照れたように呟いたその声と台詞にアリナはこそばゆさを感じ、思わず吹き出してしまふ。クラフトは瞳を丸くさせて、慌てて駆け寄った。

「知らなかつた、謝れるんだ」

「やはり熱でもあるのではっ」

真剣に尋ねる二人に、呆れてトビイは空になったカップを置くと、軽く睨みつける。

「お前らは一体オレの事をなんだと……」

雰囲気が変わる、待ってましたとばかりアリナが騒ぐ。トビイが顔を顰め、クラフトが穏やかに微笑んだ。暫く冗談を言い合っていたのだが、話が妙な展開になってきた。

「ね、アサギの何処が好き？ ボクはね、小さくてイイ香りがして、可愛い笑顔とか……ああ、全部かも」

嬉しそうに語るアリナを落胆気味に見つめるクラフト、同情の目を向けるトビイ。が、サンドイッチを食べ終わるとさらり、と言いつ放った。

「何処と言われても、アサギの全てだ」

足を組み、ベッドに腰掛けていたアリナは予想通りの返答に、つまらなさそうに寝転がる。

「それじゃわかんないよ、もう少し詳しくなんない？」

「そうは言われても、全部は全部だ。出来ることなら……そうだな、秘密の部屋にアサギを閉じ込めて、監禁しながら見つめて居たい位大事だ」

残りのお茶を啜っていたクラフトは、盛大に吹き出して椅子から転げ落ちる。アリナはガバツ、と起き上がると、奥が深いなあ、と妙に同感していた。

危険思想ですね……呟きながらどうにか立ち上がったクラフトだが、次のアリナの発言に再度後ろに転倒した。

「殺しちゃいたいほど好き、とは違うの？ 襲っちゃいたいとは思わないわけ？」

「ごはあー」

床でのた打ち回っているクラフトを尻目に、二人の会話は急上昇。「違うな、アサギが微笑んでいてくれないと全く意味がない。泣き顔も……可愛いが、やはり群を抜いて笑顔がイイ。襲いたいのには山々だが、泣かせるのは趣味じゃないんだ」

「げほーげふあー」

「そうなの？ えー、ボクだったら我慢できなくて犯っちゃいそうだよ。今度ゆっくり手取り足取り教えてあげるの」

「げろろーん」

「ふん、女に何ができるんだか」

「何言ってるのさトビィ。知らない？ 女同士の方が気持ちいいこと出来るんだぜ？」

「悪いな、アリナよりオレのほうが絶対、アサギを悦ばせられる」

「げほげほげほげほげほげー」

「……言ってくれるじゃないか、じゃあ実際今度アサギで確かめてみようよ」

「おえーげふげふおあああ」

床で喚きつつ転がっていたクラフト、煩すぎて二人は一喝。会話の途中に妙な邪魔が入っては、確かにイラつく。

「うるさい！」

「今いいとこなんだから！」

いきなり睨まれ大人しく「ごめんなさい」とひれ伏すかと思えば、クラフトとて負けてはいなかった。赤面しながら「そんなことは許しませんよ！」と珍しく怒鳴り、持ってきた籠にすっかり空になった皿やカップを押し込めると、アリナの腕を掴んで部屋を出て行く。純朴なクラフトには、二人の会話は刺激的を通り過ぎて、猟奇的

にしか聴こえなかったらしい。

ばいばーい、トビイ！ と陽気なアリナの声が消え、再び部屋は静寂に包まれた。

ふと、部屋の窓から外を覗くと星達が夜空に輝いている。

眠るか…… 呟き先程までアリナが横になっていた場所にトビイは転がると瞳を閉じる。幸い戦闘終了後、洗濯もシャワーも済ませておいたのだ、後は眠るだけだった。

酒はまだ残っている、すぐにトビイは深い眠りに誘われた。

溺れる色欲

その頃、廊下でアリナとクラフトはぼったりダイキとサマルトに出くわした。食堂に借りた籠を返しに行く途中だったのだ、頬を膨らませて説教しているクラフトの傍ら、アリナが二人を見つけ、天からの助けとばかり大きく手を振る。

四人は合流し、共に部屋へと戻った。

クラフトの説教は、多少和らいだのでアリナとしては上々。

「そういえばミシアは熱の子の看病に呼ばれて出掛けたよ？ 今日
はアリナ一人だと思う」

「へえ」

頷きながらアリナは内心嬉しく思った、そして湧き上がる不信感。ミシア。どうも引つかかる。アリナが眉を顰めてどっかりとベツドに座れば、サマルトが貰ってきたりんごを齧り。

地球でいう乾燥機並みに熱い部屋で干されていた洗濯物はすっかり乾いており、丁寧にクラフトが取り込んで皺を伸ばして畳み始める。

が、徐に面を上げるとにこりと微笑んで、一言。

「いいえ、一人ではありませんよ？ 今日とはたっぷりと説教ですから御覚悟を」

その言葉に爆笑するサマルトとダイキ、アリナだけが唇を尖らせてそっぽを向いた。

しかし、解っていた。

クラフトは何かを話すつもりだ、悟られないようにわざと茶化しただけだ。がんばれー、と笑うサマルトの傍らで、二人は密かに、軽く頷く。おそらく、思うことは二人とも同じ。”ミシア”だ。

「来てくれたんですね、ミシアさん！」

薄暗い物置小屋、その中にランプを持って嬉しそうに佇んでいる

男がいた。ミシアは「しーっ」と、悪戯っぽく笑い、そっと近づくとランプの光に慣れるように見つめる。

ここは客室の下、雑用の道具などが置いてある場所だった。武器も置いてあるし、大量に薬草が入った壺もあり、船員達は当番でこの場所の見回り及び掃除をする。

ミシアが明かりを照らして見渡せば、成程、懸命に掃除してくれた事が解るほど綺麗になっている。埃を落とし、床には上等そうな布を敷き、ワインも用意されていた。

「ミシアさんが来てくれるっていうから、頑張ったんだ」

「ありがとう、とても優しいのねポール」

そう、甲板でミシアに一番最初に接触した男、ポールである。無邪気に微笑むポールに、鷹揚に微笑み返した。

「だって美しいミシアさんを汚らしい場所へ招き入れるわけにはいかないからね。ねえ、恋人っているの？」

ワインを二つのグラスに注ぐ、そっと布の上に座り乾杯してから口に含む。不安そうに、背伸びして無理に自分を作っているかのようにはポールは尋ねた。

焦らす様にミシアは髪をかき上げながら、ゆっくりとワインを呑みつつ口を開く。含み笑いで、まるで子犬のようなポールを見つめつつ。

「勿論いるわよ？ この船に乗っているの、素敵な人よ」

そう言っつてうっとり瞳を閉じるミシア、身体を小刻みに震わせてポールが大声上げて掴みかかる。

「別れてよ、別れて！」

すっかり落ち着きを失くしているが、それとは裏腹にミシアは婀娜っぽく囁く。

「しー……大声出しては、駄目よ？」

しかし、小さい子が駄々をこねるかのようには、ポールはミシアをそのまま押し倒した。ワイングラスが宙を舞い、ミシアの衣服に中身が零れて染みていく。

それを夢中で吸いながら、ポールは徐に顔を上げると切なそうに叫ぶ。

「恋人がいるんだよ、僕にも。故郷の村に、幼馴染で。でも、でも、ミシアさんを選ぶんだ、だからミシアさんも僕を選んで！」

「あらあら、いいの？ 結構酷いのねポール。そんなこと言って、今までも女の子を引つ掛けてきたんじゃないの？ あなた母性本能擦るタイプだものね。艶聞が耐えない気がするわ」

「違うよ、今回が初めて。ミシアさんだからだよ。責任とって、あなたがそんなに美しいから、狂ったんだ」

そう、狂った。ミシアの妖しい雰囲気、酔った。酒のせいではない、瞳は淀んで光を失っている……正気ではない。

あのロザリンドと同じような『人形』だ。それでもポールには意識が残っていた、ミシアの『奴隷』になりたいというそんな、意識が。

ここまでできて、ようやくミシアは喉の奥で笑い始める。愛しそうにポールを胸で抱き締めながら、髪を撫でる。

最高の悦楽に入ろうとしていた、優しく優しく、ポールの背中をさすり。耳元に吐息を吹きかければ、ポールが歓喜の声を漏らす。

「ねえ、抱かせて。何でもするよ、愛してるんだ」

幼子が頬親の乳を欲するように、ポールは夢中でミシアの胸を弄る。

「いい子ね、許してあげる。トビイもこれくらい大胆だったらよいのに、ね。ああそう、ポール。私のことは『ミシア』と呼んで。それからあの人みたく力強くなきゃ……駄目よ？」

うわ言の様に呟くと、ミシアはそつと腰の皮袋から小瓶を取り出し、その中の液体を飲み干した。それはすべらかに喉を流れ落ちて、脳天を刺激する、思わず瞳を閉じる。

綺麗な景色が見えた、花畑だ、ミシアが中心に佇んでおり、楽しそうに微笑んでいる。が、その花畑の外には醜い虫達が蠢きあっていた。

その光景はゆつくりと変貌し、ミシアはこの世のありとあらゆる宝石を散りばめた様な豪華な椅子に深く堂々と腰掛け。満足そうに周りを見渡している、鼻で笑いつつ高圧的な態度で。

……なんということだろうか、半裸の美少年達に囲ませていた。逆ハーレム、だ。少年達はちやほやとミシアを取り囲んでいる、その中で高笑いをするミシア。きわどい衣装、美しい引き締まった身体がミシアの視界を愉ませていた。

その遙か下の方で、美少女達が小汚い衣服を着せられて床を這いつくばって拭いている。ミシアから見れば自分より同姓はみんな格下、どれだけ美しくとも醜悪にしか見えないらしく。

ミシアは手元のスープレ皿を少女に不意に投げつけた、なんとそこにはアリナやアサギまでもが居た。

高笑いしながら隣の男を上目遣い、その男は優しく微笑み情熱的な口付けを交わす。周囲の美少年達から羨望の溜息が漏れる、ここぞとばかり、同じようにミシアにねだった。

だが、悠然とミシアは首を振る。皆はがっくりと大きく肩を下ろし、それでも諦め持ち場に戻った。

知っているのだ、ミシアの心は彼のものだけであると。あの二人こそ、この地上で最強の恋人、美男美女の恋人同士、誰も他に適わない。

そう、言うまでもなく男とはトビイだ。

ミシアがゆつくりと瞳を開いた、傍から見ればポール以外の何者でもない男、だが麻薬の幻覚でミシアにはトビイに映っている。

「ああ、トビイ！ 嬉しい来てくれたのね。駄目よ、あぁっ、そんなに激しくしちゃうっ」

激しく抱き合う二人、上擦るミシアの声。もはや、狂喜の宴ではない。

「愛してるわ、トビイ」

「愛してるよ、ミシア」

すっかりミシアに翻弄されたポール、ミシアが他の男の名を呼ば

うが全くお構いなしである。抱けるだけで、天にも昇る幸福感に包まれた。

「ああ、トビイっ!」

そんなミシアが勝手に創り上げた妄想の中でトビイと楽しんでる頃、本物のトビイは鬱蒼とした気分でベッドから這い出た。

浅い眠りを繰り返していたのだが、気だるく、背筋が寒く、吐き気と眩暈に襲われる。頭部をゆっくりと動かしつつ、溜息を吐き、水入れから水を飲む。グラスに移し変えるのが、面倒だった。ともかく喉の渴きを潤したい。

胸が疼く、苛立ちが湧き上がる……なんだこれは。

「くそっ! 最近増えたなこの症状。何時からだったか?」

トビイは枕に拳を叩き込む、窓を開けて夜風に当たる。夜気を漂わせる星空に、心を落ち着かせてアサギを想う。

「アサギ」

瞳を閉じて、想いを馳せる。最初に会ったのはあの不可思議な空間、神秘的な部屋。気がつけば花の香るシートに包まれて眠っていた、傍らでアサギが心配そうに見つめていた。

確かに自分は虫の息だった、魔族のオジロンに多勢で卑劣な罠をかけられて、敗北したあの日。

「はっ、プライド? そんなもん、ないね、俺の求めるものは勝利と名声。貴様に勝てば見事この俺様もドラゴンナイトに昇格だ! わははは、なんだ、少しくらい能力が秀でているからってただの、人間のくせに」

何かと張り合ってきたオジロンが、今此処で思い出される。トビイは全く相手にしていなかったが、あちらは執着していた。非常に厄介な相手だ。

「あいつもミシアと同じくらい鬱陶しいな……全く、ろくな奴がない」

流石のトビイとて、あの時ばかりは死を覚悟した、しかし、そこ

でアサギに会えたのだ。

アサギが、救出してくれた。瀕死のトビイを、護り抜いてくれた。
「アサギ、待っている。今、助けてやるから」

不調和音

目が冴えてしまったトビイ、再度眠ろうかとも思ったが夜風に当たるべく部屋を出て甲板へと移動する。雨は上がり澄んだ空に輝く星々が浮かんでいた、夏といえどもまだ夜中は涼しく過ごしやすい、そしてここは海上である尚更気温も低いだろう。

ゆらりと波打つ海面を見つめる、今ここで自分の相棒の一体である水竜オフィリアが顔を出してくれたらどんなに助かる事か。

トビイは静かに呼吸を整え、その場で全神経を集中させ瞳を閉じる。一か八か、やってみることにした。”相棒を、呼ぶのだ”。

応えろ、クレシダ、デズデモーナ……オフィリア

ひよっとすると、水面に降り立って時下に手を下し呼べば水竜のオフィリアが反応するかもしれない、とトビイはふと思いつく。

早朝、船員かあの話の解りそうな船長にでも緊急脱出用の小船が何かで、海面に降りられないか問う事にした。南下しているらしいトビイの相棒達、しかし海上は広大だ擦れ違いだけは避けたい。

身体も冷えたので船室へと戻るトビイは、不意に昼間のミシアを思い出す。何故か自分にしがみ付いていたミシア、非常に鬱陶しい初めて会ったのは例の洞窟で、他の仲間達と同様出会ったわけだが。

トビイは表情を翳らせた、そういうえばそこから妙に熱い視線を注がれていたような気がしてくる。特に何もした記憶はないのだが、やたらと視線が気になった。

女から視線を受ける事は稀ではないため相手にもしなかったし、気にする素振りも見せなかったのだが……。アサギと共に居る時ほぼ毎回視界に入ってきたので、『ウザイ』と判断したのだがやはり偶然ではないようだ。

故意だろう。

深い溜息一つ、トビイは船室に戻るとベッドには入らずに代わり

にワインのボトルを一本手にして再度甲板へと舞い戻った。

コルクをあけて、海へとワインを流すように降り注ぐ、キラキラと光りながら上等のワインが零れ落ちた。

「マドリード……安らかに眠れ……」

せめてもの饞、花でも贈りたいが海上だ、ない。結果トビイが考えた饞がワインである、戦闘に巻き込んでしまったのは自分かもしれない、と微かに自責の念に囚われた。

が、悔いても過去は変わらない、トビイは唇を噛み締めるとようやく眠る為に戻った。

一方戦闘で疲労し深い眠りにサマルトとダイキが就いている頃、アリナとクラフトは水を手にしてトビイがいる場所とは反対の甲板の上にいる。

アリナとミシアの部屋で会話しようかとも思ったのだが、万が一ミシアが戻ってくると非常に厄介だった。他に部屋も思いつかず、ならば四方を自由に見渡せ、小声で話せば他人に聞かれることもない場所を、と甲板を選択したのだ。

手すりに凭ればあとは正面と左右にさえ気を配ればよい、背面は海である。

「なんとなく、考えている事は同じだと思っただけど」

口を開いたアリナにクラフトが同意、二人して苦笑い。

「ミシア殿のことですが」

やっぱり、と小さい溜息、アリナが手にしていた水を一気に喉へと流し込む。

「今回の件ですがミシア殿の姿、戦闘中に目撃されましたか？」

「いいや、あの綺麗なねーちゃんが、投げ出されるまで全く気づかなかったね」

「私です。というのも、彼女が得意とする風の呪文も、治癒の魔法も、そして弓矢ですら……見ていません」

治癒魔法が得意なクラフト故に、もし自分と同等の治癒要員が居

るならば分かる筈だ、分担も減る。

しかし、自分以外に治癒に当たっていたのは船員の男が二名ほど、それもあまり得意ではないのかクラフトに責任がかかってきたのだ、多大な。ミシアが居るなれば、そんなことにはならなかったのではないかと、と。

そして風の呪文だ。トビイ、アリナ、クラフト、サマルト、ダイキ……この五人は使用できない、唯一ミシアだけが詠唱可能である。船員にも魔法使いが居たようだが、使用していない、誰も。

そう、”誰も” 唱えなかったのだ。

戦場は雨、しかし風の呪文とて効果が激減するわけではない、雨も切り裂くだろうし効果的な筈だ、それをミシアは使用しなかった。最後に弓。

先の戦闘を見ていた限りでは結構な名手だったはずだ、翼あるガールが今回相手だった、翼に当てれば効果的だったろうに。弓矢を見ていない、甲板にも落下していない。

そう、ミシアがその場に居た形跡が……なかったのだ。

貴重な戦闘要員でありながら、風の魔法も、治癒の魔法も、弓矢も使用していない……。

ならば。

「ミシア殿、何処にいたのでしょうか？」

甲板へ出るまではあの場に共に居た、一緒に来たのだから当然である。

「ボクも戦闘に夢中で確かに100%、とは言いつれぬけどさ、確かに居なかった気がするんだよねミシア。でも」

「マドリッド殿が甲板へ飛び出していった頃には、居た。声を聞いています」

「そしてそこから、戦闘を何度も経験している人物なのに、貧血だか眩暈だかで倒れこむように船員の世話になっていた。ボクはそれが非常に気に喰わないね」

「その後は治癒の為”目立って”いましたね、そう、治癒すれば”

目立つ”のです」

クラフトが声を一層潜めた、つまり、何が言いたいのかというところ二人同時に声を発する。

「確実にあの時まで、ミシアは甲板に居なかった」

そういうことである、二人は気がついたのだ。

居ないとなると、何をしていたのか？ 戦闘を放棄してまで、ミシアがしていたことは？

「問い質そう、あまりにも不自然すぎる」

「ええ、しかし慎重に。……トビイ殿にも話そうかと思うのですが、流石に本日は気落ちしていたので、遠慮しました」

「そうだな、仲間は多いほうが良い。サマルトとダイキはよそう、まだ若いし。それに、万が一。ミシアの真実の行動によっては、衝撃を受けかねない」

アリナの言葉にクラフトは軽く吹いた、アリナとてサマルトとそう歳は変わらないはずだ。”若い”のはアリナも同じである。

些か不機嫌そうに唇を尖らせるアリナに、慌ててクラフトが謝罪する。

「まさかとは思うけど、あのねーちゃんの死に関与してないよなあ？」

ぼつり、とアリナが漏らした。

流石にそれは、と苦笑いで返答が来ると思ったのだが、クラフトは押し黙ったままである。意外そうに、そして動揺を隠せずにアリナはクラフトを見た。

「何故、ロザリンド殿はトビイ殿に忠告されていたのにもかかわらず、甲板へ来たのでしょうか。トビイ殿の身の上を案じ、影から見守っていた……なら解らなくもないのです。しかし、あの時トビイ殿が窮地に立たされていたわけではありません。飛び出した理由が見つからないのです」

「……それって」

「疑うのは失礼かもしれませんが、しかし我らが甲板へ出てから、残

されたのはミシア殿にロザリンド殿、二人です。そのうち片方は…
…亡くなりました。ある意味不可解な死です」

「……………」
「見間違いかもしれないのですが……………」

ここまで一気に語ったクラフト、突如口籠る。眉を吊り上げながらアリナは低く続ける、と言った。

多少戸惑っていたが意を決し、クラフトは重く口を開く。

「ロザリンド殿に、何やら刃物が突き刺さって居た様な気がするのです。無論、錯覚かもしれませんが、雨で視界は遮られます。しかし何やら光るものが見受けられました。それから落下も不自然だったような気も」

「つまり、クラフト。お前が言いたいのには」

「ミシア殿がロザリンド殿を刺したのではないか、ということですよ。流石にそこまでアリナもミシアを疑わなかった、クラフトに相談しようとは思ったが、ロザリンド殺しの犯人をミシアと推測するだなんてことはしなかった。

しかし、あのクラフトが。

慎重な行動と簡単には人を信用しない節があるクラフトではあったのだが、旅の仲間を…………殺人容疑で疑心の瞳で見たとは。

音が鳴るほど豪快に唾を飲み込むアリナ、啞然とクラフトを見つめる。

「あくまで、私の憶測です。しかし。不自然な箇所が多すぎて」

「さて、ロザリンドがミシアによって手にかけられたのなら甲板を走れないだろ？ 刺されたのなら倒れてもいいだろう？」

「それが問題です」

「だろ？ どうして飛躍してそんな話になったんだよ！？」

「トビイ殿を庇うわけでもなく、突如出てきたロザリンド殿の行動が、どうしても不可解だからです。自ら海へと落下した気がして仕方ありません。そんな行動に出る直前に会っていた人物がミシア殿その人であるから…………それだけですけれどね」

口を開いて言葉を失い、呆けるアリナ。

「そして以前から気になっていたので、ミシア殿、異質な感じがしてなりません」

異質。

クラフトが喉を潤すために水を口に含み、微かに瞳を閉じる。満天の星空を見上げて、息をゆっくり吐き出す。

「こつ……上手く言えないのですが。何か……違和感が」

魔力のないアリナには感じられない、クラフトの言う『ミシアの異質』それが何か解らないが人一倍感覚の鋭いクラフトが言うのだから間違いではないだろう。

しかし、間違いではないのならそれは……ミシアが。旅の仲間として共にしてきたミシアが。

アリナは、乾いた笑い声を出すしか、なかった。ミシアを張り込む必要があるそうだと、疑いが晴れば、それで良いのだから。

「簡単に尋問、では済まないかもしれませんが。私の思い通りならば、慎重に事を進めないと。お嬢は出ないで下さいね、感情的になりすぎますから。ともかく、まずはトビイ殿です、彼に相談しましょう」

「あ、ああ。しかしクラフト、よくトビイは無条件で信頼したね？」
まだ出遭って間もない筈だ、ここまで重要な話をする気によくなくなったな、とアリナは疑問だった。

「殺されたかもしれない口ザリンド殿と親しかった人物である、それと。確かにトビイ殿は何か我らに隠している事がありそうですが、今は必要もないと感じました。ただ、勇者であるアサギちゃんへの情熱はひよつとすると誰よりも強いものです。ならば勇者の味方である我らの味方でしょう」

「そういえばトビイにも訊きたいことがあったな、魔界育ちって言うってた」

「ええ、それは是非訊いてみましょう。味方に間違いはないと思うのですが……辛い思い出ならば関与は控えますけれどね」

「寝るか、クラフト。流石に頭の回転が鈍い」

「そうしましょう」

二人は、妙な胸騒ぎを感じながらも、部屋へと戻る。

ここは、海上だ。逃げ場がない。

それが吉と出るか凶と出るか、検討つかない。

「ともかく、明日ミシアの足止めをしてトビイに接触しよう。誰がやる？」

「私がミシア殿の足止めをします、お嬢はトビイ殿に説明を」「りょーかい」

欠伸をして、部屋の前で別れた。ベッドに倒れこんでアリナは瞬時に深い眠りへと誘われる、クラフトは唇を噛み締め不安そうに隣の部屋を見た。

ミシアがもし、自分の推理通りの行動をしていたとすると。

アリナが、同室のアリナが今現在、最も危険ではないのか？

祈るように部屋の窓から夜空を見上げるクラフト、数分、祈りを捧げる。今宵はミシアはいない、それだけが救いだった。

翌日、先に眠っていたサマルトとダイキはクラフトよりも早くに目が覚めた。目を擦りながらも甲板に出ると二人して素振りを始める、船員達がそんな二人を感じて見つめている。昨日の戦闘で二人はちよつとした、有名人になった。

「お前、結構剣の腕いいよな」

「剣道のお陰かな」

じんわりと額に汗を浮かべながら、ダイキはそう軽く微笑んで返答する。そう、ダイキは剣道を小学生に入った頃から習っているのだ。

勇者の中ではアサギと並んで剣、というものに近いだろう。最も、真剣は初めてだ。

「サマルトは皇子なのに親しみやすい」

「悪かったな、気品がなくて」

不貞腐れたようにとれるサマルトの言葉に、慌てて剣を振るのを

やめるとダイキは弁解を始める。

「が、赤面してこちらを向かないサマルトに気がついたのだ。照れているようだ。吹き出したいのを堪えて、ダイキは素振りを再開、確実に二人の仲は良くなつていく。」

太陽が上がってきたので、空腹もあり部屋へと戻るとクラフトが起きていた。

「お嬢を起こしたら、皆で朝食でも食べに行きましょう」

クレオの字が読めるクラフト達が同行するので、好きなメニューが食べられる事に二人は嬉しい悲鳴を上げる。文字が読めないというのは、非常に不便だと痛感。

トビイも誘つて五人で食堂へと向かう、朝は簡単なものしか選べないらしく、それでも地球の喫茶店の様に三種類から選択可能だった。

船の食料は限られてくるので簡素なものだが、それでも十分だ。

皆揃つて魚のフライを挟んだサンドイッチを注文、それに珈琲。

そこへ船長が現れた、深く頭を下げ言い出したことは『船員の戦闘指導』。昨日の能力を見て、依頼料は当然支払うので船員を鍛えて欲しいとのこと。毎回の食事をつけて貰えればそれで、と二つ返事で同意する。

講師は二人だ、トビイが剣を教える事になった。サマルトとダイキも無論、参加する。

アリナが技術を担当、武器がない場合は自身の身体が頼れる唯一の武器となる。

合間を見て、クラフトがダイキに呪文を教える事にしたわけで、勇者が一人のこのパーティはそれが故に多彩な技を教えてもらえそうである。

早速朝食後、手の空いた船員達から順に甲板にてトビイの指導が開始された。最初は渋々だったが、食費が免除になるのでやらないわけにはいかないトビイ。

客も暇を持て余していたが、その光景を見て時間を潰す。

「まずは基礎体力の向上からだ、剣は使わない。掃除ついでに甲板を磨く事往復100回、ただし立ち止まるのは却下」

非難の声が上がるが、船長は上機嫌だ、掃除も出来て一石二鳥である。

「モップを使用していいんだ、感謝しろ。本来ならば雑巾でやらせるところだ」

腕を組んで手すりにもたれて余裕たつぷりに言い放つトビイ、軽く嘲笑っている気がする。当然サマルトとダイキもそこに混じって非難の声を上げていた。

しかし、トビイの意図があった。

モップを手にして慣れさせ、武器代わりにするつもりである。使えるものは、とことん使用する。不慣れな剣より、慣れ親しんだモップが、実戦でどれだけ役立つ事か。

文句を言いたくとも昨日の実力を目にはしているのだ、反論出来ず。渋々と掃除を開始する。

その間トビイは空くので指示だけ出して、順にサマルト、ダイキを呼びつけた。

「特別扱いだ、相手になつてやる」

掃除をしなくて良いと解り笑みを浮かべる二人だが、数分後掃除の方がまじだったと気づかされた。

木刀を使用し、トビイ相手に二人で飛び掛つたのだが……惨敗である。

丸腰のトビイだが、軽やかに二人の剣を避け、後ろに回りこみ蹴りを食らわした。容赦なく。

甲板に倒れ込む二人に、冷やかな声が降り注ぐ。

「少しは持ち堪える、やはり掃除から始めたほうがいいか？」

二人は顔を見合わせ、大きく頷くと一気に立ち上がって同時にトビイに剣を振り下ろした。しかし後方へ宙返りで難なく避け、振り降しが終わると右足で甲板を蹴り上げ、一気にもとの場所へと戻ると二人の腹に拳を叩き込む。

観客から歓声が沸きあがった、見事だ。やられた二人はたまったものではないが。

……全く持つて、容赦ない。

その後も何度も打ち込むが、二人がかりでもトビイには傷一つ負わせられなかった。むしろ、こちら側が相当な痛手を負う。

「は、半端ねえっ！」

己の身で改めてトビイの強さを感じたサマルト、愕然と眩しいくらいのとびいを見上げた。ただの、少しばかり秀でた色男だとばかり思っていたのだが、違う。

この実力は本物だ、一瞬背筋が凍った。そうこうしているうちに、モップがけ往復100回が終了したようだ。

昼食後、暫し休憩を取ってから再開することにし、一旦終了。

反対の甲板ではアリナがこれまた基礎から教えていた、腰幅に足を開き、腕を交互に突き出すこと、200回。モップがけよりかはましかもしれないが、腕が攣る。

その後は腕立て伏せ、200回。

「腕から強化だよー！ 男なら泣きつ面見せるなよー」

楽しそうに笑顔で自分も同じようにメニューをこなしていくアリナ、女には負けまいと必死になる船員。次は両腕を地面と垂直にし、交互に後ろへ肘を押し出すのことを各200回。

「肘打ちの練習ねー。速ければ威力も上がる、体重を肘にかけるように意識して。そのまま倒れて地面に相手を叩きつける感じだね」

鋭いアリナの肘打ち、見事だ、あんなものを胸に打ち込まれたら骨が折れそうだ、と震える船員。ちなみに、毎日のアリナの日課だったりする。

こうして高ランクの講師、トビイとアリナは暇する事無く船旅を終えそうだ。

午後からは食料捕獲の為、魚漁の網を海へと何度も放り込み、全員で引き上げる事も行った。桶で水を必要以上に汲み上げ、塩分を抜き取り真水にする作業も必死で行う。船長は、大笑いだ。

そんな中クラフトは一人ミシアの姿を捜して船内を歩き回った、朝から姿を見ていない。

部屋にも戻っていないようである、熱の子の看病が長引いているのだろうか？

夕方になり、トビイ達の船員訓練が終了した頃、ようやくミシアの姿を見つけたクラフト。そ知らぬ振りして近づくと、後姿のミシアの肩を叩いた。

ゆるやかに振り向いたミシア、不思議そうにクラフトを見て微笑。

「あら、クラフトさん。どうされました？」

「熱の子は大丈夫ですか？ 慣れない環境でやられたのかもしれないね」

「はい、衰弱していましたが先日ジェノヴァで購入した薬草を飲ませて、熱を下けたところです」

「流石ミシア殿です。となると、知らないでしょうかから本日の出来事でも。船長に頼まれてトビイ殿とお嬢が船員達の戦闘訓練を開始したのでですよ」

「まあ」

驚いて瞳を丸くするミシア、クラフトは微笑んで事細かに説明を始めた。アリナがトビイに接触出来ていれば良いが、ともかく時間稼ぎをするべきだと判断。

真剣に頷いて聞くミシアに、クラフトも腹の底の疑惑を顔に出さず話す。

「ミシア殿も相当な弓手であると思われています、どうですか、指導されては？ 弓矢も飛行の魔物にかなり効果的ですし、海上ですから出会う確率も多いでしょう。そう、昨日のような」

意図的に昨日の話をここで入れた、どう反応するか見る。にこやかに微笑んで頷くミシア。

「そうですね、申し出てみましょうか。でも、ふふっ、過信しすぎですよ。そこまでの技術ではありませんもの」

「いえ、集中して敵の急所を見定める事が出来ると思いますから、確実に狙えると思うのです。どうです、是非明日から。しかし二人に比べてミシア殿の指導は優しそうですね」

「案外厳しいかもしれませんよ？ 考えておきますね」

「夕食、皆で食べませんか？ 用事でもあるのですか？」

立ち去ろうとしたミシアに控え目に誘った、申し訳なさそうに首を横に振って礼をするミシア。

「一旦部屋に戻り、薬草を選んでから再度あの子の看病に戻ります。解熱作用が切れると、爆発的に体温が上がるので心配で」

「わかりました、根づめて看病されないように。ミシア殿の身体が参ってしまいますよ？」

「お気遣い、有難う御座います。では、また」

「ええ。お大事に、とお伝え下さい」

クラフトは歩き出したミシアの後姿を一瞥してから、甲板へと向かう。甲板では昼間とは打って変わって静まり返った空気の中、トビイ達が何やら談話していた。

手を上げて近づくと、アリナが気づいた。クラフトに大きく手を振って、嬉しそうに手招きしている。

「めしー！ 船長さんが話があるから特別にここで食事だぞ」

「ほほう、それは素敵な趣向ですね。あ、そうそうミシア殿はまだ看病しているので共に食事は摂りません」

びっくり、とアリナの眉が動き目配せする。瞬時、トビイが軽く微笑んだのをクラフトは見逃さなかった。

やがて簡素なテーブルが運ばれてきて、そこに食事が並べられる。当然魚料理ばかりだが香草焼きなど手間がかかっていた、腹に刺激的な香りだ。

夢中で食べ始めたサマルトとダイキ、やってきた船長は豪快に笑いながら他の三人にも食事を勧め、ワインを振舞う。

「本日は有難う御座います、今後も宜しくお願い致します。心ばかりですが本日はこのような場を設けさせて頂きました。お楽しみ下

「さい」

「お心遣い、有難う御座います、感謝致します。安全に船旅が出来るのも、船長殿並びに船員殿達のお陰です。こちらこそ宜しくお願い致します」

深く頭を垂れたクラフト、トビイが横から口を開いた。

「明日で構わないのだが水面に降りられないか？ 脱出用の小船でも下げてもらえると助かるのだが」

意外そうに一齐にトビイを見る一同、船長も首を傾げる。

「出来ない事はないのですが、何か？」

「ああ、少し水面に触れてみたいだけだ」

変わった事を言い出したなあ、とサマルトは口一杯にパンを頬張りながら、奇怪な瞳で見ている。

「わかりました、しかし海面に突如魔物が浮上してくる場合があるので」

「それくらいならば問題はない。オレは大丈夫だ」
そう。

水面に小船を下ろすと、餌と間違え魔物が寄って来る危険が高いため船長は渋ったのだ。しかし、引かないトビイに断念、真っ直ぐに見つめてくるトビイの瞳は頑固で強情だ。

以後、食事をしながら今後の計画を練り、海路を確かめつつ解散する。

早急にトビイに相談を持ちかけたかったアリナとクラフトは、部屋に一旦戻るとアリナだけがトビイの部屋へと出向く事にした。トビイの部屋へ向かう途中、ミシアらしき後姿を目撃したアリナは、顔色一つ変えず一目散に足を速める。

追いたくもなかったのだが止めておいた、気配を掴むように神経を耳に集中させて歩く。

トビイの部屋にノックをして入り込むと、寝そべっていたトビイに近づいて手を振った。

しかし。

何故か本題に入れないうまま、無難な話をして一時間後アリナは部屋に戻った。本能が告げたのか、「今は話すな」と危険信号が光ったのだ。

部屋に戻るとベッドに寝転がり瞳を閉じる、明日こそは話そうと。

アリナの勘は当たっていた、ミシアがドアの前で聞き耳を立てていた。運悪くロザリンドの取った二等の部屋、人通りが少ない。

アリナがトビイの部屋に入っていく様子を間近で見っていたミシア、歯軋りをして壁に爪を立て、憎悪と嫉妬の眼差しで血眼で睨んでいた。部屋に入った後も、悪鬼の如く形相で部屋の中の二人を想像する。

「あのメス豚！」

身体をわなわなと震わせて立ち尽くしているミシア、そう、アリナが帰る気配のするまでその場で待っていた。張り巡らされる妙な妄想、中では他愛のない話をしているだけだというのに。

いや。

トビイと二人きりで会話する事自体、ミシアの逆鱗に触れるのだろう。

やがてアリナが立ち去る気配を察知したミシアはそのままスツ、と廊下を流れるように歩き、一角に消える。アリナが出て行ったことを確認すると、今すぐにも呪殺する勢いで胸元から妙な呪具を引っ張り出したが、震える手でそれを押し戻した。

トビイのドアの前へ移動し、恭しく熱い口付けをドアにした後、急いである場所へ向かう。

そう、昨夜と同じ場所だ。案の定ポールが待っていた。

焦点の合わない瞳で、ミシアを見つけると抱きついて押し倒し、唇を塞ぐ。

抱かれながら鼻につく香りを胸いっぱい吸い込んで、ミシアは危険な香りの虜になる。麻薬を、焚いた。

幻惑のトビイに、会う為に。

「アリナ。死に値するわね」

ぼそり、と呟いた。ミアは、剥ぎ取るように衣服を脱がせているポールに身を任せる。数分後、互いの荒い呼吸が響き渡った。

呼び声に応えよ

翌朝。

早速船長の管理化の下、小船が海へと下ろされる事になった。緊急脱出用を一艘、海に下ろすように準備を始めそれにトビイが乗り渡る。

「大丈夫か？」

「ああ、気にするな。ともかく、どうしても水面に降りなければならぬいんでね」

本日快晴、雲一つ青空には浮かんでいない。ゆっくりとトビイを乗せた小船が、水面へと下ろされていく。

「海には得体の知れない魔物が未だに突如姿を現します。水面下に潜む巨大魚や獰猛な鮫などが、稀に小船を餌であると勘違いして襲ってくる場合があります」

言うなり、船から3発砲撃が放たれた。海に落下し閃光が上がる、威嚇をして魔物を寄せ付けないようにしたのだ。

船長の石橋を叩いて渡る性格故である、万が一が起きないように先手を打つたらしい。

平然と臆する様子もなく、トビイは静かに下ろされていく小船の中地平線を見つめいた、甲板には好奇心旺盛な船客達が集まっている。

微かに眉を吊り上げしかめっ面のアリナ、クラフトが隣で沈黙したまま非常事態に備え呪文の詠唱に入っている。サマルトとダイキは身を乗り出し覗き込んで、トビイが下りていくのをじっと見つめていた。

「今のところ、妙な感じはしないのか？」

徐にアリナが口を開いた、視線は地平線を睨みつけている。

「大丈夫です、が、海域は未知の世界。先程の船長殿の言葉通りトビイ殿が戻られるまで気が抜けません」

「魔物が出たらボクも飛び出す、クラフト、援護しろ」

「ええ。ダイキ殿、サマルト殿、念の為詠唱を始めて貰えますか？
念には念を」

クラフトに突然名を呼ばれ、慌てて2人は大きく頷くと顔を見合
わせ戸惑いがちに詠唱に入る。満足そうに深く頷いたクラフトは一
歩、前に進み出た。

「トビイ殿のことですから簡単にはやられないでしょう、魔物の襲
撃を受けた場合、彼が甲板へ戻ればそれで構わないのでそれまで
攻撃を。」

最悪トビイ殿が怪我をした場合、私が回復及び回復補助をしま
す。それに注意を引き付けられずに、全力でダイキ殿とサマルト殿
は魔物の攻撃に専念してください」

甲板で四人が攻撃態勢を整えている頃、トビイはようやく海面へ
辿り着いたところだった。チャプチャプ、と静かな波の音、船体に
当たって心地良い音を立てる波に暫し耳を傾ける。

日光が反射して眩しい、痛いくらいの海面を瞳を細め見つめると
トビイはしゃがみ込んで海を覗き込んだ。

美しい、青。透き通り、綺麗過ぎて引きずり込まれそんな程の魔
性の青。小さな影が動いている、魚だろう。

気配を確かめる為、神経を集中した。魔物の気配はなさそうだっ
た、だが問題はそこではない。

トビイは左手をそつと海の中へと入れた、日光のお陰で暖まった
海水は少し温い程度。

「……呼び声に応える、オフィーリア」
小さく呟く。

オフィーリアとは、トビイの相棒である水竜の名だ。まだ幼いが
行動意欲が盛んな、無鉄砲な水竜である。飛行が出来ない水竜は世
界各国の岩肌露出した海面に住み着くことが多く、トビイは数年前
に入り江の洞窟めいた場所で水竜達に出会った。

大概は集団生活、5世帯程の血族同士で住み着いているらしい。

一族同士の親密を最も大事にする竜であり、結束が固いのが特徴だ。
「オフィーリア、応える。何処に居る？」

何度も呼びかける。

トビイとオフィーリアの絆は、易々と作られたものではない、それを信じて懸命に呼びかけた。広大な海面だ、見当違いの場所で呼びかけているかもしれないし、すぐ傍に居るのかもしれない。

トビイは静かに右手で背の剣を引き抜くとそつと海面にそれを半分ほど浸した。

ぼんやりと淡く光る剣、再度呼びかける。

もともとこの剣はオフィーリアの従兄弟であるジュリエッタという水竜の角から出来ている、その内に秘めた魔力を海へと流し気づかせようと必死だ。オフィーリアがトビイの位置を把握しさえすれば、当然共に行動していると思われる黒竜デズデモーナに風竜クレシダとも合流できる。三体でこちらへ向ってくるだろう。

あまりそのような類を見ないので有り得ないと思われがちだが、トビイの相棒である三体の竜は常に行動を共にしている珍しいタイプの竜達である。三体が個々にトビイに忠誠を誓っている為なのだが、本来他種族の竜は行動を共にしない。

その三体を纏め上げていたトビイは、流石、とでも言うべきか。数十分トビイは懸命に呼びかけた、反射する日差しが刺すように肌を刺激する。……返答はない。

しかし、きつと声を受け取りこちらの位置を軽くでも掴んでくれた。そう信じて、トビイは小さく溜息を吐くと立ち上がった。

剣を海面から引き抜き、一振りして水を払うと最後にもう一度左手を海面へと入れた。手首まで浸し、念じる。

と。

「!?!」

殺気を感じしトビイは手を抜くと直様右手で剣を構えた、ロープに掴まり甲板目掛けて叫ぶ。

「上げてくれ！ 何かが来る」

怒鳴り声に慌てて船員は小船を上げるために歯車を回し始めた、船長が身を乗り出し瞳を細め威嚇の砲撃を数発打たせる。波飛沫を高く上げ、キラキラと降り注ぐ水の粒子で虹が現れる、甲板ではうつとりとした歓声が上がったのだが。

「来ます！ 早く小船を引き上げてくださいっ」

クラフトが自身の銀の杖を前方に構えた、ダイキとサマルトも武器を持って覗き込む。小船がゆっくりと軋みながら海面から浮かび上がった、その瞬間。

轟音と共に小船は下からの攻撃により斜めに傾いた、衝撃で破片が飛び散り海面に木材が浮かぶ。

甲板で悲鳴、心配そうにトビイを覗きこむ者も居れば、船内へと戻る者も居た。舌打ちしてトビイは強くきつく、ロープに掴まった。何度か攻撃を受ければ小船は跡形もなく吹き飛びそうだった、姿は見えないが何かが潜んでいる。

「火炎か雷電の魔法を海面へ！ 威嚇で追い払いましょう」

「解った！ ダイキ、行くぞ！」

クラフトの指示に準備を整えていた2人は颯爽と魔法を放った、トビイの左右を通り抜けてサマルトとダイキの魔法が海面へと進む。水に通電した為、一度の攻撃以降威嚇が効いて海は平常の穏やかな状態へと戻る。

安堵の溜息を洩らす客達だが、アリナは手すりに足をかけて何時でも出られるように待機していた。クラフトとて同じである、一刻も早く小船を引き上げるように指示を出し気配を探る為瞳を閉じた。無論トビイとて同じだ、全く体勢を崩すことなく波の音を聴いている。

が、空気の微妙な揺れを感じトビイは小船から足を離す、ロープをばねに上空に跳躍した。次の瞬間、バキバキと音を立てて下から魔物が姿を現した、飛んでくる破片を避けながらトビイは剣を振り下ろす。

「これまた……けつたいな」

姿を現した魔物を見てトビイは苦笑いである、見覚えある姿にダイキが叫んだ。

「でかいタツノオトシゴ!？」

トビイは知らなかったが、ダイキは知っていた、図鑑でも水族館で見たことがあるし12年に一度、主役の年がくる生物。そう、タツノオトシゴ、である。

そういえばケンイチの親戚が経営する飲食店に、名物ペットとしてこれが飼われていた気もした。肉食だったはずだ、流石辰、だろ
うか。

全長5メートル程、身体が細いとはいえ、やはり迫力がある。

「カマウエト、ですね。高度な魔法使いはアレを飼いならして乗り、海上を旅をするのだそうですが」

「うへえ、ボクは嫌だなあ」

茶色く硬そうな皮膚、鮫のような瞳、明らかに凶暴そうである。

「詳しい記述があまり残されていませんが、攻撃は体当たりのみ、です。しかしやたら攻撃力が高い」

それは先程の小船の無残な姿を見れば解る、アリナはロープを一本手に取ると腰に巻きつけ、その瞬間を見極める為鋭く睨みつけた。巨大な身体が海へと潜る、静まり返っているが再度浮上してくるだろう。

前方から吹き上がる水飛沫にトビイは剣を構えた、風圧で身体が船体に叩きつけられそうになるが逆に反動を利用して蹴り上げ、勢いつけて現れたカマウエトへ斬りかかる。

同時に上空からアリナが飛び降りる、カマウエトの頭部目掛けて蹴りを食らわし、待機していたダイキとサマルトが魔法で応戦。

「ちっ、思いの外硬い皮膚だなっ」

甲殻類に匹敵するだろう、蹴り上げたアリナの右足がジン、と痺れ舌打ちしざるを得ない。ブーツに仕込んである鉄製の金具がなければ、外部からの傷は与えられなさそうだった。

「オレは大丈夫だと言っただろう?」

「まあ、退屈だからー」

微かに怒気の籠もったトビイの声にあっけらかんとアリナは笑う、互いにロープにぶら下がり、引き上げてもらうのを待った。

「で、どーすんの、あの生物」

「命は奪わなくてもいいと思う。が、船に攻撃を仕掛けられてはやつかいだ」

「だよなー、どうでてくるかなあ？」

逆上して来なければ良いのだが、それだけが気がかりだった。水面下では高速で泳ぎまわっているようで、トビイは微かに溜息を吐く。

「来るな。諦めてくれなさそうだ」

「まあ餌みたいなボクらがぶら下がってるんだから、諦めはしないだろーね、っと」

勢いつけて飛び出してきたカマウエト、2人は振り子の原理で大きく振り被ると極力船体に体当たりされないように応戦する。必死でダイキとサマルトも魔法で援護していた、が、上手く攻撃が当たらない。

「アリナ、目を狙う」

「りょーかいっ」

トビイとアリナの2人は再度海に潜ったカマウエトの次の攻撃に備えた、もうすぐ甲板へと辿り着く、ロープに掴まる腕も痛くなってきた。

決めるのなら、次が最後の機会である。

相手がワンパターンの攻撃で助かった、2人は海から飛び出た瞬間、左右についている眼球目掛けて攻撃を食らわした。トビイが剣を突き刺す、アリナが蹴り破る、同時に頭部目掛けてダイキとサマルトが魔法を放ち、そのまま海へと沈める。

最後にクラフトが船員に指示を出し、砲撃をカマウエトへ向けて発射、遠くへと吹き飛ばした。

揺れる船体、ようやくトビイとアリナが甲板へと戻る。全員無事

だ、船体にも損傷はない。

「一体だけで助かった、アリナは上機嫌でトビイの背中を強引に叩いた。不謹慎だが、退屈凌ぎになったので楽しかったらしい。」

「で、トビイは何がしたかったわけ？」

「まあ、な。気にするな」

「穏やかさを取り戻した海を眺めつつ、トビイは手すりに凭れ、一息ついた。日差しは高く、本日も午後から船員達の指導だ。」

「オフィーリア、受け取れよ？」

「トビイは小さく囁く、今はただ、相棒達が駆けつけてくれることを祈り、自身の鍛錬に励みながら指導をするしかない。」

麗しのドラゴンナイト

煌く水面、顔を出してみれば灼熱の日差し。迷惑そうに一体の竜が、再び水面下へと潜り込む。現在地が把握出来ないが、この近海の海は餌も豊富で水温も故郷に似ていた為非常に過ごしやすかった。

水竜オフィリアはのんびりと瞳を閉じ暫しゆらゆらと漂っていたのだが、不意に声を聞いて浮上すると嫌々ながら顔を覗かせる。

「もう少し速く泳げるだろう、オフィリア」

「眠いんだ、水温が心地良くてさー」。

僕、夜行性なんだよね。夜になったら高速で泳ぐからさ、昼寝させてよ」

「我慢しろ、早く主に合流すべきだ」

深い溜息と共に言葉を投げかけてきた黒竜デズデモーナに不貞腐れ、オフィリアは暴れながら鱗をばたつかせ水飛沫を盛大に起こす。まだ幼い竜だ、我侬も言いたいだろう、それはデズデモーナとて承知なのだが。

「私も休みたい故、良いのでは」

「クレシダがそんなことを言っていては、示しがつかないだろう！
自覚を持って」

通常通り、まったりと緊迫感のない声でそう言い出した緑の風の竜に、目くじら立ててデズデモーナは怒鳴り散らすのだが、全く訊いていない様子のクレシダ。うとうとと首を上下に揺らしながら、既に眠りに入ろうとしているようだった。

逆鱗に触れた、が、デズデモーナは必死に堪えた。一応三体の竜のまとめ役なのだ、これくらいで堪忍袋の緒を切らしてはいけない……と血管が切れそうだが頑張つて耐える。

「仕方ない、今は睡眠を十分に取り、今夜全力で駆け巡るとしよう」
怒りを抑えている為に声が震えているが、クレシダとオフィリア

アは気にも留めない様子だ。

だが、事態は急変する。

許可も下りたのでオフィーリアが本格的に眠りに入ろうと海中に沈んでいく時だった、聞き覚えのある声が届いた。

「！」

反射的に瞳を思い切り開く、口を開いて名を呼んだ。

「主！ 主の声だ！」

「何だつて？」

勢い良く浮上して興奮気味に首を回し、声の方角を探しているオフィーリア、何かとクレシダとデズデーナも海面に降り立つ。眠気は最早ない、探していた人物からの波動である、待ち侘びていた。

オフィーリアは再度身体全体を海中に沈め、ゆらりと浮遊しながら主であるトビイの声を探した。波に混じって、海洋生物の超音波に混じって。

何処からか声が聞こえるのだ、人間の声が。

オフィーリア、受け取れよ？

「！！」

弾かれてオフィーリアはクレシダ達に声をかけずにそちらへと疾走、方向は大体合っていたようだ。加速を上げて泳ぐオフィーリアに、二体の竜も空へと舞い上がると上空から追う。言葉交わすことなく、三体の竜はそのまま進路を変えることなく突き進んだ。

何も言わずとも解る、トビイが呼んだのだろう、と。オフィーリアにのみ聞こえたということは、トビイも海上にいるということだろうと推測。

三体の竜は、忠誠を誓ったドラゴンナイトの下を目指している。

水中戦ならば、戸惑うことなく怯むことなく有利に事を運ぶ、水竜・オフィーリア。

空中の覇者、鋭利な爪と牙に加えて光のブレスを吐く、黒竜・デズデーナ。

風に加護を受け上空を舞い駆け巡る緑の、風竜・クレシダ。全ては動き出した、トビイの望み通りに。

毎日甲板にて船員達の訓練が続けられ、豪快に笑う船長はともかく、船員達は非常に恨めしい目で指導に当たっていたトビイとアリナを見つめていた。通常の労働に付け加えて、まさかの戦闘訓練、しかもスパルタ。

筋肉が悲鳴をあげ、炎天下で体力も奪われ。けれども数日後に見せたトビイとアリナによる二人の組み手が、船員達を大人しくさせた。た。

たまたま時間が合ったので、人の訓練指導ばかりで自身の組み手相手を欲していたアリナは、トビイに一方的に攻撃を開始した。暇だった様だ。

呆れ顔で、しかしトビイとて満更ではなさそうに軽やかに舞うアリナの攻撃を紙一重で避け、そのまま同意するかのように打ち込み始める。甲板にて歓声が上がった。ダイキ、サマルトも初めて見る二人の戦いに、啞然と息を飲んで見守る。

この船で最強に位置する二人だ、眼が離せない。見ているだけで寒気が走った、取り入れたいとは思つが速すぎて見えない箇所も多々あり、二人の凄さを間近で実感するのみだ。そんな二人に指導されている、と刺激を受けた船員達。そして無論ダイキとサマルトは以後文句を言わず黙々と指導を受け、良い影響を与えたようだ。

二人の戦いは其れほどまでに影響を及ぼしたのだ、いつかは、あなりたい、と。凡人ではない二人である、追いつくには無理がありそうだがそれでも言われたとおりこなしていれば、自分も近づける気がして。

とりわけ、ダイキとサマルトは暇を見つけては二人で組み手を始めている。

剣はトビイから、拳はアリナから。敵に武器を奪われても呪文に

頼る前に攻撃が出来るよう、二人は熱心に日々鍛錬。

上手くいけば呪文が扱えないトビイ、アリナよりも上になることが可能かもしれない。敵によって攻撃方法を割り出し、すぐさま弱点を見極め攻撃方法を変える……という臨機応変が上手く出来ればの話だ。

夜になれば室内で書物を読み更け、ここ、4星クレオの魔物の生態を憶えたり、クラフトに回復の魔法を習ったり、と懸命だった。

刺激を皆に与えられたことを満更でもなさそうに喜ぶアリナ、張り切りは加速をつける。

結局トビイとアリナの戦いは決着などつけないことなく、会場を沸かせたまま終了していた。互いに本気を出していないのだから、決着などつくわけがない。

「いつかはさ、本気でやろうな」

「気が向いたら、な」

アリナがからからと笑いながら、トビイの肩を叩き、愉快そうに覗き込むとトビイも苦笑いで返答。

幾分かこのメンバーでの連携にも慣れて来たし、上々の出来だった。数人で組んで戦うのであれば当然信頼と、相手の攻撃能力を理解し、発揮できるように互いに気遣う事が重要だろう。

それは地球でいうスポーツでもそうだ、ダイキは剣道なのでまあ一人きりでも構わないのだが、体育の時間ならば無論サッカーもバスケも当然行う。一人では、戦えない。仲間を頼りに、勝ち進むことが醍醐味だ。場所は違えど、やるべきことは同じである。

トビイとて最初は一人が好きなのだろうと、仲間など不要なのだろうと思っていた人物であったが、意外と面倒見が良い事にダイキは気がついた。

言葉は少ないし態度が素っ気無いので”だと思っ”程度だが、武器の扱い方も教えてくれるし、挑発してやる気を起こさせてくれる気がしてならない。

人は見かけによらないんだなあ、とダイキはトビイを見ながら感

心していた。

「あ、トビイ」

「何だ」

そんなわけで、ダイキは初めてトビイに話しかけたのである。

「前から気になってただけど、訊いてもいい？」

「答えは、訊かれた内容による。何だ」

「何で、アサギのこと妙に知ってる？」

間近に居たサマルトも、アリナも、クラフトも。瞬時に表を上げて二人の会話に聞き入る、誰しも疑問だったことだ。

現在夕刻、食事を待つ間甲板で休息中の五人だった。軽い溜息、

トビイは地平線に沈み行く太陽を見つつ口を開く。

「会った事があるからだ、それ以外に知り得る方法などあるのか？」

「辻褄が合わない、俺達はどこではなくて”地球”っていう場所に居たんだ。そこから勇者としてここへ召喚された。

一体トビイは、何時アサギと会ったんだ？ それ、本当にアサギだった？」

「オレが見間違えるはずないだろう、アサギだ。ただ、若干、この間よりも大人びていたような気がしなくもないし、それに」

「それに？」

その場の全員が立ち上がってトビイに徐々に詰め寄る、訝しげに軽く額を押さえ、一言。

「先日出遭った時、アサギは明らかにオレを知らない雰囲気だった」

「当然だよ、あの洞窟に入る数日前に俺達はここへ来たんだ、トビイに出遭える時間なんてないんだよ」

「ってことは、トビイが会ったアサギは……誰さ？ ボク、頭パンクしそうんだけど」

「2人ともアサギで間違いない、保障する。だが、オレが探していたアサギは……髪が、緑だった」

「へ？」

一斉にすつとんきょうな声を上げる、ダイキが顔を引き攣らせた。

当然だ、地球には染めない限り緑なんて色の髪の毛の人間は存在しない。

「それ、アサギじゃないよ！ アサギは綺麗な黒髪だろ？」

「綺麗な、緑の髪だった。豊穡の大地に真っ直ぐ育つ大樹の若い葉の様な……美しい緑色。緑というよりかは、黄緑のほうが近いか。瞳が濃い緑だ、吸い込まれそうな」

「それ、アサギじゃないって、絶対！」

意地になるとかそういう問題ではなく、有り得ない。ダイキは絶対の自信を持ってトビイに食って掛かったのだが、さなり、と交わされた。

トビイとて、絶対の自信を持っていたのだ、以前会ったアサギとつい先日再会したアサギが同一人物であると。

「誰がなんといおうと、あれはアサギで間違いない。確かに妙な事が起こったと思う、しかし、アサギはアサギだ」

「その根拠はっ」

「オレが惚れてる女を間違えるわけがないから」

啞然。言葉に詰まった四人、そう言われてしまっっては何も反論出来なかった。釈然としないが、何をどう言ってもトビイが引くわけもなく。

仮に、トビイの言う事が本当ならば、どうだろう。クラフトだけが、その方向性を考えた、否定せずに考えた。

トビイが出遭った2人のアサギ、同一人物だとしたら。

「アサギちゃんは」

小さく呟き瞳を細め、トビイ同様クラフトも地平線を見つめる。

髪と瞳の色を自在に変化できる、勇者として召喚される前に、何故かクレオへ地球から来ていた。

そんなことが可能なのだろうか？

クラフトは顔を顰めると夕食を摂る為に皆を促し、船内へと入っていった。しかし、そこに鍵があるだろう。一連の不可解な起こり得る事実を、打破できる鍵な気がしてならない。

「お嬢。トビイ殿にミシア殿の話は？」

「それがさ、なんか妙な気配を感じてなかなか言えないんだ」

「下手すると勘付かかっているかもしれないね、ミシア殿に」

「うっそ！」

「呪術師やもしれません、ちょっと計画を変更しましょう。相手の能力が未知です」

サマルトとダイキが訓練の為甲板へ出向いたので、アリナとクラフトは部屋で小声でそんな話をした。

「結界を私とて張っても良いのですが、そこをミシア殿に付け込まれると」

「危険だな」

「ええ、何を話していたのか問い詰められます」

「ちっ、面倒だなあ。で、あれから妙な動きは？」

「噂ですが。船員の中にやたらと姿が見えなくなる方がいるとか」

「サボリ？」

「真面目な船員だったそうで、考えられないと」

「ん」

2人が唇を噛み締め、言いえぬ不安に掻き立てられていた頃。

例の一室でミシアとポールが絡んでいた、ほぼ毎夜の事だ。

「トビイと親しくしているあの女。邪魔で邪魔で仕方ない。可哀想なトビイ、気の毒な私のトビイ。」

ポール、あの女をどうにかしたいのだけれど、協力してくれる？」

「勿論だよ、何でも言うてよ。願いを叶えてあげるよ」

「有難う、嬉しいわ」

優しくポールを抱きとめて、耳元で何かを囁くミシア。ビクリ、と身体を引き攣らせてぐったりと動かなくなったポールに満足そうに頷くと、ミシアはそのまま横になって瞳を閉じる。

香る煙は淫靡なイランイランをベースにミシアが調香したものの、大きく深く肺一杯に吸い込んで、夢を見る。

「トビイ、トビイ、私の愛するトビイ」

……初めて見たのは何時だったか。

数年前に街でやたら綺麗な少年を見た、紫銀の髪は珍しく、整い過ぎた顔立ちは少女達の溜息を湧き上がらせ。その時は呆然とその場に立ち尽くし、見送る事しか出来ず。

一瞬で心奪われたその少年と、もう一度会いたいと願って願って激動の時間を過ごし。

そして。

あの日、洞窟でトビイに再会した。間違えるはずもない、幼い面影も少し残し、逞しい身体つきと鋭くなった視線、現れた瞬間に悟った、あの少年であると。

胸が高鳴る、一目散に駆け寄って抱き締めたい衝動に駆られた。しかし、その腕にはすでに先客がいたのだ。

アサギ。

アサギが頬を赤く染めながら、トビイの腕の中に居た。入れない、あの場所には入れない。齒軋りして睨み付けた、それからずっと、トビイを追った。

やがて心に植えついた妙な気分、小さな種は嫉妬という名の肥料で芽吹いて、大きく大きく育っていく。ドス黒い肥料で育った、醜悪な木。嫉妬と憎悪で出来た、木。

私が最初に出会って見つけたのだから、トビイは私のものだ。私に微笑みかけてくれているのに、アサギが邪魔だ。トビイはアサギが好きではないのに、勇者だから護ろうと傍に居るのだ。邪魔だ、邪魔だ、消えてしまえ。

耳元で成長した毒々しい木は、禍々しい華を咲かせた。唇をつけた華がミシアの耳元で、每晚囁き続けていた。

……ほら、見てごらん？ 美しいだろうトビイもミシアも。

……2人は結ばれる運命なのだから、邪魔なものは消してしまえばいいのだよ？

……ミシアならば、それをしても誰も咎めないよ？

……だって、ミシアは。

「私は美しい、何れ女王になる身。女王の隣には完璧な比類なき王が必要。トビイとミシアが結ばれる運命、邪魔する女は排除する」
ぶつぶつと繰り返されるミシアの言葉。自身の得た薬草の幻覚にやれたのか、それとも真実の言葉なのか。

見た瞬間に恋焦がれ、隣に居たいと望み、隣に自分ではない誰かが居た。それを消しさえすれば、隣に居られるのだと思った。

そう、それだけ。

そこから徐々に捻じ曲がってミシアは、闇に囚われた。自分の思い通りに行くように、少し考えれば解る程の”悪行を”正当化したのだ。

トビイと、居る為だけに。

そんなことをしても、トビイの心はミシアに向かないと、普通解るだろう。けれども、ミシアには解らなくなっていた。

耳元で囁かれる言葉は、誰のものか。遠い遠い昔から、求めていた男が居た気がして、それがトビイである気がして。

「殺す、殺す、アリナを殺す」

船内で何度も見かけたトビイとアリナ、どれ程苦渋だったことがミシアはカツと瞳を開き、起き上がる。

「可愛い可愛い私のポール、叩き潰しましょうね、アリナを」

眠っているのか、微動だしないポールの頬に口付けて、ミシアはそっと覆い被さる。アサギが不在な今、標的はアリナだ。

航海に出てから早数週間、すっかり船旅に慣れた一行はその日も慣れた訓練を朝からこなしていた。日焼けしたダイキ、筋肉もついてきたような気がするし、剣の腕にも自信がついた頃だった。

「妙だな」

トビイが波間を見て呟く、船長も同意した。

「流石ですな、気づかれましたか。波がおかしい」

「ああ、不気味な気配がする。拙い」

甲板へ姿を現したクラフトの顔色を見て、二人は確信した。魔物

の来襲、だろう。

「風が止まりました、静か過ぎます」

息を切らせ顔面蒼白で現れたクラフトの言葉を聞き、船長は髭を擦りながら睨みを利かせ海原を見る。

「水中の魔物、というよりも空中の魔物かもしれませんな。弓兵の準備を」

「いつぞやのガーゴイルみたいなもの、か。まあ、そちらのほうで戦いやすいが」

三人は訓練に励んでいた船員達を呼び止めた、戦闘態勢に入るべく指示を出す。どの方向から来るかは不明だ、マストによじ登っていた船員が、懸命に望遠鏡で姿を探っていた。

「来ましたー！ 南ですー！」

絶叫、言葉通り南へと身体を向かせる主力のトビイとアリナ、思わず顔を顰めた。舌打ちしてクラフトが珍しく怒鳴った、その声で余程面倒な相手だと推測。

「セイレーンです！ 歌声を聴くと幻覚作用を引き起こし海へと身体を投げ込んでしまう不吉な魔物っ。女性には効果がありません、男性がー！」

ダイキも思い出した、RPGで頻繁に出没する魔物だ、知っている。

「歌声を聞く前に撃退しましょう、簡易な防御壁も張りますのでそこから出ないようにっ」

先客を船内に押し込め、一同固まる様に中心に集まった。

「女は平気なんだから！？ ボクが主力になるよ！」

「無茶ならさらないでくださいー！」

クラフトが止めるのも振り払って、半ば嬉々としてアリナが飛び出した。向ってきているセイレーンは10羽程、上等、とばかりに構えるアリナ。

近づかれる前に先手で船から砲撃を打ち込んだ、数羽はそれで海へと落下していく。弓兵が構えた、射程に入った途端矢の嵐を打ち

込むべく。ダイキとサマルトが魔法の詠唱に入った、雷電の魔法ならば射程距離が長いのでそれを使用する。

「私はどうしましょう？ 結界をお手伝いしましょうか？」

ミシアが毅然とした態度でクラフトに後方から話しかけてきたので、意外そうに振り返り。

「危険を承知で、お嬢と共に前線へお願い致します」

「無理だよ、クラフト！ ミシアさんは後方支援だろ？」

思わず叫んだダイキを制するように優しくミシアは微笑し、そのまま結界から出て行く。

「お任せください、ご期待に備えて見せましょう」

深く頷いたクラフト、そのままミシアの能力を測るつもりだった。こちらで手伝って貰った方がクラフトの負担も減るのだが、どう動くのかが知りたかった。

ただ、アリナも結界の外だ、近づかれると困る。

「申し訳ありませんが、こちらが辛くなりましたら呼びますのでお戻りください」

「はい」

軽やかに弓を装備する、高らかに掲げてセイレーンを睨みつけて射程距離へ入るのを待った。近寄ってきたミシアを横目で見ながら、言葉かけることなくアリナは正面を見つめる。

と、何か風混じって後方へと流れていった。風だが、何か不可解な気配。

「来ました、歌です！」

「ええ、ボクには聞こえないけどっ」

「アリナさん、セイレーンは男性にしか興味がないのですわ。超音波で錯乱させて海へ投げ落とし、溺死させる様を喜んで見る魔物です。万が一助かって陸に上陸できたとしても、一斉に肉を喰らうべく群がるのです」

「うっへー」

上半身が美しい女性、下半身が猛禽類の姿のセイレーンは、残り

7羽である。急降下しながら歌を発する、結界を張っているとはいえ、クラフト一人なのだ完璧ではない。

頭痛を訴える船員が続出した、そうなるともう船内へ運び入れるしかない。弓矢の雨を浴びせ、魔法を浴びせ、落下してきたところをアリナが仕留める。

ミシアは優雅に弓を放っていた、なるほど技術はやはり高い。確実に急所を見極め、空を飛ぶセイレーンに突き刺している。

「ダイキ、サマルト、大丈夫か？」

「ああ、なんとか。確かに気だるい感じはするけど」

トビイは面白くなさそうに結界の中に居たのだが、不意にマントを引きちぎると耳にねじ込む。耳を塞いだらしい、そのまま外へ出て行った。

仰天して止めるサマルトだが、下りてきたセイレーンを一撃で撃破。たかが布だけでは本来防げないのだが、卓越した精神で可能になっているようだ。

駆けつけたトビイに勝気に微笑むアリナ、主力が揃ったならば敵ではない。海へと投げ出されないこの状況に苛立ちを感じたのか、セイレーン達は甲板へと下りてきた、しかしそれこそ思う壺だ。

残り、4羽。

特に何もしていないがやはり超音波のせいで不調を訴えていた船員達も、沸きあがって応援する。

「ちっ、下から何か来るっ！」

セイレーンを海へ叩き落したトビイは、吹き上げてきた生物と目を合わせ、そのまま斬りかかった。

牛ほどの体長の鳥賊である、触手を伸ばしてきたが瞬時に切り裂き頭部を切断。

「クエー口です、絡め取られると海へ引きずりこまれますよ！」

面倒なことになってきた、結果からは出られないのでクエー口に直接攻撃が皆出来ない。出来るのはトビイとアリナ、ミシアの三人だけだ。

「サマルト殿、ダイキ殿！ 呪文をとにかくセイレーンへ！ あれさえ倒せば」

「解ってるよっ！」

優先して倒すべきは当然セイレーンである、海に落ちた死骸にクエーロが寄つて来たのか、トビイが覗き込むと結構な数だった。

ミシアは懸命にセイレーンに矢を当てながら一人ほくそ笑む、ここまで望んだ状況が出来上がるとは思って居なかった。次に魔物が来たらアリナを亡き者にしようとしていたのだが、まさか”男を狂わせる”セイレーンに、海の捕食者クエーロがセットで出てくるのは。

セイレーンに惑わされたポールが、アリナもろとも海へ落下、後はクエーロが綺麗に食べてくれる筈だ。手を汚さずとも面倒なものが消し去れる。ちらり、とミシアは後方のポールを見た、大丈夫、最前列に居る。

大声で笑い出したいのを懸命に堪えた、あとは何時ポールを動かすか、だ。何度も彼に麻薬を注いだ、耳元で囁いた、奴隷の呪文をきっかけさえ起こせば、人形として発動する。

残るセイレーンは残り二羽、そろそろだろう。

「きゃあ！」

セイレーンからの攻撃を受け、甲板に叩きつけられたミシア、助け起こすべくポールが案の定境界から出る。皆が止めるのも制してミシアへ駆け寄ると、優しく抱き起こした。

「ダメよ、出ては！」

「大丈夫だよ、さあ境界へ！」

茶番である、茶番を繰り返す。抱き起こされた瞬間、ミシアは耳元で小さく唇を動かした、人形を発動させるのだ。ビクリ、と身体を引き攣らせたが、そろそろと境界へ向う二人。一羽のセイレーンがトビイの剣で仕留められ、海へと落下する。

歌え、歌え、大きく歌え。ミシアが一羽のセイレーンに睨みを聞かせると、藪から棒に喚き散らして歌い始めたセイレーン、思わず

耳を切り裂くような超音波に皆耳を塞いだ。

残るセイレーンの数が少ない、全滅する前に、歌を響かせなければ計画は終わる。

「だー、うっさい！」

流石にアリナにも聞こえたのだろう、迷うことなく突進して甲板を蹴り上げ、セイレーンを叩き落とす。着地してから顔面を何度も蹴り上げた、容赦ない。

一際、その痛みでだろうセイレーンが絶叫した、耳を劈くその音。アリナとポールが直線で結ばれた、今だとミシアはポールの腕に爪を立てる。弾かれたように一瞬のけぞり、ミシアを弾き飛ばしてポールはそのまま手すりを目指して、いやアリナを目指して突き進んだ。

「いけないわ、アリナさん、彼を止めて！ 歌声にやられてしまったっ」

甲板に平伏すように倒れこんでいたミシアが悲痛な叫び声を上げる、腕を伸ばしてポールを止めようとした。

セイレーンの”声にやられて”、海へ身を投げ出すべく走るポール、その直線には立ちほだかるアリナが居た。慌てて止めるべくアリナはセイレーンの首の骨を折った後、ポールへ拳を打ち込む、手荒だが止める方法はこれくらいしかないだろう。

しかし、一瞬身体がぐらついただけでポールはアリナを引き摺ってそのまま。

「なー！？」

アリナの叫び声、ミシアが涙を流しながら俯いて……笑った。

トビイがクエーロの瞳に剣を差込み、そのまま振り返りアリナを目指す。セイレーンが全滅したので結界を解いてクラフトも全力で走った、ミシアの脇をすり抜ける。

けれども。

ドンッ！

アリナを突き飛ばし、ポールが……凶悪な笑みを浮かべる。まさ

にその笑みにミシアの面影を見た気がしたアリナ、しまった、と口を開いたがそれよりも、受身だ。

見れば海面にはセイレーンの死骸に群がるクエーロの群れ、冗談ではない。アリナとて、あの中に放り出されては、足場がなく戦えない。

「くっそっ！」

小剣を両手に構え、突き刺す勢いで海面へと落ちていった。次いでポールがそのまま海へと飛び込む、”セイレーンの歌声”に魅了されたものの末路だ。

「お嬢ー！」

クラフトの絶叫、トビイがそのまますり抜けて華麗に海へと落下する。落ち際に「ロープを二つ投げる！」と怒鳴りつけ。

啞然、とミシアはそれを見ていた。途中までは完璧だった、アリナが落ちた、ポールが落ちた。

だが。

「な、え」

何故、トビイが海へ落ちていったのか。アリナを助けるためだと解つても、認めたくはない。身体が小刻みに震える、掌握できなかつた事態に眩暈を覚える。

駆けつけた船員に助け起こされたが、唇真つ青、冷や汗を流しているミシア。そのまま救護室へ運ばれようとしていたのだが、強い力でそれを振り払うとミシアも血走つた眼で海を覗き込む。

水柱が上がる、アリナが、ポールが落下したようだ。

吹き上がってクエーロが飛び出してきた、アリナの突き刺した小剣に痛みを覚えて飛び上がったのだらう。

「お嬢っ、そのままこちらへっ」

「無茶言っな〜！」

再び落下していくアリナ、どうも剣が抜けなかったらしく懸命に引つ張って再度息を止めて海に潜る。船員が投げたロープ、そして小船、トビイは小船に飛び乗って襲い掛かってきたクエーロと対峙

している。

近くでアリナがまた海へ潜った、懸命に浮上し、トビイの小船を見つけそこへと必死で泳ぐ。怒鳴るトビイに、アリナは必死だった海面では、アリナは戦えない。

足に何かが絡みついた、見れば触手。海中に引きずり込まれ、それでも切り離そうと剣を振り払う。

「ちいっ」

トビイは三体のクエーロを一閃して一気にねじ伏せると、そのまま海へと潜った、アリナを救出すべく。数メートル先でアリナがもがいている、相手にしなくてはならないクエーロは後5匹、不利な状況だ。

トビイは一か八か、剣に念を籠めた。水竜の角であるそれは、水属性。魔力などに縁のないトビイだが、何か発動すれば、と無我夢中だった。僅かに光る剣、ブリュンヒルデは仄かに揺らめいてトビイの周りを包み込む。

苦しくて息を逃し、泡が水面へ向っている光景を見ながらアリナはもがいていた。息がもはやもたない、限界だ。

ガボガボ、と息を吐いて水を飲み込み、力なく波に漂い始め、引き寄せられクエーロが大きく口を開くの薄っすらと見ていた。

「……………」

まさか、烏賊に食われて最期を遂げるとは。思いもしなかったと、自嘲気味に笑うアリナ。

と、前方から、何かがやってきた、クエーロよりも巨大な何か。光る瞳は、氷を連想させる、突き出た長い角が荘厳で。

まあた、敵かよ。地上でなら、負けないのに。

悪態ついたアリナ、耳元でトビイが叫んだ。

「起きろ！ 水を出せ、呼吸しろ！」

「!?!」

ザンツ、と熱い日ざしが身体に降り注ぐ、無我夢中で言われるがまま息をした、水はない。

「オエ、ガ、がはっ……うえっ」

「大丈夫か、後は任せろ」

懸命に呼吸を繰り返すアリナの傍ら、水を滴らせトビイが立っていた。何に乗っているのか解らなかったが、ようやくアリナも生き物の上だと判明し、啞然とそれを撫でる。

「竜？」

啞然とトビイを見上げる。甲板でも放心状態でトビイを皆が見ていた、半狂のクラフトの目の前に前方から二体の竜が現れ、水飛沫を上げながら水中でも何かが蠢き。

船上は新たな敵の出現に絶叫したが、じい、と黒竜と緑の風竜は水面を見ている。

クエー口を蹴散らして水竜が跳ねる海豚のように飛び出したとき、背にトビイとアリナが乗っていた。嬉しそうに竜が言葉を発する、甲板に居たクラフトが小さく悲鳴を上げた。

「主、お久しゅう御座います」

「探しております」

上空の竜が海面へと下りていく、声が聞こえ思わずダイキはサマルトにしがみつく。

「りゅ、竜つて喋るんだ!？」

「は、初めて知った」

水滴を振り払いながら勝気に微笑んだトビイ、水竜オフィーリアの背を撫でながら一言。

「お前ら、よく来たな。とりあえず、この烏賊を蹴散らす。食べたければ食べる」

「烏賊はちよつと」

「烏賊は」

「烏賊は大好きだよー、僕食べるねー」

デズデモーナにアリナを預け、トビイはオフィーリアに乗ったまま剣を上段で構えると飛び出してきたクエー口を真つ二つに切り裂く。吼えてオフィーリアも、一匹に噛み付いた。

ゆつくりとデズデモーナは上昇し、甲板へとアリナを送り届けると、悲鳴を上げている人間を一瞥してまた下降する。

敵ではないらしい竜の出現に、息を殺して皆見つめるしかない。産まれて初めて、竜を見た。慣れるといわれても、普通は慣れないだろう。

やがて静かになった海、トビイが緑の竜に跨り甲板へと姿を現す。思わず言葉を失い、トビイを見つめる事しかできない一同に、苦笑いしてトビイは軽く口を開いた。

「というわけで、相棒のクレシダ、デズデモーナ、そしてオフィーリアだ。ドラゴンナイトなんでね、オレ。」

このままアサギを向うべく、魔界へ向う。じゃあな」

「えー!? ボク達は!?!」

すっかり回復したアリナの大声に眉を顰めて、トビイは首を振る。

「無理だ、乗れない」

「ええー!?!」

「アサギはオレが救出するから適当にお前らは旅でもしていたらどうだ? あ、オレの荷物とってきてくれ」

羽ばたき、睨みつけている様なクレシダに喉の奥で悲鳴を上げると、数人の船員達は逃げ惑う。だが、船長は豪快に笑い出すと一人の船員に指示を出した。

「ドラゴンナイトさんかあ、それであの殺伐とした雰囲気は。お前から、トビイ殿の荷物、もってこいや!」

数分後、きつちりまとめてあったトビイの鞆を持って船員が恐る恐るトビイへ近づく。差しあたって簡単な食事と方位磁針、金があればどうにかなる。

わざわざサンドイツもこさえて貰い、何も言えない仲間を他所にトビイは方角を確認すると大空へと舞い上がった。

「ちよつと待て! 話はまだ終わってない!」

「オレがいなくて戦力がた落ちだが、気を抜かずに頑張れよ。まあ、縁があればどこかで会えるだろ」

「だー！ お前ホント身勝手だなっ！ ボクも乗るよっ」

「だから、無理だと……。じゃあ、な」

「わー、トビイー！」

アリナの声も虚しく、トビイはそのままクレシダと共に飛び立つ、後方をデズデモーナが追い、海からはオフィーリアが追いかけた。

「な、なんだあ？」

へなへなと座り込むアリナ、肩を抱きかかえてクラフトがトビイを見送った。

「もとより、トビイ殿は別行動でした。彼はコレを狙っていたのですね」

「つれてけよ、なあ」

「仕方ないです、こちらは当初の目的を達成しましょう。街へついたらライアン殿に報告し。もし、トビイ殿さえ失敗しなければアサギちゃんはすぐに戻りますよ、こちらに。良い事です」

アリナにとつて、トビイに置いてかれたことが相当ショックのよ。うで。貴重な喧嘩相手だったのだ、無理もない。

「皆さん、大陸は目と鼻の先！ 気を抜かずに行きましょう！」

船長の声に拍手がぼつぼつ、と沸き上がるがそれは徐々に大きくなり盛大な拍手になった。

ドラゴンナイト・トビイに、盛大な拍手を。

船員ポールは、見当たらずに海の藻屑になったようだが仕方がない犠牲だった。弔うしか、ない。

ミシアが一人、計画がぶち壊されて怒りを何処へ向けるべきか悩み。一人、部屋に閉じこもった。

トビイがいなくなった。アリナが生きていた。ポールが死んだ。最悪だった。

「アリナ……覚えてらっしゃい、私のトビイとポールを奪ったこの事実、決して！」

怒りの矛先、当然アリナへ向けられたようだ。何もしていないアリナ、そもそも計画が破綻に終わったのはミシアが自分を過信しす

きたからだろう。

ヒステリックに、ミシアは絶叫した。奈落の底、亡者の断末魔。

本来の自分に戻ったトビイ、数ヶ月離れていた相棒の竜達は興味津々でトビイに問いかけている。

「で、主。今後は何処へ？」

「魔界イヴァンへ直行だ、やるべきコトが出来た」

「今まで何を？」

「追々話す、少し眠らせる」

「御意」

久方ぶりに相棒の竜の背で眠りに就くトビイ、時は夜半、月が美しい夏の海上。揺らめく波に反射する月光と星が、これから先の希望を連想させた。

三体の竜は無事な主を見て安堵し、トビイもまた相棒達が元気でいたことに感謝した。竜ならば魔界イヴァンなど最早辿り着けたも同然だ、眠りながらトビイはアサギを想う。

早く行かねば、泣いているだろうから。アサギと離れて早一ヶ月、どうしているだろうか。

「待つてるよ、アサギ」

絡まる糸は徐々に解れ

勇者達が、散り散りになる前に時間は戻る。

ジェノヴァにて、マダーニやアサギ達が遭遇した魔族のオークスとラキ。二人の魔族は暫しジェノヴァに滞在していたのだが、何を起こすでもなく数日後、街を出た。

街を出てから人間の足で半日ほどの距離の森へと入っていった二人は、そこで丁重に陣を描く。陣があれば、高位な魔力の持ち主ならばその陣を使用することも可能だろう。故に、ここへ痕跡を残していけば、同じ場所へと入ってくる可能性もある。

よって、オークスは、計算して陣を描いた。

使用した木の実が初々しく、後で鳥たちが食べてくれる。陣が少しでも欠ければそれは発動しないのだ、陣の効果を消さなくてはならないので鳥達に期待。また、水が流れる崖周辺に描いたので、その水によって陣が消される可能性もあった。

二重の策を。

決して、”戻る場所”へは誰も立ち入らせてはいけない。

二人は陣に入ると、そのまま転移を開始。

二人の行く先、それは島だ。

”アレクセイ”と呼ばれる小さな島である、現在魔族しか住んでいない。魔界イヴァンとはまた別の島だ、もっと小規模である。

アレクセイに住まう魔族達、後に”聖魔族”と呼ばれることになるのだが、今はまだ誰も知らない。人間に味方し共存を願う魔族達の総称である、そういった魔族達が集まって出来た部落だった。

無論、イヴァンにも共存を望む魔族達はある。だが、公に声高らかに宣言した魔族達が今こちらに移住しているわけで、言わば迫害されたような意味合いにとれなくもない。

そして、その頂点に立つ者こそ。

「ナスタチューム様！ 戻りました」

ナスタチューム・ローファン・ディアルゴ。

現魔王アレクの、真正正銘従兄弟だった。温和な性格で、極端に争いごとを嫌う男である。

島の規模に相応しいサイズの、豪邸とは言えない質素な造りの家がナスタチュームの住まいである。周囲は畑で囲まれていた、まさか魔王の従兄弟が住まう家とは思えない。

オークスとラキは、真つ先にナスタチュームに報告すべく戻ったのだ。

「ラキ。ここまでで良いよ。羽を伸ばしておいで」

最後まで付き添うつもりだったが、オークスにそういわれたのでラキは大きく頷くとコウモリのような羽を広げて空に発つ。

ラキの行き先は広場、皆の憩いの場所。

ラキを見送り、オークスは庭でのんびりと草花の手入れをしているナスタチュームに歩み寄る。気付いたナスタチュームは手を休めると水で冷やしておいたキュウリを、オークスに勧めた。トマトもスイカも、湧き水によって冷やされている。

非常に、夏らしい。

「長旅、ご苦労様でした」

汗を拭きながら、芝生の上のシートに二人して座り込んだ。

「その様子ですと、何か良い事があったみたいですね」

穏やかな物腰のナスタチューム、線も細く女性のような。長い黒髪を後ろで一つに緩く束ねて微笑む、見た目麗しい。

「はい。勇者様に逢う事ができました」

「それはよかった。どうでしたか、印象は」

カリ、とキュウリを齧った音。瑞々しいキュウリは熱を下げるのに適している、ちなみにこのキュウリはナスタチュームが丹精こめて育てたものだった。

「ですが、同時に姫君も見つけてしまったのですが」

苦笑いするオークスに、ナスタチュームは首を傾げる。

「良いではないですが、封印しましょう。先に見つけることが出来たのですから、そも不安そうに語らなくても」

不安そうに呟いたわけではないが、そうナスタチュームは感じ取つたらしい。オークスは首を横に振ると、落胆気味に言葉を続ける。「王子、簡単に言わないで下さい。」

姫君は、覚醒していませんでした。ですが、予言とは異なる、といますか、予想しなかった事が「
「どういうことですか？」

眉を顰めたナスタチューム、溜息を深く吐き心痛な面持ちでオークスは観てきた事を語り出す。直様予想通り、ナスタチュームの表情にも陰りが出た。

平素、温和で笑みを絶やさぬ王子が、悲哀の表情に満ちる事はオークスにとつて耐え難いことである。胸が痛い。

「それが、勇者と姫君、同時にとすべき……」
ラキは、オークスと別れてから広場を目指していた。広場は一箇所、皆の憩いの場である。

直様瞳を輝かせ急降下した先には、ラキのからかい相手が2人もいた。並んで芝生で日向ぼっこをしているらしい、暢気なものだと大袈裟に肩を震わせるラキ。

自分は人間界に向き、重要な任務に携わってきたばかり、この2人より勝っている感に支配される。

実際、ラキは何もしていないのでそう威張れるものではないのだが。おまけにオークスの指示を無視して人間にも接触しているので、失敗しているのだが自分は柵に上げる。

一人は7歳位の少年、無心で眠りにについている。

もう一人は20代前半の青年だ、女のような綺麗な顔立ちをしているだけでなく肌も綺麗である。燃えるような深紅の髪が芝生の緑に、よく映えていた。

ころん、と青年が寝返りを打った。眉を軽く顰め、半開きの口、悩ましい表情だ。

思わず、見惚れるラキだが、瞬時頭に血が上る。

「お、男の癖になに、その色気つ。起きんかい、馬鹿どもーっ！」
大声で叫んだラキ、青年は驚愕の眼で飛び上がるように起き。少年は数回瞬きして、寝ぼけたまま起き上がる。非常に二人とも不服そうだ。

「えーい！ 起きろ起きろ！ 仕事しろよ、役立たず2人組み」

ラキはふてぶてしく欠伸をしていた青年の頭部に全力で、手刀を叩きいれた。

ゴン、と鈍い音。

「痛いじゃないか、ラキ。仕事はしたよ、今は昼寝の時間です。この時間帯に休息しておくとか午後から効率が良くなるんだ」

言いながら再び寝転がる青年、顔を引き攣らせてラキは地面に全力で拳を叩きこむ。が、相当痛かつたらしい、微かに涙を浮かべてラキはそつと拳を背中に隠すと擦り出す。

「い、いいか、サーラ！ あたいは、仕事をしてきたんだ、オークスと一緒に人間界に出向いて任務をきっちりこなしてきたんだ。怠け者を罰する義務がある」

びしい、と右手の人差し指でサーラ、と呼ばれた青年を指した。

「そんな義務、あるの？」

「フェンネル！ お前も口答えしないで働きな。何時までも子ども扱いされてると思ったら大間違いだぞっ」

フェンネル、と呼んだ少年の前に仁王立ち、苛立たしさをあらわすように地面を踏み鳴らす。

鬼のような形相、何がラキの機嫌を損ねたかというかと幸せそうに眠っている二人に、ただそれだけ。自分が対象から逸れたことを確認するとサーラは再び寝転がり、ふう、と溜息。

目の前のピンクの可憐な野花が、うつすらと揺れた。

「私は失恋して心が痛いんだ、そつとしておいてくださいラキ」

憂いを秘めた乙女、これで男なのだから勿体無い。ラキは嫉妬を覚えつつ、顔を真っ赤にすると再びサーラに接近。

年齢的なこともあるが、ラキは女性らしい身体つきなどしていない。髪も短髪で少年に見られることもしばしば、辛うじて露出の高い衣装を身に纏っているのは少しでも色気を出したいからだ。最近には佻童も増えてきている。

全く、色気が追いつかない。余計に目の前の美麗な男が、憎い。

「なあにが失恋だ！ 何百年前の話だよ」

「百八十二歳の時だから……」

「だー！ そんな情報知りたくもないっ」

サーラは、憶えていた。何日前かですら答えられるほど、憶えていた。彼の脳裏には鮮明に甦るのだ、”あの日”の出来事が。

おどけたようにラキが、大袈裟に腕を奮いながらうろつくとサーラの周囲を歩き回る。他人の失恋話など、笑い話にしかならない。

「ともかく、そんな昔の女忘れるよ。想ってたって甦るわけでもないだろ？ そもそも人間だ、生きていたとしても、とおに死んでる。根暗だなサー」

ラ、と名前を言おうとして、ラキは鋭い悲鳴を上げた。フェンネルが、大声で叫んでいた。ラキの身体が、宙に浮いている。

サーラがラキの細い首を右手で締め上げ、持ち上げたのだ。

ゾクリ、とラキの背に冷たい汗が溢れ出て流れ落ちる。これが、

”紅蓮の覇者”と呼ばれるサーラ・ドンナーの本質。

平素は穏やかな女顔だが、一度火がつくと手がつけられないのは、やはり属性が火炎だからか。火炎の魔法においてならば、魔界で三本の指に入る魔族だ。

ナスタチュームの側近である、”氷塊の霸王”オークスとは親友同士にして対。

ラキは苦しさに身を擦る、呼吸が出来ない。沸き上がる涙は圧迫された首、身体が必死に抵抗を促した。紅蓮の炎を周囲に撒き散らせ、サーラは無言の重圧をかけていた。

いや、恐らく激怒し言葉が口から出てこないのであろう。確かに、ラキとて言い過ぎたと思っっている。が、サーラにとって禁句を連発

してしまつたようだ、簡単に怒りは鎮まらない。

小刻みに震えるサーラの身体から迸る火炎は、周囲の草花を燃やした。血走るサーラの瞳、瞳の奥に憎悪が見えた。自分の想いを、嘲笑つた目の前のラキが憎い。

知る筈もないことなので仕方がないが、サーラの愛した人々全てを愚弄されたようで、憎い。

「ラキに何が解る！？ 私の気持ちなど私自身にしか解らない！」
ドウツ！

轟音が響き渡る、何処かで悲鳴が上がった。

地面が一部裂けたのだ、そこに先程まで地面に慎ましく咲いていたピンクの花が吸い込まれていった。木に止まり、毛づくろいをしていた小鳥達が直様飛び立つ。

「や、やめてサーラ！ お花さん達が死んじゃうよお！ 小鳥さん達が怖いって啼いてるよお！」

フェンネルの悲痛な叫び声は、サーラの意識を取り戻させた。幼き子の、泣き声。

ビクリ、と何かに怯えるように身体を硬直させると気まずそうにサーラはフェンネルを見下ろす。しゃっくりを上げながら、地面の割れ目に手を伸ばし必死に落下した花を助けようとしていた。

しかし、花は割れ目の手が入らない場所へ。届かない、助けられない。

「ごぶっ、か、ごはっ」

ラキの咳だ、サーラの手が緩み、首が自由になる。くつきりとラキの細く白い首には手形が、残された。自らの羽で浮遊する体力などなく、ラキはずるり、と地面に落下し咽ている。

申し訳なさそうにサーラは2人を静かに交互に見比べると、地面に頭がつくのではないかというほど、深く謝罪した。取り乱してしまった、自分の行動を恥じた。

「すまない」

蹲っていたラキに、手を伸ばしたが、小気味良い乾いた音と共に

手は弾かれた。

涙が浮かぶラキの瞳、渾身の一撃で手を払い除けると唇を噛締めながらラキは地面を逃げるように駆けだしていた。呆然としているサーラに、カ一杯ラキは叫ぶ。

「おまえなんか、ずーっとその女の事考えながら死んじまえ！」

精一杯の抵抗だった、謝る気など無くなった。足をもつれさせながら、自らの羽で飛ぶこともなくラキは走る。泣いて走って、サーラから自分の姿が見えなくなるまで。

「ばかあっ」

捨て子のラキは、ナスタチュームに拾われてこの島へ来た。はねつかえりで人一倍横着、それは寂しいからだというのは島の人間は皆知っている。騒いでいれば誰かが気に止めてくれるから、誰かが傍にいないことを実感したいから。

そんな中で、サーラに出遭った。

穏やかな微笑で、ラキを黙らせたのだった。母親など知らないが、そういった感覚を与えてくれた安心感を胸に抱く。後日男性だと知り、ラキは何時しかサーラに惹かれた。

羨望の相手は、美青年で姉のようで、母のようで。不思議な存在感だ。

惹かれていつて知ったことは、サーラには想い人がいたということ。その少女がもはや死に絶え、生きては居ないこと。

ラキはいつも、サーラから思い出話を聞かされた。

花の様に明るく可憐で美しく、大地の様に大らかで優しく、太陽の様に眩しくて暖かい美少女の姫君。緑の髪は若葉を連想させ、薄桃の頬は愛くるしい、人間の姫君。

魔族に滅ぼされた一国の姫君、名前はアンリ。

ラキは生き生きと嬉しそうに語るサーラを見るのが辛かった、そして話を聞きながら自己嫌悪に陥る。

湖へ一人出向き、水鏡に姿を映せばアンリとはほど遠い自分の姿まるで違う、自分とはこんなにも違う。

勝るのは生きている、それだけ。

だが、生きていても、サーラの心はアンリに捕らわれたまま。

ラキは森の端までやってきた、カンカン、とリズムの良い音が聞こえてくる。誰が何をしているのか解っていた、だからここに来た。

「ジーク！ ジークムント！」

男が手を止め、ラキに向かって苦笑いすると両手を広げる。

「どうしたラキ、またサーラに苛められたか？」

泣きはらした目で、大体察しが着いていた。豪快な声、逞しい腕には剛毛。一見無骨そうな男だが、頼り甲斐があり皆の父親のような存在である。

「うわああああん、と泣き喚きながらラキはジークムントの胸に飛び込んでいた。

「やれやれ、と言いながらもラキの頭を見た目からは想像できない繊細さで優しく撫でる。愛娘を愛でる様に、ジークムントはその大きくどつしりとした大地に根付く巨木の様に、傷ついた小鳥を、抱き締める。」

ジークムントは、人間を愛していた、子も授かった。だが母子共々魔族に殺されていた、丁度見た目ラキくらいの年齢になった娘だった。その為か、ついジークムントはラキに甘く接してしまうのだ。娘を護れなかった罪悪感、失望感に捕らわれて気が狂いそうなき、奮い起こすのは未来への希望。

二度と、同じ目に合わないように。他の魔族が、同じ事で苦しまない為に。自身の過ちである過去をバネにして、未来を紡ぐ。知り得た心の痛みは封印し、動力の糧として。

ジークムントは、武器職人になった。

本来戦うことが好きではない聖魔族達でも、防御の為にとジークムントは武器を造り続ける。個々に似合った武器を造るその技術は、天下一品だ。

「ラキなあ、落ち着け落ち着け……」

背を撫でられ、ラキは大きく息を吸い込み、吐き出した。あんな

ことが言いたかったわけではない、もっと可愛らしく接したいのだ。だが、出来ない。

自分を見てももらえなくて、つい、憎まれ口を言ってしまうだけだ。サーラの想いとて、解る。苦しいのだろう、相手がいないのだから護れなかったのだから。

月を見上げ、切なそうにしているサーラを何度木陰から見ていただろう。どうか、その人間の少女が転生していればいいな、とラキは思った。

魂は、輪廻する。

きつと、何処かで姫君も生まれ変わっているだろう。もし、出会えたのなら……二人は。

ちくり。

ラキは、痛くてジークムントの胸に顔を埋める。胸が、ちくりと針で刺したように。もし、姫君が転生していたらば、二人は幸せに暮らせるのだろうか。

ちくり。

ちくり。

……素直に、願えなくなっていた。

サーラと、共に居る少女は自分ではない。自分はそんな仲睦まじく暮らす二人を見守るしかないだろうから、それならば。

素直に、祝福が出来ないと思ってしまう。転生していて欲しいかないと、転生しないで欲しいと願ってしまった。

ラキは、気分が悪くなつて暫し、ジークムントの胸の中に居た。自分のそんな浅ましい思いにも幻滅したが、それ以上に、サーラとその姫君が二人で寄り添う姿を見ていたくない。

幼い恋心は、不安定だ。ジークムントとて、ラキの想いを知っているので何も言わずにただ抱き締める。誰でも通る、恋の痛み。

ラキが遠ざかり、サーラは軽い溜息を吐く。自分の腕をそつと見つめれば、自嘲気味に笑った。精神が未熟で不安定。それはサーラ

とて判っているが、この気持ちだけは制御できない。毎年特に、この時期には感情の抑えが効かなくなる。

「フェンネル。オークスとナスタチューム様に私は出掛けたと、伝えておいてください」

フェンネルは首を傾げた、だが思い出し、哀しそうに瞳を伏せると微笑む。

「いつてらっしゃい。伝えておくれ」

「ええ、頼みましたよ。花束を何処かで調達したいので、急ぎます」
言うなり、サーラは空へと舞い上がるとすぐに姿は遠のいていった。眩しそうに見上げていたフェンネルは、立ち去ったのを最後まで見送ると、言われた通りナスタチュームの館を目指した。

もうすぐ、サーラの愛した姫君の命日だ。だから、廃墟と化した亡国へと毎年出向いている。

誰でも知っていることだった。

まさか、今年その場所でサーラが人間のドラゴンナイトと遭遇するとは、誰も思っていなかったが。

夢の続きは、何処で見る

イヴァンを目指して数日、トビイの持っていた質素な食料もそろそろ尽き始めた頃。

大陸が見えたので一旦そこへ着陸する話が出た、トビイは先を急ぐべく反対したのだがその日は生憎雨天である。それならば休憩し翌日晴れたら再開したほうが効率が良いのではないか、という話になった。

雨天の飛行はやはり体力が奪われる、トビイは逸る気持ちを抑えて、また竜達の体調も考えてその地に降り立った。悲鳴を上げていたのは、幼い水竜オフィーリア。流石に水の中といえども全力で泳いでいては、体力が続かない。休憩が決定し、嬉しそうにオフィーリアは飛び跳ねた。

崖下にオフィーリアを残し、デズデモーナとクレシダ、そしてトビイは崖上へ着陸する。魚類ばかりを主食にしていたので大地のものが食べたいと思ったトビイは、森へと足を進ませる。久々の大地だ、多少の感覚のずれなど、直ぐに克服する。土の軟らかな感覚に、やはり大地は良いものだトビイは思わず笑みを浮かべた。

安心すれば、腹が減る。竜の気配に森の生物が怯えて出てこないのではないか、と思ったが野兎を捕まえる事ができた。本日の食事は、選りすぐって茸も調達する。

大木の下でなんとか濡れていない木々を広い、火を起こし焼いて食べる。久々に捌く兎だった、木の実の香辛料と茸を開いた腹に詰めて、豪快に焼く。

暖かな物を口にするのは久し振りだった、それだけで落ち着く。香辛料の香りが、食欲をそそる。

崖下から浮上してきたクレシダが、魚を手に使っていた。わざわざ獲ってきてくれたのだらう、それも焼いてみる。

流石に毎日刺身だけでは竜も飽きるというもの、クレシダは草食

なので草や木の葉を食べ始めていた。

湯を沸かし、酒で割って身体を温める為に啜って飲んだ。雨音が心地良い。豪雨にはなっておらず、しっとりとした雰囲気周囲に漂わせる。霧が発生し、遠方は見えないが全く人の気配はなさそうだった。

暫くしてオフィーリア一人では寂しかろうと、デズデモーナが崖下の窪みで休む事にし、トビイとクレシダは2人丸くなり眠りに就いた。早めの就寝だ、どのみちできる事など、ない。

慣れた旅だった。自分と、竜が三体だけ。先日までの旅は大勢の仲間で行動した、騒がしかったがあれはあれで愉しかった。人の輪の中に長く留まる事は、あまりなかったトビイにとって鮮烈だった。トビイは微かに笑みを零し、久し振りの大地に横になる。

時間的にはまだ夕刻より前だろうが、することはなにもない。空腹は満たされたのだ、眠りについてても惜しくはない。

やがて目が覚め、大きく伸びをして起き上がると一面は霧だった。雨は上がっている、早朝の濃い霧の中、冷たい空気で目が冴えた。

トビイは消えかけた焚き火に再度火を起こし、暖を取る。湯を沸かして、身体を内から温める。街で手に入れた薬草を煎じて飲み、一息つくると次第に霧は薄くなった。思いの外苦く、丁度目も覚める。不意に何か奇妙な形を遠くに見つけ、目を凝らす。昨日は気づかなかつたが建造物がそこにあった、朽ち果てていたが。

不審に思い地図を広げる、トビイ。場所の把握は完璧ではないが、方角的に大体の場所を推測する。指で地図上をなぞり、眉を潜めた。明らかにその場所周辺には、街などあった形跡が地図にはない。

そこそこ巨大な建物のような、廃墟になった村ならともかくここまで大きいのなら地図に載っても良いと思うのだが。

腰を上げると瞳を細めてトビイはそちらへ歩み寄り、当然剣も携えて。

クレシダはまだ眠りについていて、妙な気配はないし、それでも

油断せずに歩く。

森の外れに廃墟、どうも形からして城だったように思われた。何時から建っているのか解らないが、植物の生え具合からしても相当経過してそうである。

「驚いたな、地図に記載されていない城、か」

忘却の城だ、この地図とてそう新しいものではないのだが、それ以前に朽ちたのだろう。

周辺を歩き回った、白骨化した人間が見られたので戦争に敗れた場所なのだろうと憶測する。盗賊などが偶然見つけられれば、目の色を変えるのだろうがトビイは金になど困っていない。踵を返した時だった。

「驚きましたね、まさか人間がこの地に足を踏み入れるとは」

声に反射的に剣を引き抜いた、見れば廃墟に一人、深紅の長い髪を風に舞わせて立っている人物が居る。いつからそこに居たのだろうか、気配は感じなかった。

あまりにも線が細いので女だと思った、が、声は男のもの。静かにこちらを振り向けば、頭部に突き出た角が二本。魔族であると判明、皮肉めいてトビイは笑う。

「魔族がいるとは、な」

軽く唇を持ち上げて笑うトビイに、その魔族は臆する事もなく柔らかな笑みを浮かべる。

「気づかれないうちに立ち去ろうかとも思ったのですが。思いの外強そうな方でしたので」

徐々に2人の距離が近づくと、警戒しているトビイとは反対に、魔族の男は変わらず笑みを浮かべたままだ。突如腕を差し伸べられ、トビイは一步後退した。

思わず舌打ちし、睨みつけるトビイ。そう、後退してしまったのだ、有り得ない事だ。

トビイが後退するということは、相手が只者ではないという事、相当な魔力の持ち主である。見れば腰に剣を下げていた、魔法剣士

かもしれない。ひ弱そうだが。

そんなトビイの視線を気にすることもなく、魔族は優しく手を差し伸べている。

「お腹、空きませんか？一緒に食べましょう」

屈託ない笑顔でそう言われ、拍子抜けしたトビイは警戒を解くことなく踵を返しクレシダの元へと戻った。

何も言わずについていく魔族の男、どこことなく愉しそうだ。

「今日は……。愛する人の命日なのです」

「へえ」

「ここで、彼女は息絶えました」

「あの廃墟、城か？」

「ええ、もう随分と前に存在した小さな城です、人の良い国王であつた為……。潰されました」

「当事者か？」

「はい、そのの姫様が私の想い人。……あ、申し送れましたね私はサーラ、と申します」

「……オレはトビイ」

「知っていますよ」

振り向き様に喉元に剣を突きつけたトビイ、サーラは意外そうに肩を竦めた。知らない相手が自分を知っているというのは、確かに不愉快だ。

しかし睨みを利かせているトビイに軽く首を振ると、困惑気味に剣を下ろすように指示。

「怒らないで下さい。」

ドラゴンナイトのトビイ・サング・レジョンさん、ですよ。紫銀の髪に竜を三体つれていれば、魔族なら殆んどの者が知っていますよ。

私はサーラ、魔王アレク様の従兄弟であるナスタチューム様の参謀です」

「ナスタチューム？」

眉を潜めトビイはサーラから剣を外す、足元から見上げていき、舌打ちした。聞いた事はある、魔界イヴァンではなく別の土地に移動し住んでいる魔族達の長だ。記憶を手繰り寄せて、半ば興味なさそうに聞いていた自分を思い出した。

アレクとの冷戦に負けたのだとか、様々な噂が飛び交っていたが、トビイとてそのナスタチューム側を名乗る魔族に出会うのは初めてである。

「敵意はありませんし、トビイさんが今後どうされるのか訊いたりもしません。が、一人での食卓は寂しいので」

にこやかに笑うと先に歩き出した、トビイの脇をすり抜ける。

「山菜や茸、それに小鹿の肉を手に入れたので一人では量も多いし困っていたところです。命の重さは平等、残すことなく有難く頂かなくてはいいけません。私、小食なものですから。あ、果物もあつたので」

そういえば先程から大きな袋をぶら下げていた、食料が入っているようだ。トビイは深い溜息を吐くと得体が知れないこの男の後ろを、何かあれば斬りかかる勢いでついていく。

眠っていたクレシダが目を覚ました、デズデモーナが崖から舞い上がってきた。主とは違った気配に、殺気を放っているようだ。

感心するように見上げ、サーラはトビイに振り返る。

「立派な竜達ですね、そしてトビイさんに絶大な信頼をしている。

良い関係です。ドラゴンナイトと言えどもここまでの絆はそうそう作れません」

「誉め言葉、どーも」

どうも胡散臭いこの男に、腕を組んで不機嫌そうに返答するトビイ。苦笑いしてサーラは焚き火を見つけると、早速料理に取り掛かった。

「自然薯が掘ったら出てきたのでね、小鹿のソテーの付け合せにしましゅうね」

勝手に調理器具を取り出し、何やら作り始めるサーラ。嫌に手馴

れている、参謀、というか料理人だろうか？ というレベルだった。唾然としていると、サーラが口を開いた。

「ふふ、その城で料理も担当していたのです。私を雇ったことで料理長が逃げ出しましてね。魔族とは仕事をしたくない、と思ったのでしょうか。結果的に……彼は逃げて正解でしたが」

何処となく寂しそうに語るサーラ、トビイは少し離れてサーラの言葉に耳を傾けた。

トビイが攻撃の態勢に入らないので当然クレシダもデズデモーナも大人しくしている、満足そうに頷いたサーラ。

「竜も食べますかね？」

「食べない事はないと思うが」

「では張り切って作らねば！ 腕がなりますね」

パンケーキを焼き、ソテーを作り、更にスープまで用意し。呆れるほどに用意周到、厨房でもないので軽やかに料理をしていく。

「さあ、時間がかかりましたがどうぞ。やは料理人としては”美味しい”という言葉と料理を口にした時の笑顔が、何よりのご馳走です」

「参謀じゃないのか、あんたは」

ともかく空腹だったトビイは、それを口にした。毒が入っているとは思えなかったので、素直に。竜達も頂く、全く量は足りないだろうが。

口にして驚いた、一等の店でも開けそうな味である。トビイとて、舌には自信があるので間違いはない。

唾然としていたトビイだが、素直に「美味しい」と口に出した。嬉しそうに満足そうに微笑むサーラ、自分も食べ始める。

「この城のお姫様も料理が好きで、そして上手でした。私は教えるのが愉しくて」

「へえ、珍しい姫だな。料理なんぞするのか」

「ええ。アンリは自分の身分が嫌いな子でしてね、一般階級の人々と同じ扱いにして欲しいと、城のものに毎度怒っていたものです。」

健気ですが、勇敢で無鉄砲な子でした」

懐かしむように廃墟を見上げ、サーラは深い溜息を吐いた。訊いてはいけない話なのだろうと、トビイは軽く我慢をする。

特に他人に興味を持たないはずのトビイ、しかし……：気になって仕方がなかった。

キイイ、カトン。

音が聞こえ、思わずトビイは身構える。不思議そうに覗き込んだサーラに、慌ててなんでもない、と告げると黙々と食べ始めたのだが。

気になった。非常に話の内容が気になった。

しかし、トビイが言うまもなく、サーラが先に口を開いたのだ。ぼつり、ぼつり、と。

「昔、ここは土壤に恵まれた田舎の城がありました。小さく力こそありませんでしたが、民は幸せでした。

3代目の時の王、子供に恵まれず老体になり、独りの妻だけを愛してきた王はこのまま王妃にお子が出来なければ養子を取るつもりでしたが、奇跡が起こりました。

ようやく姫君を授かったのです。名を、アンリ、と名付けました」
愛しそうに胸元のネックレスを抱き締めたサーラ、きつと思いで出した品なのだろう。横目でトビイがそれを見やる。

「そこから、私の話は始まります」

ネックレスに口付けをし、サーラは語り出した。

それは、トビイにとって、ある意味衝撃的な物語だったが、現時点では知らない。知る筈もないことだった。

……とある小国に、とても可愛らしい姫様が産まれた。

絶え間なく光が満ち溢れている森林に囲まれた静かなお城に、穏やかな人々と仲睦まじく。

その姫様は名前を”アンリ”といって、誰からも好かれるお姫様だった。

アンリ。

豊かな新緑色の柔らかな髪に、優しそうな瞳、軽く頬を桃色に染めて、熟れたさくらんぼの様な唇を持ち。まるで少女達の夢物語、御伽噺の中のお姫様のような容姿。愛くるしい顔立ちは、見るもの全てを魅了してしまおうと言っても過言ではなかった。

民が皆揃ってこの姫を愛していたのは言うまでもない。

魔族のサーラは大雨で旅を足止めされ、冷たさのあまり人間のこの城を訪れたのだ。その頃のアンリは、まだ生まれたての赤ん坊である。夜鳴きしていたアンリを優しく抱きとめて寝かしつけたサーラに、時の王は暫し滞在して欲しいと懇願する。

困惑し、周囲から一部反発を受けたサーラだが、この姫を護る決意をした。

王は宝剣を携えていた、屈指の剣士でもあった。サーラの人柄を見抜き、そして寛大に振舞うこの人間の王にサーラも本気で使えることを決意した。

当然、快く思わない人間達は逃げ出していった。料理長が最初に飛び出したので、サーラが料理を振舞ったがこれが大好評、直様料理教室が開催される。

刺繍や裁縫が得意であった為、それも国産品として売りに出した。薬草や植物の見分け方も、人間に教えた。教師の役割だったのだ。

やがて、人間達はサーラの人柄に打ち解けて魔族という概念に捕らわれずに接するようになる。それが、サーラにとってこの上なく嬉しい事で、王にとってもそれは同じだった。

何より真っ直ぐに育った美少女アンリは、サーラの賜物だとも思っている。

信頼できる国王と、誰からも愛される姫君、そして最強の護衛のサーラのおかげで、国は皆が貧困に困らぬ程度に、豊かになった。時間があるので、皆他人に気をかける。愛が、生まれる。

けれども国に襲い掛かった巨大な悪は、姫の命を奪い、青年に絶望を与えた。

サーラを嫉んだ騎士団長が、他の魔族の誘惑に負けて魔物を国へとおびき寄せたのだ。サーラは戦った、国民は禱った。国王が、姫が武器を手に果敢に対抗した。

しかし、多勢に無勢である。サーラは援軍の高等な魔族によって、打ち砕かれてしまう。勿論、国は滅ぼされた。人々は、人間を護って戦ってくれたサーラを護るようにして、皆死んでいた。

姫の死後、偶々通りかかった親友に救われ、辛うじて一命を取り留めたサーラは。

国王の宝剣を携えて、アンリの転生を待った。彼女の胸元のネックレスを頂き、絵画をそこに忍ばせた。肌身離さず、出遭えたときに解ってもらえるように。

「待つてて。勇者になるから、勇者になればきつとすべて上手くいくから！ 私、勇者になるの」

そう言い残して、死んでいったアンリ。あの笑みをサーラは忘れられない、忘れられないから過去に捕らわれたまま。美しすぎる、笑みだった。とても、死の国に行くとは思えなかった。

一目惚れした死神が、アンリを連れて行ってしまったのだ。

しかし彼女ならば、勇者として戻る気がしていた。そういう気持ちにさせる子だった。

「これがその宝剣です。その廃墟はその城の成れの果て。私はサーラ、その歴史に埋もれた魔族です。そんな辛気臭いお話でした」

差し出された剣を手に取り、トビイは瞳を細める。低く呻いてそれをサーラへと返した、確かに相当な魔力を秘めている。トビイの剣ほどではないが、それでも滅多にお目にかかれない代物だ。

それ以後使っていないのだろう、しかし、毎晩といでいるのだろう。装飾品の様に、美しい。

サーラの横顔を見つめながら、煎れてくれた珈琲を啜るトビイ。引き金は、人間のサーラへの嫉妬だが、元凶はサーラ自身だ。それを責めて悔いているのだらうと、容易く見て取れたトビイ。

励ます、などしたくはないし、ガラでもない。本人も気付いているだろうが、国民は誰もセーラを責めてはいないだろう。他人に言われて目を醒ますより、自分で気付いて欲しい。

一人生き残った意味を、苦悶でも考えねばならないと。

話を聞いてトビイは引つかかる事が多々あった、なんだか知った話な気がしていた。知る筈もないのだが。もしかすると、マドリード辺りに聞いたのかもしれない、とトビイは思い直す。

そして、気になるといえば話に出た名前が。

オークス。

先日、ジェノヴァで聞いた名である。

「勇者が出現した、と聞きました。アンリであれば良いのですが」自嘲気味にそういうサーラに、トビイは口を嚙む。トビイは、勇者を知っている。

アサギ、という名の少女が勇者だ、アンリではない。しかし、アンリとアサギが似ている気がして腑に落ちない。顔は知らない、名前しか知らない。それでも、何故か胸騒ぎがする。

互いに、静かに食後の珈琲を啜りながら、物思いにふけるしかなかった。

雨は上がった、晴天だ。

遅れを取り戻すべく、トビイは軽くサーラに別れを告げて立ち上がり、傍らに大人しく控えていたクレシダに飛び乗る。

後ろ髪引かれる思いにも似て、聞きたいことがあったのだが、トビイは先を急ぐしかない。

アサギを探さねばならない。

「では、お気をつけて。御武運を」

「……ああ」

深く頭を下げて見送るサーラに手を振り、トビイは旅立った。

見送りながらサーラはネックレスを外して中を覗く、もう何度も見た絵画だ。

「アンリ。そういえば君が探していた夢の中の人は、トビイさんのような紫銀の髪だったね」

姫は、以前サーラにこう告げていた。『捜したい人が居るから、一緒に来て欲しい』と。

紫銀の髪が綺麗な、夢に出てくる王子様を探しに行きたいと言っていた。

笑って、ネックレスを閉じる。

もし。

そのネックレスの中身を、トビイが見ていたのならば。

二人は、気がついたのだ。

アサギこそ、アンリの転生で間違いないと。アンリの姿、アサギそのものであるから。

ネックレスの中で笑っている姫は、まさしくアサギ。緑の髪と瞳の、アサギ。

勇者になりたいと願った、この地に生まれた小国の姫。紛れもなく、勇者として今、この星に舞い降りているのだ。

月と共に流れる行く景色、孤高の瞳に映るもの

その晩の月は、妙に青白い。

物悲しい雰囲気を放つ月の、儂い光がトビイの髪へと降り注ぐ中。冷たい夜風が、トビイの頬を撫でて流れていった。瞳を閉じていたトビイは、微かに開いて一言。

「イヴァン」

思い出す、魔界。ある意味、故郷。

再度瞳を閉じて小さく溜息を吐くと、トビイはいつかの情景を思い描き始めた。

その日、トビイは森へ一人で狩りに来ていた。当時9歳。

幼いながらに動物を捕獲することが大人顔負けで上手かったトビイは、槍を持って食料捕獲の為頻繁に森へと出向いていた。今日も小鹿に狙いを定め、先程から息を押し殺し獲物を睨みつけ機会を待っていたのだが。

不意に。

鳥達が一斉に森から飛び立って行った、小鹿も隣に付き添っていた親鹿と共に森へと姿を消していく。舌打ちし、忌々しそうにトビイは深い溜息を吐くと木の陰から姿を現し、頭をかきながら踵を返した……が。

「!？」

村の方角から黒煙。

禍々しい妖気のように立ち上るそれに、呆気にとられたトビイだが手の中の槍を硬く握り締めると、そのまま一気に村へと向かう。息を上げらせてかけつけてみれば、村は焼け野原だった。

無心で、涙が湧き上がる事もなくトビイはそれを見つめている。

まだ火は消えていない、肌にも熱さが沁みてきたが、それでもトビイは逃げようとしなかった。

文字通り、廃墟となったそのトビイの住んでいた名もなき村は、何者かによつて破壊されたようだ。

状況が上手く飲み込めていないのかもしれないトビイは、鎮火していない村を人影捜して歩き回る。今日は、近くの街で祭りが開催されている日だった、村に残っていた住人は多くはない。

だから、寧ろ幸いだったのかもしれない。冷静にそんなことを思案していた。

燃え盛る火、村の家を、柵を燃やし尽くしながら天へと黒煙を吐き出している。翳り始めた空、まるでこの黒煙に作り出されたものようだ。

不意に、ようやく人が目に付いた。

当然亡骸である、その右手に一本の剣が握られている。

しゃがみ込むとトビイは死後硬直で固まったその掌から、懸命に剣を取り出すとそれを思わず握り締める。急に、意識が鮮明になった。

そうだ。

村人は”何かと戦っていた”。

意識せずとも緊張感が高まる、気配を押し殺して炎を睨みつける。その炎を、ゆつくりと左右に引き裂くようにして……。

「こんにちは、可愛い子」

金の長い髪を風に靡かせて、麗しい妖艶な女性が笑みを浮かべて歩いてくる。モスグリーンの瞳は、理性を狂わせそうな程、妖しげな雰囲気を秘めていた。

幼いトビイにですら、それは感じた。雄としての、直感。

二十代後半の女性に見えるが、その背には人間ではない証、蝙蝠のような羽が生えている。その羽が、女性の美しさを損なわせることなどないのだが。

村人ではない、この羽を所持している美女。当てはまる人物は、一人きり。

正体が発覚したとしても、特にトビイは恐れることもなく。捨て

子のトビイは運良くこの村の夫婦に引き取られ、命を取り留めた。元より、捨てられていた命、今更死んだとしても惜しくはない。だが。

恐怖がないのは、死を恐れないから。生き残る事ができるという確信が沸いたから、だ。確証はないのだが、そう思えて仕方がない。自分は”死ぬことがない”のだと思った、寧ろ”死ねない”と思いはじめていた。

夢に出てくる、緑の髪の少女、彼女に会うまでは、会って共に寄り添うまでは決して死ぬことはない、と。

そう思えてしまつて仕方がないのである。

「私と一緒に、イヴァンへ行きましょう」

「イヴァン？」

「魔界のことよ」

背後に、燃え盛る紅蓮の炎。ゆっくりと歩み寄るこの魔族の女は、絶えず笑みを浮かべていた。

トビイに向けて、美しくしなやかな手が差し伸べられる。すんなりと、受け入れるようにトビイはその手を握り締める、不意に女がクスクス、と可笑しそうに笑う。

怪訝に睨み付けたトビイを、優しく抱き締めた美女。ふわり、と色香が漂い思わずトビイは鳥肌が立つ。それは姉と弟のようで、母と息子のようで、そして恋人同士のようで。

とても、9歳の少年とは思えない程の余裕と落ち着き。凍りついた月を彷彿とさせるその鋭すぎる瞳を何度も覗き込み、女は愉快そうに静かに微笑む。

到着した場所は、言われた通り”魔界イヴァン”。

周囲を見渡したが特にこれといって、トビイが居た人間世界とはなんら変わりはない。何処までも続く雄大な森は、緑が風になびいて麗しく。

魔界、という人間が持つ邪悪さは、そこには微塵もなかった。

生命の雄大さを見せ付けてくる、その森。中央には大きな湖もあった、澄んだ水面、煌く優美さ。時折空を飛び去る鳥の鳴き声は、軽やかに風に乗って耳に届く。

そしてその城は威圧感をその場に誇示して建っていた、白亜の壁は、見事に周囲と調和している。絶対的威厳、解き放たれる存在感、武者震いを起こす……城。

「あれが現魔王・アレク様がいらっしやるお城よ。素敵でしょう？」
小さく微笑みトビイを背後から抱き締めた女、感嘆の溜息を2人で同時に吐く。

女は西の方角を指した、トビイの耳元で優しく囁く。

「あちらが、私の家がある場所。ごめんなさいね、あのお城への入国許可は難しくて。いつか、連れて行ってあげる……ああ、そういえば。」

私の名はマドリード」

花園の幻蝶〜マドリード〜

ようやく名前を知ったトビイ、妖艶に微笑んだままのマドリードに、トビイも返事を返す。礼儀だ。

「オレはトビイ」

臆することなく平然と自分の名を呟き、真つ直ぐにマドリードを見返してきたトビイに、軽く瞳を開く。が、直ぐに口元に笑みを浮かべると優しく抱き締めそのまま羽根を広げて宙に浮くと、先程指した方角へと飛び去った。

若干9歳、けれども歳に不釣り合いなほど堂々とした様子のトビイに、マドリードは関心が耐えない。

見た目麗しいのは確かだが、単に怖いもの知らず、というわけでもないようだ。トビイの奥底に、何か”違和感”を覚えたマドリード、家の庭に舞い降りる。

目の前の家を見て、トビイは隣のマドリードを見比べた。

小さな家だった、純白でカントリー調の家だ、容姿から判断するともっと派手で豪華な家を好みそうだが、これはこれで彼女に合っているな、と不意にトビイはそう思う。庭には大きすぎず控え目な花たちが、百貨絢爛咲き誇っていた。

「これはマドリードが？」

「ええ、趣味なの。変？ 魔族の人間を虐殺する女が花を愛でるのは？」

「いや、そういう意味じゃない。ああ、あの白い小さな花がマドリードには似合っている」

歩きながらさらり、と感想を述べるトビイ。くすくす笑いながら、マドリードは玄関のドアを開いた。

普通なら自分の村を消滅させられたのだ、トビイのマドリードに対する感情・行動は真逆でも良いだろう。しかし、トビイは大人しくついていくと慣れた様子で椅子に座り会話を待つ。

大人びているその様子に、マドリードのほうが多少戸惑った。簡単に夕飯を作り、二人で言葉少なく口へ運ぶ。

「美味しいな」

「口に合ってよかったわ。こういった田舎料理しか出来ないけど」
「いや、十分だ。温かみがある」

長く美しい金髪に、豊富な身体、一見こういった家事とは無縁な女性に見えたが、家庭的なようだ。手入れされた庭といい、片付けられた部屋といい、品の良い壁の絵といい。

……とても、人間を抹殺した女性には見えない。

焼きたてのパンに、トマトの牛肉煮込み、ワインとサラダ。味に頼りトビイも、大満足の料理だった。引き取ってくれた老夫婦は非常に家庭料理が得意で、そんな中で育ったので否応がない。

すっかり寛いでいるトビイを部屋へと誘うマドリード、ベッドに転がり、ようやくトビイは疑問を口にした。

「で？ オレを魔界へ連れて来た理由は？ 人間の村を消滅させ、その生き残りのオレに何か意味が？」

髪をかき上げながら挑戦的にマドリードを見るトビイ、その鋭い視線に思わず固唾を飲み込んだマドリードは、トビイに近寄ると髪を撫でる。

「私、美しいものが好きなの」

「それだけ？」

「まあ、それだけね。トビイが余りにも私好みだったから、ついつい。もちろん初めてじゃないわ、綺麗だ、と思えば過去にも何人が人間を連れて来た」

「へえ、それはまた酔狂で」

「そうかしら？ 美しいものを愛でてはいけない？」

「良い趣味だと思うけど。では、何故あの村を？」

大人しく撫でられながら、質問の続きをするトビイ。苦笑いで躊躇いがちに口を開いたマドリード、微かに表情に陰りが見える。一瞬、目が宙を泳いだのをトビイは見逃さなかった。

「魔界には様々な魔族が居るのだけど、現魔王・アレク様を守護すべく産まれながらに魔力が高い人物は、両親から離されて英才教育を受けるの。」

それが私、当然魔族に敵対するのは天空の神々だけれど、人間と侮れない。

稀に特異な魔力を持つ人間が現れ、それは魔族にも匹敵するし、数だけでいけば人間のほうが上よね。カリスマ性の高い人間の下で、完璧な軍師、統率力の高い人間達が揃い、立ち上げれば魔族とて危険だわ。

近年、徐々に人間も魔力を高めているし、人口も増えている。

私は、人間の数を一定に保たせるように指示を受けているの、稀にああして人間界へ赴き、村を滅ぼすのよ。

山奥の小さな村を狙うのは、そのほうがね、秀でた人間が現れる確率が高いから。

酷いでしょ、信じてくれなくても良いけど人間が目障りで抹殺しているわけではないの、自分の命の為に手を下しているのよね。

断れば、私が反逆罪で処刑だもの」

「成る程ね、でも、いいわけ？ 人間を連れて帰ってきて」

つまり、”仕事”なのだ。人間抹殺という仕事をこなさなければ、マドリード自体が殺されるのだ。ならば仕方がないだろう、トビイとて村に襲い掛かる熊や狼は大人と倒してきた。そういうことだ、自己防衛である。

マドリードが趣味で人間を殺す人物ではないことは、トビイとて解った。容姿とは裏腹に繊細な心の持ち主であると、判断したのだ。以前一度、村から出て街へ遊びに出た。酔狂な女達が溢れ返っていたが、それらと比較するとマドリードが女神にすら思えてくる。

「魔界で、魔族と共に生活する人間なら高い能力の持ち主のほうが大歓迎よ。無論、離反すれば即抹殺だけれど」

「くわばら、くわばら」

「人間と共存を望む魔族も、少なくともはないの。ただ、やはり古株の

魔族や血の気の多い魔族は人間を敵視しているのよね」

「へえ。大変だね、魔族も」

トビイは魔族に詳しいわけではない。村人から一通りの知識と学問、剣術などは教わっていたが魔族に関してはある程度しか聞いていない。

というよりも、人間で魔族に詳しいものなど一握りだ、今し方トビイが聞かされている内容はほぼトップシークレットである。

「私のように人間界から好みの人間を攫ってきて、共に暮らす魔族も少なくはないし」

「何させるわけ？」

「……色々と」

「だろうね」

喉の奥で愉快そうに笑ったトビイ、挑発的にマドリードを見やると、不意にその金髪を優しく手に取り口づける。

下からの鋭い上目遣いに思わず鳥肌を立たせたのは、マドリードだった。

若干、9歳である。

しかし、この自信と色気は天性のものだ、自分ほとんどもない拾物をしたのではないだろうか、と心から打ち震えた。

思わず固唾を飲み込むしかない、女慣れしている相当の男ですら発するのが難しい色香だ。

「……あの村は近くの街で祭りがあったから、半分が出払っていた。マドリード、そこを狙っただろ？」

「え」

笑いながら言うトビイに、愕然とする。

「極力人を殺したくないマドリードは、数日前から見ていたんじゃない？ 村を一つ壊滅させれば堂々と報告出来る、まさか人間の数までは申告しないんだろ？ 違う？ 凶星だろ」

思わず言葉に詰まった。

確かにそつだ、山奥の村に目星をつけた。極力人数が少ない村に

したのだが、様子を見ていれば数日後に人数が減る、とのこと。
近くで、その日を待っていた。言葉が出てこないマドリードに、
トビイは勝ち誇ったように笑う。

無邪気で、残酷で、そして完全に掌握したような笑みを。

数分後、思わずトビイを抱き締めベッドに倒れ込むと、ようやく
深い溜息のあと、マドリードにも笑みが戻った。

「賢い子ね、トビイ。ますます気に入ったわ」

トビイの唇に、そっと自分の唇を重ねる。

「で？ オレのことは何、夜の玩具扱いなわけ？」

意地悪な口調でマドリードの髪に触れているトビイは、小さく含
み笑いをしている。

「……先ほども言ったように、私は綺麗な者が好きなの」

「ああそうだね、オレも綺麗なのが好きだけど」

マドリードは、顔を顰めた。油断した、ただの子供だ相手は。

しかし、その内に秘めている”何か”が、尋常ではなく。誘うよ
うな視線と、どちらが組み敷かれているのか分からない態度に狼狽
する。

「いけない子ね、トビイ」

「何が？」

笑いながら二人は、そのまま、自然に身体を重ねた。

たゆたう花束〜ホーチミン〜

魔界で過ごし、早四年が経過。

声変わりを迎え、元々大人びていたが遅しく、けれども美しさは損なわないまま成長したトビイ。

魔性の美童は、魔性の少年へ。成長するほど、世の異性を虜にしそうな魅力は高まる。

ある日、緑の肌に濃紺の長髪の男が一人、マドリードの家を訪ねてきた。

二階からトビイはそれを見ていたが、マドリードとは親しい様子で、特に警戒もなく。トビイの視線に気づき、朗らかに手を振る卓越した様子の青年に、思わずトビイも手を振り返すとそのまま駆け足で一階へと下りる。

サイゴン、という名のこの青年はマドリードの弟だった。

「似てない姉弟だな？ 髪の色とか、肌の色とか」

「ああ、母親が違うんだ」

顔立ちも、違う。マドリードは繊細な美女だが、サイゴンは整っている顔立ちながらも素朴だ。気にする様子もなくそう言って握手を求めてきたサイゴン、人と親しくするのが苦手なトビイだが、彼の手だけは素直に受け入れる。

「君が噂のトビイ君か、姉さんから聞いているよ。よろしく。剣士のサイゴンだ」

背負う長く大きな剣、下ろせば非常に重そうな音が床に響く。マドリードが暫く留守になるといので、代わりにサイゴンが呼ばれたのだそうだ。

トビイの頬に優しく口づけけると、笑みを浮かべてマドリードはそのまま家を出る。

男二人残され、サイゴンは不慣れながらもトビイに茶を煎れ始めた。不手際に、自分でやる、と言い出しそうになったトビイだが、

ぐつと堪える。年上の顔を立てているようだ。

「姉さんのように掃除も家事も全く出来ないが。あれだ、男らしく豪快に生活しよう」

「……料理は？」

「男の料理は気合で切る、焼く、煮る！ もしくは生！」

「……料理はオレが担当しよう、悪いなオレ、舌に煩いんだ」

「はっはっは」。任せた」

初対面ながらマドリードの弟、ということもあってか、直ぐにサイゴンと打ち解けたトビイ。兄と弟というよりかは、むしろ友人のそれに近い。

実際、トビイのほうが精神的に大人びているようだった。

サイゴンに剣術を教わりながら、稀に家を出て二人で森でキャンプをし、豪快に生活する。兔を獲って、焚き火で焼き、塩を振ればそれだけでご馳走だ。

「野生的だな」

「男は野性味溢れないとな、面白いだろ、こういうのも」

「まあね」

トビイは兔を食す時、茸や木の実に香草類を腹に詰めて香りを出していただいている。が、これはこれで美味しかった。

星を見上げながら、二人で暖めた酒を呑みつつ男同士の会話だ。

無骨な性格かと思えば案外ロマンチストなサイゴンは、時折星を見つめながら伝承の話をトビイに聞かせた。思えば、姉に頼まれたとはいえ、歳の離れたそれも人間を面倒見るなど、よほどのお人よしなのだろう。

しかし、トビイはサイゴンが好きだった。

「人間界ではどうなっているのか知らないが……魔族では古くから言い伝えがあるんだ。」あの星の海の向こうに、とびきりの美少女が一人で住んでいる”ってね。

まあ、誰が考えたのか、単におとぎ話だけれど、彼女ならどんな願いも叶えてくれるんだそうだ」

「とびきりの美少女、ねえ？　ありがちな話だな、魔族はもつと現実的かと思っただよ」

「そんなことはないぞ、予言だって信じるし、結構迷信好きだ」
「予言？」

聞き返したトビイに、思わずサイゴンは口ごもる、どうも口を滑らせたようだ。察するトビイ。

「ああ、返答はいいよ？　困ることなんだ」

「いや、うん、その、なんだ……。そのうち話すよ」

苦笑いしてトビイはカップの酒を飲み干す、見上げた夜空は星が眩く少し切なくなつた。横顔を見ていたサイゴンは、声をかけるのを躊躇い、無言のまま二人で星を見る。

「緑の髪の子を、捜してるんだ」

「え？」

トビイが不意に漏らした言葉に、思わずサイゴンは聞き直した。真顔で視線を星から移すことなく、トビイは続ける。

「気がついたら夢に出る、今でも夢に見るんだ。緑の髪の可愛い女の子。彼女を護る為だけに、オレは産まれて来たと思うっている。何処かに、居る筈だ」

「緑の、髪？」

訝しげに呟いたサイゴン、それきり、黙る。

「緑の髪、そんなに珍しいか？」

怪訝にトビイは視線をサイゴンに移した、が、今度はサイゴンが地面から視線を逸らさない。

「……気にしないでくれ、ただの偶然だ」

「気になるな、なんだよ」

「おとぎ話の宇宙の片隅のどんな願いも叶えてくれる美少女、その子が緑の髪」

「へえ」

ただの、偶然だ。

トビイは苦笑いして焚き火にかけてあった鍋から、酒をカップに

注ぎ入れて再び呑み始める。

「予言の子も、緑の髪だ」

「何だつて？」

酒の煙が、星空へ舞う。神妙な顔つきのサイゴンを、険しい表情でトビイは睨みつける。

森の木々が、風に揺すられて囁くようにざわめく。

晴れているのに、突如小雨が通り過ぎた。

焚き火の日は、瞬間燃え盛った。

月の光が、眩さを増して二人に降り注いだ。

……大地の小さな芽が、微かに震えた気がした。

「現魔王・アレク様。交代の兆しが、出ているのだそうだ」

「歳なのか、アレクとやらは」

「いや、若い。若く、賢く、有能で歴代の魔王でも相当な人気を所持する最高のお方だ。だが、交代の兆しが出ている、と」

「それは」

「成り代わろうとする謀反者が居るか、それかアレク様を凌ぐ人物が現れ王位を譲るか、或いは暗殺され……」

「物騒な予言だな」

「次の魔王が……緑の髪の娘」

「何だつて？」

トビイとサイゴンの瞳が交差する、ただの偶然だろう、と二人は思った。

しかし。

キイイイ、カトン。

瞬時に二人は傍らの剣を構え、背を合わせて周囲を窺った。今、確かに奇怪な音がした。まるで、歯車が軋みながらまわったような音だった。非常に不愉快だ。

緑の髪の娘、そのキーワードが二人に多過ぎるほど付きまとう。

サイゴンは直感した、マドリードが人間界でトビイに出会い、連れて来たのは必然だったのではないかと。

トビイは思った、自分は緑の髪の子を守護する為に、魔界へ連れてこられたのではないかと。

月を、仰ぐ。ざわめく胸に、二人は思わず何故か悪寒が走り身体を抱き締めた。

マドリードの家に戻ってきた二人は先日の子の事を口にする事もなく、普段通り生活する。男二人にも慣れたし、掃除もサイゴンが懸命に行っていた。

夜に二人で飲み交わす酒が楽しくて、今日もちびちび、酒を呑む。ほろ酔いのサイゴンは、ベッドに転がりながらベーコンをつまみにして呑んでいるトビイを恨めしそうに見やった。

「トビイは、いいよな」

「何が？」

「彼女とかすぐに出来そうだよな」

「はあ？」

子供を捕まえて恋愛相談か、吹き出すトビイ。しかし、サイゴンは深刻だった、真顔でクッションを抱きかかえ、するめを齧りながら語る。

「身長が低くて、ふりふりのドレスとか大きなリボンが似合う子が彼女に欲しくて」

「サイゴンなら引く手数多だろ？ 顔だって悪くないし気さくだし」

「自慢じゃないが産まれてこの方、彼女が出来た事がない」

「激震」

人間と違い、魔族は長命だ、サイゴンとて何年生きているかわからない。それで彼女がいらないとは、重症じゃなからうか。魔族の美の感覚が違うのだろうか、とも脳裏を過ぎったがマドリードは正常だ。

「可愛い彼女が欲しいなあ。でも、姉さんと幼馴染のホーチミンに悉く邪魔されて気づいたらこんなイイ歳に」

初めて聞く名が出た、”ホーチミン”。

「ホーチミン？」

「ああ。好きな子が出来るとき、ホーチミンが彼女達を苛め抜いたんだ。お蔭で嫌われ者の俺、うかつに近づけやしない。最近だと、武器屋の女の子が可愛くてさ、声をかけたんだが風のように飛んで来たホーチミンによって、バイトをやめて何処かへ引っ越した」

「どうしてホーチミンがそこまで邪魔するんだよ」

「俺のことが好きなんだよ、あいつ」

落胆するサイゴン。首を傾げたトビイ。

「ホーチミンでいいじゃないか、彼女。可愛くないのか？ 性格は悪そうだけど」

「可愛いとか、それ以前の問題だ！ 男なんだよ、ホーチミン」

呆れたように言葉を出したトビイにサイゴンが返した言葉、それで全てを理解した。一瞬の沈黙が、トビイの大爆笑で切り裂かれる。瞳に涙を浮かべて、サイゴンはその爆笑を聞いていた。

数日後。

居場所を突き止めたのか噂のホーチミンがやってきた、追い返すべく気合で出迎えたサイゴンだが数分しないうちに家に入り込む。

巨大な荷物が、居候を決め込んだホーチミンの決意を二人に予感させる。確かに。見た目だけならば極上の女性だ、ホーチミンは。

マドリードと同じ見事な金髪、男性の好きそうな艶やかなストリート。

背丈が高いがスレンダーで足元までの長い丈のドレスを着用し、サイゴンの趣味に合わせてなのか頭部に大きなリボンをあしらっている。

物腰上品、知らなければただの”美女”だ、しかし、男だ。声が、確かに低音で男だった。ハスキーボイスと言えば、それまでなのだ。

「あなたが噂のトビイちゃんね。初めましてホーチミンよ、ミンって呼んでね」

後方にコスモスでも背負ってそんな感じた、初めて見るタイプゆえに、トビイは苦笑いで握手をする。壁に手をつき、項垂れているサイゴン気の毒そうに見つめたが、ホーチミンは気にすることなくフリフリのエプロンを装着すると、勝手に夕飯の準備を始めた。

「腕によりをかけて、今晚は私の手料理を召し上げね。ついでに私も召し・上・が・ね」

きやつ。

スキップで勝手に調理を始めるホーチミンに、泣き崩れたサイゴン、引き攣った笑みを浮かべながらトビイはサイゴンの耳元で囁いた。

「もう、諦めたら？ 本気だ、あの人」

「手料理も完璧で、”女性ならば”土下座してでも嫁に来て貰うべき人物だ、氣立てもよいし良く働く。マドリードは田舎の家庭料理が得意だったが、ホーチミンは何でも作れた。豚のローストも時間をかけ、丁寧に、スープも出汁から繊細に。」

トビイの舌も満足し、三人での生活が始まる。

夜、隣のサイゴンの部屋から悲鳴が聴こえるのも慣れた。ホーチミンが毎晩懲りもせず、夜這いをかけているのだ。最初はあまりのサイゴンの喚きに眠れず外に出ていたが、慣れとは恐ろしい。

宮廷魔術師のホーチミン、そして只者ではないと思っただけだが、サイゴンとて魔族では名の知れた剣士で普段は城の警護をしているのだというそんな二人に囲まれ。

トビイは毎日充実した生活を送っている。ただ、マドリードが一向に帰ってこなかった。

一度、サイゴンに連れられて人間界の街へ出向いたトビイは、興味惹かれることなく街を散策し、魔界へ戻る。そう、魔界のほうगतビイにとっては居心地がよかったのだ。

その時に、奇妙な視線に思わず背筋を震わしたが、それが今後トビイに降りかかることになるなど予測すら出来ず。

月日が流れてトビイは、魔界で14歳になった。

天性の才能、そして修行の成果、一人前の剣士としても十分通用できるトビイ。人間界に戻れば直ぐにでも知名度が上がるほどの達人になれるだろう、だが、トビイは魔界で過ごすことを決意。

15歳になると、魔界では職業を選択せねばならないらしく、サイゴンからその説明を受けた。連れて来られた人間も、無論そうして何かしらの職についているらしい。

人間と魔族の寿命が違う為、魔族は200歳程で職を選択しても良いのだが、人間は短命種なので15歳だと決められているそうだ。緑生い茂る森の中、静かに剣を掲げたサイゴンを、じつと佇んで見守るトビイ。サイゴンの持てる剣術は、トビイに教え込んできた。基礎から丁寧に、飲み込みの早いトビイに驚きつつも手を抜くことなく焦ることなく。

人に教えた事などなかったサイゴンだが、自身が師匠から教えて貰ったように、基礎を大事にして唇を尖らせるトビイを宥めてきたのだ。

マドリードの弟ということもあってか、腕を買われて現在は魔王直属の部隊にまで配属になっているサイゴン。トビイの能力も高く評価しているのだが、一つ不安要素が残る。

魔族の一部は人間に好意的だが、全員ではない。敵視してくる魔族のせいで、成長したトビイが潰されることが怖かった。

大丈夫だろうとは思いつし、自分もホーチミンも全力で護る予定だが、何が起るかわからない。本当の肉親以上にトビイを可愛がっていたサイゴンは、過保護気味だ。しかし、最近アレクにすら歯をむく過激派が増えているとの噂で、それがサイゴンを悩ませていた。

剣先を、空中へ雲を突き刺すように掲げたまま静かに語るサイゴン。

表情が、険しい。初めて垣間見るサイゴンの本気、思わずトビイの肌が鳥肌になり背筋に緊張が走った。

「ドラゴンナイトになりたかったんだ。だが、難しくてね、剣の腕は評価されてもそれだけでは無理だ。挫折して剣士になった」

気合一閃、剣を振り下ろすと大地が避け、目の前の大木が一気に木っ端微塵になる。風圧だ、溜め込んだ気合だけで強力な一撃を瞬時に爆発させたらしい。

啞然と見つめるトビイ、至極真剣なサイゴンの表情が平素の温和な表情へと戻る。

「中距離で一方にしか効果がいかないが、結構強力だろ？ ドラゴンナイトを諦めた俺が死に物狂いで編み出した技が、これだ」

かなりの破壊力だが、決してひけらかせることなく。

ドラゴンナイトとは竜に乗り空を駆け巡る、飛行タイプの戦士である。竜と共に過ごす、無論地上に降りても戦闘能力が高くなければならないし、槍に剣の技術も必要だ。

そして問題の竜だが、相棒となる竜は自分で探さねばならない。そこで挫折する魔族が多いらしい。

魔界の城にも竜が数体生息、待機しているのだが、真のドラゴンナイトは、自分で竜を説得しなければならなかった。竜に認められること、それが最低条件である。

最も難関である、最低条件。

長年に渡りドラゴンナイトを目指している魔族も少なくはないらしい、サイゴンは無理だと直感し、直ぐに職を切り替えたのだという。

トビイに近寄ったサイゴンは、頭を撫でながら遅く成長したトビイに兄の視線を投げる。

「トビイ、何になりたい？」

選択する職は、サイゴンとて解っていた。が、一応聞いてみる。

勝気に、普段通りに微笑んだトビイは一言だけ、こう言った。

「ドラゴンナイト」

聞いた時点で決めていた、自分に最も相応しい職だと思った。サイゴンの無念を晴らしたいとも思った、それも事実。

しかしそれ以前に興味が膨れ上がった職がそれであり、そして自分の限界を試したい職でもあり。

何より、竜さえ共に居れば緑の髪の少女を容易く捜せそうな気がしたから。満足そうに豪快に笑ったサイゴンは、眩しそうにトビイの肩を叩いた。

ホーチミンも加え、ついにトビイは魔界の城へと出向く。職の申請に来たのだ、物珍しそうに好奇心な視線を投げかけながらも、臆することなく歩くトビイ。

傍らにはサイゴンとホーチミン、それだけでも注目の的である。トビイの姿に溜息を漏らす女性も多く、また、将来有望だと感心する者も多く。

そして当然、好意的な視線を投げかける者の他に、忌々しそうに見ている者達も当然居た。同じく、ドラゴンナイトへ申請をしている者達である。

今回、トビイを含めて六人が申請届けを出していた。容姿は標準を下回る、お世辞にも美形とは言い難い男達で、それが余計にトビイに嫉妬の念を抱いたのかもしれない。

5人の魔族の主格の男を、オジロン、という。

舌打ちしてホーチミンがトビイにそつと寄り添うと、オジロンに威嚇気味に睨みをきかせる。厄介な男だった、妙に実力もないのにドラゴンナイトに執着し、長年に渡って申請している落ちこぼれ組みだが、性格が陰湿。

トビイが本格的に城内でドラゴンナイトと成るべく訓練を開始したので、サイゴンも長期休暇を解除し、今は城内で警備をしている。当然宮廷魔術師のホーチミンも暇を見ては、トビイの応援に来ていた。

数カ月後、初の試合が行われ当然トビイはその頂点に立った。僅か六名の試合とはいえ、人間で優勝したのはトビイが初であり、より一層トビイの注目は高まる。

腕も確かで、見た目麗しく、そんなトビイに魔族の女達は色めきたって我先にと声をかけ始めた。その多くには目もくれなかったが、引き摺らなさそうな女で色香が高い美女の声には、トビイも応じ一夜を共にする。

閨事においても優秀だったトビイは、その点でも女性陣には非常に高かった。

だが、恋人は作らない。そんな態度ですら、さらに彼の魅力を引き立たせてしまう。

優勝後、城に居る練習用の竜で飛行を習い、いとも簡単にドラゴンナイトへの道を順調に進んだ。巧みに操り、魔族に慣れている竜とはいえ心を掴み懐かせ、空を駆け巡る姿に、誰しも興奮を覚える。こと、サイゴンとホーチミンは自分の事のように喜んだ。

トビイと三体の竜

15歳になり、数ヶ月。竜を探す旅に出る事になったトビイ。

魔界に生息する野生の竜も居れば、人間界に居る竜も数体。ある程度の生息地域は上官魔族から教えられたが、常に移動している種族も多く、まず捜しだす事が最も過酷である。

飛竜タイプは黒竜、風竜、火竜。水中に生息する水竜に、地上の覇者である土竜など、種類も様々な竜。

ここから先は、誰も手助けしない、相棒の竜は自分でなんとかしろ、という試験である。

身の上を案じたサイゴンとホーチミンと、暫し別れの時を向かえ、マドリードの家で休息したトビイは、未だに帰ってこないマドリードに、ふと人間界で出会えるのでは、と思ったが微かに笑った。

二人に暖かい言葉と御守り、薬草やら旅の準備をしてもらってトビイはついに旅に出た。トビイが欲したのは、当然黒竜である。

孤高の竜、成人すると単体で生活し、多くは山岳に住まうという非常に相棒とするには難しい竜だ。性格もプライド高く、滅多に姿を現さない稀少竜で、憧れる者も多いが皆挫折する。

しかし、空の覇者にして竜の中で最も力が強大な竜なのだ、トビイも欲した。まず、魔界から出る必要があったので、船で人間界へ出向こうかとも思ったのだが、トビイは自らに枷をした。

目をつけたのは魔族側から貰った地図である、竜の生息区域が大まかに書かれていた。山脈を越えて南下すると、水竜の生息区域、確かな情報ではないがトビイはそこへ向かった。

ドラゴンナイトを目指す者、安易になりたくはない。まず水竜を相棒として、魔界を出ると決意したのだ。それが出来なければ黒竜は無理だろう、と。

不屈の精神と鍛えぬかれた体力で、トビイは懸命に一人山脈を超え、海辺に到着。無骨な岩がところどころ突き出る海岸を一頻り歩

き、焚き火をして浅瀬で魚を捕獲しまず休憩しつつ食していたトビイだったが、妙な違和感を感じて遙か遠くの海を挑むように見つめる。

何かが、居た。

火を消し、高い位置へ登って瞳を細めて見つめると、水竜だ。サファイヤのような煌く鱗に覆われ、頭部に水晶のような一角、6体で遊泳している。

思わずトビイは走り出した、願ってもいない遭遇である。静かに水竜達は入り江へ入って行くので、慄くことなくトビイも続く。

トビイの存在に気づき、最も小さな水竜がいきり立って突進してきた。初めて聞く鳴声、超音波にも取れたが、臆することなくその竜の突進を軽やかに避けながら前進する。

最も長寿だと思われる体格の良い竜が、再度トビイに攻撃を加えようとしていた小さな竜を一喝し、進んでくる人間に興味本位な視線を投げかけた。

「ジュリエッタ！ 見境なく襲い掛かってはいかん」

「でも、人間だよ！」

竜が流暢に人の言葉を話していた。思わず目を丸くするトビイ。練習用の竜は一言も話さなかったのだ、啞然と竜達を見つめた。

訝しげに見てくる竜達だったが、老体の竜だけが優美に近寄るとじっ、とトビイを眺めている。

後方でトビイが何かしようものならば真っ先に噛み付こうと、威嚇している竜達だったが、剣に手を伸ばすことなくトビイは静かにしていた。

「トビイ、という。見ての通り人間だ」

「人間が何故このような地に？ ここは魔界の筈だが」

「幼い頃、魔界へ連れて来られ、数年を魔界で過ごした。今回、ドラゴンナイトとなるべく相棒を捜す旅に出て……という状況なんだが」

ざわめく竜。人間で、ドラゴンナイト。一族でも聞いたことがな

かったので、密やかにトビイを数奇な目で見つめた。

「無理強いはしないが……オレと共に世界を廻る相棒になる竜は、いないだろうか」

更にざわめく。

先程トビイに襲い掛かったジュリエッタが、馬鹿馬鹿しいとばかり大声で爆笑していたが、老竜は静かにトビイを見つめている。まるで心の底を探るように、外見ではなく精神を見極めるように。

「どこか。不可思議な”水”の加護をまとってらっしゃいますな。好きな竜を、お連れ下さい」

その言葉に一齐に沈黙する竜達、トビイとて息を飲んで啞然と老竜を見つめる。

そんな簡単に？

トビイがそう思った瞬間、脳に響いてきた声、老竜だった。

何者でしょうなあ、人間殿。しかし、我らが水の眷属の根本は、あなた様に繋がっていると……確信してしまいました

思わず、自身の両手を見つめるトビイ、そのような事を言われたのは初めてだ。魔力も特になく、魔法すら使用できないトビイだが、受ける加護は水であると言い切ったこの竜。

深くトビイに頭を垂れた老竜に、慌てて他の竜も頭を下げる。

「好きな竜、と言っても」

トビイは一体一体、丁寧に見つめていく。やがて下したトビイの判断は。

「暫く、共に滞在させてくれないだろうか」
で、あった。

共に過ごし、自分と相性の良い竜と共に旅立ちたい、そう告げたトビイに満足そうに笑う老竜。真剣な眼差し、すっかりその一言でトビイを気に入った水竜達。

いくら老竜の命令が絶対であるとはいえ、無理強いはしたくないトビイのその意志を汲み取り、すでに懐き始めた幼い竜が二体。

ジュリエッタと、次に若い竜のオフィーリアだった。

トビイは、竜の背に乗り海を駆け巡り、夜は入り江で共に語らいつながら数週間過ごした。一緒に海に潜り、魚を捕まえ火を起こし食べさせると、生とは違う感覚に美味しいと連呼する若い竜。

その頃トビイは決めていた、幼いのは解るがオフィーリアかジュリエッタ、どちらかを相棒とすることを。そして他の竜達も知っていた、この二体の竜が自分からトビイの相棒を志願することを。

数日後、ジュリエッタは泣き喚いたが、まだ幼すぎたのでオフィーリアがトビイの相棒となった。

拗ねて不貞腐れ、トビイの旅立ちを素直に見送らなかつたジュリエッタであつたが、オフィーリアの背に乗り、威風堂々と海を駆け巡るトビイの後姿を祈る気持ちで見守る。

5体の水竜は、トビイに向かつて静かに頭を下げていた、何時までも。

トビイと離れたのが余程辛く、寒きこんでしまったジュリエッタ、次の位置へ移動したかつたのだがそれが出来ずに居た水竜達。暫くして、そこへオジロン達が現れた。

水竜を探しに来て、見つからないので我武者羅に5人で片っ端から海岸の岩を魔法で破壊していた頃。伏せつて入り江に一人で居たジュリエッタは、そのせいで落岩に巻き込まれてしまった。

思わず悲鳴を上げるジュリエッタ、その声をオジロン達が聞き逃すわけもなく駆けつける。

「これは。チビ竜だが紛れもなく水竜だなあ、良い所に」

助けるわけでもなく、出血し啼いているジュリエッタに近寄ると見事な一角に触れながら下卑た笑い声を出す。

「助けてやっても良いが……。ドラゴンナイトとなるワシの手助けをしてくれ」

痛手を負うジュリエッタに卑怯な交渉、押し潰している岩を退ける代わりにと要求を出してきた。なんとという外道だろう。

トビイと違い、ドラゴンナイトになる為だけに竜を使役しそうな

この目の前の低俗な輩に、重症を負いながらも誇り高くジュリエッタは叫んだのだ。

「断る！ 認めた主は他に居る、誰が貴様らの手助けなどっ」

幼くも、その海の覇者の片鱗を見せたジュリエッタ、思わず身をすくめたオジロン達であるが目の前の竜は動けない。厭らしくこめかみを引くつかせながらじりじりと近寄り、渾身の力で岩を跳ね除けようとしていたジュリエッタに剣を抜く。

「ならば……用はない」

無慈悲、身勝手。

懸命に抵抗し反撃したが、落岩での負担が大きく、また5人かかりでは幼いジュリエッタは抵抗むなく命を落とした。竜は手に入らなかったが、一通り不満は解消できたので優越感に浸りオジロンたちは引き上げる。

数時間後、ようやく遊泳に出ていた水竜達が、胸騒ぎを感じて戻ったがすでにジュリエッタは見るも無残な姿になっていた。傍らに落ちていた剣を仇の物だと判断し、憎々しげに拾い上げると、岩を退かしてジュリエッタの遺体を海へと流す。

果敢に戦った形跡が見られたので、水竜達は涙し、傍にいてやれなかったことを悔やんだ。見事な一角は老竜の手で根元から折られ、遺体は海の底へと沈んでいく。

悲しみに沈む竜達の手元には、魔族の剣とジュリエッタの一角。何故老竜が一角を手中にしたのか、他の竜達には理解が出来なかった。

オフィーリアと共に順調な旅を進めていたトビイは、ようやく目的地であるカナリア大陸に到着。海岸でオフィーリアと離別し、太陽が30回沈んだらまたここで会おう、と約束するとトビイは一人陸路を行く。

ここからは運も関与する、黒竜の行動範囲は広大だ、会える確率が低い。が、トビイは懸命に山岳を歩き、時折湧き水で喉を潤し、

持ち歩いていた質素な干し肉を食べ進む。

数日歩き周り、遠くに水音を掴んだトビイは喉の渴きを潤す為にそちらへ向かった。耳を頼りに歩けば、なかなか湖がある、山頂から水がそこへ流れ込んでいた。

自然と早足になり、トビイは喉の渴きを存分に潤すと衣服を脱ぎ水中へ入る。水温が低かったので寄せ集めの枯れ木でなんとか火を起こし、身体の汚れを落としてつつ水中の魚を探した。槍で一突きし、久し振りにまともな食事を取ったトビイは、水面に何かの影を見る。竜だった。

思わず見上げれば、間違いなく黒竜である。焚き火を消し、衣服を着て荷物を豪快に詰め込むとその飛行する竜を追いかけた。

トビイに気づいているのか、いないのか。

黒竜は誘うようにほと近くの山頂へと優雅に舞い降り、じっとしている。険しい顔つきで、荒い呼吸を繰り返してトビイはその竜の元へと山頂を登った。

確実に竜も、トビイを待っていた。

威厳漂う鋭利な眼光、自分を追ってきたトビイを興味深く値踏みしながら見ていた竜は、ようやく近寄ってきたトビイに口を開いた。「人間だな、何用だ？ よもや、ドラゴンナイト志望ではあるまい……身の程しらずが、立ち去れ」

こんな山岳地帯を歩き回る理由など、多くはない。トビイの風貌を見て瞬時にドラゴンナイトであると判断したその黒竜だが、トビイに解りきった問いを投げかけた。

普通の人間であるならば、卒倒しそうな重圧感、光る瞳は深紅で口から除く歯は鋭過ぎる。口調と声の重み、心臓に突き刺さる威厳溢れるその雰囲気は流石のトビイも足が竦む。

だが、真っ直ぐに歩み寄っていった。瞳を細めて微かに羽根を広げ、威嚇する黒竜。

「汝、無謀と勇氣は違うが、解らぬか？」

臆することなく歩み、黒竜の眼前まで来たトビイは足を止める。

「オレの名はトビイ。人間だが魔界イヴァンにてドラゴンナイトの称号を得るべく相棒の竜を探す旅に出た。

望む黒竜よ、共に来る気はないだろうか」

低く笑い、竜は口を開く。

「数奇な。イヴァンからここまでどうやってきた、人間よ」

「相棒のオフィーリア。水竜と共に」

鼻で笑うと、竜は羽根を広げて宙に浮遊する。風圧でトビイの髪がなびき、その身体すら揺れる。

「一体いるのだな？ ならば十分であろう。稀に竜を所持すればするほど、自分は有能だと勘違いするたわけがいるが……貴様もその類か？

互いに信頼し、常に共に居る関係、それこそが有能な竜使いの姿である」

帰れ。

竜はそう付け加えると、眼下のトビイに以後無言の圧力をかける。肩を竦め、トビイは意外にもあっさりと引いた。

「そうか。ならば仕方ない。オレをそう判断したのなら……合わないのだから。オレが求める竜は心を分かち合える大事な相棒、オフィーリアと同じ様に。

邪魔したな、では」

踵を返す。

これには竜が驚愕した、今まで数名のドラゴンナイト志願の魔族に出会ったが、断るとしつこく会話してきたり攻撃を仕掛けねじ伏せようとしてきたのだが……。

トビイに何か違うものを感じた竜は、再度岩に降り立ち声をかけた。興味本位で。そして、何故か懐かしい雰囲気には捕らわれ始めていた自分に困惑し。

「妙な人間だな。少し興味が沸いた」

軽く振り返り、トビイは足を止める。無言でトビイと竜は何かを語るようにしていたが、不意に同時に笑みを零した。

竜が瞳を閉じて、小さく溜息を吐くと何かを決意したように瞳をカッと開く。

「似ているような気がしてきた、人間の異端児よ。いや、人間のドラゴンナイトよ」

「そうか？ 互いにプライドが高そうだな、下手すると触発、合わないかもしれないが？」

喉の奥で笑い、トビイは右手を差し伸べる。トビイのその姿を見つめ、竜は頭を下げた。

その人間、奥に秘める不可思議な”何か”。以前、会ったことがある気がしてやまない、何か。

「名は、デズデモーナ。よろしく、主よ」

共に、居てみようと思った。何故か、この人間に妙に惹かれた。

そして、この人間と深く縁のある人物に会わなければいけないと、痛感してしまった。

……デズデモーナ？ 今日、貴方は元気がしら？ そう、調子が良いのね。嬉しいわ……

柔らかな少女の声が聞こえた気がした、デズデモーナは幻聴に因應るように大きく咆哮すると羽ばたく。その背に、トビイは飛び乗った。

願った黒竜・デズデモーナ。

トビイとデズデモーナ、揃ってオフィーリアと約束した海岸へ急いだ、トビイの計算が合っていれば約束の日まではまだ数日余っている。

何処まで行ったか解らないオフィーリアを、空中からトビイは捜した。待っていてもよかったが、少しでも早く会いたかったのだ。

「オフィーリア！」

「あー！ 主だあー」

約束の海岸から離れた海域で、オフィーリアは悠々と泳ぎまわっている。空中から現れたトビイに、初めて見た黒竜、トビイは達成できたのだ、とオフィーリアは満足そうに頷いた。流石だ、と誇ら

しく思い笑みが零れてしまう。

数体の竜を所持し、その竜達の仲も取り持てなければドラゴンナイトの資格は当然ない。しかし、二体の竜は大人しくトビイに付き従った。

目の前の喜ぶ幼き竜を見て、満足そうに頷いたデズデモーナは、多少躊躇いがちにトビイに口を開いた。

「すまないが……一度親友に報告してきたいのだが。いや、何処に居るか解らないのだが必ず後で合流しよう」

「そうか、ではイヴァンで落ち合おう、デズ」

オフィーリアの背に乗り、飛び去るデズデモーナを見送る。眩しそうに夕日を浴びて、偉大な羽根を広げて飛び去る姿を目に焼き付けると、トビイ達はイヴァンへ引き返した。

「オフイ、仲間達に会ってから行こう」

「ホント!? 主、ありがとーっ」

以前出遭った海岸へ行けば、妙に岩が形を変えていたので首を傾げつつ、トビイ達は水竜を捜す。反対側の海岸付近で姿を見つけたので意気揚々と手を振って近寄れば、悲しみに包まれていた。

理由は簡単だ、ジュリエッタが何者かに殺されてからまだ一月ほどである。一族の死を簡単に受け入れられなかったのだ。

トビイ達の姿を見、安堵し若干笑みを浮かべた水竜達は事情を語る。敵の剣を見せてみればトビイには見覚えがあった、当然である。「オジロン!」

そう、試合で手合わせした際に、トビイは相手の剣の特製を見極める為オジロンの剣も鋭い眼光で見入っていたのだ。憶えていた。

オフィーリアも同意し、仇は自分が、と名乗り出たトビイに、ジュリエッタもそれで浮かばれると水竜は涙する。そうして老竜が取り出したのが、ジュリエッタの一角であった。

「どんな鉱物より硬く、そして鋭利な我ら水竜の一角、是非トビイ殿に剣として扱って頂きたい。」

ジュリエッタとて、共に居られると本望でしょう」
そう、その為に。

トビイは丁重に一角を受け取ると、その眩く光を放つそれに自分の顔を映した。ジュリエッタの無邪気な笑い声が聞こえる気がして、思わず胸に混み上がる熱いもの。

しかし、このままでは剣として全く扱えない、素材はともかく。だが、トビイをぐるりと水竜が囲みその一角へ向けて念を籠めれば、その手の一角は仄かに光り、そして熱を帯び始めた。

「水竜は。生涯、主と見極めた者の為に死して尚、役に立とうと、傍に居ようと致します。ジュリエッタはトビイ殿を好いておった、相棒になれなくとも、心はトビイ殿と共に」

徐々に形を変貌させていく一角、ジュリエッタはトビイの武器として居る事を望んだのだろうか。

暫しの後、呆然と立つトビイの手には剣の形を模した一角が。水を思わせる澄んだ光、冷たさと美しさの共存する世界で唯一無二の剣。

鞘は、サイゴンから受け取った剣に不思議な事にびたり、と嵌った。感嘆の溜息しか出てこないトビイに、深々と頭を垂れる水竜。

「……ブリュンヒルデ。この剣をブリュンヒルデと名付けよう」

ジュリエッタの名をそのままつけようと思ったのだが、不意にブリュンヒルデ、という名が浮かんだ。後方で水竜達が息を飲んだが、気にせずトビイは続ける。

「幼い頃、育ての母に聞いた話では、大地を司る偉大な精霊がブリュンヒルデ、という名だと。

敬意を、そして崇拜の意を籠めてその名をつける。……水の偉大な精霊の名は知らないし、な。剣の雰囲気にも合っていると思うんだが。どうだ？」

荘厳なその剣を掲げて、満足そうにいうトビイに、老竜が言葉も出ない、と近寄った。

「ジュリエッタ……いえ、我が水竜の族名が、ブリュンヒルデとい

います。正直、驚きを隠せません」

それにはトビイとて驚いた、驚くべき偶然である。名付けたそれは、水竜族全てを象徴するかのように、神々しく光を放っていた。

トビイの手にしっくりと馴染み、身体の一部であるかのようにすら感じるその剣。

水竜は陸へ上がると非常に弱々しい生命体である、オフィーリアがまだ若いことも察して、トビイは水竜達にオフィーリアを頼み、迎えに来るから、と自分は一人でサイゴンの元へと向かう。

数日かけて城へと戻り報告すれば、歓声を上げてサイゴンとホーチミンがトビイに抱きつく。水竜、黒竜の二体を短期間で相棒としたというトビイの噂は、瞬く間に魔界に広がった。

魔族でも類を見ない優秀振りである、当然だ。

サイゴン達に、オジロンの行き先を問えば、未だに竜探しから帰ってきていないはずだ、と教えられてトビイは経緯を話した。

呆れてホーチミンが怒りのあまり椅子から立ち上がると、爪を噛みながら空を見つめる。

「恥知らずめ！」

「水竜が拒否されたのならば、風竜を捜すかもしれないな。今、魔界の東に風竜の一家が滞在中だと聞いたが……」

「解った、出てくる」

サイゴンの話を聞き終えないうちに、トビイは家を飛び出す。二人も同行したいが、必死に耐え、その後姿を見送った。

オジロンが水竜を殺した証拠がないので、その罪ではサイゴン達は動けない。

同じドラゴンナイトを志すトビイならば、なんらかの事情・衝突でオジロンと対する事が可能である。トビイの力量は承知しているが、相手はオジロン達5人、万が一も有り得るので祈るばかり。

デスデモーナは未だ魔界に到着出来ていなかった、トビイは信頼も得ていたので城の小型の竜を借り、飛べるところまで進む。

やがて空気薄い山の頂付近でトビイはこの竜と別れると、何かしらの確信を得て進んだ。何かの叫び声、トビイは夢中で山を駆け上る。

産まれたばかりの竜を連れだした緑の竜……風竜の母親が魔族に取り囲まれていたのだ。思わず頭に血が上ったトビイは、大声で突進した。

「貴様！ 人間の！？」

「何をしている、オジロン！ ジュリエッタでは飽きたらず、また竜を！」

背の剣を引き抜く、驚愕した瞳で見ていた魔族達の目の前でトビイは”ブリュンヒルデ”を抜き放った。

「ジュリエッタの仇、とらせて貰う」

「ほざけ、青二才が！ 自信過剰の人間め、返り討ちにしてくれるわあ！」

トビイの所持する不可思議な剣に戸惑いを覚えつつ、魔族はトビイを取り囲む。その隙に目配せし、トビイは風竜に逃げるように指示、それが本来の目的である。

トビイとその剣の姿に圧倒され、好機が掴めない魔族、しかし恐れることはない相手は人間で一人きりである。魔法が扱える者が一斉に詠唱を始めた、使えないものが斬りかかった。

魔法は厄介だ、何が来るか検討もつかないのでトビイは斬りかかって来た魔族を紙一重で避けると、詠唱している者達に斬りかかる。詠唱を完成させられる前に、それを中断すれば優位だ。

素早く軽やかな動きで、トビイは瞬時に魔族達を蹴散らした。

「こ、このっ！」

「いい加減自分の実力を見極めろ。お前達では無理だ」

あしらう様に軽く髪をかき上げ言い放つトビイに、頭に血が上ったオジロン、威勢だけ良い掛け声と共にトビイに向かう。しかし、突如悲鳴を上げた。

黒い影が落ちる。

猛々しい咆哮、トビィはその声の主に思わず笑みを浮かべて名を叫んでいた。

「デズデモーナ」

「主、見つけたぞ」

眩しそうにデズデモーナを見上げたトビィと、威圧感に身体を硬直させたオジロン、場を制したのは黒竜。

「主の傍に、共に。……下卑た魔族よ、邪魔だ」

紅蓮の瞳に睨まれ、オジロン達は盛大な悲鳴と共に山を駆け下りる。弱者に対して居丈高な人物は、強者に対しては卑屈になるようだ。

あまりの変わり様子に、流石のトビィも呆れて追う気にもなれず、デズデモーナと再会を喜ぶ事にした。

「アレは何だ、主」

「仲の良かったオレの大事な水竜を殺した、最低な魔族だ。風竜が襲われているようだったので間に入ったんだが」

「ふむ」

「一応あいつらもドラゴンナイト志願なんだがな」

「無理だ、諦めたほうが身の為だがな」

「口で言って解る魔族達じゃないんだ」

肩を竦めるトビィ、おずおずと風竜が舞い戻った。見れば数が増えている。

「危ないところを……助かりました」

「気にするな」

母竜の後方に、デズデモーナより多少小型の風竜が控えている。

「息子です、本来は息子が夫が居るのですが、今日は二人とも不在で」

「そこを狙ったんだらう、そういうとこだけ妙に勘が働くんだあいづら」

舌打ちし、トビィが山の麓を睨み付けた、デズデモーナも威嚇するよつに咆哮する。

「まあ、その立派な竜が居れば今後は安心だろう。その幼子が成長するまで、今後は片時も離れないことだ」

デズデモーナの背に飛び乗り、立ち去ろうとしたトビイに控え目で小声だったが風竜が声を発した。

「私はクレシダと申します。……同行しても良いでしょうか」

面食らって頭を抱えたトビイ、先程の言葉は伝わらなかったのだろうか、傍に居ろ、と言った筈だ。

「オレはトビイ、ドラゴンナイトを目指しているが既にデズデモーナと、水竜のオフィーリアが相棒だ。正直……」

「興味がありますゆえ」

全く話を聞かない風竜、苦笑いでトビイは母竜を見たのだが、息子を啞然と見ているのは母も同じである。

「トビイ様、と申されましたね。クレシダが自分から意見を言うのは稀なのです、よければ連れて行ってやって下さいませんか」

「いや、しかし」

「もうすぐ旦那が戻りますから、こちらの身はご心配なさらず」

「ん……」

引き下がらない風竜一家に、思わず困り果ててトビイはデズデモーナを見たが、苦笑いで返された。数分迷っていたのだが、ようやくトビイは手をクレシダに差し伸べたのだ。

「よろしく、クレシダ」

「お願い致します、主」

こうして、ひよんなことからトビイは三体の竜を手に入れたのである。

黒竜・デズデモーナ。

水竜・オフィーリア。

風竜・クレシダ。

一度の敗北と、胸のうちに誓う復讐

魔界ではもっぱら噂が飛び交う、もはや英雄扱いだった。

無然としてトビイは騒がれながらサイゴンと共に魔界会議へ参加すべく街を歩き、興味はなかったのだが初めて魔王達に直面する。

銀の長髪、笑みを湛える魔王・リュウ。

漆黒の長髪、冷淡な無情の魔王・ハイ。

人型ではない、不吉な邪気を漂わせる魔王・ミラボー。

そして優美な容姿だが、今ひとつ掴めない魔王・アレク。

その姿を目に焼きつけ、トビイは然程関心なく家へ帰った。

「マドリードは未だ戻らないのか？ 遅すぎやしないか？」

「流石に、俺も不安なんだが。いや、でもトビイがいるから時間の流れを感じるのであって、魔族にとって本来5年など、たいしたことないし……」

積もりに積もった話を、サイゴンとするトビイ。やはり気がかりなのは、無論マドリードである。

明日は、トビイの16歳の誕生日であった。

その頃だった、噂をすればなんとやら、だ。

「ふう、ただいまイヴァン」

マドリードは小高い丘から久方ぶりの故郷に安堵の溜息を漏らす、金髪を靡かせて腰に手をあて、立っていた。人間界から戻ってきたのだ、悠々と翼を広げ家へと向かう。

トビイはどれほど成長しただろうか、見るのが楽しみだった。稀な才能を垣間見せていた、弟のサイゴンに頼んだし今頃立派な青年と少年の狭間で、魅力溢れることになっている……と、笑う。

が、すぐに周囲の様子に気づいた、囲まれているのだ。深い溜息一つ、見せた表情は陰しく瞳は金に禍々しく光っている。

「ピアンカね？ 休ませて欲しいものだわ」

至極落ち着いた様子で言い放ったマドリード、黒髪の女性が木陰から姿を現し、指を鳴らせば何処に潜んでいたのか魔族達がぞろぞろと出てくるではないか。

呆れたように再度深い溜息、情けなく見渡す。

「女一人に、この様なの？ 情けない」

強気な態度を変えないマドリードに、赤い唇を歪ませビアンカ、と呼ばれた女は顎で一人の男を指図した。

「なんとでもお言い、目障りなお前さえ潰せば手段など、どうでも良いのさ。オジロン！」

傍らのオジロンは、無造作に何かをマドリードへ向かって投げつけた、瞬時に青褪めたマドリード。

身体を硬直させ、震える唇から辛うじて吐き出した言葉と共に、戦闘態勢に入る。

「ビアンカ、あんた！」

悲痛で苦悶の表情を浮かべた人間の頭部が数個足元に、身体は惨殺されればらだ、死臭がすることから死して数日が経過しているのだと思われたが、まだ新しい。

それは、トビイと同じ様にビアンカが以前魔界へ連れてきて育てた人間達であったのだ。

瞳に燃え上がる憤怒、両手で大きく印を結びビアンカへ怒涛の魔力を放出する。

「巡る鼓動、照らす紅き火、闇夜を切り裂き、灼熱の炎を絶える事無く。我の敵は目の前に、奈落の業火を呼び起こせ！ 全てを灰に、跡形もなく！」

火の属性、禁呪を省いて現段階で最強の魔法にオジロン達数名は、大火傷と負いそのまま吹き飛ばされた。舌打ちし、怪我を負ったものにもう行けと大声で怒鳴ったビアンカは、マドリードと同等の呪文を唱え、解き放つ。

瞬時に焼け野原と化すその丘で、二人の女が対峙した。三名のビアンカ直属の男が残り、マドリードを囲む。

しかし抜き放った小剣で男二人を軽やかに翻弄し足を斬り付け、その場に倒れこませると余裕の表情でビアンカを睨みつけた。

強大な斧を背負い、ビアンカがキラキラと瞳を光らせながら間合いを詰めてくる。

「昔から気に食わなかったんだ！ 人間なんぞに甘いのに、地位の高いアンタ。私に寄越せ！」

「私を殺しても、私の地位は得られぬ」

「喧しい！」

大事な人間の子を虐殺された怒りと悲しみがマドリードを突き動かす、飛び交う斧の攻防、とてもそれには小剣では対等に戦えない。また、残っていた男達も厄介だった、弱いながらに非常に邪魔なのだ。間合いをぬつての詠唱、魔界の片隅で魔力のぶつかり合いが激しく起こっている。

荒野と化したその場所で、満身創痍な二人の魔族はそれでも死に物狂いで戦った。

数時間の長い間、男達はすでに息絶えていたが、ビアンカとマドリードはその場に睨みながら立っている。互いに限界を超えていた、立っているのがやっとだ、それでも互いの嫉妬と憎悪、それだけでそこに居る。

二人が同時に手を掲げた、最後の詠唱になりそうだった。雲が裂け、青空が見えるそこから二人同時に同じ呪文を放った。

雷撃の呪文、当たれば感電、上手く良ければ勝利である。

僅かに早く、マドリードの放った雷撃がビアンカを直撃した、絶叫が響く。自らに落下する雷を避けようと倒れこむように地面を転がり、必死に感電から逃れるべく身体を動かす。

飛べばそれこそ格好的だ、傷だらけでマドリードは転がった。

「ぐっ」

地面を伝ってくる電撃に、思わず顔を顰めて身体を震わせる。

それでもマドリードは懸命にある場所を目指した、行くべきところがあるのだ。自分の家ではない、トビイに会いたいのも確かだ、

しかし。

「アレク……様、アレク、さ、ま」

声が出ないので、城の一室へ向けて念じるマドリード。やがて城の一室から銀の髪を靡かせ、血相抱えた美男子が顔を出した。

その姿を見て安堵の笑みを零すと、そのまま息絶え絶えにマドリードは語る。

「も、もうしわけありません。ピアノカに、やられてこの様です」

今行く！ 話すな！

「い、いえ。もう、無理で御座います。サイゴンに、弟のサイゴンに。お役にたてず、もうしわけ、ありません。アレクさま、の、ゆ、め……が」

マドリード！

途絶えたマドリード、アレクは直様控えていた直属の部下、スリザを呼び寄せ、マドリードの元へ行くように指示を出す。一人部屋で頂垂れ、アレクは涙を零した。

魔王直属の命を受けていたマドリード、危険な依頼をしていたアレクは、自身を責める。

トビイの誕生日当日。

マドリードの亡骸が届けられ、弟のサイゴンに引き渡される。

やってきたのはサイゴンの直属の上司でもあるスリザと、親友のアイセル、そして泣き止まないホーチミン。死して尚美しいマドリードを見つめ、トビイは吐き気に襲われていた。

育ての親が死んだときですら、こんな情は湧かなかつたのに、この胸に立ち上る不可解な気持ち……マドリードを殺した相手に憎悪。親しいものだけで、密やかにマドリードの葬儀は行われた。こんなことさえなければ、特に心に残らない誕生日であつたらうに。

トビイ・サング・レジョン、16歳。

母であり、姉であり、恋人であり……美しき気高き魔族・マドリ

ード。

天へ立ち上る黒煙を見上げながら、トビイは呆然と死を受け入れられずに居た。

数日後、サイゴンはアレクの部屋のドアを叩く。

震えながら入室し、跪いて姉の真相についてアレクから説明をきかされて、静かに微笑んだ。

「アレク様から直属の命を受けていたのですね。そのお役目、姉に代わり是非、俺に」

「いや、これ以上の犠牲は出したくない。この件はもう良いのだ」

「しかし！」

「それよりも、サイゴン。マドリードの残した最後の人間……あの子を護ってくれ」

「トビイは、護られるようなたまではありませんよ。大人しく傍らに居ると思えません、何しろドラゴンナイトの称号を得ました、自由です」

苦笑いしていたサイゴンだが、急に顔を引き締めると、さらに地面に顔を下げた。

「姉の意志を、俺に」

「本当に、良いのだサイゴン。私が謝らねばならないというのに」アレクの顔に、陰り。秀逸な芸術品のような優美な横顔が、子供のように泣いている。

窓の外から見下ろしたその先に、魔界。自分が統治している魔界だが、今他から魔王が三人、来ている。

時間が、ない。

「勇者を。勇者を捜して会わなければ。会って話を聞いてもらわねば」

数週間後、マドリードの死を未だに振り切れなかったトビイは旅に出る事にした。

ドラゴンナイトの称号も得て、本来ならば隊長クラスの實力も兼

ね備えていたのだが人間であつた為にそれは却下された。ならば特に居ても居なくても良いのだと、トビイは久方ぶりに気ままに人間界を旅することにしたのである。

竜三体が共に一緒なのでサイゴンも安堵していたが、胸騒ぎ。

実力もあるので、心配は無用のはずだが、どうもトビイを見送る際に引き止めたくなつた。

不安で仕事も手につかないサイゴンに、ホーチミンとアイセルが励ますのだが、頂垂れていく。

それは、魔界を出て数ヶ月。

食料調達の為、竜三体を置いて森林へ入つた時であつた。三体の竜がトビイを止めた、胸騒ぎがしたらしい。

しかし、軽く笑つてトビイは離れていったのだ。竜の哀しげな鳴声が、トビイにも届いた。

森の中、出てきた人物に深い溜息、迷うことなく剣を抜く。

「しつこいな、オジロン。その火傷はどうしたんだ。オレを追う暇があれば、もっと精進すればいいだろ」

そう、オジロンである。未だにトビイを付けねらっていたのだ、数名の部下と共にトビイを取り囲んでいた。

森とはいえ、多勢に無勢とはいえ。トビイは負ける気すらなく、見事に倒していくのだが、オジロンが投げた髪に見覚えがあつた。

金髪。

見た瞬間、頭に血が上る、沸騰する。

「マドリード！」

冷静なトビイならば、難なく倒せただろう、しかしその瞬間にトビイはオジロンしか目に入らなかつたのだ。緊縛の呪文を唱えた二人の魔術師に、思わず避けそなつたトビイは地面に見えぬ糸で絡め取られる。

「お前にはプライドがないのか!？」

足元まで来てトビイの顔を踏みつけるオジロンに、情けなく怒り

を籠めて叫ぶトビイ。

「はっ、プライド？ そんなもん、ないね、わしの求めるものは勝利と名声。貴様に勝てば見事この俺様もドラゴンナイトに昇格だ！ わははは、なんだ、少しくらい能力が秀でているからってただの人間のくせに」

「それでドラゴンナイトが務まると思つたら、大間違いだが」

「減らず口を！」

オジロンを筆頭に動けぬトビイに暴行を加える魔族、反撃出来ないと解つた途端に急に勢いを増して魔族達はよつてたかつてサンドバッグのようにトビイを甚振る。

命乞いもせず、喚きもせず、トビイは耐えた。

マドリードが目の前このような卑怯な魔族にやられるわけがないので、他にも仲間が居たのだろうと冷静に判断。決して屈しないトビイの強い瞳が気に食わないのだろう、オジロンは顔を何度も強く打する。

トビイのブリュンヒルデを気に入り、オジロンは意気揚々と触れたのだが、瞬間眩い光を放ち一気に周囲に冷気が漂った。持ち主を選ぶのだ、当然であるもとはジュリエッタの一角、仇のオジロンに触れられれば反発もするだろう。剣は、オジロンの手には似つかわしくないものだ。

やがて、トビイの心肺が停止した。

ブリュンヒルデが持ち帰れないと悟つたオジロンは、つまらなさそうにブリュンヒルデを破壊する。

森に、トビイの亡骸。

森に、ブリュンヒルデが原型を留めず。

木霊する、オジロンの笑い声。

……起きて、起きて、トビイお兄様。助けに、来ましたっ。

月明かりが、トビイを包む。

デズデモーナの背に乗っていたトビイは、はっとして我に返ると月を仰いだ。過去を思い出していた、懐かしい情景だった。

忌々しそくにオジロンを思い、次に会ったら息の根を止めるべく再度誓いを。トビイの手にあるのは、無論”ブリュンヒルデ”。

「アサギ。待っている？ 今助けに行く、あの時助けてくれたように、必ずオレがアサギを助けるから」

紫銀の髪を風に流して、月を背に孤高のドラゴンナイトは三体の竜と共に魔界を目指す。

アサギという名の娘を、愛する娘を助ける為に。

キィィィィ、カトン。

歯車が、回った。

失意の神人くクレロく

ライアン、マダーニ、トモハル、ミノル。

当初の道を進むのはこの四人である、沈黙しかないその馬車の中、目立つ空席が寂しい気持ちに拍車を掛けた。行き先は”ピョートル”という名の国家、そこにはアサギの武器が保管されている筈だ、だが肝心のアサギが……いない。

直には辿り着けないので、途中で”ジョアン”という街に立ち寄るわけだが、そこまでの道程は非常に安全である。商人達が行き交う為、大きくはないが古びた石畳の街道が延々と造られているのだ、馬にも負担が軽い。

ライアンが当然馬車を操作し、マダーニが勇者二人の魔法について指導。無言で本を読み老けている勇者二人を瞳を細めて見守る、マダーニはトモハルを観た。

アサギに次いで優秀だと思われるトモハル、魔力も高いし何より覚えも早い。

問題はミノルだった、他の勇者に比べて格段に低いことが一目瞭然、それは魔法にしても剣技においても、である。秀でた点が見つからない上に、本人の怠惰が非常に目立った。

勇者達が離れ離れになった為、比較出来るのがトモハルとミノルになった事もあるだろうが、力の差が現時点で開き過ぎている。溜息を吐くマダーニ、ミノルは勇者としての自覚がないのだと思われる、しかしそればかりはどうしようもない。

元々、ミノルはこちらの世界へ来る事に反対していた、それをトモハルの挑発により売り言葉に買い言葉で参加したのだ。本来は他の勇者同様、素質のある子かもしれないが、やはり重要なのは本人の意志。

それは勇者になりたいと願う想いであり、誰かを救いたいという想いでもあり。もし、ミノルがアサギを救出すべく強い思いを明確

にしてくれたらば、上手く行きそうな気がしている。

けれども現時点では全く無理だ、救いたいという思い以前にアサギが不在でミノルが塞ぎ込んでいるのだから。

動揺している、心配しているのだろうが、気迫が全くない。無気力なミノルは、食事すら喉を通らなくなっていた。

それを観てマダーニは思った、単に仲間を心配しているだけではない、と。アサギが稀にミノルにしたたかな視線を送っていたことは、マダーニとて気づいている。

ミノルはそんな素振りを全く見せずに、むしろ邪険にアサギを扱っているようにも思えたが……ひよつとすると照れ隠しの裏返しだろうか。少年にはありがちだ、”好きな女だからこそ、苛める”。

居るはずの存在が、消えた。

トモハルは、アサギを救出すべく強い意思を持って必死に出来る限りの努力をしている。ミノルは、アサギの身が心配で何も手につかない、という状態だろうか。

これでは再び、二人の間に差が出来てしまう。

それに気づき、自分の考えを改める事が出来るだろうか、マダーニは自分からミノルへそれを伝える事はしない。

……あなたは、出来る、がんばりなさい……。

ミノルを見つめながらマダーニはそう願った。そんな視線に気づくわけもなく、ミノルは馬車から外へと視線を移していた。

陽は高く、太陽が残酷な強い光を放ち空気の温度が上昇。周囲はオリーブの木々が生い茂り、ゴツゴツとした岩が転がっていた。初めて観る風景だ、印象的だがあまり視界には映っていない。

遠くを見つめるミノルの瞳にぼんやりと小学校が映し出された、今頃面倒な授業を受けていただろうか、休み時間でサッカーをしていただろうか。心の中でアサギの名を呟く、顔を顰めて俯いた、胸が痛い。

もし。アサギが死んでしまったらどうすれば良いのだろうか、とミノルは思ったのだ。

何故、こんなことになったのだろうか、と思ったのだ。

……どうすればいい？ 今ここで、何をしているんだろう？ こへ来て、何をする気だったんだろう？ アサギが、勇者になるっというからみんなであつてきた。？ 勇者って、何だ？

例えばこれがゲームの中ならば、ミノルは得意だった。最も上手にゲームをクリアしていただろう、ゲーマーとしての自覚もあるのだから。死んでも誰かの魔法で、道具で生き返る。

全滅したとしても、リセット、という心強い味方がいるわけで。けれど、それは出来ない、これはゲームではない、現実だ。

勇者とは。定められた血筋の正統なる勇者。立派な働きをした勇敢なる者。選定され、否応なしに動く勇者。

大まかに分けるとこの三種に分類されると、ミノルは思っている。当然ミノル達は最後の”選定された”勇者だ。

何故、選ばれた？ もし、全員が勇者を放棄していたらどうなっただんたろうか？

「何を基準に選んだ、何故俺達なんだ」

ぼそり、とミノルは吐き捨てるように言い放つ、それは恐らく勇者を決めた誰かに向けて。

”勇者”と後に呼ばれる者には、プレッシャーがかからない。周困から見れば異端児で、その時誰も彼が勇者になるとは思っても居ないだろうから馬鹿にもするだろう。

実際、地球上でも死して後の世になってから功績が認められ、当時は見向きもされなかった偉大な芸術家に学者達が多く存在する。それなら良いのだ、偉業を成し遂げたのだから、例え生前認められなくとも。

だが、勝手に選定された勇者は。自分の意志とは裏腹に期待を受け、強制的に旅立ち、いつ命を落としても仕方がない戦いへと誘われる。

運命とは残酷で、誰が決めたのか知らないが勝手に作られた脚本通りに進むしかないのだろうか。

「俺は。操り人形じゃないからな」

ぼそり、呟く。その言葉はトモハルにも、マダーニにも、ライアンにも当然届かない。

”運命に踊らされている”。

運命とは、何か。誰が決めるのかなんて、それは神しかないだろう。

神とは、何か。神ならば、神が本当に存在するのなら勇者ではなくて、魔王に挑むのは神が妥当ではないのか。人々の運命を位置づけているだけの、神、何もしない、神。

ミノルは苛立ちを覚え、手の魔道書を硬く握り締める。怒りをぶつける様に思い切り掴んだ、ぐしゃり、と紙が曲がる。

神という誰でも知っている単語の人物に、けれども誰も正体を知らない人物に。思い切り憎悪をぶつけるしか、ミノルは他に感情を押し殺す術を知らない。

道の傍を、小川が流れていた。光の反射する青く透き通った水が、さらさらと流れていく。

不意にアサギを思い出した、とてもこういう風景が好きそうだな、とミノルは思った。

魔道書に目を落とす、観ないとは自分でも解っていたがそれでも、形だけでも。

大きな浮かぶ球体を見つめながら、男が一人苦笑いしている。

「子供は素直だな、まいった」

透き通った淡い青の、その球体。そこに映っていたのは先程から勇者とは何か、神とは何かと、ひたすら考えていたミノルが映っていた。

濃紺の流れるような髪、神々しい光を放つ金の瞳の、凡人ではない気配を漂わせている男が、その球体に手を触れて困っていた。彼の名は”クレロ”という。

先程までミノルが文句を言っていた相手だ、そう、神。耳が長い

以外、特に人間と大差ない容姿だった。

二十代後半に見える、少し垂れ目で気弱な感じがする。

クレロが現在居る部屋は何の素材で出来ているのか理解出来ない、不思議な琥珀色の鉱物で出来ている。水滴が水に広がりを見せる際の神秘的な音が、時折どこからともなく聞こえてくる。

かなり広そうな空間だが、クレロと球体以外は何もない。

魔王ハイが似た様な部屋を所持しているが、部屋の明るさ及び雰囲気は全く違うのはやはり神と魔王だからか。クレロが踵を返し、そのまま壁に突き進むと、ずっと、ドアが出現しクレロを飲み込むように開く。

躊躇することなく歩き続け部屋から出た、不意に耳に聴きなれた音が届いたので足先を変えてそちらへと向かう。美しい声、そしてハーブの音色に、優しいな笑みを浮かべると心休まる天使の歌声へと近づいていく。

明るい光の差し込む、真っ白な通路を進む、植物が生い茂る庭が見え始めた。

花盛りのティユールが甘い芳香を運び、蒼海波のようなラベンダーが風に揺れ、スパニツシブルームが黄色い花を散りばめ咲き乱れ、噴水周囲にはデルの花が受ける水飛沫に不思議な色彩を放ち。四季、というものが存在しないこの場所、温度も通年同じである。故に、何種類もの花達が百貨絢爛咲き誇っているのだ。

この場所、神の住まう”天界”、中心部”インバアネス”。

雨すら降らず、しかし水不足には決してならない、非常に快適な温度の文字通り楽園。地所では花の命は短い、しかし天界では当然のように毎日咲き誇っていた。

青い空から降り注ぐ陽光、爽やかな大気、風と共に常に花の香りを持って運んでくれる。細かい花の集まりが見事な、黄色い花のレディスベッドストロー、薄紫の小さな花を咲かせるバーベイン。

天界人、と人間からは呼ばれている背に純白の羽根を所持する有翼人達が愛でる為に咲かせている花々。クレロはそんな花たちの中

を優雅に進んでいった、惹かれるように。

「何もなき宇宙の果て 何かを思い起こさせる
向こうで何かが叫ぶ 悲しみの旋律を奏でる
夢の中に落ちていく 光る湖畔闇に見つける
緑の杭に繋がれた私 現実を覆い隠したまま
薄闇押し寄せ 霧が心覆い 全て消えた
目覚めの時に 心晴れ渡り 現実を知る

そこに待つのは 生か死か」

拍手を高らかに、クレロは歩み寄るとハープを奏でていた少女が満足そうに微笑んで一礼する。

麗しい歌声、文字通りこの世のものではなく、天界人の芸術の域に達する歌だった。ハープの音色も不可思議で、水音で作られたかのような。

「どうされました、クレロ様。お顔の色が優れておりませんが」

恭しく頭をたれ、少女は不安そうに声をかける。苦笑いし、クレロは隣に腰掛けると「かなわんなあ」と小さく漏らして溜息。それには答えず、クレロは口を徐に開く。

「今の歌は？ やはり地上の？」

「ええ。つい先日三星チユザールを見つめていた際に、少女が奏でておりましたので」

「吟遊詩人か？」

「いいえ、普通の一般的な少女です。といたしますか、売春婦ですわね。カーツという名の街で一人、海に向かって歌っておりました」

瞳を閉じ、胸でハープを抱き留めると風景を思い出しているのか眉を顰める。クレロは不審に少女を見ていた、戦争や魔族との抗争で傷ついている人間など溢れ返っているが、心痛そうな人間がここまで気になるのなら、それは、”いわくつき”だ。

「あまりにも印象深く、寂しげで不安げ、つい覚えてしまいましたの。自分の今の存在が嫌なのでしょうか」

「ああ、確かになんとも言えぬ寂しげ……。カーツの、売春婦か」

「？ 何か」

「いや、気がかりだ、私も彼女を調べるとしようか。上手く言えぬがどうも、引つかかる」

「何かを感じたのですね？ 私も調べましょう。名は”ガーベラ”、捨て子だそうです」

「そなたが気にする時点で、注意せねばならぬ娘だと思う」

翳ったクレロの表情に、同じ様に少女も翳らせて遠慮勝ちに立ち上がると遠くを見据えてそう言った。明確に、少女の胸に陰鬱な霧が広がっていく。

自分はただ、気になる歌を耳にしたので憶えてしまい、謡っただけだった。が、神がそういうなればこれは”必然”。クレロに気付かせる為に、否応なしに憶えてしまったのだろうか。

「いや、よい。それよりソレル、勇者の一人が”神”と”勇者”に疑問を思い始めている。それは良い事なのかもしれないが、やはり」

ソレル、という名の少女、漆黒に近い深緑の髪と瞳の天界人はクレロに跪き恭しく手を取った。

「マグワートに報告致します、神と勇者、双方の位置関係。私達は世界を救うことだけ、考えましょう」

「それで、良いのだろうか。本当に、救われるのだろうか。魔王を倒したところで、平和など訪れはせぬと……」

「クレロ様！ …… 私達の為にも、気弱にならないで下さいまし」
花咲き乱れる天界の楽園で。神と天界人が溜息を零した。

失意の神人くクレロく
(後書き)

おはようございます。

初めてあとがきというものを書いてみることにしましたが。

……何を書こう(おい)。

読んで下さり、誠に有難う御座います。

栄華の烈雷とトモハル

今のところ魔物に遭遇していないライオン達、このままであるならば非常に好調である。そう上手く行くはずもないが、暫しの休息だ。

今魔物に奇襲をかけられても、動けるメンバーはライオンを筆頭にマダーニが後方で支援、トモハルも前線だろうがミノルは馬車から出てこれなさそうだった。つまり、実質三人。

ライオンとマダーニは戦闘にも慣れていたので問題はないが、トモハルが人数が減った状況下で冷静に判断できるか、が不安である。無理は出来ない。

この機に先まで突き進みたかったが、ライオンとマダーニは目配せすると馬車を止める。

「よし、夕食の準備でもしようか」

トモハルとミノルの肩を叩く、ライオンが豪快に笑うと二人を押し外へ出した。簡易な夕食で済ませようと思っていたのだが少しでもミノルの気分を上げようと、会話を交えて暖かい食事をすることにしたのだ。勇者といえど、幼い少年。ライオンに弟はいないが、欲しいとは思っていた。弟を思う、兄貴のような気分にライオンはなりつつあったので、問題児のミノルが心配で仕方がないのである。干し肉に干し魚、パンを四人分取り出し鍋やら器具も持ち出して本来ならば大人数での旅だった、今となっては多すぎる食材に軽く苦笑いするマダーニである。

日持ちしなさそうな食材から順に使おうと、野菜も出してきた。

「茸、探ってきてくれないかしら？ 遠くまで行かないでね。薪はそこらのを使うから大丈夫」

マダーニに籠を渡されたトモハルとミノルは、互いに顔を見合わせて万が一にと武器を所持し歩き出す。手を振られながら茸探しに出掛けた二人の勇者は、それでも会話がなかった。

トモハルは不服なのだ、一刻も早く先に進みたかったので食事は適当に馬車内で済ませる予定だった。これは、時間の無駄だと思つと唇を尖らせたが、今はまだ、指示が出来ない。

立派な勇者に成長しないと、仲間を統率し、指令を出せない。トモハルは、自分の立場を理解していた。

「いいかー！ 絶対に生で食べるなよーっ」

ライアンの声を背に受けて、「誰が生で茸を食うかーっ」と心で叫びつつ森へと入る。

茸狩りなど、したことがない二人。裏山で、学校の一角で確かに茸なら見た経験があるが。松明も念の為所持した、獣ならば火で追い払えるだろうから。

「おい、ミノル。山火事にならないように松明の扱いには十分注意をして……」

「それくらいわかるっつーの」

げんなりとミノルは妙に張り切るトモハルを見た、常に優等生、仕切らないと気がすまないという性格は昔から知っている。舌打ちして、気分下がる中松明で地面を照らして歩いた。

乾いている木の枝を踏むと、パキ、と小気味良い音を出す。木の根元を注意深く見れば、しめじらしき茸が大量に生えていた、思わず見つけたミノルは笑みを浮かべる。本当にしめじがどうかは定かではないが、とりあえず”似ていた”。

先に見つけられたことが嬉しかったようだ、自信有り気にうろついているトモハルを見つめながらしめじもどきを籠へ。

「おい、ミノル！ ちょっとちよつと！」

かなり前方でしゃがんで何かしているトモハル、ミノルは意気揚々とそちらへ向かった。優越感に浸っているのだろう、確かに馬車に居る時よりミノルの顔色は良い。

小走りになり駆け寄れば、ひよろ長い薄茶の茸、真剣にトモハルが見入っている。つまらなさそうに大袈裟な溜息を吐くミノルだったが、妙にトモハルの様子がおかしい。

たかが、茸ごときに、何をそこまで見つめているのだろうか。

「？ 何。さっさとこれも採って戻ろうぜ。俺しめじみたいなき見つけたからさ」

引き抜こうとしたミノルに、慌ててトモハルが止めに入った、怪訝に睨まれたが、傍らの木の枝を徐に手に取りトモハルはそつと茸をつつく。

「見てろよ、ミノル」

松明を掲げて真剣に茸をつつくべく、トモハルは緊張した面持ちで棒を動かした。何事かと思わず固唾を飲んで、見守るミノル。

棒が茸をつついた瞬間。

「ぎゃー！」

「毒毒毒！！」

すつとんきような声を上げてその場から飛び去るミノルと、トモハル。茸から突如煙が吹き出してきたのだ、色合いも非常に不気味だ。再度勢い良く空中に吹き上がったその煙に、二人は軽い悲鳴を上げてその場から遠ざかる。

沈黙後、二人は声を出さずとも顔を見合わせてその場を立ち去った。あれを食べる気は全くしない。

瞬間、思わず二人の素っ頓狂な声が面白くて、腹を抱えて笑い出した、久し振りに爆笑した。やはり人間、笑いは大事だ。笑うだけで、胸のつかえが取れて、気分が軽くなる。

順調に茸を採り続けて二人は適当なところで戻る事にした、離れては危ない。トモハルが木に目印をつけていたので、難なく戻れる筈なのだが。こういうことには、本当に機転がきくものだと感心する。

「あれ？」

木につけた、剣での刻みを見ていたトモハルが出した声、ミノルも近寄れば。傷が明らかに増えているのだ、トモハルは一本の木に一箇所しか傷をつけていない。

けれども、そのトモハルがつけた傷の周囲に複数細かい傷が。

「これは」

思わずトモハルは右手で松明を掲げて、左手で剣を引き抜いた。基本左利きのトモハルだが、右でも生活が出来る。が、やはり頼るのは左らしい。

伝説の剣が松明の光によって光る、木を背にして周囲の様子を窺う。

「どうする、ミノル。何か居るぞ」

無言で同じ様に剣を構えたミノル、二人は木を背にして湧き出る汗を拭うことなく暫し森の中を見つめる。

ガサガサ……奥で何かが、動いた。

身体を引き攣らせてそちらを見れば、確かに何かが動いている。気のせいではない、風ではない。

叫びたい気持ちを抑えながら、ミノルは震える足で立っていた。

トモハルが妙に落ち着き、耳を頼りに音を追っている。徐に地面に合った小石を拾い上げ、それを音がしたほうへと投げる、やはり何かが動いた。

「動物だといいな」

小さく零し、松明を更に掲げれば。真上で何かの鳴声、驚いて木から転がるように離れた二人は成るべく寄り添い、木に向かって松明を。

猿だ。猿が数匹木に居る、魔物ではなさそうだが。胸を撫で下ろしたミノルと、それでも用心深く周囲に気を張り詰めるトモハル。

「木は猿だけど、森の中に居たのが何か解らない」

そういうことだ、それでも一向に動かないので二人は歩き出す。ミノルを先に、トモハルが後ろを向きながらゆっくりと引き返す。火があるお蔭で近寄ってこないのかもしれないな、と思った。

こうなると、茸の籠が邪魔である。突如、ミノルが立ち止まったので後ろを向いていたトモハルは、足元に籠を置いた。

立ち止まった時点で何かがあるのだらう、剣を構える。

「どうした、ミノル」

「……………」

「落ち着け、何が見えるんだ？」

「いや、それが」

軽く振り返ったトモハルは、一瞬何がいるのか解らなかったが、足元を見てようやく気づいた。

ウサギ。

ウサギが、5羽。当然、ウサギではないのだが、二人は知らない。アサギが襲われた魔物と同じだ、ウサギの姿を模した魔物である。トモハルは怯えているミノルの前に出ると松明を近づけてみた、逃げて行くだろうと思ったのだ。

だが、逃げることなくそこに居るウサギ、退いてくれれば良いのだが、何をしてもなくじっとしている。剣を突きつけてみた、が、微動だしない。

「弱ったな」

何故かその場を動かないウサギに困り果てたトモハルは、それでも決して手も足もださなかった。

足元の石を蹴って軽く転がしてみる、ようやくウサギが石に反応して動いた、微かに。

低く、唸る。5羽で、唸る。

「ちよ、トモハル、これマズいだろ？」

「構えろ、ミノル。解っていると思うけど、これはウサギじゃないよ」

森の中、逃げないウサギが存在するほうが妙だ。一羽が跳躍して二人に襲い掛かる、思わず目を閉じたミノルだが、トモハルは剣ではなく松明を突き出した。

案の定火に直撃、焦げた匂いを撒き散らしながら地面に落下するウサギ。

「剣で攻撃しなくても、例えばボールだと思って蹴っても戦えると思うんだけど」

言いながら前に出て、背を護るようにミノルに促し、ウサギ達と

トモハルが真つ向から向き合った。

不慣れな剣より、慣れた武器、それは己の足。

剣を仕舞うと松明を構えて右足を軸に、いつでも左足を出せる状態へ、と。

次々と飛んでくるウサギを蹴り飛ばした、色も白い事だ、ボールだと思えば。トモハルの額に汗が滲むが、確かに剣よりも扱いやすい。信じるべきは、自分だった。

その間、ミノルはじっとしていた、思うように身体が動かないのだ。森は、暗くなる一方。手にしている松明の灯りだけが、頼みの綱。けれども逃げることなく、背をトモハルに預けて正面に睨みをきかせてた。

それしか、出来ない。背で動くトモハルの気配、大丈夫だと言いつ聞かせながら松明を掲げて。情けないが、参戦できなかった。

「出来る事を、すればいいと思うんだ」

小さくトモハルがそう呟いた、それはミノルに言ったのかもしれないしトモハル自身に言い聞かせたのかもしれないし。

ようやく、肩で大きく息をしながらトモハルが地面にしゃがみ込んだので、呪縛から解き放たれたかのようにミノルも座り込む。

「怪我不い？」

「ねえよ」

「そ、ならいいや」

笑ったトモハルも無傷のようだ、二人は暫し休憩をしてから小走りに戻っていく。微かに。

トモハルの剣が微妙に光を帯びている、それは暗闇だから解ることであって、光の下に曝されれば気づかないような、仄かなもので合流すれば焚き火の火によって、当然その剣の輝きは消えた。

マダーニとライアンに駆け寄ると、籠を差し出した二人、ともかく小川で手を洗う。

ライアンに茸を判別してもらい、沸騰している鍋に茸を切って入れてパンを食べながら干し肉を食べつつ出来上がりを待った。暖か

いお茶にほつと息をつく、薬草が煎じてあるのだ、疲労が取れる。

やがて鍋の蓋が外された、魚の出汁の茸スープである。見かけによらず、マダーニは料理が上手いようだった。四人で談笑しながら食事を取る、これだけで気分もほぐれるだろう。

ミノルが些か元気がない気がしたが、愉しませようと会話を盛り上げるマダーニ。

考えていたのだ、ミノルは。隣で意気揚々と話すトモハルの傍ら、先程とて敵を倒したのはトモハルで、自分ではない。情けないし、惨めだとは思うが、身体が思うように動かない。

何故、自分が勇者に。アサギを救いたい気持ちはあるのだが、素質がないのではないか、とミノルは思う。救えるのはトモハルだろう、既に伝説の剣も所持しているのだから、難なくアサギを助けるだろう。

そう思い、恨めしく剣を見たミノル。気づいているのかいないのか、トモハルは自分の剣をそつと引き抜いた。自分も、伝説の剣があればどうにかなるのではないか、とふとミノルは思ったのだ。

「これさ。俺の剣じゃない気がするんだよね」

唐突なトモハルのその言葉に、啞然とライオンは口を開く。確かに、偽者ではないか、とトビイと会話もした。沈黙している中、トモハルが苦笑いで剣を月に掲げて目を細め。

「なんだろう、上手く言えないけど。何かが違うんだ、この剣。凄くいように見えるけど、凄くない気がする。勇者の剣って、そんなものなのかな？」

驚いたのはライオンだ、何故気づいたのか、勇者だからか。感じていた違和感、トモハルは先ほどの戦いで確信したのだ。

「本物かもしれない、自分がまだこの剣を上手く使いこなせていないだけかもしれない。もしくは持ち主が違うのかも。でも、とにかく普通の剣だよ、これ」

笑って剣をしまったトモハルは、最後のスープを飲み干し立ち上がる。気落ちしているかと思えば、そうでもないようだ。ミノルは

啞然とトモハルを見つめるしかなかった。そして思ったのだ、根本的に自分とトモハルでは意志が違う事に。もし、自分が受け取った伝説の剣が偽物ではないかと、疑ったら自分ならば気落ちしてすべて投げ出しそうだ。

けれども、トモハルはそのほうが自分に与えられた試練であるかのように、堂々と言い放った。威厳が、あった。

「行こうよ、時間はないんだ。俺はアサギを救う為になんだったですよ」

月の光に、焚き火の灯り。

立ち上がって手を伸ばしたトモハルの姿に、軽く笑みを浮かべたライアンとマダーニだが。

そう。マダーニは気づいた、トモハルが掴んでいた剣が淡く光っていた事に。思わず息を飲む、トモハルは気づいていないようだ。

ひよっとして、その剣……。言いかけた言葉を飲み込むと、マダーニも立ち上がる。

「そうね。行きましょうか」

軽くトモハルの肩を叩いて再度、剣を見た。微かに魔力を放つその剣、トモハルはまだ気づいていないのだろう。

偽者か、本物か。多分、それは所持する者が見極めること。

才能溢れる一人の勇者、対である勇者を攫われて。目指す先は奪還であり、そして。

「俺さ、明日から回復魔法に専念するよ。欠けている部分を補っていかないかね」

ライアンに馬車も習いたいし、マダーニに魔法も習いたい。俺はなんとなく雷系の魔法が得意な気がするからそこを強化して……」語りだすトモハル、ライアンとマダーニは聞いていた。

勇者の一人は攫われた、対である目の前の勇者は。現時点で輝きを増す、それはまだ見ぬ先の未来であれども。”勇者の要”として力を発揮すべく。

パチン、焚き火が鳴った。

すみれの香り

宿を出て、街の探索を始める四人。ケンイチ、ユキ、ムーン、ブジャタの、ジェノヴァ帰還組みである。

先日は、皆で観光気分で歩き回ったが気分は重く、晴れない。それは当然人数が少ないから、背に乗せた使命が違うから。あの時はただ、浮かれて店を回った。

よもや、仲間の勇者が、友達が攫われるだなんて思わなかったからだ。そして、勇者同士離れ離れになるとは思っていなかった。友達が居たからこそ、頑張つてこられたのに。

沈黙が続く、ブジャタを先頭にして歩き続ける。二人を気遣い、早々に宿に到着する。

ベッドで眠りについた、けれど、案の定眠れなかった。眠たいはずなのに、眠りたいはずなのに。

朝食も疎かに、宿を出て、長い下り坂を進めば街の中心路に到達だ。この辺りの坂は左右に宿が立ち並ぶ、多少遅めの出発だったので人影はまばらだ。

ただ、路の脇で遊んでいる子供達の姿は目に入る。ユキは、この間の買い物で買ってもらったりボンつきの杖を手にながら、ケンイチの少し後ろを歩いていった。

その杖、風の精霊を封じ込めてある代物とかで、その者の魔力・精神によつては突風を巻き起こせるといふのだ。マダーニの妙な交渉により、”本物であるならば”高額な杖だが比較的安く手に入れた。

ただ、ユキはそのような説明どうでもよかった。その杖のリボンと、付属の石が非常に気に入って購入しただけだ。何より、自身が選んだ衣装にも似合っていた。まさに、装飾品代わりの杖である。そんな杖を手の中で遊ばせながら、ケンイチを見つめる。

ユキは異性と話すことが苦手だった、大人しい印象に見られてい

たので、小学校でもアサギの隣で話を聴いて頷くだけ。

ムーンは優しく知的で頼れるお姉さんなので、話し易くて安堵していた、ブジャタも近所に住むお節介おじいさんの様で、気が楽だ。ケンイチは。そこまで会話した記憶がなかった。実はいくらとつつきにくいイメージがあった。

ミノルやダイキに比べれば、ケンイチのほうが話し易いのでその点は肩の荷を降ろせるが。

「トモハルのほうが、よかった、な」

小さく呟く。トモハルは非常に人気者で、女子に囲まれており、大人しいユキにも気を使って話しかけてきてくれる。それに甘えてトモハルとは会話が出来た、一番心を許せるのはトモハルだったのだ。

淡い恋心も抱いていたことである、どうせなら、そんな相手が良い。トモハルならば、今もユキを一人にせず気遣ってくれたに違いない。隣に居てくれたのだろう。

軽く溜息、同じ勇者であるにも関わらず、ケンイチはユキを気遣うわけでもなく、ムーンと親しく話をしてきた。一人にされたような、感覚。

トモハルならば、戻ってきてその輪の中に入れてくれただろう。つまらなさそうにユキは二人から視線を外すと、唇を噛み締めて街を見渡す。自分から、最初からある輪に入るのには勇気が必要だけれども、その輪に入りたい。ならば、ケンイチが呼びに来てくれれば良い、呼びに来るのを待っている。だが、来ない。とぼとぼと、足取り重く歩く。

これからこの四人で当分一緒だ、それが憂鬱である。恨めしそうに、ユキはケンイチを軽く睨みつけ、石畳へと視線を移した。なんて気が利かない男だろう！ 口には出来なかった。

「ケンイチは、ロシアに似ているわ」

呟いたムーンの隣で、ケンイチは人懐っこい笑顔で訊き直す。

「ロシア？ ええと、それって」

「私とサマルト、他にも数名勇者と合流するはずの仲間が居たの。その中の一人が”ロシア”。

途中で、死んでしまったの。大剣使いで、頼れるリーダー的存在だったわ」

寂しそくに微笑んだムーンに、思わず息を飲むケンイチ。しかし、どう反応して良いか解らずに「そっか」と呟くと俯いた。言葉が出てこない、”死んだ”と言われてどう言葉を切り返せば良いのだろうか。

日本では、死する確率がこの世界より低いだろう。運悪く不慮の事故に合う事もあるだろうが、常に魔物との隣り合わせの状態ではない。葬式だって、未だにケンイチは出たことがなかった。周囲の死など、知らなかった。

俯いてしまったケンイチに、母のように、姉のようにムーンは優しく頭を撫でる。身長はムーンのほうが上だ、5cm程しか違いはないが。

「弟みたいね」

くすつと小さく吹き出して、優しく頭を撫でるムーン。

母親は身体が非常に弱く、出産は命取りだと言われた状態でムーンをこの世に産み落とした。母親も奇跡的に命を取り止め、ベッドの上で毎晩ムーンの頭を撫でてくれた。

一人娘のムーン、城での遊び相手は身分を遠慮して思い切り遊んでくれない貴族の娘。ゆえに同じ立場であるサマルトやロシアに出会う日を、待ち遠しく思っただけで過ぎてきた。

特にロシアは優しく逞しく、歳とて然程変わらないが兄のように頼れて、淡い恋心を抱いていた人物だった。城へ来た時も訓練を欠かさず、広場で剣の稽古をしており、生真面目な人だと好感を持ちそれでいて気さくな人柄なのだ、メイドの中にも憧れるものは多かった。

隣の小さな勇者、顔がロシアに似ている。その黒髪、大きな瞳、屈託のない笑顔、強い意思を秘め正義感溢れる様子のケンイチとだ

ぶらせてしまった。

ロシアの、生まれ変わりなら良いのに。

そういつたムーンの思いが心に芽生えた、別人であるはずなのに、似ていた為。俯いていたケンイチが顔を上げて軽くムーンを見て微笑む、そうするしか、ケンイチには思いつかなかった。

微笑み返したムーンを見て安堵すると、先頭を歩いていたブジャタに声をかける。

「ブジャタさん。戦いの実戦を積むのも当然大事だと思うけど、手当たり次第倒すのは良くないと思うんだ」

「ほう」

「だからさ、実戦相手は被害を加えたことのある魔物に限定したいんだ。」

他に、人間の中にも悪党って当然いるでしょう？　そういう奴らとか」

立ち止まり、後方を振り返ったケンイチ、すかさず視線を合わせたユキはそこへ合流する。ようやく、自分が呼ばれたのだと判った。遅い、と心の中で呟いたが、声には出さずに隣に立つ。

首を傾げてブジャタを見ているユキに、真剣な眼差しのケンイチ、驚愕の表情を浮かべるムーン。

三人を見比べてからブジャタは豪快に笑い出す、そしてケンイチに歩み寄ると満足そうに深く頷いた。

「そうですね。手当たり次第惨殺しては、訓練を積んだ事にはなりませんねのお。」

殺すより、生かすほうが難しい。殺生だけなら傭兵に任せれば良い。勇者は、敵を生かし、更生させることを目的と致しましょうか。

何、実は。宿のご主人から盗賊の討伐依頼を承りました、本日からそれについて調べようと思っていたところですよ。道中で商人が襲われ、一部の物産が到着しないのだからか。

それさえ倒せば謝礼金も手に入りますしのお、治安も良くなり人々に貢献できますじゃ。どうです？」

思わずケンイチはユキを見た、きよとんとしているユキに思わず笑みを浮かべる。その笑顔は晴れ晴れとしており、思わずユキは顔を赤らめた。あまりに、無防備な笑顔だ。

自分の思いがブジャタに伝わった事が嬉しくて、思わず声のトーンが上がるケンイチ。

「よし、それで行きましょう！ 人相手のほうが、剣の上達が早そうですしね」

「治安隊も動いているそうじゃ、街中でも昨今盗賊が出没、市民の生活を脅かしている」と

方向は固まった、やるべきことは”盗賊討伐”。不安そうに俯くユキを励ますように、ケンイチは手を握る。それにユキは更に顔を赤らめた。時に、少年は予測しなかった胸のうちを突くものだ。

しかし、突如大声を出して話を中断させた者がいた。ムーンだ。息を切らして、切羽詰ったように軽く敵意を剥き出しにして声を発する。

切実な、声だった。

「待つて。人間の盗賊の事は、治安隊の方々にお任せしましょう。私達のやるべきことは、人に害成す魔物の撲滅です。魔物は人に襲い掛かります、駆除すべきです。ココへ来るまでも、何度か魔物に襲われたでしょう？」

「でも、ムーン。魔物の中には攻撃してこない奴だっていると思うんだ。戦いを仕掛けられたら挑めば良いけど、それなら目先の敵をどうにかしようよ。」

治安隊よりも先に討伐できれば、それだけ一般人に安堵が戻る。

人間に悪い奴がいるように、魔物にも良い奴がいると思って」

「そんなの、存在しませんわ！」

金切り声を出し、真っ向からケンイチを視線をぶつける。一瞬ケンイチはたじろいで後方へ下がった、しかし、唇を結び直して見据える。

ムーンは、幼馴染達を魔物に殺された。家族も城の民も、殺され

た。魔物への憎しみは人一倍だろう、それは解る。尋常ではない憎悪に捕らわれているのだろうが、けれども正しいのかと言われれば違うと断言できた。

まだ幼い勇者は、言葉を選び損ねてケンイチはそれでも食い下がれずに、立っている。言い返す言葉が、見つからなかった。もどかしい、気持ちだ。

もし、この場にいたのがアサギかもしくはトモハルならば、ムーンを説得していたかもしれない、と小さく呟き、隣から静かにブジヤタが割って入る。別にケンイチを非難しているわけでも、差別したわけでもない。が、この隣の小さな勇者にはまだ”度胸”と”人前に立つ力”が抜けている。

「落ち着きなされ、亡国の姫君」

「私はいつでも落ち着いております」

簡易れず言い返され、苦笑いでムーンを見た。明らかに動揺しているのが、手に取るように解る。だからこそ、やり辛い。

「そなたが持つ憎悪、悲痛。我らには計り知れないものであるが、それでも。魔物を惨殺しては、その魔物と同じになってしまうじやろう。」

無益な殺生は、極力避けるべきだ。命の重みは、種族が違えど同じはずじやろう？ そなたならば、解る筈じゃ。連鎖する前に、食い止めねばならぬ。でなければ戦いは未来永劫終わらないじやろうて。

同じになつてはならぬよ、自分が抱いた嫌悪感を忘れてはならぬ。忘れずに回避できる方法を、他人に抱かせないためにはどうするかを考えねばならぬ。大事な事は真実の見極めじゃて。賢いそなたなら、解る筈じゃ。

確かに魔物に良いものなどないかもしれぬ。けれども目先に困っている人がいるならば、まずはそちらを救う優先をせねば。魔物からの襲撃があれば、当然そちらを優先しよう」

道端の幼子達が、手の中に干切った花弁を握り締めそのまま走り

出す。やがて手の中の花弁は、大きく振られて宙へと待った。風に
乗って、揺ら揺ら進むのを子供達が追いかける。

ムーンの桜色の頬に、すみれの花弁が一枚ふわり、とくつついた。
笑い声を上げ、子供達は坂を下りていく。ゆっくりと、仄かに香る
すみれの香りを胸いつぱい吸い込み、頬の花弁を優しく摘んだ。

護らねばならぬ光景が、そこにはある。もう、自分の国には、い
や、惑星にはない光景だった。

目の前でじい、とそれを見つめるとふっ、と軽く息を吹きかけ花
弁を宙に舞わせて髪をかき上げる。香るすみれ、心穏やかに。

子供の笑い声、小鳥の囀り、暖かな日差し。小さく瞳を閉じたム
ーンは、それに酔いしれた。

すみれの花言葉は、純潔・誠実。

すみれの香り (後書き)

おはようございます。

お読みくださり、ありがとうございます。

暫く、ケンイチ達の冒険が続きます。

街中の来訪者

風が吹く。ムーンの髪を揺らしながら花弁を舞わせながら、香りを届けながら。

うつすらと瞳を開いたムーンは、多少戸惑いがちにブジャタを見たが直ぐに笑みを零す。

「吹っ切れましたかな、亡国の姫君」

「ええ……。まだ、認めたわけではありませんが。」

確かに神が与えて下さった命の重みは、同等ですよ。神によって、魔族も作られた存在であるということ、忘れていました。絶対悪であると……決めつける前に自身で見極めようと思います。

「ご迷惑をおかけしました、ブジャタさん、ケンイチ」

深くお辞儀をしたムーンに、ほっほっほ、とブジャタが高く笑う。満足そうに、頷きながら。ケンイチは慌ててムーンに近寄ると首を横に振った。

「な、何も僕はしてないから別に気にしないで」

「いえ、ご迷惑をかけたことに違いはありませんわ。申し訳御座いませんでした」

「だからーっ」

丁寧な謝られることに赤面し、必死で抵抗するケンイチ。滅ぼされたとはいえ、一国の姫君である、申し訳ない気分になった。不思議とムーンの笑みや声のトーンは耳に心地よく、思わず瞳を瞑り聞き入りたくなってしまふもの。

微笑ましく二人を見つめながら、ブジャタは小さく笑い続けている。

亡国の姫君。

元々、ブジャタとムーンとて出身の惑星が違う。ブジャタの惑星であるクレオの姫君は、知っている限りでは皆大人しく椅子に座り笑顔を振りまくだけ。

ムーンが魔法の授業を受け、ここまで扱う事が出来るのは惑星の
違いだろうか。鼻から、何者かの襲来に備え皆戦闘訓練を行っている
のだろうか。

こうしてみると、クレオは実に平和なのだ、とブジャタは苦笑
いである。魔王が存在しているとはいえ、人々の不安要素にそこま
で巨大に根付いては居ない。

僅か一部の人間が警戒しているだけであり、村や街の一般市民は
知る由もなく。もしくは、そ知らぬふりだ。どうにかなるだろうと
誰かがなんとかするだろうと。実被害さえなければ、それで良い。

「さて。ではこちらを」

ブジャタは懐から紙切れを一枚取り出し、三人に良く見えるよう
に広げる。ケンイチが覗き込み、ユキを手招きすると「地図だよ」
と、嬉しそうに話し掛けた。

古びた羊紙、それを皮と骨だけのような指先でブジャタは点を指
し示した。

「近辺の地図じゃ、地形がよおく解る。盗みを街中で働き、堂々と
門から出て行く馬鹿はおるまい。秘密の抜け穴でも存在するのでは
ないか、と持ちきりじゃ。」

そして街からまんまと盗んだ品物を遠くで売り払う、つまり一時
保管場所がないと不可能じゃの。

よおく見てみい、印があるじゃろう？ 怪しいと思われる場所じ
ゃ

「早く見つけないといけないね、早速行動開始だ！」

拳を握り締め力強く頷いたケンイチ、ムーンとユキも同感、と拳
を掲げる。ブジャタは嬉しそうに頷くと、先頭に立ち案内するかの
ように歩き出した。

高齢でありながら、若々しい態度のブジャタにケンイチは吹き出
すつついて歩く。近所のおせっかいおじいさんのようだった。

「ブジャタさんって、元気だね」

「ほほっほー。いやなに、若い頃は格闘家でもありましたからのお。」

身体の鍛え方をそこらのジジイと一緒にされては困りますがな。

見せて差し上げましょうぞ、このブジャタの華麗なる……おお！」
「退け！ 邪魔だ、老いばれ爺が！」

突如、ブジャタの身体が地面に突っ伏した、その傍らを二人の青年が走り抜けて行く。呻きながら倒れ込んでいるブジャタに慌ててユキが手を差し伸べ、優しく抱き起こしながら去っていく二人に「何てことするのよ、ばーかっ」と、声を浴びせたが聞いているのかいないのか、そのまま去っていった。

「酷い、謝りもしないだなんて、非常識ですわ」

憤慨するムーンの傍らを、ケンイチがすり抜けて行く。

「許せない、追いかけてくる！」

止める間もなく青年達を追いかけたケンイチであったが、ユキとムーンがブジャタの様子を見ていたところで二人も慌てて青年達を追う羽目になった。

というのも、大通りから数人の警備員が雪崩れ込むようにこちらに押し寄せてきたのだ。

口々に「待てー！ 止まれー！」と叫んでいたので、ユキとムーンは互いに顔を見合わせるとブジャタを座り込ませて走り出す。

何をしたのはかは知らないが、追われているのならば犯罪者だろう、ただの無礼者ではなかったらしい。だから、謝るわけがない。

「そこで待っていてくださいー！」

珍しいムーンの大声、ブジャタは腰を痛めたらしく、擦りながら弱々しく手を振った。待つも何も、行く気がないようだ。行ったところで、足手纏いになりかねない。

杖を振りかざし、詠唱を始めるムーン、とても足では彼らにおいつけないので魔法での作戦に出る。

「煌く粒子破片となりて、絶対零度の冷気を纏い彼の者へと」

相手は人間だ、傷を与える程度の魔法で十分である。ムーンの杖から放たれた一本の氷柱は、まるで槍のように地面と平行して凄まじい速さで青年へと向かう。

ケンイチを追い越し、一人の青年の太腿に突き刺さった。飛行距離が相当なものだ、ユキとて氷の魔法は習っているがあそこまで距離を長く出来るものだとは思いつきもなかった。

啞然とムーンを見ながら、走り出し背中を追いかける。

太腿に氷柱が突き刺さっては青年も耐えられない、大きく呻いて地面に転倒し、舌打して近寄ってきた仲間の手に縋っていた。

「待て！」

追いついたケンイチ、剣を引くと二人に向けて構える。

追い詰められたかのように見えた二人の青年だが、ケンイチの姿を確認するや否や、薄ら笑いを浮かべた。背丈も低い、可愛らしい顔立ち、生憎相手を凄める容姿ではないのだ、青年はゆっくりとケンイチに近寄ると逆に脅すように腰の短剣を二本引く抜くと、チラつかせながら歩み寄る。

「ガキはすつこめ」

威嚇のつもりなのか、本気が。

大きく振り被ってケンイチへと短剣を振り下ろした青年は、下卑た笑みを浮かべていた。だが、彼は判断を見誤った。

怯みもしないで振り下ろされた二本の短剣を剣で同時に受け止めると、驚いた表情の青年を睨みつけ大声を出しながら弾き返すケンイチ。

よろめきながら、啞然とケンイチの姿を見た青年と、その下で忌々しそくに立ち上がった青年。

そんな二人を見比べながら、剣先を向けた。呼吸の乱れもなく、怯みもせず、俊敏な動作である。

ケンイチは思った。老人を突き飛ばし、追いかけられたくらいでは剣を向けてこないだろう。ムーンの魔法といい、逃げるように走っていたことを前提に考えればこの二人、何かの犯罪者であると推測。

だとするならば、ここで逃がすわけにはいかない、というのがケンイチの本音である。

「クソっ、只者じゃないぞこのガキ」

再び短剣を構える青年、足先からケンイチを見つめ、睨みつけているが先程と違い額には汗が浮かぶ。トモハルならばここで「勇者ですが、何か」くらい言い出しそうだが生憎ケンイチは軽く溜息を吐き語り出した。

「悪い事はしないほうがいいよ」

言われながら、二人は尻込みした。ただの、子供の言葉だった。

しかし、妙な威圧感がケンイチの声と瞳に宿っており、思わず身震いしてしまう。厄介な奴に捕まった……呟きながら怪我をしていた青年は、懐から何かを取り出そうと手を忙しなく動かす。

相手の行動に眉を潜め、剣先を更に押し付けたケンイチだったが。
「ああもう、どれだかわかんねーよ！ オラッ」

懐の皮袋から直径5センチ程の琥珀色した球を取りだし、地面に投げつけてきた二人組み。そこから真っ白な煙が辺りを覆うように吹き出していく、思わずケンイチも軽く後退。

「バカ！ それじゃねえよ！ ひくぞ、ひけえ！」

「な、何だこの煙」

ケンイチの注意がその煙に移った瞬間に、二人は必死に逃亡を図った。無論、ケンイチにもその姿は見えていたので追うべきだと判断したのだが、動くに動けなかった。

煙の中に、影が見えたのだ。

煙が徐々に晴れていく程、その存在に緊張感を走らせ、剣をきつく握り締める。大人の背丈の二倍ほどの……大蛇が妖しく蠢いてそこに、居た。

エメラルドのような光を放つその大蛇の外皮、真っ赤に燃え盛る瞳、観察する間もなく大蛇は大きく口を開き、鋭利な牙をむき出しにして何かを飛ばす。ケンイチが後退し、剣を真正面に構えながら地面を見れば立ち上る煙と、削れた地面。

酸だろつか、思わず身体を振るわした、直撃は避けねばならない。大蛇は尾を振り回し街路樹を一撃で折り倒しながら、舌を出し、

うねりながらケンイチを見つめている。

「ケンイチ、離れて！」

「ユキ！」

振り向かず横にそれたケンイチの後方からユキが杖を地面に突き刺し、構えている姿が現れた。

祈るような気持ちで何度も練習した通り、呪文を唱え始める。

「生命を運ぶ風よ、死を運ぶ風と変貌し、私の敵を刃となりて切り裂き給え！」

街中の来訪者（後書き）

おはようございます、戦闘開始です。

不安要素がたつぷりなメンバーですが、ここまでお読みくださり有難う御座いました。

犯罪者を探せ

ユキの周囲に薄紫の霧が立ちこめる、一瞬耳鳴りを起こす空気の振動が起こった。

と、杖が大きく揺れ空気が宙を走りながら蛇へと向かう。思わずケンイチに笑みが零れた、一目で分かる、呪文が成功したのだ。かまいたちは蛇の外皮を切り裂いた、大きく数個傷口を作る。

成功の安堵、極度の緊張から足下へと座り込んだユキの後方から駆けつけたムーンは、連続して詠唱に入る。

先程と同じように氷の呪文だ、氷柱を幾つも投げつけ蛇へと突き刺す。

耳を裂く鋭い叫び声をあげながら、のたうち回る蛇はその身体で街路樹をなぎ倒し、塀を壊し続けた。痛みでもがく、このままでは被害が拡大してしまうことが目に見えた。

「ムーン！ あの蛇の動きを止めることって出来ないかな、このままだと」

焦りながらケンイチはムーンへと歩み寄った、ユキの腕を引っ張り上げ三人で態勢を整える。

「上手くいくかは、五分五分ですがやってみますわ。ケンイチは敵の注意をそらして頂きたいのですが、お願いできますか？」

「わかった、ムーンから注意をそらせばいいんだよね。任せて」

言われるなりケンイチは蛇へと突撃していく、顔をムーンから引き離す方向で間合いを計りながら誘導に入った。

「私にも指示を！」

杖を握りしめながらムーンの隣に立つユキに、ムーンは大きく頷くと穏やかに微笑む。

「ケンイチの援護を。呪文でケンイチが危害を加えられる前に防いで欲しいの」

「分かりました！」

元気よく返事をし、ユキはケンイチの後を追うと、再度地面に杖を突き刺し魔法を放った。

微力ながらも、確実に蛇の外皮を切り裂いていく様子にムーンは満足そうに微笑んだ。

アサギまでとは言わないが、確実にユキも魔法を素早く確実に成功させてきている。杖の特殊能力の効果もあるのだろうが、それにしても見事だった。

蛇の狙いがユキへと向く前に、ケンイチが斬りかかり、自分へと向けさせながら間合いを取り。

その隙にユキが魔法を完成させて放つ……二人の交互での攻撃がかなり有効な様子だ。

これならば二人に任せ、自分は長い詠唱に入れるだろう。ムーンは瞳を閉じると、小さく唇を動かしながら意識を集中させる。

二人にすべてを委ねるしかないこの状況、もし不安ならば自分が主力で戦うつもりであったが、取り越し苦労だったようだ。

アサギの為に、だろうか。二人の戦闘能力が、皆といた頃よりも上がっているのだ。

ケンイチは逃げながらもどうすべきか考えていた、攻撃力の高いその尻尾、それを切り落とすべきではないのかと。

額の汗を拭いながら、素早く慎重に背後に回り込むと、一気に剣を振り下ろす。

切り落とせば、被害が減るだろうと思った。思い切り、懇親の一

撃。

手心えと同時に、絶叫。

切り口から吹き出した赤紫の毒々しい体液を、思わずケンイチは避けて鼻を押さえる。

強烈な異臭、そして降りかかった地面の草花が瞬時に焦げ焼ける様を見て、引き攣った笑みを浮かべた。避けて正解だったようだ、体液までもが毒に犯されているらしい。

背筋を冷たい汗が流れる、これで暴れる尻尾の攻撃からは免れたものの、油断は出来ない。

眼までもが、痛い。

強い硫酸のような刺激臭だった、なんと厄介な敵だろうか。

思わず瞳を閉じてしまったケンイチに、切れかかった尻尾での蛇のあがきが襲いかかる。

威力は落ちたものの、その衝撃は地球上では滅多に受けられないものだった。

ケンイチの身体は大きく吹き飛ばされ、宿の壁へと叩き付けられた。昔、学校の回転型遊具で吹き飛ばされ先生達に救出された事があつたが、当然その比ではない。

悲鳴を上げる間もなく、強い衝撃と強打で意識が朦朧とする中、声すら出せない状況でケンイチはだらり、と身体を重力に任せる。

「ケンイチ！」

慌てて駆け寄り、回復の魔法を試みるユキ、微かに呻いたケンイチに、まだ意識があることを知ると全力で集中する。

溢れ出る唾を大きく音を立てて飲み込みながら、懸命に震える手で回復を。

蛇は機動力も劣り、こちらへの心配はまだ見られないので肩の荷を降ろす。

そうしている間に、ムーンが一つの魔法を完成させた。

「大いなる大地の御手よ、そのものを絡め束縛し賜え。そのものは全てを大地に任せ、静かに眠りの淵へと」

辛抱強く詠唱していたムーン、例えユキの声でケンイチが被害を被ったと発覚しても、意識を途切れさせなかった。

蛇の影に、琥珀色の巨大な矢が突き刺さると同時に、うねっていたその巨体が不自然にびたりと固まった。

しかし、この状況でいくら魔法が成功したとしても直接攻撃の可能なケンイチが瀕死では、あまり役に立たない。

ケンイチをユキに任せ、自分は足を肩幅に開くと別の詠唱に入った。

ともかくこの呪文で動きを止めている間に何かしら攻撃をすべきだろう、一定時間で呪縛は消える。

「ここは我らに任せて、お下がりにさいお嬢さん！」

緊張と焦りで周囲に気を配っていなかったが、後方から街の警備隊が馬に乗って到着したようだった。

ジェノヴァの警備隊は、皆鎧の肩部分に紋章が刻まれている。紺碧の防具に身を包み、甲には白い羽、鋭利な槍は単調だが機動力重視だった。

味方の登場に安堵のため息をもらしたムーンは、大声で叫んだ。

「有り難う御座います！ 今呪文で動きを止めているのですが、正直どこまで持つのがわかりません。

お気をつけて！」

「あい分かった！」

騎馬は槍を構えて蛇へと向かう、皆威勢の良いかけ声だった。

丁重にお辞儀をすると直ぐさまケンイチとユキの元へと駆けつける、半泣きのユキが居た。

「落ち着いて、回復魔法は完璧だわ。大丈夫よ」
「は、はい、でも」

ムーンも回復魔法を詠唱する、二人がかりでの治癒だ。苦しそうな表情が、すーっと、穏やかな笑みへと変わったのを確認した二人は、頷くとようやく笑みを零した。

「後は任せますわ、あちらの援護に向かいます」
「はい、頑張ります！」

責任感に満ちた瞳と、意志の強い返事に思わずユキの頭を撫でたムーン。

何も迷うことはない、戦場へと向かうムーンは蛇の頭部目掛けて氷柱を投げ飛ばす。

あの調子ならばケンイチも直ぐに目を覚ますだろう、心配なのはその恐怖で今後の戦闘に支障を来さないか、だ。

影縛りの呪文の効力はまだ続いている、しかし、影に突き刺した矢はつつすらと消えかけているのでやはり時間の問題だった。

体液にも効力がある敵なのだ、下手に傷口を開き続けても二次災害の恐れがあった。

「あの、離れて下さい！ 呪文を！」

ムーンの声は届かずに、攻撃を加え飛び交う警備隊が邪魔で確実に大きな魔法が唱えられない。

氷柱で攻撃をしているだけでは、時間がかかりすぎる。

一気にとどめを刺すために威力の強いものを、と思ったが広範囲

に渡る為、周囲への配慮が必要だった。

極限まで範囲を狭めようとしているが、正直自信はない。
焦るムーン、見れば影に突き刺した矢が、消えていた。

「大変！ 攻撃が来ます！」

動きを止められ、怒りは頂点に達した蛇は無我夢中で蠅のように飛び交っていた警備兵に、体当たりを食らわす。

馬ごと地面に倒れ込んだ警備兵には申し訳ないが、お陰でムーンと蛇は対峙した。

この期を逃すまいと、杖を大きく振りかぶって直ぐさま詠唱に入るムーン、耳障りな金属音が周囲にこだまし始めた、ユキは慌てて布をケインイチの耳に押しつけると自分も必死に耳を塞いでムーンを見つめる。

薄紅の衣服をはためかせながら、ムーンの周囲に巻き起こる風。地に倒れ込んでいた兵達も、命からがら馬を引きずり、その場からゆっくりと離れていく。

蛇すらもその気迫に負けているのか攻撃を仕掛けてこない、先に動いた方の勝ちだろう。

先に蛇が動いた、大きく口を開きムーンの頭部を飲み込もうとその容姿からは想像出来ない速度で、満身創痍であろうとも身体を伸ばしたのだ。

兵は思わず瞳を瞑った、ユキは祈るように見つめた。

ムーンは、微笑んだ。その瞬間を待っていた、口を開くのを待っていた。

「煌く粒子破片となりて、絶対零度の冷気を纏い彼の者へと。全てを凍てつかせる冬の女王よ、ここに降臨し賜え！」

杖先を蛇の大きく開かれた口へと向ける、巨大な氷の塊が風に乗

って幾つも蛇の口から体内へと飲み込まれていく。

啞然とユキはそれを見ていた、瞳を怖々開き始めていた兵も、見た。

失敗したのだろうか、氷の塊を蛇へ叩き付ける魔法だと思っていたのだが。

「お見事ですじゃー！ ムーン殿ーっ」

元気な老人の声に、皆が一斉にそちらを向けば、ブジャタが若い兵の馬に乗せられて手を振っている。

身を乗り出してはしゃぐ老人、兵達は苦笑いだった。

何が見事なのか、飲み込まれた呪文は、どうすれば？

視線を蛇へと戻し、槍を構えた兵士達は同時に絶叫する。蛇は、天へと苦しそうにもがく断末の形相のまま凍り付いていたのだ。

「こ、凍っている」

おっかなびつくり近寄った兵士は、太陽の光に反射し光り輝きながら凍結しているそれをコンコンと叩いた。

徐々に皆、その魔法の意図を理解したのだ、歓声を上げてムーンに握手を求める。

額の汗を拭い、その握手に丁寧に応えるムーンは恥ずかしそうに頬を染めた。

「何が起こったの？ 氷が食べられていたけれど」

ユキがムーンに近寄り、首を傾げた。ムーンが答えるよりも先に、ブジャタの咳と声が近寄る。

「それはですなっ！ 素晴らしかったですぞ、きゃつの心臓を凍ら

せたのですな。

内側からの攻撃ならば、外皮を傷つけずに仕留められますじゃ。口を開いたあの隙に呪文をたたき込み、一気に氷結。見事としか言えませんが」

「呪文にも、使い方がたくさんあるんだ」

ブジャタの話聞き、ムーンを見上げれば薄く微笑んでいる。

そういうことだ、何も外側から攻撃せずとも良い。

和気藹々と戦闘の勝利を喜んでいたがそうもいつていられなかった、兵達に事情徴収される羽目になったのである。

身体を起こし、なんとか立ち上がるうとしていたケンイチにユキは駆け寄り、身体を支える。

兵に囲まれたムーンを不安そうに見ながら、そちらは任せることにした。

「大丈夫？」

「ああ、なんとか。死ぬかと思ったけど」

ムーン達がこちらに近寄ってきたので、軽く顔を顰めつつ深呼吸をする。

蛇の出現経緯はケンイチしか知らないのだ、こちらへ質問にくると思っていた。

一部の兵士達が凍り付いた蛇を処理すべく荷台の手配等を進める中で、位の最も高そうな兵士がケンイチの視線に合わせて片膝を付く。

「君が第一発見者かな？ あそこまで巨大な蛇はどのようにして？」

外壁は破壊されていない、まさか空から降ってきたとかは？」

「犯罪者と思われる二人組が、妙な球を取り出し、投げつけました。すると煙と共に突如蛇が現れたんです」

「ははは。まさか」

「本当です、球は小さかったけど」

「むう？ それで、その二人組はどのような姿だったかな？」

まだ辛そうなケンイチに代わり、ムーンが前に進み出て口を開いた。

「私たち四人が目撃しております、漆黒の衣服に身を包んでおりました」

「先程我らが追っていた犯罪者で間違いはなさそうだが。老夫婦の家にて殺人強盗が起きたので、犯人を追っていたのだ」

それで追われていたのだ、そしてケンイチ達に出くわした、と。殺人、と聞き息を飲む四人。

「しかし、そのような小さな球体からあれほどの魔物が出てくるとは。かなり高等な者でない限り、制作は不可能じゃ。」

そしてそれを大量生産でもされて街中に投げ込まれでもしたら、大惨事ですな。屈強な城壁と警備に護られていても、内部でやすやすと放たれたら」

聞きながらケンイチは”トロイの木馬”の話进行い出していた、似ている。

あれも、内部に進入するためにとった作戦で、大きな木馬を街へ送り、実はその中には兵士が入っていて、やすやすと進入できた、という戦争の話だ。

「不吉なこと、言わんでください」

心底嫌そうに兵は肩をすくめ、軽くブジャタを睨み付けるがブジ

ヤタは怯まない。

「確率が高いですじゃ、まあ相手の真意を知らんがの。あの青年達
が作ったものではなさそうですね、配布されたのではないかと
となると、巨大な組織が絡んでそうですね」

口を噤む兵、そして気づいた。

「そういえば。あなた方、何者ですか？」

今更な質問である。

まさか「勇者です」と言うわけにもいかなかったので、困惑しケ
ンイチとユキは俯いた。

剣の扱いが出る少年に、魔法を使える少女、更に高等な魔法使
いの少女に……妙に偉そうな老人。

ブジャタは豪快に笑いながらケンイチの肩を叩いた、芝居めいた
口調で語る。

「この子は儂の孫ですじゃ。遠方の村の出身じゃがの、一通り初歩
の魔法や剣技を習っているのですじゃ。」

何、見物がてらきておった、ただの観光客じゃて」

些か無理のあるような気もしたが、荷台が到着したので兵達は礼
を述べるとそのまま帰路につく。

拍子抜けしてユキが肩を竦めながら、その後ろ姿を見送った。

「信じられない、もっと追求してくると思ったのに」

「ふむ、しかし儂らにしてみれば詮索されないほうが行動しやすい
というもの。さあ、もう一仕事やりましようかの」

ムーンが乱れた髪と衣服を整え、歩き出している。

「先程の者達を追わなければなりませんわね、行きましょう。何処かに身を隠しているとは思えませんわ」

「うむ、急ごうかの」

唇を尖らせて渋々座り込んだケンイチは、本調子ではないのでこの場に置いて行かれることになったのだ。

「はいばーい、と明るく手を振るユキに、そっぽをむいて手を振るケンイチ。」

坂を上る、登り切れば荘殿で頑丈そうな城壁が見えた。

坂を下りて、下に位置する城壁を目指す。

宿屋地帯の反対側の丘は、芝生で日頃子供達のかっこうの遊び場になっているのだが今日は誰もいない。

あの騒ぎでは当然だろう、そのほうが都合がよいが。思わず無言で風が吹き抜ける芝生を、三人で歩き続けた。

城壁を見上げれば、無言の圧力がかかる。

目の前で三人はそれを見上げ、唇を噛んだ。確かに城壁があれば外部からの進入は防ぐことが出きるのだがこうしてみると……窮屈だ。

上空から見れば、檻に閉じこめられているも同然である。

「ふむ。城壁を迂回して人目に出れば警備兵に見つかるじやろうから、無難にどこかに抜け道があるとしたか」

そういうことだ、城壁の下は草に護られているような状態である、小さな穴が空いていても不思議ではない。

これだけ同じ風景が続くのであれば、万が一抜け穴があるとして、必ず目印があるだろう。

三人は、分かれて探すことにした。

ユキは考えた、もし、自分が秘密の抜け穴を作るとしたら何処に作るだろう、と。

人には分かつてはいけない、けれども自分たちは瞬時に分からねばならない。

ならば。

降りてきて直ぐ目に付いたのは、城壁に沿って、一定間隔で木が植えられているということ。

しかしそれでは皆同じであって目印にはならない、木の種類は皆同じ。

木の根本を見てみた、草が生えている。

木にも特に異常はない、目印となるものなど、ない。

後ろを振り返ってみた、来た方向の丘の上には宿屋の風見鶏。

はつとし、ユキは風見鶏の下を見つめる。風見鶏は風が吹けば当然向きを変える、しかしその下の矢印は動かないので一定を指していた。

北だ、北を指している。

その矢印が正面に来る場所を探した、その付近の木を注意深く見てみれば。

「ムーンさん！ ブジャタさん！」

叫ぶ、歓喜の悲鳴だ。

草に被われ、壁が見えなくなっていたが、大人一人が通過出来るうな穴が城壁に空いていたのだ。

苦笑いで三人は顔を見合わせる、これでは誰でも進入可能だろう。ともかく、警備兵に抜け穴があったことを報告するとして三人はケナイチの元へと急いだ。

そこさえ埋めてもらうか、交代で見張りを付けておけば容易く出入りしている者は捕まえることが出来そうだった。

「さあて、次の道は決まりましたな。先程の者達を捕まえましょうぞ、何やら怪しげな臭いがしますがお」

「ええ、ケンイチの状態も見て、今夜発つか早朝にするか決めないといけないですね」

丘に登る、意外と早く早期解決が出来たので皆は嬉しそうだった。夕日に染まる空を見上げ、ムーンが小さく眩く。

「危険極まりない人物達ですわ。早急に捕まえないと」

意志を強く持った、魔物を取り扱う人間。放って置くわけにはいかまい。

さて、宿屋街の一角が妙に騒がしい事に気づいた三人、そこへ降りていけば案の定ケンイチが中心に居た。

どうやら先程の戦闘を何処かで見ていた野次馬達だろう、しきりに何か話しかけている。

その中には数名、派手で薄手の露出度の高い衣装に身を包んでいる女性が居た。

宿屋街だ、男性の夜の愉しみ相手の店もあるのだろうか、その従業員のようにである。

照れるケンイチに触れ、抱きしめ、誘うように艶やかに会話する女性達。童顔のケンイチは歳上受けするのだ、相当気に入られている様子である。

「可愛いわー、この子っ。強いし、将来有望よね」

「でも、もう12歳でしょう？ どうお、今夜遊ばない？」

「夜のお勉強も、必要よ坊や」

顔を真っ赤にして首を降り続けるケンイチに、歓声を上げる女性達であった。

そんな様子を憚然と、こめかみに青筋を立てながら見つめている二人の女、ユキとムーン。傍らではブジャタが首を竦ませて、見知らぬ振りをしている。

「け、ケンイチったら！ 何しているのっ。何、夜のお勉強ってっ」「あ、あの人達ったら人前にあんな服装で。教育に悪いですわ！」

そう言ってからムーンはふとマダーニを思い出した、似たような服装でもある。

が、この際そこには触れない。

ムーン自身も実は今日の衣服は先日ここで購入した衣服だが、ワンピースが気に入るものが無く、腹部を見せるしかないこの衣服を購入している。

確かに透けてはいないが実は十分露出はしていた、が、この際そこは気にしない。

二人は勢いよく、地面を叩き割る感じで一步一步、ケンイチへと向かった。

その不穏な気配に怪訝に振り返った女性達、般若のような二人の強面に喉の奥で悲鳴を上げる。

いつもの器量の良さは何処へやら、完璧に顔が変形していた。

「退いて下さるかしらーっ」

「立ってよ、ケンイチ！ 行くよ」

尻込みしている人々、呆気にとられているケンイチ。ケンイチの腕を片方互いに掴み、思い切り引っ張る、というか、引きずる。

質問から解放されたので、嬉しそうに手を振るケンイチは、まだ怒り収まらない二人の少女と共に行く。ブジャタが苦笑いで続いた。

暗躍する陰、光で照らし廃除せよ

少女二人の憤怒の原因が何か全く解らなかつたケンイチだが、とりあえず怖いので話しかけることなく引き摺られていた。

が、ユキが振り返りもせず重低音で話しかけてきたので身震い。

「ちよつとケンイチ！ 何あの態度、あなたつて、そういう人だつたの！？」

「何が？」

「でれでれして、スケベ心丸出しの男みたいよ、最低、不潔、見損なつた」

「えー！？ ちよつとやめてよ、違つよ！ トモハルじゃないんだから、人聞き悪い事言わないでよ」

トモハルがそれでは気の毒だ、だが、ぷいつ、と横を向いて眉を吊り上げ齒軋りしているユキ。今とモハルを出されたところで、怒りの矛先がそちらに向かうわけがない。とりあえず、弁解を始めるケンイチ。

別に、何をしたというわけではないのだが、ユキの機嫌は直らなかつた。

それどころか、話す度に機嫌が悪くなつていく一方だ。

「いや、だから。美味しいお菓子をくれたんだ、あの綺麗なお姉さん達」

「……………」

居心地悪く、無口なユキの後方をマントの端を掴みながら歩く。ケンイチは、ユキの表情を窺うが依然として、鬼のような形相だつた。

……いやだつてさ、綺麗なお姉さん達に囲まれてうるたえない男
はいないと思うよ……

小さく口を動かして、そう漏らした。

「んあ？ 何か言った？」

「いえ、何も言ってますん」

地獄耳以外の何者でもない、瞬時に振り返り、ドスの効いた低い
声のユキ。悲鳴を上げそうになる。

慌てて首を横に振り、へこへことお辞儀をし機嫌を取り繕うケン
イチは、鼻息荒く歩き出したユキに安堵の溜息を漏らし。

だが、小声でぶつぶつと誰にでもなく言い続けている姿に背筋が
凍った。

……ユキつて、あんな性格だつたけ？ あまり接した事はなかつ
たけれど、もつとお淑やかだった気がする……

顔を引き攣らせ、ユキからムーンに視線を移した。

こちらにも機嫌がすこぶる悪そうだった、人と話してはいけなかつ
たのか？ 思わずケンイチは心痛な溜息を吐き出した。

綺麗な半裸の美女に囲まれていた様子が、二人の少女は気に入ら
ないのだが、そんなことケンイチには解らない。

気の毒そうにブジャタがケンイチを観ていたが、こちらはこちら
で機嫌を治してもらおうとムーンに付き添っているようだ。

「私の国では、いえ、星では昼間からあのような職業の女性は出歩
きませんわっ。まして、いたいけな少年に接するだなんて、教育が
悪いにも程があります。」

あのような方々を責めるわけではありませんが、時と場合と人を
選ぶべきでしょうっ？ そうですわよね、ブジャタさんっ？」

「あー、そうじゃのー。うんうん、最もじゃて」

「しっかり話を聞いてください！ ここの国王様に直談判しようか

しら」

「うーん、まあ、その、あれじゃよ」

先程から愚痴を延々と聞かされているらしい、話を摩り替えるべく曖昧な返事をしているようだ。

耳にたこが出来るほど、ケンイチとブジャタは女二人の止まらないマシンガントークを聞きつつ歩く。

行き先は、安居酒屋。陽が落ち、夕暮れ時に差し掛かり飲食店が賑わい出す頃だ。

ブジャタの案内で、大通りではない道の、決してお世辞で綺麗とは言いがたい店に到着する。

ようやく、二人の口数が減ってきたところだった。

旅人も、街の住人も気兼ねなく集まることが出来る、大衆向けの場所である。

既に店の中ではテーブルのあちらこちらで宴会が始まっていた、仕事帰りの一杯だろうか。

「さて、耳を傾けましょうかのう。こういった場所では、結構噂が飛び交いますからなあ」

それが目的だ、ブジャタが空いていた中心付近のテーブルを見つけ、腰掛ける。三人も目配せし合うと、静かに椅子を引いて座った。ユキは、その店を見渡しあからさまに顔を顰めた。ケンイチはすくに何故だか解った、”汚い”のだ。

足元は先程から何かが通過していく、おそらくはゴキブリだろう。壁には枯れた花が飾られ、絵画は高そうには見えない。客層も大声で喚きたてる人物達だ、酔っ払いも少なくはない。

ユキは小さく俯くと、隣のムーンのワンピースの裾をしっかりと握り締めていた。

その場に似つかわしくない、四人だ。子供が二人に、老人と、美

しい娘。

普通に考えて居酒屋に来る顔ぶれではないが、周囲は興味がないのだろう、特に気にも留めていないようだ。

適当にブジャタが注文し、後は瞳を閉じてじっと、耳を済ませる。同じ様にムーンも、真似てケンイチとユキも、それに習った。

四方から聞こえてくる、男達の声をも、聞き捜す。

「おおおう、俺様はよお、この間でつけえ竜を退治したぜえ」

「はっはー、そりゃあよかったなあー」

すでに酔いが廻っている者達だ、これはホラだろう。浴びるように酒を呑んでいる、口から酒が零れようがジョッキを下げずに一気に飲み干しているようだ。

勿体無い……とムーンが注意すべく立ち上がるうとしたが、慌ててブジャタが引き止める。

憤慨しているムーンの気持ちは解る、彼女の惑星は食料すらままならない状態だったのであろう。

魔王・ハイの恐怖ゆえに。

そう思えば、本当にこの惑星クレオは魔王の脅威に直面しているとは思えない。

出てきた茹で豚とナッツのディッシュサラダを自分の皿に取り分けながら、ケンイチはユキのご機嫌を直そうと必死だ。

水菜に大根、トマトの彩りが目に良い刺激を与えてくれる、おずおずと皿を差し出したケンイチ。

「私、トマト食べられない」

「ご、ごめん。でも、食べなきゃ駄目だよ」

テーブルに肘をつけて不貞腐れているユキに、ケンイチは始終苦笑いだ。

空腹だと機嫌が悪くなるだろう、何か食べてもらおうべくパンを差し出した、スープを取り分けた。

渋々食べ始めるユキ、そっと胸を撫で下ろすと、ケンイチも食事をしつつ周囲に耳を傾ける。

それほど気になる情報はなさそうだった、聴こえてくる話は普通の世間話へと移行しつつある。

深い溜息を吐くブジャタ、確かに一日で情報を得られるとは思わなかったが、重い腰を上げ、空になった皿を見ながら勘定を頼むべく手を上げた。

「ここらで噂の盗賊の件だが」

四人、同時にはっとして顔を上げる。

近寄ってきた店員にブジャタは慌てて紅茶を四杯、注文し席につくと軽く頷いて顔は互いを見たまま耳だけそちらへ向けた。

「街へ来る途中だが、ほら、森に鍾乳洞の洞窟あるだろ？ あそこへやけに宝石を手にした二人組みが入っていくのを見たが、どう思う？」

「ああ、あの巨大スライムが生息するっていうあれか」

「いや、俺が聞いたのは太古の宝石を死守しているからくり仕掛けの人形がいるって」

届けられた紅茶に四人は手をつけずに、そのテーブル席の会話だけを抜き取るようにし、集中する。

嘘か真か、森に鍾乳洞があるらしいことだけは把握出来る。周辺の地図を広げてみたが、確かに洞窟の印がそこには存在した。

ただし、幾つもあるようだ。

「まあ、どのみち、入る気はないわな」

「命あって、だからな。確かに盗賊に賭けられた賞金は高いが、あんな洞窟入る気しねえ」

「いわくつきの場所なようだ、盗賊の住処になるならばもってこいだろう。」

人が近寄らないらしい、中に居るのは正体不明の魔物、ということか。

「そこまで見たなら役所に届け出たらどうよ」

「さつき行つて来たが、取り合ってもらえねえ」

「確証がない、つてか」

「そんなもんだ」

冷めた紅茶を四人が飲み干す、静かに席を立つと宿へと急いだ。店を出て離れていけば、徐々に物悲しく静まり返った路地裏へと。予約してあつた部屋へと戻り、部屋は当然男女で各一部屋なのだが、一方に集まると明日の作戦会議である。

回復の薬草等を点検し、地図を広げ場所を確定する。あの二人が言っていた場所が、どの鍾乳洞を指すのかが不明だ。

地図を見る限り、入り口が四箇所あるようだ。内部で繋がっているのか別物なのかが不明である。

近くから探索すべきか、遠くから行くべきか。

「一番近い場所から、行こう」

ケンイチの一言で決定した、本来ならば遠くに身を隠すのだろうが、盗賊も徒歩で戻っているようだ。

そこまで遠くへ戻っているとは考え難い、とのケンイチの判断である。

夜は更けていない、ゆっくり身体を休め早朝発つ事を決めると荷

物の分担をし、入口への距離を測る。馬車は使えない、誰も操作が出来ない。

運よく、そちら方面の馬車が出れば途中まで乗せていって貰うとして、そうでない限りは徒歩である。

時刻、22時程。

四人はそれぞれ浅い眠りに就いた、習いたての剣士が一人に、魔術師が二人、見習いの魔術師が一人。戦闘に限りが出てくる事は必須である、打撃系のプロがないのだ。

ケンイチは自分に重く押し掛かるプレッシャーに、布団の中で押し潰されそうだった。

それでも、やるしかない。今はこの四人しかないのだから。

皆、それぞれ必死な筈だ。

何度も自分に言い聞かせ、拳を強く握り締めた。

早朝、宿の主人に簡易な食べ物を用意してもらいそのまま街を出る。半日あれば到着出来るであろう場所、内部探索も含め往復で三日の計算である。

街道が街から続いているので、森へ入るまでは非常に歩き易いことが幸いしたが、運良く後方から馬車が来た。

入口付近まで連れて行って貰うべく、言い値で金を支払い荷台へと乗り込ませてもらう。

計算外の嬉しい誤算だった、一気に予定時間の縮小である。足の疲労感を感じていたユキは我先にと乗り込み、足を伸ばしてマツサージ。

探索がし難いと思われる洞窟内に備えて、体力温存が可能な事も大助かりだった。

何分このパーティは体力に自信のある者がケンイチ、一名である。荷台には簡素な幌がついているため、昇る太陽の熱い日差しを免れることもでき、老体のブジャタも胸を撫で下ろす。

その馬車は、ジェノヴァの名産である絹を出荷しているようだった。

た、荷台に大量の箱が積まれている。その、箱の僅かなスペースに収まっている四人。

クリストバルで譲り受け、先日まで乗車していた馬車よりも、当然乗り心地は悪く、道の小石でガタガタと身体は始終揺れていた。

ケンイチとユキは、それでも眠りに就いた。早朝に起床し疲労が出たのだらう、丸くなって静かに寝息を立てている。

その間にブジャタとムーンが、今回の目的の段取りの最終確認を行った。

「私の得意魔法が、風と氷に回復。ブジャタさんが氷と攻撃補助魔法。ユキが風と回復。火炎系がないのが痛いですわね」

「うむ、属性が三人とも似たり寄ったりだのお。打撃の主力がケンイチ殿になってしまいが、戦闘に入ったら真つ先に詠唱に入り先手必勝、それが無難じゃな」

「ええ、まだひよっこ勇者ですわ。無理させたくはありません、二人ともかなり数日で目を見張る伸びを見せましたけれど」

昨日の大蛇との戦いを思い出し、ムーンは静かに微笑んだ。

「ブジャタさんの所持武器は杖ですわよね、何か効果が？」

「簡易な回復魔法の詠唱が可能じゃ、攻撃力は無きに等しい」

ムーンとブジャタ、二人の魔法による連続、追撃攻撃が戦闘の鍵だ。

ケンイチがこのまま成長すれば、比較的整ったパーティに成り得るのだが、今はまだ期待出来ない。

恐ろしいのは魔法に耐性のある敵が出た場合である、正直それが恐怖だった。

「仮眠されよ、亡国の姫君」

「いえ、ブジャタさんこそ、お休み下さいませ」

「いやいや、ここは一つレディファーストで」

「いえいえ、ここは老人にお譲り致しますわ」

「まだそこまで年老いてはおらんー！」

のんびりと会話を続けていた二人であったが、急に馬車が大きく傾き停止、馬と人間の叫び声が前方で上がる。

二人は直様傍らの杖を掴むと、荷台から飛び降りた。

盗賊だ、5人の盗賊が馬車に攻撃を仕掛けてきたらしい。

飛び出した二人の足元に燃えている矢が放たれる、木の上にもう一人弓兵がいるようだ、全部で6人。

操縦者は辛うじて剣で応戦している、彼の護衛をしている二人の青年のうち、片方が手傷を負っているようだ。

「私、弓兵の動きを封じます！」

「承知！」

ムーンは直様風の魔法を唱え、木の枝から狙っていた弓兵の身体を切り刻んだ。木に護られている為直撃は免れているから、命に別状はないだろう。

上から弓が落下したので、上空からの攻撃は気にしなくて良い。

ブジャタは操縦者を狙っている盗賊を三人まとめて、氷の飛礫で撃墜した。

命までは奪う必要はないだろう、簡易で威力の低い魔法ならば連続での使用も可能だ。

ケンイチとユキも騒ぎに気づき荷台から飛び出した、剣を引き抜き果敢に残りの盗賊に挑むケンイチを、後方でユキがサポートしている。

その隙にムーンが負傷者の手当てを、盗賊6人はあっという間に四人によって捻じ伏せられた。

魔物とは違い、極力人間を傷つけないのである意味難しかったが、懸命に剣を駆使するケンイチに思わず拍手を送るムーン。

責任感が出てきたのだろう、不慣れだが基礎を思い出して戦っているようだった、人型であったことも戦い易かったのかもしれない。馬車の持ち主にも激励を受け、相談した結果木の上の盗賊も引き摺り下ろし、流石に野放しには出来ず縄で縛り上げた。

問題はこの盗賊をどうするか、だが。

その前に念の為、盗賊との会話を試みることにした。

「巷で噂の盗賊団じゃな？　ちと聞きたいのじゃが。お主らの中に、魔物を呼び出せる妙な球体を所持している、もしくは知っている者はおらんかの？」

もし所持していたら使用しているだろうが、念には念を。

皆俯き、問いかけに全く反応しない盗賊達、やはり簡単には口を割らないようだ。

瞳を細めてそれでもブジャタは続ける、一人一人の顔色を窺いながら。

「ふむ、外道は外道なりに道理を弁えているのじゃな？　結束はそう簡単に破れないということかの。」

さて、我ら。盗賊を一網打尽にすべく旅を始めたのじゃ、今から巢窟になっていると噂の鍾乳洞へ出向く。待つておれ、直に仲間達にも会えるじやろうて」

誰一人、顔色一つ変えずにブジャタの話を聞いている。

ユキとケンイチが不安そうに顔を見合わせていたが、ムーンとて鋭く盗賊を観察していた。

捕らえた盗賊は直ぐにでも牢へと放り込みたいところである、馬車は次々にここを通りかかるだろうが大の大人六人を乗せる余裕が

あるか解らないのだ。

ここへ放置しておくのも魔物に襲われてしまいそうで気が引ける、かといって戻って連れて帰っていても時間のロスでもあり、他の仲間が彼らを救いに来る可能性もあった。

非常に扱いが難しいところである。街を出てから、二時間が経過していた。

「木に縛り付けて、戻ってきたら一緒に街へ戻るが一番無難かの？
まあその間に魔物に襲われたらそれはそれで……致し方あるまい」

頭を抱えていたブジャタが容赦ない一言を繰り出した、流石の盗賊も顔色をかえる。

街道であり、多少の魔物除けは張り巡らされているが100%出遭わない確率など、無きに等しい。

馬車を先に行かせ、本当にブジャタは木に盗賊達を縛り付けた。
啞然と見ているケンイチとユキには気にも留めず、満足そうに頷く。

武器を所持していないか調べ、小型のナイフ等は全て没収した。

「じゃあの、早くて二日後には戻る」

不安そうに盗賊を見ていたケンイチの手を引っ張り、ブジャタは地図を広げながら街道を逸れて森へと足を踏み入れる。

「さあさ、鍾乳洞を目指しますぞ！」

大人しくムーンも続く、四人は慌てふためく盗賊を尻目に、そのまま森へと姿を消した。

「か、可哀想じゃないかな。流石に」

森へ入って数分後、ケンイチが痺れを切らせてそう口にしたが、小さく笑うブジャタ。

「困ですじゃ」

「え？」

「ふむ、この辺りでよいかの？ 盗賊達の様子も窺える、身も潜め易い。さて、どう動くか」

座り込んだブジャタとムーンに、ようやく理解した、別に置き去りにしたわけではないのだ。

本拠地に案内を頼もう、ということなのだろう。

「ただ、昨日の盗賊とは、団が違うかもしれません」

「まあ、そうでなくとも一つの盗賊を壊滅させる事が出来るのならば。今後の商人の行き来にも不安の影を落とさずに済むのお」

やがて、盗賊達の話し声が聴こえてきたので、耳を済ませた。

「チクシヨウ、何だあのクソ爺」

「誰か！ 武器はないのか!？」

「没収された、ねえよ」

「助けに来てくれるのを待つしかねえな、巡回している筈だ」

「しかし、情けない姿だ。見られたくない」

特に情報は吐かない、この盗賊は恐らく白だろう。

小声でどうすべきか相談をしていた、確かにこのまま放置も気の毒である。

大きなタイムロスだが仕方ない、6人を連れてジェノヴァへ戻り警備兵に引き渡す事にした。

「！ しっ」

立ち上がるうとすると、慌ててムーンに引き寄せられた、指した方角に新たな人間が二名。

街道を歩いてきたのだろうか、縛り上げられている6人を見て笑っている。

「無様だな」

一人が嘲り笑えば、6人が一斉に凄んで見る、しかし全く効果がない。

「このままでも気の毒だ、助けてやんよ」

舌打し、ブジャタが立ち上がるが、断末魔によってその場に立ち尽くした。

目の前で、何か球体を翳した現れた二人組み、球体に縛られている盗賊達は吸い込まれたのだ。衣服だけが、その場に残っており、完全に人は消えた。

「よし、思わぬところで吸収できたな、上々だ」

森へと入ってくる二人組み、ケンイチが思わず剣に手をかけるが慌ててそれを制するムーン。

息を押し殺し、必死に二人組みに気づかれないように微動だせず。

「尾行しますぞ」

音をださないように、一定間隔離れて二人組みを追った。

あれが、球体。ケンイチが昨日見た球体とは色が違った、大蛇は出てこなかった、しかし間違はなく”黒”である。

人が、球体に吸い込まれたのだから。

やはり相当な技術者が後方にいるようだ、二人組みは昨日の者達とは顔が違っていた。二人で一組なのだろうか、そういった二人組みが何組も街に存在し犯罪を行っているのだから。

やがて、二人組みは到着した洞窟へと足を踏み入れる。

入っていつてから、四人はそつと茂みから顔を出し、地図を広げた。

間違いない、鍾乳洞の洞窟である。

「なにやら。危ない香りがプンプンいたしますじゃ、準備はよろしいか」

入口前で再確認、深く緊張した面持ちで頷く一同は、そつと中へと進入する。

岩に囲まれた入口、入ってみれば恐ろしく寒かった。ブジャタを先頭に、ケンイチ、ユキ、ムーンと続く。

人一人は余裕で通れる幅だ、しかし二人並ぶのはきつい。

水脈が流れている場所は、仕方なく水に入って進む。あまりの冷たさにユキは悲鳴を上げた。

暫く歩いていくと道が二つに分かれていたので、足跡を見て判断してみる。右のほうが明らかに多かった。しかし、左にも足跡の痕跡がある。

「どう思いますかな？」

「二つとも当たりなのかもしれませんわ、向かったのは右のようですけれど」

屈んでムーンがそう告げる、左の足跡は真新しくない。

しかし、足跡があるということは左にも何かがあるということではないのか。二人組みを追うべきか、左へまずは探索に行くべきか。「左へ、行ってみよう」

ケンイチが静かにそう切り出した、何か考えがあるようだ。ブジヤタは静かに頷き、そのまま左へ足を進める。

数分後、広い場所に出た。箱がその空間に幾つも置いてあり、静かにランプに光が燈っている。

人の気配はない。

「この広さなら、十分敵と戦えそうだ」

ケンイチが大きく伸びをし、剣を引き抜きながら、箱を見つめる。頑丈そうな木の箱だった、特に鍵はかけられていないのであけようと思えばすぐにでも開くだろう。木の蓋がしてあるだけなのだ。

「どれ」

ブジヤタが静かに木の蓋をずらした、何が出てきてもいいように、四人は箱を相手に構える。

特に何も反応はない。

ひょいっ、とムーンが覗き込めば、思わず息を飲む。

「綺麗な珠が幾つも」

「球って、まさか！」

ケンイチが思わず身を乗り出す、箱に手を入れて一つを掴みあげ、目の前で眺めれば。

「あの、球だ」

そう、大蛇を出現させたあの球である。

箱の中は全く同じ色の球ばかりが丁寧な布の上に置かれていた、別の箱も蓋を開けて確認すれば、色違いの球である。

箱の数は全部で6箱、それぞれ違う色の球が入っているが、数はまちまちだった。

「多分、色によって効果が違うんだよね。これは大蛇が出てくる球。さっきの盗賊達を消した球の色が微妙に、こっちのこれかな」

「あと四種類、未知の効果があるのね」

物騒なものだ、早急に始末すべきだった。

しかし、どう扱えばよいのかが解らない、大蛇はこの球を地面に投げつける事で出現していた。

破壊してしまうと、何か起きるのだろうか。

だが、持って街まで戻することは不可能に近い、数が多すぎるし、途中で割れても大変だ。

根源は後で叩くが、今はこれをどうすべきか。

「大蛇なら、四人がかりでどうにか倒せそうだよな」

地道な作業になりそうだが、確かに確実といえば、確実か。四人で真剣に悩んでいた時である。

声が出てきた、球の補充に来たのだろうか。

隠れるところなど、何処にもない。仕方なく四人は入口の左右に二手に別れて、敵を迎え撃つことにする。

声の数はおよそ、二人だ。

二人ならやれるだろう、息を潜め、進入してくるのを待つ。

ケンイチの手の中の剣が、重みを増した気がした。全員の心音が聞こえてくるような、長い静寂の時間。

「さあて、補充補充、つと」

一人が入ってくる、二人目が入ってくる。

「今だ！」

ムーンが杖を地面に深く突き刺した、その音に驚愕の瞳で振り返った二人組みだが、そのまま停止。

影縛りだ、動きを止める魔法である、VS大蛇戦でもムーンが使用していた。硬直している間に二人を縛り上げる、縄はムーンが腰に巻いていたものを使用。

騒がれると困るので、適当にケンイチのマントを切って口に詰め込んでおく。

額の汗を拭いながら、まずは一安心か。

捕らえた二人組みは、先程洞窟へ入っていった二人組みである。

もう、この洞窟には人がいないのだろうか、それとも右へ行けば誰かがいるのか。

ともかく、二人の衣服を丹念に調べ、武器類は当然取り上げておくことを忘れない。

念の為、球も各一種類持つて行く事にした。

影縛りが解けて、暴れ始める二人組みだがブジャタが杖で容赦なく鳩尾を突き刺した。

ぐったりとなった二人を見つめ、気の毒そうにケンイチはブジャタを見つめたが念には念を、だ。

四人は静かに来た道を戻り始める、分岐点に戻ってきた、次は右だ。

何が出るか解らない、誰も居ない事を祈りながらケンイチは進む。やがて明るい光が漏れる場所へと出た、部屋があるのだろうか。静かに歩み寄り、中をそっと覗き込んだブジャタは三人に手招きをし

た。

誰かが、いる。

そこは休憩室なのだろうか、ベッドもあり仮眠が出来るようだ。中央にはテーブルと椅子があった、二人そこに座っている。

ベッドに人は居ないようだ、ムーンが小さく頷いて再び影縛りの魔法を唱える。

低く呻いて硬直する二人、易々と侵入した四人は二人組みを縛り上げるべく縄を捜す。ベッドのシーツを引き裂いて縄にし、二人を先程と同じ様に縛り上げ、今度はベッドの柱に括りつけた。

「ふむ、ここはこやつらの休憩室じゃの。あの球は何処から届くのじゃろうか」

とりあえず、四人を縛り上げたがあの球の手がかりはない。

部屋を漁る、ユキがベッドの下に隠し階段を見つけた。当然、進むべきだろう。

ケンイチが、タンスの引き出しに宝石が大量に入っていることを確認した、盗品だ。

他は隠すというわけでもなく、普通に棚に武器が仕舞われている。もう、この部屋に用はないだろう。四人は慌てふためく二人組みを尻目に、その階段を下りていった。

徐々に空気が冷え込んでくる、震え、マントで身を隠しながら足元に注意をし階段を下りていった。

僅かな光しかないが、ブジャタの発光する杖のお蔭で辛うじて進行方向は見える。

「怪しげな匂いが増しましたな」

苦笑い、隠し階段の向こうこそが本来のこの場所の”価値”を指すだろうことは安易に予測できる。

四人は気を引き締め進んだ、やがて眩い灯りが漏れる到着点へと鼻を覆いたくなる匂いが漂ってきた、何かを……煮ているのだろうか、液体が沸騰する音がする。

一瞬、四人は立ち止まる。互いの顔を見て小さく頷き、皆武器を強く握り締めた。

ブジャタ、ムーン、ユキが詠唱に入る、ケンイチが剣を引き抜き構える。

一斉に、階段から飛び降りて部屋へと侵入した。巨大な鍋の前に人間が……五人立っている。

「な、なんだ貴様ら！」

先手必勝、三人の魔法が合わさりながら突き進む。

風に乗った氷の塊が人間に襲い掛かった、悲鳴を上げて倒れ込む四人、しかし一人だけ、魔法を弾き返してきた。舌打ちするブジャタ。

瞬時に悟った、流石にケンイチとユキにも解る『あれが、親玉だ』と。

気合の掛け声、ケンイチが斬り込む。

ムーンがケンイチに防御の魔法を、ユキとブジャタが他の敵に魔法を再度食らわし援護出来ない様にさせた。

黒いマントを深く被り、その魔法を弾いた人物は自身も剣を引き抜きケンイチの攻撃を受け止める。

フードがはずれ、顔が露になった。

まだ若い男だった、三十台前半だろうか。

ムーンが影縛りを唱えるが、ケンイチの攻撃を防ぎながら、片手でムーンの魔法を弾き返す。

思わず啞然、想像以上に強そうだ。舌打ち、ケンイチが後方に下がるとブジャタ、ムーン、ユキが集合する。

「危険な球を作っている場所、で良いのかな」

ケンイチの問い、鋭く睨みながら剣の構えをとくことなく、威嚇。
あっさりと、敵は答えた。

「ああ。そうだが何か用か」

左頬に大きな傷、首をコキコキと鳴らしながらマントを翻し、金
髪の体格良い男は四人を睨み返してくる。

無垢の静炎くケンイチ

視線を男から外さずに、ムーンとブジャタが詠唱を開始した。ユキも精一杯敵を睨みつけながら、詠唱を始めているが二人程上手くはいかない。

鍋が吹き零れそうになりながら沸騰している、怪しい光が時折漏れ、男の背後が後光によって曝け出された。

これまでにない妙な重圧感だった、流石にブジャタとて冷や汗を出した。

ただの高等な魔術師だとばかり思っていたが体格からしても屈強であった、先程の身のこなしといい武術も嗜んでいるのだろうか。

厄介だ。

「目的は何ですか？」

ジリジリと、間合いを詰めながらケンイチが問う。

顔色変えず、淡々と男は意外にも答えてくれた。

「別に。頼まれたから製作しているだけだが。目的は依頼者に聞いてくれ、俺は雇われただけだからな」

「止めてください、とお願ひしたら止めてくれますか？」

「それは断る、金が必要なんだ」

「でも、それを作っていると罪のない人達が苦しむし、殺されたりもするんです」

「俺の知ったことではないな。しかし。まさか、子供に老人がここへ来るとは思わなかった」

右手で剣を構え、四人を瞳を細めて見つめながら男はそれでも表情変えずに。

「他言無用。約束するならば生きてこのまま帰そう、立ち去ると良い。が、そうでないのならば鍋に放り込む」

「どちらも断る！」

「そうか」

言い終わらないうちに突進する男、舌打しブジャタが杖を振り上げる。

「ムーン殿、ユキ殿！ 続けい！」

氷塊を男に向けて飛ばすブジャタ、ムーンとユキも風の魔法で勢いを増すように連続で追撃する。

男は右手を前に差し出した、瞬時に炎の壁が出現し氷塊を相殺、魔法を楯代わりにして突き進む。

両手で剣を構えたケンイチ、右足に力を籠めて振り下ろされた剣を渾身の一撃で受け止めた。

「う、わっ」

想像以上に重い、両手が一気に痺れたが、歯を食いしばりながら辛うじて持ちこたえた。だが、追撃されればケンイチは逃れられないだろう、そんな余裕は残されていない。

男を囲むように瞬時にムーンとブジャタが左右に立つ、同時に氷の魔法を再度唱え注意を魔法へと向かせた。その隙にユキがケンイチの後方で回復の魔法の詠唱に入り始める、万が一に備えてだった。飛んで来た氷塊、流石に左右から来ては逃れられないと判断したのか、剣を仕舞うと後方へと飛躍し逃れる。

二つの氷塊はケンイチの目の前で激突した、目を瞑り地面に転がって辛うじて余波から逃れるケンイチにユキが回復魔法をかける。

連携は、完璧だがこの四人では敵の打撃に耐えられない。

「教えてください、あの球。破壊する手段はありますか？」

ムーンが杖の矛先を敵に向ける、直ぐにでも次の魔法の発動が可能だ。

「ある」

「教えてくださいまし」

「断る」

「でしょうね。そこまで、貴方には悪意を感じませんから少々やり難いのですが」

「甘いな、レディ」

あまりにも、冷静なその男。

そして全力でかかれば自分達など、あっさりとねじ伏せられるような力量の持ち主である気がしてならない。どことなく気品も薄っすらとだが、持ちえている気もする。

予想外だった、瞳には何か決意を宿している。とてもあの盗賊達と同じ一味とは、信じがたい。

「私はムーンと申しますわ。何故、お金が必要なのですか？ お金が欲しくて依頼を受け、こうして球を作っているのでしょうか？」

「黙秘させていたどうか、ムーン。私は”バリイ”」

本名ではないかもしれないが、名を覚えてくれた男・バリイ。

「貴方ほどの腕前ならば、傭兵でも護衛でも難なくこなせるでしょう？ 何故この道を」

「巨額の金がある、それだけだ」

「いくらかの？ そちが製作を止めてくれるのであれば、儂が支払おう」

ムーンとバリイの会話に横からブジャタが口を挟んだ、はったりも良いところだった、巨額など持ち合わせていない。けれども、ブジャタには自信があった。

「市民が払える金額ではない」

「言ってみな、解らんじゃろ？ 何かに必要な金なんじゃろうなあ、そち自身はうるついていた盗賊達とは違い、質素な生活で十分そうじゃ」

「何処かの貴族か国王レベルでないと、不可能な額だ」

ブジャタをつま先から頭まで見つめ、バリイはそう小さく零した、到底高貴な人物には見えなかったのだろう。

衣服とて確かに丈夫そうだが特に高価な布ではない、確かに平民よりかは上の人物には思えたが。

しかし、それにブジャタは満足そうに頷いている、低く笑った。

「名はブジャタ。現ディアス市長直々の参謀兼指導係りじゃが……不満はあるかの？ 条件次第ではそちの言い値を払おうぞ」
「ディアス市長!？」

声を張り上げるバリイの様子でディアスという街があることを知ったケンイチ達だが、ブジャタがそこのお偉い様だともいうのだろうか。

はったりではないのか非常に不安を感じるムーンであったが、気にも留めずブジャタの口から次々に衝撃的な言葉が飛び出る。

「ディアスでは、近年増える魔物や魔族から大切な市民を護るべく、

屈強な戦士を募集しておるのじゃ。ただ単に強いだけではなく、賢く、品行良い戦士を、な？

そち、相当な腕前の魔法戦士と見たが、どうじゃ。今現在の研究を全て放棄し、ディアスへ来てみては？ もしくはその球、回復系にはならんのかのお。

その研究ならば許可を出そう、広まっているやもしれぬ球の回収にもそちが必要になると思われ」

「ディアス」

混乱気味に頭を押さえるバリイ、ブジャタの言葉に相当揺れているようだった。

ムーンは思った、バリイは金さえあればこんなことはしない人物であるに違いない、と。

何度か口を開きかけてはまた紡ぎ、相当困惑しているバリイに、ブジャタは追い討ちをかける。

「いくらじゃ、そろそろ話されよバリイ殿。そちほどの者が金が必要理由はなんじゃ。家族か、恋人か」

語尾を強めたブジャタ、ビクリ、とバリイの顔色が変わり唇を噛み締める。非常に解り易い、どちらかが原因なのだろう。

「気持ちには、有難い。そして正直甘い誘惑で条件を飲みたいのも確かだ。だが、断る」

「何故じゃ」

「組織から抜けられるとは思えない。組織にはあの球が必要なのだ」
「ふむ」

やはり、組織。

髭を撫でながら組織という言葉にブジャタは目を細めた、鍋に視

線を移す。

「ここを壊滅させようかの、ともかく。そちはここで鍋を護って死んだことにしておくのじゃ、家族か恋人の為にここまで手を汚しても、それを知った人は悲しむと思うがお。その球のせいで、昨日は死者とて出ておる」

息を飲みながらやり取りに聞き入る三人、確かに目の前の人物とは戦いたくない気持ちがあるので、祈る思いでバリイを見つめている。どうしても、彼が悪人に見えなかった。

「……母と妹が病気なのだ、治療費が必要だ。父は同じ病気で他界している」

「ふむ、薬を買う金が必要のじゃな？　どんな病気じゃ？」

「全身に発疹が出て、高熱が下がらない。半年が経過している」「はんと、し？」

悲痛に顔を歪め、手で覆い隠しながらバリイは続けた。

「死の30日、と呼ばれる病気だ。30日間苦しみ抜いて死んでしまふ。しかし、高額な薬さえあれば30日を突破し、生きながらえる」

眉を潜めるムーン、”死の30日”という名がついているのに、生きながらえるとは妙ではないのか。

どうにもそこが引っかかって仕方がない、ブジャタも同意だ。

「母上と妹君はどちらに？　自宅か、病院か？」

「組織が用意してくれた病院に居る、定期的に病状報告がここへ届けられる」

つまり、半年以上二人にバリエは会っていないのだろう。

胸騒ぎがしてきた、本当にその二人、生きているのだろうか？

静まり返ったその場、ケンイチとユキも不安そうに互いに顔を見合わせる、思うことは皆一緒だった。

「そのような病名、知らぬ。地方によって呼び名が違うのかもしれないが。バリエ殿の故郷では有名な病気かね？」

「一年ほど前から、稀に村の人々が高熱のあげく、死んでしまう事態が起き始めた。街から有名な医師を呼び、診察してもらったが事例がないとのこと。村中の金を集め、様々な医師を招いたらばようやく古い文献にその記載を見つけた医師が現れたのだ。」

そうこうしている間に村中で発病が始まった、俺も薬を毎晩飲んでいる次第だ。大勢死んだ、生きている者達を救う為に皆で金を稼ぐことにし、地方に散らばったのだ。

俺を含めて、4人だがな健康体は」

社会の教科書を瞬時に思い出し、ユキは瞳を閉じた。

思い描くのは現代、地方の奇病と言えば地球、日本にも存在する。工場排水が原因の病気が幾つか思い浮かんだ、医学ならば地球のほう当然発達しているだろう。

あれらの原因は水を媒介にして、もしくは食料から体内へと有害物質が取り込まれたから、である。

「あ、あの。バリエさんの故郷にはその、ええと。鉱山があったりとかします？ もしくは急激に増えた生物がいませんでした？」

控え目にユキが問う、不思議そうにブジャタはユキを見ているが一旦自分は下がる事にした。

「面白い事を言う子供だ。特にはない、普通の村だ」

「何も無いのに、突然病気が流行り始めたんですか？」

「ああ、そうだ。村の古文書を皆で読み漁ったが、それらしい記述は出てこなかった。前例がない。」

医師が持ってきた文献では、その病気によって一つの村が死滅したことが書かれていた」

ユキは腕を組んだ、社会の教科書を思い出すのだ。

「病気って、何かが運ぶものなんです。例えば汚れたネズミが病原菌を撒き散らす。……そうですね、動物が菌を運ぶ事が一番多いかもしれません。」

もしくは汚れた水を飲んだり、その水に住むお魚とかを食べたりして菌を体内に入れる場合もあります」

「……何が言いたい」

「それ。本当に病気ですか？」

ユキの結論、ケンイチも同意。そして聞いていたムーン、ブジヤタも結論は同じだったのだ。

「何者かが、バリエイ殿の腕を買って村中に菌を撒き散らしたのではないか、ということじゃ。これを作らせるためだけに、の。大規模な人質じゃて」

静寂、バリエイの顔色が変化する。

「問いますぞ。バリエイ殿含め、4人の無事な方々は年齢は？」

「年齢と言われても。バラバラだ」

「皆、バリエイ殿と同じ様に屈強な体力に自信がある方々ですかの？」

「いや、病気がちな神父に、肥えた村長、その奥方、そして俺だ」

真つ先に感染しても良さそうな神父が無事な時点で、妙だった。

「止めじゃ、バリイ殿。あなたは早急に母上と妹君の下へ戻るべきじゃ。場所は解るのじゃろう？」

「遠い」

「何処じゃ？」

「シポラ近辺だ、船がないと渡れない」

地名を聞いた瞬間に弾かれたように叫ぶ四人、気迫にバリイが一步後ずさる。

「まずい！ 畏だ！」

「バリイ殿、シポラは現在妙な邪教徒で溢れておる本拠地ですぞ！
？ かう、ここでこう繋がったか！」

ムーンがバリイに駆け寄る、引き攣った手を強引に掴んで引つ張ると簡単に説明を始めた。

聞きながら身体を震わすバリイ、訝しげに最初聴いていたが必死な四人が嘘をついているとは思えない。

「推定じゃが、バリイ殿の腕を見込んでその力量欲しさに何者かが糸を張り巡らせたのじゃ。情に厚いバリイ殿の性格を見越して、徐々に身体を蝕む菌を村に撒き散らす、じゃが一部は残しておく。

村を救おうと躍起になっているところへ、さも治すべく現れた医師ならば・・・簡単に騙せるじゃろう。バリイ殿、一年以上前にそち、何処かでその腕を見せんかったか？」

「村から出た事はない、しかし。……二年ほど前か、数人の旅人が来て魔物から護ったことがあったな。元々、自給自足の村だから何でも出来るように躡けられている。父が剣に優れた人で母が術師だ」

「サラブレッドなんだ」

ここまでくれば話は簡単だ、シポラを目指している別の仲間がいることを告げ、合流すべく四人とバリイは立ち上がった。

「あの球、世界に普及しているの？」

「恐らくは」

「破壊方法は！？」

「聖水に漬け込めば」

「ともかく、今ある球だけでも破壊しよう！」

「あの鍋の破壊が先決じゃ！ 液体の中身は何じゃ？」

「解らない。用意されていた。追加で生きた人間が必要だ」

言いにくそうに言葉を吐いたバリイ、一瞬沈黙が訪れる。

絶句。

ユキが眩暈を起しそうになり、ケンイチに背を庇われた。

「まさか、さっき球に吸い込まれた盗賊は、その、材料？」

顔面蒼白でケンイチもユキの隣で唾然と眩く、唇を噛み締めバリイが小さく頷いた。先程の盗賊はあの鍋の中、ということか。

「禁呪に近いですぞ！ やはり贄が必要だったのじゃな。ともかく、皆であの鍋を壊すのじゃ！」

液体の中身が不明だった、術師三人が前に出て一斉に手持ちの魔法で最も強力なものを発動する。

剣で叩き割ったほうが早そうだが、噴出してきた液体で怪我をしかねない。頑丈な鍋に渾身の魔法を喰らわせた、数回続けようやく罫が入る。

ケンイチはバリイから他の情報を引き出すことにした、バリイと

てこちら側についたのだ簡単だった。

「六種ある球。一つは大蛇を出現させ、一つは人間捕獲？ の効果かな。残りは？」

「人間十人に対して、一つの球が完成する。」

琥珀色が大蛇、あれは最後に生きた蛇を大量に鍋に投げ込んで製作可能になる。

瑠璃色が吸収、お前達が見た吸い込まれた盗賊はその球のせいだろう。これが最も難解な製作だ。

珊瑚色が大鷲、萌黄色が触手、群青色が死人、漆黒が毒霧だ」

物騒なものばかりだった、「冗談じゃないよ！」ケンイチが声を張り上げる。

しかし、バリイは責められなかった、彼は必死だったのだ。確かに間違った選択だろう、村を救う為に他の人を犠牲にして良いわけではないのだ。

「他にも近くに鍾乳洞がありますよね？ そこにも何かあるんですか？」

「知らされていないので答えられない、悪い」

他の場所も念の為調査に行くべきだろう、目の前で崩壊する鍋を見つめてケンイチは決意した。

しかし、シポラ。あまりにも行動範囲が広く、愚劣だ。

球を与えられている盗賊も、上手い話があるからと引き込まれただけで組織とは関係のないただの荒れくれ者達だろう。

鍋から幾つもの人骨が出てきた、思わずユキが胃の中ものを吐き出した、ムーンに介抱され歩き出す。

ムーンとブジャタが成仏出来るように、と犠牲になった人々へ経を唱えているのをバリイも申し訳なさそうに見つめている。

粘着ある零れた液体が恐ろしくて、流れてこちらへ向かってくる前に階段を駆け上がった。

床に伸びている四人の盗賊を縛り上げて、当然連れ出す。縛り上げておいた盗賊二人を引き摺り、宝石を回収し。

別の部屋へ移動し、伸びている盗賊二人を更に回収し。

球を全部持ち出す、よほどの衝撃を与えない限りは球は発動しないと聞いたので少し気が楽になった。聖水など所持しているわけではない、ジエノヴァの街へ戻りさえすれば、教会に聖水があるからと必死を目指す。

だが、盗賊計8人を引き摺ってでは非常に時間がかかった。バリエイが縄を掴んで先頭に立って歩くのだが、当然上手く盗賊達は歩いてくれない。

すでに時刻は夕暮れだ、夜中までには戻りたいところだった。

「そういえば、ブジャタさん。ええと、市長に仕えているってあれは、ホント？」

ずっと気がかりだったことをケンイチはブジャタに耳打ちした、ホラなのか気になっていたのだ。

苦笑いで咳を一つ、ブジャタは「本当じゃよ」と付け加える。

「アリナ様は市長の娘じゃ」

「え」

「これも本当のことじゃよ」

まあその話は落ち着いてからで、ブジャタはそう言うのと硬直しているケンイチの背を軽く叩く。

だから”お嬢”と呼ばれていたのだ、納得した。

黙々と歩き一時間以上が経過、馬車が通りかかってくれ始める事を期待したが未だに通らない。夏とはいえ、周囲が暗くなり始めた頃、

空腹で手持ちのビスケットを食べながら歩いていた。
不意にバリイが停止し、周囲を窺っている。

「何か居る」

剣を引き抜いた、ケンイチも同様に構えに入る。

松明に火をつけて周囲を照らせば、泣き声が聴こえてきた。女の
声だった、シクシク、泣いている。

「こ、怖い」

思わずユキがケンイチにしがみ付く、こんな時間にこんな場所で
泣いている女。何者だろうか。

どちらで泣いているのか分からなくなった、盗賊達も怯えている。
ぼんやりと、前方に蹲っている女の姿を発見、バリイが近寄ろう
としたがブジャタが制する。

美しい長い髪だ、一人きりで街道の隅に蹲っている時点で普通の
娘とは思えない。裸足で、灰色の長い衣服を身に纏っている。

「人間には思えぬの、危害を加えてこないのであればこのまま通り
過ぎましようぞ」

不本意だがブジャタの一言で息を殺しながら隣を通過する、近寄
れば手足は木の棒のようにがさついて細かった。森で命を落とした
娘の幽霊かもしれない、とブジャタは思ったのだ。

震えながらケンイチと共に歩くユキ、見ないように瞳をきつく瞑
っている。

何事もなく通過し、皆で胸を撫で下ろしたのも束の間、前方にま
た泣き声だ。

また、同じ女が蹲り泣いている。

「まずいのお」

流石にブジャタが杖を掲げた、どうも無事に通す気はないようだ。ならば先手必勝か、無駄な戦闘は避けたいのだが。

泣き声が大きくなる、聞いているだけで物悲しく、死者を哀れむ嘆きの歌にも聴こえてくる。

恐怖のあまり盗賊が暴れ出した、止めようとしたバリイ。だがその拍子に宝石が入った袋を、背から滑らせて地面にぶちまけてしまった。

慌てて仕舞うべく松明を掲げたが。

「な」

一つの宝石を手に取り、松明に照らして眺めている。

女の泣き声は更に高音に、思わず耳を塞ぐ一同、盗賊は縛られているのでそのまま聞いているが二人が恐怖で失神した。

「妹の……指輪だ」

バリイが呟く。

病気が治るように、魔よけの意味を籠めて有り金はたいて妹に購入してあげた水晶の指輪、内側に『妹へ』と彫つてあるのだ、間違いない。

答えは出ているのだが考えたくなくて、バリイはその場に座り込んで指輪を見ていた。

ブジャタが首を横に振る、予測はしていたことだ。妹、母親、村の住人。すべてあの鍋の中だったのだろう。

カワイソウ、カワイソウ、カワイソウ……嘆キノ歌ヲ歌イマシヨ

ウー

蹲っていた女が立ち上がりこちらを向く、皮と骨だけの老婆のようだった、しかし髪だけは本当に美しい。

「むう、バンシーじゃ！ 人の死を予測して現れる不吉な魔物じゃよ」

盗賊達の叫び声、見れば周囲をバンシーに囲まれている、何人いるのだろうか。

「こ、こわー！」
「い、いやああああ」

流石にケンイチとユキも恐怖に慄いた、冷静なのはムーンとブリヤタだ、バリイは呆けてしまっている。

イザナイマシヨウ、イザナイマシヨウ、死後ノ世界八楽シイヨ

合唱を始めたバンシー達に魔法を繰り出す、吹き飛ばされるが痛みを感じていないのか何度も立ち上がっては近寄ってきた。

「くー！ 光属性の魔法さえあればっ」

人の死を感知し、前もって現れて嘆くというバンシー。ここに姿を現したということは、誰かが死ぬという事なのだろうか？

不吉な思いにブリヤタは首を振って大声で魔法を繰り出した、攻撃はしてこないのかもしれないが何分気味が悪すぎる。

アサギが以前使用した、あの光の魔法さえあれば、戦闘を終わらせることが出来るのに。もしくは、死者を埋葬する火炎の魔法があ

れば。しかし、扱える魔法使いは今、呆けてしまっていた。

「しっかりされよ、バリイ殿！ まだ死が決まったわけではござらん」

バリイを揺するが、反応がない。

「やあ！」

剣で斬りかかるケンイチだが、目の前でバンシーを凝視すると背筋が凍りつき、上手く剣が震えない。おまけに、ケンイチの剣だが先程バリイとの戦闘で罫が入ったのだらう。

折れた。

舌打し、ムーンから護身用の短剣を受け取ったが接近戦に持ち込まないとバンシーを斬れない。盗賊達は恐怖で全員失神した、ある意味そちらのほうが幸せかもしれない。

「おおおおおおお！」

バリイの遠吠え、怒気を含んだ絶叫が響き渡る。

立ち上がると近くに居たバンシーを殴り飛ばした、怒りを露に我を失っているのだ。

「巡る鼓動、照らす紅き火、闇夜を切り裂き、灼熱の炎を絶える事無く。我の敵は目の前に、奈落の業火を呼び起こせ！」

火炎の魔法だ、全てを燃やし尽くす勢いである。それは良いのだが、バリイの正気を取り戻さないと先には進めないだらう。

「しつかりされよ、バリイ殿！」

ブジャタの声も届かない、剣を大きく振り上げて鬼神のごとく斬りかかっている。

気休めに言ってみたが99%妹は死んでいるのだろう、気持ちは良く解る。生きていると信じて、救いたいが為に悪事を働いてきたのだが無意味だったのだ。

泣きながら剣を振るい、猛然と突き進むバリイ、誰も止められない。止められるわけがない。

その日。

ジェノヴァの街で高い位置から一部の人々は見た。光を放つ美しい巨大な鳥が、森の中に舞い降り、暫くして飛び去った姿を。

ケンイチ達がそれに気づいた時には鳥は急接近していた、発光する巨大な鳥、近くに来て解ったが発光というよりも電気を帯びているのだ。

それは鋭く泣き叫ぶとバリイの心臓目掛けて嘴を突き出す、突き飛ばそうとケンイチは駆け出したが目の前で鳥にバリイは……貫かれた。

「真実さえ知らねば。死なずに済んだものを」

ケンイチの目の前で、深紅の血が吹き出した。口から、心臓から、吹き出して地面に飛び散った。啞然と光景を見ていたケンイチだが、それ以上動く事が出来ない。

若い男の声も耳に入ったが、姿を探すことが出来ず。ムーンが唇を噛締め見れば、鳥に一人の男が跨っていた。

強烈な威圧感だ、ブジャタが気迫で押し返そうと魔力を全身に纏うが、相手のほうが上だったようだ。

鮮血したたるバリイから嘴を引く抜き、鳥と男はそのまま舞い上がる。

ユキとムーンが風の魔法で追ったが、羽ばたき一つで魔法を掻き消してしまった。

「さ、サンダーバード！」

ブジャタの引き攣った声、瞬時に結界を張り巡らせる、皆で一塊になった。動けなかったケンイチを、ムーンが結界の中に押し込む。間一髪で舞い上がった鳥・サンダーバードから、一気に雷が降り注いできた。

羽ばたくほど、雷は強力に何本も地へと落下する。

悲鳴を上げながらユキもムーンに身を寄せて懸命に魔力を結界へと送る、ブジャタを中心にその攻撃を耐えるべく。

バンシー達は雷に打たれながら泣いていた、死に行く定めは……バリイか。

やがてサンダーバードが去り、限界でその場に倒れたブジャタ。

ムーンは必死にバリイに回復魔法を施す。

薬草を使い、手当てを開始するが、無理だろう。虫の息だった。

うつすらと開いている瞳、微かに唇が動いたのでケンイチは慌てて近寄った。

「おま、えに、け、けんを」

「剣！？ バリイさんの剣！？」

「すまな、かった、な」

「しっかりしなよ！ 妹さんたち探しに一緒に行こうよ！ 駄目だよ、剣も教えてもらいたいんだ！」

「わかるか、た」

「喋らないで！ ムーンとユキが治してくれるから、頑張ってよ！」

「ありが、と、う」

微かに笑った気がした、ケンイチの目の前でバリイは、そのまま静かに息を引き取る。

絶叫が周囲に響き渡った、人の死を間近で初めて見た。身体中の痙攣が止まらない、ケンイチは大声で叫び通した。

これが、この世界。

地球ならば、余程の事がない限り目の前で死など見ることがないのに。

言葉をかけず、ムーンは生存者の回復に専念している。

自分とて火傷を負っていたが、盗賊達の半分はまだ息があったのでそちらに専念した。

ブジャタは辛うじて起き上がり、自身で杖と薬草で手当てを。

ユキは放心状態で、動けなかった。

「許さない！ 許さないぞ！」

ケンイチはバリイの剣を拾い上げる、重みで腕が軋んだが鞘も受け取り背中に装着した。

剣を掲げる、月の光で剣が露になった。何か文字が彫つてあるようだ。

ケンイチは知らなかったが、バリイの所持していた剣、後に発覚することになる。

” 霊剣・火鳥 ”

火炎属性の剣であり、火の鳥を出現させられる代物だった。バリイの家に先祖代々伝わってきた、一種の埋もれた神器でもある。

バリイの胸元からペンダントが零れ落ちたので、形見にケンイチは装備した。名前が彫つてあった、ブジャタが読んでくれた。

家族の名前だろう、思わずケンイチはペンダントを握り締めて大粒の涙を零しながら空を仰ぐ。

森に、バリイと名も無き盗賊四人を埋葬することになった。周囲

は暗かったが、松明を何個も集めて霊気のある木々を探し、火葬する。

ユキが花を手折ってそこに投げ込み、ムーンが故郷の歌を歌う。生き残っていた盗賊達もはや逃げる気すらないようで、大人しくしていた。

火で魔物を遠ざけ、その場で野宿し、当然疲れがとれないまま、ジエノヴァへと帰還する。

死の、重み。

胸に秘めて、ケンイチはバリイから授かった剣を使いこなす決意をした。まだ重過ぎる大剣だ、ケンイチの背丈ほどである。

死を無駄にしないように、街へ着くなり休息もせず役所にお目通りを願った。

ユキとケンイチは休むように、とブジャタに言われたが、ユキだけ宿に寝かせてケンイチは付き添った。盗賊を引き渡し、鍾乳洞に隠れ家が存在したこと、他も調べてみるべきだと助言。

おそらく、存在しないだろうが。既に破壊されていそうだった。球はブジャタの発案で報告しなかった、悪用されない保障がなかったのである。

ひっそりと、神父に誘われた教会裏の聖水が湧き出ている泉に球を漬け込む。

神父とブジャタが浄化の魔法を、ムーンが鎮魂歌を歌い続ける。不思議な事に、その球は本当に聖水で浄化され、掻き消えた。聖水が汚染されていないか不安だったが、浄化能力が勝ったようだ影響は無い。

胸を撫で下ろし、三人はようやく張り詰めていた緊張の糸を解いて笑った。

「一先ず、本日は身体を休めましょうぞ」

ブジャタに大きく同意した二人、宿に戻ればユキが眠っているだろう。

昼食を取る為適当に屋台で食べ物を買う、ユキの好物を知らないケンイチは適当に選んだ。

無難にサンドイツチだ、ノックしユキに手渡すと、ケンイチはブジャタと共に部屋に戻る。

温泉に浸かれるこの宿、しかしケンイチはそんな気力も残っておらずに床に転がるとそのまま眠りに入った。苦笑いでブジャタが軽くタオルをかける、ブジャタは温泉に一人で出向き始終考えていた。仮眠を取り、夕刻に起床して故郷のディアスに手紙を書く事、明日はマダーニと出向いた店へ再度行って見る事。

他の鍾乳洞には手がかりも痕跡もないと踏み、出向くのは中止にした、後は警備に任せるのだ。

万が一、探索に向かった警備兵が戻らなかつたら。……出向くとして。

思いの外一気に問題が山積みだ、そしてユキやケンイチに教育も施したい。

シポラへ向かっているアリナヤクラフトが心配になってきた、不穏な動きがこつも集中して起こるとは。

ブジャタは、夕食もとらずにその後眠り続けた、結局温泉に長いこと浸かっていたので出てからすぐに手紙を書きとめて郵送を頼みに街へと出たので、疲労で夕刻に眠ったきり。

ケンイチが入れ替わるように目を覚ました、寝ぼけて温泉へ行きようやく目覚める。

眠っていただけが空腹だ、ムーンとユキは十分睡眠を取ったらしく起きており、宿の夕食を三人で頂く事にする。

流石に口数も少なく、ユキはほとんど残していた。空腹だが、胃が受け付けないらしい。

「駄目だ、食べないと」

必死に元気付けようと話しかけ、食事を皿に取り分けてくれるケンイチを眺めているユキ。

実際ムーンも食欲がなかったのだが、ユキの為にも自分が率先して食べねば、と無理やり胃に押し込んでいた。随分と長い時間をかけて夕食をとり、その後紅茶で一息を入れる。

塞ぎこんでいるユキに、見かねてムーンが声をかけた。

「まだ明るいしお散歩してきたらどうかしら？ 私は少し調べものをしてくるから、ほら、近くに公園があつたでしょう？」

ケンイチに視線を投げかけた、ユキを誘ってくれ、という意味合いらしい。強引にユキの腕を掴んで、手を振って宿を出る。

ムーンが小さく手を振っていた、自分も立ち上がるとそのまま宿の主人に図書館の場所を確認してそこへ向かう。字が読めないのが致命的だが、勤勉が得意なムーンだ、この機に字を覚える気だった。

ケンイチに腕を捕まれて、渋谷公園へ来たユキはブランコを見つけたのでそこに座り込んだ。

「怖かったね」

「そうだね」

「帰りたいね」

「帰りたいけど、帰らない。バリイさんの敵を討つんだ。アサギだつて救わないと」

「でも、怖い」

「僕だつて怖い、けど、やらなきゃいけない」

「ケンイチは、強いんだね」

「そんなことはないよ」

夕焼けを見ながら、二人はぼそぼそ、と会話をしている。
子供達を迎えに来た母親の姿が目立ち始めた、黙ってそれを眺める。何処の世界でも、子供は大事だ。懐かしい光景に、目頭が熱くなる。

「正直、もつと楽だと思ってたの」

「うん、僕もだよ」

「でも、でもっ！ 人が、死んでっ！」

「うん」

泣き出したユキ、ケンイチはそつと頭を撫でた。怖いに違いない、自分だって怖いからだ。

何も語らずに、ずつとケンイチユキの頭を撫でている。こうするしか、思いつかなかった。だがそれは、ユキをとても安心させていたのだ。

どのくらい泣いていたのか、周囲は暗く、星も幾多も顔を出していた。

二人は静かにブランコから離れて、手を繋いで宿へ戻る。その手が、ユキにはとてもありがたかった。

「一緒に、頑張ろうよ」

小声だがそう言ったケンイチに思わずユキは大きく頷いて、赤く腫れた目を擦って鼻をすすする。

ありがとう……小さくユキは囁いた、それはケンイチには届かなかったが、満足だ。

宿に戻り、再び眠りにつく。

明日からも、頑張ろう。

互いの存在で、重荷が軽減したような気がしていたユキとケンイチ。

四人が安堵し、眠っている時に街では事件が起きていたのだが。

翌朝、四人は居酒屋”最後の夢”へと足を進めていた。

マダーニが話をしてくれている筈だから、情報を聞く為に早朝でも入れてもらえる筈なのだ。だが、店は静まり返っている、呼んでも誰も出てこない。

不審に思ったが、こういう日もあるだろうと踵を返した時だ。

「マダーニの知り合いの！」

歩いてきたのは店の店主、四人を見るなりいきなり店へと引きずり込んだ。その焦燥ぶりに眉を潜める四人、いきなり不安である。

「ザークが。昨晚殺害されました」

突拍子も無いいきなりの発言に四人は言葉を失う、店の奥へ押し込まれて声を潜めてそう告げた店主。呆気にとられてしまった。そんなことを聞きにここへきたわけではない。

「気晴らしに、出掛けると言い残し。闇に紛れてザークは街へ出たのですが。今、死体を確認してきたところです。戻らないので不安でしてね、そうしたらば警察が死体を見つけて身元の調査を急いでいる、と朝近所で耳にしました。」

野次馬に紛れて観に行けば、その。川に浮かんでいたそうで、ザークの死体が転がっており」

「酔って溺死した可能性は？」

「その線で警察は調査しているそうですが、違うと思います」

主人の顔色には疲労が浮かび上がっている、根拠は無いが、確信

に近い気がする、と。

確かに、他殺のほうの可能性が高いだろう。

ブジャタは洞窟内でのことを一部始終店主に話した、何を聞いても驚かない、と言っただけだが流石に動揺している。

「シポラ関連の人物が、同日に二人死んでおる。偶然とは思えんのお」

ブジャタの低く呟いた声に、皆が同意した。不気味だった。何も解決していないどころか、問題が増えてしまった。

結局真相はわからぬまま、数日が経過。

情報を探りに、檻に入れられたあの盗賊達のもとへと出向いたが、ここでも更に驚愕である。なんと牢内で皆死んでいたらしいのだ、すでに、誰一人生きては居なかった。牢屋には、盗みを働いた哀れな女が入っており、四人にすぎるとなると視線を送ってきた。

あの日に、盗賊達も死んだ。ザークが死体となった日に、死んでいた。

「口封じ。関わったもの全てを抹殺、か」

決まりだ、敵にはこちらの行動が見えているとしか思えない。

考えすぎかもしれないが、あまりにも順調にシポラの事が解つて来たので畏ではないかとも勘繰りたくなかった。

数週間後、宿に一通の手紙が届いた。

それはアリナ達からで、トビイがドラゴンに乗ってアサギの救出に向かったこと、自分達がドウルモに到着したことが書かれている。

その間、ケンイチ達は街の道場に出向き剣の訓練を、魔法の練習を。

例の鍾乳洞は何も見つからず、あの鍋があつた場所の入口は何者かによつて封鎖されていた。土砂崩れを起し、内部に侵入が不可能とのことである。

四人は、大人しく皆の帰りを待ち侘びる。

皆に再会する暇で、互いの能力を伸ばすために懸命に訓練を欠かさなかつた。

ムーンに字の勉強をブジャタは教える中で、ディアスへと何度も手紙を飛ばし、経費を受け取る。ケンイチの育成の為に、多額の金で毎日道場へ行かせていた。

不穏な場所、飛び交う噂、真実は（前書き）

おはようございます。

今回から船のメンバーに戻ります。

不穏な場所、飛び交う噂、真実は

船旅を続けていたアリナ達、トビイが不在で皆の意気も消沈したのは確かだが進んで戦闘訓練を行う者は増えた。

日々生き甲斐を無くし、頬に手を乗せて甲板で水面を眺めているアリナ。その真横ではサマルトとダイキが剣を交えているが、瞳の端に映しているだけ。全く血肉踊らない、つまらない。

「ひ・ま」

ぼそ、っと小声で呟くとアリナはそのまま倒れ込むように仰向けになると瞳を閉じて眠りに入る。

「おい、アリナ。指導してくれよ」

「めんどい」

「オレ達だって、力を付けたらアリナと互角になるかもしれないだろ！？ 育てようとかしないわけ？」

「ならない。やるだけ無駄」

ごろ、と甲板を左右に転がりながらアリナは再び昼寝に入った。

あれから、魔物には出くわしていないので、それも更にアリナの退屈さに拍車をかけている。

無事に航海が進んでいるので、非常に有難い事なのだが。アリナ的には退屈がこの上ない敵だった。

実際、ダイキとサマルトも自分達がどう成長したのか実戦で試してみたくて、魔物の登場を待ち侘びていたりする。そのくせ、適当に弱い敵を望んでいるから性質が悪い。

ダイキとサマルトは一向に指導してくれないアリナに大きな溜息を吐くと、肩を落として二人で再び黙々と剣を交える。

当然真剣ではなく、木刀で打ち合っていた。

途中、小さな島に立ち寄り水や食料などを供給したが、旅は順調だ。

ダイキは魔法はサマルトに教わった、故に、サマルトの得意な火炎の呪文ばかりを身につけていく。

「まあ、生き物は火に弱いから、火炎の魔法で結構有利に運べると思うぜ」

にかつ、と笑って甲板から海へ向けて火炎の魔法を放ち続ける二人。

それは主に夜行われた、というのも、明るさで船の航路を測った子供達を喜ばせたりとそんな理由である。そして何より空気がその付近だけでも、僅かに暖かくなるからだ。

満天の星空の下、光り輝く月の光を浴びながら懸命にダイキは魔法を会得している。火炎の魔法ならある程度使いこなすまでに至った、剣の腕も上がっただろう。

船の寝心地の悪いベッドにもなれた、質素な食事にも慣れた。

「アサギは、無事かな」

一人、呟く。

ダイキにとつて、アサギは本当に憧れの存在だった。

身長が人一倍高く、それで目立ってしまうダイキは本人の意思とは裏腹に勝手に推薦で多々役員を押し付けられていた。

去年は運動会の五年の団長もこなしたが、その傍らにはアサギが五年副団長として居た。

たまたまクラスが同じになり、そこで運よく選ばれて一緒になったわけだが、人と付き合うのが苦手なダイキを見越してだったのだろう。

アサギが発言し、ダイキに助言を求め、結果的にダイキの発案という形で何度も応援団会に貢献したものだ。その時は対抗チームの五年団長がトモハルだったこともあり、以前から何かと周囲が盛り上げてきたライバル対決を余儀なくされたわけだが。

そう、ただ”容姿が目立つ”という理由だけで、容姿もさることながら、頭脳明晰、スポーツ万能、人付き合いの良いトモハルと常に比較されていたのだ。

『頑張れ、大樹！ 朋玄を叩き潰せ！！』
意味不明な声援に、苦笑い。

トモハルは確かに、友人の数が男女問わず多かった。誰とでもすぐ溶け込める性格であり、そこまでいけ好かない性格ではない。

しかし、やはり優秀すぎて周りから反感を買うこともある。ささやかなものだが。

最大の原因は、アサギだろうか。自分に自信のあるトモハルは、アサギにも積極的だったわけだ。「アサギ、可愛いよね」と普段からさらりと発言していたトモハル、羨ましく思った男子生徒も少なくは無い。

何しろ、アサギと並んで同校の優秀人材なのだ、隣に立つのに相応しい。

その五年の運動会にて、チアガール姿のアサギの隣、学ランを着てトモハルと見事張り合ったダイキ。

大声を張り上げて、応援歌を歌った。立派な姿だった、長身なだけあって、迫力がある。

が、本人は冷や汗を流しながら懸命に声を出していたのだ、極度の緊張で。

「大丈夫かな？ ペースが速いからお水、飲んで」

少しの休憩、アサギに手渡されたペットボトルを素直に受け取り一気に飲み干す。飲んでから気がついた、蓋が開いていたし量も減

っていたのだからアサギも飲んだのだろう。

間接キスだった。

硬直したダイキだが、アサギは気づいていないのか気にしていないのか心配そうにダイキを見ている。優しい助言をしてきた。

「歌の速度が速まったら、私がダイキの前に出るから、それで少し落としてみたらどうかかな？」

「やってみる」

空のペットボトルを返し、二人は軽く微笑むと再び定位置につく。アサギのアドリブで後半の応援は上手く出来た、その時ダイキは思ったのだ。

どうしてこの子は、他人を良く見ていられるのだろう、と。そして思った、この子にずっと見ていられると、どうなるんだろう、と。次第に目で追うようになったダイキ、六年になってクラスは離れ離れになったが不幸中の幸いで隣のクラスだ。

合同体育もある、目立つアサギを目で追う。目で追ううちに気づいた、他人に気を配りすぎ、誰にでも優し過ぎる。

そして思った、彼女の視線を独り占めに出来る奴は、誰なんだろうな、と。

アサギのそんな、気遣いが好きなダイキ、それは自分にはないもので、出来ないものだからだろう。

そして手を差し伸べると嬉しそうに、綺麗な歯を見せて笑うアサギの笑顔がダイキはとても好きになった。

また、二人で応援団をやりたいと思ったが、今年の運動会はどうだろうか。

クラスは全部で6。

組は赤・青・黄の三色に分けられる、三分の一の確率で今年もアサギと同じ組になれるわけだ。毎年、クラス委員がくじ引きで色を決める。

六年の代表者が集まり、一斉に六本の紐を引き、先に何色が塗つてあるかで全校の運命が決まるわけだ。

それが楽しみだったダイキだが、現在、地球を離れて異世界で勇者中。アサギと一緒に来れたものの、肝心のアサギは魔王に連れ去られてしまった。

まあ、ダイキのクラスには今年、トモハルが居るので応援団長は半ば諦めてもいたのは確かだが。

「早く、助けに行かないと」

サマルトが先に眠りについたが、ダイキは星空の下で素振りをしている。少し肌寒いが、こうして動いていれば身体も温かくなるものだ。

気丈なアサギだが、泣いているに違いない。ダイキは唇を噛んだ。彼女を救出する為に、強くなりたくてダイキは毎晩懸命に素振りをする。そんな様子を、アリナがひっそりと見て、微笑んでいた。

暫くして、ついに船が港に到着した。

カナリア大陸・港街ドウルモ。

ダイキ、アリナ、クラフト、サマルト、ミシアの五人は久し振りの陸の感覚に足をもつれさせる。

が、思い切り皆で跳躍し大地を踏みしめた。

まずは、ジエノヴァに滞在組に手紙を書く。

クラフトが航海中綴っていた手紙に加えて、無事に到着したことを情報収集しシポラへと一刻も早く旅立ちことを記載。

昼前に到着した為、船では食べる事が出来なかった新鮮な野菜を大量に食べたいと皆思っ居たので、そんな店へ足を運んだ。

太陽の陽を浴びた、大地の恵を貪るように食べる五人はサラダばかり注文してしまった。

「さて、今日はどうしますか？」

クラフトが腹五分目でようやく皆に声をかける、ミシアだけが顔を上げて他は無我夢中で食べ物から目を離さない。

「今でしたら、まだ余裕を持って歩けます。一刻も早く状態を把握したいですもの、このまま聞き込みに行きませんか？」

「ですね。宿の手配だけして、早目に休めるようにし、極限まで動きましようか。同意見です」

やはり真剣に食べている三人を尻目に、二人で深く頷いて会話は終了である。

ともかく街はジェノヴァまでとは言わないが広いのだ、重たい腰を上げて散策開始。

三人の腹は、幾分か満たされたようで、満足そうに立ち上がっている。

二組に別れる事にし、クラフト&アリナと、ダイキ&サマルト&ミシアという構成をとった。

軽くアリナとクラフトは目配せする、ミシアの注意を逸らして、二人で会話をする絶好の機会である。

五人は今夜の宿の前で別れた、その宿は丁度街の中心に位置するので、東西に分けて聞き込みをする。反対方向に歩き出し、夕刻には戻る事、急な体長の変化で身体が悲鳴をあげたら、すぐに戻る事を約束。

「これなら、ミシア殿に会話を聞かれることもないでしょうから」「ん。さあて、何から行こうか」

大きく伸びをしてアリナは肩を鳴らした、二人とも歩きながらの会話である。何処かに座って綿密に語りたいのも山々だが、『万が

「『が怖い。』

「トビイ殿が去られてから、ミシア殿と何か？」

「あー。ほとんどボク、気が抜けていたからなー。稀に鋭い視線を感じることはあったけど、それくらい」

「ならば、良いのですが」

「窮屈でさ、あんまり部屋に居なかったし」

「こちらの掴んだ情報では、船員達にサボリ癖の出る者が増えたようでした」

「それに、ミシアが関わっている確率は？」

「0ではない、と思っております」

「ふん、そーか」

爪を噛み、アリナは忌々しそうに舌打をした。

「じゃ、ともかく今後も観察期間、つてとこかな」

「そうですね。何か異常があれば、ほんの些細な事で構わないので、至急言つて下さいよ」

この話は一度中断である。

二人は街中から外れて、静まり返る路地へと向かう。耳を澄ませながら、そして正面を見ているようでも左右に気を配りながら、歩き回った。

思いの外、人が居ない。

まあ、初日で情報が掴めるようならば、大事にはなっていないだろう。

その日は、二人して何も得ずに宿へ舞い戻る事になった。

その頃、もう一組の三人。ミシア、ダイキ、サマルトはミシアの案内で街を彷徨っていた。

ここへ来た事がある、というミシアに任せてついでいく。

「母の死と繋がるかもしれないシポラ。一刻も早く情報を」

焦るようにミシアは早足で人混みをすり抜けていく、二人は追いかけるのに必死だった。

三人は教会へ出向いた、昼からのミサが始まるらしく大人しく席に着く。ダイキは当然教会になど来た事が無かったので、緊張気味でサマルトの隣に腰掛けた。

サマルトの星の神は女神・エアリーであるが、ここの神は男神・クレオだったので、教会の正面に掲げてある銅像に違和感を感じてしまう。

パイプオルガンの荘厳な曲、子供達の聖歌、ダイキは疲労も手伝って無意識で眠りに入ろうとしていた。心地良すぎて、抗えない。ガクガク揺れるダイキに苦笑いするサマルトだが、同じ様に欠伸をして眠りに入ろうとしていた。

「子供達が。子供達がシポラから戻りますようにと……」

背後からそう聞こえたので三人は一斉に振り返った、目は覚めた。ぎよっとして身を仰け反らせた人物の他に、懸命に胸の前で手を組み、俯いてぶつぶつと祈っている中年の女性がいる。

三人は気づかないその女性に目配せし、その場は大人しく聖歌を聴いていた。

ミサが終わり、協会から人々が徐々に立ち去る中で、三人は先程の女性を捜す。

確実に『シポラ』と言っていた、聞き間違いではない。

ダイキが見つげ、慌てて駆け寄ると後ろから声をかけた、振り返られて言葉に詰まる。何を言い出せばいいのか、全く解らない。困惑しているとミシアが駆けつけ、代わりに前に進み出ると、優しく

微笑みかけて口を開いた。

「すみません、少しお聞きしたいことがあります。シポラで何かあったのですか？」

その問いに、女性は身体を引き攣らせると、小さな悲鳴を上げて逃げようとした。

思わずサマルトが腕を広げて回り込み、逃げ道を遮断。それに更に悲鳴を上げる女性、周囲の視線も気になるので害は加えないと必死に説得し、四人で教会裏の木々の中へ。

不審な三人に、女性は狼狽しているが丁寧なミシアには緊張を解き始めていた。

「私の母が、シポラ近辺で殺害された可能性があります。ジェノヴァから来たのですが不穏な噂も耳にしました。お願いします、何か知っている事があれば教えていただきたいのです」

「知るも何も、私が知りたい。息子達が突如シポラへ行くと言い出して、半年帰ってこないんだ。」

その間、手紙も何も無い、不安で不安で。こっちでも妙な噂を聞くだろ？」

言葉を慎重に選びながら答えている気もする女性に、ミシア達も不安に駆られる。

「息子さん達の動機、全く不明なのではようか？」

「ああ。特に変わった様子は無かったんだ。毎日友達と遊ぶのが日課で」

「その友達は、今何処に？」

「一緒に、シポラへ」

一同沈黙。

友達に話が聴けたら、と思ったがそれも無理なようだ。しかし、そうなるとその友達と遊んでいた時間に何かがあったとしか、思えない。

シポラへ行きたいと思った、その原因はなんなのか。

「幾つなんですか、息子さん」

ダイキが控え目に問うと、落胆して返答。

「あなたと同じくらいですよ。15歳と13歳です」

俺は12歳です、と反論する事も出来なかった、あまりに悲痛な女性の声。

「アサギが言ってた。マインドコントロールをすでにされていたのかもしれない」

ぼつり、とダイキが呟いて足元の草花を見つめる、女性が不思議そうに首を傾げた。単語の意味が解らなかったからだ。慌てて、軽く説明をする。

「息子さん達友達達の輪の中に、何者かが接触して、”シポラへ行かなければならない”という情報を植えつけるんです。深く、心と脳内に。すると、行かなくてはいけない、と思い込んでしまいます」
「それだけ人を集めて、何がしたいのかしら。そこが重要ですね」

ミシアがダイキの肩に手を置く、神妙に頷くと今日はここで岐路につくことにした。

深く女性にお辞儀をし、無言で宿へと戻ればすでにアリナとクラ

フトは戻ってきている。

夕食前に、一室で会話だ、宿の食堂ではとても話すことが出来る内容ではないだろう。

ミシアは、シポラへと消えていった少年達が多々居る事を報告する。顔を顰めて聴いているアリナ、瞳を伏せているクラフト。

やがて、重苦しい沈黙の後、クラフトがようやく口を開いた。

「情報を集めるか、このまま向かうか、ですが。いかがします？」

クラフトが全員を見つめながら、静かに返答を待った。情報収集に越した事はない、重要な事だろう。

しかし、情報はあくまで噂の一環に過ぎない場合もある、それくらいならば時間が勿体無いので直に目で確かめるほうが良いかもしれない。

「ボクは面倒だから突撃に一票。すでに被害は出てるんだ、これ以上被害を捜しても仕方ない。何が行われているか見極めるべきだ」
「私は情報収集に一票を。あまりに危険すぎます、せめてあと一週間と期限を決めて、ではいかがかしら」

意見がいきなり割れた、二人がムツとした顔つきで微かに睨みを効かせている。

気まずそうにサマルトが口を挟んだ、かなり控え目なのは余程二人の火花が怖いからか。

「俺は突撃かな。居てもたつても居られない性質なんだ」

そうになると、ダイキに視線が集中した。引き攣った笑顔で、顔を掻きながらダイキは静かに意見を述べる。

ああ、こんなときアサギが居たらなんて言うだろうか、と考えな

がら。

「お、俺は。情報収集が良いと思うんだ、どんな情報でもあればありがたい。遠い地のジェノヴァであれだけの情報を得られたんだし、近いここなら別の確信についた情報が出てもいいと思う。」

でも、個人的な意見だと突撃。だって、どう考えたって間違った場所だし」

そして視線はクラフトへ、と。

苦笑いして四人を見比べる、そう、双方の言い分が正しいのだ。

「同時にこなすとして、また二組に別れますか？ ただし、シポラ組は無茶をせずに偵察のみ、一週間経過しても戻らぬなら二班が突撃」

リスクが大きい、しかし、偵察ならば少人数のほうが都合だろうか。

首を捻って考えていたところへ、夕食の知らせである。地名を出さない事を徹底し、食事中も会話を続ける事にした。

「一週間。二人ここに滞在して情報収集後、向かう。三人は明日準備が整い次第出発、深入りせずに周辺で様子見。で、どうだろう、妥当はこれだろうか」

アリナの意見に、皆同意、後は誰が向かうか、だ。

食後の紅茶を啜りながら、クラフトが案を出した。

シポラ行きは感情に左右されてはいけない、何かを見ても行動せずに後から来る二人を待たねばならない。

ゆえに、『情報』を優先したミシア、ダイキ、クラフトが。

突撃を優先したアリナとサマルトが、街に残る形にした、残り組

みの暴走が些か気になるが、攻守のバランスも比較的妥当である。

正直、クラフトはアリナと共に居たいのだが、ミシアと誰かを単独で何処かへ行かせるのは気が引けた。

その間、アリナからサマルトにも軽く説明をしてもらったつもりである。

五人はそれぞれ席を立ち、早々に眠りに入った。

シポラ行きの攻撃の主がダイキ、回復、攻撃、防御補助のエキスパートであるミシアとクラフトがつくのである意味強いだろう、二人もそこそこ戦闘できる。

滞在組みのアリナが抜群の戦闘力を誇り、回復、攻撃魔法をこなすサマルトとならば何かあっても切り抜けられるだろう。

いや、切り抜けねばならないのだ、どちらも。

自分にのしかかってきた期待が、ダイキを震わせた、苦手なのだ責任感。ベッドの中で唇を噛み締める、震える手を強引にベッドに押し付けて無理やり瞳を閉じていた。

アサギを、ミノルを、トモハルを、ケンイチを、ユキを思い出す。

「頑張ろう。船で練習した、いけるはずだ」

何度もその言葉を繰り返しながら、ダイキは朝を迎えた、いつしか眠りにはついていたので、気分良く目は覚めた。顔を叩いて、気合を入れる。

冷たい水で顔を洗うと、腹いっぱい朝食を詰め込む。

剣を装備する、頷いて颯爽と街を歩く。

門でアリナとサマルトが見送り、三人は街から踏み出した。

向かう先は、青空の先、雲で覆われた不可解な場所・シポラ。

何人もの少年がそこへ向かった。邪教徒の巣窟であると教えられた場所だった。ミシアの母が、死に際にとった行動、そして死んでいた場所。

「行こう、クラフト、ミシアさん」

ダイキの何かを決意した重い声に、思わず二人は眩しそうに見つめてからこう返答。

「行きましよう、三星チユザレの勇者・ダイキ」

深淵の邪美　〜ミシア・ドライ・レイジ〜

三人を見送ったアリナとサマルトは、軽く視線を交差させ踵を返す。

「こちら時間も無い、極力動き回るべきだろうが、何よりこの二人。」

「ボク達ってさ、そういうのに向いてないよねー」

「同意。とりあえずクラフトから貰ったメモ通りにやってみるしかないな」

「どれどれ」

そういうことだ、この二人に大人しく水面下で情報を収集するなど到底無理な注文である。

人の流れに身を任せつつ、交互に紙を眺めてからがっくりと肩を落として武器屋の壁にもたれ掛かった。

「忘れてた、ここの星の字読めないんだっ」

「そうだったね、読み上げると、こう」

こめかみを押さえつつアリナは大声で読む、簡単なことだった文字数は少ないのだから。

『大人しくしてて下さい。目立つと何が起るか分からないので……そう、書かれています。』

どうしろというのだ、この一週間。10分経過、アリナが唾を吐き捨て、ようやく壁から離れたので慌ててサマルトも起きあがった。

「牢獄にでも行ってみるか」

「ろ、牢獄？」

「ああ、西の外れにどでかいのがあった筈だ、この街には。結構犯罪者が多いらしくてさ」

「物騒だなあ」

サマルトの発言に苦笑い、アリナは露天でポテトフライを2カット購入すると片方を手渡し食べ歩きだ。

先程朝食をとったばかりなのだが、小腹が空いたらしい。

「これ食べて歩いてたほうが、観光客を装えるだろ？」

自分の空腹を満たしつつ、尤もな理由をつけて、にっこり笑ったアリナに思わずサマルトは空笑いだ。

牢獄は、確かに街に存在していた。重々しい金網で隔たれ、華やかな街とは一変した息苦しい雰囲気である。

しかし、入り口には門番の姿すらなく、辺りは静まり返っていた。不振に思い、アリナは入り口に手を触れてみる。……開いた。

半分ほど減ったポテトを片手に進入する二人、そこは適度にランブが置かれており明るい。

「いらつしゃいませ」

「い、いらつしゃいませ??？」

突如声をかけられた、入って数歩の所に受付があり、手を差し出されたのだ。

意味が分からず啞然としてみると、紙を出される。

「観覧料金ですよ」

「か、かんらん??？」

「ひょっとして、ご存じではないのですか？」

「何を??？」

ハテナを頭に浮かべて惚けている二人に、受付嬢は語り出す。

この牢獄、数ヶ月前に閉鎖されており、今では建物を取り壊す代わりに観光名所として金を貰っているのだそうだ。

中には牢獄気分を味わうためにここで食事会を開いたりする金持ちも存在するとかで、最上階は大広間や宿泊施設もあるのだそう。

口をあけて突っ立っているアリナだが、観光客を装っているのだ、丁度良いとばかりに金を払って見学した。

「ガイド、おつけします？ 別料金ですけど」

「……お願いします」

何をしに来たのか分からなくなったが、ともかくガイドつきで二人は牢獄を歩き回る羽目になってしまった。これでは本当に観光だ。

「こちら二階は、軽度の犯罪を犯した者が入れられていた牢屋になります。

地下の牢屋が第一級犯罪を犯した者達が容れられる場所になりますね、脱獄出来ないように常に看守が張っております」

「はあ」

「五階には軽食をとれる場所も御座います、是非昼食はそちらで！ 牢獄弁当も販売しておりますよ」

「へえ」

絶対要らないっ、と二人は心中で叫んだがガイドは笑顔で二人を連れ回した。

「牢屋の中にも入れますよー、別料金で絵師を呼び、絵も残せませ

が」
「遠慮します」

「まあまあ、そう言わずに。せつかくなので牢屋の中にはどうぞ」
「ふお」

無理矢理二人は牢屋に押し込まれた、簡素なベッドに用を足す為の穴、それだけである。

顔を見合わせて肩を落とした、何故こんなことになったのだろうか。こんなことになるのなら、大人しく宿で寝ておくべきだった、と悪態ついても仕方がない。

「あの一、質問してもいいかな」

アリナが苦し紛れに声を出す、笑顔でガイドは近寄ってきた。

「ここの人たち、何処へ行ったわけ？ 犯罪者がいなくなったわけじゃないよねえ？」

ガイドは笑顔のまま、こう答えた。

「シポラへ行きましたよ。あそこの教祖様方は寛大でして、犯罪者こそ必要だと。」

自分の過去の過ちを認め、悔い改め世の為、人の為に働けるようにと、犯罪者達に機会を与えたのです」

二人の顔色が思わず変わる、声を出そうとしたサマルトの足を思い切り踏みつけ、アリナは素知らぬ振りをした。

前言撤回、情報に辿り着いたらしい。

「立派なんだねー、シポラのその……教祖様？」

「ええ。他にも孤児や浮浪者を集めて行かれましたよ」

二人は結局最上階まで案内してもらい、昼食をそこで頂いた。結構人は来ているようで、中には例の牢獄弁当とやらに手を出している人物も居る。

ガイドも昼食を取るために関係者の部屋へ消えていったので、二人は大きく伸びをしながら食事をとった。

いまいち味がわからないのは、先程衝撃的な言葉を聞いた為だろうか。

ミートソースのパスタを二人して食べつつ、周囲を伺いながら小声で会話する。

「変だよな、ここ。シポラの教祖を大絶賛してたぜ」

「ああ。始終笑顔だし、ひよっとしてこの運営資金とか売上金とか全部シポラ行きじゃね？ ボクの憶測だけどね」

「なあ。数日後、またここに来ないか？ ガイド抜きで」

サマルトの持ちかけにアリナも深く頷く、二人の視線が鋭さを増した。折角牢屋の中にも入れるのだから、何か手がかりを探せるかもしれない、と踏んだのである。

幸い二人は男女だ、恋人同士に見られているのかもしれないし、色々と好都合だった。

昼食を終え、出口へ向かう途中でアリナが再度質問する。

「シポラって、何する場所？ よく知らないんだけど、人がそんなに必要なもんなの？」

そ知らぬ振りをして、確信めいた質問だ。息を殺し、返答を待つ二人。

ガイドは笑顔で二人に語りかけた。清々しいまでの笑顔だった、ある意味”作り笑顔”である。

何に対してもこの笑顔が返ってくるのだ、訝しみたくもなるだろ

う。

「世界を安息の地へ導くべく、活動をしている宗教の教祖様方がいらっしゃる場所ですよ。神殿の設備を整えたり、教えを説いたりしています。また、地方への街道を皆で造ったりと」

「へえー。団体名はなんてーの？」

「PODです」

「ピーオーでいいー？」

「ええ」

ガイドの笑顔に釣られて笑顔、だが首を傾げる。

気を取り直して次の質問である、質問する分には料金も発生しないし、訝しがられないだろう。恐らくだが。

「教祖様”方”って。教祖様は二人以上いるわけ？」

「ええ、お二人ですよ。美男子ですねえ、なので女性のファンも多いのです。実際、彼らの美貌に惹かれて入団した女性も多いとか」

「へええええー。参考になったよ、ありがとう。是非一度見てみたいもんだね」

「一階の受付では、常時仮入団申し込みも可能ですよ」

「そりゃどーも」

二人は軽く礼をして牢獄を後にした、早足でそこから立ち去り人混みへと入り込む。

奇怪な、場所だった。今頃になって、異常な興奮が押し寄せてくる。相当危険な場所にいたのではないか？

サマルトが周囲を軽く窺い、剣を触りながら小声で語る。追っ手が不安らしい。

「なあ。変だよな」

「ああ」

「昨日教会で出会った女性は、あんな風に言っただけ」

「少し早いけど、宿へ戻ろうか？ その方が話がしやすい。あ、その前に」

アリナがひよい、と路地裏へと入っていく、慌ててサマルトがその後を追った。

そこはゴミが散乱しており、整備されている表通りと違って悪臭漂う汚れた場所だった。

気にせず突き進むアリナの後ろを、顔を顰めつつサマルトがついていく。汚物がいたるところに放置してあるのだ、不衛生な場所だ。蹲っている人間や、こちらを見て下卑た笑いをしている男達、雑居ビルの二階から大声で笑って身を乗り出している裸同然の女達。

冷や汗をかきつつサマルトがアリナの肩に手を掛けようとしたが、その足が停止した。

「自分の身は自分で守れよ」

小声でアリナがそう告げる、瞳を丸くして前を見れば厳つい巨漢達が立ちふさがっていた。

「幾ら？」

「参加費は50マリだ、どうする？」

「ん、了解」

状況が飲み込めずに右往左往しているサマルトを後目に、アリナは屈伸を軽くしてから男達へと近づいた。

歓声が上がった、見ればいつの間にか周囲を多数の人間が取り囲んでいるではないか。

ストリートファイターだ、掛け金有りの。

見る見るうちに周囲からも金が飛び交う、アリナの前には1・5倍の背丈の大男が出てきていた。

転がっていた缶を誰かが棒で叩くとカーン！ と鈍い音が響き渡る、試合開始の音だった。

男はアリナを瞳を細めて見ていたが、そのまま突進してきた。慌てずにゆっくりとアリナは動かずに男を待っている、タイミングを計っていた。

観客の視界からアリナが消えた瞬間に、盛大な音を立てて男が地面に倒れ込んでいたのは。ほんの数秒のことだった。

つかの間の沈黙、そして地面が揺れるほどの大喝采。

瞬時にしゃがみ足払いをした後、転倒する前に後方に回り込み右足で蹴りを食らわせ地面に叩き付けたのだ。目に見えたものは、多くはない。

満足そうにアリナは微笑むと、金を受け取っていた。上機嫌だ。

しかし反面、額の汗を拭い、サマルトは大きな音を当てて唾を飲み込む。心臓に悪い、アリナが強いことは知っているが雰囲気はその場での敵のものだろう。

アリナを応援するものなど誰もいなかった、気弱なものならば泣き出してしまいそうである。この付近を縄張りに行っているならず者の集まりだ、結束力は無駄に高そうだった。

一人勝ち抜き、大人しく帰して貰えるのだろうか、サマルトは早くなる一方の心臓を必死で押さえつける。

当然憤懣しているその者達に、あつげらかんとアリナは笑うと受け取った金をそのまま突き出して一言。

「これ、掛けてもつかい挑戦」

侮蔑的な態度に思えたのか、ざわめきと非難の聲が上がり、いきり立って数人の男達がアリナを取り囲む。

平然と腰に手をあて、アリナは鼻で笑った。

「何、四人がかりだった？　ボクはそれでも構わないけれど、値段を四倍にしてくれよ」

言うなり跳躍し、一人の男の頭部に蹴りを入れる。地面に足をつかせて、足場にし次は外回し蹴りを別の男に。

腰を上手く使い、コークスクリューパンチを三人目の男に叩き込んでから、残った男の突きを紙一重で避けた。

突き出された腕を捕らえて捻り上げ、悲鳴を上げたところで背後に回りバツクドロップ。

その間、ものの数分だった。

乱れた髪を整えることなく、アリナはにこり、と微笑むと手を差し出して。

「はい、お金」

無邪気な笑顔が逆に怖い、誰も反論も反撃も出来なかった。ただ、静まり返り金を集め始める。

とりあえず、400マリが手に入ったので二人は上機嫌で帰宅した。

流石にあの戦いぶりを見せ付けられては、小声で不平を言うものはいても、戦いを挑むものはいない。命が大事だった。

「ひゃつとしたよ」

「不用意な事はしないよ、ボク。さあて、軽く運動したから夕飯、夕飯」

宿に戻り汗を温泉で流してから二人は夕飯を摂った、白菜と牛肉のクリーム煮に、パンである。

さて、二人での会議をすべく部屋に行くわけだがサマルトが不意

に疑問を感じた。

「な、部屋って昨日と同じでいいんだよな？」

部屋の入口に来て、ドアに鍵を差し込めば開かない。

アリナが手招きし、隣の部屋を指したのでそこに入る。そこには、二人の荷物が。

思わず、沈黙するサマルトの傍らをすり抜けてアリナがベッドに倒れ込んだ。

しどろもどろ、サマルトは壁に背をつけて疑問を口にするのだが。

「ま、まさか。一つの部屋で寝ないよな!？」

「寝るよー、金が勿体無いだろ」

「お前は女だぞ!？」

「そうだよ、一応」

「年頃の娘だろう!？」

「何、サマルト王子君はボクを夜這いしてしまいそうだった？」

抱腹絶倒、転がりながら涙を流すアリナに流石のサマルトも冷静さを取り戻した。

徐に近寄ると、爆笑しているアリナの頭部の左右に手を沈めて押し掛かる。啞然、とアリナが口を開いてサマルトを見た。赤面しながらも、真剣なサマルトである。

「こつという可能性だって、あるだろう。部屋を分け」

言い終わらないうちに、にこりと微笑んだアリナは素早く拳をサマルトの腹部に叩き込んだ。

「ガッ!」

「うん、大丈夫。ボクのほーが強いから」

痙攣し、身動きとれず硬直しているサマルトをひよい、っと退かしてアリナは柔軟体操を始めた。

サマルトの受けた打撃は相当なものであり、当分起きられないだろう。

回復魔法を使用し、なんとか復活したサマルトは、すごすごと隣のベッドに転がった。

強すぎる、あの一撃。

仏頂面のサマルトにアリナが悪びれた様子もなく肩を叩いて話しかけた、叩かれ思わず身体が跳ね上がるのは先程の恐怖からか。

「ごめんごめん。さて、明日からの予定だけどさ」

「あの施設へは三日後に行こう、明日は別の場所を散策な。おやすみ」

余程堪えたのだろう、眠りについたサマルトにアリナは苦笑いで買っておいたワインを取り出し、一人呑み始めた。

痛いのはプライドなのか身体なのか、両方か。

「冗談でもあんなことするから悪いんだ、と小声で悪態つくアリナ。つまみはスモークチーズだ、一人でも美味しい。」

背を向けて寝ているサマルトを見つめながら、アリナは眉間に皺を寄せる。

いつ。

いつ、ミシアの事を話すべきか、と。

今日話したかったが、これでは聞いてもらえそうにない。アリナは軽く頭をかきながら、ワインを一本一人で空にした。

その後二人は毎日情報収集に勤しんだが、これと目立ったものはなく。

三日後に訪れたあの牢獄では、くまなく目を光らせたが、特にこれといって何も見つからず。

ただ。

地下の牢屋にて、サマルトが文字を見つけた。それは、誰かに見つけて欲しいような、そんな思いが籠められている気がして。

しかし、人目に触れてはならない気がして。

たまたまだった、床に食べていたフライドフィッシュを落としてしまい、拾い上げた先で文字を見つけたのだ。

読めないサマルトは、アリナを呼ぶ。

「帰ろう、サマルト」

急に表情を曇らせて腕を掴んだアリナに、ことの重大さと思ったサマルト。

宿に早足で帰宅し、何時もの部屋で二人は身を寄せ合った。誰かに聞かれているとは思えないが、念のためだった。

「破壊の姫君、麗しの女神、降臨し世界を導きたまえ。腐敗した世界に、制裁を。おお、破壊の姫君よ、愛する女神よ。シポラに降臨されよ」

ぼそ、っと口走ったアリナ。先程床に書き込まれていた文字だった。

サマルトは唇を噛み締めた、ジェノヴァで得た情報と一致である。これでシポラには教祖が二人以上存在し、崇めているのが破壊の姫君である、ということ把握。情報収集は、上手くできたようだ。真実かどうかは、今シポラに向かった三人から聞くことが出来るだろう。無事だといいが、と嫌な予感に二人は顔を見合わせる。

いてもたってもいられず、部屋をうろつくサマルトを睨みつけるように見つめるアリナ。この機に語ろうと、徐にアリナは口を開い

た。

思索しているサマルトには悪いが、聞いて貰いたい。

「あの、さ」

「ん？」

「ミシアのこと、どー思う？」

「へ？」

意表をついたアリナの言葉に、拍子抜けしてサマルトは身体の緊張から解放された。

赤面し、何故か俯く。思い出すようにうつとりと、天井を見上げる。

「綺麗な人だよな、なんていうかこう、異国風味満載の」

「違う違う、そうでないっつーの。顔は綺麗だけどさ、なんか……感じない？」

「スタイルも良いよな、胸とか腰とか。奥ゆかしい色っぽさがあるよね。ああいう人、好きだなあ」

「殺すぞ、コラ。不貞なやからめ」

話がかみ合わない、アリナは大袈裟に溜息を吐き慥然としてベッドに転がる。

後ろで何か言い訳をしているサマルトに興味を持たず、不審なミシアの話も出来ずに、出発の日を迎えた。

全くミシアを疑っていないサマルトに話をして、混乱させるのは明らか。そしてミシアに直面した時に、ボロが出るであろう事から、アリナは告げることが出来なかった。

二人は気を引き締めて、シポラへと向かう。

アリナが稼いだ金で馬を二頭借りたので、それで地図を片手に旅立つのだ。

行く先の空は、暗く。暗雲立ち込め、不気味だった。嫌な予感がした。

一方、シポラを目指していた三人は、途中で後ろから来た貨物に乗せてもらい、シポラへと順調に進んでいく。

魔物の攻撃にも、三人で耐えられた。二人の魔法が高度でもあるし、何よりダイキの腕が甲板で格段に上がっていたようなのだ。

シポラ付近で下車し、お礼を告げるとうっそうとした森の中に佇んでいる巨大な構造物に近寄る。

非常に大きな建物だが、未だ完成はしていないようだった。しかし、人影はなく静まり返っている。

三人は注意深く周囲を探った、何処からか侵入できないかと思っただのだ。

二本の高い塔、その頂上に光り輝く何かが居る事を把握しながら、それに気づかれないように。

「サンダーバード、ですね」

クラフトが密やかに告げ、表情を曇らせる。厄介なものなのだろうと、ダイキは大きく息を吸い込んだ。

外壁は頑丈ではなさそうだが、入り込む隙はない。しかし、畏か、それとも偶然か。

抜け穴らしき洞窟を、離れた場所で見つけたのである。

三人は意を決してそこへ飛び込んだ、飛び込んだ先は、薄暗い小部屋で何やら多種多様の道具が置いてある。

物置小屋なのだろうか、ドアがあったので武器を構える。逸る鼓動を出来るだけ落ち着かせながら、クラフトがドアを開ける。

道が、続いていた。気配がないことを確かめ、そこを通過していく。

時折、上から砂が落ち、声が聴こえるので上には人がいることを把握。建物の真下を通過しているようだ。

道は終点が階段だった、これで城の内部に入り込めたようだ。

「どう思います？ 罨でしょうか」

「一度、戻りましょうか？ 二人と合流します？」

「危なくなったら今の道を引き返そう、あと少し、先へ」

ダイキの堂々とした声に、二人は頷くとそのドアを開く。

僅かに開いて様子を窺い、人がないことを確認して音をたてないように開いた。

廊下だ、赤色の絨毯が敷いてあり綺麗な場所だ。しかしここには目立つだろう、三人は近場の新たなドアを微かに開き、そこへと潜り込む。

台所だろうか、誰も居ないので隠れ場所を探しながらとりあえずその場で待機することにした。

やがて数分待てば二人の男が入ってきたので、背後から捕らえ、口に布を突っ込み縄で縛り上げると衣服を脱がせる。

それをダイキとクラフトが着用し、散策に行くのだ。ミシアはそこに残り、捕まえた二人を見張る事になった。

二人を見送ると、ミシアは台所を物色し、食べ物を探す。勝手にワインを見つけ、口にした。

酷く喉が渴いていた、毒など入っていないだろうからと手当たり次第に飲む。腹も減っていたので、探し続ける。

「ワイン、好きでしたか」

気配もなく後方に現れた男に、悲鳴を上げそうになったミシアだが、強張った表情で目を見つめた。

若い、魔族だ。薄桃の髪に、あどけない笑顔。

なかなかの美男子である、思わずほう、と歓喜の溜息を零したミアだが慌てて目を釣り上げらせる。目の前の魔族は、恭しく頭を垂れてこう告げた。

「ようこそ、破壊の姫君様。お待ちしております」

誘う二人の魔族

静寂がその場を支配する、ミシアはワインを片手に強張った表情のまま相手を睨み付けていた。

穏やかな笑みを浮かべて、幼い顔つきのその男は片手を差し伸べている。

整った顔立ちは、娘達を虜に出来るほど甘く、そして声も聞いていて耳に心地良く。

唯一の問題は、恐らく人間ではない種族だということだ。

瞳の黒目が縦長で、長く尖った耳、となると魔族だろう。

「よろしければこちらへ来て、一緒に飲みませんか？ 良いチーズが入りましたので」

無邪気な笑顔を浮かべ、両手を差し出した。

一歩後退したミシア、額に汗が浮かんだのは目の前の相手の行動も不可解だが、まず力量が全く測れないからである。

見た目は麗しいが、先程から肌に突き刺さる痛みは何か。

ミシアは唇を噛み締め武器を確認した。背に弓があるが構える時間に攻撃を受けるだろう、護身用のナイフならば胸元に潜ませてあるが難なく交わされそうだった。

魔法の詠唱には、発動に時間がかかるので現時点では役に立たない。

額に汗を浮かべる中、ふとミシアは思い出した。

ダイキとクラフトは無事なのだろうか？ 不意に二人はどうなったのか不安になった、まさか死んでなどいないだろうか。

「ああ、あのお二人でしたらばまだ彷徨っておられますので大丈夫ですよ。ご心配なく、お二人がこちらに戻られる前に、お帰しいた

します」

絶句したミシアに、目の前の魔族は微笑むばかりだ。全とお見通し、ということだろう。

ミシアは深く唇を噛み締め、我武者羅に武器を手に攻撃を開始しようかとも考えたが、無駄な努力だと判断する。

ワインのボトルを傍らに静かに置くと、男を見据える。

「……貴方は、誰かしら？」

ようやく声を発したミシアに、男は満足そうに笑うと深々とお辞儀をする。非常に紳士的な態度に思えた。

顔を上げて一步、また一步近づいて跪くと、恭しくミシアの手を取り甲に口付ける。あまりの事に、ミシアは口をあけて男を見つめる。

「申し遅れました。シポラにてPODの教祖を務めております、イン・アイです。アイ、とでもお呼びくださいませ」

深々と未だに首を垂れているアイを見下ろしていると、小気味良い感覚が背筋を伝ってきた。美しい魔族が平伏していると、客観的に想像しただけで血肉が踊りそうだった。

唇を湿らせ、動揺を悟られないように声を絞り出すミシア。

「……色々和讯きたい事があるのだけれど」

「でしょうね、私達も話したいことが山積みです。ですから、どうかこちらへ」

アイは静かに立ち上がると、丁寧にミシアの手を取り歩き出した。何処をどう歩いたのだろう、美しい装飾が施されたドアを開いて

部屋に入ればヴェロアで統一された豪華な場所だ。

何処かの王宮の一室のような、気品ある部屋だった。

部屋を見渡せば、窓から外を見つめている長身の男が目に入る。静かにアイとミシアを見つめて深く会釈をし、近寄ってきた。

「あら、イイ男」

思わずミシアの口から零れた言葉、何処となく雰囲気がついに似ている気がした。アイよりも自分好みだったので、反射的に頬を赤らめる。

長身の冷酷そうな鋭い瞳の男だった、髪の色と瞳がアイと同じであるが雰囲気は正反対だ。近寄りがたい雰囲気を纏っているところが、またそそられる。

「お待ちしておりました、出迎えもせずには申し訳ありません。イエーン・タイです」

あらやだ、声まで好み。……ミシアが思わずそう口にする。低音の、耳元で囁かれたら背筋がざわつくような滅多にお目にかかれないう声である。聴こえたタイは艶かしく微笑すると、アイと同じ様に跪き、タイはミシアの甲に口づけた。

ミシアは啞然としたまま、手を引かれて中央の椅子に座った。

これはまた座り心地が良く、眠りに堕ちてしまいそうな感覚だった。相当高級な素材で作られているのだろう、それこそ王宮にでもありそうな。初めての感覚である。

タイがワインを運ぶ、アイがチーズを出す。

二人が正面に着席したので、ミシアは開き直りワインとチーズに手を伸ばす。始終自分を恭しく見つめてくる二人の美男子を肴に、ワインを軽く口の中で転がしながら飲み込んだ。

目の前の男は間違いなく魔族達であった、だが、何故か客人とし

てもてなされている自分。

二人の魔族に囲まれてそれでも、恐怖を痛感しないのは……何故だろう。

確かに緊張はしていたのだが、堂々としている自分にミシアも驚きが隠せない。肝が据わっているのだと、思った。

綺麗に空になったグラスに、タイが再びワインを注ぎ入れた。

入れ方も様になっていた、ワイン愛好家なのだろうか、手馴れている。その様子に感嘆の溜息を漏らすミシア。

血のような赤ワイン、ミシアはグラスを転がしながら二人に鋭い視線を送ると、言葉を促した。

それに気づいたのかタイが微笑し、アイと軽く頷くと口を開く。

「困惑気味でしょうから、お話を」

「是非、そうして欲しいわ。手短にね」

「承知いたしました。では、まずこちらをご覧ください」

すっかりミシアは悠々とソファに深く座り込み、常にそこに存在したかのように我が物顔で踏ん返り返っている。自分に危害を加えない、と悟った。

タイが徐に立ち上がり、壁にかけてある掛け軸を指差す。

「我らが崇めている破壊の姫君です」

「破壊の……姫君？」

小さく復唱したミシアに軽く頷き、タイは掛け軸を愛おしく見つめる。

言われて瞳を細めたミシアだが、そこに描かれているのは、実際見ても何か解らなかつた。

布には煌く星々の中心で何かが発火を起しているような刺繍が施されており、他には薄っすらと星に混じって線が見えるが……それ

ただだ。確かに、布も上等で糸は金や銀を織り交ぜられて作られているようで高級品には間違いない。

しかし、何を指すのかがさっぱり解らない、ただの抽象的な絵にしか見えない。

だが、アイも深く頭を垂れてそれを見つめているので、ミシアもとりあえずそれを凝視するしかなかった。

見続けたたり、角度を変えれば何かしら絵の秘密を解く鍵が見つかるかと思ったのだが。生憎、何も解らなかった。

「麗しき破壊の姫君が降臨されれば、その星は再生を迎えるのです。墮落した星に、制裁を与える存在。それが破壊の姫君……ミシア様、貴女です」

「はあ？」

誘う二人の魔族（後書き）

つるつら短いです。

真実は闇へと

思わずすつとんきような声を上げたミシア、真剣に見つめてくる二人の視線に少したじろいだが、気分は悪くなかった。何しろ、相当の美形だ。見つめられて損はない、寧ろ快感である。

突然の告白に動揺を隠せずミシアは掛け軸を見続けていた、タイとアイは恍惚とした声で語り出す。

予想外だ、確かにジェノヴァで破壊の姫君の話は聞いたが。ミシアは急速に乾いた口内を潤すように、ワインを呑み続ける。

「信じられないのも当たり前、ですが、正真正銘貴女様は破壊の姫君。絶世の美女、底知れぬ魔力、恐れを知らぬ気高き心、動じない冷静さ……何より」

タイは掛け軸に移動し、隣に飾ってあった紙切れを丁寧に外すと、それをミシアへと運んだ。

「見覚えのある字、ではありませんか？」

「……これ！」

それを視線に入れた途端、思わず椅子から立ち上がったミシアは、震える手で紙切れを掴み瞳を走らせる。

母の字体だ。読み書きを教えてもらったのだから、見間違える筈がない。

紙が音を立てるほど震えている手で、視界もままならないが唇を動かしながら必死にそれを読み続ける。

「な、なんなの、こ、これ」

「貴女様のお母様である、シャルマ・ドライ・レイジ様。PODの幹部でした、ですがある日を境に姿を眩ませましてね」

幹部という言葉に引き攣った表情を浮かべたミシア、そつとアイが肩を抱きながら椅子に座らせ、背を撫でる。

落ち着かせようとしてくれているようだ、瞳を閉じながら優しく擦っている。徐々にミシアも安堵の溜息を小さく漏らし、自身で呼

吸を整える為に大きく息を吸った。

「破壊の姫君。……貴女様が誕生し、皆で丁重に御守りし、育てるつもりだったのですが。シャルマの裏切り行為で偽者の女兒がここに置かれ、本物である貴女様が連れ出されてしまったのです。魔力が高く、幻影に長けた女でして、私達ですらその術を見破り、シャルマを追うことに現在の月日を要しました」

テーブルに肘を置き、顔を覆い隠しながらタイは辛そうに曇った声を出す。

「一人でこの世界を掌握したいという欲望に取り付かれたシャルマは、懸命に我らの追っ手から逃れていたのです。」

シャルマと貴女様の共通点は、その肌に、瞳と髪の色。自分の本当の子供であるマダーニの妹として、貴女様を育てていたようですね」

「!？」

弾かれたように紙を握り締めたミシア、再びアイが宥め始める。

「貴女様は誰のお子でもありません、存在自体が神秘なのです。伝説を待ち侘びる我らの前に、あの晩流星と共に地上に降り立ったのですよ。鏡を見れば解りましょう、唯一無二のその美貌、この世のものでは御座いません。そして強力な魅力の香りは、異性を虜にします。それこそ破壊の姫君、他を圧し、屈服させる最大の魔力」

ミシアは、言葉を失った。

眩暈がしたが、妙に視界は鮮明で、掛け軸を見つめて息を大きく飲み込み溜息を吐く。

嘘ではないか、とも思ったがアイもタイも真剣そのものだ。

そもそも、嘘をつく必要など何処にもないだろう。

「シャルマに制裁を加え、貴女様を取り戻す予定が勇者と合流してしまわれ、なかなかお迎えに上がれず。」

貴女様の存在は、勇者よりも明確で、魔王よりも絶大なのです。

我ら二人は魔族ですが、今の魔族に未来などありません、魔王に従っても滅び行く定めです。正統なる4星クレオの指導者にして救世

主、破壊の姫君ミシア様に我らはお仕え致します」

「勇者と魔王、双方どちらが勝とうとも、最終的に戦乱の世は終わりを告げないのですよ。何故ならば正統な指導者が、魔王でも勇者でもないからです。ミシア様こそが全てを支配出来るのですから」
二人がミシアに詰め寄り、そつと身体を抱き寄せながら耳元で囁く。

似た声の、音域が違う魔族達の声に鳥肌がたった。それは、嫌な鳥肌ではない、むしろ快樂。

ミシアは焦点の定まらない瞳で、口元に知らず笑みを浮かべながら心にもないことを呟いた。

「いや、この時はまだ”あつた”のかもしれない。

「……少し、考える時間を頂戴」

「考える事などありません」

アイがそつとミシアの髪に口付けた。

タイが頬に触れて自分の唇を、ミシアの唇へ近づける。触れるか触れないか、そんな距離感だ。

「類稀なる美貌、既に我ら二人も虜に御座います。……お会いしとう御座いました、ミシア様。我らの愛しの姫君」

「ここに、絶対の忠誠を」

二人は丁重にミシアを立たせると、両側に立ち部屋の玉座へと誘わせた。

そこに座らせて傍らに控えると、手を二回叩き叫ぶ。

「皆！ ミシア様のご帰還であるぞ！」

言うなり、正面のドアが開き、人がそこから溢れ出す。

口々にミシアの名を呼びながら、万歳、万歳、と連呼しつつ我先にとミシアの足元まで駆け寄ると涙を流しながら平伏した。どれもこれも、男ばかりだ。

瞬時に部屋は、溢れんばかりの男で埋め尽くされた。面喰らって最初は度肝を抜かれたのだが、冷静にり見渡せば、ミシア好みな美形が多いことに気がつく。

「ミシア様、どうか、どうかその美の集結したつま先に口付けすることをお許し下さい……」

「私にも、私にも!」
手が伸びる。

ミシアの足首を一人の男が優しく、恭しく、宝物を持つように緊張した面持ちで触れば、そつとつま先に口付けを。

それを機に、次々と口付けを懇願する男達に、ミシアは笑いが込み上げてきた。

「あは……あは、あははははははははは!」
爆笑。

思わず拳を握り締めつつ、ミシアは自分が望んでいたようなこのハーレムの光景を、歡喜の笑みで見下ろしている。すでに、瞳に光などなかった。あるのは色欲に犯されたドス黒い闇だ。

そつとタイが耳打ちをする。

「どうか、応えて下さい。皆、待ち侘びていたのです」
そつと、アイが耳打ちした。

「破壊の姫君、ミシア様。我ら貴女様の虜、なんなりとお申し付け下さい」

爪先に口付けしてくる男の顔を、ミシアは蹴り上げてみた。

するとどうだろう、喜びに打ち震えているのか涙を流しながらミシアに土下座をしているのだ。

静かに、タイが耳打ちする。

「ミシア様に、他の者と違うことをしていただければ、ああして歓喜に打ち震えます。特別扱いされたのですから」

面白くて、ミシアは笑いながら立ち上がると男達の顔を一人一人見つめながら、自分好きな男を物色する。こんな状況、何人の女が体験できるだろう。海に落としたダイヤの指輪を探すほど、難しいことだ。

ミシアは緩んでしまう口元をそのままに、男を物色する。一人際立った好みの顔立ちを見つけた、瞳を交差させると微笑し、手招き。

赤面しながら近寄ってきた男の頬を平手打ちし、急に胸に引き寄せて頭を撫でる。

周囲から羨望の溜息が零れ、当の本人は呼吸が止まりそうなほど緊張しているようだ。

「ミシア様、ミシア様」

皆、うわ言のように名を呼ぶ、ミシアはそれを聞きながら優越感に浸り次々に男達を物色する。

高ぶる感情、流行る胸、手に汗をかきながら狂気的笑みで静かにミシアは唇を開いた。

「タイ、アイ」

「はい」

足元の男の頭を踏みつけながら、笑う。すでに、この状況に馴染んでしまっていた。

「ただいま」

「……お帰りなさいませ、ミシア様」

男達に囲まれたミシアは、気に入った男の唇を奪う。

すると、その男はあまりの感激に身をうち震わせて失神するのだった。

「タイ、アイ」

「はい」

「手始めに何をすれば良いのかしら」

「ミシア様のお好きなように、自由に」

「そう。では、質問を」

会話しつつも男達を周囲にはべらし、まるで犬の様に従順なその様子に満足そうに頷く。股間を脚で擦り、腕を首に回して引き寄せ、やりたい放題だ。

「どっぞ」

当然とばかりに、タイとアイは会釈して言葉を待つ。

「世界は私が統治するのね」

「ええ、今の勢力全てを粉碎し、消去出来ます。ですから”破壊の

姫君”。その後で麗しの楽園を御造りになつてください」

「私は神秘の存在、父も母もいないのよね」

「ええ、ある意味神、ですから。神は誰からも産まれません」

「私が家族だと思っていた母と姉は、他人なのね」

口にした言葉は、姉であった筈のマダーニとの決別である。そういうことだ、話を聞いていて解つたのだが”マダーニは姉ではなかった”。

尊敬していた母も、自分からこの環境を奪つた忌まわしい女へと変わった。

母の復讐は、何処へ行つたのだろうか。寧ろ、母に復讐がしたいくらいだった。

「他人どころか、敵に御座います。ミシア様を無謀にも利用しようとしていたのですから。身の程知らずにも程があります」

「世界を統治すべく、まず邪魔な最大勢力と思われる魔王と勇者をぶつけようと思うのだけれど」

「素晴らしい考えです。賛成です」

タイとアイは見事だとばかりに拍手喝采、男達もうつとりと溜息を吐き知的なミシアに酔っている様子。ますます気分を良くしたミシアは、どつかりとソファに腰掛け直し脚の組み方を変える。

「一応私、勇者一同だから戻らねばならないわ。敵を探るにも都合が良いし……またここへ来るけれどね」

「断腸の思いで、再び別れを迎えねばならないと、覚悟しておりますから」

「機会があれば、手当たり次第殺しても良いのよね？ 勇者も」

勇者も、という単語にはアサギ、という意味が込められていた。別に男の勇者達は殺さなくても良い、寧ろ自分に引き寄せたい。邪魔なのはアサギだった、トビイと親しくしているアサギが目障りだ。タイとアイは、一瞬だけ、本当に一瞬だけ笑みが消えたが、すぐに微笑する。

「ええ、構いません。貴女様ならそれが可能に御座います」

「とりあえず、数日ここに滞在したいわ。ダイキとクラフトをなんとか足止めなさい」

「承知いたしました。すでに迷路の屋敷へと誘い、混乱を誘っております。命はどうします？」

「あの二人、特にダイキは成長すれば美形で従順な僕になるわ。殺さないで。けれど、数日後にここへ来るアリナ、という女は目障りだから抹殺して構わないの」

「承知いたしました、アリナ、ですね」

「ミシアの瞳が妖しく光り輝いた、不気味な重低音の声に本来ならば誰しも怯えそうだが、奇妙な事に誰も気にも留めない。

心底愉快そうに、手を叩いて自分の考えを紡ぐミシア、その赤ワインを含み、艶と赤を染み込ませた赤い唇からとんでもない言葉が次々と飛び出す。

「アサギとマダーニとアリナは、極刑ね。惨たらしい殺し方しなくてはね、うふふっ」

「……では、本日はこちらで宴会を開きましょう。何なりと欲しいものを言いつけてください」

「まあ、素敵！ タイ、アイ。寝所はあるのかしら」

「ええ、最高級のキングサイズベッドが奥に御座います。姫君の寝所に御座います」

「ふふ、良いわ、良いわ！ ……何か食べたいわね、テリーヌとか」

「承知いたしました、すぐに。一流の料理人を取り揃えておりますゆえ、堪能してください」

二人が立ち上がり、一礼して部屋を去るとミシアは選りすぐりの男達を数人引き連れて奥の寝所へと向かう。

成程、ミシア好みに金の装飾が施されたある意味”悪趣味”な部屋があった。目を輝かせて子供の様に駆け寄ると、手触りを確認する。なんとという柔らかかな布だろう、早く横になりたい。

早速ベッドに駆け上った、赤ワインを衣服に零しながら、数人の連れてきた男達に手招きし。

「ワインが零れてしまったわ、綺麗になさい」
ゆつくりと横になり、爆笑しながら男達に舌でワインを嘗め取らせる。

一心不乱にミシアの言うがままになる男達を見下しながら、歓喜の叫び声を発していた。

可笑しくて可笑しくて、堪らない。

自分が秀でた美女だとは思っていたが、まさかここまでの魅力があるとは。

「破壊の、姫君」

なんて甘美な響きだろう。勇者のアサギをふと、思い出して爆笑する。

魔王を倒す、勇者が居る。けれど、その魔王と勇者よりの上である存在だと知ったミシア。

眩い、光の勇者の存在が急に霧によって覆われていく。

母も、もはや関係ない。目的が、音もなく消え失せてしまった。思い出せない、数ヶ月前誓った事が。

母親の敵を探さねば、父親を救い出さねば……姉と誓ったその事が消え失せる。

姉は、姉ではないのだから全ての目的など、消え失せて当然だった。

「平伏しなさい、ええ、私は」

憂いを秘めた瞳で天井に両手を掲げるとトビイを思い出し、笑う。衣服に染み付いたワインを嘗める男達、餌に群がる、犬のようだ。

類稀なる美貌の所持者、ミシアとトビイ。なんと似合いの恋人同士だろうか、うっとり瞳を閉じるとミシアはその名を呼び続ける。

「アサギなんて、メじゃないわ。だって、私は」

最強にして、最大の姫君、世界の統治者。小さく唇を動かし、心の底から笑い続けた。

勇者など、存在しないのではないだろうかと思えてくる。

勇者などより、上の存在がここに実在しているのだから。

あれは、勇者ではない、自分を引き立てる名脇役なのだ。

自分の身体の上に蔓延る男達の頬を撫でつつ、唇に口付けしつつ、ミシアは高笑いを続けている。

面白くて、仕方がない。実現するのだ、夢のハーレム生活が。

「出来るのよね、私だからこそ」

女は奴隷にして、馬で引き摺って遊ぼうか、湯だった釜に飛び込んで貰おうか、魔物の中に投げ込んで面白そうだ。

アサギとアリナとマダーニと。三人をそんな処刑めいた遊びに放り込んでみたら……楽しそうだ。

思えば、マダーニは。姉ではないのではないかと薄々気づいていた、唇を噛み締める。

何処へ行っても誉められるのはマダーニで、自分も確かに誉められたかもしれないが、マダーニとの落差がありすぎたのだ。

明るく、誰にでも好かれていたマダーニゆえに、皆親しんでいたのかもしれない。

何処となく、ミシアに接する皆の態度は余所余所しかった。

それを子供ながらに痛感していた、あの頃から、姉に嫉妬していたのかもしれない。

違うのだ、皆肌で自分に敬意を払い触れたくとも触れられない高貴な存在であると、直感しての態度だったのだろう……と、解釈。

「嫉妬なんて、見苦しいわよ私。値しないのだから」

上半身を起き上がらせる、ワインで濡れ、肌に密着した衣服を脱ぎ捨て男達に妖艶な笑みを浮かべる。

両手を差し出しゆっくりとそのまま倒れこんで、横に軽く転がれば。

くすくす笑いながら瞳を閉じ、小さく欠伸を。

今日、世界が変わった。明日、何が起こるだろう。

ミシアは自分を囲んでいる男達の視線を浴びながら、心地良さそうに仰向けになると口を半開きに。

舌を軽く出して、艶かしく身体に指を滑らせる。

「触りたければ、触っても良いのよ」

姫君はね、寛大なの。小さくミシアは呟いた、呟いて、爆笑した。

その頃、アイとタイはしかめっ面で別の部屋に移動している。料理人に指示を出し、疲労感たっぷりの表情で互いに床に倒れこんでいた。

「……アイ」

「……タイ」

名前を呼び合うと、急に起き上がり互いを抱き締めて身体を震わす。

破壊の姫君に出遭えた歓喜の喜び……では、なさそうだ。

「あの女、嫌いー!!」

「落ち着け、アイ。仕方ないだろう、我慢しろ」

アイの絶叫、半泣きでタイに持たれかかると吐き気が込み上げ苦しそうに嘔吐。

背中を青褪めた表情で撫でながら、タイは深い溜息を吐いた。

「気持ち悪いよー、死んじゃうよー、みんなあの淫乱女豚に喰われるよー。愛するタイが一番狙われてるよー!!」

「落ち着けアイ、アイ兄。私は平気だ、可哀想だが他の者に相手になってもらおう」

「さっき股間触られたよー! 気持ち悪いよー!!」

「……変態の極みだ、ある意味破壊的だな」

先程のミシアへの紳士的な接し方は何処へやら、やたらと少年の様に駄々をこねるアイと、必死にそれを慰めるタイ。

えぐえぐと泣きつづけるアイの瞳に浮かんだ涙を指で掬うと、アイは軽くアイの唇に自身の唇を重ねた。

頭を軽く撫でる、優しく抱き締めてアイを落ち着かせようとしているらしい。

……この魔族の双子。

どうやら……恋人同士なようだ。

アイを優しく抱きとめ、タイは宥める様に背中を擦る。

「本物の”姫君が到着されるまで、偽者には破壊の限りを尽くしてもらわないと。……極力早くここから追い出そう。それまで、頑張れるな、アイ兄。最小限の被害に抑えるためにやるしかない」

「う、うん、頑張るよ……。居心地良すぎて、居ついてもらったら困るし。あの二人はどうする？」

タイに抱かれて落ち着いたのか、アイは小首傾げて可愛らしく甘えた声で腕を首に回し、涙を浮かべた瞳で上目使い。

非常に可愛らしい、タイとて慣れてはいるが喉を鳴らすと再び唇を塞ぐ。

暫し、秘め事。

「ああ、あの侵入者の。ともかく、あの偽者が出て行くまでは閉じ込めておくべきだ」

「面倒だからタイに任せる。ちょっと……休ませて」

「ああ。こちらは任せてアイ兄は休むと良い。偽者には、兄は感極まって熱が出たとも言っておこう」

タイは静かにソファにアイを寝かせると頬に口付けし、瞳を閉じさせるように顔を撫でる。

満足そうに眠りに就いたアイを見て安堵の笑みを浮かべると、アイは表情を曇らせある場所へと向かった。

「殺さずに生かしたまま帰す……。か。非常に苦手な仕事だ」

小声で漏らし早足で建物内を歩き回ると最北端の建物へと到着、壁にかけてあったフードを被り一つのドアから侵入する。

その頃迷子のあの二人、勇者のダイキとクラフトは。

「クラフト、そろそろ戻ろう。遠くへ来過ぎた気がする」

「ええ。壁に私が印をつけましたからそれを辿れば」

「流石！」

ダイキとクラフトは先程から念入りにこの建物内部を調べていたのだが、何処にも不可解な点はなく。

清潔感溢れる建物で、確かに人とも擦れ違ったが、会釈だけで言葉はかわさず。

ドアがあれば侵入し、物色したが特に異質な部分は見受けられない。

貴族の建物で、使用人たちが働いている……そんな印象しかないのだ。

二人と擦れ違っても、誰も気にも留めないことから、余程の人数が居るのではないかと推測出来たがそれだけだった。

「あ、そこ二人」

「うん」

戻ろうとした拍子に、声をかけられる。

硬直しているダイキの前にクラフトが進み出るとにこやかに微笑み、その男を見据えた。

質素な衣服、威厳もないのでただの小間使いだろう。問題はないとクラフトは判断、脅えているダイキをあやすように、後ろで手を静かに上下させる。今、下手に騒いだほうが危ない。

「すまないが、草の間へ出向き、小麦粉を二袋、厨房へと運んでくれないか？ 人手不足だそうだ」

「承知しました」

すんなりと返答したクラフトに、後方でダイキが慌てふためいたがそれを片手で制する。

男が立ち去った後、すぐにダイキはクラフトに詰め寄ったが軽く窘められた。

「長居は無用です、適当に相槌打てば良いのですよ」

「でも」

「そもそも草の間なんて知りませんし。厨房は先程の場所かもしれませんが。ミシア殿が気がかりです、戻りましょう」

「う、うん」

来た道に戻るといふ事は、先程の男の後ろを歩くといふ事だ。見破られなければ追跡していただけなので、楽な話だが。

二人は距離を取り、来た道を息を潜めて戻り始めた。

そこへ後方から声がかかったので、飛び上がる勢いで振り向いたダイキ。

「すまない、木の間にアウト向いてくれないだろうか。人手不足なんだ」

「わ、解りました」

先程と同じ様な衣装の男だった、どれだけこの場所は人手不足なんだとクラフトは引き攣った笑みを浮かべる。

引き攣った笑顔で返答したダイキに、嬉しそうに声をかけてきた男は笑うとダイキとクラフトの腕を掴んだ。流石にこの行動には慌てふためくしかない。

半乱狂の二人を尻目に、男は反対方向へと歩き出した。

「助かるよー、一緒に荷物を運んで欲しくて」

「は、はあ」

クラフトは舌打ちし、逸る気持ちを抑え直様廊下を見渡し特長のある装飾を探した。

人が居ては壁に印をつけて歩くことが出来ない、見取り図を脳内に書き込み続けるしかないのだ。

複雑すぎる道で男は二人を引きずりまわした、同じ場所を何度か歩き回っている気もしてきた。

「木の間に、ここまで遠くでしたか？」

冷やかな声でクラフトが告げる、男は青褪めた顔でクラフトに向き直ると苦笑い。

「ま、迷子になってしまった」

「えー……！」

すっとんきょうな声を上げたダイキと、頭を抱えて座り込んだクラフト、この場所へ来て数日だというこの男、まだ道を把握できていないらしい。

立ち止まっただけでも仕方がないので三人は歩き出した、人っ子一人会わないのが異常な気もする。

折角なので、この場所についてクラフトは探りを入れる事にし、

ダイキに目配せすると咳を一つ。

ダイキは静かに小さく首を振って頷くと、心臓に手を当てて少しでも落ち着かせようとした。

クラフトからの視線は、おそらく『私に任せてください』という意味合いだろうと判断。

「困ったときはお互い様ということで。私達も先日入ったばかりですからね、全く把握出来てませんし」

「はは、仲間か。二人はどちらから?」

「私達はジエノヴァから来ました」

「おお、向こうの大陸からか! 大変だったろうに。教祖様に惹かれて?」

「……ええ、共感しましたので」

「お近くに居られるだけで安心できる。姫君様は、どれ程の安らぎを与えてくださるのだろうか。早くお会いしたいものだ」

「……ですね」

思った以上に口数の多いこの男に胸を撫で下ろしたクラフト、廊下に目をやることも忘れず語り続ける。

「しかし、皆は何処へいったのでしょうか。早く木の間へ行きたいものです」

「皆、木の間にいるのかもしれない。もしくは客人が来ると聞いたのでそちらかも」

「客人?」

眉を潜めたクラフト、出迎えねばならないほどの大物が来たのだろうか。

それは非常に不味い事態である、本当だとするならば。

「客人を持成す為に皆慌しく動いているらしい、そもそも木の間に行く用事だつて……」。

……二人とも、朝礼出ていたか? 何故知らない」

不思議そうに振り返った男に、ダイキは身体を硬直させ立ち止まったが、それでは不審過ぎる。

さり気無くクラフトはダイキの前に進み出て、愛想笑いを浮かべつつ、男の背中を押して先を促した。

「眠くて半分聞いていなかった、……秘密にしておいてください」「不謹慎だな、朝礼は魂の洗濯が出来るのに。心を入れ替えるよ」「ええ、申し訳ない。こちらへ来てから感情が高ぶり眠れなかったので、つい」

「あーそれは解る気がする」

クラフトの流暢な嘘に思わずダイキは感心、いつかバレやしないかと心臓は先程から早過ぎる動きだ。

三人はようやく木の間に到着、小腹が空いたと思っていいたらパンとコーヒーを配布していたのでそれを頂く。

仕事はここにシーツを敷く、ということらしい。数十人居るその部屋で、ダイキとクラフトは混じって作業を開始した。

こっそりとクラフトがダイキに耳打ちをする。

「ミシア殿が心配です、隙を見て逃げ出しますよ」

「ああ、解ってる」

ところが。

「さあ！ 祈りを捧げよう。今宵は客人が来ていらつしやるので教祖様の有り難い言葉はないが」

一斉に跪く皆、別行動は危険だったので二人は渋々真似て跪く。暫くするとドアから数人が入ってきて同じ様に跪いた、とても出て行ける状態ではない。

不可解な言葉を皆で大合唱だ、怪しい宗教団体のようだと言ったダイキは心底脅えた。魔物より、ある意味恐ろしい人間の合唱である。どのくらい祈りを捧げていたのか、更に。

「さあ！ 就寝だ。皆、明日への活力を蓄えよう」

言つたりごろ寝を始める一同、ダイキは青褪めてクラフトを見た。困惑気味ではあったが、クラフトも静かに横になるとダイキに手で「寝ろ」と指示。

唇だけを動かし、必死でクラフトは言葉を伝える。

ゆつくりと動かされる言葉に、ダイキは唇を真剣に見つめて正解を導こうとした。

『皆が寝たら、出歩こう』

多分、クラフトはこう言っている。同じ様にダイキも唇を動かす『解った』そう、動かしたのだ。

二人は寝た振りをした、寝息が聞こえ始めた頃、先にクラフトが起き上がり静かにドアへと向かう。

誰も起き上がらない、気にも留めない。

ダイキも同じ様に起き上がると、ドアへと近づき静かにドアを二人で開き、その場から……立ち去った。しかし、建物内部は夜で見難い、灯りをつけようものならば目立つだろう。

そう、現在夜だ。

窓から覗く月明かりを頼りに二人は必死で歩く、だが、複雑な順路でここまで来たので道が把握出来ない。眠くなる時間だが、生憎こんな状況では寝たくとも寝られない。ダイキは醒めてしまっている目とは反対に、疲労感のある身体を疎ましく思った。

ミシアはどうしているだろうか、侵入者捕獲、といった情報は流れていないので無事なのだろうか。

何より、アリナ達の合流の件もあるので早々にここを出るべきだった。

「ごめん、俺が先へ進もうと言ったから」

「ダイキのせいではありませんよ、得た情報もあります。無事に脱出出来れば良いではないですか」

申し訳なさそうに謝罪したダイキに、思いの外クラフトは明るく返答。

別に空元気ではない、まだ絶望に追い込まれていないのだからこれを好機と捉えた方が良くに決まっている。

二人は物置を見つけた、少し埃臭いが仮眠を取ることにし、片隅の毛布に包まって交代で眠る。ダイキはなかなか寝付けなかったがそれでも毛布に包まれば眠気が襲ってくる。

明るくなつた頃そつとそこを出て、同じ様に歩き回つた。
だが、どうしても見覚えのある場所に出ないのだ。

朝がこれば、また信者達に遭遇したが誰も不審がらなかつた。それどころか朝食を一緒に食べさせてくれた、完全に仲間だと思われている。

三度目の夜、ようやくクラフトが自分がつけた目印を発見し早足を通り越し、駆け足で急ぐ。

間違えていなければ、最初の場所なのだから、気も焦る。

「ミシア殿！」

ようやく辿り着いた場所へ戻れば、そこにミシアの姿はなく。

どつと全身から汗が噴き出す、三日もここに居られるわけがないのだ。

探すべきか、それともミシアがもう敷地内から一人で出て待機しているかと踏んで、自分達も出るべきか。

狼狽するクラフトだが、ダイキが微かに声を聞き取っていた。

「クラフトさ……ん？ ダイキ……？」

足元から不意に声、飛び上がる勢いで眼下に視線を移せば腕が伸びている。

床が音を立てて浮いた、そこからミシアが顔を出したので啞然と様子を見ていた。

「収納庫、ですわ。偶然見つけましたの」

疲れきつたようにそこから這い上がるミシア、思わずダイキが手を差し伸べれば他にも人が居た。

最初に服を交換した二人である、三人で隠れていたらしい。

「幸い、食料はここにあったので、時折隙を見て色々食べさせて貰っていました。……この人達は何も口にしていないのですけれど」

「無事でよかつた！ 話は後だ、早く出よう」

ダイキはミシアの手を取り、クラフトを急かす。微笑したミシアと微笑み合うダイキ。

物言いたげにクラフトは口を開きかけたが、無言で床の収納庫か

ら二人を引き上げるとそのままダイキに頷いた。

連れて行く気らしい、確かに残しておいても面倒だろう。五人はすんなりと地下を通り、敷地から出た。

出たところで二人の猿轡を取り払い、食料を与え、水を与え。

シポラから離れ、二人の体調を整えるべくミシアとクラフトが治療にあたった。

信者二人は大人しく、空腹を満たしても逃げようとはしていない。どうやら混乱しているらしく、行動が決まらないのだろう。

アリナ達が到着する頃だったので、極力シポラへ近づいておかねばならない。

街道に近い場所で、五人は野宿を始めた。一応信者二人は木に繋いであるのだが、喚こうともしなかった。それが逆に不気味だ。

「収穫がありましたか」

ミシアが焚き火を起しながらそう問えば、クラフトが静かに口を開いた。

「いえ。帰るのが精一杯でした」

「そうですか、こちらも特には」

「ご無事で何よりです、心配していました」

言いながらも、疑問は多く残る。茶を啜りながらクラフトはミシアの横顔を、静かに見つめた。

三日間もミシアはあの場所に潜んでいたというが、それにしてはミシア自身が綺麗だ。

まるで入浴でもしたかのように、身体から花の香りがクラフトの鼻に届いたのである。

排便の問題とてあろう、どう切り抜けたのか。

聞き出すべきか、否か。クラフトは迷った。

馬の足音に気づき、二日目アリナとサマルトが馬に乗ってやってきた。

簡単に状況を説明し、アリナ達も街での出来事を話し、聞かせる。

大体情報交換が終わったところで、強行突破を試みるアリナをクラフトが宥めた。

「ここまで来たんだ、被害だって街にある、正面から突撃しよう」「いえ、規模が大きいのです。そして敵の正体が不気味です。……あそこに、サンダーバードもおります。

飼い慣らしているのかもしれませんが、あれは……強大です」

「ちつ……まあいいや、結論。

破壊の姫君という人物を祭っている、教祖は二人、美形らしい。マダーニとミシアの父さん探さないといけないから、ボクは突撃したいね」

大袈裟に舌打ちし、アリナはミシアの名前を強調し、そこだけトーンを変えて叫んでみたが特に反応はなく普通だ。

眉一つ動かさず、淡々ミシアは語る。

「父ならば……生きていると信じているので逸らなくとも。この人数では到底無理な気が致しますわ、一旦戻るのが得策であると思います」

「来た意味がないだろ、それじゃ。自分の父親がここにいるかもしれないんだぞ!？」

ミシアの落ち着き払った態度にイラついたアリナと、眉を微かに釣り上げらせて聞いていたクラフト。

「お嬢、落ち着きましょう。突撃し、どうするのですか。想像以上にココの教祖のカリスマ性が高く、また能力が未知数です」

「だつたらなんだ!」

どうすべきか。

それぞれの思惑を胸に秘め、ダイキ、アリナ、サマルト、クラフト、ミシアは互いに顔を見つめ合いながら話のつかない会話を、続けている。

空は、暗く。分厚い雲が太陽を遮断していた。

戻る為に、再会する為に

話はまとまらない、主格はクラフトだが、彼には決定権がなかった。最も幼いとはいえ、勇者はダイキだ。

クラフトはダイキの顔を立てる、というでもなく年齢関係なく当然だから”と声をかける。

「ダイキは、どうしたいですか？」

クラフトの問いに、腕を組んで深く考え込んでいたダイキはゆっくりと顔を上げる。

3星チユザールの勇者は、臆することなく口を開き、不気味に佇むシポラを見つめながら語り出した。

「”探る”。

…… 出発時に任された事。落ち着いて、皆で今この場所へ来るまでの情報をもう一度、洗ってみよう。そうすれば、何を次にするべきか見えてくるような気がする。順番に、話そう」

ダイキはサマルトとアリナに視線を投げかけ話を促した、軽く頷いてじつと見つめている。

頭を掻きながら、土の上で胡坐をかいているアリナに代わり、サマルトが口を開いた。不貞腐れて、というよりも話し合いなど苦手なアリナは全てをサマルトに委ねる。

「あそこに、牢獄があると聞いて。二人で出掛けた」

悲鳴を上げたクラフトの口を、思わずミシアが塞ぐ。

話が、台無しだ。普段のクラフトからは想像できないほどの大声だった。

ちなみに叫んだのは、無論自分が書いた『大人しく』というメモが当然のように守られていなかったからだ。

「牢獄には、誰も居なかった。囚人達は、そのシポラに送られたんだそうだ。悔い改めるべく毎日祈りを捧げて、働いているとか。教祖が美男子だから女性のファンも多い、と聞かされた。」

賛否両論なのかな、感謝している人物と、悲観している人物の温度差が激しすぎる気がする」

横目でアリナに視線をサマルトは送るが、話す気はやはりないようだ。

軽く溜息を吐いて、続ける。目の前の干し肉に手を伸ばしながら。「そのもぬけの殻の牢獄を二回、調査したんだけど。

今は観光名所になっていて、誰でも見学できるんだ。そんな状態だから綺麗に片付けられていて、何も無い。ただ、その地下牢に『破壊の姫君』への想いを綴った妙な言葉が残されていた。不気味だった。まるでわざと残されていたみたいだ、今にして思えばね」
破壊の姫君。

単語を聞いて全員が顔を上げる、ミシアもひっそりと眉を顰めて面を上げた。

「俺達はここまで、かな」

パチン、と焚き火の音。沸いたお湯でサマルトはコップに薬草を入れてから、湯を注ぎ込む。冷ましながらゆっくりとそれを飲みました。

「シポラを絶賛している人達は、息がかかった人達やもしれませんね。私達は」

次いでクラフトが語り出した、破壊の姫君と教祖達について語っているその傍らで。

額を押さえて蹲り始めるミシア、心配されてサマルトに毛布をマントを羽織らせてもらい、焚き火で沸かした茶を啜る。サマルトが飲んでいたものだ、疲労に効くからと2星ハンニバルから持ってきておいたものだった。もはや残りも少ない。

皆から少し離れ、岩に横になって話を聞くミシア。話題は”破壊の姫君”だ。

「ここにいてるわよ」

小声で呟くと、アリナを見つめる。

そう、ここにいてる。噂の渦中の破壊の姫君は、ここにいてる。

自分の話題で持ちきりなのでミシアは上機嫌だった、表情には出さないが満足だ。高笑いしたい気分である、が、大人しく。

今はまだ、正体を明かすべきではないといわれているのだから我慢した。

目の前で自分について語っている”元・仲間達”が滑稽で仕方がない。

話の内容などミシアにとっては聞かなくてもよかった、何故ならば真実は自分が握っているからだ。

憶測で語っている情報など、聞いていてどうなるというのだろう。それよりもミシアは目の前の男達を、値踏みする。

ダイキはまだ幼いが、言い換えれば将来有望なもつとも若い男だ。身長も今も高いので、自分に待たすには最適の美男子へと成長してくれるだろう。

サマルトとて母性本能をくすぐる、可愛らしい弟のような男。何より自分に優しくしてくれているので、喜んで下僕になりそうだった。

クラフトが問題だ、確かにそこそ顔が良いのだがアリナにぞつこんだときている。だが、それが面白い。アリナを裏切り自分の側につけることで、面白い光景が見られるだろう。普段は家来の様に扱っているクラフトが、離れた時にアリナの顔が歪む様を、ミシアは見てみたかった。

全てが、面白い。

何もかもが、自分の世界だった。

夢ではなく、現実である。岩の硬い感覚ですら、面白く感じられた。

「……アリナを抹殺する部隊はまだかしら？ 絶好の機会なのに」
ミシアは、操り人形の様に動いている”愚かな元仲間”を見て呟いた。それが来ないと、ここから離れられない。

アイ、タイからの指示では合流した事を見計らい、手下が襲いかかって来る……答だった。

「破壊の姫君を信仰している人物達は、以前の生活に嫌気が差していたようにも思えました。全てを消去したい、という願いがより深く依存する形になっているのではないかと。」

美しい、全てを魅了する姫ならばこの世を浄化する……破壊であるうとも楽に天へと昇れる、というような」

「何、つまり自殺する勇氣なんてないから楽に殺してくれ、ってコト？」

クラフトの話に、仏頂面のアリナがようやく声を出した。表情は相変わらず不機嫌そのものだが、一応話は聞いていたようだ。

苦笑いでクラフトは答える、肩を竦めてサマルトがクラフトに目配せした。

「そういう考えの人間もいるかもしれませぬ。人間、何かにすがって生きたいものです、例えその対象が何であろうとも。天界の神が信じられないのならば、破壊の姫君を選ぶのも必然かもしれませぬ。」

かつて信じていた天界の神、心に痛みを受けて信じる事が出来ずに、代わりに新たな姫君を知れば。

……苦しみから解き放つてくれるのではないかと。そして同じ様な痛みを持つ人々でシポラに居られればそれで良い、と」

「弱いな」

「人間、弱くて強いものですよ。信じる対象が危険ですが、切り離すためには時間を要すでしょうね」

「っていつか、そこで団体生活出来るなら別場所で、破壊の姫君とやらを信仰しなくても上手く出来るだろうに」

大きく伸びをし、アリナは立ち上がると屈伸、前屈を繰り返している。右足で空を蹴り上げると、暗雲立ち込める空睨みつけて小さく呟いた。

「で、どーさんの。時間の無駄だ、ここに居ても。少しでも多くの人を救出するなら、今から突撃しよう」

軽くダイキに視線を投げかける、勇者の判断を待つつもりだ。

ダイキはシポラを見つめ、数分考えていた。手から汗が吹き出し、手袋が湿っている。

皆の視線が、痛かった。本音を言えば、突撃なのは間違いないのだが。

あまりに、無防備ではなかるうか、そして突撃してしまえば数日見かけていた信者達と剣を交えなければいけないのではないか。

そう思うと、決断が出来ないのだ。

「俺は……無事にみんなと合流することが最重要だと思う。突撃、したいけれど……命の保障がない気がして」

一旦、引き下がるということだろう。それにクラフトもサマルトも同意し、深く頷いた。

アリナは舌打ちしたが、鬱憤を晴らすようにその場でシャドーボクシングを始める。暴れたい衝動を必死に堪えているのだろう、話しかけないほうが良さそうだった。

ミシアは。

「そうですね……。皆で揃って来たほうが良いと思いますの。

姫君とてまだあの場には居ないらしいですし、出現してからでも良いと思いますわ」

そう弱々しく呟くと、再び毛布に包まれた。咳き込みながら、駆け寄ってきたサマルトに大人しく背中を擦られ微笑する。

ダイキは見ながら思っている、数日あんな狭い場所に身を潜めていたら体調を崩しても仕方がない、と。

クラフトとアリナは二人で目配せすると皮肉めいて微笑した、ミシアが仮病である気がしたからだ。

それでも、五人は、シポラを見つめた。思惑は違えど、見据える先は同じだ。

次に来た時も先程の抜け道を利用出来る、その発見だけでも成果は十分だろう。渋々後退を了承したアリナを、クラフトは宥める。

ただ、去る前に五人で近寄る事にした、念の為。アリナもそれで納得が若干出来そうだった。

城壁で囲まれているのだが、正面の門がどうなっているのか、見張りはいるのか。まだ完全には調査していない。

夕暮れになり、周囲が薄暗くなつた頃五人はそつと歩み寄る。

明るいとは何処かで監視されていた場合、攻撃を受ける恐れがあるからだった。しかして暗闇だと、灯りを使わなければならないので余計目立つだろう。よつて、夕暮れ時を狙う。

先程侵入した洞窟を確認、この中に小屋があることをアリナ、サマルトに説明。

ぐるり、と壁をつたって歩いてみたが、結構な広さである。

周囲は静かだった、特に物音は聞こえてこない。一周に要した時間は、約二時間だろう相当広い。

すでに周囲は夜の帳だ。

五人は先程の場所へと戻つた、連れ出した二人組みが居るのだ、連れて帰らねばならない。

しかし。

「なっ！」

木に縛り付けておいた二人が、心臓を一突きにされて息絶えている。

唖然と立ちすくむダイキの脇を、クラフトがすり抜け傷口を見ればまだ……血液が暖かい。

死後硬直も当然始まっていない、殺されたのはつい先程だ。

思わず皆武器を構えた、獣が相手ではないのは承知、凶器こそないものの明らかに人の手だろう。

高等な頭脳を持ち得た魔族や、一足歩行の魔物でも……可能だ。

森で、梟が鳴いた。狼が吼えた。月が、雲に隠れた。

ガサガサツ。

木の葉が揺れる音、思わず五人が一斉に上空を見上げれば先程の梟が飛び立ったところだ。

胸を撫で下ろす、ともかく木に縛り付けておいた二人の遺体を地面に寝かせ、丁寧に葬ることにした。

火を焚けば、獣からは安全だろうが敵には見つかり易いのは解っていたが近辺で見張られているかもしれないのだ、考えても無駄なので五人で火葬をした。

遺体の損傷がそこまで酷くなかったので、ダイキとて足は震えたものの燃え盛る火の前で彼なりに懸命に祈っている。

祖父が亡くなった時、火葬場へ行つたが呆然と立ち尽くしていた記憶が甦った。

人は、死ぬ。時期が違うだけで、死ぬ。それは必然で、解りきつたことだが。

「痛かつたらうね」

ぼそ、っと呟いた言葉を、サマルトが聞いていたが何も言わず。

そして皆後悔した、”何故二人を置いて偵察へ行ってしまったのか”。

傍に居るべきだった、と唇を噛んだ。迷わず引き返せば誰も死ななかつたのではないか……、そう、思ってしまった。

”思ってしまった”。

シュルル……。

その音に気づいたのはミシアだった、不意に横目で森を見た際に何か蠢いていた気がして。

眉を顰める、弓矢を構えなおす。

敵か、味方か。

つまり、魔物か、シポラからの使者か。

心臓を一突きにしたのは、信者一人に口外させない為だろうからまず、シポラ関係の者の仕業だろう。だが、今の音は。明らかに人ではない。

ペキ。

枯れ枝が、踏まれた音だった。

皆一斉に森を見つめる、火はまだ耐えていないが恐れずにこちらへ何かが向かってきていた。

それぞれ武器を手にし、気持ちを切り替え構えるのだが周囲の闇

で気づくことに些か遅れたのだ。

ああ、我らが離れたからこの二人は死んだのだ……。離れなければ、助けられたのに

声が上空から降ってきた、弾かれたようにクラフトが耳を塞ぎ怒鳴りつける。

「聞いてはなりません！ 幻覚へと誘い精神を追い込む呪言の一種です！」

だが、すでにサマルトが誘われたようだ、突然叫ぶと地面に突っ伏している。

辛うじてアリナは無事な様子だ、頬を自身で思い切り叩いたのだ、痛みで戻ったらしい。

慌ててクラフトはダイキを探した、苦悶の表情で立ち尽くしているが名を叫べば振り返ると弱々しく手を振ったので……無事である。

ミシアは、頭部を押さえて蹲っている。……無論、フリなのだが。叫びながら地面を転がるサマルトに近寄ったクラフトは、懸命に呼びかけるが全く聞いていない。

トラウマを、先程殺された二人を媒介にして呼び起こされていた。最も深いトラウマを所持しているのは紛れもなくサマルト、国内どころか、ほぼ全世界が死滅し大事な人として亡くなっている。

もつと、自分に力があれば助けられた。あの時、逃げていれば助けられた。

後悔が津波となってサマルトを包み込んだのだ、心に沈めておいたものが浮上した。

どうにも出来ないことだった、サマルトの責任ではないのだが自責の念は深く重く、凶悪だ。

破壊の姫君に、仕えよ。全ての苦悩を取り払ってくださる

ダイキも必死にサマルトを揺すった、だが絶叫し続けるだけで瞳を開かず丸くなったままである。

アリナは声の主を探した、その人物さえ倒せばサマルトも解放さ

れるだろうと踏んだのだ。

しかし、森から現れたのは長すぎる百足。

何メートルあるのだろうか、裕に二十メートルはありそうだが、幅は15センチ程で木にも隠れられる。

それが……五匹程森から這い出てきた。

舌打ちし、アリナは手身近な太い木の枝を火に突っ込むと松明代わりに装備、両手に木を五本ほど火をつけて持つとサマルトを軽く見てから百足に立ち向かう。

サマルトはクラフトがどうにかしてくれるだろう、一人で百足を倒したほうが都合が良い。

火には弱い筈だ、アリナは火を正面に突き出しながら百足の動きを瞳を細めて見極める。

確かに、怯えているが逃げはしない。鋭い牙が見え隠れしている、あれに噛まれると……痛手だ。

ミシアも辛うじて立ち上がってきたので、胸を軽く撫で下ろしたがそれはアリナにとって敵を増やしただけの事だった。

弓矢を構え、一匹の百足に火付きの矢を放ったミシアだがアリナを孤立させるつもりだ。

当然、これは自分の意図を汲み込んだ計画の一部であり、シポラからの手配だろう。

アリナだけ、この場で抹殺する……その手筈。

声の主が誰かは不明だった、タイ・アイ、どの声でもない。

だが、味方で間違いないのだからミシアは悠然と気持ちを落ち着かせ弓を放ち続ける。

無論百足に矢が刺さる事はなかった、ワザと外しているのだから簡単だ。

火を警戒し、なかなかアリナに近寄らない百足を、自分の火の矢で操作しアリナへと向かわせる……。

ある意味、高度な技術である。

「アリナとミシアさんじゃ無理だ、行って来る」

ダイキが剣を抜き、猛然と百足へ向かったのでクラフトは舌打ちしダイキへと簡易な防御魔法を詠唱する。

サマルトさえ正気に戻れば、火炎の魔法で百足を焼き尽くせるのだが。やはりまだ魔法だけで見れば、ダイキよりもサマルトが格段に上だ。

アリナの隣に立ち火炎の魔法を唱えたダイキ、発動時間が長くとも的確に百足へ攻撃を食らわせるように慎重に。

「たすかったー！ 何処を狙うべきか」

「百足つて、火で頭を燃やすと効果的つて言わない？」

「おっし！」

ダイキの提案にアリナは松明を何個も掲げながら突進、起き上がって威嚇してきた百足の腹に松明を当てる。

熱さで暴れ出したところを、頭部を押さえ込むように数本の松明で地面に押し付け、その隙にダイキが長い胴体に剣を突き刺す……という作戦である。

確実に、一匹倒してから、次へ。

瞳を細め、危うくミシアはアリナに標準を定めたが、流石に思い止まり百足へと。

自分で手を汚すわけにはいかない、あくまで敵からの攻撃でアリナを抹殺しなければ。

百足ごときではアリナとダイキを止められないだろう、声の主がアリナを操ってくれさえすれば。

上手く進まない事態に、ミシアは歯軋りをし矢を射続けた。

ここへ来て、サマルトにクラフトが参戦すれば機会はなくなるだろう。

ミシアは、焦った。もつと簡単に効率よくアリナだけを始末出来る作戦を誰か、立てられなかったのか、苛立った。

『……私が戻ったら、仕置きしなくては』

”破壊の姫君”

勝利を確信しているアリナとダイキは、二人で巧妙に百足と対峙する。身体が大きいだけで恐れなければ十分余裕を持って戦える相手だと、ダイキも判断できた。

「が、がはっ」

しかし後方で、呻き声。

思わず二人は振り返った、クラフトを地面にねじ伏せサマルトが無表情で宙を見ている。

「ちっ、まずい！」

瞬時に理解した、サマルトが正気を失ったのだ。舌打ちしアリナはダイキに戻るように告げ、百足の前に松明を数個投げつけると簡易な足止めをする。ダイキが先に走り出した、百足の相手を今している場合ではないのでアリナも直様後を追う。

クラフトの救出に向かう。

掛け声を上げて跳躍し、とび蹴りをサマルトに喰らわせたアリナは、クラフトから引き離れた。

地面に転がるサマルトを、多少の距離を置いて見ているダイキは剣を構える。

「大丈夫か！」

「な、あんどか……、ガッ」

むせ返り、上手く言葉が話せないクラフトの前にアリナとダイキが立ちはだかるが、どうやってサマルトを正気に戻すべきか。

説得出来るものなのだろうか。生憎アリナにはこの状況を把握できない。魔力によるものだと解るが、最もこの場で専門的なクラフトは打撃を受けて当てにしていけない。

ミシアはそれを後方で見ている。術者を倒せば安易にサマルトを操っている魔力など掻き消す事ができる、それをアリナには告げない。なるほど、サマルトにアリナを殺させるのだろうか？ とミシ

アは口の端に笑みを浮かべる。

それならばアリナとて容赦なく攻撃できないだろうから、隙が大いに生じるだろう。

後方に控えている百足四匹を使って援護させても良いだろう……先程の暗鬱な雰囲気は何処へやら高らかに笑い出したい感情を押し殺す。ミシアはそのまま、弓を射るフリをした。

このまま、傍観だ。百足が流石に自分を攻撃してきたら反撃するが、幾らなんでもそれはないだろう。

ジャリ、と地面の砂がこすれる音にミシアは狂気じみた瞳で仲間達を見つめた。

剣で斬りかかってきたサマルトに、ダイキを突き飛ばし真っ向からアリナが対峙している。

「甘いね、遅いよ！」

後方に回り込み、背中を思い切り蹴り上げる。地面にねじ伏せ、面倒くさそうに笑った。

「悪いね、ボクのほうが強いから」

胸を撫で下ろしたダイキだが、百足が俊敏な動きでこちらへと向かってくるではないか。

ダイキの叫び声に我に返ったアリナは、サマルトを掴んで百足の体当たりを避ける。思ったより動きが早く、変則的だった。

火が弱まり、何も邪魔をするものがなくなったのだろう。

ミシアは懸命に一匹と対峙していた、残りは三匹である。

対峙していると言っても、ミシア的にはただ、適当に矢を射っているだけだ。当てる気等全くない、寧ろアリナを狙えと暗示をかけるように眼で訴える。

『私は破壊の姫君よ、言う事を聞きなさい』

百足は、理解出来たのかゆっくりと身体をミシアからアリナへと向けた。

魔物も操る事が出来るだなんて流石ね私、とミシアは自慢げに仰け反る。が、飲んでばかりもいられない、確実にアリナの息の根を

止めるまでは。

地面を這いずっていたサマルトは、急に強い力でアリナを押しつけて再び剣を振り回し始めた。

遠慮がない分、サマルトのほうが優勢だった。そして正気でない分、力とて自分の最大限を發揮する。

「あー、ホント、面倒っ」

アリナは高く右足を掲げた、最早失神させるしか大人しくさせる方法がない。

というか、そのほうが楽だろう。その際に敵を全滅させれば、治るだろう……と思った。

脳天に直接打撃を与えれば、相当のダメージを食らうだろうがクラフトに治して貰えば良いだろう。

安直な考えだ、が、それしか思いつかなかった。大人しくしているのならば仲間が欠けているだけだが、こつも攻撃を与えてきては邪魔以外の何者でもない。

「アリナ、百足を任せる。俺がサマルトはなんとかしてみせる」
覚悟を決めたアリナに、ダイキが躍り出た。

輪って入ってくるとは思わなかったが、ダイキがアリナの足をそつと右手で下ろさせる。

些か顔に不機嫌さを出したアリナ、だがダイキの視線に思わず頷くと足を地面に下ろし、代わりに百足に向き直った。

思わず、口の端に笑みを浮かべたアリナ。

ダイキの視線が、妙に頼もしく感じられたからだ。とても最初に出会った時と、比べられない。

短期間で、それ相応の度胸がついたのだろうか。嫌いではない視線だった、自信に満ち溢れた真っ直ぐな瞳だ。

ご期待に、備えますよ勇者様。

小声で笑いながら言うと、駆け出し地面を這っている百足の胴体を踏み潰す。痛みで胴体をくねらせるので、尾っぽに注意しながら頭部を強打する。

やはり潰すには火が簡単だろう、燃え残りの松明を拾い上げ、瞳を焼く。

悪臭が立ちこめた、奇怪な鳴声を叫ぶ百足だがアリナは鼻と口元を押さえ刺す様に松明を深く沈める。

「も、申し訳ありません、足手纏いで……。直様加勢します」

回復したクラフトが援護についた、動きを鈍くするための影縛りを唱える。

「気にするな、身体は大丈夫か？　こんなバカでかい百足くらい、ボク一人でどうにかなるさ」

「いえ、回復は終わりました、平気です」

顔の青褪め方からして、本調子ではないがクラフトの顔を立ててアリナは鼻を鳴らすとそのまま二人で百足へと向かう。

一方、ダイキと向かっているサマルトだが両手で剣を振り回すが狙えないのか、攻撃を避けるのは簡単だった。

普段ならば冷静に敵を見て剣を捌くが、今の状況ではダイキですら余裕で避けられてしまう。

とはいえ、下手に攻撃も出来ずに呼びかけることに専念するしかなかった。

アリナに何とかする、と言ってしまった以上ダイキは覚悟を決めた。船上でサマルトとは親しくした仲だ、友達に近いものを痛感しているので助きたい。

「起きろよ！　アサギを捜しに行くためには、そんな状態じゃ無理なんだ」

サマルトとてダイキとて、同じ惑星の出身はいなかった。クラフトとアリナは常に共に行動していて気が知れている。二人の会話に入り込めず、ダイキとサマルトは苦笑いをしたものだった。

クラフトは百足と対峙しつつ、サマルトの正気を失わせた相手を探していた。何処かにいる筈だった。

直接脳に語りかけ、過去から自責の念を引きずり出す……。そういった類のある種の呪いである。

真つ先に幼いダイキが精神攻撃に耐えられなさそうだが、ダイキはそこまで辛い思いをしていない。

故に、捕らわれるものがなかったのだ。

地球の日本というほぼ安全な生活で暮らしていたダイキにとって、真の恐怖など判っていないかった。

哀しかった事は、幼い頃買っていた犬が老死した事。そして、アサギが今回攫われた事。

アリナとて、クラフトとて。悔しい思いはしていても、心を挫かれるほどではない。

ミシアは言わずもがな、対象外である。

だが、サマルトは。サマルトだけが違っていた。

壊滅状態のサマルトの惑星。想像など出来ない、話を聴いても実際眼にしないと解らない。目の当たりにし、そこにいた人物こそ最も恐怖し絶望の淵に立たされる。

そこからサマルトとムーンは勇者を探して逃亡してきた、犠牲も当然計り知れない。

そこを付け込まれたことは大体誰にでも予想は出来た、王子なら尚の事民が心配だろう。逃亡し、こうして生きている自分に重い枷を填めたくもなるだろう。

剣の攻防、必死で受け止めながら叫ぶように言葉を投げかけるダイキ。

しかし、耳に声が届いていないのだろうサマルトは無反応だった。もし、この場にムーンが居たならばいとも容易く戦闘は終了していたかもしれない。あの華奢な姫君は、見た目はともかく精神は非常に強固だとクラフトは思っている。サマルトよりも逞しく、ある意味目的の為ならば”非情に”もなれる程度の。

ムーンであったならば逆に魔力を跳ね返していたかもしれないというクラフトの推測は当たっている、道を完璧に描き突き進んでいるムーンとは違いサマルトは危うい。脆い道だった、彼は優し過ぎたのだ。

「サマルト！　しつかりしてくれ！　サマルト！　トビイに笑われるから、しつかり……」

懸命に叫んでいたダイキだが、不意にサマルトの鋭い突きにダイキが対応出来ず、その心臓を一突きにされた。

「ダイキ!？」

クラフトの悲鳴に似た声、最後の百足を撃破しアリナが顔面蒼白で向かう。

勇者の一人が、この場で掻き消えてしまっは！

しかし、ダイキは平然としていた。狼狽しているアリナとクラフトに、啞然と瞳を投げかける。

確かに胸元の服には突き刺された剣の跡……穴が空いていた。

だが、血液は噴き出していないし、痛みもなくダイキも首を傾げて立っている。

驚いただけで、怪我はなさそうだった。

それは、クラフトの先程唱えた防御壁のおかげでもあり、そして。「あ、ああ、これ、か……」

死んだと思ったダイキは、確かに身体は衝撃を受けて痺れていたが胸元から手を入れて、何かを取り出す。手にとってダイキは安堵した、それをサマルトに見せて微笑する。

「御守り」

それは、サマルトが見てもクラフトが見ても、当然アリナが見ても解らなかった。

地球製の品物で、鉄製の名刺入れである。

名刺を入れているわけではない、母親から貰った御守りが入っているのだが、それと同時に。

「ああ、よかつた無事だった」

心底嬉しそうに思わず顔をほころばせる、大事そうに撫でながらそれを見つめる。御守りには穴が空いていたが、肌に近いほうに入っていたので”それ”は貫通を免れた。

一枚の写真だ。

昨年の運動会で共に同じ組の応援団であった、ダイキとアサギ二人の写真である。

凜々しく立ち、大きく腕を振り上げたダイキと隣で可憐に片足を上げて笑顔でいるアサギ。

誰が撮ってくれたのか、感謝したいくらいだった。

校内の掲示板に張り出されて騒然となったことを覚えている、あまりのアサギの凛々しさと可憐さに注文が殺到したのだ。

そんな勝利の女神の笑みを湛えたアサギとツーショットだったことに、天にも昇る勢いでダイキは感謝し直様購入したのだった。

それを当然持ち歩いていて、これが幸いした。

ダイキは苦笑いで写真を見せた、サマルトに、見せた。

「アサギの加護？　なんて」

幸運としか言いようがない、まさに偶然だ。鉄製の名刺入れが思ったより頑丈な事にも驚いたが、神の加護が働いたと思えてしまう。浮き足立って、ダイキは”サマルトに”見せたのだ。未だに正気の戻らないサマルトに。

「うああああああああああつ！」

見せた途端にサマルトから悲鳴、そして木の上からも絶叫。

慌ててダイキは名刺入れを再び仕舞うと、何事かと剣を構える。

クラフトとアリナが援護に駆けつけダイキの前に立ち塞がった、

三人で息を飲む。

サマルトは剣を手から離し、ゆっくりと地面に崩れ落ちる。構えていた銀の杖を二、三度回しながら駆け寄ったクラフトは、慌てて抱き起こした。その腕のなかでぴくり、とも動かなくなる。

が、息はある。顔色も普通だ、呼吸も荒くはない。

まるで、眠っているようだった。

「サマルト殿、しつかり！」

クラフトの揺さ振りに回復魔法、サマルトは数分後何事もなかったように欠伸をして目を覚ました。

「あ、あれ？」

皆の前で、情けない声、脱力感でクラフトが代わりに倒れこんだが、アリナはサマルトの無事を確認すると別の声の主を探し、木の上を何度も見直す。

サマルトもクラフトも無事だろう、背後では懸命にダイキが回復魔法を試みている。

二人とも傷はない、ただ精神的に参っているだけで安静にしていれば治るだろう、それよりも何故か、サマルトが戻ってきた。

ダイキはアサギの写真を見てたサマルトが、アサギに好感を抱いているから起きた現象であると……錯覚。というか、それで筋が通ると思った。

ああ、サマルトもアサギの事を余程好いているのだろう、と。

自分も、アサギに励まされるだろうから同じだろう、と。

そうでは、ないのだが。幼い勇者は、そう思いこんだ。

「おい、ミシア！ 手当たり次第弓を射れ！ 引き摺り下ろす。木の上は何かいるのは解っているだろう」

「え、……ええ、そう、ね」

啞然と成り行きを見守っていたミシアは青筋立てながら弓を放った、怒りを込めて。

失敗しているのだから仕方ない、死んでしまえ。なんて役立たず、サマルトも正気になった、百足とてすでに全滅している。

なんて鈍く間抜けで低脳な愚図なの？ ……死んで当然。

ミシアは、冷え切った目つきで無造作に矢を放ち続けた。自分の配下なのだろうが、一度たりとも失敗など許されないのである。

自分の下した命を護れぬ配下など、不要。『アリナを殺せ』と言った筈だ、ピンピンして今し方も事もあろうに自分に命令してきた。弓を握る手に力が籠もる、バキィ、と音を立てて砕けそうなほど、ギリギリと鈍い音がしている。

だが、もはや何かか潜んでいる気配すらその場にはなく。掻き消えたように、声の主は出てこなかった。弓の宙を駆ける音だけが、妙に響き渡る。

注意しつつその場で当番制で仮眠もとったが、やはり仕掛けてこない。

非常に不愉快で、気がかりだが朝、五人はその場を立ち去る事にした。

馬は二頭だ、交代で乗りながら進む。

笑みが消えたミシアは、最初に馬に乗せて貰えたので手綱を力強く握り締めながら唇を噛み続けていた。

アリナは、生きている。無傷だ、目の前を歩いている。夢ではない、現実だった。

破壊の姫君の命令も護れないなんて、愚かな無能がいるとは。アリナを見ると、どうにも腸が煮えくり返った。

あまり闇の気を放つとクラフトに警戒されるので、必死にミシアは押さえ込んだ。

隣では、申し訳なさそうに落ち込んでいるサマルトと、それを励ましているダイキ。

五人は、ようやく街に戻ると船の手配をしつつ空いた時間で再度街を調査する。

ともかく、シポラへ行った者のその後を誰も知らないの、これ以上ここでは詮索も出来ない。

ジェノヴァへの帰路、皆ほぼ無言であった。

上手く行けば、ライアン組が武器を授かり戻ってきている予定であり。

合流に、願いを。慣れた船旅にダイキは潮風に吹かれながら、願いを懸けた。

『どうか、皆が早く出会えますように。無事でありますように』

そしてそれは、あの日の事。

木の上で絶叫した人物は、確かにまだ、そこに居たのだ。五人が立ち去る時も、そこにいた。

死体だったが。

サマルトの精神を破壊し、操っていた魔術師だった。精神崩壊に携わる研究を突き詰めて、人間達の魔術師協会から破門された異端児だった。顔中に幾重にも包帯を巻き、人目を阻んで生きてきた魔術師。

決して解かれることはないと思っていた、だが。

「……お強い”気”、ですね」

空中に浮遊し、手下の成れの果てを見ていたタイは静かにそう漏らすとその死体をそのままに捨て去る。

やがてカラスや空の魔物が餌として、死体を貪るだろう。素晴らしき、生命の巡りだ。

「やれやれ……この場に居ないのに」

タイは喉の奥で愉快そうに笑うと、マントを翻し宙を舞ってシポラへと戻っていく。

「破壊の姫君様は、優秀であられる。まあ、造作もないことでしょうが」

嬉しそうに、呟いた。胸を躍らせて、頬を紅く染めて湧き上がる興奮を抑えることなく。

捕らわれ勇者の、日常生活

案内された浴室で、一人入浴したアサギは用意されていたシルクのネグリジエにふわふわのローブを羽織り、待遇にうるたえ廊下を歩いて部屋に戻ってきた。

「ここは魔界……で、さっきのは魔王様……だよな？ 確か」
恐らく、その筈だ。些か腑に落ちないが。

ベッドに腰掛け、髪をタオルで拭きながら口に出して脳内を整理整頓してみる。魔王と対面出来たのは良いが、この先どうしたものか。とても戦闘する雰囲気ではない、もう、出来ない。

この世界へ召喚された意味を考えつつ普段の癖でカーテンを閉めてみれば、ふと眼下に広がる闇。

月は先程まで顔を出していた、が、今は雲に光を遮断されている。不意に窓が揺れた、風の仕業だろうが外で奇怪な声が響いているようだ。

背後で物音がした……気がして、アサギは思わず振り返るが別に何もいない。

脈打つ心臓、背筋の冷ややかさ。静まり返る部屋が不気味で、微かな物音さえも過敏になる。

例えば遠方の従兄弟の家に泊まりに行って一人部屋で、眠るときのような。

誰もいない自宅の自室で、夜中留守番しているような。

一人きりの教室で、薄暗く校庭から声が聞こえてこない時のような。

家族で宿泊した旅館で、一人目を醒まして聴こえる時計の針の音の室内のような。

ゾクリ。思わず自身の肩を抱き締める。

広すぎる部屋が更に巨大に見えた、外から何者かが覗いているような気がした。

一人。暗闇に、一人。見知らぬ土地に、一人。
異界に飛ばされても、傍らには常に親友が、友達が、好きな人が、
仲間が……居た。

宿で眠るときも、馬車で眠るときも、皆が居てくれた。
だが、この場所は。……誰も居ない。

震える身体、顔は青褪め、吐く息は途切れ途切れに。

「ハイ様、リュウ様っ」

アサギは、慌ててドアを探すと足をもつらせながら必死でそちら
へ向かう。

魔王二人の名を呼んだ、現時点で傍にいてくれる人物などこの二
人しかいない。

廊下に出てみれば誰かが居るに違いない、そう願いながら。きつ
と、二人を呼んできてくれるか連れて来てくれるに違いない。

一方、先程失神していたハイは勢い良く起き上がると自室の枕を
一つ持ち出し、駆け足でアサギの部屋に向かっている。

寝着に着替えて、笑みを浮かべて。決して疚しい笑みではない。

向かう先は当然アサギの部屋だった、姿を見れば解るだろうハイ
は共に眠るつもりだった。

もう一度言う、疚しい考えなど、ない。

純粹に、ただアサギの傍に居たいだけである。ハイにとってアサ
ギが世界の全てであり、片時も離れたくなかった。

「何処へ行くぐハイ？ 枕なんか持ち出して……まさかアサギの部
屋に行くわけじゃない……のだぐーよね？ はははははー」

都合よく前方からやってきたリュウ、擦れ違い座間にハイに「お
やすみー」と挨拶して行く。

白地に苺模様の寝着に帽子、成人男性が着用するとは思えない、
というか魔王が着用するとは思えないデザインであるがリュウの一
番のお気に入りである。

皆最初観た時は度肝を抜かれたが、一週間後には、慣れた。

欠伸をしながらリュウは片手を振る、「いくらなんでもハイにそこまでの度胸があるわけないのだから」と笑いながら通り過ぎれば、「何を言うんだ、そうに決まっているだろう」

大真面目にハイは立ち止まりリュウを振り返ると、はっきりと断言。

はははー……と笑っていたリュウの声が、裏返る。

まるで瞬間移動、流石魔王というべきか俊敏すぎる動きだった、リュウはハイの目の前に立ち止まると勢い良く掴みかかって身体を揺する。

「な、なんだってー!? 生涯童……げふんげふん、伏字伏字……貞だと思っていた、あのハイが! あんな年端もいかない人形のような幼子を!? あーしてこーして、あっはんうっふん、ああああああ、ご無体なっ、的なー!? ふ、普通の男だったのだから!?」

伏字になっていない、魔王的発言。慌てふためくリュウを他所に眉を顰めてハイは憚然としていた。

腕を跳ね除け、襟元を直すと枕片手に仁王立ち。

「意味がわからん。私がアサギと眠ろうが、リュウには関係ないだろう。何をそんなに」

「普通、うら若き娘は……男と寝るのを躊躇すると思うのだが……何しろ相手がハイだしー」

ほぼ初対面の、二倍以上の歳の、魔王。……流石に一般的に考えて一緒に眠る娘は少ないだろう、多分。

意味ありげに語尾を伸ばされ、ハイは思わず顔に陰りを見せた。

「そ、そうなのか!? ……添い寝してもらうと、暖かいではないか。私もよく犬や猫や狸や狐を寝所に招きいれたものだ」

わあ、獣。

リュウは思わずビシィ、とハイに突っ込みを入れたがそれどころではない。

「んー、多分数分後には『きゃあ、何するんですか、ハイ様っ。不

潔、変態、あっち行ってっ』で終わりなのだぐ。さようなら、ハイ。短い恋を有難う」

「誰が変態で不潔なんだ。相変わらず失礼な奴だな……ともかく私はアサギと寝てくる」

「わあ、もうなんていうか」

ハイはリュウを押し退け、疾風の如くアサギの部屋の前まで辿り着くと激しくドアを強打。

廊下中に響き渡るくらいだ、室内は更に五月蠅そうだ。周囲の迷惑を顧みない。

「忠告してあげたのにー、どうなっても知らないのだぐー」

リュウは満面の笑みでそう言いながら、ハイの後方に立ち壁にもたれて様子を窺っている。

楽しかった、心底。

これでハイがアサギに殴られても、非常に愉快。この先一ヶ月はそれで過ごせそうだ、考えるだけでワクワクが止まらない。迷惑極まりない魔王である。

「アサギ、私だ！ ドアを開けてくれ！」

ドアに耳を寄せ、そこまでしなくてもいいのにー、とヤジを飛ばすリュウを無視し、必死なハイ。

が、中から弱々しい泣き声が聞こえてきたので、有無を言わずハイはドアを渾身の力で蹴り飛ばし、部屋に転がり込む。

別に鍵は掛かってなかったたので開いたのだが、すでにノブを回すという行為自体が面倒だった様だ。

「どうしたあ！ 私の大事なアサギ！ 誰に虐められたんだ、殺してくるから名前を言いなさい！」

ハイって、思った以上に力があつたんだぐねえ……感心してぱちぱち、と気の抜けた拍手を送るリュウも、堂々と部屋に悠々と進入。カッとこれでもか、というくらいに目を見開き猛ダッシュで床に座り込んでいるアサギの元へと駆け寄ったハイを見つめる。

数年共にいるが、死霊を操る以外に能がない魔王だと、リュウは

思っていた。それまた失礼な話だが。

結局この二人の魔王、五十歩百歩で自己中心的なのだ。

「何があった!？」

もう少し感情の抑制が出来ないものか、と隣へ歩いてきたリュウは思いつつアサギの背中をさすっているハイを見る。

勢いで力任せに抱きしめ、よしよし、と頭を撫でるハイ。

態度が、捨て猫か捨て犬を拾って初めて接する人間のようなのだ、ハイ……と思いつつ口に出さないリュウ。大事なのは分かるが、力の加減を知らないのでアサギは案の定苦しそうだった。

身体を強すぎる力に圧迫されているが、身をよじって辛うじて声を発するアサギ。

苦しいので、手短に。だが、それは省略し過ぎた。

「一緒に、寝て欲しいんですけど」と、一言。

涙で瞳を潤ませつつ（苦しいから）、微かに頬を赤く染め（先程まで泣いていたから）、上目遣い（ハイが上にいるから当然）で。

正確には『見知らぬ土地で一人きり、ここは魔界で怖いので。眠れません、出来れば知っている人に一緒に居て欲しいんですけど』……だ。

リュウは呆然と口を大きく広げて、だらりん、と前のめりになった。想定外もいいところだった。

ハイは思いが同じだった、と感極まりない程の笑みを浮かべて更にアサギを抱きしめる。

「だ、大胆な娘なのだ。や、まさかハイを女だと思って？ や、けっこうガタイは良いし。……あれなのだ、最近の娘はそんな感じ？ 清纯派に見せかけた小悪魔だぐ！」

予期に反したアサギの反応、リュウはそれでも新たなフラグを立て直す。

とりあえず……自主規制。

「そうだったのか、アサギ！ 来るのが遅れてすまなかった、泣

かせたのは私だったのだな。よし、今悪い私に罰を食らわせるから少し待つんだよ」

ぼくっ！

自分の頬を手加減無用で殴りつけ、それでも満面の笑みでアサギを覗き込むハイ。

「わぁ、きもいのだ」

「ハイ様!？」

リュウも流石にドン引きし、数歩後退する。

アサギも身体を仰け反らせて痛そうにハイを見つめる、今のが何なのかさっぱり解らない。

「大丈夫、そのつもりで来たからな。さぁ寝よう、すぐ寝よう！もう疲れただろう、ゆっくりおやすみ。」

リュウよ、さらば！ ドアはしっかり閉めていくように。もう行け、邪魔だ、迷惑だ」

「やー、ドアは破壊されてるのだから、閉め様子がないのだから」
上機嫌で、夢心地のハイ。掠れた声で破壊されたドアを指すリュウなど気にも留めない。

弾みながら優しくアサギをベッドに寝かすと、隣に自身の枕を置いて満足そうに小さく頷く。

するりん、と違和感無く隣に入り込むと、手だけ振ってリュウを追い払った。

むくり、とアサギは上半身だけ起こすと、立ちつくしているリュウに照れ笑いを。

「よかった、ハイ様が居てくれて。リュウ様も、おやすみなさい」
「え、ええああ、うん……。ぐー」

にこ、と朗らかに微笑むとぱたり、とベッドに倒れ込んで瞳を閉じるアサギ。

ハイの横で安らかに眠りすぎるアサギは、安心したのだろう、ものの数分で寝息を立て始めた。

「寝るの、はやっ!」

「まだ居たのか。ついでだ、灯りも消していつてくれな」

ハイに言われるがままに虚ろな瞳で頷くと、壊れたドアを踏みつけて廊下へと出たリュウは。

仕方ないので廊下のカーテンを引きちぎり、適当に部屋を覆い隠すようにドア代わりにする。律儀だ。

「いや、廊下に”声”が響き渡ったら皆、眠り辛いく。っていうか、眠れないく」

余計な一言。次いで一息。

「よし、よく分からないけど、なんか魔王と勇者が一つのべべべべべつどに。初対面で」

状況把握は、間違っではない。カーテンの向こう側で何が起るのだろう？

深呼吸を、五回。

地面を蹴り上げ猛スピードでリュウは廊下を駆け抜けけると、ある一つの部屋を目指した。

これは大事件である、もう面倒だから結婚してしまえばいいのにー、と思いつつ。

「おやすみなさいませ」

疾走するリュウと遭遇した魔族達が次々に声をかける、大きく手を振って挨拶しつつ、階段を上って角を曲がると二人の魔族が夜中だというのに掃除していた。

「明日は忙しくなるから、早く寝ておくのだけ！」

「はあ」

嬉しそうににこにここと愛想良く、豪快に笑いながら疾走するリュウを皆一礼して眺めた。

相変わらず元気で忙しい方だなあ、と軽い溜息と共に感心。だが、無駄に元気なのは迷惑だ。掃除をした廊下に、埃が舞った。

苦笑いしつつも掃除をきっちり済ませて、二人は道具を片づけながら互いに頷いて大浴場へと向かう。

城に住んでいる掃除担当の召使いだ、主に夜中に掃除し、朝魔王

達が不快な思いをしないように働いている。

「あのリュウ様の表情……悪知恵を働かせた後の」

「しっ！ 思っても口にするな」

カポーン……湯気立ち込める浴室の中、徐に一人が口にした。
思えば。

リュウ様の悪戯のお陰でしなくても良い掃除をする羽目に幾度と
なくなったものだ……と二人して過去を懐かしむ。

「黙っていれば、普通の魔王様なんだがな」

「口を開くと、なあ……」

「あと、寝間着の趣味が……」

「無類の毒中毒者なのも……」

黙って無くとも、普通の魔王ではなさそうだが。

二人は思った、願わくば掃除が増えませんかように、と。

しかし翌朝、破壊されたアサギの部屋のドアの片づけをせねばな
らないのだった。願いなど、聞き入れられるわけがなかった。

そんなリュウは、ようやく目指していた場所に到着する。

4星クレオ、魔王アレクの部屋である。

こんこん、と一応ノックをし、ドアの両側に立っている警備達に
軽く挨拶をし、返事を待たずに部屋へと足を踏み入れる。

中には静かに、窓辺に立っているアレク一人きり。

意外な来訪者に軽く目を開いたが、更に目を開くことになった。

「明日。急で申し訳ないけど、魔族達に召集かけて欲しいのだけ」

「明日？ まあ、伝令を飛ばせば何人かは可能だが、午後ならば。

随分性急だが、何かあったのか？」

「うん、アサギが来たのだけよ」

「アサギ？」

「クレオの女勇者ちゃんだよ、小さくて、可愛いのだ。ハイと一
緒に今寝てるのだ、懐いてるみたい。折角だし、結婚させちゃお
うかと思って」

「……そうなのか」

「うん、よろしくーなのだぐ」

にこり、と微笑んでそのまま豪快にドアを閉めて出ていくリュウ。外では警備兵が狼狽していたが、肩を叩いて気さくに笑う。魔王同士とはいえ、こつも楽に侵入を赦して良い筈はない。

当たり障りのない返事しかしていない魔王アレクは、その消えた魔王リュウの姿を思い出しながら廊下に響いている彼の笑い声を聴きつつ。

蝋燭の灯を、指で消していきながら小声で呟いた。

「勇者」

来ていたのは当然知っている、アレクとて待っていた存在だ。まさか、別の魔王が連れてくるとは思ってもみなかったが。

月の明かりだけの部屋で、アレクはベッドに入らず椅子に深く腰掛けると頭を抱えて唇を噛む。

暫し、震えていた。様々な思案が、糸になり複雑に絡まり、解けない。

「会わなければ。会って私達の願いを聞いて貰わねば。ナスタチウム、ついに……勇者が来てしまったよ。君が居てくれたら、心強いのに」

魔王アレクは、明け方までそこで頭を抱えていた。リュウからの願いはともかく、今後自分が”どうすべきか”を思案して。すべきことは、決まっている。だが、怖かった。

さて、魔王ハイと勇者アサギ。

ドアがないその部屋で、月の微かな灯りに照らされているアサギの寝顔を飽きもせずに見つめていたハイ。

かれこれ、数時間経過した。

月の位置が次第に変わるが、指で頬に触れてみたり、髪を撫でてみたり。

「かわいいー」

27歳の男と、12歳の少女、の図。

でれでれ、と鼻の下を伸ばしている男だ、警察に見つかったらその場でお縄だろう。そんな世界ではないので、よかったと思う。

うつすらと笑みを浮かべているように見えるアサギのその寝顔に、吸い込まれるように魅入っていた。

それゆえに、ハイが気づいた時にはすでに月は消え、目映いばかりの太陽が顔を覗かせていたのである。

月の仄かな幻想的な明かりから、太陽の眩しい熱い陽射しへと、明かりが変わった頃になってようやくハイはアサギから視線を外した。

「なんと!? 朝!?!」

血の気が引く、というのも、すでに予定が入っており体力を使うことなど分かっていた。

眠っておかねば魔王といえど、本来は人間であるから体調不良を起しかねない。

「今日はアサギと森へ出掛けるのだから……、相当足腰にきそうだよっころしょ。」

アサギの隣で布団を被ったハイ、隣で未だに眠っているアサギに、戸惑い気味に近づくと髪に口付けをする。

名残惜しそうに見つめ、瞳を軽く閉じ、数秒でまた開いて見つめて、閉じる……。

こうしている間にも時間は過ぎていくが、ハイにとって至福の時だった。

何故か、アサギが隣に居るだけで気分が落ち着くのが不思議だ。

鼻に刺激を感じる程の強い花の香りではなく、ほんの僅かに、動くときにだけ香る、甘く爽やかな花の香りが始終している気がして勇者だとか、そういうことは頭から外す。唯一人の、とても大切にせねばならない少女。

「アサギ」

名前を呼んでみる、軽く身を起し、顔を覗きこむとハイは再び名

を呼んだ。

当然返事はない、小さく笑うとハイは再び布団を被って瞳を閉じると、そつと深呼吸。

胸が、甘酸っぱい香りで満たされる、時折締め付けられるような感覚、だがそれが心地良い。

「不思議な、娘だな」

今まで出遭った誰とも違う、不可思議な娘。瞳に姿を入れただけで、傍にいただけで心が何かを急かすように高鳴る。胸がざわめく、身体が宙に浮くようだ。

ハイは、静かに寝息を立て始めた、窓から入り込んだ朝日が二人の顔を照らした。

「来た、のか……」

もし、室内に起きている誰かが居たのならば、その声を聴いた。が、生憎アサギもハイも眠っていたので、気づかなかった。

「ここは………思いの外心地良い」

声は、誰に、というわけでもなく一人で呟き、微かに喜んでいるような、いや、悲しんでいるような。

諦めにも似た、悲痛そうな声で二言だけ音を発すると、そのまま沈黙した。

ドレスアップ？

それから、一時間ほど。

外からは鳥の羽音に囀り、高く昇り始めた太陽の光で、アサギは軽く瞬きをしながら瞳を開いた。

何度も瞬きした、見たこともない天井の装飾模様に、豪華なシャンドリア、美しい壁紙。数分後にようやく頭が回転を始めたので、ここが何処か思い出す。

魔界だ。

魔界の自分の部屋……だと説明された客室だ。

右手を軽く額に当てて、数分ベッドの中で思案。

隣が暖かいので、首を動かして見ればハイが眠っている。

驚かずに、じつと寝顔を見ていたアサギはようやく昨夜の事を思い出した。

一人きりが怖かったので、助けを求めた……のだった。

アサギはベッドの中で大きく身体を伸ばす、腕を、脚を、思い切り伸ばして深呼吸。

起きないように、そつと脚からベッドから這い出して立ち上がった。カーテンから差し込む光に笑みを自然と零し、再び伸びをする。カーテンを開ければ窓辺に小鳥が二羽来ていたので、小首傾げて「おはよう」と呟けば、お礼に可愛らしい囀りが戻ってきた。

部屋を見渡す、テーブルの上に水差しがある。喉が渴いていた、コップになみなみと水を注ぐ。地球に居た時は、毎朝母が取り寄せてくれている水をコップ一杯必ず飲んでいた。

常温の水を飲み干しながら、地球に戻った気がして思わず嬉しくなる。

ふう、と一息。部屋を歩き回り、大きなクローゼットの前で腕を組んで仁王立ちになったアサギ。思案していたが、数分後に遠慮がちにそれを開いてみた。

昨日も確認したが、やはりそこには大量の服が所狭しと並んでいる。

目に付いたものを一つ、手に取った。

全身鏡に当って満足そうに頷くと、アサギはそーっと着ていた寝巻きを脱ぎ、ベッドで眠っているハイから目を離さずに服を着替える。

途中で起きられると、非常に困る。が、熟睡しているようだったので意を決して着替えた。

淡い水色のワンピースだ、腰と胸元に大きなフリルのリボンがついている。一回転してサイズを確かめるが、成程完璧な程合っていた。

一体どうやって揃えたのかが疑問だが、深く考えない。

アサギは部屋の片隅の洗面所で顔を洗う、冷たかったので一瞬手を引つ込めたが、慣れれば心地良い。水道なのかなんなのか、蛇口を回せば水が出る仕組みにアサギは驚いた。想像以上に生活水準が高いようである。

ジェノヴァの宿では井戸へ行き水を汲んだものだが……やはり魔王の住居は何かしら仕組みが違うのだろう。妙に納得してしまう。

目が冴え渡る、脳も起きた。タオルで顔を拭きながら、アサギはうろつろと部屋を徘徊する。じっとしていたれない性分だった。

タオルがまた心地良い肌触りで、高級ホテル仕様だ。おまけに仄かに林檎の甘い香りがしている、なんとという待遇だろう。

しかし、タオルで顔を拭きながらアサギは困惑していた。何をすればいいのかが、わからない。

「アサギー。入るよー」

「え、あ、は、はいっ」

気を抜いていたので突然声をかけられ飛び上がる勢いで驚いたアサギ、布をめくってリュウが入ってきた。そう、ドアは破壊されたままなのだから。

後ろにワゴンを押ししてきたメイド数人が窺えた。空腹にずしん、

と響くパンの香ばしい香り。思わずアサギは喉を鳴らす。

「おはよう、アサギ。朝食、一緒に食べようと思って。ハイは……寝てるのだけ？」

「おはようございます。ハイ様は、寝てらっしゃいます」

アサギに問わずとも知っていた、部屋に姿がないが、ベッドに膨らみがあるので一目瞭然だ。呆れた溜息を吐くリュウは、おどけて肩を竦める。

綺麗に身支度を整えているリュウは、ソファに堂々と腰掛けると軽く顎でメイドに指示し、テーブルに料理を並べさせた。

小声で、冗談めかして呟いたリュウ。

「何、昨晚はそんなに頑張ったの？」

「ふえ？」

「やー、なんでもないのだけ」

そんなわけ、ないか。

リュウはそう付け加えて、何をしたら良いのか右往左往しているアサギを見ていた。

「まあ、寝顔を一晚中見ていた、というオチなんだろうーな」

正解である。

手伝おうとしているアサギを呼びつけ、自分の隣に座らせるとメイド達の動きが止まるまで、暫しアサギと会話することにした。

「よく、眠れたく？」

「あ、はい。とても」

「ならよかったのだけー」

につこり、微笑むリュウに釣られてアサギも思わず微笑み返し。

やがて全ての料理がテーブルに並ぶと、部屋から出て行ったメイド達を目で追い、徐にアサギに手を差し伸べて立ち上がる。

「アサギ、私はお腹空いたのだけ。ハイを起して食べるのだけ。起してみて」

「熟睡してらっしゃるようなので、申し訳ないのです」

「やー、多分勝手に朝食を食べたほうが後々憤慨しそうだが、多分

アサギが起せばすぐ起きるから。やってみるといいぐ」

「そうですね、一人で食べるよりもみんなで食べたほうが美味しいですものね。起してみます」

戸惑いがちに近づき、とりあえず身体を揺すってアサギはハイを起してみる事にした。

その間にリュウはテーブルに移動する、着席してパンの一つを手に取り、齧りながら様子を観察だ。

「ハイ様、朝です」

手を添えて軽く、揺さ振ってみた。

瞬間、ハイの瞳がぱつちりと、というか、大きく見開かれ。ばねのように上半身を垂直に起すと、爽やか過ぎる笑顔でアサギに微笑む。

「おはよう、アサギ。よく眠れたかな？」

「……あ、はい。おはようございます」

目覚めは、爽快だ。

二つ目のパンを齧りながら、リュウは単純すぎるハイの行動に必死に笑いを押し殺していた。

ハイだけ寝巻きで、朝食を摂る。

焼きたてのパンはクロワッサンにバターロール、手作りの夏みかんのジャムをつけて戴く。

ベーコンにトロトロのオムレツ、瑞々しいサラダに、ポテトのポタージュスープ、フルーツの盛り合わせが並んでいる。

飲み物は濃いミルクだ、紅茶も珈琲も用意されている。静かに食べている二人の魔王を見比べながら、アサギは首を傾げた。

……一体、私は何をやっているんだろう。

ようやく勇者は我に返った、というか考える余裕が出てきたのだ。全てがとても美味しいので、アサギも疑問に思いつつ綺麗に出されたものを食べたのだが、何故魔王と朝食を摂っているのか。

勇者として召喚されて、魔王と食事しているのが意味不明である。「今更だが、何故お前がここにいるんだ」

眉を潜めて苺を平らげているリュウを横目で見ながらも、ハイは一生懸命食べているアサギに満足そうに食後の珈琲に入っている。普段、ここまで朝食を摂らないハイだが、今日はやたらと食べてしまったのは無論。

気分が良いからだ。食が細いのか食に無関心なのか、朝食は珈琲で済ませていた。しかし、食べてみれば清清しい気分ですらある、そういえば子供の頃はきちんと食べていたなあ、としみじみと思いを馳せる。

一瞬、何処か遠くへ行ってしまったハイだが、リュウの声に引き戻された。

「朝食を運んできたのだから、そんなあからさまに嫌そうな顔しないで欲しいのだからよ」

「手配だけしてくれればいいだろう、同席を許した記憶はない」

「酷い話だぐー……」

仲が良いのか悪いのか、紅茶を飲みながらアサギは交互に二人の魔王を見比べていた。

まったりと、各々に食後の一服中である。

リュウは上機嫌でハイを見て、アサギを見て、またハイを見て。にんまり、と厭らしすぎる笑みを浮かべてこほん、と咳を一つする。最後の苺を食べ終わり、自分を観た二人に大きく頷くとにっこりと不気味な程に爽やかな笑みを振りまいた。

「気味悪いな、なんだ」

思わず背筋が凍りつく、リュウが始終笑みを浮かべている時には

『ロクな事が起こらない』。

……何だ、一体。アサギに手を出したら承知しないからな……

目で訴えたハイだが、知ってか知らずかリュウはそ知らぬ顔して涼しげにさらり、と告げる。

「今日は、午後から魔族会議があるのだから。出席してもらおうぐーよ、ハイ」

「聞いてないぞ、急すぎる。欠席だ、そんなもの」

ハイの顔が誰の目から見ても不機嫌そのもの、仏頂面のハイならば魔王と呼ばれてもおかしくはない雰囲気だ。その表情を作っている原因は、少し置いておいて。

珈琲を自棄気味で喉の奥に流し込みながら、ハイは断固として拒否する姿勢である。

「今日はアサギと森へ出掛けるんだ、もう、決めた」

そっぽを向きながら、ハイは両手で耳を塞ぐ。

アサギは首を軽く傾げ、”魔族会議”という単語に非常に興味を持っていった。

文字通り魔族達の会議なのだろうが……何を話すのだろうか。見てみたい、と率直な感想である。

だが、自分は魔族どころか勇者だ、見せてもらえないだろう。

内容は自分の事かもしれないし、仲間達の事かもしれない、気になって仕方がない。ハイが会議の間、何処に居ればいいのかふと、不安になったアサギ。

もじもじ、と身体を左右に揺らしながら何か言いたげにしているアサギに、ハイもリュウも気づく。

「リュウ、その間アサギが一人になる。私は欠席だ。

そもそも、毎回その会議は私には全く関係がないだろう。いつもくだない話ばかりだ、給料の件や物価やら、昇給やら、設備投資等この星の住人でもないのに、よくお前はその会議に毎回出席しているな？」

ハイ的、アサギへの気遣いだった。

微笑し、アサギに軽く頷いたハイを見て、リュウはますます意地悪く笑みを浮かべる。

おどおど、と微笑んだアサギだがハイの台詞に些か疑問を抱いた。アサギが想像していた会議の内容ではなさそうだ、やはり魔族であるうとも給料等が気になるらしい。

想像では、無音で仄暗い部屋に集まった魔族達が、人間への侵攻を話しているような……。まあ、そんな魔族達ならば今頃アサギは

殺害されているだろうから、違うのだろう。

首を傾げるアサギ、どこをとつても勇者として呼ばれた意味がないような気がして来る。

魔王二人にこうして朝食を摂らせて貰っている、一応”勇者”。

考え出したら意味が解らない、本当に魔族に人間は苦しめられているのだろうか。確かに魔物には幾度か襲われていたが、大将である魔王がこれでは納得が出来ない。

「アサギは一人にならないのだから。アサギも見ると良いぐ、席も用意するから。興味あるぐ？ どう、アサギ」

「え？ ええ？」

上の空だったアサギ、戸惑いを隠せず思わず上ずった声を出す。

勇者に内容を見せるということは、本当に自分達とは無関係の会議なのだろう。

アサギはそう解釈し、とりあえず興味はあるので軽く首を立てに振る。

「えと。見させていただけのなら、是非」

「うん、そうすると良いのだから。アサギが出席なら、ハイも当然出席だぐー」

満足そうに大きく伸びをしながら、リュウはアサギに満面の笑みを。

アサギが見たい、というのならばと渋々ハイも了解をする、というか、しざるを得ない。

呆然と思案中のアサギと、軽く青筋立てて睨んできているハイを、愉快そうにリュウは笑って見ていた。

「というわけで。もしわからないけど出掛けるのは、明日にして欲しいのだから」

「……だな、森へ行くには半日では無理だ」

不貞腐れて、最後の珈琲を流し込んだハイは口元を拭きながら軽く首を回している。

寝不足気味なので、体調が思わしくないから明日のほうが都合が

良い、とも思うが。

了承したハイと、首を傾げて何やらずっと考え込んでいるアサギ。二人を見て喉の奥で笑ったリュウは、椅子から立ち上がり軽く指を鳴らした。

二人の視線を集めたところで、両手を大袈裟に掲げてその場で一回転。

「さあさ、よおく御覧あれ！」

「！」

「!?!」

リュウの声に布を押し退けて、どやどやと数人が部屋に雪崩れ込んできた。

その数、七名。アサギと同じ歳頃の少年やら、中年の男性やら、年齢も性別も様々だ。

「な、何だ貴様ら!?!」

慌てるハイと、啞然と見ていたアサギ。

七人は何やらガラガラと引っ張ってきている、アサギから見れば移動式の試着室のようだ。

「我ら！」

「リュウ様七人衆！」

びしいっ！

意味不明なポージング、中央にいそいそと歩いていったリュウが揃えば完璧である。

人数は多い気もするが、思わず戦隊モノのノリに拍手したアサギと、脱力感丸出しで頂垂れたハイを他所に、愉快そうにリュウは再び指を鳴らした。

手品の開演の如く、アサギの前に大きな箱が置かれる。

リュウの我侭かつ無謀な要求に応えられる様に、日々訓練されている無駄な俊敏さの賜物だった。

「直感で決めたのだぐ。見立てに狂いはないと思うのだぐ」
パチン、と再び指が鳴る。

部屋から出て行くリュウと擦れ違い、女性三人が狼狽するアサギを取り囲んだ。

「失礼致します」

「え？ え？」

ワンピースに手をかける女性、ハイが怒涛の勢いで止めさせるべく立ち上がる。

「ああっ、何してんだ貴様らあっ！」

激怒するのも仕方がない、顔を真っ赤にしてアサギを救出すべく進むハイを、残りの四人が懸命に押さえ込み部屋の外へ連れ出す。死に物狂いだった、魔王を羽交い絞めにする行為など誰がしたいだろう。

絨毯に跡をつけながら、引き摺られていくハイ。

無残にも部屋の外へと連れ出されたハイは、仕方なしにというか、無謀にも魔法の詠唱を開始した。

両腕から電撃が迸る、流石に顔を引き攣らせ喉の奥で悲鳴を上げるリュウ七人衆の四人だが、余裕の笑みでリュウがハイの前に立ちはだかった。

「心配しないでいいのだぐ、きつとアサギもハイも喜ぶのだぐーよ」
爽やかな笑顔、そして声。

しかし。

「ええいい、やかまし、ゴフウ！」

暴れるハイの鳩尾に、目にもとまらぬ速さで二、三度拳を叩き込んだリュウ。憂いを帯びた表情で、困ったように天井を見上げながら芝居めいた口調を。

「やだなあ、大人しくしてれば痛い目合わずに済んだのだぐー。物理的には私のほうが断然力も上、ともかく悪いようにはしないから、見ているぐ」

溜息を一つ、そして無邪気に笑った。

ハイは苦し紛れに悲鳴を上げた、アサギの名を切なく呼ぶ、廊下に響き渡った悲痛な声。

数分後。

部屋からは騒がしく走り回る音がしていたが、それが急に止まり、徐に布が開かれる。

部屋から出て来た女性三人は跪くと優雅に頭を垂れて、微笑していた。

苦痛の表情で、脂汗を額に浮かべて部屋を見たハイ、悪戯っぽい目つきで、子供のように胸を躍らせリュウも部屋を見た。

「……えーっと」

漆黒の髪に、大きな純白の花を。

可憐な花柄の光沢のある薄紫の生地をベースに、幾重にもレースが重なったセミロングのドレスを着用したアサギが、照れながら出てきた。

見た瞬間、歓喜の雄叫びを上げるハイ。勝ち誇ったようにピースサインのリュウは、拍手でアサギを出迎えた。

「はははのはーっ、どおだあ、ハイ。私の見立ては」

「見事だ、リュウ！ 素晴らしい、素晴らしいぞおっ！ お前、イイ奴だったんだな。美しすぎて眩暈が。なんかもう、美しすぎて直視出来ない、ごふう」

先程の苦悶の表情など何処へやら、羽交い絞めにされていた身体を解放されて、ハイは一目散にアサギに駆け寄る。

髪を撫でながら、困惑して赤面して、おろおろとしているアサギにそつと、耳打ちをした。

「とても似合う。先程の服も良いがこつした正装もとても、良い」

「えと、ありがとうございま……す」

そんな二人を見ながらリュウも、満足そうに頷いてリュウ七人衆に労いの言葉をかけた。

「では、会議にはその衣装で出席すること、なのだぐー。うん、私からも一言。』とても、似合っているよアサギ』」

思わず頷いたアサギ、しかし、何故会議にこのようなドレスで出席しなければならぬのか。

頭上には『？』が浮かんだままだ、しかしやはり少女は少女、美しいドレスは憧れである。アサギはゆっくりと、恥ずかしそうに微笑した。

アサギにドレスを着用させたリュウ、ここまでは完璧に自分の描いた予定通りの図である。

涙を流しながら、アサギを見つめているハイに失笑したリュウは、今後の計画を脳内再生。

ハイなど、目の前の美味し過ぎる光景に見とれて何故、アサギがドレスを着ているのか考えもしなかったのだが、何の計画もなしにリュウは無駄なことなどしない。

これは決してハイを喜ばせる為の衣装替えではないのだ、計画の一部なのである。

普段のハイならば疑うところだが、頭が現在廻らないので放置だ。去っていったリュウを見つつ、浮き足立っているハイの隣でアサギは。

「……魔王様方、よく解らない」

当然の感想を、小さく呟いた。

しかし、このドレスは気に入ったらしい。くうり、回る。

魔王二人と勇者が戯れている頃、城内の大広間には多くの魔族達が集まってきた。

リュウがアレクに願いを伝えたその後、ドラゴンナイト達が魔界イヴァン全土を夜中から駆け巡り、午後からの召集を言い渡した。

各地に居る連絡用の魔術師に連絡を飛ばし、そこから情報も流したのだが、あまりにも急すぎて多くの魔族達は当然何事か、と今も広間で憶測で会話中である。

魔王交代、魔王危篤……等、全くでつち上げの噂が溢れ放題だった。勇者襲来、とは流れないところがまた如何なものだろうか。

それは、夏の始まりを身体で感じ始める季節のことだった。

魔族達は自然の懐に抱かれるように、のんびりと過ごしていたのだ。

海辺の近くに住居を構えている者達は、打ち寄せてくる潮の波の音を聴きながら、うとうとと思わずハンモックで居眠りをしていた。森を住居にしている者達は、小鳥の囀りに耳を傾け、日中の照り返る陽射しから木の葉で身を護り転寝をしていた。

自然の雄大さを支配することなく、まるで身体の一部のように身を任せて過ごす……。のどかな風景だ。

木漏れ日を浴びながら、森を歩いて。青い草原を歩きながら、小動物と戯れ。太陽と紺碧の空、波の白飛沫と藍色の海を眺める。歌いながら、静かで小さな自然の独り言に耳を傾け、語りかけ。

そうして過ごしていた、初夏。魔族達が最も好きな季節だった、日中はともかくまだ夜中は寝苦しくはない。

そんな中で緊急に告知された本日の会議に、緊張している者も少なくはなかった。今頃ならば皆昼寝をしている時間帯だ、魔族は休息を重んじる。

溢れそうな程混み合ってきた大広間、何かと到着して来た魔族達で埋め尽くされていた。

そんな中に、一際目立つ集団が居た。

魔族騎士団を取り締まる女隊長・スリザ。

その一番部隊隊長・サイゴン。

その幼馴染で男だが女にしか見えない宮廷魔術師・ホーチミン。

サイゴンの親友にて武術師・アイセル。

当然目立つ、脚光を浴びる。この四人は平素も仲が良く、常に一緒と言っても過言ではない。

隊長であろうとも、席は用意されておらず広間の前方にて窮屈そうに四人は身を置いていた。

緊急すぎて、席が用意されなかったのだろう。スリザは待遇にすら不平を言わなかった。そこがまた、彼女の魅力でもある。

サイゴンは、腕を絡ませてくるホーチミンに露骨に嫌そうな顔で対応している。振り払おうと懸命に腕をしならせながら、隊長のスリザを見た。

「何事だと思われませんか、スリザ殿。この前の給料値上がりの件が、上手いかなかったのでしょうか」

話しかけられ、口を開いたスリザだが、その整った凜々しい表情を固まらせる。

わなわなと小刻みに身体を震わしながら、僅かな隙間しかないのに赤面しつつ強引に左足で強烈で俊敏な回し蹴りを放った。

「馬鹿者！ 誰の許可を得て貴様は人に尻を触っておる！？」

怒鳴られたのは、アイセルだ。

華麗に避け、颯爽とポーズを決めたアイセルだがスリザの蹴りの犠牲者は無論無関係の魔族。

骨が折れる鈍い音が響いた、絶叫し倒れ込む魔族に、面倒そうにホーチミンが回復の魔法を直様施す。

慣れているので、気にしない。毎度の光景だ、巻き添えを食らうものはたまったものではないが。

「やだなあ、スリザちゃん。触られて減るものでもないし、むしろ喜びなよ。うん、形の良い俺好みの尻だった今日も」

何処から出したのか、アイセルは右手に薔薇を一輪、手にしている。

花卉を一つ啜えて、スリザに流し目を送るとアイセルはその薔薇を自分の胸元へと。

面倒くさそうに、周囲の一般的な魔族達は四人から離れ始めた。窮屈な大広間で、本当に傍迷惑な四人である。

容赦なくスリザの右足は急降下、情けない声と引き攣った表情のアイセルの……気の毒にも股間に炸裂する。

「ぎいいいいいいやあああああああああああ！」

顔を赤から黄へ、最終的に青くなつたアイセルの顔、口から泡が吹き出し当然その場に卒倒する。

絶叫というか断末魔が、大広間に響き渡っていた。

天罰観面、そう呟きスリザは忌々しそうに舌打ちして脚を踏み鳴らしながら腕を組み再度アイセルの腹を踏みつける。グリグリ、とヒールで抉るように。

啞然とアイセルを見たホーチミンと、身震いし合掌するサイゴンだつた。

「大丈夫ですかあ、スリザ様あ。私達があ、ちゃんと貴女様を御守りいたしますう」

アイセルを踏みつけ、数人の少女達がやってきた。スリザファンクラブ会員ナンバー上位メンバーの、少女達だ。

先程、アイセルを羽交い絞めにしていたのは、この彼女達である。水色のツインテールに大きな薄桃のリボン、フリルとレース満載の純白衣服に身を包んでいる会長。見事な金髪の縦巻きに、漆黒のフリルと深紅の薔薇を身に纏つた副会長。……他、数名。

華奢な腕だが、あの体格の良いアイセルを押さえ込んでいたのだから、力量は見た目では解らない。周囲の男達は、皆震え上がった。「助かつた、お前達」

凜々しい表情で、爽やかに微笑するスリザ。途端に周囲から黄色い歓声が、歓喜の溜息が上がる。

噂では、その中の誰かとスリザがデキているとか、いないとか。彼女達に快心の笑みを送り、麗しく頬に触れる様子は、確かに甘い恋人同士のような。

とても先程のアイセルとは比べ物にならない態度を、スリザは彼女達に送っている。

魔族の中で、最も女性に好意を寄せられているのは、紛れもなく

このスリザであった。

引き締まった筋肉は無駄がなく美しい、男のように逞しく凛々しく、しかし女のように繊細で色気のあるスリザ。中性的なのだ、誰をも惹き付けるらしく、こと少女達には憧れの的である。

男と違い、香りも良いし立ち振る舞いが美しいので綺麗なものを好む少女達には抜群の人気だった。

「スリザってば、産まれる性別を間違えてるわよね。女の子といったほうが、よっぽど楽しそう。だからまだ処女なのよ。あの歳で処女ってのも、どうかと思うけどねー。ね、サイゴン？」

ポニーテールにしている金髪を揺らしながら、小首傾げて濃藍色の瞳を光らせホーチミンは呟く。

相変わらずしつこくサイゴンの腕に絡み付いているホーチミン、呆れ返って少女達に囲まれているスリザに軽く哀れみの念を込めて溜息を吐いた。

怪訝にそれを追い払っていた筈のサイゴンであるが、もう諦めてそのまま大人しく腕を組んでいた。

「お前が言うな、それを。この男女」

「ひ、ひっどーい！ どおして恋人にそんなこと言うの？ ただ、女の子と違ってあそこに玉がついてるだけよ？ 寧ろ、料理だって完璧にこなせるし、掃除洗濯なんでもお任せ。スリザとかよりも、ずーっと女らしいと思うのだけど、私っ」

しなりん、腕を絡ませて腰をくねらせ上目遣いのホーチミン。確かに、可愛らしいし、美人だ。

だが、男だ。 真正正銘、男だ。

朝、隣で起きると髭が見えるから間違いなく立派な男なのだ。剃っている姿も見たことがある。

今もこうして腕を組んでいるが、当然胸がないので柔らかさもなにもあつたものではない。

「四十八手も、なんでもござれよ」

「……………」

……いつものことである。

ドン引きしている他の魔族達は視線を合わせないように必死だった、巻き込まれたら精神的にも深い痛手を追うことが現実である。そんな中、ひよこ、っと起き上がるアイセル。

「ふー、危うく俺とスリザちゃんの子供が出来なくなるトコだったよー。そこらへん、注意して欲しいよね」

「あらアイセル、起きたんだ」

「ふっ、こんなこともあるのかと股間に鉄製のカバーを入れておいたから」

妙なことを自信満々で言わないで欲しい、とホーチミンは苦笑い。当の本人は自慢げに股間を指差している、だからどうしたというのだろうか。

再び薔薇を手にし、アイセルはスリザを見つめていた。くるくると、茎を回しながら。

……股間を擦りつつ。

「“ここ”は、スリザちゃんにとっても大事なものなだけどねえ。解ってないなあ」

「……あんた、一度死んだら？」

同情できず、ホーチミンはしれっ、とそう告げるとスリザの代わりにわき腹に鉄槌を喰らわしておいた。

まあ、ホーチミンの男とはいえ、か細い腕ではアイセルにダメージなどと与えられないが。

少女達に囲まれて、男装の麗人のように振舞うスリザを、真剣に魅入るアイセル。

「……また。……無理してる」

「え？」

怪訝にアイセルを見上げたホーチミンに、返答する事もなくアイセルは唇を噛むと軽く俯いた。何度か、俯きながらスリザを見た。

「……周囲が作り上げたキャラを演じなくてもいいんだよ、スリザちゃん」

小声でアイセルは呟くと、軽く溜息を吐き頭を掻く。
優しそうな笑みを浮かべて周囲と戯れているスリザを、軽く唇を
噛み締めて、見ていた。

数十分後、大広間に盛大なファンファーレが響き渡った。

ざわついていた魔族達が、瞬時に雑談を止めて静まり返る。一斉
に中央のステージに皆、視線を送った。重々しいワインレッドの力
ーテンが、徐々に開く。

「やつほーん！ お元氣かな？ 集まってくれてありがとなのただ
ー、恐縮なのだぐー！」

突如、あつけらかなとした声が響き渡り、嬉しそうに手を振って
いる魔王リュウが現れる。

数十人が、コケた。

初めて聴いた時はその場に居た全員がひっくり返ったが、流石に
数度も繰り返されると慣れる。

確かに今でも調子が狂うのは間違いないのだが、それでも辛うじ
て耐えられる。

今コケた魔族達は、慣れていないのだろう。周囲の助けを借りて
咳をしつつ、よろめく足で立ち上がった。

カーテンが全開になる、ステージの端から端を手を振りながら挨拶
するリュウの後方に皆注目した。右からアサギ、ハイ、アレク、
ミラボーが席についていた。

やや緊張した面持ちで、アサギは大人しくしている。俯き気味で、
ところ狭しと集まっていた魔族達を眺めていた。

その数時間前のことだ。

ドレスに着替えてから、アサギとハイは暫し城内を散歩していた。
昼食時間に会議がかかるが、朝食をたくさん摂った為、空腹にはな
らないだろう。

城内、屋上に位置する果物栽培所を訪れたハイとアサギは、合流

したりユウと共にそこで果物を戴く事にした。小腹は空いている、瑞々しい果物なら口に出来る。

甘い香りが充満するハウスの中で、色とりどりの果物が元気良く、光り輝いてぶら下がっていた。

亜熱帯性の果物が植えられているようだ、雰囲気は南国そのものである。

ドリアン、マンゴー、バナナ、レイシ、ランプータン、マンゴスチン、チョンプー。

アサギが見たことがあるものから、名前しか知らないもの、多種多様である。

畑を潤している汲み上げ式の汀の傍らで、三人はその場でもぎとった果物を頬張った。

アサギは馴染み深いバナナと、マンゴーを選んだ、進むような甘味に思わず歓声を上げる。

今まで食べたどのバナナよりも美味しいのは、やはり無農薬かつ、採り立てだからだろうか。

三人で他愛のない会話を楽しんでいたが、時間になったので先程こうしてステージの上上がったところである。

流石にあまりの多さの魔族にアサギも脚が強張り震えた、が、隣でハイが軽く頷き笑みを浮かべてくれたので安堵の溜息と共に震えを止めるべく深呼吸。

胸を張り、顔を上げて真っ直ぐに視線を持つてくる。手は行儀良く、膝の上に。

些か落ち着いたらしく、アサギは再び魔族観察を開始した。

魔族と一言で言っても、様々な容姿をしていた。人間に近い魔族もいれば、明らかに羽根や角が生えた魔族もいるし、肌が緑の者もいれば、人型ではない魔族も当然存在している。

ふと、黄緑の髪で額に角を施した髪飾りをしている男性と視線があったので、アサギは思わず会釈をってしまった。

男性は驚愕の瞳でこちらを見ていたが、アサギに遅れて会釈した。それは、アイセルである。

瞬きを忘れてアサギを見ていたアイセル、急に身体が冷え込む。背筋を伝う汗は、何を意味したのか。

アイセルはアサギと視線を合わせてしまい、思わず後方に倒れ込んだ。

幸いサイゴンが立っていたので、そのまま支えられたが周囲が心配そうにアイセルを見つめる。

「顔色が良くないわよ、あんた。大丈夫？」

ホーチミンが簡易な回復魔法を唱える、怪訝そうに覗き込まれ、アイセルは思わず表情を隠した。

「ちよーっと、さつきスリザちゃんに蹴られた箇所が痛かっただけ。気にすんなー」

「あら、そっ」

ホーチミンは呆れ返って、痛そうに顔を顰めだらしく頭をかいているアイセルに冷ややかな視線を送ると、サイゴンに軽く耳打ちする。

「ね、サイゴン。あそこに女の子座ってるけど……。あれ、誰？」

誰かの従姉妹？」

「髪が黒いし、ハイ様の妹ではなかるうか？ 堂々としているし」

「あー、確かに。なんか人間に見えるもんね」

魔族達も、アサギを見ていた。

当然だ、魔王に揃って見慣れない人物が紛れている。気にならないほうがおかしい状況だろう。

小柄な少女だ、大して魔力がなさそうだ。おまけに人間に見えるのだが、魔王の隣に座っている。

気品あるその姿から、魔王ハイの従姉妹か妹ではないか、と魔族達は犇めき合った。はたまた隠し子ではなかるうか、とも噂は飛び交う。

魔王ハイの耳に入っていたのなら、衝撃で寝込んでしまいそう

だ。まさか想い人が、自分の娘扱いされようとしていたなどと。

「はいはい、静かにするぐー！今日は、君達に重大なお知らせがあるのだぐー」。

あ、でもだぐ、その前に。質問があるのだぐ！素直に答えて欲しいのだぐー」

ざわめく魔族達を、手を三度叩いて静まらせたリュウは再度大きく魔族達を見渡す。視線が集まったところで、急に神妙な顔つきになつて一言。

「最近、人間界に勇者が現れたと噂があるけれど。その勇者についてなのだぐーよ」

途端、部屋中に衝撃が走った。

それは、皆小声だったが全員が全員で口々に呟いたので、大きなざわめきとなつて広間を駆け巡る。

忌々しそうに、憎々しそうに吐き捨てる者から、戸惑いながら呟く者、肩を竦めて呟く者から、今にも暴れ出しそうな者……。

反応は十人十色である、リュウは微かに満足そうに微笑んだ。

大きくなる騒音、その状況にハイが慌てて椅子から立ち上がる。

アサギも息を潜めて、けれども目を逸らさずに魔族達を見ていた。

そんな様子を、そつと魔王アレクは何を語るでもなく見つめる。

特に、アサギを。

「おい、リュウ！何がやりたいんだ!？」

こんな状況で、アサギが勇者だと知られては非常に危険だ。魔王である自分が隣にいても、無事ではすまないかもしれない。

ハイの言いたいことも解つたのだが、説明が面倒なのでリュウは軽く笑うのみ。

ハイを椅子に強引に連れ戻して着席させると、魔族達に振り返つてわざとらしく咳を一つ。

「ん、このような状況では話が出来ないぐ。重大発表は後日ということぐ」

途端、不服な嘆きが聴こえた。

”勇者”に纏わる何か、なのだろうが今は教えられないという魔王。おまけに、何故仕切っているのが魔王アレクではなく、魔王リユウなのだろう。

疑問を抱いたところで、今日はお開きらしい。非常に納得がいかないが、魔王に反論する者は誰もいなかった。

「はてさてしかし、今の君達の眩きを聞いていた限りでは……。困ったことに勇者を敵視していない者が中に居るようなのだぐー。

当然敵視している者のほうが多いだろうが、その者達は帰宅して良いく。

そうでない者は……。正直にこの場に残るようにー！ 以上。移動開始だぐっ」

顔を引き攣らせた一部の魔族、狼狽していることがリユウの目からは丸解りだった。

大移動が始まった、ぞろぞろと出て行く魔族達は、今日の招集がこれとは……。と苦笑いである。

全員出て行くかと思えば、馬鹿正直に残っている魔族も存在した。集まっていた魔族の五分の一程だろうか、紛れて出て行くこうかとも脳を過ぎったがリユウが『正直に』と言ったのがひっかかった。

後で嘘がばれても仕方ない、観念した。確かに何食わぬ顔でそのまま出て行った魔族もいたのだが、こうして残った者もいる。非常に誠実だ。

残った魔族達は顰めき合いながら、リユウの次の言葉を待っている。

「だって……。勇者っていったってなあ……。こちらが侵攻しなければ、攻めてこないだろうし。多分」

「ぶっちゃけ、戦いつて好きじゃないし……」

「和解して協定を結びたいくらいだよ」

人間達に聞かせたい台詞が満載だった、肩を竦めて、広くなりすぎた広間の中央に皆身体を寄せ合っている。

その中には、スリザ、サイゴン、アイセル、ホーチミンも居た。スリザはアレクが人間を好いている事を知っていたし、『勇者を極秘に探し、何とか和解出来ないか相談を持ち掛けたい』と稀にぼやいていたのを聞いていた。

その為、これは勇者が見つかった知らせで、勇者を良く思っている魔族達だけにだけ知らせるつもりなのではないか、とスリザは踏んでいる。

サイゴンとて、同様に考えていた。

明確にアレクから聞かされたわけではないが、自分の姉がアレク直々に命を受けて極秘に何かを調査していた。恐らく、勇者絡みだろうと踏んでいた。アレクは何も語ってはくれなかったが、そうとしか思えない。

『見つかった勇者をどうにか連れてこられないだろうか』……そのような相談ではなかるうか、とも思った。

二人とも、惜しい。

ホーチミンは別に人間だろうが魔族だろうが気にしていなかった、実際人間の友達も居る。種族はどうでも良いのだ、気が合えば。

そしてアイセルは、アサギが”何者か”気づいているので乾ききった口内を必死に唾液で湿らせながら、一人耐えている。

先程まで詰まっていた広間は、急に隙間が増えて違和感を覚える程。

そんな空間に静寂が訪れる、ドアが閉まる音が響き渡った。

リュウは、満足そうに残った魔族達を見渡す。

「うん、ありがとうなのだぐー。今日は君達だけに特別なお知らせがあるのだぐー！ これ、秘密なのだぐーよ」

パチン、指を鳴らす。

広間のカーテンが閉められ、光が遮断された。暗闇で覆われた広間に、魔族達は騒然となる。

しかしそれは、一瞬の事だった。

騒々しい派手なファンファーレと共に、眩いばかりの一筋の光が

一点を照らし出す。

サア……と月光の様に注がれた一本の光の先に居た人物、それは「……私？」

無論、アサギである。

きよとん、として隣のハイを見上げれば、わなわなと顔を憤怒で真っ赤にしリユウを睨みつけていた。

なんとなく、何がしたいかようやく目論見が解ったハイ。

アサギが着せられたドレスの意味、勇者を敵視する魔族を追い出した意味。

しかし、もはや遅いのである。

視線が交差したハイとリユウ。やめる、とハイが叫ぶよりも先に、意地悪く瞳を光らせたリユウが叫んだ。

「じゃじゃじゃじゃーん！ この子が、魔王ハイのお嫁さん候補でクレオの勇者のアサギちゃんなのだぐー！ みんな仲良くしてあげるのだぐーよっ！」

うおおおおおおおおおおおおおっ！

大喝采。

魔王ハイに、嫁。

嫁が、勇者。

勇者は無論、人間だ。

その場に硬直したままひっくり返って、床で後頭部をぶつけても起き上がれなかったハイ。

アサギは椅子から飛び降りてハイに駆け寄るが、半乱狂だった。

おろおろ、あたふた、困り果てている。

その様子に、魔族達はざわめきたった、『おお、仲が宜しいことで！』と。

静かに、アレクが席を立ちアサギとハイを見下ろす。

「ちよ、すごい！ ハイ様やるう、嫁に勇者だって！」

「い、意外……どこにそんな出逢いが！？ というか、非常に俺の理想の嫁さんだ……。物凄く可愛い子だ！」

ホーチミンとサイゴンは、各々の感想を。スリザは心配そうにアレクを見つめ、唇を噛んでいる。

そして、アイセルは。

呆然と立ち尽くしたまま、微動だ出来ずにいた。ホーチミンに揺さ振られても、アサギから視線を外すことなく。

アサギを食い入るように見つめて、胸を苦しそうに押さえ。額から零れ落ちる汗、背筋を流れる汗。

「あの子、が。あの子、だ。……名前は、”アサギ”」
アイセルは一際強く、胸を押さえつける。

あの方が！ あの方が次期魔王！ アレク様の後継者にして魔族を統治する偉大な女王

……地球から。

何故か突如召喚された勇者アサギは、人々に忌み嫌われ、神からも見捨てられた魔族の住む地・イヴァンに降り立ちその姿を見せた。

魔王ハイの、嫁として。

魔族達は、小柄な勇者を観てどう思ったのだろうか。

魔王ハイの嫁なので、人間はすんなり受け入れられた、むしろ納得出来た。

勇者、という点でも皆純粋に喜んだ。魔王と勇者で、魔族と人間の橋渡しが出来ると考えたのだ。

「平和な時代だ……」

「これからは堂々と人間界に行けるぞ！ メイドカフェだ！」

「ああつ、なんて素敵なお日でしょう！ 魔王ハイ、万歳！！！」

ばんざーい！ ハイ様、ばんざーい！ 万歳、万歳、万歳、万歳、万歳
！……………。

大合唱は、収まらず。

ハイの脳内で再生されている合唱、いつまでも響き渡っていた。

ベッドの上で低く呻きながら、身もだえしているハイ。

その様子を、アサギが心配そうに覗き込み、リュウが不貞腐れて

隣に座っている。軽い溜息、頭を掻きながらリュウは舌打ちしてハイを見る。

苛立っているのは、寝込んでしまったハイにはない、自分にだった。

まさかハイにここまで精神的苦痛を与えられるとは思っていなかった。やりすぎたと反省しているのである。

シヨックで倒れたまま、起き上がることなく自室のベッドに寝かせてから早数時間が経過。

悪戯好きのリュウではあるが、流石にこの状況が悪戯ではすまない事ぐらい理解しているつもりだ。

ハイ自身、アサギをとても好いていることなど痛いくらいに理解していた。嫁、とまではいかなくとも恋人になれたらな、と仄かに期待していたハイ。

それを勝手に公然の秘密にされてしまった。そもそもハイからはアサギに一言もプロポーズどころか告白すらしていないうえに、アサギの了解すら貰っていない状態で”嫁”扱い。

アサギ自身にそのリュウの発言を聞かれましたことが、何よりハイに痛手を負わせていた。

どんな顔をしてアサギと会えばよいのだろうか、そこである。

『どうして嫁なんですか、私』

と、アサギにあの大きな瞳で問いかけられた場合、どうすれば良いのだろうか。なんと答えれば良いのだろうか、ハイは悪夢を見ていた。

何をどう返答しても、アサギは自分の前から去っていくのだ。

そんな夢を何度も何度も観ている、ゆえに、魘されていた。

暗闇の中、光が自分から離れて行き、静寂と暗黒が支配する世界へと。遠くなっていく光を必死で追い求めたが、どれだけ走っても追いつけない。

魘されるハイを、懸命に水に浸した布で看病しているアサギはそんなこと露知らず。

そもそも、アサギは先程のリユウの発言を全く気にしていなかった。ハイがそこまで考え込む必要など、どこにもなかったのだ。

それはそれで、ハイに気の毒であるが。

まず、嫁発言。歳が、違いすぎるのでアサギ的に対象外である。そして出会って間もないのに、何故結婚。

アサギはこう考えていた。勇者としてここに滞在する為に、カモフラージュで嫁、という肩書きがついたのではないかと。

それが自然だろう。非常に利巧だ。

看病するアサギの後ろで、椅子から立ち上がり困ったように何をすることもなく部屋を徘徊するリユウ。

見舞いに来たものの、特に何もすることがないので立ち尽くしているアレク。

魔王が三人、揃いも揃って駄目男っぷりを発揮している。

時は既に、月が顔を出し辺りを闇に覆う刻である。

部屋をぐるぐると回り、たまに椅子に腰掛けて首を捻り、意味もなく部屋の中央で踊ったりもしていたリユウだがやがて名案が浮かんだらしく嬉しそうに掌を叩いた。

名案、というよりは悪知恵、悪巧みが閃いたらしい。この状況を打破出来ることは間違いなかったが。

きよろきよろと周囲を見渡し、わざとらしく大声で叫ぶ。

「もうこんな時間なのだから、起きないハイは仕方ないから放置して三人で夕飯食べようなのだから。そうしようなのだから、腹ぺこりだから」

そうだ、そうだ！ リユウ自身が返事をする。

無意味にアレクに微笑みかけ、アサギの隣に立ち肩にそっと手を置いたリユウ。

アサギは申し訳なさそうに見上げると、ハイの看病を続ける為に丁重に断ろうとした。

その時である。

「くおらあ、リユウ！ 人が倒れている間にアサギを誘うとは、な

んたる非常識な事をつ！私を置いてとか、どういう神経をしているんだ貴様はっ」

床に臥せっていた、瀕死の状態であったハイであるが、勢い良く跳ね上がった。

布団を投げ飛ばし、額にあつたアサギが使っていた布をきつく握り締めながら、リュウを恐ろしい形相で睨み付けた。元気そうだ。

「あは、おはよーなのだぐ」

「おはよー、ではない！大体貴様はっ」

しかし、その勢いは何処へやら、脇にいたアサギを視界に入れた途端にハイは床に落ちた布団を拾い上げて再びベッドに潜りこんでいった。

まるで、つつかれて殻に戻った蝸牛のごとく、である。

「ハイ様！大丈夫ですか？何処か痛いですか？」

再び布団人間と化したハイを、アサギは揺さ振るが返事はない。

数分後「私はアサギに会わせる顔がないんだ……」と、低く、くぐもった涙声のハイの声が布団から聴こえてきた。

先程の悪夢が、甦る。不安で仕方ない、こんな気持ちは初めてだったのだ。

無理やり連れてきて、嫁……普通は激怒するだろう。

ハイの心臓は爆発寸前、その威力はイヴァン全土を巻き込むほどの凄まじい威力。

先程のハイの声は弱々しく季節外れの蚊のようだが、心臓の音だけは大きく、震えも大きいのでそちらのほうが音がよく聞こえる。

とにかくハイは不安だった、恐怖を全身で体感していた。我が物顔で生きてきたハイが感じた、生まれて初めての底なしの孤独感と絶望。

遙か遠い上空に瞬時に移動し、そこから真つ逆様に落下しつつ、世界は地震と火山の噴火、隕石の衝突で崩壊し、その様を見つめながら自分は空中分解……というような感覚。

大袈裟だが、本人はいたって真面目だ。

ともかく、アサギに何か口を開かれたら人生が終わる気がしていた。

ハイは、布団を被ったまま断固、出ない姿勢である。非常に貧相な魔王だ。

深い溜息、リュウはアレクに肩を竦めて首を振った。

臆病だという事は理解したが、度を越えている。軽い冗談だ、で済ませば良いのだ。

……まあ、ハイの性分からするとそれが出来ないのだろうか。

部屋が沈黙に包まれて、気まずい空気が流れる。

「あの、ハイ様。何かしましたか？」

「アサギは何も悪い事などしていない、私が全ての原因の発端で、元凶だ……」

わけが解らず、アサギは俯いて布団を擦っている。

まさかハイがそんなことで悩んでいるとは知らないの、自分に会いたがらないハイに、不安になったアサギである。

リュウとアレクは互いに顔を見合わせて小さな溜息と苦笑い、二人には、ハイとアサギの考えが手に取るように解った。客観的に見ているからだ。

無表情で、アレクはそんな二人を見つめていた。感情が全く読み取る事ができない、その表情の奥に隠されたアレクの思いを今はまだ、誰も知らず。

緊迫感のない欠伸を一つ、リュウは空腹だったので、勝手にあつたクツキーを貪っている。

それでも律儀に部屋を出ていかない二人の魔王だった。

ハイは、布団の中で猫のように丸くなりながら「嫌われたらどうしよう、自殺しよう」と、そればかりを考えている。

しかし、このまま布団の中で一生を過ごすわけにもいかないのだ、当たって砕ける、飛び出すべきだろう。

しかし、行動に移すことが出来ない。震える身体、次々に浮かんでは消える最悪な映像。

繰り返し、繰り返し、同じものを観ている。眠っているような、醒めているような、不思議な感覚。

深い闇に堕ちて行く、ふわっと、突如浮かび上がりながら、どこまでも底がない闇を落下していく感覚。

何度も、繰り返し……。

暫くして、ハイは瞳を擦りながら暗い布団の中で目を覚ましていた。

どうやら、本当に眠ってしまったようだ、考え疲れたのかもしれない。今は一体何時なのだろうか、どのくらい布団に隠れていたのだろうか。

まだ、ぼんやりとしている脳を必死で起しながら、ハイは麻痺していた腕で上半身を辛うじて起し布団から這い出る。

深い溜息一つ、部屋を見ようにも瞳が慣れず見えない室内。

真つ暗だった。月の明かりがない、カーテンが締め切つてあるのだろう。

ハイは、自分の傍らで寝息を立てている人物が居ることに気がついた、恐る恐る近寄り、必死に瞳を擦つて凝視すれば。

すーすー……。

こんな可憐な寝息を立てる人物など、ハイの周囲に一人しかいない。間違つてもリユウではない。

アサギである。

看病していたアサギ、必死に声をかけていたアサギ、いつしか周囲の暗さと共に眠気に襲われて、あのドレス姿のまま眠っていたのだ。

今宵は普段よりも温度が低く、露出した肩が寒そうである。戸惑いがちに触れてみれば、やはり冷たい。

ようやく慣れて来た瞳でアサギを優しく抱き抱えると、そつとベッドに寝かせて布団をかけてやる。

アサギが微かに笑つて、唇を動かしていた。聞き取ろうと近寄つたハイ、アサギの唇から聴こえたのは。

「ハイ様」

ハイの、名前だった。静かに、震える手でアサギの髪を撫でる。不意にドアをノックする音が、ハイの耳に届いた。控え目な音、起さないように気を使っている来訪者だ。

ハイは静かに立ち上がると、寝返りをうったアサギに微笑し、軽く頭を撫でるとドアへと向かう。

アサギは疲れているのだろう、深い眠りに落ちているらしい。ドアノブに手をかけたハイは、一瞬表情を曇らせた。

手を離し、宙で停止したハイの右手。恐らく、ドア向こうに居るのは間違いない。”あの男”だろうが。

しかし、油断は出来なかった、アサギの存在が魔族の多くに知られてしまったからである。

確かに、勇者を敵視していない魔族にのみだった。だが、そんなものは信用出来ない。

”勇者の命を狙う者”ならば、躊躇せずこの部屋に来るだろう。例えこうして、魔王が護衛についていようとも。

あの、リュウの傍迷惑な召集のお蔭でアサギの命は危険な状態に曝されているのだ。

アサギは、魔族ではない人間だ。

ハイとて人間だが自分は2星ハンニバルにて悪霊を統治し、破壊と虐殺を行い、魔物を従え破壊の象徴として君臨していた。絶対的な権力、そして他を畏怖の念に陥れる威圧感。

だからこそ、人間でありながら魔族達と肩を並べてこうして優雅に暮らしているのである。

魔王であるから。人間でありながら、魔王なのだから。

しかし、アサギは。アサギは勇者だ、人間であり、更に勇者だ。

ここは魔界、魔族の住まう土地、勇者とは敵対関係にある場所である。命を狙われないほうが、おかしいというものだ。

そもそもハイとてほんの数週間前は勇者を探し出して、抹殺するつもりだったのだから。

狼の群れの中に放たれた、生まれたての子羊のごとく。餓えたライオンの折の中に投げ込まれた、ウサギのごとく。

勇者といえども、まさかそんな魔族達を相手に一人で立ち回りが出来るとは思えない。

気分が億劫なまま、ハイは再び叩かれたドアに怪訝に目を向ける。まあ、現時点で何者かがアサギを狙ってきたのであるならば自分が返り討ちに出来るのだが。

ただ、アサギを起したくないだけである。

魔王なのだから、どんな相手が来ようとも、退けられる自身は当然ある。

ともかく、深い溜息を一つ、ハイはようやくドアを多少開いた。ドアから、強烈なランプの光が差し込んできた、瞳に痛い。

思わず瞳を瞑りかけたが、敵だとすると非常に危険だ、ハイは必死に瞼を開いて相手を見る。

「リュウカ」

予定通りの顔だ。その後ろにアレクも控えていたので、ハイはドアを半分ほど開いた。

ランプの明かりで、アサギが起きてしまわない様に、という配慮である。

「ハイ。……落ち着いたようだな」

アレクの柔らかな声に、素直にハイは頷く。

リュウも微笑んだ、何時ものような悪巧みの厭らしい笑いではなく、純粹に穏やかに。

「しー」と指先を口元に当てて、アサギを見つめながら語る。

「あのね、ハイ。アサギは何も食べずに、ずっとハイの傍に居てくれたのだぐー。食事に誘ったんだけど、ここにいる、って。私たちはさ、先に少し食べさせてもらったのだぐー」

「なんと、アサギが……」

申し訳なさそうに顔を歪めて振り返ったハイ、アサギは寝息を立てて眠っている。

「ごめんなのだぐ、ちょっと調子に乗りすぎたのだぐー。謝る」と、頭を下げようとしたリュウを、ハイが制する。代わりにハイが、深々と頭を二人に下げた。

そのハイの態度に、微かにアレクは眉を潜めて驚愕の瞳で見つめたが、それも一瞬だ。

再びそんな素振りなど見せぬように、ハイを見つめている。

「いや……。私も悪い。アサギに恐れずに説明すべきだったんだ。あの子は、しっかりと私を待っていてくれたのに、な。嫌われてしまったのではないかと、疑心難儀に捕らわれていた」

リュウとアレクは顔を見合わせ互いに頷き、小さく笑うとハイの背を叩く。

「食事、作らせておいたぐーよ。夜更けだけど何か腹には入れたほうが良いと思っただのだぐ。アサギも起してあげるぐ、皆で庭で待つてるから後から来るんだぐ」

しっかりと、なのだぐー。

耳元でそう付け加えて、リュウとアレクは静かに去っていく。

残らなかったのは、ハイへの配慮。二人きりのほうが説明もしやすかるう、というところか。

ハイは頷き、二人を見送ると手馴れた動作で自室のランプを燈す。息を大きく飲み込んでから、やや躊躇してアサギを揺さ振った。

光で目が痛いといけないので、ランプは離れた場所へと。

熟睡しているのに起すのも可哀想な気がしたが、今ならば今日の魔族会議でのこと、そして先程の自分の態度を素直に謝罪し、説明出来そうだった。

明日には、その勇気がなくなってしまうような気がして。

やがて、ゆっくりと眠たそうにアサギは瞳を開いた。

「ハイ……さ、ま？」

寝ぼけ眼で、瞳をこすりながら、アサギは静かに伸びをして起き上がる。

「ああ、そうだよ。おはよう」

小さく、頭を撫でながらそう告げたハイ、声は柔らかだ。

安心したようにアサギは、ようやく会話が出来た事に喜び、嬉しそうにハイの胸にもたれて再び目を閉じた。微かに赤面したハイだがぎこちなく頭を撫でながら、静かにそれでいて晴れ渡った空の澄み切った様な明るい声で語る。

「心配を、かけてしまったな」

その言葉だけで、アサギには十分だった。

瞳を開けて見上げて笑うと、謝罪しようとしたハイの唇をそっと指で押さえるアサギ。

驚いて微かに赤面したハイに、くすくす、とアサギは明るく笑うとお腹を擦った。

稀に、突如として色香のある仕草をする子だ、とハイは思わず跳ね上がった胸を紛らわすように慌てて言葉を発する。

「行こうか、リュウとアレクが食事を用意してくれたそうだよ」

「私、お腹ぺこぺこです！」

くすぐったそうに笑う二人、空気の入替えで開いた窓から風が吹きぬけ、雲隠れしていた月が顔を出し、部屋にも光を届ける。

夏の星座も夜の空に、燦然と輝いていた。

庭への階段を下りながら、ハイは心地良い空気の中に混じっている胡蝶蘭の香りを嗅いでいる。

恐ろしいほどの、至福の時だった。

やがて、庭には簡易だが立派なパーティ会場が設置されており、目に入った瞬間にアサギは歓声を上げてハイの手を引いて走り出していた。この辺りの無邪気さは子供だ。

庭の大きな木に、丸い虹色の光が幾つも幾つも瞬いており、純白のテーブルクロスの上には水に浮かべた蝋燭と共に食事が並べられていた。

リュウ、そしてアレクが手を振っている、他に。

「初めまして、アサギ様」

見慣れない魔族四人がいたので、アサギは微かに戸惑ったが慌て

て礼をした。

スリザ、アイセル、ホーチミン、サイゴン。この四人だった、人は多いほうがよいだろうと、リュウがアレクに選抜してもらい、この四人を叩き起こしたのである。

熟睡していた四人だが、不思議と不機嫌さは生まれて来なかった。魔王直々の命令でもあり、何より興味の対象の勇者のアサギに会えるのだから当然か。

すらり、とした女性が一步前に出て、会釈をする。凜々しい女性、軽快な短髪の黒髪が良く似合う美女である。

「私はスリザと申します。一応このような女の身ではありませんが、魔族の隊長として、アレク様にお仕えしております。宜しくお願い致します」

濃紺の長髪に、緑の肌、漆黒の瞳の長身の男が次にアサギの前に出る。

「俺はサイゴンと申します。スリザ隊長の部下として、アレク様にお仕えしております。剣士です、ご用命があれば、なんなりと」

見事な金髪、濃藍の瞳に長身、何処かのスーパーモデルのような美女が穏やかに微笑んで会釈をする。

「私は、ホーチミンです。魔術師なの、宜しく申し上げますね」

そして、魔族会議で視線が交差した黄緑の肩までの髪に、額に角を象った飾りをつけた濃緑の瞳の青年だ。

「アイセルと申します。武術師です、サイゴンとは親友です。宜しく申し上げます」

二人の視線が交差した、アサギは不思議そうにアイセルを見ていたが、アイセルは急に引き攣った笑みを浮かべると地面に平伏していた。

驚いた周囲、アイセルは、がはは、と豪快に笑いながら頭を掻いて起き上がった。

「いやーすいません、丁寧な言葉は苦手ですー。何より、あまりの美しさに身体がついつい反応を。思わず平伏してしまいました」

魔王と勇者、出会いの先に

豪快に馬鹿笑いをしつつポリポリと音を立てながら頭を掻くアイセルに、スリザの肘鉄が容赦なく叩き込まれる。

低く呻いてよけたアイセルは、ふらついた足取りでアサギの前へと辿り着くとにこやかに笑った。きよとん、としているアサギに右手を差し出す。

不思議そうにその手を見たアサギ、その瞬間手品の様に深紅の薔薇の花が一輪飛び出してきた。思わず感嘆の声を上げたアサギに、アイセルは薔薇をその黒髪に挿して微笑む。

「棘は抜いてあるから大丈夫ですよ、でないとおれが怪我しますから。……ああ、その艶めかしい黒髪に良くお似合いだ」
「わあ、ありがとうございます」

拍手して零れ落ちるほどの笑顔を浮かべたアサギに、アイセルはつられて微笑んだ。が、一瞬瞳を細めて鋭い眼光で挑むように見つめる。

気付いた者は、アレクだけ。そ知らぬ振りをして、アレクは静かに移動した。

部下達の自己紹介が終わったので、ようやく佇んでいた魔王アレクがアサギへと近寄る。

思わず、皆に緊張が走った。

スリザは、固く拳を握り締める。サイゴンは、背筋を伝う冷や汗に唇を噛締める。ホーチミンは、手から吹き出る汗を必死に衣服で拭いていた。

見事なまでの銀髪、神秘的な月を連想させるその長い髪に、紅玉の様な眩く光を放つ伶俐な瞳。整った顔立ちの魔王アレクは、静かに目の前の小さな勇者を見下ろした。

途轍もなく綺麗な男の人だ、とアサギは思った。トビイも美形だがまた違った凄みがある。ハイとリュウも整った顔立ちだが、二人

よりも更に気高く秀麗な雰囲気である。

”魔王”という肩書きが最も似合う魔王だと、思った。というか、納得できた。

「初めまして。……私は、アレク。名前くらいならば聞いたことがあるだろうか、4星クレオの勇者よ」

風の声の様に澄み切った空気に良く通る声で、アレクは告げる。思ったより高音だ。

アサギは小さく頷くと、口元に笑みを浮かべてこう答えた。

「初めまして、アサギです。魔王、アレク様。……私の、敵ですよ」

お辞儀をしたアサギは、顔を上げると真っ直ぐにアレクを見つめ続けている。

まさか、『敵』だなんて言うとは思わなかった、リュウは思わず口笛を吹いた。隣でハイが、リュウを殴りつけ、唇を噛締めると二人を見守る。

目の前に正統なる魔王アレクと、正統なる勇者アサギが対峙している。

互いに、敵である。……一般論ならば、だが。

沈黙しているアレクに、アサギは続けた。

「4星クレオの魔王アレク。多分、私の敵という立場なのだと思います、というか、思っていました。魔王と勇者って、対立しているものだと思っていたので。なので、質問させてください。『あなたは、私の敵ですか？』」

大きな瞳で、そう躊躇せず聞いてきたアサギに、多少アレクは面食らった。

まさか、そのような質問がくるとは思わなかったのだ。唇を舌で湿らせ、アサギを見据える。

口を開きかけたが、ふと、アサギの瞳が黒ではないことに気がついた。

「緑……。新緑の、娘」

ぼそり、と呟いたアレクに、弾かれたようにアイセルがアサギを凝視する。

アサギの髪も、瞳も漆黒だ。美しい、鴉の濡れ羽色である。しかし。

月と星、天上の光に照らし出されて不思議と、アサギの髪と瞳が……緑に見える。

「お前が敵だと思うのなら、私はお前の敵なのだろう」
静かに、アレクはそう告げていた。

瞬間、その場にいた全員に背筋を、何かが走った。ぞわり、とした感覚に、思わず身体を引き攣らせる。

皆、息を殺してアサギの返事を待つ。

「……では、敵ではないのだと思います。改めて初めまして、私はアサギです。ハイ様と仲良しのアレク様、よろしくお願いします」
朗らかな、声だった。

一瞬にして、柔らかな日差し of 太陽がそこに出現したかのような空気に包まれた。

まどろみを誘う暖かな陽射し、若葉の香る草原で、見事な大木の木陰で皆で一休みしているかのような。

そんな空気が、間違はなくそこには出現した。アサギの、声と、笑顔、それだけで。

啞然と、皆アサギを見つめる。

最大の敬意を込めて、肌で”器”を直感して、アイセルは再び平伏すかのように地面に倒れ込みそうになった。

が、寸でのところでアレクに腕を捕まれた。

意識が消えかけていた、我に返ったアイセルは苦笑いしてアサギを見つめる。

「い、いやあ、腹が減ってね。何か食べませんかー、一緒に。眩暈が、うん、眩暈がね……」

苦し紛れの声だった、が、平素から飄々とした態度をとっているアイセルなのでサイゴンとホーチミン、スリザにはそれで十分だっ

た。三人は呆れ返って苦笑している、冷汗をかきながら安堵するアイセル。

アレクだけが、気付いていた。アイセルが機転を利かせて、アサギに跪くことを回避したことを。

一歩前に進み出て、アレクは目線をアサギと同じ高さにするようにしゃがみ込む。

「では、よろしく。ハイのお気に入りの娘のアサギよ」

その声は、若干震えていた。

何故ならば、待ち焦がれていた相手に出会えたからだ、渴望していたのだ、この瞬間を。

勇者を、待っていた。4星クレオの魔王は、勇者を待っていた。

魔王の望みは、勇者と手を取り、魔族と人間の隔たりを失くす事だった。

魔族が人間に歩み寄ろうとしても、人間側から受け入れを拒否される。それは、魔族達が高等な魔力や攻撃力を所持しており、人間から畏怖の念でしか見られない存在であるからであり、過去から植えつけられた人間たちの”魔族への恐怖”は拭えない。

そして、魔族全員が共存を願っているわけではない。

それでも、アレクは人間と無意味な争いは避けたかったので魔王という立場ながらに暗躍してきた。

まさか、同じ魔王が勇者を連れてくるとは思わなかったが。

そして、その勇者が幼い少女で、しかし”予言通りの”勇者だとは。

「ビール、ビール！ いったただっきまーす！」

アイセルの大声に、騒然となったその場。両手に大ジョッキを抱え直様、アイセルはビールを豪快に呑み始めていた。

「も、申し訳ありませんアレク様、このような失態を……」

スリザが気分良く笑いながら飲み食いしているアイセルを冷やかな視線で睨みつけながら、アレクに謝罪をする。部下ゆえに、失態は見過ごせない。

魔王の目の前で痴態を繰り広げるわけにはいかなかったのだが、アレクは穏やかに微笑んだ。

「良い、楽しいときは笑うものだ。無礼講としよう。……さあ、アサギ。たくさんお食べ」

「はい、ありがとうございます」

思わずスリザは深く敬礼した、あのようなアレクの表情を見たことが滅多にないスリザは、胸に何か熱いものが込み上げる。

偽りでも、演技でもないアレクに心からの笑みだった。普段、気落ちし、窓辺から暗く魔族の地を見ていたアレク。

勇者の出現で、一瞬にして表情が変わった。

これが勇者の力量？

スリザは、アレクと共に並べられた食事につけ始めるアサギを、値踏みするように見つめた。

「不思議な、娘」

率直な意見だ。アサギの周囲の空気には、違和感を感じるのだ。自然と、心が落ち着くような、何か楽しい気分になってしまいうな。

ハイとリュウも加わり、庭で皆思う存分騒ぎ立てる。

スリザは一人蚊帳の外、仲良く語る皆を見ていた。見ていると、不思議と自分も輪に入りたくなってくる。

そつと脚を踏み出しワインのグラスを片手に、興味をそそられたアサギの元へと歩み寄る。

「キャベツの土瓶蒸し、うまー！ 桜海老の香ばしさに、酒の香り、そして食欲をそそるこのレモンの爽やかな酸っぱさ……美味っ」

ビールと料理を交互に、酒豪のアイセルは、ひたすらに酒を呑み続けている。

くい、つとアイセルの服が微かに引つ張られた、上機嫌でそちらを見れば。

「可及的速やかに……頼む」

「……了解いたしました」

アレクが、耳打ちをした。

急に真顔に戻ったアイセルは、重々しい口調でそう返答をする。

二人は、アサギを見つめる。勇者を、見つめた。

退屈凌ぎに、弄ぶ

魔王の庭にて、勇者と三人の魔王、及びその信頼を受けている魔族四人が楽しく談話しつつ、食事をしていたその頃。

7月上旬の月は、雲一つない空にぽっかりと浮かび、淡い光を放っていた。

海に、森に、その光を惜しみなく降り注ぎながら静かに神々しく浮かんでいる。

「つままない……」

その魔界の森で、マビルは小さく心底つまらなそうに呟いた。

足元には、死んでいる魔族の男。

まだ若い男だ、四肢が切断されて絶命していた。整った顔立ちだったのだろうが、恐怖と激痛で顔は歪み、凝視しがたい表情である。マビルは、その死体を火炎の魔法で焼却しながら足元の石を何処へともなく蹴り上げる。

「つままない……。そして、なんかムカツク」

歯軋り。歯が欠けてしまいそうなほど、力強く歯を噛み付ける。胸に粘着ある汚泥が絡みついたようで気分が悪い、胸のうちから込み上げる、この苛立ちをどう表現したらよいのだろう。

「勇者、ムカつく……気がする」

マビルは、再び石を蹴り上げた。石は空中で粉碎される。

パラパラと散りゆく砕けた石を見つつ、遠くの月を仰ぐ。

髪を風に靡かせて、マビルはスイィ、と宙を移動した。森に何かしらの気配を感じたので退屈しのぎに、出向いてみることにした。普段は自ら動かない、獲物が来るまでその場にいる。自分から動く事など体力と時間の無駄で、馬鹿らしい事だと思っていた。

森の端に、赤い髪の少年が立っていた。迷子なのだろうかなかなかの顔立ちである、マビルは軽やかに地面に降り立つとそっと右腕を伸ばす。

迷子、というよりもマビルが誘き寄せた、と言ったほうが良いかもしれない。蜘蛛の巣にかかった虫だということだ、本来ならば境界が張つてあるので入り込めない筈なのだから。

突如現れた美少女マビルに、呆気に取られていた少年だが誘惑の香りには逆らう事など出来なかった。

小さく舌を出して、艶かしく唇を嘗めるマビルから淫靡な香りが漂う。色香にあてられて、少年はふらふらと近づいていった。

あらよかった、あたし好きな男の子！ 小さく零したマビルは、嬉しそうに微笑む。

「あたし、マビル。よろしくね。今、とっても暇なんだけどお、あなたはあ、あたしと遊んで楽しませてくれるう？」

とりあえず、退屈凌ぎにはなりそうだった。唾然としている少年だったが、全速力で頷いていた。従うしかなかった。

「マビル、君は今まで見た誰よりも美しい！」
「そお？　ありがとー」

跪いて、足の爪先に口付けの雨を降らし始めた少年。15歳くらいだろう、よく見るとまだ幼い。マビルは全裸で、自分に平伏している少年を満足そうに見下ろしている。

地面には脱ぎ散らかした二人の衣服、マビルの身体には無数のキスマーク。

二人は直様、秘め事を始めていた。既に情事の後だ。

「あなたもー、えっち、上手いね。うん、気に入った！　顔も綺麗だし、綺麗な宝石くれたし。次は可愛いお洋服頂戴ね」

「勿論、マビルが望むなら！　例えば火の中水の中。君の愛があればドコへだっていけるよ」

「わーい、ありがと。マビル、嬉しいー」

手の中にある指輪を空へと掲げる、少年が肌身離さず持っていた親から譲り受けた物だ。非常に精巧な作りだったのでマビルが興味を持った、だから少年はいとも容易くあげてしまった。

大きな瞳を輝かせて、小首傾げて「それ、ちよーだい」と言われ

て何度も頷いてしまった。

本来ならば、絶対に有り得ない。代々伝わる由緒正しい指輪だ、間違っても他人の手に渡す事などなかった。

とん、と地面を蹴って近くの泉に入るマビル。艶やかな黒髪に、水滴がしたたり、更にます妖艶な香り。

思わず魔族の少年は慌てて立ち上がると夢中で追いかけて、泉に入る。笑いながらマビルを抱き締め、唇を貪り、胸を弄り。

「愛してるよ、マビル」

「うん、ありがとう」

「永遠に、愛しているよ。君の愛があれば、死なないよ」

「ホント？」

狂おしそうに熱した声を出し、懸命にマビルを抱き締めている少年にマビルは無邪気に笑った。

胸に舌を這わせていた少年の頭を抱き締めたかと思えば、マビルはそのまま一気に水中へと少年の顔を押し込める。

「ぐげばべえあー！」

無数の泡が、下から。

バシャバシャ、と暴れる少年をマビルは愉快そうに押付けたまま、無邪気に笑ったままだ。

数分後。

静まり返った、泉。マビルは舌打ちし、少年の頭から手を離す。

ゆっくりと、少年の身体が上下に揺れた。水に漂っている、無論動かない。

「……死んでるじゃん。嘘つき。あたしの愛が足りなかったのかしら？」

溺死だ、水中で少年は呼吸など出来るわけがなかった。水に浮かぶ、揺れる赤い少年の髪は妙に美しい。

が、つまらなそうにマビルは小さく欠伸をする。玩具は、なくなってしまった。また、退屈な時間が訪れる。

「誰が死体の処理すると思ってるの？ 死ぬなら全部あたしの目の

前から消滅させてよね」

忌々しそうにマビルは少年に唾を吐き捨てると、それでも泉から引き摺り上げる。

頭を思い切り踏み潰し、小さく火炎の呪文を唱えて放った。水中に放置しておいたら腐敗して、異臭を放つことくらいマビルとて理解している。そんなものを見る前に、消去しておいたほうが楽だ。

「男なんて、馬鹿ばかり！。でも、しまったな、お洋服持ってきてもらえばよかったかな」

全裸で、地面に転がると瞳を閉じた。

「苛々する。……落ち着かない……。これもあれもそれも、おねーちゃんが来てから！」

唇を、噛締めた。見たことがない姉に、無性に腹がたつ。何故こゝも苛立つのだろう。それは恐怖心でもあるような気がしていたが、マビルは口には出さなかった。

弱々しい、自分の足元にも及ばない姉の気配に何を躊躇うというのだろう。歯痒くて、もどかしい感情が自分を支配する。

誰かが耳元で囁くのだ。『このままでは、お前の全てが姉に持っていかれるよ』と。

月影の晩に。

燃え盛る死体の隣で、マビルは眠れずに瞳を閉じる。

夜は、嫌いだ。一人を実感するから、嫌いだ。

寝付けずに立ち上がったマビルは、家を目指した。無理やり酒を呑み、ベッドに入って眠る。

酔いが回り、なんとか寝付けそうだった。一人きりの、静かな家。誰もいない、孤独な家。慣れているが、非常に物悲しい。

……夢を、観た。

茶色い髪の見知らぬ男が、自分を見て微笑んでいる。何をしてもなく、見ている。

思わず手を伸ばしかけたが、やめておいた。だが、その男は穏や

かに微笑んだまま常に隣に居た。

翌朝、マビルは。

……泣いていた。枕が濡れていた、恥じて慌てて顔をこする。

何故、泣いたのか解らない。けれども、切なくて苦しくて、確かに涙を流していた。

魔王様&勇者

4星、クレオ。その、赤道付近に位置するロシファーズ島。長く煌びやかな銀髪を風に遊ばせながら、魔王の一人が降り立つ。珍しい事ではない、彼は頻繁にこの地を訪れていた。

なぜならばこの島には、魔王アレクが唯一心を許すことが出来る最愛の恋人が滞在しているからである。

微かに頬を赤く染めながら、普段の青白い顔色は何処へやら健康的な赤みを帯びてアレクは駆け足で恋人を捜していた。

全く雰囲気異なる、別人のようだ。

「ロシファ、ロシファ！ 私だ、何処に居るんだい？」

平素、城内では全く走らない魔王だが、自然溢れる森の中をひらひらり、と恋人を求めて走り回る。

その度に美しい髪は空気に溶ける様に、さらさらと舞う。

木々に囲まれた広い空間で、親子鹿がアレクの緋色のマントを啜えると引つ張り始めた。

この地は動物達も警戒心がなく、人に慣れていた。執拗に自分を引つ張る小鹿を撫でると、アレクは視線を合わせるように屈みこみ澄んだ瞳を覗き込む。

「ロシファが何処に居るのか……知っているのかい？」

優しくそう呟けば、嬉しそうに小鹿は軽くその場で飛び跳ねるとマントを放し、駆け出す。

居場所を知っているようだ。この島に住まう主要人物だ、懐いているだろう。

仲良く駆け出した親子鹿を、薄っすらと笑みを浮かべて見つめていたアレクは小さく溜息を吐いた。

ゆっくりと立ち上がると鹿達の後に続いて、静かに歩き出す。昨日雨が振ったのだろうか、土壌が水を含んで歩けば僅かに沈んだ。

そちらの方角には、湖がある。

二人が出遭った、最初の場所である。

懐かしそうにアレクは手の平を翳して空を見上げた、眩しい太陽が痛いほどに照り付けている。

暑さから逃れる為に水遊びでもしているのだろう、炎天下で空気はかなり熱されていた。

森林の中を空気を肺に一杯吸い込みながら、先程とは違って変わったのんびりと足を進めるアレク。

というのも、水浴びをしている場合彼女は裸体である可能性が高い。

非常に、気まずい。

咳を一つ、不意に目をやった木の根本に、小さいながらも可憐に咲く薄紫の花に気付く。自然と口元が綻んだ、じっと見つめ続けていると風が緩やかに吹く。

名前は解らないが、風に揺られてふわふわとしている様は何か言葉を発している様で。

「こんにちは、アレク様。……ですって」

湖の方角から、鈴の鳴る様な声が耳に届けられた。

我に振り返り立ち上がると、身体をそちらに向けアレクは満面の笑みを浮かべる。

木々の若葉に負けないほど神々しい金の柔らかな髪、緑青色した神秘的な光を放つ瞳の少女が先程の親子鹿と共に立っていた。

少女の姿を瞳に入れた瞬間、アレクは大声で叫んでいた。無論、愛しい愛しい少女だからだ。

「ロシファア！」

一目散に駆け出すと勢いでロシファアを抱き抱え、身体を持ち上げるとその場で何度も回転する。

驚いて小さく叫んだロシファアだが、可笑しそうに笑いながらすがままだ。

太陽の様に明るく眩しいロシファアの笑顔、心の底からそれが嬉しくてアレクも大声で愉快そうに笑っている。

感情豊かなアレクなど、ロシファ以外はお目にかかれない。

魔界・イヴァンではほぼ無表情で口数少ない魔王・アレクなのだ
が、どうやらこちらが素の様だ。

二人は一頻り回転すると、そのまま地面に転がって笑い続ける。
観れば、小鳥や兎が近寄って来て二人を見守っていた。

笑いながら一つに束ねてあるロシファの髪に、そつと指を通して
いたアレクは、ようやく気持ち良さそうに大きく伸びをすると起き
上がり。

ロシファの身体を支えて起き上がらせると、二人は手を取り合っ
てアレクが来た方角へと戻っていった。ロシファの、小屋がある。

「可愛らしいでしょう、さっきのお花さん。大木の陰であっても僅
かな光を探して求めて、強かに美しく咲き誇るのよね」

「ああ、とても可愛らしい。……でも、私はロシファの美しさのほ
うが勝っていると思う」

真顔のアレクに、盛大にロシファは吹き出した。

怪訝そうに見つめているアレクに、ロシファは赤らんだ頬を隠す
ようにして急にアレクの手を握るとそのまま全速力で駆け出す。

力強く引つ張られ、顔を引き攣らせたアレクだが肩を竦めると諦
めて共に駆け出した。

その後ろを動物達が続いていく、そんな穏やかな風景だ。

ロシファは、魔族とエルフの混血である。良く観ないと解らない
が、瞳を覗き込めば魔族独特の鋭い眼光が見え隠れしている。

父親が、魔族の貴族。母親が、エルフの姫君。

混血は敬遠されてしまう場合がほとんどだが、ロシファの場合は
そうではなかった。

魔族との混血であろうとも、姫は姫であり正統な後継者。現魔王・
アレクの良き理解者であり、無論恋人。

父親が魔族のロシファにとって、魔王であろうと初対面からアレ
クに対して何の畏怖の念も抱かなかった。最も、父親の存在などほ
ぼなかった、二人はロシファが幼い頃に亡くなっている。

快活で健康的、常に無邪気に走り回っている幼子のようなままロシファは成長した。

美しい滑らかな髪は腰まであるのだが、行動の邪魔になるので毎日一つに結んでいる。

ドレスなど一切着用せずに、自分で織った布で衣服を作り上げて着用している為見た目は質素だ。着飾る必要もない、この島にはロシファともう一人のエルフしか住んでいないのだから。

エルフの隠れ里、無人島に見せた最後の楽園。

二人は息を切らせながら家の中に入ると、大きな音を立ててドアを閉め、顔を見合わせると深呼吸する。流石に疲れた、ずるずるとロシファはドアにもたれて床にへたり込んでしまう。

「あらあら……これはこれはアレク様。姫様に付き合って、一体何処から走ってこられたのですか？ 本当に申し訳ありませんね。ロシファ様、皆が皆、貴女様ほど元気ではないのですから巻き込んではいけませんよ」

大袈裟に落胆しながら奥から出てきたふくよかな女性は、ロシファの乳母である。彼女と二人きりの生活をしている。

唇を尖らせながら、ロシファは反論した。

「あら、平気よ。アレクはこれくらいで丁度良いの。普段運動なんてしないんだもの、体力がないから私がつけてあげているのよ」

アレクに悪戯っぽく笑って、乳母に茶の用意をさせ始めたロシファ。愛用の簡素な木の椅子に深く腰掛けると、突っ立っているアレクを隣に強引に座らせる。

頻繁には使用しない、アレク専用の椅子だ。

机に肘を突いて、笑いながら歌っている様をアレクは眩しそうに瞳を細めて見つめていた。

「行儀が悪いですよ、姫様」

苦笑いで茶を運んできた乳母に、知らん振りしてロシファは並べられた焼き菓子に手を伸ばす。

ロシファは、無邪気で気品振った様子もなく非常に親しみ易い。

しかし、気高さも持ち合わせており、無防備に見えて冷静だ、心は下手したらアレクよりも強いかもしれなかった。

混血、という特殊な状態であれ、皆と上手く生活していたのはロシファの真つ直ぐな性格ゆえであろうし、受け入れた仲間達も心が澄んでいるのだろう。現在は、皆とは共に居ないがそれもロシファの考えあつてのことだった。

アレクは、そんな彼女に惹かれた。

ロシファの美しさも目を見張るものがあるのだが、それよりも性格である。

「さあさ、召し上がれ。摘み立てのレモンバームティですよ」

暖かなカップに入れられた新鮮な香りのするティを、ロシファは熱そうに啜る。

夢中で焼き菓子を頬張っていたロシファの額を軽く小突くと、乳母は肩を落としながら部屋を出て行く。顔には軽く、笑顔を浮かべながら。

ロシファがこうしてはしゃいでいるのは、隣にアレクがいるからだということも乳母とて了承していた。普段以上の浮かれ様子に、乳母はドアを出た後一人隣の部屋で爆笑をする。

なんのканの言ったところで、所詮は娘。愛しい男が来れば心躍る。

その大声に思わずアレクはカップの中身を零しそうになり、ロシファも喉に焼き菓子を詰まらせそうになった。

首を竦めつつ、咽つつ、ロシファはげんなりと乳母の出で行ったドアを見つめる。

「んもう、本当に元気が余っているんだから」

ねえ？ と、アレクの同意を求めつつ覗き込んできたロシファ、アレクは瞬きしてしれっと、返答。

「誰かさんと一緒だよ」

にっこりと笑い、啞然としているロシファの肩を叩きながらアレクは優雅にティを口に含んだ。

そんなアレクの態度に唇を尖らせ、菓子皿を自分に引き寄せると一人で食べ始める。じとり、と横目で軽く睨みながら。

そんな様子に思わず笑いを堪えるアレクだが、堪え切れずに小さく肩を震わせて笑う。

全てが、愛おしい娘だ。ハイも今、アサギに対して同じ様な気持ちを抱いているのだろう。見ていれば解る、あれは恋をしたものにしかならない胸を揺さ振る暖かな心地良さを体感している顔だ。

「まあ、私のほうが情熱的ではあるけれど」

無意味にハイに対抗するアレク、怪訝にロシファが顔を上げる。

口内に広がるレモンバームの清涼感、アレクは瞳を閉じ静かに頷いた。

「美味しい」

自然と口から漏れた言葉だ、魔界でも多々美味なものを口に運ぶがやはりこの場所は格別である。

ロシファは嬉しそうに勢い良く立ち上がると、自分も熱いながら口に含む。

「でしょう？ 植物も誰かの口に入るのならば美味しいと笑顔で言ってもらえるように努力しているのよね。生きているものは、みんなそう。誰かに喜ばれる為に、幸せになってもらう為に……生きているの。特に、愛する人を笑顔にする為に、心を解きほぐす為に」
徐々に小さくなっていくロシファの声、そつとアレクを見つめていた瞳が閉じていく。

咳を一つ、誰も部屋にはいない筈だがアレクは周囲を見渡し頬を赤く染めて身じろぎながらも、ゆっくりと唇を近づける。

触れるか、触れないか。

アレクは直様照れた顔を隠すためか、すぐにカップを唇に押し付けた。

やがて不服そうにロシファは頬を膨らまし、妙に落ち着きないアレクの様子にただ、可笑しそうに笑う。

「ほんつとに、奥手ねアレク。赤ちゃんの顔、見られないのは嫌よ

私」

大きな溜息、ロシファは髪を指で弄びながら天井を見上げる。暫しアレクは考え込んでいたが、数分後ようやく意味を悟った。

硬直し、テーブルクロスを見つめ続けるアレクに、落胆のロシファ。

意味は解ってもらえただろうが、全くもって……純粹というかなんというか。

話題を変える為か、アレクはそそくさとロシファの視線から逃れる為に立ち上がると窓際に移動した。

外を見つめながら、再び咳を一つ。

「そ、そうだロシファ」

「何よ」

些か不服そうな……機嫌を損ねたようなロシファの声だった。アレクはガラスに映るロシファを見つめつつ、更に咳をするしかない。大胆なロシファに、こうして毎度アレクは身が縮こまる思いで接していた。

「勇者が来たんだ、魔界に。ハイが連れてきて、思いの外可愛らしい小さな女の子で。……彼女となら、やれそうな気がするよ」

「え？ 勇者？」

思わず、ロシファも立ち上がる。開いた口が塞がらない。

何故、そんな重要な事を今頃になって言うのか。真っ先に言うべきだったのではないのか。

ロシファは逸る胸を押さえつつ、震える腕を必死に堪えて擦れた声で恋人に問いかけた。

魔王である恋人に、問いかけた。

「セントラヴァーズ。セントガーディアン。……どちらの所持者なの？」

4星クレオの魔王・アレク。

その恋人である魔族とエルフの混血の姫・ロシファ。

そして魔界に連れてこられた、勇者・アサギ。

普段からは想像もつかない、
怜悯な視線で刺すようにロシファは
目の前のアレクに、問う。

招かれざる訪問者

窓から視線を外すことがなかったアレクは、ロシファの表情など知ることなく。上機嫌で再び口を開いた、些か興奮気味に。

「私達の事を”敵ではない”と、言ってくれたんだ。今もイヴァンに居てハイと仲良くやっている。あの子とならば、必ず私達の夢も実現できる、そんな気がする」

どう思う？ ようやく振り返りそう訊いて来たアレク、げんなりとロシファはテーブルに突っ伏した。

まだ、自分の質問にすら答えて貰っていないというのに。

椅子に力なく座り込んだまま、溜息を吐きつつ小言を呟き続けるロシファに、無邪気に瞳を光らせながらアレクは返答を待つ。無邪気な幼子のような魔王は、見ていて不安だ。

「落ち着いてね、アレク。嬉しい気持ちは良く解ったわ。でも、私の質問にも答えて欲しいの。まず、一つ目よ、いい？」

「どうぞ」

「今度から、そういう重要な事は真っ先に言って欲しいの。約束できる？」

「うん、約束しよう」

子供に語りかけるように心底丁寧に、スローテンポで教えるロシファ。若干嫌味も入っているのだが、アレクには気付かない。にこにこ顔している様子は、子犬のようだった。

更にそれがロシファの頭を抱える要因になるなど、アレクには到底思いつかないことである。

「それで、その勇者は”セントラヴァーズ””セントガーディアン”、どちらの所持者なの？」

「……勇者の武器、か。彼女はそれを所持していない気がする」

アレクとて、会ったのは昨日だけだ。魔族会議出席中にはそのよくなものを手にしていなかったように思える、無論、食事会の時も。

思い浮かべながらアレクはそうおぼるげに呟いた、ロシアは静かに立ち上がると本棚へと歩み寄る。一冊の本を手にし、後半をペラペラ、と捲り始め瞳を細める。

手製の本、唯一の本。先祖代々護られてきた、古代からの本。4
星クレオにエルフ達が生まれ出でてから、護られてきた本。

人間が手にすれば、絶大な知識を得られるであろう究極の価値を持つ本だ。

丁寧に扱わねば、古くなつた紙が破れて字とて見えなくなつていく。

「セントガーディアン。伝説の神器、勇者の武器。眩い光を放ちながら勇者が”勇者に目覚めたときにこそ”力を発揮する、守護の剣。護るべき者を強く想い続ける事によって、増幅できる特殊な剣。傷つけるのではなく、全てを守り抜くこそが使命だと思えた者のみか手に出来る、”優”の剣」

「彼女らしい気もする」

読みなれた本を、声に出しアレクに聴かせる。

「セントラヴァーズ。伝説の神器、勇者の武器。非常に特殊な素材で出来ており普段は何の変哲もない腕飾り。付属の石を”反応させる事が出来た者のみか”その稀な効果を発揮させられる、変化の剣。所持者の思い通りの武器形態に変化させられる、攻めの武器。ありとあらゆる状況に合わせ変化させた武器を使いこなす事が出来るのならば、武器の申し子。セントガーディアンとは真逆の”攻”の武器」

「名前に似つかわしくない武器だ、彼女のイメージではないかな」

椅子に腰掛、茶を啜るアレクに一瞬視線を投げかけたがロシアはそのまま続けた。

「その昔。セントラヴァーズを使いこなす事が出来た人物は、愛する者を護る為だけに武器を手にしていたからそう名付けられたのよ」

「成程。……どちらの勇者だろう、今は判別出来ないよ」

「何をもってして、彼女が勇者だと？」

「ハイが、一目惚れをした勇者だ。勇者の石を所持し、異界から呼び寄せられた少女であることは間違いない。非常に不可思議な空気を身に纏っているよ」

アレクの声に耳を傾けながら、本に視線を落とす。

「……勇者の武器は。その昔、まだ、神が人間を創って間もない頃に。神と、魔族と、エルフ族が作りあげたもの。いつの日か、互いに仲良く暮らすことなくいがみ合い、敵対し合い、戦争を繰り返すであろうことを予見して造り出されたもの。」

保管は、神が創った人間へと託された。神でも、魔族でも、エルフでもない、ひ弱な人種に託された。無限の可能性を秘めている、ある意味未知なる種族……それが、人間。その後人間達が何処へそれらを保管する事にしたのかは、私たちは知らないけれど。絶大な力を秘めた二つの武器は、幾度として野心を抱く魔族を脅かした。けれども、破壊など出来るわけがない、何故ならば創製には神だけでなく、魔族の祖先も関わっているのだから。……過去の人は、本当に立派だわよね」

生れ落ちた太古、皆、種族が違えど願いは同じだったはずだ。

” 幸せに、暮らしたい。 ”

それが、願いだっただけだ。

だが、均衡は崩れる。いつしか、誰かの心に邪な念が生まれ出でる。

「それにしても、武器を持っていないって……それはそれで、どうなのかしら」

「別に所持していなくても問題はないと思う、戦う必要などない」

「異界からやってきた、他の魔王様方は？ アレクの意見に賛成とは思えない方々だけだ」

アレクとて勇者にすでに心酔していかないだろうか？ ロシファは顔を顰めて別の質問をした。隙あれば、アレクを亡き者にし世界を乗っ取ってしまうような……そんな雰囲気は他の魔王にはあった。

ゆえに、ロシファは常日頃から心配していたのだ。

アレクが非常に強い魔力の持ち主である事など、知っている。しかし、多勢に無勢ではいくらアレクとて無理だろう。

「リュウは相変わらず理解出来ない突拍子もない行動をとるけれど……彼女には親切だ。ミラボーとて同じ。ハイに至っては、もう虜だからね」

俄かに信じ難い。ロシファは眉を潜める、思いも寄らない事である。だが、アレクが嘘をついているとはとても思えなかった。だからこそ、余計に勇者が気になった。

魔王を心酔させられる勇者、とはどんな人物なのか。

ロシファとて、他の魔王を見たことがないわけではない。一度、無理言つてイヴァンへ連れて行ってもらい、その時に三人の魔王にも会っている。

最も危険な人物、と判断したのは他でもないハイだった。

目に映るもの全てが灰色、絶対零度の世界で近寄るもの全てを切りつけるような、そんな雰囲気だった。

だが、まさかハイが勇者を連れてきた、とは。公開処刑する為ではなく、見惚れて攫ってきた、などと……尋常ではない。

興味が湧かざるを得ない。

「一刻も早く、平和な世界を創り上げよう。まだ魔族の中には人間に敵対心を持つものが多くいるけれど、彼女となら何とかできる……いや、なんとかする。隔たりをなくした世界を創り上げ、そうしたら四六時中共に居よう、ロシファ」

ロシファは本を棚へと丁寧に戻した、そうね、と静かに微笑むと近寄りそつとアレクの頭部を抱き抱え子供をあやす様に撫でる。

昔から、アレクが寂しそうに呟いていた言葉だった。

半ば諦めかけていた、夢だった。

だが今日はどうだろうか、非常にやる気を感じられる、熱望した夢を叶える努力をすべく自信に満ち溢れている気がする。

「そうね。頑張りましょう、アレク。ところで、私もその勇者に会ってみたいのだけれど……。合わせて貰える？」

「勿論。そのつもりでここへ飛んで来たのだから。都合をつけるから、暫し待っておくれ」

「うん、解ったわ」

自分の前でしか殻から出てこないアレクに、ロシファは心底魔界での生活を心配していた。

まるで、学校に行かせた親の如く。頼りないわけではないが、繊細な心は崩れ易い。

本音は魔王を辞めさせてこちらで二人で暮らしたいが、現魔族の長は能力ではなく血筋で継承される。

正統なる魔王・アレクの肩書きは崩すことが出来ない。

アレクとて、ロシファと共に居たいが今自分が下りてしまえば魔族は人間へと侵略を開始するかもしれない。故に、責任感が邪魔して出来なかった。

次期魔王が、自分の目に叶う者が現われたのならば……その人物が絶大なカリスマ性を誇り、魔族を一丸と出来たならば……交代したかった。

アレクの従兄弟・ナスタチュームとてアレク同様の意見の所持者で、彼とも気が合っていたが分け合って魔界イヴァンを離れている。信頼できる味方など、少人数だ。同意見の者は多くいるだろうが、それでは駄目だ。

降りかかる重責、今の自分が幾ら平和を唱えたところで反発するものが多々居る事など目に見えていた。

実際、自分をよく思わず暗殺したい輩とて、少なくともないと聞いている。

二人は、身体を寄せ合いながら震えた。捨てたい魔界の王の名。けれども二人の願いを叶える為には、絶対的に必要となる名。

『平和な世界で、二人が仲睦まじく暮らすこと』
それが、願い。

「ロシファ、先程の茶葉を貰って帰ってもいいだろうか。室内で飲むと落ち着きそうなんだ」

来た日は、何かしらアレクは魔界へと持って帰る。

ロシファを思い出し、少しでも安らぎを捜し求めているのだろう、と胸が微かにキリリ、としたがロシファは直様茶葉を用意し始めた。「多めに入れておくわね。他にも入れておきましようか、循環を良く出来るように、カモミールにパーミント、レッドクローバーにワイルドストロベリー、びわの葉とレモンバーム、セージと紅花、すぎなをブレンドした、私特製のお茶なんてどう？」

「はは、いいね。今度一つ一つ、教えて欲しいかな」

「ええ、もちろんよ。たくさん作って置いたから皆さんで戴いてね」
日が陰る。

あまり魔界を不在にしているも立場上良くないので、アレクは名残惜しそうに正面からロシファを抱き締めると、何度も髪に口付けを降らせて帰宅した。

手には、多々のハーブティ。

「レモンバーム単品は生だから、早目に……寧ろ今夜飲んでね。ブレンドは乾燥しているから常備しても大丈夫よ」

「うん、ありがとう」

ロシファの身体からは、自然の香りがする。優しい、素朴な、大地に寝転がった香りだ。

やがて、アレクが去り。

ロシファは乳母と共に夕飯の支度に入っていた。小麦入りのパンに、豆を数種類入れてトマトで煮込んだスープ。質素だが、豪華でなくとも構わない、味わい深い大地の恵みの食事である。

アレクとの会話を一頻り愉しんだ夜は、昂ぶる気持ちと反面良く眠りにつけた。安堵で気が緩むからなのかもしれない、今日も元氣そうだった、と。

眠りについたロシファだが、夜半に何故か目が冴えた。

喉が渴いた、起き上がり傍らの水を飲めば不意に気付く。

暗闇で光を放つ瞳が鋭く、険しく細められると思わず窓からロシファは飛び出す。

そのまま裸足で暗闇の森を疾走した、乳母は起きていないだろう大丈夫だ。

「夜更けに珍しい訪問者さんですね、こんばんは。ですが、お引取り願えますか。……森の皆は寝静まっています」

「……………」

滑るように走り抜け、立ち止まった先に声をかける。暗闇で見えないが確かにそこに、誰かが居た。

無意識の内に身構えたロシファ、来訪者は微かに身動きした様だ。ロシファの瞳が一層細くなる、非常に冷淡な光を放ち温和な雰囲気など微塵もない。

「まさか、エルフの姫君が。ここまで攻撃的な方だとは」

高音。女の声だ。夜の空気に一際映える、美しい声だった。まるで、無音の聖域の泉に落ちる、水の雫のような。

ようやく、人の形が見て取れた。深紅の瞳は、吊り上がり気味。手にしているのは……木でできた杖だろうか。

細身の女性のようである、瞳から生気が感じられないのが気がかりだが。

「人間……？ 迷い込まれたわけではなさそうね」

感じ取った空気の流れから、種族を推測したロシファだが来訪者は答えない。

ず、と足を開き腕を構える。肉弾戦である、ロシファは意外なことに格闘技が得意だった。

「信じられない、武器を使わず、魔力よりも……自らの身体で攻撃されるとはね。ただのお姫様とは違う、と」

「お生憎様」

ロシファの構えを見、感嘆に近い声を漏らした来訪者は自分は杖を構えなかった。

「計算違い。ここまで早く侵入が見破られるとも思わなかったし、今日は退散致しましょう」

「今日は？ 永遠に退散してちょうだい。ここは聖域、人間立ち寄

るべからず」

シャン……。

杖を空中で揺ると、何か音がたて、来訪者の姿が掻き消えた。静寂。

それでもロシファは態勢を崩すことなく、何処からも攻撃を受けられるように身構えていた。

「まさか……結界を破って入れる人物がいるだなんて……」

ここは、孤島だ。迷い人ではない、明らかな侵入者である。意図的な。

誰だ。誰の手先か。

この島には、ロシファと乳母の二人しか住んでいない。

他のエルフ達は、一定の人数で固まりながら世界中に散らばっている。決して単独で行動しないのは、邪悪な者達から身を守るためだ。

一箇所に固まっていたは、全滅の可能性がある。ゆえに、親族で固まって転々と土地を変えたりする者達もいれば、人里離れ切り立った崖の合間の谷に住まう者達もいた。

エルフの血は、魔力増幅の効果を持つ……と知れ渡ったからだ。

無論、誰しもが知っていることではないが、知った者が邪念を抱けば当然乱獲に乗り出すだろう。

ロシファのこの住まう島は、エルフ族が結集し結界を施した。

今までは誰にも見つけられることなく、平穩に暮らしていたのだが。

……いや。

アレクには見つかった、か。アレク以外には、許されない未知なる領域だった筈だ。

結界の力が弱まっているのか、それとも、先程の者が遙かに凌ぐ魔力を所持しているのか。

相手は、女。相当綺麗な、女。そして人間。

迷い子の清らかな人間であるなれば、大歓迎だ、しかし。彼女が

らは生気が感じられない、彼女の背後で何やら轟いていた。

奈落の底で瞳を光らせ獲物を待っている、何か。手前に餌をチラつかせ、決して自ら動かない何か。

「彼女を媒介にして入ってきたとしたか、思えない……」
「明らかな、悪意だ。」

ロシファはようやく身体の構えを解いた、森は静寂に包まれ普段通りの静けさを取り戻している。

ドツと、背筋から汗が流れ落ちる。緊張の度合いは思っていた以上に激しい。

護身用にと覚えたこの体術は、自分の身体に流れる戦闘的な魔族の血の為である。見た目では解らないが、ロシファの戦闘能力はこれらの魔族よりも上だ。

魔力の底も計り知れないエルフ、研ぎ澄まされた感性の技術。非力であれども、ロシファの戦闘スタイルは力2：技8。

それに鉄壁の補助魔法と治癒魔法が加わるのだから、能力は非常に高い。実戦をしたことなどは、ないが。

だが、万が一の事態に備えて今までもこれからも訓練は怠ららないだろう。

魔王アレクの恋人として、エルフ族の筆頭に立つものとして。

「誰の……手先？」

ロシファは月を見上げ、鋭く呟いた。

「……ほお。まさか姫君が」

「はい。能力が高過ぎます、現在の私で五分五分……かと」

「ふむ、お前に匹敵する、とな？ この私が丹精籠めて練り上げた魔力を施したお前と同等、とな？」

「はい。ミラボー様、いかがされますか？」

漆黒の髪、深紅の瞳。整った顔立ちでミラボーに跪いている人間の、美女。

エーア・シエルキア。

先程、ロシファアーザ島から帰還したばかりだが、極秘な任務ゆえに直様ミラボーに状況報告である。

しかしながら、エーアの存在自体知り得る者がミラボー以外存在しない。ひっそりとミラボーが呼び寄せ、普段はミラボーの部屋に閉じ籠っている。

魔王ミラボーがまさかこのような人間の美女を囲っているとは、誰も思うまい。

無論、それはただの手ごまなのだが。

人間のほうが動かし易い場合もある、エーアはミラボーが3星チユザールにおいて破壊と殺戮を繰り返していた際に捕らえた、目を見張るほど魔力の高かった女だ。

洗脳し、籠に閉じ込めている。忠実な、人間の部下。反抗などしない、確実に任務をこなす。

「まあよい、能力が高かろうとも所詮は一人きりのエルフ。良い案があるで、暫しお前は休んでおれ」

「畏まりました」

暗闇で、ミラボーはにんわりと下卑た笑いを浮かべた。

帰還は心を洗い流す

時間軸は、勇者アサギが魔王ハイに攫われた直後へと遡る。

3星チユザーレ、ボルジア城。学者やら神官が集まっている、城の一角にて。

「アーサー!? どうであつたのだ!?」

「おお、よくぞご無事で!!」

「勇者殿は!? お会いできたのでしょうか!?」

アーサーは突如として戦果報告を話していた、その者達の前に姿を現した。

転移魔法は身体に当然大きな負担がかかる、近くの報告書がまとめて置かれていた棚によるめきながらもたれかかった。転移魔法は成功したのだ、薄く口元に笑みを浮かべる。自信はあつたが歡ばざるを得ない。額に吹き出る汗と、震えている足元を見つめる。

が、そんな状態でもお構いなしに皆口々に質問してくる。気持ち分かるが、荒い呼吸で苦笑いをするのが限界だった。

強度な精神、及び魔力を要する転移魔法。

今回行ったのは”惑星間の移動”だった。簡単に出来るわけがない、途方もない負担が本人にはかかる。

4星クレオから、3星チユザーレへの転移。

”賢者”と呼ばれているアーサーは、無論並外れた精神力の持ち主で、だからこそ簡単に一行の前から姿を消しこうして自分の星へと戻つたわけだが……。

計り知れない負担が身体を、とりわけ脳に押し掛かる。吐き気に眩暈、頭痛……成功した為気も緩んだのか、思わず口元を押さええていた。

設備の整つた場所からならば比較的転移は簡単だ、他にも祈りを捧げる魔術師達がいるならば軽減できる。

だが、今回は簡易な魔方陣からのたつた一人での転移、そして先

にも協力者がいない。

4星に居る一行にはいい加減な行動に見えても仕方がなかったのだが、アーサーにとっては生死をかけた賭けでもあった。

未熟な者が行えば、時空の歪に入ったまま出てこられない。

自分の行き先を念じ、それだけを全身で感じながら魔力を放出し決死の覚悟で挑むからこそ成功し得る。失敗したならば自分の命は愚か、3星の運命すらも消え去る予定だった。

どよめきは部屋から溢れ出た、救護の者が駆けつけ皆でアーサーを支えながらもかく医務室へと急行する。ベッドに横たえさせると、直様薬湯の調合が始まった。

皆を安心させようと、懸命に微笑するアーサーだが顔色は誰が見ても悪い。暫し休息を、と半ば強引に眠らされたアーサーは、苦笑しそれでも素直に瞳を閉じる。

アーサーが帰還した事は、伏せている間に城中に知れ渡っていた。丸一日眠り続け、目覚めた時には部屋に顔見知りが来ていた。そう仲は良くない同僚だが、それでも安堵する。

軽い眩暈と頭痛に顔を歪めたが、用意されていた薬湯を飲み数分後、多少は慣れた身体に一息する。

ベッドから起き上がると、早々に国王への謁見を申し込む。早速、一刻も早く、この目で見たことを伝えねばならない。

3星チュザーレ、ボルジア城。チュザーレの北半球に位置しており、赤道付近でもある。

暑い国で、一年中夏ではないか……と思わせるような気温であるがそうではない。郊外へと足を進めると、心地良い季節感に包まれている。

一年は”雨季””暑季””寒季”のほぼ三つに分かれる、地球の日本でいう過ごし易い春及び秋が抜けていた。しかしながら、移行く時の流れに花々は可憐で瑞々しく、その季節折々の風や光に相應る色合いを出す。実る豊かな果実は伸びやかに育ち、人々は全て

の森羅万象に感謝した。

太陽に、雨に、風に……自然に絶大な恩恵を捧げる。とりわけ自分たちを支えてくれている大地には、豊穡の祈りを毎年捧げて過ごしてきた。

ところが、ミラボーなる魔王が現われてから人々はそれすらままならない状態である。

無論、代々伝わってきている通りに祈りを捧げるものも少なくはないのだが、確実に減少傾向だった。幾つかの街や村は、魔物の襲撃に対応する術を持たず、滅亡へと追い込まれた。

今や大都市に人々は集結し、必死に騎士を始めとし腕に少しでも自信のある者達が懸命に防衛している現状だ。街から一步出るにも一苦労、遠く離れた漁業や森に行こうものなら命がけである。

『熱気を含みし母なる大地に 花は香りを溢れさせ咲き乱れる 果実はちきれんとばかりに艶良く木になる 来たれ恵みの雨よ、命の水よ！ 麗しの花よ歡喜の色と香りで迎えたもう 果実香しくたわわに実れ、命を繋ぐ大事な恩恵を生み出したまえ』

盛夏にはこのような詩が各地で歌われ、皆で舞を捧げていたのだが今ではその祭りごとが消えかけていた。歌う者といえはまだ魔物の恐怖を知らない、遊びたい子供達だ。子供から子供へと代々受け継がれ、広場に集合し大人達の忘れてしまった詩を歌う。

そして、願うのだ”精霊神エアリー”様に。

街の外に出て遊べないのならば、街の中で新しい場所を探しながら、笑いながら居たい。毎日怯え、疲労の顔色を浮かべている大人達に子供達は嫌気がさしていた。

子供らの天使のような歌声に、幾人かの大人達は耳を傾ける。だが、耳を貸していられないほど状況は深刻だった。

この星の人々が太古より祈りを捧げてきたもの……精霊神・エアリー。

崇拜している者も確かに存在するのだが、神に頼ったところで現状は良くなるはず。次第に人々は崇拜を忘れていった。

神は、何もしてはくれない。信用を失いつつある、精霊神・エアリー。

埃を被ったタペストリーが、何処かの家に。罅割れた銅像が、何処かの家に。物悲しく、置き去りに。

国王との謁見、終了。

勇者に確かに出会ったこと、勇者は六人存在しているということ、全員4星クレオにいたりということ、内最も絶大な能力を誇ると思われる4星クレオの美しい勇者が魔王に拉致されたということ、そして3星ミラボアの魔王が現在4星に移動しているということ……。手短にアーサーは語る、一言一言に皆何とも言えぬ声を発していた。

勇者が存在し、合流出来たことは非常に良い事だが魔王に拉致とは。絶望的なのではないのか？ 皆の表情に陰りが落ちる。

数時間経過しようやく解放されたアーサーの耳に、突如激しい雨の音が届いてきた。外を見れば鉛色の雲が空を埋め尽くしている、大地を叩きつけるかのように激しく雨が降り注いでいた。

「雨ですか。こういう時に限ってあいつらは襲ってきますすしね」

独り言、愛用の杖を右手で握り締めるとアーサーは歩幅を大きく歩き出す。城の上層部へと階段を上りながら、首を鳴らした。屋上に出れば、魔導士に僧侶、弓兵などがすでに待機している。

「大丈夫ですか、アーサー殿！ 心強いですがお身体は」

「問題ない、気にしないで下さい」

「はっ！」

数人が安堵した表情で駆け寄ってきた、一人一人に声をかけ、アーサーは進む。敵の襲来が近いことを予感したアーサーは、唇を噛締めると煩すぎる雨音に眉を顰める。

だが、次の瞬間啞然と一人の名を呼んだ。

「ナスカ……？ ナスカなのか！？」

それは、叫び声に近かった。

振り返った少女は、ゆつくりと笑みを浮かべながら雨に濡れた髪を弄りつつ微笑した。

「そんな狐につままれたような顔をしないで。私は死んだりしない、約束したでしょうアーサーと」

雲一つない青空を連想させる雄大な水色の髪は緩やかなウェーブを描き、濃い青の瞳は深い水底を連想させる。

ナスカ「スチュアート」。

神殿プロセインを守護する為に派遣された一人で、アーサーの幼馴染、同じく賢者の称号を得ている少女だ。アーサーが驚くのも無理はない、全滅したと聞かされていたからである。

上手く言葉が出てこないアーサーに代わり、柔らかな笑みを浮かべてナスカは微笑んだままだった。

「世評を気にするなんて、貴方らしくないわね？　だけど、その話は後になりそうだね」

ナスカの微笑が急に強張る、瞳に戦意を宿す。と、同時にアーサーも既に杖を掲げ詠唱に入っていた。

誰かの一声、反応するように鋭く下卑た叫び声を上げながら頭上から魔物が襲い掛かってくる。

美しい半裸の少女、しかし下半身は鳥。肉を抉り取る鋭い爪に、背にはドブ色の羽、空の部隊ハーピーだ。

クレオにて、アリナヤトビィが遭遇したセイレーンに似てはいるが、こちらは声が美しくない。人間の少女のなれの果てだとも、邪悪な魔法による合成生物だとも言われるが真相は不明だった。

そして、それを指揮しているのはドラゴンに乗った魔導士らしい。戦闘開始である、二人の賢者は互いに得意の呪文を放った。久しぶりに、こんな状況下でも不敵な笑みを浮かべて張り合うように。

希望の光は故郷に有り

弓兵が、一斉に矢を飛ばす。狙うは羽の付け根だ、落下してしまえば恐れる事はないだろう。

弓から逃れ着陸してきたハーピー達は、戦士達が切倒す。魔導士達は雨天を利用し、氷の呪文で応戦した。

「アーサー、私達はあの指揮官を潰しましょう」

二人の賢者は応戦の為、一度強力な風の魔法を同時に唱えハーピー達の飛行を遮らせた。

計画的な戦闘の場合、敵の指揮官さえ潰す事が出来たならば統率者がいなくなり雑魚の行動があやふやになる。どう見ても低脳なハーピー達は、歯向かつては来ないであろう。混乱の為攻撃は止めないかもしれないが。

極力被害を最小限にする為に、アーサーとナスカは互いに深く頷いた。遙か上空、安全圏から指示を出している骸骨の指揮官は高位的な魔導士であろう、頭上や手にした杖は光輝き相当な量の宝石をあしらっている。

乗っているドラゴンは火を吐いているので火炎属性のようだ、真っ赤な皮膚が恐ろしい。

「あれが落下すると被害が……」

「魔導士だけを仕留めましょう。乗り手を失えばドラゴンも逃亡すると思うわ」

舌打ちしたアーサーに、冷静にナスカは囁いた。自分に言い聞かせるように、そしてアーサーを励ますように言う。

遠征から無事帰還できたのだ、これくらいの戦闘はこなしてみせる。二人は先頭に踊り出た、敵を見渡す振りをして、見つめているのはあの指揮官のみ。

迂回し、こちらへと接近してきたドラゴンに跨った骸骨指揮官を見極め、同時に詠唱を。

「煌く粒子破片となりて、絶対零度の冷気を纏い彼の者へと。全てを凍てつかせる冬の女王よ、ここに降臨し賜え！ 氷断撃破！」

「呼びかけに応じるは無数の光、宙に漂う小さな破片よ。私の元へと集まり増幅せよ、眩い光となれ！ 大爆碎撃！」

二人の声が合わさる、吹雪と光線が骸骨指揮官を襲った。ほぼ、合成魔法だ。

幼き頃より共に鍛錬に励み、まるで姉弟のように育ってきた二人であるからこそ可能な技である。呼吸も同じく、何より威力もほぼ同格であればこそ可能となった。

ボルジア城の誇る若き賢者二人、アーサーとナスカ。二人の魔法に歓声が上がった、威力が他の者達を大きく凌ぐ。

しかしながら、いとも軽々と骸骨魔導士は薄い霧を身に纏い魔法を消去してしまう。杖を一振りすれば、怪しげなガスを発生させ、辺り一面を覆い尽くした。

非常に厄介な代物のようだ、効果が判別できない。

「毒霧！？ 皆、口を塞いで！」

ナスカの大声に皆一斉にマントで口元を覆い隠す、片手を塞がれてはこちらの戦闘力が激減するというもの。

噴出した霧の為、視界とて悪くなってきた。士気が下がることだけは避けたい、アーサーは瞳を細めながら比較的弱い魔法を幾つか繰り出した。

詠唱するは、風の魔法だ。

声をかけられる限り、皆に風属性の魔法を詠唱するように指示を出す。風の力で霧を吹き消す作戦である、徐々に薄れ行く霧の中でアーサーは骸骨指揮官を見つめていた。

真正面に迂回する、そのタイミングだけを逃すことなく。

「光を纏い、灼熱を帯びし輝ける炎を降臨する。私の名の下に、一筋の弓矢と化しかの者を貫きたまえ！ 火炎弓」

アーサーの右手に、一本の弓矢。空気の弓で、その矢を放つ。鋭い弓の先が、正面の指揮官の胸を容赦なく貫いた。

凄まじい断末魔を上げながら、骸骨指揮官の身体が灰化していった。急所を的確に貫いたようだ、所詮は仮初の命である。

「魔具で動かされていただけかもしれないわね」

消え失せた骸骨指揮官、眩きながら近寄ってきたナスカはおたおたと下りてきたハーピーを手にしていた杖で強打する。指揮官を失った敵は、思っ壺だった。

戸惑うハーピー達を薙ぎ払い、騎手を失ったドラゴンは一目散に逃亡していく。まごつくハーピー達を一掃し、皆の表情に勝利の確信が浮かぶ。

ほっと一息、互いに手を合わせながら下を覗き込めば落下したハーピー達の処理をしている部隊が目に入る。だが、城門から突撃をかましてきているゴ布林部隊達は未だに、攻撃を止めていない。あちらはまだ片付いていないようだ、一部の者達は一目散に下へと急いだ。

万が一に備え、怪我人を含めて数人はその場に留まった。誘導作戦であるならば非常に危険だからだ。

狭い石畳の階段を下り、城壁まで雨の中を走りながら上空にも意識を。今のところ変化はない、ゴ布林を一掃すればこちらの勝利だろう。

戦いに油断は禁物だが、アーサーは勝利を確信していた。

戦況は上々であったが、怪我人も多く、武器の支給も滞り始めていた為大慌てで見張り台へと駆け上ったアーサーは荒い呼吸で風の魔法を放つ。

威力は確かに強くはないが、それでも他の者達に比べれば強力だ。ゴ布林部隊を一気に城壁から離す、死者は不幸中の幸いで出ていないようだった。怪我人を下がらせ、魔法に抵抗力のないゴ布林に、一気に魔導士達が畳み掛ける。

ナスカがこちらには来ていないので、合成魔法を狙わずに皆同じ属性で詠唱を開始。

……雨が上がる。

空には青空が広がり、小さな白い雲が何事もなかったかのように顔を見せた。大地はたつぷりと水気を含み、辺りの木々が緑の葉を輝かせ、小鳥達が元気良く啼く。香しい緑に染まった空気は花の香りを取り込み、人々を優しく包み込むかのようだった。魔王に侵略されていても、自然は優しく美しい。

眩しそうに空を見上げたアーサー、この勝利に見合った相応の報告をこの後聞かされることになる。

ナスカが小走りやってきたので、軽く右手を上げる。

満面の笑みを浮かべ腕を引き摺るように走り出したナスカに、アーサーは一瞬たじろいだが大人しくついていった。

城の一室へ向かう、一言も会話なく案内されたその部屋のドアを開けば。

「リン！？ ココ！？ メアリ！？ まさか！？」

驚愕の眼で部屋の中を見渡す、救命室であり傷ついた兵士達が手当てを受けていたのだが。プロセインへ派遣されていた、ナスカの仲間達がベッドで眠っていた。

とりわけ、ココは元氣そうに両手を掲げてアーサーに笑みを向けている。リンは苦悶の表情を浮かべたが、うつすらと微笑し会釈した。メアリは額に包帯を巻いているが元氣そうにぬいぐるみを抱いたまま、アーサーの名を呼ぶ。

あまりのことに、思わずアーサーは言葉を失う。ナスカだけではなく、他の友人達も無事に帰還していたのだ。

なんとという、奇跡か。全滅の噂は、全く出鱈目だったのだ。

震える身体は小刻みに、ナスカに支えられ、一歩ずつ床を這うように足を滑らせ前進する。

治療にあたっていた神官の娘であるセーラもアーサーの姿を見つけると駆け寄り、久々の挨拶を交わす。

ココだけが陽気な歓声を上げるとベッドから飛び降りて、アーサーの肩を思いつき叩いた。

啞然。

思いの外強い力だった、嬉し涙が瞳に浮かび思わず視線を逸らしたアーサー。

死んだと諦めていた友人達が、まさか一斉に戻るとは。思わず、神に祈るアーサー。精霊神エアリーへと、祈りをその場で丁重に捧げる。

アーサー、ナスカ、セーラの三人は協力して人々の治癒と看護にあたった、とりわけアーサーは仲間の生存に甚く感激し必要以上に走り回っている。思わず笑みが零れる、嬉しくて嬉しくて堪らない。身動きできるものは、薬湯を配り、怪我人の身体を拭き、懸命に皆で看病する。アーサーが4星クレオから持ち帰った薬草も、早速使用された。

本日の死者、0人。負傷者、手当て全員終了。スパニツシュブルームの暖かい珈琲を皆で飲み、気分を落ち着かせる。

アーサーとナスカは満足そうに微笑むと王の待つ広間へと、直様足を向けた。止める皆を無視し、ココ、リン、メアリ、そしてセラもその後を追う。

リンの左足は骨折していたようで、皆より遅れ気味だがリハビリも兼ねて一人で壁を伝い追いかけている。

広間では、アーサーを待ち焦がれていた王が、食事を用意して席についていた。豪華ではない食事だ、ボルジア城の王は民と同等の食事を摂っている。

身分隔たりなく、分相応に。質素で構わない、食事のありがたみを忘れない……こついった謙虚な王の姿勢で、魔族達とも民は懸命に戦えるのだ。

並べられていた料理をアーサーは覗き込んだ、4星クレオでの食事のほうがよっぽど豪華だ。非常食の干し鱈を水で戻し煮た後、バターソース、塩胡椒で味を調べて食する。ほんの僅かなハムに、白米が極僅かで他はイモ類と野菜のミルク煮。これでも良い食事である。

それでも有り難く手を合わせ、席に恭しくついた6人は王に感謝

の言葉を述べながらスプーンを手を取った。確かに、腹は空いている。今まで懸命に看病をしていた為忘れていたが、一食抜いたことになるのだ。

アーサーは4星クレオでの僅かながらの旅を思い出し、そして軽く溜息を吐く。

1星ネロの詳細は掴めないが、最も過酷を強いられているのはここ、3星チュザーレではないのか。魔王が全員4星クレオに移動しているのだ、だが、3星チュザーレの人間達への侵略は先程の戦いが物語る通り、緩められていない。

「クレオは……如何なのじゃ？」

王の問いにアーサーは面を上げる、注目している皆を見渡し包み隠さず数日前からの出来事を話した。

戦闘前も簡易に話をしたが、先戦の報告も兼ねて再度。深い質問も飛び交い、アーサーは静かに返答する。何より、ナスカ達はまだアーサーの報告を耳に入れていないのだから、興味津々だった。

勇者の中で、最も優れている4星クレオの勇者・アサギ。その不思議な力と魅力、急成長しかねない飲み込み、しかし、魔王によって攫われてしまったこと。

部屋中の者が言葉を失い、悲観的な溜息を同時に吐く。勇者が魔王に攫われて、生きていくはずなどない、と。

あちらこちらで、絶望のすすり泣き、発狂しそうな勢いである。

聞き間違いを願っていた大臣も、落胆して食事が喉を通らなくなつた。

「そんなことになっていたの……」

ナスカは戸惑いの瞳を投げかけながら、自分もテーブルにがつくりと肘を下ろして頭を抱え込んだ。絶望、しかやってこない。

ようやく勇者に出会えたのに、よりもよって”魔王に攫われた”とは。

「しかし、他の勇者達は無傷です。そして、アサギを救出すべく4星クレオの仲間達が現在散っています。私も……アサギが生きてい

ると信じておりますし」

気休めの言葉にしかとれない皆だった、アーサーはともかく、皆”アサギ”を知らない。そして、何故ハイがアサギを攫ったかなど、到底知る由もない。誰が思うだろう、今現在丁重に扱われているなど。

「2星ハンニバルの魔王……いや、暗黒神官ハイといえば、血の通っていない冷酷無慈悲な男だと……ああ、世界の崩壊だ！」

「ええ、間近で私も”暗黒神官・魔王ハイ”を見ました。確かに放つ魔力は我らの比ではありません、ですが、妙な事に私達を殺さずに生かして消え去ったのです。……そう、絶望しなくとも良い気が致しまして」

そうなのだ、殺す気であったのならばあの場で全員惨殺されていてもおかしくはないのだ。

だが、あの時のハイは。アーサーは瞳を細め、あの時の情景を思い浮かべた。何故か、自分と似た空気を所持していたような。

”似た空気”。

アーサーと似た空気……いや、空気というよりも……感情。

「よもや……」

アーサーは有りえない、と苦笑したが。有り得ないことが、起こり得るのだと。数奇な出来事に幾度も遭遇した、可能性が0ではない限り考え付く事は起こり得るのだ。

そうである。

「……魔王ハイ、まさかアサギに好意……を……？」

誰にも聴かれぬように、眉を顰めてアーサーは呟く。馬鹿らしいが、しかし思いついてしまった。

流石賢者だ、大当たりだったのだ。

けれどもそんなことを言っている場合ではなく、アーサーは弾かれたように重苦しい部屋を見渡した。

奇跡は起きたのだ、その話を聴こうと。奇跡の生還、ナス力達の話。視線を向けると、軽くナス力は頷いた。

「私達は、確かに死を覚悟したわ。突然神殿が崩壊し、天井は落下、生き埋めになるのだと。そうしたら、その神殿にはカラクリがあったのよ。」

床下から空洞が発見されて、慌てて皆で逃げ込んだわ。空洞は先が長くて、とりあえず進んでいったの」

アーサー以外は知り得ている情報だった、だが、皆瞳を閉じて聴く。

「現時点で生存者は三分の二、ともかくこの場の全員の身の安全を確保したかった。だが先には大蛇が待ち構えていた、今思えばあれも奇跡か、全滅は免れた。10人程度に減少していたがな」

リンが口を開き、口惜しそうに歯軋りをする。その際に骨折したらしい、自分の腕の未熟に腹が立っているようだ。

足に響いたのか、次にココが口を開く。

「でも、希望は捨てちゃ駄目だしね。大蛇を辛うじて撃破し、必死に出口を探した。空洞は広いけれどもどこもかしこも行き止まり、もう本当に食料も尽きて餓死するしかない、と。そうしたらさ、隠し部屋を発見したんだ。不可思議な場所、神殿の真下だったのかもな、誰が作ったのか祠もあった。ナスカとメアリが渾身の魔力を放ってそこを転移装置に換えたわけ！」

身振り手振り、自分自身が一言一言を噛締めながらココが説明する。感謝の礼をナスカとメアリに向け、笑みを浮かべて胸の前で手を組んで祈った。全員で祈りを、奇跡の生還を遂げた仲間に、栄光を。

城へと無事到達出来た生存者達は直様治療を受けた、後に解った事だがあの神殿の地下の空洞は太古の昔に造られたもので、意図は不明である。けれども何かしらの儀式を執り行う場所だったに違いないだろう、魔物に破壊されていなくてよかった。

ココは乾ききった唇を舌で嘗め上げると、アーサーに力強く微笑みかける。

犠牲者は多い、しかし絶望は回避したのだ。

「神殿内に入って、貴重な武器も入手したわ。崩壊は避けられなかったけれど、こちらとて無下にやられたわけではないし」

柔らかに微笑んだナスカ、どこからかすすり泣きが聴こえる。アーサーの瞳からも、安堵の涙が零れていた。

いつしか、拍手が巻き起こった。絶望の中に生まれた、最大の奇跡。状況が一変したわけではない、変わらずに絶望的なこの中で。それでも、ボルジア城の若き精鋭達は一同に揃っている。

今まで、伏せていた皆の瞳が微かだが輝きを取り戻した。

「まだ、諦めるな！ 今魔王ミラボーは不在、この機に領土を奪い返すのだ！」

その場の全員が、椅子から豪快に立ち上がり歓声を上げる。

賢者アーサー。賢者ナスカ。剣士リン。武術家ココ。神官セーラ。魔法使いメアリ。

若くして、有能な今後の主力メンバー達を囲み、久々に城から笑い声が聴こえる。平和を、取り戻す。ミラボー不在の、この機を逃してはならず。

希望の光が、ボルジア城にもたらされた。それは、勇者ではない。以前から国に使えていた若者達だった。

「3星チユザールの勇者殿の名は、して？」

「ダイキ、と申します」

「彼がミラボーを倒してくれば、尚良いのだが」

王が溜息交じりにそう呟く、皆神妙に同意した。それまでは、こちらの星でやるべきことを。

アーサーは窓からそっと星を見つめる。何故か、アサギは全くもって無事な予感がして。

そして、また出会える気がして。薄っすらと、微笑んだ。

宴は夜更けまで、ではなく。早々に終了し皆身体を労わる為に、部屋へと戻る。浮かれるのは、勝利を得てからで良いのだ。それまでは、必死に耐え忍ぶ。皆で、歓喜を分かち合えるその時まで。

ぐっすりと眠っていたアーサー、陽は高く昇りようやく起きた。久々の愛用の寢床だ、眠れないわけがない。

起きて来て焼きたてのパンと薬湯にサラダを食べてから、身嗜みを整えて家を出た。

向かう先は城の図書館、何度も足を運んでいる場所である。直様埃の被った本を一冊一冊丁寧に手にし、瞳を光らせる。アーサーが探しているのは、自身が所持していない魔法書だった。禁呪があれば良いのだが、そう簡単にお目にかかれないうら。

図書館の魔法書など、管理がされている為、可能性は薄いが0ではない。先人が書き記した魔法書でなくても良い、何か切っ掛けを作れる論文でも構わない。

「役に立つ、強力な呪文を。犠牲者を最小限に留め、皆を救える呪文を……」

己のみが所持できる、禁呪。

もし、この場に存在しているのならアーサーに反応して現われるのではないか、とも期待をかけている。一途に、ただひたすらに何かを呼び寄せるように、アーサーは真剣に手に集中した。相当の破壊力のある禁呪は、自ら持ち主を選ぶだろう。

アーサーは、主に治癒魔法に定評がある。攻撃系としては火炎系が最も得意であった。

平均的に一通りこなせるのだが、やはり足りない。例えば禁呪が無理であるならば、合成魔法はどうだろう。

昨日、ナスカとほぼ合成出来たが、あれを一人でこなしたい。この世には存在しない独自の魔法を創り上げる……自身には可能だといや、可能に出来るはずだと。

その為には火炎系の魔法と互角の他属性の魔法を、とりあえず手の中にしなければならぬ。

例えば昨日の火炎の弓、あれに電撃を帯びさせてみてはどうだろうか。もしくは、火炎と疾風を掛け合わせ、火力を倍増させてみる。

アイデアは生まれるが、実際問題難しい。

火炎系アーサーの手持ち最強術は”爆炎大火撃”、とすると風の術は”真空大撃破”辺りが妥当だと思われる。二つを同時に繰り出し、操り、合成させ敵へと……。容易なことではないが、やらなければならぬ。

魔王が姿を見せたのだ、圧倒的な魔力を痛感したアーサーであるからこそその決意だった。

アサギを救わなければならない、自分は剣士ではない、賢者なのだから最強の術で対抗しなければならない。アーサーは、眉間に皺を寄せ考え込んでいた。時折、大きな独り言を言いながら。

賢者の恋煩い

揺らめく蝋燭の火、ジジ……と時折炎が勢いを増し、音を立てながら燃えている。

その炎が賢者アーサーを照らしていた。顔立ちが整っていることもあり、思案している横顔は確かに真面目で禁欲的な雰囲気である。冗談の通じない、お堅い賢者……と言われれば納得も出来る。

4星クレオでのアーサーとはまるで別人のようだが、こちらが素なのかも知れない。

「わっ！」

「うわっ！」

陽気な声と、背中に何かが当たる感触。思わず悲鳴に近い声を上げたアーサーは、血相変えて振り返る。

「ぷっ！ やだ、そんなに驚かないですよ。乙女心は傷つき易いのです？ お分かりかしらアーサー君」

「なんだ、ナスカか。寿命が縮まった、図書館では静かに」

怪訝に眉を顰めて一言文句を告げる、微笑しながら隣の席に座ったナスカはお構いなしだ。ちなみに、ナスカはアーサーと同じ歳である。誕生日が離れているので、約一年といっても過言ではない差はあるが。容姿が大人び、ゆったりとした風貌から年上に見られてしまうがまだ若い。

アーサーは静かに立ち上がると、不要と感じた本を何冊か手にし本棚へと向かう。その後ろをナスカが大人しくついてきた、興味津々でアーサーの行動をじっと見つめている。

城お抱えの宮廷魔導師である両親、賢者の称号を得ても不思議ではない父親は、厳しく優しくナスカを躑けてきた。見るからに凡人ではない雰囲気、同年代の女性からは嫌悪されがちな才色兼備な雰囲気をかもし出すナスカ。男から見ればお高い美人、噂はするが決して近寄れない高値の美女的立場だった。

反してアーサーは家系的には本来騎士である、が、反対を押し切つてこちらへと進んだ。今でも父親からは小言を言われているが、選択した道は間違いではなかったとアーサーは家に戻ると痛感する。有能な騎士である兄と、その弟の賢者……家名は更に勢いを増すだろう。父親的には世間的には良い事だと思つが、どうにも納得してくれなかつた。剣に頼つて生きてきた自分がいるので、魔力へと身を投じたアーサーが許せないのだろうという事も薄々アーサーにも解るが今はそんなことを言っている時代ではない。

しかしアーサー自身、幼き頃は剣を習っていた為そこそこならば剣も操る事が出来る。

アーサーとナスカ、貴重な賢者。幼き頃より家も近く親しかった者同士、無論婚姻の話とて浮上している。

だが、アーサーはナスカには妹か姉、親しい友人程度にしか見えない。

「ねえ、何を探しているの？ 私はアーサーがここに居ると小母様から聞いて、足を運んでみたのだけれど。こんな場所に私達の利益になるような本、残されていないわ」

「そうだろうか。……禁呪レベルの本を探している。賢い本は所有者を選び、導くものだよナスカ」

行き詰っているけれど、と付け加え図書館の奥へと消えていく。太陽の光が差し込まない場所、ツン、と黴臭さが鼻につく。蠟燭を掲げながら、軽く瞳を細めて神経を集中させたアーサーの横顔を、じつと見つめるナスカ。

ほんのり、と顔が赤らんだがアーサーは知らない。

「私に出来る事はある？ 役に立ちたいの」

思わずナスカは口に出した、はつとして慌てて口を塞ぐが。ゆつくりとアーサーは振り返り不思議そうに首を縦に振る、身動きしているナスカに手を差し伸べた。

「一緒に、探してもらえるかな？」

埃を払い、抜き取った本を数冊ナスカへ手渡したアーサーは自分

も何冊か手に取ると狭い通路に腰を下ろした。思わず埃に咳き込み、遠慮がちに受け取るとナスカも隣に座り込む。

そつと、動いてアーサーへと近寄った。肩が触れる程度に、近く、微かに触れるその部分が妙に愛しく、嬉しそうにナスカは微笑する。本をめくる音と、蠟燭の火が燃える音。

そんな中で二人は黙々と作業に入るのだが……痺れを切らしたのはナスカだった。高鳴る胸、こんな薄暗い中で好きな男と二人きり……誰も居ない、二人だけの空間。不謹慎だが、再会出来るとは思っていないかったナスカにとってアーサーの存在は今、特別である。

仄かな恋心を確かに抱いていた、だがこんな悲惨な状況下では愛も何もない。我慢していたが、昨日会って感情が昂ぶった。胸がはちきれそうだった、冷静を装っていたが、今ならば人の目を気にしない。賢者という称号以前に女だ。

「聞いて、アーサー」

「何を？」

命令調のナスカの言葉に、怪訝にアーサーは顔を上げる。アーサーにとっては有余がなく、無駄な会話は省きたい。邪魔をされれば当然だ、それならば一人で淡々と作業をしたほうが効率が良いというもの。思うように進んでいない為、多少気が立っているアーサーは、口調が普段よりもきつくなっている。

思わず身体を引き攣らせたナスカだったが、左手を硬く握り締めた。

「あのね、多方面へ伝令が向けられたの。転移装置で迎える場所へは数人で向かって、戦いへ向けて兵を集めるのよ。これが多分最後の足掻き。一斉蜂起、慎重に進めないといけないわね。次はもう、本当にないだろうから……」

言葉を飲み込み、ナスカは続ける。それくらいの作戦であるならば、アーサーと知っている。

だから、こうして本を手に行っているのだ。勢いに後押しされ、幸運が重なった事もあり。世界中で一斉に総攻撃をかける、という半

ば破れかぶれの作戦だ。

だが、全てを今回の攻撃に託した捨て身で、覚悟を決めた戦いである。

「勝たなければ、いけない。戦いに出向くものが死しても勝利を掴み取らなければ、いけない。生き残った人々が、次へ続けていけるから」

「そうだね」

だが、アーサーは。

4星クレオへ戻らねばならない、この星で行き途絶えるわけには行かない。アサギが連れ去られたままだ、救出に向かわねばならなかった。3星チュザーレさえ救うことが出来ればそれで良い、という考えはアーサーにはなかった。4星クレオはともかくとして、”アサギ”個人を助けたかったのだ。

視線を合わせてくれないアーサーに、次から次へと話題を変えて気を引くことにしたナスカは、途切れる間もなく会話を繰り返す。賢者として、色恋事は苦手だ。

「あ、そうだ……。プロセインの地下で勇者の武器と思われる剣を入手したの、後で確認してくれない？」

「なんだって？ ああそういえば、昨日」

そういえばそう言っていた、本当にそれが勇者の武器ならばダイキ専用、ということになる。それも勿論届けなければならぬだろうから、アーサーは死ぬわけにはいかない。

どうすべきか、早速届けに行くのが良いのだろうか？ 軽くアー

サーは思案する。

「布に、包まれているわ。……一人、死んでしまったの」「どういうこと？」

低音のナスカの声、怪訝にアーサーは顔を上げる。ようやく、視線が合った。ナスカは多少口元に笑みを浮かべると、若干声を上げずらして語りだす。自分以外の話でも、こうして見つめてもらえることが嬉しかった。

首を横に振りつつ大きな溜息、ナスカは膝に顔を埋めるとくぐもった声で応える。

「嚴重な宝箱に仕舞われて、一振りの剣が見つかったわ。観るだけでも神秘的な輝きを放ち尋常ではない力を秘めていると解るの。一人の騎士がそれに手を触れた、すると……一瞬のうちに炎に包まれて騎士は炎上。救出する間もなく、息絶えてしまった。でも、不思議な事に直に触れないのであれば、平気なの。持ち帰ったわ、城内に保管されている」

「正統な勇者以外、触れることを赦されない……ということだろう。もし、本当に勇者の剣であるのならば、だが。ただの、呪いの剣かもしれないが。可能性は五分五分だ。」

「レーヴァテイン、か」

アーサーが呟いたのは、3星チユザーレの勇者の剣の名前だ。古書で読んだ事がある、確か凶解付だった筈だが……。

「片手長剣。災いを引き起こす剣だが、正統な持ち主が扱えば絶大な力を誇る、と」

「ええ、神殿プロセイにて嚴重に保管されていた、となると確かに辻褄は合うから本物の可能性が高いわね。布で巻いて持ち上げるときは、流石に私も冷汗ものだったけれど」

ナスカが持ち帰ったらしい、度胸が有る。人一人を抹消しておいた後で、どれだけの勇氣を持ってしてナスカは剣に触れたのだろうか。周囲が固唾を飲み込み見ていた光景が、いとも簡単に想像出来た。

右手の親指の爪を噛み、アーサーは気だるそうに立ち上がると本棚に本を戻す。

「先にそちらを観に行く、禁呪探しは後回しだ」

「私も一緒に行くわ！」

同じ様に立ち上がったナスカ、不思議そうにアーサーは見つめた。「場所さえ教えてもらえれば、一人で行ける。貴重な時間だ、ナスカは別の事を」

「いいじゃない、それくらい」

本を片付けて微笑するナスカ、軽い溜息と共にアーサーは踵を返した。二人、無言で図書室を歩く。

不意に。

「……ねえ、アーサー？」

ナスカが、思いつめたような声で背後から声をかけた。静かに足を止め、振り返ったアーサーを、ランプの光が照らす。思わず息を飲み込んだナスカは、仄かに頬を染め。

「そ、その、先程の新しい魔法の事……なんだけれど……私じゃ……ダメかしら？」

「は？」

深呼吸、控え目にナスカはそう告げた。静まり返っている図書室だからこそ聞き取れたが、本当に弱々しいものだった。アーサーの唇から出たのは、すっとんきょうな声。

何とも間の抜けたアーサーの声に、ナスカの心は軽く苛立った、そして自分が情けなくて惨めにも思えた。確かに意味不明な単語であったかもしれない、だがナスカにとっては精一杯だったのだ。それこそ、妙な魔剣を持ち上げるよりも大きな勇氣を持ってして、発言したのだ。

薄闇の図書室、対戦を前に控えて不謹慎かもしれないが、いや、だからこそナスカは。

「意味が解らない、説明してくれ」

怪訝に訊いて来たアーサー、おまけに近寄るところか立ち尽くしたまま。恋愛ことは確かに鈍そうだが、こうして自分がうつすらと頬を染めて震える声で告げた精一杯の言葉を全くアーサーが理解できていないというのが、本当にナスカにとっては悲痛だ。

軽く肩を落とし気を入れ直す為に、大きく深呼吸すると胸に手をそっと置く。解らなくもない、そうなのだ、アーサーは自分にとつて”恋愛対象”にはならないから……気付かない。直接言葉をぶつけないければ、理解してもらえない。言葉に隠された意味など、気付

いてもらえる筈がない。気を取り直して、ナスカは”賢者らしく”訂正した。

「二人の術を合わせてはいけない？ あなたは火炎、私は風。そう、この間の様に。タイミングの練習さえすれば良いと思わない？ 空いた時間で、他の魔導士達の面倒をみて……」

「だがそれは、二人が常に共にいなければいけないのだろうか？ それでは、使い物にならない。私とナスカ、指揮官になるであろう状況で流石にそれは無謀だ」

つまりは、そういうことなのだが。ナスカは唇を噛締めた、全く伝わらない。

……一緒に居たい、と。常に共に居たい、と。

そう言いたいのだが、微塵もアーサーには伝わっていなかった。呆れ返って眉を顰めると、アーサーは踵を返す。去っていく背中を見て焦燥感に駆られたナスカは、思わず声を張り上げていた。

「一緒に、居れば良いのよ。私たちの他にも指揮官が立派に務まる人はいるわ、合成魔法の必要性を理解して貰えれば許可が必ず降りるから」

「無理だ、絶対に。そのようなことは、断じて許可できない！ ……頭を冷やしてくれ、ナスカ。君はそこまで単純で愚かだったか？

二人揃って相応の効果が出るだろうか？」

アーサーの鋭い声が、室内に響き渡った。振り返り、本棚を拳で叩いた為に埃が舞う、黴が鼻につく。暗転する空気、ナスカは思わず身体を震わせてそれでもアーサーを見つめる。

こんな時に冗談はよせ、と目が訴えているがナスカとて必死だ、冗談ではない。生真面目なナスカ、無論恋愛など経験がなかった。そんな暇すら与えて貰えなかった、興味もなかった。自分の気持ちに気付いたのはアーサーと離れてからだ、プロセインへ派遣されたあの時からだ。

派遣され、指揮官を任命され誇らしく思い、意気揚々と城を出た。残していくアーサーに不敵に笑っていた、自身有り気に勝気に。だ

が、離れて暫くして急に胸に穴が空いたように不安になった。常に隣に居た存在がいけないというだけで、こつも不安に押し潰されそうになる自分に、引き攣った笑みを浮かべた。自分は賢者だと言いつ聞かせた、だが、思えば思うほどアーサーが恋しい。

アーサーに会いたくて必死にもがいた、数人の命を任されている身でありながら考えていたことはアーサーだった。だが、死に物狂いで帰還すれば当の本人は勇者を探しに出向いた、と。

それからは懸命にアーサーの無事を毎晩天に祈った、また遭える様に願をかけた。ようやく、再会出来たが…… 上手く気持ち伝えられない。

恋愛事を話せる友人などいないので、勝手に解らないのだ。相談も出来ない、無論プライドが邪魔して語ることなど相手がいても出来ないだろう。

賢者と呼ばれても、こちらはからきし、である。苛立つアーサー、鬱陶しがっているのは一目瞭然。

「今のナスカとは会話する気になれない……。レーヴァテインは私一人で観に行く」

きつく言い放つとアーサーはナスカを睨みつける。蛇に睨まれた蛙の様に、びくり、と硬直したナスカ。去っていくアーサーの、揺れる髪を見ていた。

もし、世界が平和だったのなら。……望むように、のんびりと……共に過ごせただろうか。

「一緒に……居れば良いと思うのに……」

ナスカの手に行っている蠟燭は、残り少なく。前進するアーサーを暗闇が包み込んでいった、呆然とその姿を見つめた。まるで、何かが全てを飲み込んで抹消してしまうようだった。

信頼を失ってしまっただろうと、ナスカは自嘲気味に軽く笑う。

「もし、もし。帰ってこられなかった。……。もう、会えないのよ？ 私はそれが酷く怖い……。だから、一緒に」

唇を不自然に歪め、瞳から零れ落ちる涙をマントの端で拭いなが

ら歩き出した。恋心に気付けば、恐怖が押し寄せた。

共に死ねるのなら、どれだけ素敵なことか。だが、身を案じて離れ離れで戦うのは……嫌だった。

護れる位置に、居たい。存在を傍らに感じれば、余計に勇気が、力が湧く気がした。

「泣いてはいけないわ、私」

我儘だ、とナスカは思う。悪いのは自分なのだ、解っている。

アーサーの態度は確かに冷たい、だが当然でもある。

自分は、賢者だ。アーサーも賢者だ、貴重な二人なのだ。国にとって、民にとって、世界にとって重要な二人なのだ。

一体、自分はアーサーになんと言ってもらいたかったのだろうか。ただ、困惑させ、憤怒させただけだった。誰も、なんの得にもなっていない。

『離れていても、互いに互いを想い合おう』

……とは、到底言ってもらえる筈もなく。

「私。結構我儘だったのね」

ぼつりと、声を零す。不安だった、恐怖に怯えて一人寂しく戦闘中も嘆いていた。自分の支えは、アーサーへの想い、また会えるという希望。恋愛感情が全くないアーサーだが、せめて、友人としてもよいから。

何か、何か言葉が欲しかった。

前髪をかき上げ、ナスカは。悔しそうに、右腕で涙を拭う。情けない、こんなに心乱れ惨めな思いをするのは初めてだった。暫し、その場で泣いていたが泣いていても仕方なく。涙が止まった頃、人目を避けナスカは帰宅する。

ベッドに倒れこみ、そしてそのまま眠りについていった。恋心の直し方など、本には載っていなかった。

その晩、質素ながらも宴を開く事になったのは、アーサーの帰還も含めつつ今後の活性に向けてだ。

城の中庭にて少しのワインに野菜が主のスープ、薄く切ったベーコンをパンに挟み皆で食べる。夜空が星の瞬きを美しく際立たせている頃、食事会を終えここに残ったのは数人。

隊長クラスの顔見知りだった、指揮官として任されている人物達である。その中には武術家ココ、剣士リンの姿があった。

「どう？ 身体の調子は？」

花壇の縁に座り込みながら、ココが歩いてきたリンに声をかける。苦笑いでリンはゆっくりとココに視線を送ると、肩を竦め自嘲気味に「まあ、適度に」と呟いた。

「今はただ、完治に向けて」

歩いていた、ということはそのままで重症ではないのだろうか確かに顔色が悪い。無理してベッドから這い出て来たのだろうかと憶測、ココが今度は肩を竦める。星のひとつを見つめながら、リンは切なそうに瞬きを繰り返している。

もどかしい気持ちは痛いほど解るが、なんと声をかけてよいのかココには分からなかった。深い溜息を一つ吐きながら困惑気味に笑い、周囲に視線を送る。友人を探してみたのだが、先程から見つからなかった。

ココは花壇から飛び降りて大袈裟に首を振る、誰かいないか物色するがすぐに諦めて唇を尖らせた。

「おつかしいなあー、セーラもアーサーもナスカもない。メアリは早々に帰宅したろうけど、さ。折角久々に会話を愉しもうと思っただのに」

腕組みしつつ、不貞腐れてそっぽを向くと再び花壇に腰掛ける。こうして夜空を見上げていると、大戦中だという事を忘れそうになった。

何事もなければ、こんなにも平穏なのに。ぼそり、と言葉を漏らす。

3 星勇者剣・レーヴァティン

アーサーは一人、嚴重に兵が配置された一室を訪れていた。無論顔パスである、一礼しアーサーを招き入れる兵士達。扉の向こうから、奇怪な気配を感じ取ったアーサーは眉を潜めた。

「成程、異質だ」

ぼそり、と呟けばどつと肌から汗が吹き出す。安置されている一振りの剣から湧き出る魔力が、賢者であり高等な魔力を持ち得ているアーサーに圧力をかけていた。兵士達には、全くの無害らしい。

「大丈夫ですか、アーサー殿。苦しそうです」

「ああ、平気だ。……真つ向から勝負を挑まれているような錯覚に陥る」

まだ、扉は開いていない。扉越しにこの重圧だ、アーサーは引き攣った笑みを浮かべるしかなかった。

アーサーは兵士たちの脇をすり抜けて、一呼吸置いてから扉を開くと剣へと足を速める。重々しい扉が、物々しい音を立てて左右に開いた。10メートルほど先に安置されている剣が、不気味に光った気がした。

同じ様にナスカもこのような重圧をかけられたのか？ 先程、そんな話はしていなかったが。

苦笑したアーサー、知らず握り締めた手の平が、汗で滴る。剣から発せられる空気は、紛れもない挑戦状、ドス黒い赤だ。

「何をそこまで威嚇する？」

間近に迫れば、空気が電気を帯びアーサーのマントを揺らしながら爆ぜる様に肌を刺激していた。

ナスカと、自分。魔力は同等、ならば違いは何か。性別、ではあるまい。

無意識の内に愛用の杖を握り締めたアーサーは、思わず構えを取っていた。

目の前の剣、一本が。強大に膨れ上がった、邪悪な魔物に見えてくる。よくもまあ、ナスカはこれを持ち帰ったものだ。

しかしふと、思いついたことが。

「ダイキか！」

弾かれたように叫ぶアーサー、そうだ、3星勇者ダイキにアーサーは出遭っている。

ナスカになくて、アーサーにあるもの。アーサーに微かに残っているかもしれないダイキの気配を感じ取り、急かすように剣は……所有者を求めているのだろうか？

後方で狼狽している兵士達を尻目に、アーサーは口元に笑みを浮かべる。

「レーヴァテイン、勇者ダイキに遭いたい、と？」

剣に声をかけた。一瞬、剣が眩く輝いた気がしたアーサーは直感した。紛れもなくこれはレーヴァテイン、勇者の剣。

「暫し、待つてくれ。……こちらを片付ける。必ず、私がダイキの許へと届けるから」

剣に約束をした、満足そうに剣は威圧感を放つことを静止し、沈黙に入る。それまで部屋に充満していた重苦しい空気が、瞬時に掻き消えた。

何時の間にかアーサーの汗も、引いている。一刻も早く、この剣をダイキの許へと連れて行かねば。意志を持っているような、この目の前の剣。未恐ろしい剣である。

「彼に……ダイキに扱えますかね？」

捨て台詞を吐くようにアーサーは呟いた、が瞳は微笑んでいる。扱える、だろう。

アーサーには見えた、この剣を背に掲げて勇ましく立っているダイキの姿が。勇者は、成長しているだろう。この機にも自覚し、己を高めているだろう。

遅れを取るわけにはいかない、軍事会議を一刻も早く開くべきだ。アーサーは、唇を噛締めた。呼ばれるように、アーサーの許へと

辿り着いたレーヴァテイン、全ては勇者ダイキへと巡り合うため、
なのだろうか。

人すらも、剣すらも、全てが何かの路を進んでいるようだった。

勝利を、我が手に

アーサーは踵を返し歩き出す、宴が開かれていることは聞いていたので出席しないわけにはいかない。このような状況下でせめて戦意を上げ様という計らいだ、一応主役なのだろうからせめて顔を出さねばならなかった。アーサー的にはそれどころではなかったが、脚を進める。

「ココ！ リン！」

擦れ違う人々と軽く会釈を交し、勧められた酒を丁重に断りながら瞳を走らせた。主役の登場に皆が声をかけようと一目散に近寄ってくるのが、多少煩わしく感じられる。

夜の空に星座は何時も同じ様に光り輝いている、ふと見上げて皮肉めいて顔を歪めたが視線を下ろした先に知り合いを見つけ、直様アーサーは大声で呼んだ。

不意に大声で名を呼ばれ、弾かれたように振り返ったココは満面の笑みで腕を大きく振り応える。

「アーサー！ ドコ行ってたのさ、あたい探しちゃったよ！」

「レーヴァテインを見てきていた、真正正銘、あれは勇者剣だ！」

ココからおどけた声色が消え、唇を嚙締めると顔色も変わる。間近で一人の人間が消滅した際を看取った人物だ、警戒して当然だった。悪魔の呪いの剣にしか見えなかったのだろう、持ち帰ったナス力には畏怖の念すら抱いただろう。

沈黙したままリンが近寄ってくる、軽く頷きアーサーは手頃な椅子を三つ用意し、二人を座らせると余っていた食事を適当に皿に取りながら語り続けた。

「あれを。ダイキに届けたい、彼が持つべきだ！」

「ぼうや、なんだろ？ 本当に勇者なのか？」

「若干、12歳。正直、目を疑ったのが事実な程幼い。しかし、勇者である事に間違いはない！」

「アーサーにそう言わせるくらいだ、余程秀でたぼうやなんだろうな」

テーブルに肘を乗せて沈黙を続けるココの代わりに、リンが尋ねてきた。ハスキーボイスの彼女は常に落ち着いた声で、感情を読み取る事が難しい。勇者を軽視しているような口調にも感じられたが、そういうわけでもなさそうだった。興味があるように思えるが、信じていない感じにも思える。

「いや、勇者の破片すらまだ見出せていない。恐ろしく優秀なのは、4星クレオの勇者、アサギだ。彼女が勇者の要にして、全ての統括者、と言つても過言ではない」

ちらりと横目でココを見つめる、まだ口を閉ざしたまま思案しているようだった。「現在は魔王に攫われているが」……と自嘲気味に付け加えたアーサーは、ようやく席につくと冷えた食事を口に運ぶ。

何も言わず立ち上がったココが歩き出すのを目で追っていた二人、ようやく戻ってきた彼女の手には湯気が立つカップが三つある。暖かな茶をリンとアーサーに差し出したのだ、三人で輪を囲み語りを再会する。

「アサギ？」

「ああ、今まで見たことがないほど、美しい少女だ。外見もだが、内面からも不思議な魅力が沸き出ている。天性のフェロモンというか、カリスマというか」

「……賢者様を翻弄出来るとは、なかなかやるね勇者アサギ」

アーサーが上気した頬と興奮気味の声で語っていたので、多少の驚きと、僅かな嫌悪感とが混じった声を出したリン。勇者が美しい、というのは意外でもあったが何より堅物のこの男がこうも浮き足立っている様子は見慣れない。ココも瞳を開いてアーサーを見ている。不謹慎ではあるのだが、リンもココもその勇者に非常に興味を示さざるを得ない。

「各国の主要都市へと、伝令が向けられた。こちら側の動きを魔物

達に知られては非常に拙いが、最大にして最後の戦いになるかと思われる。戦士や傭兵達は無論、一般市民も参加するかもしれない。二人を無視し、アーサーは口元を拭うと食事を終えて茶を啜っていた。

「それぞれ完璧な指揮官が必要となる、上手く纏め上げ迅速に行動出来る者が」

「……残されている将は少ない、アーサー」

「しかし、ミラボー不在のこの機を逃すわけにはいかない。そして私はダイキに剣を届けなければならぬ」

「アーサー、万が一がある。ここを離れ、先に剣を届けては？ ダイキとの関わりはアーサーしか持ち合わせていないのだから」

リンのアーサーの会話を大人しく聴いているココ、会話には参加せずに髪を持って遊んでいる。だが、聞き流しているわけではない発言する事がないだけだ。

「それも思案したが、また勝手に一人、転移するわけにもいかない。こちらで、やるべきことを私も終わらせたいたいのだ。まあ、ミラボーが戻ってくるとなると厄介だが……、考えないでおこう」

「しかし、先日の奇襲も有る。あちらとて簡単には敗北しないだろう、士気が上がれども綿密な計画は必要かと」

アーサーは地図を取り出した、無論、3星チユザレの地図である。広げ、二人に説明を始める。

「あくまで大凡の予定だ、反応のあった都市次第では変更になる」
蜂起した仲間達は、近場で3〜5の団体となり密集して今現在乗っ取られてしまった街や城の回収に向かう。タイミングを間違えたり、狙う配置を間違えると非常に厳しいが、同時に他地方で起こせば魔物達とて混乱するだろう。

ゆえに、指揮官の重要性が問われてくるのだ。武者震いなのか、ココがそつと身体を抱き締めた。

ココは、元は辺境の村出身である。決して裕福ではない自給自足の村で、男達に混じって魔物退治に明け暮れていた。が、あまりに

も魔物の奇襲が増え、村の者達だけでは護りきれなくなり皆でこころ、ボルジア城まで非難してきたのである。

途中、多くの命が失われた。住み慣れた土地を捨てて、逃げるように転がり込めばこころ、安全ではなく。魔物を倒す事に存在意義を見出し、快感と興奮に溺れそうになった頃もあったが、それを克服し強者を目指す。

村自体、足技を得意とする戦闘民族だった為ボルジア城に来てからも歓迎を受けた村人達。特にココは足技を得意とし、ブーツの先端に鉄が埋め込まれている。かなり重いがそれを毎日履きこなし、戦闘時に跳躍も俊敏に動く事も可能としていた。強靱な脚、そして女だてらに最前線で戦う度胸。

茶色の髪を無造作に二つに束ねている、可愛い顔立ちをしているが瞳は狩をする肉食獣の様に鋭く冷やかだ。

リンは、微かに顔を顰め忌々しそうに自分の足を見つめながら軽く溜息を吐いた。金髪長身の美女だが、引き締まった身体は豪快に剣を振り回す。自身を多くは語らず、作戦会議には積極的に会話に入るがそれ以外は寡黙な女だった。素性を皆知らないが、気付けばボルジア城にて剣を振るっていた。

彼女、実は遠方の大貴族の娘である。戦闘とは全く無縁な筈であった、屋敷の中でぬくぬくと育てられていた。しかし、ある時民衆を楯にし自分達を護っていた父親に嫌気が差し無我夢中で飛び出したのだ。手持ちはありつたけの宝石と、剣のみ。世間知らずのお嬢様は何度騙され、宝石を奪われ。人買いに捕まり、身体を奪われそうになった。

しかし運は味方した、師匠とも呼べる男に出会い、同行したのである。その際に、剣を教えて貰った。女だからと嘗められないように、と常に寡黙でどこか冷徹な雰囲気を出すようにとも教え込まれた。

リン、14歳。

出合った男は38歳、男女の仲になるには歳が離れてはいたが淡

い恋心を抱かずにはいられなかったリン。しかし、そういった関係も持たず二人は旅をした。向かっているのはボルジア城、リンは知らなかったが彼は騎士団員であったのだ。

その途中、男は命を落とした為リンは一人、ボルジア城へ辿り着いた。見知らぬ女を城が受け入れたのは、男の手紙及び剣をリンが丁寧に差し出してからである。

あれは、魔物の奇襲であった。リンを庇い、還らぬ人となった男。初恋の、人。リンは、彼から教えられた通りに剣を振るい続けている。今では名が通る程にもなった。

三人は、冷えた空気を感じ身体に障るから、と解散した。多くは語らなかつたが、無言の圧力だ。

”失敗は許されない”それが自分たちに課せられた使命であると。

数日後、各地からの伝令が徐々に集まり始めた頃。

「ボルジア城第一部隊・騎士スカルノ。第二部隊・騎士ハノイ。第三部隊・賢者ナスカ。第四部隊・賢者アーサー。それぞれの弓兵隊長、槍兵隊長、重兵隊長、軽兵隊長、僧兵隊長、魔兵隊長は……」

指揮官が四名、選出された。

人混みの中、名を呼ばれたナスカは表情を曇らせ寂しそうに瞳を伏せる。唇を軽く噛締めた、解つてはいた事だがアーサーとは離れってしまった。承知していた、どうにも覆せない事だと知っていた、けれども。……まだ、整理がつかない。このように動揺した状況下で上手く皆に指示が出せるか不安だ、だが成功させなければアーサーの足手纏いになる。

「アーサー、生きて。生きて、帰りましょうね」

ナスカの呟きに気付くものなど、居なかつた。

リン、ココ、セーラー、メアリの顔見知り組は全員ナスカに配置された、気の知れた仲間ながらやり易いので多少の安堵を憶える。手を振っている各々に微笑し肩の荷を多少下ろす。

「……こんなとき、ねえちやまが居たら心強いのに」

メアリが、ぼそりと半泣きで呟いた。まだ幼い彼女は人混みの中で埋もれている、手にしている杖はデュオマーキュリーという名の代々伝わる家宝だ。1メートル程の鉄で出来た杖で、両端にターコイズとサンゴが付属されている。比較的大きな石なので、杖自体が高価である。水属性のターコイズで魔力を高めつつ危機を回避する為に造られた。

メアリの実家は代々高名な魔術師を出してきた名家だ、なのでメアリ本人に無難期待が課せられている。しかし、まだ彼女は破片すら見せることが出来ていなかった。というのも、周囲が気の毒に腫れ物でも触るように接しているためである。

「ねえちやま？」

不思議そうにリンが首を傾げた、納得したようにセーラが声をかける。落胆しているメアリの肩に手を置き、そつと髪を撫でる。

「リンとココは知らないわね。メアリにはお姉様がいらつしやるの。それは聡明で偉大な魔術師であられたわね……、彼女が居れば心強けれど。でも、メアリ。貴女は彼女の妹、貴女とて彼女に近づけるはずよ」

「私には……無理。まだ、水属性しか使えないし。ねえちやまは、身内の私がいうのもなんだけど……本当に素敵で……」

涙声になったメアリを引き寄せ、そつとセーラが髪を撫でて落ち着かせる。リンが軽く首を動かした、セーラは瞳を伏せる。メアリの姉は亡くなっているのではと察した、恐らく魔物の手にかかってだろう。

「エア・ロクシタン。優秀な魔術師です、今もこれからも。メアリ、いつ再会しても良いように勤勉に励みましょね」

「うん……ありがとうセーラ」

まだ幼いメアリだが、彼女は自ら志願しこの場所に居る。城からほど近い街が二人の故郷であった、姉であるエアは近郊にも名を馳せるほどの魔術師であり、またかなりの美貌の持ち主でもあった。為常に人気があった。

烏の濡れ羽色の髪はしつとりと艶があり、首を傾げるだけで妖艶である。

メアリは、金髪だった。何度姉のような髪に憧れた事だろう、髪を弄びながら幼い頃から姉を見ていた。大人になれば、姉の様に美しく聡明になれると信じていた。

両親はメアリが物心つく前に亡くなっていたので、エアがメアリの母親代わりだった。メアリを護る為に、必死に努力をしていたのかもしれない。だが、それはメアリの知らない事だった。

そんな姉の噂は無論、ボルジア城にも届き腕を買われて城へ出向いた。元々、両親不在とはいえ近郊では名高い魔術師の末裔である。目をつけられないはずがない。

幾度かの遠征で、エアは……戻ってこなかった。

城へ出向いてから、同じ魔術師で相応しくないのでは、と影で囁かれた非常に貧相な男と恋仲になったエア。彼と居るときはメアリが初めて見る、姉は朗らかな表情をしていた。恋をしていたのだろう、あの常に全てを拒絶し、自分だけに甘く優しくしてくれていた姉の”結界”が解けた瞬間だ。

そんな彼とは戦いに出向くときも常に一緒だった、そして二人同時に戻ってこなかった。

けれども、メアリは姉が死んだなどとは認めていなかった。何処かで生きている筈だと、信じていた。

全く、死んでいる気がしないのだ。

密やかに噂されるのは姉の死だが、荒立つ心を必死に押し殺してメアリは耐えている。

姉の死で本当に一人きりになった魔術師は、周囲から遠ざけられた。それがメアリには大きな負担なのだ。セーラは不憫に思い、姉の様にメアリに寄り添っている。彼女の魔力を解き放つ鍵は、心の安定にあるのだろうと考え付いた。強くなりたいのに、何かが邪魔をしている。

強くなったところで、何が産まれるわけでもないがメアリが望む

のであれば手を差し伸べたい。セーラは身寄りのなかったメアリを引き取った、小さな家に今は二人で住んでいる。

天涯孤独の幼い魔術師、メアリは毎晩就寝前に空に姉の安否を祈ってはいるが、セーラとて絶望的だと思っている。決して口には出さなかったが。

……そう。メアリは正しかった、エアアは生きているのだから。4星クレオの魔界にいるのだから……魔王ミラボーの手先として。

アーサーは、再びレーヴァティンを訪れた。剣に誓いに来たのだ、生還することを。剣は何も発する事はない、不気味など程静まり返っている。

今回の任務は魔王の撃破ではなかった、アーサーの立場を考慮して最も安全と思われる地域への派遣となる。そして、他の部隊から比較すると城から最も近い。

大部隊での移動は目立つので、徐々に指揮官達は移動していくのだが、アーサーは最後だった。それまでは集まってきた一般市民達に戦闘を教えこむ、応急処置の仕方を学ばせる。

やらねばならないことは、多々有る。寧ろ、そちらのほうが精神を消耗しかなかった。

やがて遠方の第一部隊が、精鋭部隊を引き連れて出発した。その数日後に、第二部隊が。さらに数日後にナス力率いる第三部隊が発し、それをアーサーは見送る。

「勝利を、我らに」

毎日レーヴァティンに跪き、アーサーは祈りを捧げた。神にはない、自らの決意にだ。静まり返っている室内に後方から足音が聞こえてくる。徐にアーサーは瞳を開くと、唇を軽く湿らせる。

「アーサー殿、指示を」

一礼し、兵が一人訪れていた。声が地下の一室に木霊している、剣が静かに二人を見守る。

「まずは、皆に作戦を再度頭に叩き込んでもらう。意図を理解して

いなければ計画など破綻だ、誰かに指示されて動くのではなく、自らの意志で活動してもらいたい。そうすれば自ずと、皆団結できるだろう」

「はっ！」

「それから、志願した一般市民には所持品の説明も。憶える事が大変なれば、紙に書き記し薬草の扱い方を徹底だ」

「ははっ！」

「見て憶えている時間など、ない。実戦に移り怪我をしない程度に組み手を繰り返し返そう」

「畏まりました」

一刻も早く、任務を完了し。剣をダイキに届け、そして……。

「アサギ、待っていてくださいね」

アーサーは微笑した、そうだ、アサギを救わねばならないのだから。

薔薇と鈴蘭、蠅螂と蝶、マビルとアサギ

今宵も暇だった。基本、何もすることがないマビルは一日の半分を眠って過ごす。月の光がまぶしすぎて目が覚めた、微妙に暑くなつた夜で風に当たりたくて外に出てみる。

さわさわ、と風が吹けば心地良く火照つた肌を冷やしてくれる。

瞳を閉じてふわり、と宙に浮かんでいた。

「早くおねーちゃんに会ってみたいー、でも、あたし。光がいいの、影”じゃなくて、光がイイの”

宙に浮かび、髪を弄んでいたマビルはふと気配を感じトン、と地面に降り立った。すらりとした細長い手足は、可憐な小鹿を連想させる。可愛らしく妖艶に、木陰の人物へと朗らかに微笑みかけた。

そこから、トロン、とした目つきの少年が出てきた。鮮やかな金髪、大きな黒い瞳の人間年齢にして17歳程度の少年だ。数日前から稀にこうして夜になると訪ねて来る魔族の少年である。

マビルの傍らまで吸い寄せられるように惹かれて辿り着いた少年は躊躇いなく、マビルを地面へと押し倒した。少年といえども小柄なマビルを覆い隠すには十分な体格、二人は地面で無邪気に絡み合う。何かに憑かれた様に一心不乱に自分の唇を求めてくる少年、焦らしてかわしながらマビルは溜息を吐いた。

退屈そうに、肩を竦める。

「なんか、この子も飽きちゃった。でも、しょうがないかな、この辺りの綺麗なオモチャ、みんなあたしのモノなんだし。他に代わりもないしー……」

マビルの衣服をほぼ脱がし終え、少年は月光を浴びているような柔らかなマビルの肌に舌を這わせている。荒い呼吸の余裕のない息遣い、そんな少年とは裏腹にマビルは困惑気味に首を傾げる。上の空だ。

「んー、なんていうか。あたしの好みってさ、もっと……こう……」

遅しいけど細身で、二重で切れ長激しい光を灯す瞳、身長は……このくらいでもいいんだけど。とびっきりの、あたしに釣り合う美形のオモチャが欲しいんだけどな……。なんていうの、心の奥底から燃え上がるような情熱的なさあ……」

マビルの言う事など全く耳に入っていない少年、執拗に乳房を唇と手で弄っている。まるで赤子が求めるような仕草だ、そんな少年に母性本能に撥られたのかマビルはそっと、その顔を優しく包み込んだ。マビルの頬が軽く赤みがかかる、男が聴いたら即座に欲情してしまいそうな甘く重たい息を、唇から吐けば。耳で直にそれを受けて少年は、自分のモノを強引にマビルのナカへと押し込んでいた。

一心不乱に腰を動かす少年、マビルはそれが愛しくて可愛くて余裕の笑みで見つめている。

くすくす、くすくすくす……。

花と見紛うばかりの美しさ、人の心を絡めとり放さない魅惑で危険な花。勇者アサギに似た、マビル。

マビルが棘を持ち夢現へと誘う妖艶な薔薇なれば、アサギは穏やかな物腰の清涼感溢れる清楚な鈴蘭といったところか。

森に、淫靡な声が響き渡った。

絶頂を迎えても、尚も求めてくる少年に苛立ちを感じたマビルは上に乗っていた少年を突き飛ばす。執拗に求めてくる少年だが、マビルの性欲は満たされたのだ。もうこれ以上は用はない、つまらないだけだった。

腕から逃れ、汗を流すために泉へと入った。空を仰ぐ、綺麗な澄み切った空に相変わらず月は燦然と輝いたままだ。思わず見とれていると、何者かの気配を感じる。少年ではない別の誰かがやってきた。

にんまり、と嬉しそうに口元に笑みを浮かべる。退屈しないで済む相手だ、気配で誰だか解っていた。

その間にもマビルを追って泉へと入ってきた少年は、未だにマビルを求め身体に口付けを始めている。

忌々しそうに少年を蹴り上げたマビルは、小走りで泉から上がり衣服を手にして来訪者の下へと駆けつけた。一時の快樂など、終われば面倒なだけである。少年にとっては、違っていたがそんなことマビルは知らない。

少年は、マビルに心底惚れていた。気紛れな仔猫で自分には何もしてくれないが、身体は重ねてくれる美しい少女だ。マビルの許へと通い始めて、ある意味人生が狂っていた。一時もマビルの事を考えなかったことがなかった、それは麻薬の様に身体を蝕む。何者なのかは知らない、森から出てこない美少女。

彼は頭が悪いわけではなかった、寧ろ賢い少年だった。瞬時にマビルの危険性を察知したのだが、時折見せる寂しそうな表情に心打たれてしまった。何に悩んでいるのかなど、少年は到底理解出来ない。何故ならばマビルが何も話さないからだ、欲しい物は言う、時折ポツリと何かを言う。だが、肝心なマビルの心までは語りだすことはない。

少年は思った、マビルのそんな心の蟠りをとってあげたいと。

けれども、マビルにとってそれは要らぬお節介である。そこまで介入されたくはない、マビルにとって必要なのは美形で閨事の上手な男……それだけだった。少年との温度差は激しい。

マビルに蹴り上げられ泉に倒れ込んだ少年は、それでもマビルを追う為に脇腹を押さえて歩き出す。前を走っている黒揚羽の様な美少女を追う。

そんなこと露知らず、マビルは息を切らせて走っている。それは、待っていた人物だった。だから、急ぐ事が出来た。玩具など霞むくらしいの相手だ。

「どう? どう?! おねえちゃんには会ったんだよね!? どうだった?？」

月の一筋の光の中、情事後のマビルは気だるそうに髪をかき上げ兄のアイセルを出迎える。言った矢先、眼下を一羽の小鳥が飛んでいたの思わずそれを捕まえたマビル。視界に入って邪魔だったら

しい、無造作にそれを右手で握り潰した。

微笑し、手から流れ落ちる赤い糸のような鮮血を見つめているマビルにアイセルは背筋が凍る。見ている者を魅了できるであろう容姿と、淫靡な吐息、纏う空気が妖艶な色彩。一度狙った獲物は逃がすことなく、手中に収めてしまうような、だが飽きれば無造作に命を奪うような。

……思わず、蠅螂を思い出したアイセル。交尾後、栄養の為にオスを食い散らかす昆虫・蠅螂。喰われると解っていて、尚、交尾するのは種の保存の為だがなんとも不憫な最期だ。

苦笑いし、アイセルは数刻前まで自分が見ていた少女と妹であるマビルを重ねる。確かに、顔の作りはアサギとマビル、似ている。

だが、雰囲気はこの違いは。あまりにも、歴然としていた。これが、”光”と”影”の違いなのだろうか？

「おねえちゃんに会ったから、あたしに会いに来たんでしょう？
もったいぶらずに教えてよ」

手の中の小鳥を地面にするり、と落下させると右脚を持ち上げてそれを踏み潰した。啞然とアイセルは見つめる、止める間などなかった。

と、ようやく少年がマビルを求めて再び執拗に駆け寄ってきて背後から抱き締めた。全裸の少年に思わず息を飲んだアイセルだが、妹の淫行など前から知り得ている。セフレの一人なのだろうと、思った。それ自体は別に大した事ではない。

「……あんた、邪魔」

近寄ってきた少年に視線を向けずに迷わず軽やかに回し蹴りを喰らわせる、首の骨を叩き折った。会話の最中に、遮って近寄られた事がマビルの逆鱗に触れたようだ。

アイセルが止めに入る間もなく、の惨劇である。鈍い音がして、少年の身体はゆっくりと地面へと落下していった。確実に一撃で仕留めた、華奢な脚ながらも威力は絶大だ。

「さ、早く話してよ、おにーちゃん」

アイセルは、啞然と少年の亡骸と小鳥の亡骸を見比べる。つい先程まで、生きていた命だ。改めて、目の前の妹の姿を目に入れる。

濡れた漆黒の髪、濃紫のレースの衣服を身に纏い闇の沼を彷彿とさせるような深淵の瞳。アサギも確かにマビルと同じ黒い瞳と髪の色だ、だがこつも違うものなのか？ アサギの瞳の奥には安堵できる安らかな夜空のまたたきが見えた。

思案中、痺れを切らしたマビルが突如としてアイセルを押し倒す。唇を近づけるマビル、これくらいでは動じない、いつものことだった。怪訝に唇を交わすと、アイセルは睨みつけるようにマビルを正面から見つめる。

「女は好きだ、けれど、妹を抱くのは趣味じゃない……と何度も言わなかったかマビル。そもそも、お前の場合キス一つで何が起こるか」

言い放ち軽々とマビルの身体を抱き上げ起き上がると、くすくすと笑っているマビルを再度睨みつける。だが、マビルは微笑したままだ。全く反省の色が窺えない、解っていてやったのだ。潤んだ瞳、悪戯っぽく舌を出し髪をかき上げ、マビルは自分の指を口に含む。

「バレた？ あたしの独創魔法、”あたしの下僕になっちゃいますよ口付け”。……まあ、こんなことしなくても、あたしの美貌と豊かな胸に触り心地の良いお尻には、みーんな虜になってしまうけれども、ね」

予言家

漆黒の瞳が、轟惑的に輝いた。アイセルに詰め寄るマビル、怪訝にアイセルはそれを軽く押し返す。

見慣れたマビルの全身だ、それでも思わず爪先から頭部まで見つめたアイセルは軽く溜息を吐いた。

確かに、見た目は絶世の美少女であると、アイセルとて思っていた。妹だが。こうして、マビルの魅力に惹き付けられて死ぬであろうと本能で解つていても、男は近寄ってくる。哀しき男の本能なのか、甘美な蜜を滴らせる危険な花に群がる昆虫の様に。

マビルにとつて、男などただの”オモチャ”だった。毎日する事がないのだ、魔族にとつて長すぎる時間を持つて余すように、マビルは”オモチャ”で遊ぶ。

いつの頃か、マビルは美形な男達と肌を重ねるようになった。最初は快樂目的だと、思っていた。しかし。

小首傾げて淫蕩な空気を吐き出しているマビルを見つめると、ふと。稀にだが何かを探すように迷子の猫になったかの様に……、切なそうに空を見上げる時がある。

身体を重ねるのは、温もりを欲して寂しいからなのか。それとも、何か別の？

マビルから”オモチャ”を取り上げる事などできないが、殺しは良くはない。飽き性なのか、”オモチャ”はマビルの気紛れで死していく。何人も魔族が忽然と姿を消していれば、いい加減誰かがマビルの存在に気がつくだろう。

強固な結界の中にいるといつても、冷汗ものの”透明な籠”。神隠しなど、魔族間には有り得ない、マビルが露見するのも時間の問題だ。

「なあに、真剣な顔して？」

くすくす、と笑い続けるマビルは、そつとアイセルの露出した胸に指を伸ばす。ゾク、思わずアイセルの背筋に衝撃が走った。僅かだが身体を強張らせたアイセルに、満足そうにマビルが微笑みツ、と人差し指を軽く動かす。

「妹に、欲情しちゃダメよ、おにーちゃん」

「……するか、馬鹿」

マビルの手をはたき、アイセルは一步後退した。大袈裟に顔を顰めて、はたかれた手を優しく擦っているマビルの後方から、声が聴こえる。

「兄妹で何イチャついでるの、お二人さん」

おどけた声が、森中に響き渡った。二人は驚いて反射的に身構えたが、そちらの方角を見つめると脱力。同時に、名を呼ぶ。

「トーマ！ 戻ったのか！」

木々の間から、ゆっくりと顔を出し歩み寄ってきた少年。人間である、12歳程度の。長い黒髪を一つに後ろで束ね、きつめで大きな瞳を輝かせながら二人へと近寄ってきた。

「ただいま、アイセル、マビル」

トーマ、と二人が呼んだ少年。アサギとマビルに若干似た、可愛い顔立ちだった。この二人に似ているとなれば、かなりの美貌の持ち主である。幼い為美少女に見えなくもない。

「僕の”姉さん”が来てるって？ 会いたい、ものすごく会いたんだ……。アイセル、連れてってよ」

嬉々として、しかし切なげにアイセルに詰め寄るトーマ。潤んだ瞳で見上げられ、思わずアイセルは喉を鳴らした。男だが、妙に艶かしい。マビルとはまた違った淫靡さがある。

「マビルより、色香があるな。媚感がないし」

「んあ？ なに？」

思わず口にしたアイセルの本音を聞き逃すわけがなく、マビルが目くじら立ててアイセルの足を思い切り踏みつけていた。苦笑いで顔を顰めたが、大して痛くはない。鍛えぬいたアイセルの肉体、華

奢なマビルの渾身の踏み付けなど、どうてことないのだ。

それよりも、トーマだ。今は冗談を言っている場合ではなかった。瞳を輝かせて自分を見ているトーマだが、無常にアイセルは首を横に振り、ゆっくりと言葉を吐き出す。トーマの表情が曇ることを解っていて。

「駄目だ、トーマ。まだ。……その”時”ではない」

その、平素からは想像できないアイセルの威厳溢れる質感に、一瞬怯んだトーマだが唇を尖らせる。

「ヤだよ。姉さんに、会いに来たんだ。遠くからでも解ったんだ、僕は会いたいよ！」

声を荒立たせ、そっぽを向いたトーマは完全にへそを曲げたようだ。苦笑いしてアイセルは困惑気味にマビルを見るが、げんなり、と視線の交差したマビルも唇を尖らせ小さな欠伸を一つ。

暫しの沈黙、項垂れながらトーマは口を開く。

「どんな人だった……？ とつても綺麗な人だったでしょ？」

戸惑い気味に、たどたどしく、気弱に。地に視線を落とし、そう呟いたトーマの髪をアイセルは軽く撫でる。傍らで、マビルがさも可笑しそうにクスクス、と笑い出した。

「あたし以上に綺麗な女なんて、いるわけないじゃん」

自信たっぷりな軽々と言い放ち、胸の谷間を強調してウィンク。

苦笑いしたアイセルと、露骨に眉を潜めたトーマ。確かに、そう言えなくもない、が。マビルとアサギは似ている。

「いや、マビルよりも遥かに美しい、何より優しく穏やかで安堵できる不可思議な空気を持っている。会って損はしないさ、思わず跪きたくなるよ。俺も正直、見惚れてしまった。……が、尊いお方だ。見ているだけで十分、こう、触れなくても触れるこそが禁忌のようだな……」

穏やかに微笑み、瞼の裏に思い描いているのか薄っすらと頬を染めたアイセルにトーマが歓声を上げる。

「あ、やっぱり！ そうだよな、マビルなんかと比べたら姉さんが

可哀想だよ！」

弾む声は、森に木霊する。憤りを感じながら、非常に不愉快そうに身体を小刻みに揺らしながら聴いているマビル。この世で一番美しいのは自分だと、絶対の自信を持っているマビルだ。憤慨しても、致し方がない。

「何よそれ！ 超ム力つく！！ 何なわけえ、信じられない！ 私のほうが上、上なのよ！」

マビルの背後から薄黒い煙が立ち昇っているように見えるが、お構いなしに二人は会話している。妹の、義姉の嫉妬など、しつたことではないと言わんばかりに。

「アサギ様は、素晴らしい少女だ。あの方ならば確実に魔族を導いてくださるだろう」

瞳を輝かせ、その名を狂おしく愛おしく、切なそうに呼ぶトーマ。「アサギ！ アサギという名なんだ！ ……僕の姉さん。僕のたった一人の姉さん。……アサギ。早く、お会いしたいです」

「アサギ？ ふん、あたしの”マビル”ほうが響きが良くて可愛い名前よね！ 何がーんだかつ」

三人三様。誰かの言葉に誰かが反応、反発、口々に。数分間その場で目まぐるしく三人は口を動かしていたが、立ち話もなんだから、と家へと向かい始める。

丘の傾斜近く、石柱転がる廃墟のような空間。その中に佇む、決して大きくはない小さな家。周囲は森で囲まれている、他からの侵入は許さない、隠れ家。

その家の中、並べられた三人の食事。食事は兄のアイセルが担当する、マビルは作ることが出来ない。

焼き立てのパンに、子羊のロースト、茄子のペーストと赤ワイン。弟のトーマも皿を並べたり運んだり、ワインを注いだりと手伝っているがその間マビルはゆったりと天井から吊るされていたハンモックで居眠り中だった。

せわしくなく動く兄弟を横目で見やりながら、可愛らしく小さく

欠伸。平素は下僕と化した”オモチャ”に食事を作らせ、運ばせているマビルだ。何も出来ない、やるうとはしない。面倒だから。

数ヶ月ぶりの再会となった三人は、昔話に花を咲かせた。この、三人。アイセル、マビル、そしてトーマ。黄緑の髪の子と、美しい漆黒の髪の子、同じく漆黒の髪の子。

代々魔王である最も高貴な血族しか知りえない、”予言家”の者達だった。正式にその力を受け継いでいるのは、無論長男であるアイセルだ。

古来より、最初に生まれ出た子に予言の能力は授けられる。アイセルの場合、父は婿養子なので母から受け継いだことになる。受け継いだ、といっても特にアイセルは未だに予言をしていなかった。母の遺した予言通りに、忠実に行動しているだけである。

アイセル自身、魔力が低い。その為か、予言の能力は確かに受け継いでいると聞かされたが、実感はなかった。ついでに、実績もない。ふとした瞬間、確実な未来が視えるらしいが……。

魔族の繁栄の為、重要な未来の出来事を予知する力。嘗ては、王族お抱えの巫女であつたらしい。実際、代々女性だったのだが初めてアイセルが男として第一子となった。

アイセルの母の予言とは。

『アイセル。あなたの、妹です。マビル、といます。この子に瓜二つな少女が何れ存在します、今はまだ、生まれ出ていません。その子を、探し守護することがあなたの役目です。その子は、現魔王・アレク様に代わって魔族を率いる女王なのです』

言われ、生まれでたばかりのマビルと対面。出産で母から離れていたアイセルは、久し振りの母との再会でそんな目の玉が飛び出る勢いのことを言い放たれた。

鈍器で頭を殴られたように、混乱。冗談ではない、とは解っていたが乾いた声で笑う。室内に、アイセルの笑い声が響き渡っていた。

現魔王・アレクはアイセルから見ても衰えない現役の魔王の筈だ。何年先の事か知らないが、魔王になる少女、とは一体どのような人

物なのか。母の言葉は絶対だ、未来は外れる事がなく運命の輪を回すだろう。

以来、アイセルは少女を探した。沢山の少女と出会い、情報を掴む為に常に少女達と行動をとりにした、ゆえに”女好き”の称号を得る。アイセルにしてみれば、女王探しの一貫としてそれは非常に好都合だったので否定しない。好色男と見られたほうが、行動を怪しまられずにすむ。

誰にも知られてはいけない、秘密。それは、予言家の一族以外に魔王の血族しか知り得ない、最大の秘密である。予言家の者が伝えた予言で、外れた事は何も無い。先読みの一族は、こうして古来から魔族達を護り抜いたのだ。

さて、ようやく対峙出来た妹マビルに瓜二つな少女、アサギ。

唇を湿らせ、重々しくアイセルは口を開き出す。アサギについて二人に言って聞かせた。語らねばならないことは、多々ある。

とにかく、周囲の空気が全く特異なものだ、と。そして、魔族ではなく”人間”の”勇者”であると。

そう、アサギは魔族ではない。魔族でないから、アイセルは今まで会えなかった。

魔王ハイが連れてきた勇者アサギ、特異な状況で生まれた必然の出逢い。

口に運んでいたマビルのパンが、床に音なく落ちる。

「人間の……勇者……？」

搾り出したマビルの声は、震えている。アイセルが神妙に頷き、じっと、マビルを見つめた。手に取るように、マビルの感情が理解出来るアイセル。

僅かに手の平に汗が滲んだ、マビルは人間が嫌いだからだ。わけもなく、嫌いであった。人間好きの魔族など、数知れているがマビルの人間嫌いは跳び抜けている。

見下した風もあった、何より美貌において魔族のほうが上であるとマビルは思っているからでもある。美しい男なら、話は別だが少

なくともマビルは人間の男を三人しか知らない。

一人は弟のトーマ。二人目は以前”オモチヤ”でもあった金髪の美少年。三人目は奴隸としてこき使われていた、醜悪な男。

美しいものに執着しているマビルは、無論傍に置いておくオモチヤにも、美しさを要求する。自分に釣り合う美貌の持ち主でないと、傍に居るのも嫌悪感を抱く。

そして、同姓は嫌いであった。一度、マビルに友達を作らせようとアイセルは一人の魔族の少女を招きいれたがマビルが拒否反応。理由は定かではないが、一人で居る事が好きなのか何も考えていないのかマビルは常に宙に浮かんで膝を抱えて丸くなり一人の空間を作る。見る度に心苦しくなるアイセルだが、それもこれも予言の為である。

しかし。マビルの顔が青褪め、引き攣った。静かに、アイセルは見守り続けるしかない。マビルは受け入れなければならないのだ、事実を。

トーマは軽く赤ワインを喉に通し、マビルから視線を外して一人天井を仰いでいる。

小刻みに震えるマビル、自分に双子の姉が存在する、とは聞いていた。兄も弟もいるのだから、これ以上姉妹は不要だと思ってしまう。しばしばあった。しかし、今更足掻いても血筋はどうにもならない。そもそも、”双子”である筈なのに姉は何処にいるのか。母の腹から同時に出た姉なのか、と尋ねれば『違う』と返答。それでも双子と言われる所以はなんなのか……、マビルは長い事考えていた。

「人間の勇者？ …… それ、ホントにあたしのおねーちゃん？」
口に出した声は、冷ややかな口調だった。感情が籠められていない、無機質なマビルの声。

マビルとて、数日前確かに感じたのだ、”姉の波動”を。だが、とても人間のものとは思えなかった、そんな馬鹿げた事実あつてはならないと思つた。毛嫌いする人間が姉で、おまけに勇者で、自分に勝る美貌を所持している……？

ダン！

マビルの拳が、テーブルを叩きつけた。赤ワインがグラスから零れ、純白のマットに赤い染みを作る。

「っ！」

憎々しげに、マビルはその零れ落ちた赤ワインを睨み付けた。室内に沈黙が広がる、三人はそれぞれの思いを胸に黙り込んだままだ。とりわけ、マビルの表情は厳しい。別に焦がれていたわけではないが、多少、心躍るものがあつたのも、確か。

姉。

時期魔王であり、自分を勝る力を秘めた双子の姉。苛立たしい存在ではあつたのだ、納得がいかないのも確かだ。

” 謎の少年 ”

マビルは息を大きく吸い込んだ、力任せにテーブルを殴りつける。アイセルの表情が一瞬強張ったが、そんなことお構いなしだった。

双子の姉。

魔族だと、信じて疑わなかった、どうして”人間の双子の姉”な
どが存在するのか。

マビルは真正銘、魔族だ。魔族である自分と、人間である姉と
双子……そのようなこと、有り得るのだろうか？ 同じ魔族であり、
マビルが双子の姉の魔力を認めたらば自分にとって頼れる存在であ
り、破壊願望があるであろう時期魔王である姉と世界を破滅に導き
たい……などと、まれに胸を躍らせていた時期もあった。

そう、恋する乙女のように胸を高鳴らせて。僅かな痛みと、好奇心
だった。今まで思い描いていた姉の姿は、急遽な妄想であったのだ
ろうか。

「本当に、あたしのおねーちゃんなの？」

ほそ、っと呟く。胸がざわめく、落ち着かない。

マビルがふと、窓の外に視線を投げかければ純白の鳥が一羽、舞
っていた。晴天に純白の鳥、その美しいコントラストが余計マビル
を破壊衝動に駆り立てる。

自分の何処にぶつければよいのか解らない、むしろくしゃした気
持ちを投げつけるように鳥を睨み付けた。アイセルの止めに入った
声など、聴こえない。

鳥は痙攣しながら、一気に落下し、地面に激突する直前で弾け跳
ぶ。

「マビル！」

愉快そうに微笑み、心軽くなったマビルは優雅に紅茶を啜ってい
る。憤慨した様子 of アイセルが叱咤するが、口に広がる豊潤な香り
を楽しんだまま微笑み続けていた。髪を弄ぶ、ふう、と吐息を漏ら

す。

「いつも言ってるだろう、むやみやたらに感情を他者に押付けるな。命を奪うか、そうでなくとも怪我を負わせるだろう！ お前の魔力は……」

「仕方ないでしょ、あたし、縛られるのも押さえ込むのも嫌いだもの。馬鹿みたい、何に拘るの？ 人間が抱いている魔族の偶像ってこういうことでしょうか？ 別にいいじゃない、鳥も魔族も人間も、そう簡単に絶滅しないわよ。たかが一羽、一人が死んだところでさ、不愉快だわ、小さく零して立ち上がると凄まじい形相でパンを握り締めて家から出て行くマビル。何時もの事だった、アイセルが叱咤すればするほどにマビルが反抗する。」

しかし、アサギが魔界へ来た以上マビルを野放しにしておくわけにはいかなかった。最悪な事態が起こりうると、マビルがアサギを殺害しかねないのだ。可能性はある、この結界の森から出られないとしても万が一があるので油断は出来ない。一度嫌悪感を抱けば、それを解きほぐすのに膨大な時間と根気が必要だ。妹に、一般常識など通用しない。気に入らなければ、消し去るまで。何故ならば自分にとっては不要だから、それだけ。

頭を抱え込み、アイセルはテーブルに突っ伏す。

「あいつが……」影”のほうでよかったよ。あれで”光”だったら、世界はもう、混沌の渦に飲み込まれてる」

起き上がった苦笑するアイセルだが、トーマは肩を竦めて作り笑いを浮かべるより他ない。無理して笑顔を作っているアイセルのことなど、お見通しだった。

しかし、そ知らぬ振りをしてモクモクと料理を食べ続けるトーマ、軽い溜息一つ、アイセルは再び肘をついて考え込んだ。

「とんでもないことになったよ、父さん、母さん……。俺には予言など」

暫しの沈黙。

トーマが控え目に、ナイフとフォークを皿に置いて声をかけた。

先程から気になっていたのだ、言うタイミングを窺っていた。訊きたくて仕方がないのだ、まだ、子供である。

「ねえ、僕も会っちゃ駄目……なの？ やっぱり」

思案していたアイセルだが、低く唸り続けながら出した答えは「すまん」の言葉。

解っていた返答だった、期待などしていなかった、だがやはり気落ちしざるを得ない。寂しそうに俯き、小声で姉さん、を繰り返すトーマ。

「僕、人間だもんねえ。ここにいるってことだけでもう、変な存在だしね……厄介だよな」

「そんなことはない、トーマ。しかし、待つんだ。時期が、まだなんだ」

「いいよ、アイセル。気を遣わなくて」

空元気で、喉の奥にミルクを流し込んだトーマ。自分の我儘を押し通すトーマではない、耐えて我慢しているのだ。マビルと違ってトーマは非常に聞き分けの良い弟である。逆境の中にいるというのに非常に忍耐強く、そして物分りが良い。アイセルを心底困らせるような真似はしなかった。

「マビルも、トーマほど素直だったらよかつたんだが」

「そんななんだつたら、マビルじゃないよもう」

そう言い合うと二人は顔を見合わせ、ようやく腹の底から笑い始める。この場にマビルがいたらそれは騒ましいことになっていただろう。

アイセル、マビル、トーマ。傍から見たら、奇怪な三人だった。しかし、仲が良い事には間違いがない。

兄・アイセルが武術家として表の世界で名を轟かせ、魔王アレクにも直近ではないが仕えているほどの強者。”表向き”では、だが、裏ではかなり親しい仲である。しかしその実態は秘密裏である予言家の長男であり、力を引継ぎし者だ。全ての予言の記録を所持し、先の未来を知っている者。

妹・マビルはアレクの次に魔界を統治する女王に姿が瓜二つ、魂を共鳴させ最も女王に近い者として産まれて来た。影の女王は時として光である魔族の女王を身を挺して護らねばならない、そんな過酷な運命を背負わされている。だが、予言ではマビルがそうなる運命だとは記されていない。ただ記述は曖昧だ。

そして弟・トーマ。最も謎の少年だ。トーマが生誕したのは今から約10年前のことだった。

忘れもしない、あれは極寒の日。

春は柔らかな光とともに訪れ、大地を温めてくれる。土に光を、大気に光を、全ての生きるものに、光を。溢れんばかりの、愛情を。冷たい空気で部屋に閉じ籠っていたとしても、一筋の光が窓から差し込めば思わず心が浮き足立って外に飛び出してしまう。笑みを零して。

光が生み出す色彩は様々だが、夜明けと夕暮れの薄明かりのなんともいえない微妙な哀愁漂う色合いが、アイセルはとても好きだった。春などまだ遠いが、12月よりも1月のほうがアイセルは心なしか暖かい気がしていた。やはり、春に近づく足音聞こえる月だからだろうか。

アイセルの家の周りには、スノードロップ、という可憐な小さい花が地表に姿を見せる。暖かな日差しの中で、小鳥の囀りと小川のせせらぎを聞きながら地面に寝転がり大きく伸びをするのが一番の贅沢だと思っているアイセルは無論、四季の中で最も春が好きだ。光を身体全体で受け止め、四季様々形を、色を変化させる移ろいを瞳に焼付け、歩調を合わせて生きて行きたい。冬あってこそその、春である。

その日、雪は降っておらず身体にぴし、っと来る寒さで毛布に包まっていたアイセル。家には両親とアイセル、そしてマビル。時折聞こえる暖炉から、薪が爆ぜる音以外は静かだ。

窓の外を見ながら身震いする、こんな日にはやはり春に焦がれて

しまう。マビルなど、暖炉の前から全く動かずに丸くなって毛布に包まったままだった。時折吹く風が、窓をカタカタと鳴らしながら去っていいく。どうやらマビルは眠っていたらしい、寝息が聞こえてきた。

だが、キッチンから美味しそうな香りが漂つてくると、重たい瞼をこじ開けてゆっくりと起き上がり小さな欠伸をする。

「寝起きは、可愛い顔してるんだよな。……あ、寝顔もか」

思わず魅入っていたアイセルは、小さく零した。ふと、その視線に気付いたのかアイセルを瞳に入れたマビル。ゆっくりと意地悪そうに婀娜っぽい微笑を浮かべ「あら、妹に欲情中なお兄ちゃん？」とマビルは鼻で笑った。思わず苦笑し前言撤回、と呟いたアイセル。

「口を開くとこうなんだよな……」

「あん？ 何か言つた？」

料理がテーブルに並べられた、四人でいつもの様に着席する。父が奮発して上等なワインを出したのは、特に今日が冷え込むからか気分だけでも明るく行こう、ということなのだろう。なみなみとグラスに注ぎながら、マビルがそれをじつと見つめている。

獲物を仕留める猫の様に瞳をクルクル動かせながら、喉をこくり、と鳴らした。おそらく血液を想像したのだろう、赤ワインの色合いが似ていなくもなかった。

「俺、ビールがいいなあ、母さん、ない？」

「上等なワインだぞ！ 我慢しろ」

とても微笑ましい光景である、羨むべき光景だ。人間達は魔族を誤解していた、家族さえも平気で殺せる冷徹な種族だと思われるが、違う。人間とて親兄弟を殺害する人もいるだろう、同じだった。確かに、魔族にもそういう者はいるが全員ではないのだ。

恐怖の対象である”魔族”、は人間達の心が生み出した虚像。触れ合わない種族ゆえに、疑心暗鬼からそう決め付けた。そういった恐怖心を子供へ、孫へ……と伝えていくものだから、いつまで経つ

ても誤解が解けないだけだ。

乾杯したくてうずうずと身体を揺すっているアイセル、微笑みながら金髪の母が優しくアイセルの髪を撫でる。明日にしましようにねと子供をあやすように背中も撫でる。くすぐりたいが、じんわり暖かく、心が安らぎを覚える。

何しろ、アイセルは物心ついたとき、母がいなかった。それは、マビルが生まれる直前まで「母は流行病で死んだ」と父親から聞かされていた為である。母は予言家の者として、籠もりつきりで今後の魔族の行く末を占っていたのだ、ゆえに死んだ事になっていた。アイセルが眠っている時には、時折母が愛おしそうに髪を撫でに来ていたらしいが気付かなかったのだ。

父は頻繁に母に会う為離れた屋敷へ足を通わせていたようだが、それすらもアイセルは知らないこと。

それが、マビルがいよいよ産まれるということ、いきなり母を紹介されたのだ。面食らった、死んだと思っていた母は生きていた。戸惑いを感じ上手く馴染めなかったが、数ヶ月も経てば恥ずかしながらも「お母さん」と呼べるようになっていた。母は物腰穏やかな美女だった、それゆえ照れもありませんな触れ合えなかったこともある。

父は、才色兼備な母と違いどこかスローテンポで正直頼りがいがない。二人のなり染など知らないが、いつか聞いてみたいものだと思っている。アイセルは両親を見つめて薄く、笑みを浮かべる。

今日の食事はチーズ入りのパイ、子羊のローストはブルーベリーソース添え、じゃが芋のから揚げ、サラダ、そして赤ワイン。

母の作るパイは非常に絶品でアイセルとマビルの、好物でもある。話をしながら、家族団欒。食事を終えて、暖炉の前でパチパチと燃える薪の音を聞きながら至福の時を過ごす。

アイセルは、読書中だった。

マビルは、空腹を満たし再び眠りにつく為に父の膝に頭置いて丸くなっている。当然の事ながら、父が優しくマビルの髪を撫でてい

た。

母は、食器を洗っていたのだが……。突如、キッチンから鈍い音が聞こえてきた。三人、我に振り返り直様起き上がると皆でキッチンへ直行する。

「母さん!？」

真つ先にキッチンへ飛び込んだのはアイセルだった、うつ伏せで倒れている母を発見し顔面蒼白で駆けつける。抱き起こし、仰向けにさせた三人は思わず息を飲んだ。言葉を失うほかない、何を言えば良いのか、分からない。

「どういうことだ……これは」

呻くように、ようやく搾り出した父の一声。アイセルから優しく妻を受け取りふらつく足取りで、ベッドへと寝かせる。荒い呼吸を繰り返す母を不安げに見下ろしながら、三人は困惑し憔悴しきって項垂れる。沈黙。

母の身体に、異常な、いや、有りえない症状が。先程までの母の見事なプロポーションは、何処へ。腹部がまるで子を孕んでいるかのように、膨らんでいるのである。

まさか、とは思ったがマビルは腹にそつと耳を当てる。かつと、瞳が見開かれ、慌てて離れるとマビルは震える声を出した。

「赤ちゃん……いるよ……」

「まさか!」

乾いた声を出す父も、アイセルもふらつきながら、同じ様に腹に耳を、そして手を当てる。……何かが、動いている。間違いなく、胎動だった。呆然とする三人、間違いなくそこには、命が宿っている。

魔族とて人間と出産の期間はほぼ同じだ、こんなこと、ありえない。

右往左往どころか、突っ立ったまま何も出来なくて硬直していた母がようやく、目を醒ました。荒い呼吸、苦痛に顔を歪めながら息も絶え絶えに。

「最期の……予言を。この……子、トーマ。弟、なま、え……」トーマ。人間の、赤……ちゃん……。おねが、育てて……何処からかわた、しに、誰かが、授け……。どう、か、おねがい……。この子を大事に……。育てて……。ね……。この子は……。おそら……」母の絶叫。同時に、元気な赤ん坊のうぶ声が聴こえた、出産だ。「母さん!? しつかり、母さん!」

母は、事切れた。産まれたばかりの赤ん坊の泣き声だけが部屋に響き渡る。

半乱狂になったマビルは、生まれ出たばかりのこの赤ん坊を殺すべく手を振り上げたが必死に父に押し留められた。マビルは嗚咽を漏らしながらその場に崩れ落ちた、アイセルは機転を効かせ湯を沸かし赤ん坊を産湯へ。見たことも、やったこともない、助産婦の知り合いなどいない。

だが、助産婦は呼べない。知り合いが居たとしても呼べるわけがない、この赤ん坊は……。人間だった。

「母さんの最期の予言……。いや、遺言だ。」この子を大事に育てて……。従おう、今日から一人仲間入りだ」

父の妙に威圧感ある声にアイセルとマビルは、ただ頷くほかなかった。

1月5日、トーマ・ルツカ・シーザ。魔界イヴァンにて生誕。

母を溺愛していたマビルは、それからトーマを何度か殺そうとした。だがその度に母の遺言だと父の言葉が甦り、感情を押し殺す。母の仇を、護らねばならないなんて苦痛だった。震える腕を懸命に抑えつけて、無邪気に笑っているトーマを見る。おまけに、相手はマビルの嫌いな人間だ。

けれども、トーマはマビルに非常になつており、母性本能がくすぐられたのかマビルもやがて可愛がるようになった。整った顔立ちをしていたのが、よかつただろう。そして子供の愛らしさは最大の武器だ。

母の墓碑は、家の直ぐ裏に。花に囲まれて毎日四人で墓参りをし

ている、そんな日常が始まっていた。この四人での平和な暮らしが訪れたかと思えば、思わぬところから不幸がやってくる。

暫くして、父が他界した。原因は不明。出かけてくる、と言い残して一週間。

父は死体として戻ってきた、啞然とするアイセル。出かけるその当日、虫の知らせだったのだろう胸騒ぎがしてアイセルは父を呼び止めた。今日は出かけないほうが良い、と念を押しした。だが、優しく父は微笑むとアイセルを抱き締めて安心するように背中を撫で。「心配するな、ただの散歩だぞ」

その時の父が妙に風格があり、堂々と誇らしくアイセルの瞳に映ったのだが気のせいであったのか。いや、そうではないだろう。父は、自分の身に起こることを既に知っていた、意を決して出掛けたに違いない。

父の身に、何があったというのか。自宅に届けられた亡骸は、いつものように優しい笑みを讃えたままだった。

マビルとトーマは世間に公にされていない、アイセルは一人きりで父の遺体と向き合う。この家の一人息子として、だ。

死体は、何も語ってくれない。マビルとトーマが見計らってそつとアイセルの隣に立つ、3人で最期のお別れだった。

亡骸は、母の墓碑と同じに。仲睦まじい二人だったから、今頃一緒に居るに違いない。

予言家の、アイセル。時期魔族の女王の双子の妹、マビル。不可思議な生まれ方をした弟、トーマ。三人は、その日知らず手を繋いでいた。

無垢なる混沌くトーマ・ルツカ・シーザー

蝋燭の炎で、トーマの瞳の中の光が若干揺れた。徐にテーブルに寝そべっていたトーマが顔を上げて呟く。

「僕さ、また旅に出るよ。今度は、そうだなあ、カナリア大陸にでも行ってみようかと思って」

食後の蒲公英珈琲を飲みつつ、アイセルが視線をトーマへと投げかけた。声からは感情が上手く読み取る事ができないが、寂しいのは確かだろう。押し殺して無理している気も、しなくもない。しかし、未知なる場所への期待と好奇心が高まっている事も確か。トーマは好奇心旺盛だ、そして人間だからと大人しく魔界でアイセルとマビルに護られて暮らしているような性格でもない。今までと同じ様に旅に出ると言い出すことは、想定内だった。

「今までは何処に？」

「んー、ビクトリア大陸。そこからさ、何かありそうな気がして陣描いて戻ってきたんだ」

テーブルの上に足を放り出したトーマを、アイセルは頬を膨らませ睨みつけると叱咤。首を竦めて、苦笑いしつつトーマは足を下ろしきちんと背筋を伸ばした。満足そうに頷いたアイセル、にやり、と口元に笑みを浮かべる。

「そうか、……元気で。次はいつ戻る？ トーマなら戻りたければすぐにでも戻る事ができそうだが」

「さあ。面白い事があつたら、当分は戻らないよ。どのみち、姉さんにも会えないし。姉さんに会えるのなら直ぐにでも戻ってくるよ？」

「だろうな」

アイセルは気の毒そうにトーマを見つめる、カップの中の真っ黒い珈琲を覗き込みながら思案中のトーマ。無表情で、だが切なそうに溜息を吐いた。

「トーマがアサギを”姉”と呼び始めたのは、今に始まった事ではない。マビルに双子の姉がいて、その少女こそが時期魔界の女王だとトーマに話した時から、トーマはまだ見ぬその少女を「自分の姉だ」と言い張っている。推測でしかないが、トーマは正真正銘アサギの弟なのではないかとアイセルは思っ居た。

二人とも、人間だ。未知の能力を秘めた、人間。だとするならば、トーマも何かしら意味があつてこの魔界で産まれてきたのだろう。血の繋がりは無いといえども心配で、本当は魔界にマビルと共に居て欲しい……というのがアイセルの本音だが、本人の意志を尊重している。

幸い、桁外れの魔力を秘めているし、人間界ならばそう簡単に他者から危害を加えられないだろう。存在が見つかれば、魔界のほうに危うい。トーマにとつても良い事なのだ、アイセルは言い聞かせる。

「支度手伝つてよ、アイセル。薬草とか欲しいんだけど」

「え、もう行くのか？ 少し滞在していけばいいのに」

「……ううん、何か面白い事がある気がするんだ。今行かないと、間に合わない」

「俺より、トーマのほうがよっぽど予言家の跡取りとして相応しいな。魔力も高いし」

「嫌だよ、そんな窮屈そうな肩書き」

昔から、トーマの勘は鋭かった。肩を竦めて苦笑いするアイセル、唇を尖らせトーマは大きく伸びをすると珈琲を一気に飲み干して立ち上がる。徐に次いで立ち上がったアイセルはトーマの袋の中身を確認した、薬草が極端に減っているようだ。マントは誇りまみれであちこち破れ、汚らしい。

「トーマ、たまには洗濯しろよ」

「めんどいんだもん」

文句を言いながらアイセルはしかめっ面でそのマントと向き合つた、洗ってほつれを直したとしても……汚い。身嗜みを整えている

アイセルにとって、この薄汚れたマントは汚物でしかない。部屋の奥から自分のマントを持ってきた、トーマには大きいが新しい緋色のマントだ。

「ほら、これやるよ」

「わ、新しいマントだあ！ ありがとう」

トーマは着ていた衣服を脱ぎ捨てていた、裏にある温泉に浸かりに行くつもりらしい。アイセルに全てを押し付け、タオルを一枚掴むと聞く耳持たずとばかりトーマは飛び出す。厭そうにアイセルは服を摘んだ、継ぎ接ぎがしてあるのだがいい加減な縫い方なので、これでは意味がない。盛大に溜息を吐いて所持品を物色すればブーツにも穴が空いている、これでは雨の日が悲惨だ。早い話、全て新調したほうが手っ取り早い。

簡易保存食に、水筒、薬草を多目に袋に詰めつつトーマが温泉から出てくるまでに、アイセルは自分が子供の頃着ていた衣服を探した。マビルと背格好は同じくらいである、とても今のアイセルの衣服ではサイズが合わない。が、子供の頃の服などそうとってあるものでもない。

「全く……いい加減な奴だ。その辺りはマビルに似てる」

言葉とは裏腹に、元気にやっている姿が見て取れたアイセルは、知らず口元が綻んでいた。替えも用意し、温泉で身体を休めて出てきたトーマにそれを差し出した。お古といえど、新品に近い衣服に身を包み込み。若干大きいがまあ目は潰れる程度の衣服にトーマは嬉しそうに、にっこりと微笑む。

魔族と人間の一目での違いといえば尖った耳だ、トーマは深くマントのフードを被る。他に匂いに敏感な魔族は気付くだろうから、と肌に魔界に生息している植物の種子を磨り潰し水で溶いたものを肌に塗る。青色の肌でカモフラージュしつつ、これは独特の香りで嗅覚を混乱させる作用もあった。

さらに、三重の構え。トーマが何かしら呟くと、その瞳が黄金に変わった。

「おお……。上手になつたな」

照れくさそうにアイセルの感嘆の声を聴いていたトーマは、頬を指でかく。この魔法、父が残してくれた書物を基にして、アイセルとマビルが必死でトーマに覚えさせた魔法だった。

人間であるトーマは、魔界に居ては命が危ぶまれる。確かに、人間も時折魔族に混じって生活しているのだがそれでも100%安全なわけではなく。魔族の好みで連れてこられた人間も大勢いた、食料や雑用として連れてこられた人間もいる。

アイセルが連れてきた事にしても良かったのだが、女好きで通っているアイセルだ、人間の少年を連れていては怪しまられると判断以前、魔界に居た人間の大量虐殺が行われた前例もあるのだからと、魔族に変化する魔法を開発したのだ。無論、完全な魔族であるわけもなく、こうして肌の色は植物の色彩でごまかしたりと魔法ばかりに頼ってははいない。だが、耳・香り・瞳の色合い及び瞳孔を変えておけばかなりごまかしがきくのだ。

先程トーマが人間界から来た陣へ戻る事も可能だが、万が一その陣の一部が破壊されたりしていようものならば出口を失い転移が失敗するので、魔界イヴァンから出る場合船で出たほうが得策だ。乗船する為に、こうして魔族の振りをしなければならなかった。

「薬草、入れてくれた？ やっぱり魔界の薬草のほうが質がいいんだよね」

「見分けて自分で製作できるようにしておけよ。ほら、これ薬草の本な。この間売ってたから購入しといた」

「ありがとう」

「これは、ミソハギ。止血のほかに消化不良にもきくから、変なもの喰ったときに使え」

「……僕グルメだから食べないよ、道端に落ちてるものとかは」

「そう言うな。人間界に多いのはガマ、だったか。あれも止血になるから見つけたら刈り取っておくといい」

干し肉やビスケットを詰め込む、準備を整えた後トーマはアイセ

ルともう一度テーブルについた。今度はチコリの珈琲だ、あまり人間界では飲まないので家庭な味がするトーマは穏やかな笑みを浮かべている。今日はもう遅い、残してあったトーマの部屋はいつでも掃除されており、早々とトーマは眠りにつく。直様眠りに入ったトーマの寝顔を、アイセルが愛おしく見つめていた。家族同然の存在だった。

翌日。

「じゃあ、元気だな。戻れたらいつでも、戻って来いよ」

「うん、アイセルも元気で」

くしゃくしゃとアイセルがトーマの前髪をかき乱せば、くすぐったそうにトーマは瞳を閉じた。トーマは気にした素振りでも周囲を見渡すが、目当ての人影はない。マビルを探しているのだ、見送りにいつもは来てくれるのだが。

寂しそうに俯いたトーマの様子にアイセルも気付いた、が何も声をかけることが出来なかった。トーマがそつと手を差し出す、何も言えない代わりに力強くその手を握り締める。アイセルと握手を交わした瞬間、トーマの右手に違和感が。

愕然として見上げれば、不思議そうに何時もどおり立っているアイセルがいるのだが、悪寒が走る。

「アイセル……？」

「はは、どうした、そんな顔して。死人でも見たような」

涼しげな笑顔、トーマは引き攣った笑みを浮かべると未だに震えている手に爪を立てた。感傷的になっただけだ、気を取り直し腕を振り続けながら歩き出す。

森の道を歩きながら、後ろを振り返り見えなくなった大事な家庭を、憩いの場を愛しく切なく見つめて立ち止まる。何故だろう、もう戻れないような気がして。そして、アイセルに二度と会えないような気がして。

……今、発たなくてもいいような気がして。

トーマは困惑した。足が、動かなくなっていた。これが予兆なの

だろうか、どうしても不安が残る。
そこへ。

「いっておいで、トーマ」
何時の間にか、マビルが隣に来ていた。マビルは、結界から出られないのでこれ以上先には進む事が出来ない。ギリギリの場所で、立ってくれている。横顔を見れば照れくさそうに、頬を赤らめていた。

「来てくれたんだ、マビル」
「気が向いたから。暇だったし」

と、興味なさそうな返答をしたマビルだが、嬉しくてトーマは微笑したままもれそうになる声を必死で押し殺していた。違う、マビルは確実に見送りをする為に待っていてくれたのだ。

「……じゃあ」

「ん、いってらっしゃい」

「いってきます、マビル」
パン、と掌同士を叩けば小気味良い音が、森中に広がった。

遠くから、何かが駆けて来る音が近寄ってくる。ここは、一日二本通る乗り合い馬車が通る道だった。引いているのは馬ではなく、魔物なのだが。ので、魔物車とでもいおうか。やってきた本日の荷台を引く魔物は、これは豪快な魔物だった。

サテュロス。ヤギの下半身に人間の上半身、顔もヤギ、な悪魔のような風貌である。

「……………」

流石にトーマも面食らった、こんな馬車……もとい、サテュロス車に乗り込むのは初めてだ。気付けばマビルはもはや姿なく、気配を察知して森の奥へと消えたのだろう。彼女の存在は秘密裏だから仕方がない。

「何処まで行くかね？」

気の良さそうな運転手は豪快に笑う、異様な光景だ。

「港まで」

「あいよ、乗りな坊ちゃん」

微笑し頭を下げて乗り込んだトーマに呆然と運転手は魅入っていたが、豪快に笑い出すと何かをトーマに投げ入れた。

「やるよ、さつき運賃と一緒に客から貰った青リンゴだ。……坊ちゃん、あんた今度来たアサギ……だったかな、その人に似てるわ」
「アサギ……会った事があるんですか？」

「お、坊ちゃんも知ってるかね？ まあ、ハイ様のお相手ともなれば確実に広まるよなつ。この間の魔族会議で姿を見せてもらったよ、別嬪さんだったなあ」

「そうですね、ありがとうございます」

似ているらしい、やはり。おそらく、自分の正真正銘姉であるアサギ。今この魔界イヴァンにいる、アサギ。顔を荷台から覗かせた、巨大で圧倒的な城が見える。

「あそこに……いるんだね、姉さん」

必ず、必ず会いに行きます。ずっと、ずっと先でも必ず。……貴女が僕を、呼んでくれたのなら。

トーマは、何処となく懐かしい香りのする衣服に包まれながら、港へつくまでの間仮眠をとる。船に乗れば、新しい土地で新たな出逢いが待っている筈だ。けれども、何故か胸にしこりが……残っていた。

アイセルの背後に黒がかった霧、あれは何を意味するのだろうか。

思わず、背筋に寒気が走るほどの残忍で残酷な……何かアイセルを取り囲んでいた。

話は、少々戻る。

ライアン、マダーニ、トモハル、ミノルの四人は皆と分裂してから寂しくなった馬車の中、四人で本来ならば皆と行く予定であったピョートルへと進んでいた。黙々と口数少なく、只管に。

次の滞在地”ジョアン”までは大きくはないのだが商人や旅人が歩き易い様に、有る程度街道がしっかりしているため比較的楽だっ

た。相変わらず古びた石畳の街道だが、ないよりましである。ライアンが馬を操作し、マダーニがまだ未熟な勇者達の呪文の練習に精を出し。トモハルとミノルは、交互にライアンとマダーニにそれぞれ馬車と呪文を習う。

トモハルは、努力し続けアサギを救う気だ。時間を惜しんで鍛錬に励んでいる、非常にまめで努力家、強い意思は揺ぎ無い。馬車の操作も飲み込みが早く、率先してライアンに質問を繰り返している。また、操作中も剣の扱い方や防御、戦いについてライアンから話を聴いていた。

皆と離れて、数週間。時折魔物にも襲われたが、どうにか切り抜けたのはトモハルが目まぐるしい成長を遂げているからだ。だが、相変わらずミノルのほうは未だに力を発揮してくれない。

その夜。

月明かりの中で夕食をとることになった一行は、ライアンが川で獲って来た魚を焼いていた。残り少なくなったビスケットに、焼いた魚と干した肉。川で汲んだ水を沸かして飲んでいる、薬草茶。明日の旅用に水筒にその茶を詰め込む作業は、トモハルの仕事だった。厭な顔一つせず、素早く行っているわけだが、ミノルはその間も膝を抱えて蹲り眠りにについている。

限界、なのかもしれない。毎日毎日馬車に揺られて、魔法の稽古だ。まだ、馬車を操作しているときのほうが、ミノルの顔に笑顔が見えていた。不安そうに三人はミノルを見つめるが、こればかりは助けられない。本人のやる気次第になってしまう。

「あ、そうだ。私今日から生理だから魔力が弱まってて期待しないでね、よろしく」

ブー！ 三人、口から茶を吹き出した。唐突なマダーニの発言にミノルは顔を赤らめた。

「呪文に期待は出来ない、か……。厄介な魔物に遭遇したくないな」
「気弱な発言ね、ライアン」

呆れたように腕を組んでライアンを見上げるマダーニ、トモハル

が首を傾げて二人を見ていたのだが。

「二人つて、そういう関係なわけ？」

「そう見える？」

「うん、なんとなく思ってた」

ミノルはトモハルを見上げながら、意味が解らないというように怪訝に見つめていたが視線に気付いたトモハルが笑った。

「二人は付き合ってるんだ、前からそうかな、って思ってたんだけど」

「へえ」

言われてみれば、やたらと近くに居るし仲が良い。ひよつとして離れたくなくてこの組み合わせになったのだろうか、と正直ミノルは不貞腐れた。いい気なもんだ、自分達は好きな奴と一緒にてさ……。……と、思ったが慌てて首を振り続ける。それではまるで、自分が好きな奴と離れ離れになったと言っているようなものである。実際そうなのだがこの歳、この性格で認めるのは恥ずかしい。

「駄目だよライアン、彼女の”あの日”は覚えておかないと。男として当然の事だろ」

トモハルの発言に更に茶を吐き出したミノル、信じられないと何か恐ろしいものでも見るかのようにトモハルを見上げた。

「おま、何言ってるの？」

「大事な事だぞ、ミノル。……って、兄貴が言ってた」

兄弟でどんな会話してんだ、松下家！ と、突っ込もうかと思っただがミノルにそこまでの元気がない。ミノルは一人つ子なので兄の存在が羨ましく感じられる時もあったが、そういえばトモハルの兄は近所でも評判の異性に人一倍関心を持つ軟派な男だった。

苦笑いしつつライアンが頭を掻きながら、小声で呟いた。

「うん、まあ大事だけでもな」

「大事だけど、この状況下でどうしたらいいのかしら？ 勇者君たちが二時間くらい席を外してくれるのなら、今後旅の最中でも出来るけど」

ブー！

リアルな時間。マダー二の発言に三人の男は揃いも揃って、再び茶を吐く。真っ赤な三人を尻目にマダー二はあっけらかんとして、右手で空を指していた。

「それはおいといて、でも、見て？ ほら、月が満ち始めてるでしょ？ これって魔力上昇の兆しなの」

「ん？ となると、最悪な事態は免れた……ってことか？」

「うん、でも、普段通りにはいかないからね。勇者君たち、頑張るのよ」

「任せて！」

自慢げに胸を叩いたトモハルの傍らで、ミノルは小さく溜息を吐いた。転がっている地面の石を見つめながら、自分は返事が出来なと思った。はっきり言って、自分では役に立たないのが現状。悔しさなど湧き上がってこない、最初から無理なのだ。今ここにいる以上、何かしら努力は必要なのだろうがどうにも気持ちの切り替えが出来ない。

夢であれば良いのにと何度、願った事だろう。魔法など、使えるわけがない、素質がない。

今自分がRPGの世界に入り込んだとしたら、おそらく『この村へようこそ』の村人役だろう。

何故、勇者なのか。頭が悪く、物覚えの良くない自分にとって魔法は本当に苦痛でしかなく。トモハルだったら、きつと魔法の習得も楽しいのだろう、すぐに憶えて誇って唱えられるのだろう。

家が隣の幼馴染の、トモハル。同じサッカー部に所属し、その力だけならば互角だが学校での成績も踏まえればトモハルが明らかに上だった。アサギもトモハルも優等生、傍から見てもこの二人は似合いの仲。

そして、自分と比較した。アサギとミノル、アサギとトモハル。思い描いても、笑えて来る組み合わせはミノルだった、自分だった。アサギを救えるのは、トモハルだろうとミノルは思っていた。放

つて置いても一人でどうにか救出しそうだ、ミノルは思った。トモハルには何処から華があり、冗談でなく全てのことをやって退けそうなのだ。アサギが、不可思議な力を発揮していたように、恐らくトモハルにもその素質がある。

ライアンは徐に立ち上がると、沈んでいるミノルの肩を叩き頼りにしているよ、と声をかけた。お世辞、だとミノルは皮肉そうに笑う。

出来損ないの、勇者。何故、勇者に選ばれたのか知りたい。

静かに顔を上げて不意にマダーニを見れば、背筋に寒気が走った。神妙に頷いたマダーニはトモハルに視線を送る、同じ様にミノルもそちらを見れば剣を握りしめている姿がそこにあった。慌ててミノルも傍らの剣を手にした。反射的に。

「二人とも、上出来よ。感じたのね……お客さんよライアン」

嬉しそうに腰に手を当てて満足そうに二人の勇者を見つめたマダーニは、声のトーンを多少落としてライアンを見つめる。

「何だつて!？」

「……敵の姿が望遠できないけれど、この距離でこの感覚……相当の新手よ」

「ここでは不利だ！ 馬車に乗れ、移動する！」

ざ、っと片付けに入る。慣れた手付きで片付け始めたマダーニ、手伝うトモハル。足の震えが出始めたミノルは、早々に馬車に乗り込み剣を抱き抱えた。そうなのだ、まだ魔力操作など出来ていないミノルが、悪寒を感じた相手である。異常だった。

「方角は!？ 解るかマダーニっ」

ライアンの怒鳴り声、走り出した馬車の中でマダーニは不意にミノルとトモハルの頭部に両手を置く。口を固く結ぶ、神経を集中させる、何かを探る。マダーニだけでなく、二人の勇者もはっとして顔を上げた。

「二人とも、見えたわね？ 媒介して魔力を増幅させてみたの」

「でっかい影だ……」

「ふた……っ？」

にやり、口元に笑みを浮かべるがいつもの美しい唇が青褪めている。額に浮かんだ汗を軽く脱ぐってマダーニは唇を噛締めた、二人の髪をくしゃくしゃと愛しそうにかき混ぜて一言。

「ライアン！ 敵は二体！ 右斜め後方から来てる、はつきり言って相だな奴だわ」

言い終えるなりランプを取り出し地図を引つ張り出すと、灯りを翳して地形を探した。せめて戦いやすい場所に対峙したい、トモハルがランプを掲げてマダーニを補佐する。

灯りを頼りにマダーニは地図を指で追った、カタカタと震えているのは馬車のせいか、恐怖の為か。

「森を抜けて！ 荒地が広がっているみたいだからそこで迎え撃ちましょう。でも、極力逃げて！」

「了解！」

敵との距離が、そう短くはないのが幸いした。迫り来る速度は計り知れないのだが、遠くからでのこの闘争心むき出しの気配は相当な相手である。標的がもはや決められているのか、確実に追っかけていた。

必死になつて戦闘に適した場所を探すライアン、荷物の中から小瓶を取り出し中の液体に小剣を浸しているマダーニ。その傍らで二人の小さな勇者は胸の鼓動が早鳴るのを感じながら、汗ばむ手で剣を握る。今までの相手は、おそらく”普通”もしくは”妥当”だったのだろう。

今回はおそらく、中ボスクラスか、稀に当たってしまう強すぎる敵だと、ミノルは判断した。

「いい、2人と。私の呪文を頼りにしないで、やるだけやってみるけれど連続での発動は無理。あんた達も自分の魔法を過信しちゃう駄目よ、本来なら”ああいう敵”には呪文が有効なだけ……」

過信も何も、それすら出来ないミノルだが、気になる単語が。

「ああいう？ ……どんな敵か解ったってこと？」

トモハルの問いにミノルも同意だった、そういう意味合いに取れたのだ。声のトーンが落ちたマダーニ、瞬時に2人は聴かなかったほうがよかったかもしれない、と後悔する。唇を噛締めたマダーニ、2人からみたら強者のマダーニでこれだ。薄々、マダーニの仕草や態度で解ってはいたが。

「多分……トロール」

トロール!? 同時に声を張り上げたトモハルとミノル、顔を見合わせ青褪める。

トロール。この世界では容姿は定かではないが、一般的に『知能は低い、巨大で怪力な化物』という印象を受ける。

もう一つ、ミノルは付け加えた。『序盤で出てくる敵ではない、最終試練の前辺りの敵のはずだ』……。と。可愛らしい姿で描かれる場合もあるが、大体が凶暴で悪意に満ちた化物だ。二体、という数だけならば安心できるが、問題はそれが何か、だ。

唇を噛締めながら、トモハルはすでに剣を引き抜いていた。左利きのトモハルは剣を構えながら右手を開いたり、閉じたり。呪文の確認を急いでいるのだ、震える指先で、唇で言葉を紡ぐ。

「私の小剣を、徐々に体内を蝕む毒剣に変えたわ。それで長期戦に持ち込めば毒が回りこんで勝てると思うの。それまでなんとか引き伸ばしましょう、短期で決着をつけたいけれど……」

呪文が頼りに出来ない、ということだ。もとより、傷を作らねば毒とて体内を蝕まないのがマダーニの接近戦が鍵となる。隙を作るのは勇者達の役目だろう、感じ取ったトモハルは喉を鳴らす。

未だに剣を液体に浸しているマダーニ、濃緑の粘着ある液体に寒気が走る勇者2人。

「俺が一体、貰い受ける。3人でなんとか踏ん張ってくれ」

ライアンが緊張した面持ちで、しかし声は普段通り温厚で滑らかな口調で。トモハルはその声で安堵し、大きく深呼吸を繰り返して自己暗示を繰り返していた。落ち着けば、大丈夫だと。魔王とも対峙しているじゃないか、それに比べればどうってことない、と。

ふと、隣を見たトモハルは口から出そうとした言葉を詰まらせていた。カタカタ、と細かく何か動く音はミノル。それは自分の剣を握り締めたまま震えているミノルの姿だった、微かに涙さえ浮かんでいる様に見える。恐怖に怯え、すっかり縮こまっている姿を見ては、思わずトモハルとて震えが走った。

「いや……だ……た、たたかいたく……な……い……」

小さく、震える唇が紡ぐ言葉。恐怖で支配されても当然だろう、彼ら勇者は生まれた時から平穏な世界で生きてきた。投げ出しても、誰も文句は言わない。生きてきた世界が違いすぎる。

けれども、ミノルを目の前にしてトモハルは飲み込まれそうになりながらも、自身の腕に爪を食い込ませ瞳を硬く閉じた。自分の精神を持ち直した、やらねばならない、投げ出せない。ミノルから視線を外す、額に浮かぶ汗を拭き取る。

「……じゃあ、馬車の中に居ればいい。護れるほど余裕が無いんだ、腑抜けはいらぬ。俺とマダー二で一体くらい倒してやるからそこで見てろ」

ぶつきらぼうに、居丈高な声でミノルを見ないまま……はつきりとトモハルは言い放った。空気の振動で、ミノルが自分を見上げた事が解ったが視線は合わせない。

挑発したわけではない、強がりでもない、本心だった。ミノルは、いい加減解らなければいけない。

『アサギを救うためには避けられない道だ』

……ということ。

最早後戻りなど出来ない事を、突き進むしかない事を、勇気を振り絞るといふ事を、恐怖に打ち勝つという事を。正直、トモハルとて当然恐怖に押し潰されそうなのだ、だがトモハルにはミノルになるものがある。今のミノルへの言葉は自身への挑発、心の一遍の恐怖に打ち勝つための気合い。

だがミノルはそんなこと知る由もなく、「戦ってくれ」だの、「頑張ろう」だの励ましの言葉がトモハルから来ない事など100も

承知だが、今の言葉は心外である。売り言葉に買い言葉、ミノルとて黙ってはいない。

「言ってくれるじゃねえか！ いいよ、見てやるよ！ 絶対に助けに行かないからな！」

「うん、来なくていい。足手纏いになりそうだから。勝てる勝負もこれじゃ、勝てない」

鼻で笑うトモハル、2人の間に険悪なムードが漂うがマダーニとトリアンは口出ししなかった。2人の性格は、2人が良く知っているだろう。トモハルは賢い子だ、上手くミノルを引き出してくれそうな気もしてマダーニはじつと二人の会話に耳を傾けていた。

ミノルとてただの臆病者ではない、ただ、”きっかけ”がないだけだろう。微かな望みは、ミノルの覚醒だ。馬の地を駆ける音に耳を傾け、戦闘への息を整える。落ち着け。静まれ心臓。想い描くは勝利のみ。……ライアンが、マダーニが、トモハルが唇を噛締めた。森が開ける、薄暗い空が星の瞬きを微かに描く。景色が一変した、岩肌がごろつく荒地、緑の色彩が徐々に薄れていく。肩身狭そうに映えている植物達の生命力の強さが感じられる、そんな生命僅かな地。

瞳を閉じていたマダーニが、ライアンが、一糸乱れずに叫んでいた。

「行くぞ！」

馬を押し止め、ライアンが馬車から飛び出した。マダーニとトモハルがそれに続き、力強く飛び降りる。一人、本当に取り残されたミノルは、そつと外の様子を窺った。震える身体はどうにもならず無意識で剣を握る。三人の後姿が見えるその向こうに巨体が見える、まるで飲み込む勢いで迫ってきていた。

「かつこつけて、どうすんだ……トモハル。アサギはいない、誰も見てくれねえ」

小さく呟いた自分の姿を客観的に見れば、いかに情けないか。しかし、それでもミノルは動けない、プライドよりも大事なものは命。

何の準備も無く放り込まれた、この戦場でどう戦えばいいのかなど、解らない。

勇者なんて名ばかりだ、いきなり強力な魔法が使えるわけでも最強の剣を所持しているわけでもなく。12歳の地球生まれのサッカー好きな子供、そんな肩書きしかない。

情けないよりも先に、それが正常なのだと言い聞かせる。正当化する、恐怖が身体を支配する、防衛本能が働く。

「ここから呪文放つたら……届くか？」

それでも、トモハルが心配だった。目の前にあの魔物がいなければ、練習するつもりで援護が出来ないか、とミノルはふと思う。安全圏にいれば、落ち着いて出来そうな気がしてきたのだ。やってみようか、思い直して腰を上げる。馬車から腕を伸ばす、小さく詠唱を始める、瞳を細めて指を動かす。

その時だった。

「死ぬよ、あの人達。条件次第では敵を一掃してやってもいいけど？」

心臓が口から飛び出る勢いで、思わず馬車から顔を出し見上げた先、雲間から指す月光に照らされ少年が宙に浮いていた。思わず息を飲んだのは、何故かアサギを思い出したからだ。性別すら違うのだが、瞳が似ている気がした。

小馬鹿にした態度で、少年は微笑んでいる。12歳程度、長い黒髪を一つに後ろで束ね、きつめで大きな瞳を妖しく光らせている少年。

……トーマ・ルツカ・シーザ。

魔界から、人間界へ旅に出てきていたトーマだった。面白そうな気配に引かれて来てみれば。喉の奥でトーマは愉快そうに笑う、間抜け面して自分を見上げているミノルをまるで小動物を苛めたくなるような感覚で笑った。

まさか、その相手が勇者で、“アサギ”の片想いの相手であると
は知らず。

怒涛の禱火くミノル

耳を劈く不気味なトルルの重低音の唸り声、思わずトモハルは一瞬足を止めてしまった。だが、”一瞬”だ、唇を噛締め、剣を握る左手に力を込め直し再び走り出す。

右手に神経を集中させる、熱く感じる指先は詠唱の証。短期戦でいかなばならないことは解っている、いかに最初の攻撃で敵を弱らせられるかが鍵だろう、しかし大技では自分に疲労感が生まれてしまふ。適度に削れ、盲増しにもなりそうな術で怯ませてから剣で斬りかかる……それがベストだとトモハルは判断した。

「巡る鼓動、照らす紅き火、闇夜を切り裂き、灼熱の炎を絶える事無くッ」

ドン、ドン！

連打で炎の玉をトルル目掛けて投げつけた、確かに意表をついた攻撃だ。顔面と、腹部を狙いながら一気に斬りかかるトモハル。

「隙を与えるな！ 休む暇なく攻撃を繰り返せトモハル！ マダー二、援護を！」

両手を振り上げ力任せに振り回してくる一体のトルルを前にして、ライアンは剣を引き抜き両手でしっくりとくる愛用の剣を握り締めた。久々の大物だ、久々と言ってもこんなレベルの魔物に遭遇した経験など、ただの一度きり。背筋を伝う汗は、武者震いゆえの汗だろう。決して恐怖ではない……と、言い聞かせる。

トモハルとマダー二も心配だ、だが自分の防御のみで手一杯だろう。ここで倒れては水の泡、トモハルという勇者が消える。ミノルという勇者は、どうなるか。他の勇者や仲間達と合流できない、まして、勇者アサギは……？

ジャリ、足元の砂が乾いた音を立てた、ライアンは吼えるように雄叫びを上げるとそのままトルルの攻撃を受け止めるべく剣を横に構える。

その頃ミノルは、人間である……と思われる少年を見上げていた。人間か？ 宙に浮いているところを見ると物の怪なのか？

同年代の男だということも解ったのだが……敵か味方か、判別が出来ない。冷汗が流れ落ちていく、馬が小さく啼いた事がミノルにとっては救いだった。自分の傍にいる、命あるモノ。それが馬であれ心強く感じてしまうのは、目の前の少年に畏怖の念を抱いているからである。

先程から肌に突き刺さるような圧迫感は、この少年の何を意味するのか。喉を鳴らして大きく息を飲みこむミノル、その音が響きすぎて少年にも伝わったのだろう、含み笑いがもれた。

すい、と移動しミノルの眼下に降り立った少年、愉快そうに笑っている。背後にトロールがいるにもかかわらず、笑えるというのはどういふことなのだろう。逃げられる自信があるのか、それとも勝てる自信があるのか、それともトロールの味方なのか。

「いやだなあ、そんなに緊張しないでよ。汚れた小動物君。もっと愉快に、人生を楽しく謳歌しないと？」

馬車に乗り込んできた少年もとい、トーマは小さく叫び馬車内で後ずさったミノルに再び嘲笑う。剣の束に手を伸ばし、ガタガタと歯で音を立てるほど恐怖感に押し潰されているミノル。

トーマは肩を竦めた。

ふい、と何かをミノルに突き出したトーマ、ミノルの剣は宙に放り出されていた。乾いた音を立てて剣が馬車内に、無造作に転がっている。

「そんな物騒なので僕をどうしようっていつの」

皮肉っぽくトーマは、蔑むようにミノルに近づいていくと頭上から言葉を投げかけた。転がっていた剣を手にし、一瞥していたが興味が無かったらしく再び転がす。トーマの大袈裟な溜息が響き渡る。「安っぽい剣だね、まあ、身分相応かな？」

思わずカツとなったミノル、うるせえ！ と叫ぶと立ち上がり右

腕を繰り出した、しかし。難なくそれを受け止めたトーマは、急な動きに驚いた馬を嗜める為「どうどう！ …… イイ子だね、うん、何も無いよ大丈夫…」ミノルではなく、馬に声をかけていた。

力を注ぎ込み続けるミノルだが、トーマは微動だせず。ミノルよりも腕はか細い筈だった、わざとらしく大きな溜息を吐いたトーマは急にふい、と横に身体をずらす。勢い余ってミノルが前につんのめるのをしらけて見つつ、どか、とトーマは馬車内で座り込んだ。寛ぎ始めて背中荷物を下ろし、肩を回しながら何かを探す。忌々しげに睨み付けていたミノルを気にせず、トーマは「食べる？」と見つけたそれを差し出した。

鼻に近づけられ、ビクツ、と身体を大きく震わせたミノルだが、とても良い香りだ。食べ物の匂い、熱々の揚げ物。食欲をそそられる。

「毒じゃない、これ、僕の夕食。魚のフライ、買い立てなんだよね」
嬉しそうにミノルに見せ付けながら、トーマは豪快にかじりつく。と満面の笑みで低く唸った。啞然とミノルは腕に力を籠めて立ち上がると、胡坐をかいているトーマの真正面に座る。

くす、と笑ったトーマ、どうやら恐怖心がミノルから消えたことが面白かったらしい。トーマを凝視しているミノル、どうやら疑心は消えないが敵ではないと判断したらしい。

「このフライさ、カリツと上手に揚がってるんだー、前に食べてからはまってんの。塩加減も僕好みで最高」

旨そうに齧り付く無邪気な笑顔は、子供らしい。近くで見ても、やはり再確認したことは”アサギに何故か似ている気がする”ということ。特に今の幸せそうに食事している姿は、アサギによく似ている。アサギは、食事をありがたそうに、美味しそうに笑顔で食べるのだ。

それこそ、気分良く見ていられるように。こちらまで、胸がほんわりとしてくるくらいに。

トーマは徐に顔を上げミノルを見た、挑戦的になのか油で濡れた唇をそつと舌で嘗め上げる。思わず、背筋がゾクリ、となったミノルは慌てて視線を逸らすと俯いた。冷淡さ、胸が熱くなるような婀娜っぼさ。非常に艶かしい表情だったのだ、トーマが。

何考えてるんだ、相手は男だぞ！？」

……と思ったのだが、アサギに似ているのなら仕方が無いか、とも思い直したミノル。だが、前言撤回。

「そんなに見つめないでくれない？ 僕はそんな趣味ないんだ、君は……同性愛者？」

「っ！？ ばっか、俺は健全だ！ んなわけねえだろっ」

青褪めミノルは自然に自分の腕を抱き締めていた、興味があるといわれたら悲鳴を上げざるを得なかった。だが、トーマは怪訝にその台詞を照れ隠し的にとつてしまったのだろう、身を反らして警戒する。顔を大袈裟に顰めて距離を置いていた。

「むきになるのが怪しいね。人の趣味にとやかく言うつもりはないけどさ、僕はお断りだよ、そもそも僕は面食いなんだ。」

……あ、そんなことより、君の仲間、いいの？ 死んじゃうけど「え？」

ゾワゾワ、と憤怒と羞恥心がざざめきあう中で、忘れてはいけなかったのは今が戦闘中だということだ。トーマの表情はよく変わる、感情を露にしているのか、作為なのか。無言のミノル、現実に引き戻され再び恐怖で震え出した。

トーマは食事を素早く済ませる、油で塗れた手をマントで拭きながら急に苦笑い。今のはアイセルに叱咤されそうだが、もう遅かった。マントは油のしみが出来た、落とすことに時間がかかりそうである。

だが悔やんでもいても仕方がない。水筒から水を取り出し一気に乾いた喉を潤すと、改めてミノルに向き直る。狼狽するミノル、小さく溜息を吐きトーマは馬車から身を乗り出し瞳を細める。独り言を大きく言ったのはワザとだ。

「ああ、やつばいなあ。ああ、力量が全く足りてないね。そもそも、こんな小動物ボウヤを連れて旅しているのがイケナイね」

「誰がボウヤだ！」

掴みかかってきたミノルに、満足そうに何故かトーマは薄っすらと微笑む。ようやく挑発が効いて来たな、という満足感だった。片手でなんとなくそれを払い、一瞥して続ける。含み笑いしつつ、意地悪く語り続けた。

からかうことに、倦まずたゆまず……である。

「だってホントのことじゃん？ 新品の服、武器防具、いかにも新米旅人。おまけに腰が抜けて戦闘している仲間を無視している臆病者、役立たず」

う、喉に言葉を詰まらせ反撃する隙を失ったミノル。……言い返すことなど、出来ない。本当の事だ、凶星である。これで反論できれば、大物だ。口達者なだけだが。

笑いに肩を振るわせつつもトーマは、こほん、と咳一つ滑る様に言葉を吐き出す。上調子ではない、トーマのほうが立場的にも性格的にも無論余裕があった、状況を手中に収めているのだから当然か何より、トーマは自分に絶対の自信を持っている。

魔界で産まれ、育てられた人間。魔力の数値は桁外れ、師匠はアイセルとマビル。数個の禁呪をすでに所持し使いこなしているからこそ……魔界を出たばかりのトーマがここにいた。

乗船する直前だった、街で買い物していたトーマはふいに、ある一つの転送陣を思い出したのだ。誰も赴かないであろう場所、切り立った崖の脇に作っておいた子供サイズの転送陣。アレを使えば、簡単に目的の場所に移動できる。

……破壊されていないければ、の話だが。

だが、余程の事がない限りあの場所に人が立ち入る事はない。そのような場所を狙って作った、魔法で掻き消すように作為的に幻覚操作もしてある。

一か八か。絶対の自信を捨てきれないトーマだからこそ、出来た。

そう、完璧に陣は残っておりこうして魔界・イヴァンから転移成功したトーマ。念入りに陣の結界も施し、ふいに奇怪な物の怪に眉を潜め、向かった先。

ミノルが、いたのだ。

「トロールの気配を見抜き、誰かが”放った”ものだ」と確信したトーマは興味が出たのである。『誰が、トロールを差し向けられるような逸材なのか?』

人間たちを見つければ、どうみても平凡な普通の旅人達だった。では何故、追われるのか? ……トーマの興味を掻き立てたのである。

「でもさ」

トーマはようやく声を発する、おどけさは消え、戦闘が繰り広げられているであろう場所を見つめる。顔を上げたミノル、満足そうにトーマはそれを確認すると、再び視線を移した。

「はつきり言って、分が悪すぎる。トロールだ、初心者が戦える相手じゃないし、確かに生息区域ではあるけれどにしたって、中央とは離れてる。まして、一直線に向かってきているのが気になるんだよね」
何が言いたいのか、次の言葉をミノルは何故か確信していた。息を大きく飲み込み挑むようにトーマを見つめる。

「何かが起きて、トロールを刺激した……は、可能性に薄い。だから」

トーマはミノルの目の前に指を一本突き出した、何故か威圧感を感じ顔を顰めて後ずさるミノル。

「まさかとは思いつけど、見当もつかないけど、かなり高等な魔族に付けねらわれてたりする?」

その言葉に、思わずミノルは返答した。「魔王もそれに含まれる?」……と。顔を引き攣らせ、言葉を詰まらせたトーマ。

「魔王? 魔王ね。超・高等。でもさ、なんで君みたいな一般市民と魔王が結びつくわけ?」

むっとしてミノルはトーマを睨みつける、唇を尖らせ反論を。

「さつきから侮りやがって……勇者なんだよ、俺」

失笑。爆発的に笑い転げ出したトーマ、むっつりと膨れているミノルが馬鹿馬鹿しく。腹をたてるミノルの気持ちは解るが、信憑性が全く無いのも確かだった。

「むかつくんだよ、お前」

凄みを利かせるように、上級生に喧嘩を売られた時に使う目つきで脅すようにトーマを睨むが。だが、そんなミノルの目つきなどトーマには全く、効果が無い。逆効果なのだ、呆れ返っている。

「ゆうしゃあ？ 馬鹿いうなよ、勇者はアサギって言う女の子なんだ。君とアサギじゃ、雲泥の差。っていうか、一般人が勇者に憧れて語る気持ちは汲み取ってあげるけど……こんなときまで強がらなくても」

言ってから、トーマは口元を押さえた。顔を顰め、舌打ちする。調子に乗りすぎたのだ、アサギ、という単語を出してはいけない気がした。

トーマが初めて見せた、失態。そしてミノルが反応したのは”アサギ”という単語だった、思わず身を乗り出して瞳を開く。

自分が知らない男が、アサギを知っている。トビイと、同じ。何故だ、何故、トビイもこの目の前の少年もアサギを知っている……？ 弾かれたようにミノルは思わずトーマのマントを掴んでいた。

「アサギ？ アサギって言ったのか？ どうして知ってるんだ？」

驚いたのはトーマも同じだ、驚愕の眼でミノルを見返すと啞然と口を開く。まだ、人間は知らない筈だ。それとも、大々的に勇者が告知されているのか？ だから勇者アサギの名が人間界にも轟き始めているのか？

「一般市民が？ 何故その名を知ってる？」

あくまでも、一般市民を強調するトーマ。ミノルは苛立ちを抑え切れずにいる、大声を張り上げ身を乗り出していた。

「だから、一般市民じゃないって言ってるだろ！ 俺も勇者、アサギも勇者。アサギはクレオの、俺はネロ……1星の。まだ他にもい

る、そこで一人、戦ってるのもクレオの勇者だ。

……いや、それはおいといて、どうして、どうしてお前アサギを知ってるんだ？」

ミノルの発言にトーマは頭を抱えた、深い溜息と困惑の色合いが見て取れる瞳、独り言をブツブツと。せかすミノルを尻目に、ひたすら狼狽し続け何やら爪を噛み始め。

「勇者つて、そんなにいたのか。信じられない。……だけど」

ミノルを一瞥し、トーマは立ち上がった。そのマントをミノルが両手でしっかりと掴む、上から睨み付けたトーマは払い除けるとゆつくりと馬車から降りていった。思わず後を追いかけたミノル、馬車から飛び出す。

振り返り、「行くよ」と一言言い放ったトーマは背を向けた。

「い、行くつてドコに!？」

慌てながらも、硬く剣を握り締め馬車を飛び降りたミノル、少年は不敵に微笑んでいた。

「君の仲間を、助けに行くけど？ どうする？ 勿論、行くよね？ 君はそんなに意気地なし？ これから先、アサギを……もう一人の勇者を救いに行くつもりで動いているのであれば。僕と一緒においでよ。」

まあ、無理強いはしないけど」

「アサギを……助けに？」

思わず息を飲んだ。”助けに”という単語。アサギが攫われた事まで、知っているというのか。

トーマの言葉を繰り返すと、ミノルは月を見上げる。明るい光が、トーマの全貌を映し出していた。月光に照らされ、威圧感に包まれた不可思議なその姿を。

「アサギは今、魔界イヴァンに居る。間違いない情報だ、信じなくてもいいけど。そしてトロールが出てきたのは……刺客だね、君達が勇者一行様ならトロールをコマに使うだろう。指揮してるのは、ミラポー辺りかな？」

ミノルの心の内を見抜いていたかのような発言、息を大きく飲み込み、身体を震わせる。

「魔王ミラボー……。3星の？ 違うね、2星のハイって奴だ、アイツが」

「違う、ハイ様じゃない。間違いなく」

ミノルの問いにそっけなく、間入れずして返答したトーマだが、気まずそうに再び舌打ちした。そう、人間ならば、疑問符をつけたくなる言葉を、トーマは発したのだ。

無論、ミノルとてそうだった。不快感に襲われ、聞き返してしま
う。

「様……？ ハイ”様”？」

そう、そこだった。人間の少年が2星魔王の存在を知っているだけも驚きなのだが、敬称をつけていた。トーマは、直様自分を取り戻したようでただ、言い放つ。トーマは、英知があるしい。話を、逸らした。分が悪すぎるのも確かなのだが、今は話をしている暇がない。あちらも非常に危険な状態だ。

「戦うつもりは？ ヤバいんだけど、あちらさん方」

「あるっ」

話題をすっかり変えられているにも関わらず、重要な事でもあるのだがミノルは頭を切り替えた。意気込み、唇を硬く結んだミノル。いい顔だ……。トーマが喉の奥で笑い、ミノルの手を握る。単純な奴、でも気に入った。ぼそ、っと小声で呟くと左手を振り上げたトーマ。

と、身体が急に宙に浮いたミノル、こんな感覚は初めてだった。身体がいきなり、下がったかと思えば、引っ張られ浮いていた。

「う、うわぁ」

宙に1メートル程浮かんだと思ったら、そのまま真っ直ぐに猛スピードで飛行が始まる。オープンカーが宙に浮き、時速100キロで走ったらば……。これくらいか？ いや、空気抵抗するものが、ない。呼吸が出来ない、瞳を辛うじてこじ開け、剣を握り締め。トーマ

マは苦悶の表情のミノルを気遣うことなく、そのままスピードに乗った。何故ならば、状況が非常に拙いのだ。会話していた分、戦闘が劣勢である。

荒地の中を、ただ一点目掛けて跳ぶトーマ。

月下の下で、ようやく影が見え始めたその頃。砂塵が舞い上がり、三人の姿を消し去るように覆い隠している。

「ああ、やってるやってる。準備はいいかな？ 勇者君」

言っが早いか、トーマは返事も待たずにミノルの手をいきなり離した。

「うっそ、マジ！？」

情けない声を出すミノル、ある意味当然と言えば当然か。無茶苦茶だ、顔が瞬時に青褪めた。しかし、その狼狽する瞳に目前の光景が鮮明に映し出される。

トロールに吹き飛ばされ、岩に強打され顔を大きく歪めているトモハルの姿だった。ミノルの脳裏に、焼き付けられた。

マダーニがトモハルの名を叫んでいる、だが、トモハルは微動だしない。激しく叩きつけられたのだ、無意識の内にミノルは剣を握り直しそのまま鞘から抜き放った。月光に刃が反射して一線の光を造り出すと、ミノルは吼えるように腹の底から声を出す。

「ミノルちゃん！？」

マダーニの驚愕の聲がミノルの耳にも僅かに届いた、だがそちらを見ている余裕などない。ミノルの声が響き渡る、風に乗って気合でトロールの背に剣を突き立てたミノル。

見事だった、深々と突き刺さり鈍い肉が潰れた音と確かな手応え。躊躇わず剣はそのままに、地面に降り立つとミノルはトロールから離れ荒い呼吸で睨みつけていた。辛うじて受身を取り、不様ながらも着地してよろめきながら立ち上がる。脚が痺れていたが、戦える。

鋼鉄とまではいかないが、なかなか硬い皮膚のトロールだが鍛錬を積んでいる戦士であるならばともかく、今のミノルにはそこまでの力量は無論なかった。剣とて、名剣でもなく市販品で粗悪なもの

だ。だが、風に乗ったスピードで力を増したミノルと、自分の全体重の重みも合わさり通常以上の力が出たのである。

足元ふらつき、バランスを崩しながら辛うじて立っているミノル、全身が震えているのは武者震いなのか成功に感情が昂ぶっているのか。駆け寄ってきたマダーニに支えられ、大きく息を吐き捨てたミノルはトロルを睨み付けたままだ。

トロルの巨体が、背に剣を突き立てたまま地が揺れるような呻き声で立ち尽くしたまま、我武者羅に大木のような両腕を振り回している。

「トモハルを……頼む」

額の汗を無造作に拭い、重々しい口調でそうはつきりとマダーニに告げたミノル。思わず今までとは違うミノルの雰囲気、固唾を飲んだマダーニ。一皮向けたのか、今の一度の成功で自信がついたのか。友人が傷つけられ、怒りがミノルを突き動かしているのか。変わった、いや、”復活した”もしくは、”目覚めた”……か。子供ではない、背筋にぞくりと何かを感じマダーニは震える。

勇者。間違うことなき、勇者の波動。

一人、劣等感に苛まれ、やる気もなく、常に外を見ていた少年。今や、力強い横顔がとて遅しく感じられる。

「ミノル、これを持ちなさい。トモハルは任せて」

思わず、マダーニも口調を変えずに、いられなかった。そつと差し出したのは、毒に浸した小剣である。受け取ったミノルに微かに微笑み、マダーニは直様トモハルのもとへと駆け出した。

ギユ、と剣の束を握り締めミノルは足を踏み出した、迷いも躊躇もない、何故だろう力が湧いて来る。越冬した小さな命の芽、春になり遅しく土を持ち上げて息吹くような。

トーマの言葉、アサギが無事であると知ったその事実がミノルを突き動かす。目の前で倒れたトモハルの姿が、ミノルを奮い立たせる。心内では正直、アサギはもう駄目なのだろうと、どうしたらいいのか解らず勇者として頑張っても骨折り損な気がしていた。しか

し、生きていると知り、居場所も知った、それが嘘でも幻でもない
と解った。

アサギに似ているから、自分のやる気を引き出してくれた、気が
合いそうだった。少年の存在がミノルを変える、信じる力が糧とな
る。敵かもしれない、だが今は信頼できる相手だと、実感できる。

真正面に対峙したトロルを睨み付けた、非常に大きな相手だ声と
て恐怖感を駆り立たせる。だが、人間だ自分は人間だ、恐怖を感じ
ないわけがない。恐怖を感じても、立ち向かえる”勇氣”が重要だ。
右手で剣を握り締める、左手をゆつくりと動かしながら詠唱を開
始する。左手から、陽炎が昇り始めた。

「あれはっ」

「ミノルの奴……ちゃっかり練習してたんだ」

マダーニに抱き抱えられ、起き上がったトモハルが満足そうに笑
っていた。凜々しい姿を目に焼きつけ、そのまま安心したように気
を失う。清清しいまでの笑顔だった、隣の幼馴染、親友の凜々しい
姿、自分の好騎手。

マダーニもトモハルの体温を感じながら、薬草で手当てをしつつ
鳥肌がたつ。それは小気味良い感覚、恐ろしいまでの将来性をこの
2人の勇者に感じ、マダーニは微笑した。

「なるほど。アサギちゃんがミノルちゃんを好きな理由が、なんと
なく判った気がする」

鋭い瞳、凜々しい面持ち、恐るべき集中力、土壇場で男を上げる
少年。左手から立ち昇る熱を帯びた発動前の魔力が、髪を吹流し身
体をもふらつかせていた。呪文の大きさに、身体がついていけない
のである。

トロルの巨体を前に、熱い左手を差し出した。今しかないと思っ
た、絶妙のタイミングだった。

「巡る鼓動、照らす紅き火、闇夜を切り裂き、灼熱の炎を絶える事
無く。私の敵は目の前に、奈落の業火を呼び起こせ！」

完璧だ！

ミノルがニツ、と満足げに微笑み拳を叩き込むようにトロールの臀部に呪文を放つ。成功魔法、確信できた威力。その場を離れ、直撃した火炎珠を喰らい燃え盛っているトロールを見つめる。

焦げる匂い、鼻がもげそうになり口元を手で覆うが、しっかりと視線はトロールに合わせたまま。堪らない匂いだ、しかし攻撃を喰らわない範囲で小剣をトロール目掛けて斬り付け始める。

浅い傷でも、小さな傷でも、致命傷となる毒が全身を廻るだろう。背の剣と、臀部の火傷の痛みで暴れるトロールだが慎重に動きを見ていれば攻撃を喰らわずに済みそうだった。

毒がまわってきたのか、数分後地面をのた打ち回り始めたトロール。もう、大丈夫だろうか？ 距離をとり、吹き出す手の汗をマントで拭う。

顔色悪く真つ赤に裂けた口からは泡を吹き出し、黒焦げた肉体を掻きまわっている様子に思わずミノルは息を大きく飲み込んで後ずさった。ふと、言葉を漏らす。

「ライアンは？」

そう、ライアンがいない。周囲を見渡せば、微笑んで佇んでいたトーマと視線が交差した。す、と音もなくトーマはミノルの真正面に移動してくる。

「ありがとう、助かった」

もはや、少年には何も驚かない。何者なのかは知らないが、悪い奴ではないから、と。だからミノルは素直に礼をした。

に、と口元の端を上げて笑ったトーマ。

「まあ、上出来。懐に入ればこっちのものなんだけど、腕が厄介で難しい。強力な呪文が使えるれば魔法対抗が弱いから楽な種族だよ。円熟者でも同じことするかな、今みたく」

「ふむふむ、そうか」

素直に深く頷くミノル、軽く笑いかけると少年は足元に転がっているトロールを冷めた瞳で見つめた。

「不様だね……見てな」

「え」

きよとん、としたミノルにトーマは大きく右手で宙に円を描く、その腕をまっすくにトロールへと向けた。

「膨大なる光を体内に留めることなく、耐え切れず弾けよ。肉片に帰せば未来は白紙へと、光弾内部爆破」

トーマが無造作に繰り出したその呪文は、魔導書にも載っていないかったものである。いくら勉強をサボっていたとはいえ、一通り目を通していた。

トーマの掌に光が集まる、人間の大人の頭部くらいに球体になった時だった、不敵に笑みを浮かべたままそれをトロールへと放つ。ゆつくりと吸い込まれるようにトロールの体内に入ってしまった球体、ミノルの手を掴み突如トーマは空中に飛躍する。

「な、なんだあ!？」

ミノルが下を見ると、トロールが爆発したのは、ほぼ同時だった。広野に寝そべっていたトロールの巨体は、一気に跡形もなく吹き飛んだ。テレビのニュースで観た事がある、地雷が良い例だろうか。あの肉片が粉々に飛び散り、四方へと。無論緑色のへどろのような血液も、同時に霧吹きの水の様に散布され。

思わずミノルは口元を押さえた、胃液が溢れ出る、吐き気に襲われても仕方がない光景だ。眩暈を覚える不気味な臭い、空中にまで漂い始める。

トーマは嗚咽するミノルの様子を見て密かに溜息を吐いた、自分は慣れてはいるがこの程度でのこの状態では先が思いやられる。しかし、今はそっとしておくことにした。

トーマとて、一番最初にこの禁呪の威力を目の当たりにした際は引いたものだった。一気に跡形もなく灼熱の業火で焼き尽くすよりも、粉々の破片として遺すほうが残虐である。原型すらないとはいえ、カタチは残っているのだから。

……勇者ならば、この程度の光景に目を背けるな。今後、これ以上の惨劇が待ち受けているであろうから。

この禁呪、おそらく現時点で使える術者はトーマを含めていないか、だ。強力かつ、残虐で確実なる禁呪。実はこの禁呪、完成しているとは言い難かった。光球を弾き返してくる強者として存在するだろう、一見完璧に見えて危ういことをトーマとて知っていた。何時の日か、来るべき時に備えて完全なものにする必要がある。何人たりともこの禁呪に屈するしかない、完璧なものを繰り出す必要があった。

トーマは、ミノルをマダーニの元へと送り届けると遠方を見ながらぼつり、と呟く。

「ドコに行くんだ？」

やや戸惑いつつ、むせ返りながらミノルは応える。

「ピョートル。ピョートルに行くんだ」

ふらつきながらも笑ったミノル、トーマはあどけなく微笑むと遙か地平線を指す。

「あつちだね、至急この場を離れたほうがいい、トロルの死臭によつて多くの魔物が集まってくるだろうし、刺客ならば探りを入れてくるかもしれない。こんなところで往生を遂げたくないだろ？」

「でも、もう一人仲間が！」

「うん、知ってる。今から僕が助けにくるから、後で合流しなよ」

トモハルを抱き抱えながら、訝しがりつつマダーニはトーマとミノルを見比べた。

この、少年は何者か。

あの禁呪の威力、マダーニとて見ていた。あんなもの、そこらの人間が操る事ができるものではない。ミノルを奮い立たせたのは彼で間違いないのだが、親しくなつたみたいだが、敵ではないのか？信用して良いのか？

「敵じゃないよ、味方でもないと思うけど」

トーマがマダーニに微笑みかけ、無邪気に笑う。不意に視線が交差したが、背筋が凍りつく事もなくマダーニはトーマを見つめ返した。

……この子も、心が読めるの？ ジェノヴァで出逢った魔族を思い出した、雰囲気似ていなくもない。眉を潜めたマダーニ、喉の奥でトーマは笑う、肯定するかのように。

「綺麗なお姉さんは好きだよ。名前は教えないで置くけど今は助けてあげるね。でも、もしかしたら今後は敵になるかも。

全ては、”あのお方”次第、あのお方に反するならば僕は容赦なく敵となる、崇高で高貴な麗しきあのお方、あのお方の為だけに僕は存在するんだ」

「……あなたも、不思議な事を言うのね？ 最近はや言めいたことを言う人が多いの。もう少しヒントが欲しいものだわ」

溜息交じりのマダーニにトーマは軽く瞳を見開いた、が鼻で笑うとミノルに向き直る。

「何時か判るよ、……必ず。君も考えといて、僕と敵対してもいいように頑張りなよ？ 勇者なんだろ、鋭意努力しな」

「あのお方”って、ハイのこと？」

その名を口にしたミノル、驚愕の眼でマダーニは直様トーマを見つめ直した、が意外そうに首を傾げている。

「違う違う、なんだ、憶えてたんだ魔王の話。ハイ様じゃないよ、確かに君達の知り合いだとは思うけど。……ヒントはね」

そう言ってトーマは月を仰いだ、月から放たれる不思議で神秘的な光に包まれて悠然と宙に浮かんでいった。

麗しい、人。人間だろうが、桁外れの美貌に思わずミノルもマダーニも息を飲んで見守る。透き通った水のような、それより深い深い水底に潜む冷水のような、そんな声と幻想的な光景。

「……やめとこ。もう一人の人、助けに行かなきゃ。とりあえずね、でも折角出遭ったんだから教えて欲しい事、僕の独断で返答するけど？ 何か知りたい事ある？」

ミノルはマダーニに全てを委ねることにし、視線を送った。軽く頷きマダーニは唇を舌で湿らせ、湧き出た汗を拭いつつ。

「何でも良いわけ？」

「僕が答えられる範囲ならば、ね」

意を決し、最も聴きたかったことをマダーニは問う。

「アサギちゃんの居場所。解るのね、教えて」

その名を聞いたとき、トーマの表情が揺らいだのをマダーニは見逃さなかった。聴きたかった、待ち望んでいたとでもいうように、うっとり微笑んだのだ。けれども、追求はしなかった、言葉を飲み込みマダーニは返答を待つ。

「魔界イヴァン。その中央、魔王アレク様の城内に大切に囲われているよ。命に別状なんてあるわけがない、勇者でありながら最高のもてなしを受けている筈だよ。敵の本拠地だね」

「本当のことなの？」

「信じる信じないは別だけど、嘘は僕は言わないんだ」

「ありがとう、無事ならいいのアサギちゃんが」

安堵した様子でマダーニはトーマを見つめる、不可解で掴めない人物だが確かに嘘は言ってなさそうだ。信用してもらえた嬉しさからか、恥ずかしそうにトーマは小声でありがとう、と呟き月へ帰る様にふい、っとその場を離れていく。

2人はトモハルを背負って馬車へと急いだ、寝かせて傷の手当を再開する。運悪く、現時点で回復の呪文を扱える人物が……いない。マダーニとて簡易な初歩中の初歩のものしか扱えないのだ、トモハルの体力に任せるかなさそうだった。ミノルはからっきしである。トモハル本人が可能だが、生憎これだ。

毒小剣をマダーニに返却し、ミノルは予備の剣を受け取りそれを装備する。ミノルの使っていた剣は、トルと共に大破しているだろう。致命傷は外れているトモハル、ただ、打撲が痛々しい。

「アサギ……無事だったさ。よかったな」

ミノルは、トモハルにそう零した。僅かにトモハルが笑った気がした、「知ってるよ」とでも言わんばかりに。

その頃トーマはもう一つの巨体に遭遇していた、先程の戦場よりも離れた場所、地には無数の激戦の爪痕。口笛を吹き、愉快そうに

トルルを見れば一つの小さな影が飛び交っていた。

ライアンだ。呼吸の乱れは限界だった、気力のみで持ちこたえている状態。頭部から流れ出る血液が視界を奪う、身体は痛みで痺れを通り越して動かなくなってきた。

「こりゃ、ヤバイかもな」

ライアンはさも面白い、というように唇の端を上げて笑った。

「だが、諦めたらオレらしくもない、な」

戦い抜いて戦い抜いて、決して諦めずに最後まで希望を捨てずに諦めれば、全てが終わる、諦めなければ奇跡の逆転が起きるかもしれない。

と、月から天の使いが現れた。トルルの向こうの月から、人影が現れたのだ。漆黒の髪を靡かせながら、麗しき少年が目前に。

「うわ、えぐやられ方したねえ、僕に任せてよ」

鈴を転がしたような声、聞き覚えのある声だったが意識が朦朧とするライアンには誰に似ているのか判別できない。するり、とトルルとライアンの間に割って入ってきたトーマは滑り落ちた布の様に艶やかで。

詠唱の声が辺りに響いた、至近距離で凄まじい破壊力のある呪文を繰り出したトーマ。

「巡る鼓動、照らす紅き火、闇夜を切り裂き、灼熱の炎を絶える事無く。私の敵は目の前に、奈落の業火を呼び起こせ！全てを灰に、跡形もなく燃え尽くせっ！」

熱さが空気を伝わってライアンにも襲い掛かった、瞳を細め顔を覆い隠す。

「ちっ、至近距離過ぎたかな」

舌打ちし、トーマはライアンを掴んで後方に飛ぶと、トルルの死期をじっと見つめる。最強クラスの火炎の呪文、マダーニが見えていたら唸り声を上げそうだった。だが、ライアンにはトーマの魔力がどこまで底知れず恐ろしいか解っていない。

灰だけになったトルルの亡骸、トーマはようやくライアンに微笑

みかける。

「無事？ …… みたいだね」

「ああ、ありがとう、天の遣いかい？」

「ぷ！ そりゃいいやあ！」

トーマは腹を抱えて笑い出すと涙を拭きながら、きよっとんとしているライアンに視線を送った。

「そんな面白い事言ったかなー？」

「言った言った！ 僕、普通の人間だよ。ああそれより、お仲間が待つてるよ。 …… 合流するの時間かかりそうだから僕が連れて行ってあげるね」

立っているのすらやっとなライアンをここに放り出して行くのも気が引けた。天然なライアン、雰囲気は温和なのも手伝って手を差し伸べたくなった。

「かたじけないな、何から何まで」

「いいよ、気にしないで」

言うなり、トーマはライアンの腕をがっしりと掴むとそのまま宙に浮かぶ。

「ああ！ これは凄い！」

自分が宙に浮かんでいる状態に大興奮のライアンだ、秀でたトーマの能力などお構いなしに。愉快そうにトーマは笑うと、そのまま飛ぶ。

このまま戻れば、再びミノル達に遭う訳だが …… 仕方がない。

馬車もこちらを目指しているようで、どうも慣れないながらにマダーニが手綱を握っているようだった。

「おーい！ マダーニ！ オレだ、オレ！」

トーマの腕で暴れて自己主張するライアン、バランスを崩したトーマは急遽降下した。

「あんた子供じゃないんだから」

呆れた顔つきでライアンを睨むトーマ、豪快に笑っているライアンを見ていると不思議と自分もおかしな気分になってきた。馬上か

らマダーニが意地悪く顔を出すと、白々しくトーマに話しかける。

「あらあら、また遭ったわねボーヤ？ 貴方は今、敵なのかしら？」
む、っとした顔つきでトーマはそっぽを向くと気が変わったんだ、
と言葉を吐き出す。

馬車に転がり込んだライアン、心配そうに看病に入るマダーニ、
トモハルの傍らについているミノル、眠っているトモハル。トーマ
は控え目に馬車から覗き込むと四人に声をかけた、自分でも不思議
だった。

「よかつたらさ、僕も乗つけてくんない？」

思いもよらないトーマの言葉、一瞬啞然としたマダーニだがにん
まりすると近寄って頭を撫でまくる。

「いいわよー、空いてるしこの馬車っ」

「……何、馬車賃として色々教えるって？」

「やだあ、そんなコト言ってないけど、そうね、ボーヤは頭の回転
が速いわねえ」

おっほっほ！ 自分の豊満な胸にむぎゅ、っとトーマの顔を押し
付けて高笑いだ。羨ましそうに見つめたミノルと、微かなヤキモチ
なのかむっすりとしたライアン。

「マビルと同じくらいかな……いや、でも、あっちのほうが」

ぶつぶつ、と何かトーマが呟いていた。

「おい、とにかく急ごうぜ」

我に返り、初めて自分から行動したミノル。ライアンに薬草を手
渡しながら、マダーニを見た。そうだ、今馬車を操る事が出来るの
はマダーニのみだ。が、マダーニの隣でミノルは付き添う。覚える
気なのである。

ようやく、ミノルが動き出したのだ、勇者の一人がまた一つ輝き
を増した。頼もしく満足そうにマダーニはそっとミノルの頬に口付
けを、驚いて飛びのいたミノルに爆笑する。

顔を真っ赤にし、声も出せないミノルだった。

「あら、ミノルちゃん達の星では挨拶代わりにこういうことしない

の？」

「すすすすするわけねーだろ!？」

「あら、残念ね。てつきりアサギちゃんともこういうことしてる仲だと思ってた」

「だだだだだあーれが!?!?!?!？」

そんなコト出来る仲ではないとマダーニと知っている、がからかいついでに言ってみた。旅は楽しくなくてはいけない、気休めも重要だ。自分とアサギを想像したのか縮こまって、頂垂れているミノルがなんとも可愛らしい。

「アサギちゃんに可哀想な事したわねえ」

「は？」

ガン、と手綱を引きマダーニは馬車を発進させる。大きく身体が揺れ、ライアンの悲鳴と共に馬車は発進した。

「ミノルちゃん、今は休んで。後程たーっぷり馬車の指導をするから、それまでは休息よ」

「……わかった、ありがと」

馬車の中に引っ込んだミノルは、寛いでいたトーマと視線が交差する。

「……で、お前も行くんだ」

「えーっと、ミノル君？ だっけ？ よろしく」

照れ気味に握手を求めたトーマ、ミノルも唇の端に笑みを浮かべて握手を交わす。その、温もりがトーマの心をほんの少し溶かしたことを、ミノルは知らない。

トーマは荷袋の中から薬草を取り出し並べていく、アイセルに用意してもらったものだ。

「えーっと、ミソハギは止血と消化不良……だったよな。あげるライアンとトモハル用らしい、と言ってもミノルにはやり方が解らないのでトーマが少々治療に当たる。」

「お前、すげえんだから回復魔法も使えるんじゃないの？」

「使えないこともないけど、普段は使わないから苦手なんだよ。僕

強いから回復とか必要ないんだ」

「……お前、ある意味すげえな」

ライアンの傷口に薬草を、ゆっくりと寝かせ、水を飲ませる。同様にトモハルもトーマが治療にあたるのだが……一瞬びくり、と身体を引き攣らせた。

「どした？」

「こ、こいつっ……!」

「トモハルって言うんだけど？」

「……じよ、女難の相が……!」

「は？」

血相変えて、今まで余裕のあったトーマが震える手でトモハルを見つめている。

「……趣味悪っ」

「……は？」

唖然とトーマを見つめているミノル、トーマは数分後我に返ると滝の様に流れている汗を拭う。

「ごめん、取り乱した。あまりに奇怪なっていうか、特異な運命の持ち主だったもんだから」

「確かにコイツ、変だけど。……何、占いかなんか？」

「……この人にさ、『よろしく』って言っというて」

「はあ」

以後、黙々と作業に入るトーマ、何のかんの言いながら律儀だ。夜が明ける頃、トーマは睡眠に入る。ライアンがトーマの魔法も手伝ってほぼ完治したのマダーニと交代し、代わりにマダーニも眠りについた。ミノルは半睡眠を繰り返していたので、ライアンの隣でうとうとと馬車の動きを見ている。

トモハルは、動かない。

トモハル。あと少しだけ、眠って。起きたら、あなたは……

「アサギ？」

眠りの中、アサギの声を聴いた気がした。トーマが繋ぐ、トモハルとアサギと。……マビルを。

「伝えるの、忘れてた。僕……トーマっていうんだ。トーマ・ルツカ・シーザー」

ぼそり、とミノルに告げた後、トーマは照れ臭そうに笑っていた。

追撃者VSトーマ

真つ直ぐに東へ進み続ければ、ジョアン。気を緩めずに進もう……。

本調子ではないが、ほぼ回復したライアンがミノルの馬車指導に当たっている。雨の日も、風の日も、灼熱の太陽が降り注ぐ日もミノルは必死だった。馬車の中ではトーマが退屈そうに寝そべったまま、そんなミノルを見ている。マダーニは荷物の整理に、武器の手入れだ。

先日多大に薬草を使用した、残りの薬草の把握をしている。一箇所に固めておいて取り易くしたり、愛用していた毒剣の手入れをする。小瓶の中に新たに多々の毒草を入れ込み、漬け込んで矢尻を浸したりもしていた。管理しているのは無論マダーニなのだから、自分が扱いやすいように、取り出しやすいように独断で整理しているのである。

「マダーニ！ 次に休憩できそうな場所が見つければ馬を休ませるが……」

「出来れば森がいいわね、薬草や食材を探したいのだけれど」「了解」

トモハルは、目を醒ましていたが身体が軋んで起き上がるのもやとどだった。いつまでも寝ていられないのは解っている、身体が鈍って剣の感覚を忘れてしまう。

……折角、コツを掴み始めていたような気がしたのに。

半身だけでも起き上がり、トモハルは魔導書に眼を落とす。顔を顰めながら、重く息を吐きながら懸命に字を目で追う。見ている魔導書は、回復のものだった。自身で、傷を完治する気であるのだ。

そんな面々を見つめてから小さく欠伸をし、トーマは瞳を閉じる。本来飛行能力を身につけているトーマは馬車で陸路を行かなくても、簡単に素早く進む事が出来る。だが、この退屈な時間も旅の醍醐味

だとトーマは解釈した。

数時間後、小川が流れている開けた場所に出た、付近に森もある。ライアンは迷わずそこに馬車を止める、馬を休ませてやらないと移動することが出来ない。川で水を飲み、近場の草を食べている馬達。周囲の気配を窺いライアンは今宵、ここで就寝する事を決意した。就寝は交代で行う、馬車ではなく地面に寝転がって。

早々に焚き火の準備を開始した、寒くはないが陽が落ちる頃には火を灯し周囲に警戒させねばならない。近辺には人間を襲う狼や野犬も居る、魔物だけに注意を払えばよいというものでもない。そういった相手には、やはり火が友好的だ。

ライアンは焚き火用意後狩りに出かけた、補充できるときに魚や兔、鹿を狩り燻製にしておくのだ。

トモハルは馬車から降り立つと、不安定な足取りだがミノルと剣の稽古を始める。痛みを堪えながら、それでも歯を食いしばり額に汗を滲ませながら。

マダーニは夕飯の準備だ、ライアンからの獲物に期待し自分は近辺の食べられる野草を摘む。

トーマは、首を傾げて眺めていた、一人で旅をしている自分にとってこんな光景は初めてだった。気楽な一人旅だったが、しかしこっぴつのも、悪くはない……。思わず口元に笑みを浮かべる。

トーマは肩を竦めると一人、右手を地中に翳して神経を集中させた。何かを探すように、足取りを進めながら瞳を軽く閉じたまま。馬車から数十メートル離れた位置で、トーマは立ち止まった。軽く目を開くと、満足そうに頷きそのまま唇を湿らせて何か呟いた。

次の、瞬間だった。

ドオン！

轟音。何かと武器を構えたマダーニ、振り返ったミノルとトモハル。そこには、仁王立ちして誇らしげに立っているトーマの姿がある。背後には、湯気。

「僕、毎晩お風呂に浸かりたいんだよね。潔癖症なんだ」

にこり、と無邪気にトーマは微笑むと呆けている面々に舌を出す。啞然と三人は見守る、ようやく理解出来た。鼻につく香りからして、どうやらトーマは温泉を探し当てたらしい。地面を抉り取り、簡易な風呂を作ったのだ。

「この付近の温泉、質はどうかなあ。疲れがとれるといいけど、ね」
しゃがんで、右手を湯に入れてみる。少し高温だった、熱さで一旦手を引き抜いたが、静かに再び湯に手を入れた。指先を軽く触れ合わせ、確認。

「うん……いいんじゃないかな……。ラドンやトロンが高そうだね」
温泉マニアなのかつ、とトモハルは思わず突っ込みそうになったが言葉を飲み込む。指先だけで成分がわかるのならば、かなりのものだろう。

確かにトーマは綺麗好きだった、衣服は汚れ放題だが身体は洗い流している。自分の為でもあるのだが必死に動いているミノル達を見て、自分も何か手伝いたくなりトーマはこの方法をとったのだった。温泉ならば誰でも好きだろうし自分も得で、一石二鳥である。

「トーマちゃんっ！ あなた、最高よっ！」

感激し身体を震わしていたマダーニが、声高らかに猛ダツシユして胸にトーマを押し付けた。呼吸困難に陥ったトーマは豊満な胸の下で苦笑いだ、喜んで貰えたことは十分に解ったが。

女性としてはやはり、汗を流したいだろう。マダーニは川辺で水浴びの予定だったが、質の良い温泉があればもう、感謝感激雨霰だ。暖かい上に身体も休まる。まさかこのような場所で温泉を堪能出来るなどと誰が思っただろうか。

「よかったじゃん、お前の怪我にもいーんじゃない？」

「ああ、そうだね」

ミノルとトモハルも、嬉しそうに笑い合つとトーマに駆け寄つた。帰宅したライアンも、温泉を見て大喜びだった。思わずトモハルは吹き出す、惑星が違って温泉好きはいるんだ、と。いと簡単に最近この世界に慣れては来たがふとした瞬間に自分が現在何処に居

るのか解らなくなる。けれども本質は同じだ、生きる為に場所は関係ない。トモハルは微笑すると手招いているマダーニの隣に腰を下ろしていた。

焚き火を囲んで、水と小麦粉を練って焼いたものにオリブオイルを垂らし食べる。串刺しにして焼いてある川魚には、無論塩を振る。ミノルが満面の笑みで我武者羅に食べ散らかしている、無理もない欠方ぶりのまともな食事なのだ。ライアンが捕獲して捌いた新鮮な小鹿の肉は、野草と合わせてスープになった。非常に豪華な夕飯だった、思わず皆の顔が綻んでしまう。

五人で焚き火を囲んで、星空を見上げて。目的を忘れてしまいうらい、穏やかな時間だった。

マダーニが最初に温泉に浸かり、長過ぎたため男達は軽く転寝を。次は男達が豪快に四人で浸かった、砂塗れの湯だがそれもまた、野生的である。まだ子供のミノルとトモハルにはしゃぐな、と言ってもそれは無理だ。唯でさえアサギの生死を知り興奮冷めやまない状態である。

「お前、すげーのな」

「大した事じゃないよ」

上機嫌でミノルがトーマに語りかければ、鼻で笑って返答してきた。

「でも、凄い魔力だ。俺にも凄さが解るよ」

真向かいでトモハルが屈託なく微笑み、トーマに声をかける。初めて、二人の会話だった。じっと、トーマはトモハルを見つめる。澄んだ瞳で何かを射抜くように、見つめた。

不思議そうに小首傾げたトモハルに、トーマは我に返ると「……まあ、ね。まだ僕は物足りないけど師匠が優秀だから」と小声で返した。す、っと湯に口まで浸かり瞳を閉じる。

「なあ、トーマ。お前も一緒にずっと来いよ！一緒に魔王倒そうぜ、お前がいると心強いし、魔法、俺らにも教えてくれよ」

落ち着きなく語りかけてくるミノルに半ばげんなりして、トーマ

は直様湯から顔を出すと唇を尖らせた。

「……駄目だなあ、ミノル君。人に頼っていたら前に進めないよ？
まあ、ずつとは一緒に居られないけど……一緒に居られる限り教
えてあげてもいいけど、さ」

情けない、とばかり大袈裟に身体を震わせてトーマはミノルに湯
をかけた。怪訝に顔を顰めたミノルだが、両手で大きくお湯をト
ーマに投げかける。温泉は、戦場になった。トモハルもライアンも巻
き込み、大騒動だ。

四人の顔には、笑顔。

湯冷めしないように毛布に包まり焚き火の前に居たマダーニは、
微笑ましそうに遠くの喧騒を聞きながら、茶を啜る。だが唇を嚙締
め徐に立ち上がると、簡易な結界を施し万が一に備えていた。出来
は上場だ、満足そうに微笑む。折角の休憩だ、皆で眠りたい。

そんなマダーニの気遣いなど知らない男達は騒ぎながらやってき
た、まだ元気が有り余っているようだ苦笑してマダーニは茶の準備
を始める。声が徐々に近づいてくる。

マダーニの特製、紅茶をベースにラベンダー、マリーゴールド、
ミント、ライム、バーベナをブレンドしたりラックス効果のある茶
を五人で飲み干し、身体を温めると皆就寝だ。

焚き火の中で時折火が爆ぜる、暑い夜だが風は涼しく。幾度も見
上げた星空は、眩く儂く美しく。何時しか、皆夢に落ちていた。

トーマの隣には、ミノル。初めて、アイセル、マビル以外の人物
とこうして並んで眠った。

「助けてあげたいけど。そうもいかないんだ……ごめんね」
同情なのか、友情なのか。手助けはしてやりたいのだが、確かに
自分が加勢すれば格段に楽になるだろうが。

トーマは、自嘲気味に微笑むと瞳を閉じる。

が、不意に、右手を上げると何かを放り投げるような仕草をした。
去れ、気分を害さないで。僕はこの人達みたく、御人好しじ
やないんだ

低音の怒気を含んだ、音にはしないが”意志”を投げつける。馬車から少し離れた位置で、何かが蠢いていた。舌打ちし、トーマは素早く跳ね起きると音を立てないように瞬時に飛ぶ。宙を駆けて、慌てて逃げ出す影を捕らえた。

「忠告したのに」

冷淡な声で、トーマは両手で魔力を瞬時に繰り出して放つ。……

忽然と消えた。”何か”。

「僕がいる間は、同じだと思っけど？」

トーマの頬を風が撫でる、声が風に乗る。誰に伝えているのか、などトーマには解っていた。相手も確実に受け取るだろうと、思っていた。

静まり返った周囲にようやくトーマは警戒心を解くと、音無くして再びミノルの隣で横になる。

「なんじゃ、この不快な小僧は」

「始末に参りましょうか、私が」

「待て、エーア。……良い、放っておけ」

「畏まりました」

不愉快そうに瞳を光らせ、低く呻いたミラボーと傍らのエーア。エーアを止めたのは他でもない、魔力が互角かトーマがそれ以上だと判断したからである。トロールを放った魔王ミラボーは散り散りになった勇者達の把握をしていた、最も厄介だと判断したのは既に勇者の武器を所持しているトモハルである。そして当初の予定通り進んでいるこの一行が、他の勇者の武器を探していることなど明らかだった。

「人間の分際で……異様な魔力の所持者じゃな」

瞳を細め、自身の水晶を忌々しそうに見つめミラボーは顎を擦った。突如現れ計画を台無しにした、この小僧。本来ならばトロールだけで片がついたはずだった、想定外である。先手を打ってくるので、簡単に手が出せない。

「まあよい、こうしてあちらの状況だけは探れるのだ」

ミラボーは、この一行の状況を完璧に把握している。一度位置さえ掴んでしまえば、水晶に映像を映し出せる。ふんぞり返り、ワインを手にしたその瞬間。

ペキ

水晶に、罅。軽快な音共に一気に罅から亀裂が走り真つ二つに割れた。まるで剣で一刀両断したような切り口である。流石に、ミラボーも血相を変えて立ち上がった。いた。

「ば、ばかな!？」

水晶の映像は、消された。これでは状況把握に時間がかかってしまつが、ミラボーを動揺させるのはまた別の問題だ。遠く離れた場所から自分に攻撃してきたことと、同じである。

「に、人間の分際で我の魔力を遮断したとでもいうのか!？」

「ありえませんが、ミラボー様。やはり私が偵察に」

「……いや、行くな」

腸が煮えくりかえってはいるが、引き攣りながらも笑顔でミラボーは語る。暫しの沈黙の後、落ち着き直しソファに深く腰掛けたミラボーは再びワインを傾けた。

「……また、捕らえれば良い。逃げられんよ」

真つ赤なワインを、呑みながらそう静かに呟いた。だが揺れる水面は、堪える怒りでグラスが震えるからだ。それでも、魔王は冷静を保つ。

魔王が、名の知れないたかが人間の小僧に構っている暇などない、と。

「どうせ、何も出来んよ」

一時の、別れ／再会は数年後／

ジョアンへ向かう途中の馬車内。マダーニはトモハルに専属で魔法を教え、トーマはミノルに魔法を教えていた。

思いもよらない幸運だと、マダーニは薄く微笑む。ミノルは同年代の友人のような存在に教えられたほうが、すんなりと受け入れやすい性格のようだ。

マダーニは知る由もないが、ミノルは学校でも教師の言う事を聞かず、自宅でも親に反発。思春期でもあり、目上の者には抵抗感というよりも反発感があった。

「こんの、出来損ない！ 何度言ったら解るんだよポンコツ勇者！ こうだって言ってるだろ！？」

「うつるせーな！ 解りやすく教えるよ！」

言うが早いかトーマとミノルの罵り合いが始まる、苦笑いしつつもマダーニは2人のやり取りを微笑ましく見守った。そう、一見仲が悪いようで実は良いのだ。格段にミノルの魔力は上がった、いや、神経を集中する事に慣れた、のか。すんなりと魔力を操作することが出来始めている、目まぐるしい成長だ。

「俺達の世界では、魔法なんて存在しないんだよね」

魔道書を片手に、トモハルが不意に口にする。2人の喧騒など全く気にも留めずに、真面目に勤勉に励む姿は好感がもてる。伶俐そうな顔立ちは、その通りだ。

「そうなの？」

「うん。もしかしたら……出来る人もいるのかもかもしれないけれど、大概がインチキ。本物は身を潜めていると俺は思ってる、馴染めないし他人から中傷を受けるから隠れていると思うんだよね」

「なのに、トモハルちゃん達は魔法が使えるようになったわね」
右手に、回復呪文の光を灯しながらトモハルが神妙に頷いた。

「うん……。思うんだけど、こっちの世界と俺達の世界の違いって、

自分の能力を発揮できる環境か、そうではないか、だと思っただ。こっちは知らないけど、俺達の……地球では、人は自分の能力の僅かしか発揮せずに人生を過ごすらしい。

開花しやすい状況にあるんじゃないかな、こっちの世界は。だから魔法が使えるって俺は考えたんだけど。俺達だけじゃなくて、誰しもがもしかしたらこの世界なら魔法を使えるのかもしれない」

「トモハルちゃんは、難しい事を考えるのね」

「んー、この間、寝込んでたし」

恥ずかしそうに苦笑いしたトモハルの頭部を、マダーニは優しく撫でる。アサギの次に頭の回転が速いのは、間違いないとトモハルだろう。彼には、妙に威厳を感じる時があるが、それが勇者の片鱗なのか。

回復役が欠落しているこのパーティ、トモハルが主力となるのが無難だと判断し先日からは独断で勤勉している。時折魔物に襲われながら、時折豪雨に見舞われながら。それでも各々成果を発揮した。

火炎を得意とするトーマは、無論ミノルに火炎系の魔法を伝授した為、格段にミノルは火炎系専属となっていた。パーティ的には、剣士が一人に、魔法使いが二人、それに勇者という肩書きの少年が二人。

トーマが何処までついてくるのか不明だったが、それまでミノルにつきつきりになってもらう予定だ。利用できるものは、何でも利用する、簡単にトーマを利用できるとは思えないがあちらもミノルに対しては乗り気な様子である。

早、数週間が経過した。

ジョアン行きの古びた看板が旅路の前に、ようやくお見えする。皆、安堵の溜息。真っ直ぐ進めば、ジョアン。左へ入ればライアンの故郷でもあるジョロロシャへと、進むことが出来るらしい。

「ジョロロシャって、ライアンさんの故郷だろ？ 寄りたいんじゃない

なくて？」

看板の文字は読めないがマダーニが読み上げたことで、トモハルが気を使ってライアンに語りかける。トモハルの問いに、ライアンは豪快に笑った。

「故郷と言っても、第二の、な。俺の生まれた村はジヨリロシヤ近辺の山中だ。魔族に滅ぼされたから、もう今は何処にもないよ」

一瞬、静まり返る一行。初耳だった、皆口籠るより他ない。マダーニは軽く知っていたので驚きはしなかったがそれでもやはり口を噤むしかない。

沈黙を破ったのは、トーマだ。

「よくある話だよ。小さな村は生き残る率も確かに高いけど、暇つぶしに破滅に導かれることもある」

「うん、運が悪かったんだ。俺だけが、生き残った。おかげで、ジヨリロシヤに出向いて騎士になっただがな」

「苦労人だね、ご愁傷様」

「昔のことだ、実際記憶も曖昧でね」

遠慮なく、ライアンに言葉かけるトーマはまだ幼いからなのか、気遣っても過ぎた事実は変わらないと知っているからなのか。

不意に、小雨が振り出した。トーマが素早く馬車に熱を帯びさせる、小雨程度なら、この魔法で弾くことが出来る。負担がかからないように、馬の上部にも張り巡らせていた、その為この旅は順調に來ていたのだ。流石にこの魔法は、ミノルには伝授しきれていない。雨が、魔法の熱で蒸発していく。ほんわりと暑い馬車内で、軽くマダーニが仮眠をとる為に眠りについた。雨音がしとすと、と耳に心地良く子守唄のようですぐに深い眠りに誘われる。

懸命に魔道書を読み耽っているトモハル、ミノルは干し肉を齧りながら火炎の魔法のおさらいだ。荷物を整理していたトーマは、何故かしらトモハルを先程から気にしていた。そわそわと、落ち着きなく身体を小刻みする。

荷物を全て床に出し、何やら片付け、再び取り出し、を繰り返す。

何度かどもりながら、舌打ちしては、右手を硬く握り締め。

「あの、さ……」

ようやく、トーマは声を絞り出した。それが、自分へだと気付かず、トモハルは魔道書から目を離さない。ミノルへの掛け声だと思っていたのだ、トーマの視線に気付かなかった。

「おい、トモハル。トーマが呼んでる」

「え？」

自分が呼ばれたと思い、顔を上げていたミノルはトーマの視線で相手が自分ではないことに気付いた。きよとん、と顔を上げたトモハルに、トーマは引き攣った笑みを浮かべる。

「……あんたの好きな女の子って、どんな子？」

「？」

「!?!? なっ!?!?」

小声だったが、間違いなく聞き取れたトーマの声。首を傾げたトモハルと、赤面したミノル。ライアンまでは声が届いていないらしい、外の雨音の為だろう。何を言い出したのかと、ミノルは急に縮こまると思わず顔を伏せる。

恋愛話は、苦手だった。

そんなミノルは他所にトモハルは腕を組み、真剣に悩むと低く唸って返答する。

「んー、どうかな。アサギみたいな子はイイな、って思うけど。可愛いし、スタイル良いし、頭も良い」

「アサギ……」

名を呼んだトーマに、トモハルが微かに微笑みながら付け加える。「今離れ離れになってる、女の子の勇者だよ。とても、可愛い子なんだ」

「説明しなくても、トーマはアサギを知ってたんだよ」

魔道書で顔を隠していたが、アサギのことになると参加しざるを得ない状態になった。不貞腐れたように頬を膨らませて苛々し始める。

「え？　なんで？」

トモハルの唇から、アサギのことが形容されるのが嫌だった。ミノルは弾かれたように顔を上げると、思わず殴るような勢いで睨みつける。無論、意味が解らず、きよとんとするトモハル。ミノルが何故機嫌が悪くなったのかも、トーマがアサギを知っているのかも知る由もない。

「見たことはないよ、名前を知っているだけだよ」

肩を竦めてミノルを身ながらトーマはそう言って、天井を見上げた。「だから、なんで？」と訊くトモハルには答えず。

「……トモハルとアサギは仲が良いんだ」

ミノルは、大きく肩を落とすとそれだけ告げてライアンと話す為立ち上がるうとした。こんなことが言いたいわけではない、本当のことだが言いたいことが違う。

わざと、トモハルの口から聞きたくない言葉が出るように仕向けてしまった。

「仲、いいんだ？」

意外そうにトーマは身を乗り出す、軽く頷いたトモハルだが首を傾げていた。自分の疑問には答えてもらっていない、アサギを知っている筈がないトーマが何故知っているのが最も重要だと思うのに。

「可愛いよ、すっごくね。頭もいい、気配りも出来る。アイドルにでもなれる子だよ。俺とも仲がいいけど、幅広い交友関係かな、人気者だし。あんな子が彼女だったら、って思うよ」

「……案外、両思いなんじゃねーの」

聞きたくないのに、言いたくないのに。ミノルはつい、口を出した。妙に絡むミノルに、トーマは気付いたのだ。

ああ、ミノルはアサギに想いを寄せているのだ、と。先程からの行動は、トモハルへの嫉妬だろう。

なんとなく人間関係が読み解けてきたトーマだが、聞きたかったことは違うのだ。そしてミノルの恋心を応援したくとも鼻で笑って

しまった。”器が違う、無理だ”と。

「好きって、なんだろう？」

魔道書を床に置いて、足を組み腕を組み、首を傾げるトモハル。怪訝に振り返ったミノルと、視線が交差した。しげしげと幼馴染を眺めて、一言。

「ミノルは、誰か好きな子いる？」

「は、はあ?! お、俺はそーいうの関係ないし! 女って好きじゃねーし!」

突如振られて慌てふためくミノルだが、さほど興味なさそうにトモハルはすぐに横を向く。一人だけ裏返った声で弁解していた事实に、ミノルは赤面し頭をかいてその場に座り込んだ。

しかし、意外だった。トモハルが、そんなことを聞いてくるなんて。

「アサギは……確かに可愛いよ、すつごく、可愛くて魅力的だ。でも」

思わず、ミノルが口内に溜まった唾を音を立てて飲み込む。

「でも、好きか、と問われると俺はアサギが好きなのかな……」

「は、はあ!？」

「価値観とか似てるし、一緒に居ると安らぐし、性格も合うけどさ。けど、好きなのかって問われると答えられなくなったんだ」

「ふ、深く考えすぎじゃねーのか、お前……」

二人のやり取りを観ていたトーマ、挑むような目つきでトモハルを観ていた。トモハルの、”向こう側”を観ていた。

……潮時だ、思わず小さくそう呟いてしまう。

「だからさ、トーマ。好きな子って、どんな子、って訊かれても……今答えられないかも」

「それは、つまり今好きな子がいないって事でいいの? 好きが解らない?」

「どうだろう……」

黙ってしまったトモハル、右往左往ミノルは二人を交互に見てい

た。ミノルは、アサギが好きだった。トモハルも、同じ様にアサギの事を好きだと思っていた。

けれど、何故、言わないのか。解らないって、何だ。嬉しいのか。憎らしいのか、はっきり言わないトモハルにミノルは苛立つ。だが、トモハルには身に覚えのないことだった。

思案している様子のトモハルに、トーマは静かに語りかける。聴きたいことは、アサギの事ではなかった。

「じゃあ、聞き直すけど、どんな子が好き？」

「……どんな子って……可愛い子、かな」

「じゃあ、アサギじゃねーかよ」

ミノルが口を挟む。自分で『アサギは可愛い』と断言したことに気付いていないミノルだが、トモハルは上の空だった。普段ならば直様トモハルのツツコミが入りそうだが今は、意識が飛んでいる。

「アサギは、可愛いよ。でも、俺……好きな……かな。ミノルはアサギとどうしたいわけ？ 付き合って何したいと思う？」

「俺は……手を繋いでぶらぶらしたりとか、一緒にゲームしてえけど。料理も上手いって聞いたから手料理作ってもらったりとか、さ……って、な、何言わせんだーっ!？」

素直に、口にしてから青褪めて告白まがいの事をした事実を狼狽するミノルだったが、トモハルはやはり聞いていない。わめいているミノルなど放置して馬車の布を見つめたまま。

「俺の……好きな……子？」

トーマの額が、ぴくり、と引き攣る。虚ろに、囁いたトモハルの様子を見つめながらトーマは一人そつと荷物を手探りで探した。

「俺の、好きな子は……まだ……いない……よ……」

凝視していたら、トモハルは薄く微笑んでそう答えを出す。ミノルは未だに弁解を一人で行っていた、誰も聴いていなかったが。

それが、答えか。トーマは大きく溜息を吐いた、見当違いだった気もするが、あながち外れていなくもない。

「ただ」

「？」

急に、トモハルの口調が変わった、どこか懐かしそうに愛おしそうに優しくそんな笑みを絶やさず。

「ふわふわの、髪で。気紛れな仔猫みたいな大きな瞳で魅惑的な華奢な身体で、お姫様みたいな女の子。

ただただ、その子がその子らしくいる為に、傍にいたくて護りたい……って。

お、俺、何言ってるんだろ」

乾いた声で笑ったトモハルだったが、今の言葉を聞きたかったのだ。照れたように苦笑いしたトモハルは、それでも何故か懐かしそうに唇に指をあてて何かを思い出すように……静かに微笑む。

「まあ、誉めすぎだけど」

小さくそう呟いたトーマ、瞳を軽く閉じ、息を吐いた。瞬きを、三回ほど。一呼吸置いてから、一言。

「僕、次の分かれ道でバイバイするね」

唐突に、そう告げる。すっとんきょうな声を出したミノルとトモハルに、マダーニがゆっくりと目を醒ましていた。

「目的の場所が違うんだ、僕はジョリロシヤに行くよ。残念だけど、さ」

手際よく、あれほど散らかしていた荷物を片付ける、もうすぐ分岐点だった。

「そ、そっか……寂しくなるな」

ミノルの多少落胆気味の声、トーマはからかうように笑った。

「頑張りなよ、レベルは上がったはずだよ。何しろ僕直々に教えたんだから、あ、これ……」

トーマは徐にミノルに何かを手渡した、掌サイズの珠だった、さほど重くはない。綺麗な紅、高価な宝石にも見えるのだが。不思議そうにそれを眺めていたミノル、トーマはマダーニの傍に近寄りながらミノルに声をかける。

「それはさ、簡易な魔法球だよ。僕の火炎の魔法が閉じ込めてある。

威力的には中の上、ミノル君の発動魔法よりは威力が上だ。危機を感じたら使いなよね」

「すっげー！」

「一度きりだから、ここぞって時にね」

「マダーニにも、トーマは手渡した。」

「非力なおねーさんには、これを。接近戦になると危ないからさ、一度きりだけど武器に豪腕の加護が付加できる。大男でも投げ飛ばすことが出来るから、敵に攻撃を当てられればこちらの勝ち」

葉に包まれている、粘着力ある白い液体だった。香りは、ない。

これを手に塗って使うらしい、初めて見る代物に目を白黒させるマダーニ。

「馬車のおにーさんには、これね」

これも、葉に包まれている粘着力のある液体だった、色は深紅だったが。

「武器に塗ると、火炎の属性になるよ。火炎に弱い敵が出たときに使うと良いよ」

忝い、とライオンは丁重にそれを受け取った。確かに魔法が有利なことも多々ある、これは嬉しい代物だ。

最後にトーマはトモハルに向き直った、微笑んでいるトモハルに、トーマは無表情で杖を手渡す。

「……回復の杖だよ、一度僕が使ったから残る回数はあと四回。神経を集中して使うことで人を結界に入れて治癒出来るんだ。威力はトモハル次第、詠唱なしでも治癒出来るから危機的状況に陥った時にね。ちなみに四回使うとどうなるのか知らないけど、とりあえず効果がなくなるから数、忘れないでよ。砕けたり折れたり破裂してくれれば、流星にわかるけどさ」

「へえ、解った。助かるなあ、魔王戦には欠かせない回復アイテムだ」

嬉しそうにそれを受け取ったトモハル、さり気無く、渡す瞬間にトモハルの手にトーマは触れた。

ピン……

眉を顰めたトモハルとトーマ、静電気が走ったのだ。思わず手を引つ込めて苦笑いするトモハルだが、トーマには承知の上だった。

「……じゃ。そろそろ行くよ」

「……そっか」

「バイバイ。”またね”」

心痛な面持ちのミノル達は裏腹に、飄々とした様子で止まった馬車から下りたトーマ。看板の前に立った、向かう先はジョリロシヤだが実際別にどうでもいい地区だった。本音はこのまま共にジョア
ンへ行きたいが、”潮時”なのだ。

「ありがとな、色々」

「ん、気にしないでよ。まあ、また何処かで会えるからさ。数年先くらいに」

軽々しく言ったトーマだがミノルは苦笑いしざるを得ない、この惑星の住人ではないミノルだ。

「……言ってなかったけど、俺達この世界の住人じゃないんだ。だから、会えな」

「会えるよ、数年後に」

ミノルの言葉を上から被せる、断言したトーマ。魔王を倒す旅が数年立つても終わっていない、ということか。自然にそう捕らえてミノルは鼻で笑ったが、トーマはいたって普通だった。

「敵かもしれないけど」

真顔でそう告げるトーマ、苦笑いして本気に取らないミノルだが、トモハルは神妙にトーマを見ている。その視線に気付いたトーマは肩を竦めると、溜息混じりにトモハルにも告げた。

「……あんたの仔猫は手強いよ、すぐに爪をたてて牙を剥くよ。可愛いとは思っけど、僕は好きじゃないなあ」

「え」

「じゃ！ 無事、魔王を討伐できることを願って」

トーマは笑いながら、それだけ告げると早々に宙に浮かぶ。まる

で、数週間前会った時の様に、不意に忽然と。闇夜の月ではなく、眩しく痛い陽射しの太陽に照らされて。雨は止んでいた、天候が変わりやすい地区なのか晴れ渡った空。

別れの挨拶もままならず、トーマは消える。馬車から慌てて降りた四人を残して、トーマは掻き消えた。

「俺の……仔猫??？」

謎めいた言葉を残されて、トモハルは首を傾げる他ならない。

「ほんつと、謎な子よね」

「でも、悪い奴じゃねーよ」

落胆気味のミノルの肩に思わず手を添えたマダーニ、急かすように馬車に乗せる。感傷に浸っている場合ではない、ジョアンは目と鼻の先だった。

その日の夜半、四人は久し振りに街に辿り着いた。ジョアンである。質素な何の変哲もない街だ。山の麓にある、旅人達の宿場町ではない。旅人到着、というだけで街の人々は一斉に近寄ってきた。ここから、アサギの武器であるセントラヴァーズが奉納されているピョートルまでは山を越えれば良いだけだ。久方ぶりの客人に、大層なもてなしを受ける羽目になり恐縮している四人は苦笑いしつつ休息をとることにした。

宿は何件か存在するが、皆自宅と併設されているだけで普段は客など泊める事がないらしい。特にここ近年、客足が遠退いているとのことだ。四人は入口から最も近い宿に世話に成ることになった。馬車を預け荷物を持って宿へと進む。部屋は二部屋、マダーニが一人で使い、男達は三人で眠ることになる。

慣れない旅で疲労しているミノルとトモハルは直様ベッドに倒れこみ眠り始めていた、ライアンとマダーニは装備を軽くして街の散策にあたった。一時のデートのようなものだ。

自給自足の生活を送っている街なので、薬草の質はなかなか良く種類も豊富だった。疲労回復に効果のある薬草を買い込み、マダー

二は店を物色する。店と言っても皆家の前に簡素な手描きの看板が
かけてあり、玄関で欲しいものを見せてもらって購入するだけだっ
たが、それでも売ってもらえるだけ有り難いことだった。

武器職人、というほどでもないが鍛冶屋もある。普段は農具など
の手入れをしているらしいが刃こぼれしていた剣を、鍛え直しても
らうことにして預ける。別に混みあっていない為、旅立つまでに修
理は可能らしい。これまた、有り難い事だった。

街は、皆素朴で笑顔だった。歩けば挨拶してくれるし気分は良い、
そこまで魔物にも脅えていない様子である。ライアンとマダーニは
肉の串焼きを売っている出店を見つけたので二本買い込み、ワイン
を一杯購入して街の広場のベンチに座り込む。

準備はこれで整った、あとは体調の回復だけだ。旅立つ前に購入
する食材等も発注してきたし、宿で出される夕飯まであと数時間程
度。眠りにつくだけである。

肉を齧りながら、ぼそ、とマダーニは呟いた。

「ねえ、ライアン。私達何処まで進めるかしら」

「勇者は、見つけ出した。正直マダーニは戦闘から外れても文句は
誰も言わないぞ？ 本来の目的は母親の謎の解明と父親の搜索だろ
う」

「今更？ ミシアの占い結果でも勇者ちゃん達は必須なことだし、
ほいほいここで下りるわけじゃないじゃない。ただ、この間のトロールで
も苦戦したものの、魔王つてどのくらいの強さなのかしら」

「少なくとも、魔王ハイには歯が立たなかつたな」

「勇者ちゃん達に重荷を与えてしまいそうで正直怖いよね、祭り
上げられているけれど、まだ子供」

「それは、思う。本来ならば全く関係ない生き方をしている子供達
だろうに」

「魔王ハイの目的が理解出来ないのよね、トーマちゃんの言い方だ
とアサギちゃんは無傷でしょう？ 何がしたいのかしら」

「その辺りをつ突っ込んで訊いて置くべきだったかも……。さて、

少し整理してみるか？ 最終目的は魔王斬滅だ。分岐として、マダー二の両親に関わってきているらしい”破壊の姫君”についての捜査が必要……と」

「トーマちゃんといい、私達の前に現れた魔族達も気にかかるわよね。他のみんなは今何処で何をしているのかしら。ピョートルに到着して、誰かから手紙が届いていればいいけれど」

軽くマダー二は肩を竦める。

主要都市には、手紙通達の転送陣が施されていた。この街には存在しないようだが、普通は街のほぼ中央に位置している手紙受取所に自分宛のものがないか確かめる。放置していても住所さえ解れば、例えば家ではなくとも滞在先の宿にも届く。

人間の転送には高等技術が必須だが、手紙だけならば失敗しても誰も死することがない為幅広く使われていた。死する事がない、と軽はずみに言っても、危篤の情報やらもあるので一概ではないが。

ピョートルならば規模が大きいのでアリナかブジャタ辺りから朗報が届いていても、おかしくはないのだ。それに期待するしかない。無論マダー二も到着次第、確実に場所がわかつているブジャタには手紙を送りつける予定だった。

夕暮れになり、2人は並んで宿へと戻る。旅の途中で芽生えた恋心など、儂いかもしれないがそれでも2人は寄り添っていた。宿の部屋が違うのは子供の勇者を考慮して、だ。非常に不服だったが。

「なあマダー二。全ての謎が解けて世界が平和になったら、俺の故郷で隠居する気はあるか？」

ぼそ、と呟いたライアンに、呆気に取られたマダー二は直様返答できなかった。何故このような場所でプロポーズされなければならないのか、もう少し時と場所を弁えて欲しい。軽く眩暈を覚えつつも、それでもこの気取らない男がマダー二は気に入っている。体格が良く、顔とて美形というわけではないが整っており何より笑みが零れしてしまう雰囲気が好きだった。

「平和になったら、隠居してあげる。ならなかったら、無理よ？」

「ならば全力で魔王を倒すしかない、ということだ」
笑いながら肩を抱き締めてきたライアンに、そつと頬を染めたマ
ダーニは小さく、頷いた。

宿での夕飯はこの時期に川で獲れるという魚料理だった、塩加減
良く焼いてあり白身が淡白で美味い。山菜の保存食に焼きたてのパ
ンと自家製のジャム、サラダはお替り自由だという。無我夢中で食
べた勇者2人は早々に宿の風呂に直行し、再びベッドに入り込む。
ライアンとマダーニは宿の家族と軽く談話しながら、ワインとチ
ーズを戴いた。勇者一行、とは言わない。ただの、旅人である。に
しては年齢がマチマチだが街の住人はそこまで気にしなかった。近
郊の情報提供をしてもらい、旅の情景を話す。閉鎖的な街なので、
外の情報には興味津津な様だった。

それでも、夜更け前には皆就寝した。もともと、夜更かししない
街である。打ち解けた仲になったので、気兼ねなくライアンは主人
と風呂も共にした。こういう生活が、一番楽しく心が裕福になれる
かもしれない。隠居したら、自分もこのような宿を行ってみたかっ
た。

世界が、平和になったら。

ライアンは、温泉から外を見つめる。温泉だがこじんまりとした
普通の風呂だが顔を出せば夜空が見えた、つまり冬は寒そうだ。夏
なので丁度良いが。

部屋に戻り直様眠りについたミノルと、寝付けないトモハル。何
度も寝返りをうつが、眠れない。昼間に長い昼寝をしていた為でも
あるのだがどうにも気分が昂ぶってくる。

「俺の……仔猫……」

トーマに言われた言葉が、胸に引っかかっていた。全くもって、
身に覚えのないことだった。

仔猫、という単語がそもそも何を指すのかが分からない。確かに

犬と猫で言えば猫がトモハルは好きだった、家では飼っていないが、母親が猫アレルギーなのである。

しかし、意味が違う。猫は猫でも仔猫、だ。トーマの指した仔猫は、猫では無論ない。

うつらうつらと、現実と夢の狭間で。トモハルは夢を観ていた、想い描いていた。それにしては、妙に生々しく。夢であつて、夢ではない。

目の前で黒髪の少女が、泣いている。大きな瞳に華奢な手足、か細い腰だが豊かで柔らかそうな、胸。ベッドの上で、泣いている。うつ伏せで、枕に顔を突っ伏して。深紅の短いスカートから覗く太腿が眩しくて刺激的で、トモハルは思わず赤面して視線を反らしていた。

それでも泣いている少女に耐えられず、躊躇いがちにトモハルはそつと手を伸ばし、少女の髪を撫でる。艶やかな髪は手触り良く、すー、と指を通すとさらさらと流れる。

「……………」

「……………」

少女が徐々に泣き止んだ、肩を震わせているが徐々に小さくなっていった。ゆつくりとこちらを向いて視線が交差し、思わずトモハルは後ずさった。反射的に、だ。

なんて、綺麗な女の子だろう！

胸が、弾け飛ぶように苦しく。全身の血が沸騰するように、熱く息をすることもままならず、ただ、少女と視線を交わした。薄ピンクの唇が半開きに、大きく開いた衣服から零れる程の乳房。扇情的で思わず、喉を鳴らす。大きな瞳は猫の様に強気だ、だがどこなく寂しそう。

「あ、あい、してるよ……………」
マ。

「ま……………」

思わず、トモハルはベッドから飛び起きた。辺りは暗闇だ、当たり前だ今は真夜中である。いつしか眠りにつき、夢を見ていたらしい。一瞬混乱する、部屋の中だったのでここが何処だが状況を把握するのに時間がかかったがそれどころではない。

「ま、って何ー!？」

絶叫。

「愛してるって、何だー!？」

咆哮。

「何事だ、トモハル!? 敵の襲来か!？」

寢床にいつも置いてある剣を引き抜き、同じく飛び起きたライオン。隣で不機嫌そうにベッドの中で寝返りをうったミノルは、頭をかきながら半目でトモハルを睨みつけていた。眠りを妨げられて、不機嫌そのものだ。

「今の女の子、誰だよっ!？」

混乱するトモハル、大声の為に不安になり隣室からマダーニも駆けつける。が、トモハルのただの寝ぼけである。赤面してしごころもどろに説明するトモハルに、呆れて三人は再び欠伸をすると眠りについた。

再び静寂の夜が訪れるわけだが、トモハルだけはやはり寝付けな
い。

「可愛い子……だったな……」

夢だ。記憶は曖昧で、顔もそこまで覚えていない。ただ、やたらと可愛らしい女の子だったことだけが記憶に残っている。頭から離れない。それこそ、自分好きな女の子だった。思い出して、赤面する。妙に色気のある美少女だ、異性に関心は確かにあるがあそこま
でリアルな夢は初めてだった。

けれど、再びトモハルが眠りにつけばまた、その少女の隣にいた。夢の中では冷静で、静かに眠っている少女の傍らに近づくと、そつと跪く。顔を、覗きこむ。長い睫毛に、形の良い唇。思わず口付けたくなってしまう。

そつと、震える指先で頬に触れてみれば、くすぐつたそうに彼女は笑った。無邪気な、仔猫の様に。

トモハルは、なんとも言えない幸福感に包まれていた。

「ミラボーの追っ手はまだ来ないかな？ 退屈凌ぎに僕が一層しておきたいけど」

ジョアンの片隅、木の幹から宿屋を見ているトーマ。月が美しく、目を細めて仰ぐ。別れた振りをして、追ってきていたのだった。共に行動はしない、と言ったが見守らないとは言っていない。何も変わり映えしないであろうジョリロシヤへ赴くよりも、こちらを監視していたほうが退屈しのぎに成ることなど十分承知だ。冷えた肉を齧る、夕刻にこの街の片隅の店で購入したものだ。買った時に軽く暖かなスープで身体を温めたが、夜食用に購入しておいた。串焼きの肉が数本と、硬くなったパンを齧りながらワインで流し込む。

「マビルとの、過去からの縁。もの好きな男もいるんだね……。僕は天地がひっくり返っても姉さん派だけだ」

縁の途中で、黒い靄がトーマには見えた。あれが何を指すのか、トーマには解らない。

先見の能力を持っているのは、アイセルだけではなかったのだ。誰にも告げることがなかったがトーマとて、アイセルより鮮明に未来が時折読めるのである。

「姉さん……アサギ姉さん。僕が必ず、傍に居るよ……」

近い未来、一部の破片がトーマには見えていた。

血塗れのトモハルは、囚われの身。ミノルとマビルは、トーマの敵だ。どういう状況なのか全く理解出来ないが自分は武器を構えて立っている。ミノルとマビルの表情が苦悶で何を指しているのか解らない。

「現・魔王など、意味を成さない。取るに足らない駒、なんだ。僕”達”の邪魔をしないでよ」

勇者の武器・セントラヴァーズ。それを手にし、アサギに譲渡すれば、世界が変わるだろう。

それまでは、僕がこっそり護衛して、あげるから。

トーマは食べ終えて月の光に、残忍な笑みを浮かべて微笑する。

最強の護衛

翌朝。ミノルは大きく欠伸をして、重たい身体をゆっくりと起こした。まだ、眠っていたいのが本音だ。久し振りのベッドは心地良すぎた、だが、直射日光が部屋に入り込み眩しいやら暑いやらで起きざるを得なかった。トモハルは、すでに起きて身支度をしている。最早昨晚のトモハルの寝言などミノルは覚えてなかったが、本人は覚えていた。

天井を見上げて呆けたままのトモハル、その光景がミノルにはただ寝起きで頭が回転してないだけだ、と見えた。起き上がり頭をかきながらトモハルの背を豪快に叩いて、軽く笑う。微かにトモハルは痛そうに顔を顰めたが、ぎこちなく笑うと「おはよう」と呟いた。

トモハルは覚えていた、夢で見た美少女を。顔までは思い出せないがとにかく初めて見る美しさの女の子だった、見ているだけで胸が締め付けられて苦しくなった。

不意に思い出した、トーマの昨日の言葉を。「仔猫」である。

「……可愛い子、だった」

僅かに口元に笑みを浮かべて、トモハルはくすぐったい気分のまま朝食を食べる為にミノルの後を追う。手にしている剣がやんわりと光っていることになど、気付くことなく。

焼きたてのパンに手作りの林檎ジャム、スクランブルエッグに自家製ベーコン、サラダ。食後に紅茶を戴いてから部屋に戻り、旅立ちの準備だ。

荷物の最終確認でライアンとマダーニが消耗品のチェックを始めたので、ミノルとトモハルは二人で出歩くことにする。束の間の休息だった、のんびりと歩き出す。旅が始まればほぼ馬車の中、こうして歩くことすらあまりない。ぼんやりと街、というには小さなジオアンを歩き周る。

「ここにいと魔王の影なんて見えないけど」

穏やかな街だ、芝生に転がり二人で昼寝に入る。今だけ、今だけ。疲れた体と心に、安らぎを。陽射しが強くて熟睡は出来なかったが、転寝するには十分だった。ライアンとマダーニが探しに来てくれたので、二人は起き上がり衣服についた草を払う。手頃な店で昼食を食べれば、直様再び旅が始まる。

「ジョアンからの道だがな、結構な山岳地帯を越えないとピョートルに辿り着けないんだ。今まで以上に険しく過酷な道だから覚悟しろよ。途中で馬車を置いていかねばならないかもしれないから、な」

食事をしながら、ライアンからの宣告に思わずむせるミノルとトモハル。覚悟はしていた、何しろ街から周辺を見渡せば岩肌が酷く露出する山岳に囲まれていたからだ。カレー風味の煮込み料理を食べながら、苦笑いしたトモハルと、素直にげんなりと肩を落とすミノル。徒歩など、想像しただけで嫌気が差す。

何しろ、地球に居た頃は電車に自動車、自転車があった。徒歩など、通学くらいなものだ。おまけに、徒歩となると荷物はどうするのか、担いで山を越えるのか？ 思わず、馬車が通ることの出来る道がありますように、と祈らざるを得ない。

最近は、物騒なのでこの道を使いピョートルへ向かうことは少なくなっただけ。それを聴きますます嫌気が差す勇者二人だったが、文句など言っただけはいられない。目と鼻の先に目的の物が待っている。

日が高くなつた頃旅立つ四人、休んだ馬達も元気そうだ。体力の消耗を考え、数時間おきに交代で仮眠をとるという方法へと変更した。まずはマダーニが睡眠に入る。その間、ミノルとトモハルはライアンから馬車の扱い方を習う事にした。

夕刻まで、それは続いた。

二人が慣れてきたので、簡単な夕食を馬車から下りて摂る事にした。夏だが、流石は山、空気が冷えてきている。ジョアンで購入した肉のスープを手短に作り、それを平らげれば再び馬車に乗り込ん

だ。

食事で幾分か温まったが、やはり肌寒い。が、まだ毛布に包まれば暖かい。次いでミノルが就寝に入る、マダーニが後方の注意を、トモハルとライアンは夜通し前方に注意を。

夜半過ぎにミノルとトモハルが交代した、寝ぼけ眼でミノルはライアンの隣に座る。

魔物の奇襲は、数日間何もなかった。意外だった、物音に神経を研ぎ澄ませばそれは鳥や動物達である。

……と、いつもの。

聴いたものが身を振るい上がらせるほど重低音の音が、部屋中に反響している。

「ええい、忌まわしい小僧めがつ！」

「やはり、ミラボー様……私が」

魔王ミラボーは手を出さなくなったのではなかった、確かに妨害していたのだ。トーマに破壊された水晶球の代わりを、と何度か魔物をライアン達へと派遣している。再び位置を把握し、水晶球に映し出すために、だ。

が、悉く映像にはトーマが映り、数分後には途切れてしまった。

ミラボーの魔力を閉じ込めた水晶球と、それを結ぶ映像転換装置、それさえ付近を飛びまわる飛行型の魔物に装着出来れば映像が容易く流れ込んでくるというのに。

自信過剰に笑みを浮かべて、挑発するかのようトーマの笑みを映し出した直後に、毎回水晶球は弾け飛んでいた。

「なんなんだ、あの小僧はっ」

「ですから、ミラボー様。私に出撃命令を」

「エーア、お前には別の大役が待っておるのだ、今行かせる訳にはいかなのだよ」

歯軋りしながら、ミラボーは重たい巨体を引き摺り、喚き散らす

毎日である。

「ええい、こちらに待機しておる飛行部隊を全てあの小僧に注ぎ込めっ！ 誰か首を持てい！」

「しかし、ミラボー様。あまり派手に動きますと他の魔王に悟られてしまいます。大掛かりな飛行部隊は……」

「悟られん程度の小型の魔物を3星から取り寄せよ！ 複数回にわたり、小僧へと派遣するのだっ」

そうなのだ、他の魔王はミラボーの計画など知らない。こうして勇者達の状況を把握している事すら、言っていない。咎めを受けるかどうかはともかく、今は争いの種は避けておきたいのだ。

トロールは元々、ミラボーの駒ではなく付近にいたトロールを洗脳し差し向けただけである。3星には強大な魔物も数多く存在したが、派遣するには目立ちすぎた。

だが、実際手頃な魔物ではトーマに全滅させられるのが目に見えるのだ。使い捨ての魔物でも、勿体無い。悔しいがトーマの實力を認めざるを得なかった。

こうして、毎回一匹の飛行魔物と、それに乗った死霊騎士がトーマへと向かっていったが、惨敗だ。

「何、拍子抜けだね。魔王ミラボーってこんなもの？」

トーマから、ご丁寧にそんな台詞までミラボーのもとへと届けられる。血管が切れそうな勢いで、ミラボーは喚き散らすのだった。激しい屈辱である、本来の目的を忘れそうだった。

更に。

「ミラボー様！ アレク殿が訪問されております。……魔物派遣が露見したのでは」

「ええい、こんな時にっ」

切れそうな血管を無理やり押し込み、ミラボーは作り笑顔で汗を拭きつつアレクを部屋へと招き入れた。無論、破壊されている水晶の破片など既に抹消済みである。

にこやかに知らぬ振りして微笑んでいるミラボーと、普段通り

の無機質な表情で何を考えているのか理解出来ないアレクが真っ向から向き合う。人間のエーアも身を潜めていた、部屋に居るのは骸骨の騎士達が数体だ。

物怖じすることなくアレクは口を開く。

「先日から、妙に魔物が魔界イヴァンから飛び立っているらしいが、何か？」

「うむ、人間を襲いに行っているわけではない。飛行部隊故に、長距離の訓練が必要なのだよ」

「そうだったことは、貴殿の星でお願いしたい。無意味に我らの配下が過敏になっっている」

「すまんかったのう。控えよう」

ミラボアの返答に負に落ちない様子のアレク。それはミラボアにも手に取るようにわかったが、今は穏便にことを進めるしかなかった。これ以上詮索されても不愉快であるし、立場が危うくなる。苦渋の判断でミラボアは立ち去るアレクを睨みつけた、微かに身体が震える。

これで、派遣が出来なくなった。それもこれも、あの小僧のせいだとますますミラボアは憎悪に燃えるのだった。今すぐにも自分が出向き、抹殺したい衝動に駆られるがそれこそ問題である。魔王が惑星クレロを移動するとなれば、アレクの警戒が計り知れないだろう。人間に侵略をしていないアレクだが、魔界の平穩には目を光らせ嚴重に注意を促していると思えない。一応魔界の王である。勇者達の映像が見ることのできない、苛立ちがミラボアを襲った。勇者の行動を把握してこそ、優越感に浸れるというのに。齒軋りを感じ切り音を立ててすれば、傍らでエーアが無表情でそんな様子を見つめていた。

ミノル達を追撃する魔物たちを、トーマが事前に殲滅しているのだ。おかげ様でミノル達が遭遇しないわけである。実戦も大事だが、今は身体を休める事そして魔法に全てを集中する事を優先してもら

いたい、というトーマの願いからだった。

そして、早くピョートルへ到着して欲しいという願いも籠められている。

「セントラヴァーズ、セントガーディアン。4星クレオの対の勇者が所持する武器。ガーディアンをトモハルが所持していたのなら、ラヴァーズはアサギ姉さんのモノ。」

まあ、妥当だよな。どんなカタチしてるのかは、知らないけど……早く届けてあげなよ」

足元に転がる、肉片を踏みつけながらトーマは小さく呟いた。もう、幾度もミラボの手先を撃破した。

最近数が少なくなってきたのは表立って動けなくなってきた為かな？ 不服そうにトーマは肩を竦めた。それも暇つぶしにならなくてつまらないが、そろそろ飽きてきたというのも本音である。もっと自分の能力を開花させられるレベルの魔物の襲来を期待していたが、全くだった。雑魚相手では退屈だ。

瞳を閉じる。見える未来を、視る。

予言家の末裔であるアイセルの見た未来、アサギが魔族達を束ねている……らしい。アサギの前に、平穏な世界が開けられているというものだった。

勇者で、魔王。

ありえないが、だからこそ、クレロ全てを掌握できる立場にあるから成せること……なのだろうか。

謎は多く残るが解っている事はアサギの隣に、トーマが君臨しているということだ。アサギを助け、常に寄り添っていることだけは確実に解っている。

問題は、トモハルが血塗れで、マビルとミノルが武器を構えてこちらを見据えているという点だった。

勇者であり、魔王であるアサギと対峙しているらしい。

「まあ、僕の出来る事は姉さんの隣に常に居る為に今以上に力をつける……それだけだよ」

太陽の熱で温められた岩の上に寝転がり、トーマは眠る。持ってきていた食料など、底をついてきた。そろそろ、離れなければいけない時期である。トーマは木の実や狩りで飢えを凌ぐという野性味溢れることが、苦手だった。

どのみち、ミラボーからの援軍とてこれ以上は来ないだろう、あとは付近の魔物をどうミノル達が倒すかだ。遠く離れた位置のミノル達の気配に安堵しながら、トーマは微かに笑みを浮かべると夢に沈んで行った。

トーマ……ミノル達をお願いね……。大事な人達なの” うん、解っているよ姉さん……。”

馬車の扱いもそこそこに、魔力の使い方も格段に上がったミノルとトモハルだが、実戦は迎えていなかった。敵の襲来で使うのと、練習で使うのでは分けが違う、実戦で上手く発動できなければ意味がない。だが、魔物が出てこないのだから仕方がない。

流星に眉を潜めるライオン。不審に思わないほうが無理な話だった。

「加護がかけられている筈の街道には、わんさか魔物が。この人気が少ない山岳で魔物が出ないとはどういうことなんだか」

「まあ、旅が順調に進むから幸いだけれど、確かに妙よね……。何処行っちゃったのかしら」

「トーマ君が加護の魔法でもかけたとか？」

「私も最初そう思ったけれど、違ってみたい、私が感知出来ないの」

「そうなのか。ミノル達も身体を少しは動かしたんだろうなあ……。」
「ちらり、と後方の勇者二人を見た。ミノルは今は睡眠時間だ、トモハルが後方の警護にあたっている。そろそろ陽が沈む、そうならミノルを起こしてマダーニが睡眠に入る。」

トモハルは早々に松明の準備を始めた、陽が沈めはこれに火を灯し道を照らす。火は、魔法の練習にもなる為ミノルとトモハルの担当だった。

「大分手馴れてきたな、トモハル」

「うん、任せてよこれくらい」

手際よく布を木に巻き足しアルコールに浸すトモハル、満足そうにライアンは頷く。

「今日はそろそろ何処かで馬車を停めて、野宿だ。予想より馬の疲労が大きい」

「了解、じゃあ、結界の準備もだね」

率先して荷物を用意し始めるトモハルに、眩しそうにライアンとマダーニは互いに笑みを零すのだった。

近辺が暗くなる頃、馬車を止められそうな位置を早々に発見したライアンはそこで停める。ミノルとトモハルが結界を張り、マダーニが夕食の準備だ。結界と言っても二人は魔法で張ることなど出来ない、用意されている魔よけの草木や道具を使って陣を描くだけだ。

二人の作業をマダーニが横目で監視しながら、ジオアンで調達した小麦を水で練って、湯の中に放り込んで蒸す。干し肉を茹で戻し、そこらの山菜と煮込んでスープに。質素だが暖かい食事はやはり、落ち着く。普段食べなれている干し肉でも、こうするとまた別格だ。マダーニの調理法の腕が良いこともあるが、地に足をつけていられるというのは本当に心地が良かった。満天の星空の下で、地面に横になる。少し肌寒いが焚き火の暖かさが心地良く、馬達は直ぐに寝静まった。

ミノル達も明日からに備えて眠りへと誘われたのだが……夕刻まで寝ていたミノルは多少目が冴えていた。一人瞬きしながら、零れ落ちるような星々を見ていた。

アサギは、どうしているだろうか。

トモハルが律儀に陽が廻るのを数えているので、離れ離れになつてから早一ヶ月が経過していることなど百も承知。地球はもう、八月のはずである。夏休み真っ最中だ、どうなっているのかは解らないが。

ふと。脳裏に何か響く気配が過ぎる、思わずミノルは上半身を起

き上がらせる。

「ミノルちゃん、静かに……」

マダーニが起き上がる、ライアンが、剣に手を伸ばす、トモハルも起き上がった。結界に何かしらの反応が出たのだ、結界は焚き火を中心に半径三メートル、馬車も隠れるほどだが。

ガサゴソ、と何か大きな生物の音が聞こえる。

「ようやく、お出ましか……さて」

ライアンが見えない敵に額に汗を浮かべつつ、静かに起き上がる。その頃遠い場所で、トーマも跳ね起きていた。瞳を閉じて右手で垂直にミノル達の方を指せば。

「ありやりやー、何かに遭遇しちゃったね？ でも、まあ……それくらいなら倒せるよね、でないと先に進めないよ」

遠見。

魔物が何か解ったトーマは軽く胸を撫で下ろしていた、そこまで強敵ではない、数は多いが。

遠くから、見据える。何かあれば駆けつけるが、駆けつけなくても大丈夫だろう。再び眠りに入ろうとした矢先だった。

ギギ……

トーマの後方から何かが飛び出してきた、一瞥する間もなく「うるさいな、邪魔しないでよ」不機嫌さを露にして吐き捨てる。右手を振り下ろせば、襲い掛かってきた羽の生えた蛇を吹き飛ばしていた。

最期の刺客だろうか、毒を所持しているらしい赤まだらの飛び蛇だった。妙に数が多いが、指揮官らしき人物がいない。

トーマは前方に集中しながら、両手を胸の前で交差させる。すいと腕を伸ばし水を掬い取るように腕を舞わせながら詠唱を。両手を一気に地面に叩きつければ、地面から炎上、蛇たちを一網打尽である。

焼かれながらも飛びかかってきた蛇がいたが、トーマの前には皆無だった、弾き飛ばされるのみ。なんなく、トーマは瞳を細める。

静まり返った周囲に大袈裟に肩を下ろすと、再び瞳を閉じて眠りに入った。

「トモハル、威嚇で光を」

「はい！」

両手を掲げ、トモハルは魔法を発動した、光の魔法だ、攻撃性はない。明るくなった周囲に、ミノルが啞然と口を開く。

「えーっと、何だ、あれ？」

「うーんと、何だろう」

トモハルも、奇怪な姿に言葉を失った。不気味ではあるが、恐怖は感じない外見だ。

「追い払うだけでも良いだろうな、敵意はなさそうだ」

「おそらく、ヨーウイ。トカゲに見えるけど鱗が硬くて蛇っぽい尻尾があるし……何より脚だか手だかが全部で六本。そこまで凶暴な魔物ではないと思うのだけど……」

光に一瞬怯んだが、魔物は逃げない、じりじりと妙な脚で近寄ってくる。マダーニは軽く溜息を吐く、逃げないのなら、相手の目的は一つだ。

「空腹なんでしょうね、夜行性よ確かアレ」

「なるほど、俺達は夕飯か」

「当たり前」

暢気なライアンとマダーニの会話に、ミノルとトモハルは身震いだ、大きさ的には中型犬か。動きは遅そうだが、光る目から数の多さを解らせる。

「トモハル、ミノル。馬を護れ、結界の中から出すな」

「了解！」

なるほど、空腹ならば狙うのは危害のなさそうな馬だろう、ミノルとトモハルはライアンに言われた通り馬に駆け寄り武器を構えた。落ち着かせるようにトモハルが馬達を中央へと背を撫でながら誘導、水を与えている間にミノルが先制攻撃だ。

「行くわよ、ミノルちゃん！ 深追いはしないで、蹴散らすだけよ！？」

「分かってる！」

巡る鼓動、照らす紅き火、闇夜を切り裂き、灼熱の炎を絶える事無く。我の敵は目の前に、奈落の業火を呼び起こせ！」

火炎の魔法、中位。ミノルとマダー二は同時に同魔法を繰り出した、対角上に魔物達へと放つ。叫び声を上げた魔物だが、それで逃げることがなかった、余程腹が空いているのか。

「こりゃ……本格的な戦闘だな」

ライアンが結界を飛び出し、一匹を切り裂いた。が、思いの外皮膚が硬い。思った以上に深く刺さらなかったのだ。舌打ちし、後方に戻った。

面倒な敵だ、属性も不明、火も恐れる様子がない。数匹は焦げた様だが、それでも向かってくる上に、焦げた仲間を食い散らかしている。

「と、共食い」

絶句したミノル、確かに焦げた香りは牛肉を焼いたようで、旨そうである。食べたいとは思えなかったが。

遠見していたトーマは、ぼそ、と呟く。こちら側の魔物は早全滅、前方に集中できた。といっても寝そべって有意義にはるか遠くを見つめているだけだが。

「ヨーウイ。結構皮膚が硬いから物理攻撃ならば脚を狙うのが良いね。あと、腹も皮膚は柔らかい。爆発系の呪文で吹き飛ばして、腹を刺して止めを刺すのが手っ取り早いかな。奇怪な格好だから、起き上がるのに時間がかかるし」

……亀のようなものかなあ、と独り言。

そこに気付けば、早々に戦いは終了するだろう、所詮敵ではない筈だ。

マダーニが弓矢で脚を狙ってみた、脚には刺さるところから皮膚が柔らかい事に気づく。が、剣で脚を狙うのは位置が低すぎて逆に困難だった。

注意すべき敵の攻撃は蛇のような尾っぽに、鋭い歯である。ミノルの剣が、魔物に噛まれてしまった。

「ちい、放せよっ」

舌打ちし、我武者羅に引つ張るが、剣は折れた。魔物の歯が非常に強固だという証拠だった。啞然としたミノル、やはり市販品では無理なのか。

「っっていうか、どんだけコイツら歯が丈夫なんだよっ」

ミノルへとマダーニが剣を投げつける、残りの剣はもうない、これが最後だ。

「うーん、この歯で武器を造れたら……相当名刀に」

ぶつぶつ頷いているライアンだが、自身の剣も微かに刃こぼれしていた。マダーニの弓で脚の自由を奪い、尾っぽから切断しているがそれでは時間がかかりすぎる。

ミノルは剣を収め、呪文に全集中する事にした。前衛でトモハルが戦う中、トーマを思い出し、発動。

「呼びかけに応じるは無数の光、宙に漂う小さな破片よ。我の元へと集まり増幅せよ、眩い光となれ！」

発動の瞬間、トーマが口の端に笑みを浮かべる。そう、それだよミノル……と。

空中で爆発を起こした、岩の破片が周囲に散乱すると、同時に地中を張っていた魔物も吹き飛んでいく。ひっくり返ってもがいていれば、もうこちらのものだった。トモハルが躊躇なく剣で腹を突き刺す、びくり、と引き攣らせ絶命していく魔物。

荒い呼吸のミノルは、連打した魔法で著しく体力が消耗していた。

「よくやった、ミノル！」

「お、おう！ ったりめーだろ」

素早くトモハルが仕留めにかかる、マダーニも魔物の足元へと向

かつて同様に魔法を繰り返していた。
こうなれば、最早敵ではなく。戦闘は、終了だ。

トーマは愉快そうに笑うと、小さく拍手をした。一人きりの広野に響く拍手の音、なんとも物悲しい。

穏やかな表情を浮かべ、月へと向かうように宙を舞う。

合格だよ、もう僕がいなくても大丈夫だね、と呟いた。

自分は最も近いジョリロシャへ出向くつもりだった、何分……腹が減っている。

セントラヴァーズ

馬の興奮を宥めつつ、四人は死骸を後に、夜半過ぎ予定より早い出発をした。

「ピョートルに到着したら、剣の調達だな。ミノルの剣が……」

「ライアンのも鍛冶屋で直してもらわないと」

先程の戦闘での武器の損傷が著しい。トモハルの剣は”一応”伝説の神器なので、流石に刃こぼれしていなかった。

山を越えながら、思ったより道が整備されていた為予定より早くピョートルを目下に出来た一行。真つ白な城を眼下に見下ろし、逸る気持ちで急いで道を駆け下りた。雄大で壮大な城だった、ジェノヴァとはまた違った雰囲気のある。高く細い城は、どこか冷たく厳しさを感じた。山岳の中の為空気も冷えている、多少身震いしながら四人は進む。夏だというのに山々に囲まれて太陽が遮断されているようだ。

ようやく到着した一行は丁重に招きいれられた。直様休息したいが為に宿を手配し、馬車を預け夕方ぶりの宿での就寝だ。今は何も考えずにベッドに倒れ込む四人である、暫しの休息が必要だった。空気も薄かった為に、想像以上に体力の消耗が激しかったのである。死んだように眠り続けた、食事を摂る事すら忘れて。

武器が奉納されているのは、無論城内である。翌日四人は連れ立って謁見を王に申し出たが、許可は直様下りる事がない。当然と言えば当然だ、自分達の身柄を証明できるものなど何もないのだから。不貞腐れるミノルを宥め、武器の調達に専念することにし、城を後にした。無事ピョートルへ到着できたことを報告しようと、街の連絡塔へと出向いた四人。手紙は、大きな首都には連絡塔があり、そこから手紙を転移出来る。

アリナ達がブジャタ達へと送った手紙もそれだ、一旦ジェノヴァの連絡塔へ転送され、そこから宿へと届いた。

同じ様にライアンも、ジェノヴァ待機組みへと向けて手紙を書く。行き先はあの宿だ、時間はかかるが確実に届くだろう。『アサギは無事な様子、詳しくは合流後に。現在地ピョートル、謁見待ち』

その後薬草などを補充し、帰路を思索し武器を覗いた。

ピョートルは、女王国家である。全体的に男が少ないのは女性国家だからだろうか、男としては嬉しいやら、居辛いやら。子を成し繁栄する為に、一人の男が何人も女性を困える国でもある。男の人数が圧倒的に少ないのは血筋ゆえか、男が産まれ難いのだとか。

武器屋に入り、ミノルに見合う武器を探させた、身長と重量を考慮する。金は結構貯まっている、店で良い剣を探すがライアンの目に叶うものはなかった。ライアンの剣は鍛冶屋に預けてあるが、新品の購入ともなるとミノルやトモハルでは全く手が出せない。ライアンに一存してついて歩く。女性国家とはいえども、普通に武器は市販されている。寧ろ、女性用に軽いものが多く子供のミノルにはうってつけだった。しかしそれでも、ライアンはなかなか首を縦に振る事はなかった、妙なところで頑固らしい。

謁見まで暫しの休息になるわけだが、目と鼻の先に目指してきた武器があるというのにこの状態はもどかしい。翌日になっても、謁見の連絡は受けられなかった。

三日が過ぎようとしていた。暇を持て余して四人は公園に寝転がるしかない。

その頃城内では。謁見申し出は直様女王が見るものではなく、一旦は受付窓口嬢達が仕分けをする。膨大な量の中からようやく、ライアン達の手紙がついに開かれた。

その内容に目を見開き、窓口嬢は多少狼狽し上司の下へと足早に駆けて行った。当たり前だ、自分で判断出来る様な内容ではない。上司にそれを見せれば低く唸ってようやくそれが女王の下へと届けられていた。

「女王様。勇者と名乗る者が来ていますが、いかが致しますか」

「今ここに？ 申し出は何時のこと？」

「申し訳ありません、三日前です。判断に時間を要しました」

「……先日から、セントラヴァーズに”動き”が出ています。早急に手配を、本物でしょうから」

到着して三日目の夜半、ようやく連絡が届き宿で眠ろうとしていた四人は慌てて城へと向かう。頑丈な門を開き、長すぎる廊下と吹き抜けの天井を歩けば自然と背筋が伸びてしまう。

緊張した面持ちのミノルとトモハル、些かマダーニも不安そうだった。ライアンだけは慣れているのか、堂々とした足取りだ。

最も奥の部屋、派手に着飾っては居ないが、装飾品が細かく美しい為一目で高貴な人物だと解る女性が深く椅子に座っている。深紅の絨毯が引かれ、左右には警備兵が。恭しく跪いた四人、女王は真っ直ぐにトモハルの剣に注目した。

「本物のようですね」

女王が真っ先に口を開く、一瞬ライアンが訝しそくに顔を顰めたが誰も気付かない。

「対の武器を取りに来たのでしょうか？ ……それで、もう一人の勇者は？ その少年ですか？」

女王の視線の先にはミノルだ、気付いたミノルは慌てて首を振ると、宝石を取り出した。

「俺は、1星の勇者です。クレオの勇者ではありません」

目を細め、女王は宝石を見つめる。ぎこちなく震える手でそれを差し出したミノルに、やんわりと微笑する。肩の荷を降ろすと、女王は微かに微笑んだ。

「皆さん、力を抜いて。……ようこそ、皆様方、ピョートルに。」

クリストバルの神官様から勇者がこちらへ向かっているとの連絡は戴いておりましたが、何分、偽物が多い世の中。お待たせいたしましたね」

本物だと判ってもらえたようだ、安堵し、嬉しそうに微笑むミノ

ルとトモハル。

静かに立ち上がりながら、悠然と手を伸ばし四人を誘う女王、深々と礼をして四人は立ち上がると歩き出す。相変わらず護衛はついてしたが、しかたあるまい。

優しい声色だった、最初の印象とは違う女王の風格。年にして40代後半だが、それでも肌ははりが合って美しい。熟女の魅力満載である。歩きながら女王は当然の質問を口にした。

「神官様からは勇者様達もつと大勢居ると……」

「途中で、別れました。ここにありますが神器の所有者である勇者は、魔王に連れ去られたのです」

ライアンが颯爽と答える、嘘も欠片もない真実を隠すことなく。

「はい？」

女王の声が裏返った、当然だ。先程までの包容豊かな物腰が一転し、お茶目な天然主婦の様に立ち止まって物凄い形相で振り返る。

流石にライアンも一歩引いていた。

だがその反応に冗談ではない表情だと判断し、めまいを覚えながらも、女王は兵士に支えられ足を進める。コホン、と咳を一つ。

「それで……人数が少ないのですか」

「はい。彼女に武器を届ける為に、取りに来ました」

「その対のセントガーディアンがあるから本物だと解ったもの……、なければ信用できませんでしたよ。まあ確かに勇者の石があれば、信用しなくもないですけど。……ですが勇者の石など私は初見ですし本物かどうかの見分けなど出来ませんしね」

では、先程どうやって見分けたんだ！？ と突っ込みたくなったが一行は耐え忍ぶ。油断ならない女王の様だ、もっと厳しい人物かと思っていたが違うらしい。

地下に到着した。小さな部屋が一つだけだった。

檻も何もない小さな空間に、ぽつんと宝箱。床に深紅の布が敷いてあるだけでそこに宝箱が置いてある。蓋は開いたままだ、なんて物騒なんだとトモハルは青褪めたが。

「あのほうが、視やすいでしょう？ それに、見えない壁が張り巡らせてありますからね。大丈夫ですよ」

こちらの疑問などお見通しだった、穏やかに女王は微笑む。すい、つと空間に手を伸ばせばこつん、と何かに行く手を阻まれた。硝子の箱の中にあるような、そんな感覚だ。面白がってミノルはぺたぺたと掌を必要以上に壁に押し付けた、全く見えないが冷たい何かがある。一人パントマイムの修行が出来そうだ。

「解除は、私にしか出来ません。代々ピョートルの女王”のみ”が開錠出来ます」

言うなり、瞳を軽く閉じて何か呟いた女王。す、つと空気が揺れたと思えば、次にはすでに空間が消えている。ミノルの掌が、空気を掴んでいた。

「行きましようか」ゆつくりと歩き出す女王。兵達も初めての事だったので敬礼して緊張する、このような部屋には来たことすらなかった。無論、女王とて毎日ここへ訪れているわけではない、人生の中で10回も満たない。ようやく今、自分の代で護られてきた神器が宝箱から解き放たれる瞬間に立ち会えるのだと……身体が自然と震えだした。おずおずと進む一行のその先、宝箱の中には

「セントラヴァーズです、お持ち下さいませ」

「……はあ」

恭しく宝箱の隣に立ち、優雅に深く頭を下げた女王。

トモハルが、引き攣った。ミノルが首を傾げた、瞬きを繰り返す。ライアンが、言葉を失い目を白黒させ。マダーニが、手を伸ばす。

「武器、ですかこれ？」

トモハルが指差した宝箱の中身、どう、見ても武器ではなかったのだ。

腕輪だ。綺麗な細工の、煌く宝石がついた腕輪である。

だからマダーニが手を伸ばしたのだ、高価そうで美しく。

「セントラヴァーズです」

「えーっと、俺のセントガーディアンの……」

「そうです、そちらの神器と対です」

と、言われても。女王はにっこりと微笑んだままだったが、俄かにこれを武器と言われても信じ難い。

トモハルはしげしげと自分の剣を見つめた、不死鳥の彫刻が施された自分の剣である。

……と、対らしい、目の前の腕輪。どういう反応すれば良いのか分からずに困惑してライアンを見上げる。当然、同じく剣だと思っていた。

「これは……どのように使うものなのでしょうか？ 武器ですよね？ 防具じゃないですよね？」

ライアンが恐る恐る女王に尋ねる、穏やかに微笑みながら彼女は一言発した。

「謎です」

激震。

呆気にとられる四人だが、女王は動じない。青褪めた四人などそ知らぬ顔で語りだす。

「これは、文献の引用です。」

その昔、神と魔族とエルフ族が創造し人間に託した対の神器の片割れ。セントラヴァーズ。伝説の神器、勇者の武器。非常に特殊な素材で出来ており普段は何の変哲もない腕飾り。付属の石を”反応させる事が出来た者のみか”その稀な効果を発揮させられる、変化の剣。所持者の思い通りの武器形態に変化させられる、攻めの武器ありとあらゆる状況に合わせ変化させた武器を使いこなす事が出来るのならば、武器の申し子。セントガーディアンとは真逆の”攻”の武器

暗記している文面を、言って聞かせた。唸る四人に、女王は続ける。

「セントガーディアン。伝説の神器、勇者の武器。眩い光を放ちながら勇者が”勇者に目覚めたときにこそ”力を発揮する、守護の剣。護るべき者を強く想い続ける事によって、増幅できる特殊な剣。傷

つけるのではなく、全てを守り抜くこそが使命だと思えた者のみか手に出来る、”優”の剣」

トモハルは、自分の剣を改めて見直した。剣の形をしているこちらが守護の意味を持つらしい、思わず戸惑いを浮かべる。

「あながち、お前が回復係になったのにも意味があるんじゃないかなーの？」

「でも、アサギが前衛で攻撃するって想像できるか？ 逆なんじゃないのかな……」

ひそめく勇者達を優しく見つめている女王に、思わずライアンは尋ねた。この場で聞くべきか否か、迷っていたが一か八か、である。セントラヴァーズの形容を見てもう、やぶれかぶれな気持ちにもなっていた。

「あの、失礼を承知で申し上げます。……その、真に言い難いのですが、セントガーディアン。クリストバルで授かった神器ですが……」

「剣の使い手の貴方から見れば、取るに足らない剣だとおっしゃりたいのでしょうか？」

ぎくり、と硬直したライアンと、驚愕の瞳で見るトモハルとミノル。マダーニは未だにしげしげと腕輪を見つめていた、相当宝石が気になるようだ。不思議に眩い、見たこともない光を放ち続けているのだから仕方がない。暗闇でもこれがあれば明るくなりそうである。

「ど、どういうこと？」

うるたえるトモハル、申し訳なさそうにライアンは目を伏せると、首を横に振る。

「すまない、ずっと言えなくて。トビイ君とは語ったんだがその剣……俺達から見ればそこその威力しかない剣にしか見えないんだ。余程、トビイ君が所持していたあの剣のほうか」

「そう見えて当然です、そのセントガーディアンはまだ解放されていないのですから」

ライアンの言葉を叩き切った女王、一同絶句である。だがトモハルだけは心当たりがあるようで、神妙に手の中の剣を見つめる。

「若い勇者よ。その剣は貴方が目覚めたときにしか姿を現しません、今はまだ眠りの状態なのですよ。間違いなく、神器ですけれど。真正銘本物で間違いありません」

「……どうすれば目覚めるかは、俺自身の問題ってことですね？」

「ええ、物分りの良い勇者ですこと」

戸惑い気味だが、はっきりと女王を見据えて語るトモハルに、眩しそうに女王は笑う。

「その調子なら、解放も間近でしょう。貴方にしか解らない事ですよ」

「……はい、解りました、頑張ります」

「同様に、そのセントラヴァーズも。本来の所持者の勇者にしか、扱い方が解りません。きつと、選ばれた者ならばどうにか出来る筈です」

沈黙。啞然。

せめて説明書を……とミノルは言いかけたが、アサギならどうにか確かに出来そうな気がしてきた。それに確かにこの武器まがいの品は、アサギにとても似合いそうだった。

「と、ともかく！ アサギの武器は無事確保出来た！ 急いで戻ろう」

「は、はい！」

想像と違う武器との出会いに、多少面食らってはいるがこれが真実だ。丁重に宝箱から取り出す。

「夜半遅くにごめんなさいね、勇者様方」

「有難う御座いました」

丁重に礼をするミノルとトモハル、微笑ましく女王は笑う。クリストバルの神官から『勇者は子供』と聴かされていたので、驚きもしなかったが想像以上に何故か遅しく見えた。手紙には『本物ですが貧弱です』とまで追記されていたのだが。旅の中で成長したのだ

ろう。

「さあ、次はどうされるのですか？ 力及ばずながら私達もお手伝いしますよ」

「忝い」

跪くライアン、ミノルとトモハルは、手に入れたセントラヴァーズという名の腕輪をじっと、眺めていた。

「他の仲間達が、ジエノヴァに集合しているはずです。戻ってそこから合流し魔界イヴァンへと出向きます」

「まあ、遠いですこと。転送陣が上手く起動すれば良いのですが、やってみますか？」

顔を見合わせ、マダーニは小さく叫ぶ。

「あるの!？」

タメ口に思わず周囲から咳が飛んだが、おかまいなしだ。これほど嬉しい情報があるだろうか。

「アーサーが自身の星へ戻ったような、転移魔法よ。あるなら直様戻れるわ!」

「ただし、ジエノヴァの何処へ通じているか。最近使っておりませんので……。城内の何処かには位置しています、起動はする筈ですが。以前は頻繁に交流していたらしいのですが、私の代も先代も、先々代もからつきしですの」

何か、先々代にあったのだろうか？ そうとしか思えないが訊くのもヤボなので止めておいた。大方恋愛絡みに違いないとマダーニは推測する。

「危険を承知で、一か八か、か……」

選択の余地はない、四人は神妙な顔で頷くと無論申し出た。使わせていただきます、と。

ライアンの武器の仕上がりを待ち、直様出向くことにした。

翌日の夕刻、四人は転送陣へと立ち入る。万が一に備え、周囲を魔道師達が囲み女王も当然立ち会った。大規模な儀式である、ここ

まで待遇良くして貰えば、間違いなく辿り着けるに違いない。

「神経を研ぎ澄ませ、願うのです。流れに身を任せ、ジェノヴァを
思い。何処かへ逸れては一貫の終わり」

「はい！」

「解ったわ！」

「頑張ります、ミノル、覚悟を決める」

「わーってるよ！」

馬車はピョートルに寄付した、所詮頂き物である。四人は手を繋
ぐ、意識を飛ばす。アサギを想う、皆を想う。

転送陣、発動。

集結

その日は晴天だった、時の王は届けられる書類に目を通しながら傍らの妃に声をかけている。王妃はやんわりと微笑むと軽く頷き、自らも書類に目を通していった。

この国は、民の上に立つ国王も王妃も非常に優れた人材に恵まれていた。腹心達とて期待に応える稀な者達ばかりだった、幼き頃から民の上に立つべく恥じない様に教育されてきた賜物である。

「王よ！ 大変で御座います！ 地下牢に不審者が！」

ジェノヴァ城、地下の衛兵が咳込んで走ってきた。無論多くの人物を巻き込み、近衛兵やら、魔術師やらを連れ立って王に謁見だ。王と王妃は、二人して書類から目を上げると顔を見合わせる。

「ご推察の通り、地下牢には勇者御一行。トモハル、ミノル、ライアン、マダーニが一人用の牢の中に押し込められている。転移は完璧だったのが、到着地点が非常に問題だった。」

「どーして、こんな場所に転送するんだよっ」

マダーニの胸の感触を背に、多少にやけ顔のミノルだが牢獄に顔を押し付けられながら不服そうに叫んだ。窮屈である、というより、拷問に違い。ライアンの着ている鋼の鎧が、刺さるように痛い。

ギヤーギヤーミノルが喚けば、地下牢に響き渡る声。耳元で叫ばれトモハルは顔を引き攣らせるのだが、生憎反撃できる姿勢ではなかった。

「それは、万が一の為に御座います。申し訳御座いません」

牢の外で、多くの人物が平伏している中現れたのはどう見ても”王”だった。美しい装飾品の冠、毛皮のマント、立派な髭。子供が見ても王様以外にありえない井出達である。

「うっわ、典型的な王様だな、おい」

王と言え、これ。……的な容姿の王の登場に思わずミノルが零

してしまい、衛兵に槍を向けられる。素直に言葉が出てしまったのだが、侮辱の意味合いにとれなくもない。ミノルにはそんな気はないが。

喉元に槍先を突きつけられ、引き彎った叫び声を上げたミノルだが、その槍を王が下ろさせる。渋々と後方に控えた兵達に代わり、前に進み出た王は軽く頭を垂れていた。

「勇者様御一行に御座いますな？ ピョートルからの来訪者でこちらを扱える人物となればそれ相応の方の筈」

言うなり、牢が開けられる。ミノルが飛び出し大きく伸びをすれば、首を鳴らしながらライアンが出てきて王の前に跪いた。女王から預かった手紙を丁重に差し出す、それさえ読めば全て解って貰えるだろう。最も、この賢王にとってはこの現状だけで把握してしまっているのかもしれないが。

「ふむ、疑いはしないが間違はなくピョートル女王の印。このような夜更けに転送陣とは……さぞかしお疲れでしょうに。」

来客室の準備を！」

手紙を読み終えるが否や、夜更けにも関わらず王の態度は非常に有り難いものだった。

勇者の来訪ともなればそれくらいのことなのだろうが、四人は貴族が住まうような部屋に通され極上のベッドで一夜を過ごす。マダーニなど一人で一室、広すぎて笑いが込上げてくるほどだ。狼狽するライアンにミノル、トモハルだけは一人落ち着き払って出された果物や珈琲を啜る。

勇者と信じてもらえた事が大きいのだが、まさかここまで丁重に扱われるとは思ってもよらない。

「お前、度胸あるな」

「んー、家族旅行行くところというホテルとかに泊まってるし」

「……そっぴやお前の親父、社長クラスだったっけ」

「社長じゃないよ」

そわそわと広い室内を行ったり来たりしているミノルは、まるで

自室の様に寛いでいるトモハルに溜息交じりの尊敬の眼差しを向けていた。ある意味、度胸があると思う。

異世界にまで来て、地球での生活環境の差が出てしまったようだ。悠々とのんびり身体を休めるトモハル、ミノルはおずおずと広すぎるベッドに横になる。寝心地が良すぎて、違和感を感じたミノルはライアンと共に寝付けなかった。爆睡しているトモハルを、二人は羨ましそうに見つめる。

可笑しな話だが、二人には野宿のほうが快適に思えてしまった。寝室は花が飾られており、香りとして慣れない二人には苦痛にもとれてしまう。

翌朝、これまた多すぎる朝食が待ち構えていた。

「オマール海老、林檎と大根のココナッツ風味サラダに御座います。スープは蕪をポタージュに致しました。真鯛のポアレにはトリュフをふんだんにあしらって御座います。フィレステーキにはグリーンペッパーを強調したソースを」

「……………」

朝食！？　と思わず息を飲むミノル。起きてから通された広間では、畏まった服装の人々がテーブルに控えており、四人の着席と同時に水を注ぎ食事を運び出す。

並べられた料理を見渡し絶句するミノルと、優雅に食べ始めるトモハル。朝からこれは敵しい、と言いたいところだが美味しかったのでミノルは全て平らげていた。

「白い飯と味噌汁と卵焼きに漬物で俺はいーんだけど。あと焼き魚」
ぼんやりと満腹になった腹を擦りながら、ミノルは天井を見上げてぼやく。食べ終えてから言っても全く説得力がないが、本人は非常に満足そうだった。

そういえば、4年生の林間学校は現在の勇者達が全員同じクラスだったので楽しかったことをふと、思い出した。

アサギと同じ班だったミノル、アサギが注いでくれた味噌汁をありがたく飲んだことを思い出す。柿狩りをしたのだが、アサギは確

かあまり柿が好きではなかった。だが、ミノルが柿を「うっめー！」
と言いながら食べていたら、近くに居たアサギは一口齧る。二口齧
つてから、笑みを浮かべて美味しいそうにアサギも食べ始めていた。
「……………あれ？」

首を傾げるミノル、脚色した過去だったかもしれないが確かにア
サギはあの時にユキに「柿は苦手」と話していた。優等生様にも苦
手なものがあるんだな、と悪態ついた記憶があるので覚えていたの
だ。だがその後、アサギは美味しそうにトモハルと並んで柿を食べ
ていた。

「……………？」

デザートメロンを食べながら、ミノルは再び首を傾げる。

『お、おいしいね、柿って』

そう言っただけで話しかけてきたアサギを、思い出して赤面した。

『甘いんだね、知らなかった……………。果物なのに硬いイメージがあっ
て、それで苦手で』

「ん??？」

まるで、ミノルが美味しそうに食べている様子を見て食べた…………、
的なアサギが思い浮かべられる。思わずミノルは首を振る、そんな
筈がない。優等生だから残すわけにもいかななくて食べたのに違いな
い、と思いついたが妙に引っかかる。

「あー、のさ、トモハル」

「何？」

食後の珈琲を飲んでいるトモハルに、しどろもどろだがどうして
も気になるので問うことにした。

「アサギってさ、柿って好きだったっけ？」

「柿? ……好き嫌いはない子だから嫌いではないと思うけど。…

…あ、でもそういえば柿狩りの時に梨が良いって珍しく反対意見を
言っていたっけ。でも、柿食べてたよな、うん」

ミルクを少々入れて、混ぜながらトモハルはおぼろげにそう呟い
た。正解である、微塵も間違っていない記憶だった。

「そつか」呟いたミノルは、微かに口元に笑みを浮かべて出されたスイカを齧る。

ライアンが国王に一部始終を話している間、トモハルとミノルは剣の稽古である。堅苦しい事は大人のライアン達に任せ、あとは腕が鈍らないように練習だ。幸い城の庭を自由に使って良いと言われたので、二人はそこで組みながら剣を振る。

通り過ぎる人々が興味本位で集まってきた、恥ずかしそうにぎこちなく動くミノルと、反して意気揚々と剣を振る速さが上がるトモハル。人に注目されると自身の力を発揮するトモハルにとっては、居心地の良い環境だった。

城下町から、ケンイチ達が呼ばれて駆けつけてきたのは昼過ぎである。直様ライアンの報告から兵達が呼びに向かったのだった。久しぶりの再会に沸き立つ勇者達、ダイキ達も二日ほど前ジェノヴァに到着していた。アサギ以外が、全員その場に集結したのだ。

「ケンイチは何してたんだよ」

「僕は、剣の道場に通ってたんだ。結構上達したと思う、実戦はあんまりだけど」

「ダイキは？」

「船旅が多かったから、俺が一番戦いとは無縁だったかも」

短期間ではあるものの皆、腕を上げている事に間違いない。見れば互いに何か一回り大きくなった気がしていた、照れくさそうに笑い合う。思わず涙が込上げたが、皆辛抱していた。ユキは泣いていたが。

トビイが単独でアサギ救出に向かったことをクラフトが語るが、まだ、戻らない。アーサーとて、戻ってこないが確認の様子がない。

ブジャタがやってきたことで、最も位の高いブジャタとアリナが国王に改めて謁見した。主要都市ディアスの市長の娘とお付の者となれば、当然だった。堅苦しい事が苦手な事この上ないアリナにと

つては、地獄の時間帯ではあるが仕方ない。全てブジャタに任せて逃亡しようとしたが、無理だった。

その日の夜半によく解放されたブジャタとアリナは、皆と合流。城に滞在し、一等部屋を用意してもらっている勇者達である。ユキにいたっては全ての客室に感動し、昼間から輝かせて王宮内を物色。ミノルは出される料理を片っ端から食べつくしていた、美味しいのだ。

「今後は魔界イヴァンに向かう、船の手配もしてくださったからのお」

「万が一、トビイカアーサーがここへ戻った場合の手筈もしてくれたいよ。心置きなく出かけよう」

ブジャタとアリナからの報告を聞きながら、皆胸を撫で下ろした。全く、頭が下がる。国王自ら勇者達を支援、船を何艘も用意し兵もつけてくれるとの事だった。

よって、直ぐには旅立てないが魔界上陸など人類未踏、船の調達は有り難い。

「でも、一刻を争うと思うんだ……。俺達の船が用意出来たら先に出発したいんだけど」

トモハルが素振りしながら告げる、自分の剣は未だ輝いてはいない。準備が万全ではないのは承知の上だが、アサギが心配だった。幾ら、トーマに無事だと言われていたとしてもである。

「同感。国王に交渉してみる、参戦は後からでもイイと思うんだよね」

アリナが腕立て伏せをしながら、トモハルに同意した時点で決まりである。一行は決戦になるであろう戦いに備えるしかない。

国王から、様々な武器や道具も与えられそれぞれの使い方を聞くお宝が大量だ、目を白黒させて見つめている一行だが、恐る恐る手にとる。ケンイチとダイキの武器も支給された、余程の匠が造った剣だった。勇者の神器とまではいかないが、滅多に触れられないものだ。

薬草の調達も念入りにする、全員での行動だが大まかに三つの隊に別れて離れても無理なく戦闘が進められるように計画をした。それぞれ短期間でも共にしたメンバーで編成する、戦い方が判っているので楽になるだろうとのライアンの判断だ。

トモハル、ミノル、マダーニ、ライアンが先発隊だ。

ダイキ、アリナ、サマルト、クラフトが中間地点を護る。

そしてケンイチ、ユキ、ブジャタ、ムーン、ミシアが後方支援。

ミシアは最も非力と思われるケンイチ達のグループへと、再編されていた。魔力だけならば後方が最も強力になる、ある意味最強かもしれない。

「トビイ殿とアーサー殿がいれば……大変心強いのですけどねえ」クラフトがしんみりとぼやいた、が、いないものは仕方がない。皆も思っ居たが口には出さなかった。いや、出したら弱くなってしまう気がして言えなかった。

船の操作など自分達には出来ないの、船員の準備が整い次第一行は早々に出航した。神官達から祈祷を受け、国王から一心の祈りを受け。

残る船も準備が整い次第、順次出航することである。流石魔王戦ともなれば、国王の協力が強大だった。船出には国王すら出向いてくれて皆、敬礼してくれる。気を引き締めて、勇者達は小さいながらに剣を掲げていた。

船風を受けながら、先端でトモハルは髪をなびかせている。後方に、ミノルとケンイチ、ダイキ。

「アサギ……今、行くよ」

胸がそれぞれ、ざわめく。とりわけ、トモハルの胸が何故か高鳴っていた。

「仔猫」

「は？」

思わず口にした、仔猫。トモハルは怪訝な声を出したダイキに思

わず赤面して苦笑いすると、なんでもないと手を振る。自分でも説明が出来ないのだから仕方がない。肩を竦めたダイキの背を叩いてトモハルは促すと、自ら傍らの剣を手にして叫んだ。

「さ、剣の稽古だ！」

勇者四人、剣での組み手を甲板で開始した。トモハルの指示に抗うことなく従う勇者達。

そんな勇者達を遠目に見つめながら小声で囁めいていたのはアリナとクラフトだった。

「クラフト、ミシアのこと……」

「ブジャタ殿には話しました、大丈夫です」

要注意人物ミシアが自分達から離れ移動したが、先の隊にはブジャタがいた。クラフトが密やかに話を進めていた為、ブジャタとて了承済みなのだ。満足そうに頷いたアリナは、勇者達から視線を外して反対側の甲板に視線を移す。ミシアが、いた。

ミシアは、ユキ、ムーンとともに魔法の訓練中である。美少女三人、なんと華のあることだろうか。しかし、毒がそこに紛れている。

「さあ、正念場よね」

「ああ」

ライアンとマダーニは全ての荷物の確認と、現時点で知り得ている魔界の地形を頭に叩き込む。最終決戦は、海に向こうだ。武者震いが止まらない、誰もなしえなかった事をしようとしている状態だ仕方がない。

船の中、トモハルの部屋。アサギの武器・セントラヴァーズが静かにその時を待っていた。主人を、待っていた。その時が来るのを、静かに光を放ち待っていた。

勇者達が旅立って、一週間。

ジェノヴァに異国の者達がやってきた、知らせを受けて慌てて城から遣いがやってきて国王へと謁見。

アーサーである。

「話は聴いておるよ、3星チュザールの賢者アーサー殿とお見受けしたが」

「はい、恐れ入ります」

アーサー、ココ、リン、メアリ、セーラ、ナスカ。それぞれ、笑顔での謁見だった。ブジャタから3星チュザールの賢者アーサーの話聴き、似顔を描かせていた為に直様アーサー本人であると確信できた。言っている事も辻褄が合うので疑う余地がない。

アーサーは国王に悠々と話を聞かせた、快進撃であったのだ。

「！ では、チュザールは」

「はい、完全ではありませんがミラボーからの魔手を逃れました」
そうなのだ、一世蜂起したチュザールの人間達は成し遂げた。魔王ミラボーが不在だったこともあってか、手薄な各地の魔族の拠点を徐々に奪い返したのである。

室内に歓喜の笑みが零れる、だが王には陰りが伺えた。つまり、チュザールの主力魔族部隊が4星クレオにいる、ということなのは、と。しかし、それは一瞬のことである。他の惑星のこととはいえ、素直に喜ばしい出来事だった。

一定地を奪還した為、剣をダイキに届けるべく選ばれたこの6人がこうしてクレオへ来た、というわけらしい。

にしても、若い娘が多いこの来訪者に皆声を潜めた。

確かにメアリはまだ、か弱き魔法使いで今回の作戦には入っていなかったが、どうしても行きたいと駄々をこねてついてきてしまった。が、他のリンやココは無論、当然アーサーとナスカは秀でた魔力の持ち主だ。見た目で判断してもらっては困るのである、何より自信で皆溢れている。

メアリが背負っている剣こそが、ダイキの剣3星の神器レーヴァテイン。

容姿で力量の判別をされても困るが、要は結果が大事なだけだ。見せ付ければ良いだけだった。不機嫌そうにその侮蔑ともとれる視線に唇を尖らせていたココを叱咤し、ナスカは優雅に微笑んだまま

だ。

「勇者達は既に旅立った、が、我らの兵も派遣しようとする船を用意している。明日には用意が出来るからそれで向かいなされ」

「なんとという寛大な……。有難う御座います」

「平和な世になれば、チュザーレの各国とも是非交流したいものですな」

「有り難きお言葉。わが国王・ボルジア17世に戻り次第お伝えいたしましょう」

城の一室を与えられ、眠りについたチュザーレの一行。最強の賢者アーサーとナスカ。剣士リンに、武術家ココ、神官セーラ。と、見習い魔法使いのメアリ。

勇者達から十日ほど遅れて船でイヴァンへ旅立った、勇者に再会する為に。

「メアリ、その剣はダイキという勇者に渡してください」

「ダイキ？」

「メアリよりも二つ下の少年ですが、一番背が高いので見れば解るか」と

「あら、おこちゃまなのね」

無邪気に笑うメアリに苦笑いし、アーサーは甲板にいたナスカに声をかける。

「守備は？」

「上々よ、かつたるいから今すぐにでも敵が出て欲しいくらい」

「おやおや、好戦的だな」

くすくす笑うナスカに肩を竦めたアーサー、リンとココが組み手をしているのを横目で見ながら、洗濯していたセーラに近寄る。

「その仕事は船員さんがしてくれるのでは？」

「落ち着かないのよ、こうしてないと。コレが終わったら薬草の準備と調合ね」

「セーラらしいな」

海は、広大だ。勇者の船には追いつけないだろうがこちらの船は

全部で三艘、大規模な進撃だ。

「待っていてくださいね、アサギ」

潮風に髪を靡かせて賢者アーサーは、消えた勇者を思い描いていた。美しい、勇者であって勇者ではないような美少女。確かに潜在能力が計り知れないが、勇者というよりも神からの使いに近いような。そんな、不思議な少女を。

……仲間達は、勇者アサギを救うべく魔界へ旅立っている。

魔王様と勇者のハイキング

昨晚の宴会の後、部屋に戻ってシャワーを浴びた。眠りについたのは午前四時頃だった、アサギはふらつきながらハイに抱かれて部屋に戻っていた。

現在午前11時、陽が高く昇り熱い日光が降り注いでいる。

「大丈夫かアサギ？ 疲れてはいないか？」

「あ、はい大丈夫です」

既に起き上がって軽く柔軟体操をしていたアサギは、振り返って嬉しそうに微笑んだ。

「今日は遠出になるからな。……疲れていないな、本当に？」

多少控え目に呟いたハイ、自分は全く疲労感がないがアサギはまだ幼い。あのような時間迄起きてはいけないと思うハイは、心配そうに再度尋ねた。

魔族達にアサギの存在が知られた以上、あまり外出しないほうが良いのだろうがどうしてもハイにはアサギに見せておきたい場所がある。ハイ自身が付き添っているのだから、間違いは起こらないと思うが。目を離さなければ、何も問題はないだろう。

「大丈夫ですつてば、ほら、こんなに元気です」

言いながらアサギは笑顔で元気良く体操中である、身体を伸ばしてすらりとした手足を強調。それが些か、扇情的に見えたハイは思わず顔を赤らめた。

ここはハイの部屋なので、アサギは自分の部屋へと移動した。さて昨晚。自分でシャワーを浴びたことは記憶にあるが、誰が寝間着に着替えさせてくれたのだろうか。その辺りの記憶が全くなかった。ホーチミンかスリザであると、願いたい。

アサギは顔を洗い髪を整え、動き易そうな衣服と靴を出す。薄桃色のチューブトップにデニムのような素材のボレロと短パンである、それにブーツ。着替えれば既に身支度したハイが、部屋の外で待つ

ていた。

朝食はミルクと、スイカのみ。十分だった、夜更けまで皆で騒いで食事をしていたのだから。多少胃もたれしているが、新鮮なミルクで活力が出た。

お弁当を作ったので、昼食が楽しみなこともあり少なめで正解である。可愛い籠を受け取ったわけだが、何が入っているのかは開けるまでのお楽しみ、だ。

今日の行き先はハイ曰くアレクの城から徒歩で片道二時間、遠いが風景が美しいので気にならないという。一体どのような場所に案内されるのか、アサギは期待に胸を膨らませていた。何しろ魔王の気に入りの場所であるのだから、興味が湧かないわけがない。

ハイとアサギは大理石で出来た廊下を真っ直ぐに進み、中心にある階段を下りていく。正面を突き進めば無論玄関に辿り着くのだが逸れて、幅の狭くなった廊下を進んでいった。暫くすると聴こえてくるのは鳥の囀り、草と花、土の香り。庭園でもあるのだろう、アサギは歩いてきた道を思い返す。

精神的に余裕が出てきたので今は城内の把握に必死だ、正直一人きりでは自分の部屋にすら戻ることが出来ない広大さだった。今は昼間なので城内も明るく、道は無論装飾品もじっくりと見ることが出来るわけである。

それはアサギが憧れていた異国の城そのもので、例えば旅行会社に度々出向いてパンフレットだけ貰ってきたドイツやフランスの城のような。神聖城クリストバルにあったような、厳粛かつ神秘的な雰囲気というよりも明るく解放感溢れる中に、優雅な雰囲気を持ち合わせているような感じだ。

弾む心と共に周囲を見渡し続けるアサギ、銅で植物の蔦を模してある門を潜れば中庭だった。中央にちよつとした噴水が設置しており、周囲には花壇まで。手入れされた花々が咲き誇っていた。

そこで一旦立ち止まったハイ。アサギを待たせて一人、アレクの部屋へと出向く。アレクに、「リュウを引き止めておいてくれ」と

伝言に向かったのだ。

ちなみに、何故アサギを同伴しなかったかというと推測にしか過ぎないのだが、『アレク様もリュウ様も一緒に行きませんか？』とアサギならば言い出しそうだったからだ。

寒気。99%の確率でそれが現実になると思ったハイは、要因のアサギを中庭に置いて行く事にしたのである。もし、四人で出かけることにでもなればムードも何もあつたものではない。ハイ的にそれは避けるべき緊急事態、己の欲望最優先。

しかし、ハイは些か不安だった。リュウは、昨夜本日ハイとアサギが出かけることを知つたはずなのだが、朝から姿を見せていない。確実に邪魔をしてきても良いと思うのだが、静か過ぎて不気味なところの上ない。

が、好都合だと思い込んだハイ、おそらく二日酔いで寝込んでいるのだらうと解釈。そんなわけない、リュウは酒を飲んでいなかったのだ。浮かれすぎて深く考えこまなかつたハイは、この後致命的な出来事に遭遇するわけだ。

ともかく、アサギを振り返るハイ。この中庭は高等魔族しか立ち入り禁止地区である、それこそ、アレクに信頼されているような。なので、一人きりにしても大丈夫だろうとは思つて居たがやはり不安。

アレクの部屋の廊下からも姿の確認は出来るので、そこまで危惧しなくてもよいがやはり不安。過保護万歳、である。

いざとなれば、城を破壊してでもアサギを救う自信のハイだった。ちらちらとハイがアサギを見ながら、名残惜しそうに歩く中、アサギは噴水の中に手を浸している。反射する水面、穏やかに微笑むアサギ、暫し足を止めて見つめるハイ。

……何時まで経つてもアレクの部屋に到着しない、話が進まない。冷たくて気持ちの良い水温、アサギは水鏡を覗き込みながら上機嫌である。ふと、水面に何かが映つたので思わず眩しそうに上空を見上げれば。

「やあ！ お姫様今日は何処へお出かけなんだい？」

元気なおどけ様子の声が振ってくる、時間差で二階のバルコニーから何かが降ってきた。光の加減で顔は見えなかったが、声で誰だか解っていた。するり、と舞うように下りてきて着地した人物に、思わず拍手する。

「おはようございます、アイセル様」

華麗に跪いたまま、アイセルは満面の笑みでアサギに手を差し出した。

そう、アイセルだ。アサギの姿が見えたので、思わず下りてきてしまったのである。それにしても昨夜最も飲酒していたアイセルだが、酒豪らしく二日酔いなどという言葉とは無縁らしい。血色の良い肌は不調など思わせなかった。

「ハイ様とお出かけでしたね、姫様。楽しそうで何よりです、ははは」

「一緒に行きますか？ お弁当も作って貰ったんです、中身は確認していませんけどほら、こんなに大きいから沢山あると思って」

籠を掲げて、嬉しそうに微笑むアサギに思わず釣られて微笑むアイセル。

ハイの予感は的中。正直、ついて行きたかったアイセルだったが瞬間悪寒が走った。なんとも言いがたい陰鬱な空気が背中から忍び寄り、後頭部に押し掛かる。

アサギには全く悪気はないだろうがこれは警告だ、ハイからの警告なのだ。付き添いでもしたら、翌日には死体になっているような気がしたアイセルは思わず我武者羅に首を横に振る。

くわばらくわばら、虫の知らせ。昨晚のハイは気さくなただの魔王……気さくな魔王という表現もどうだが、全く争いごとは無縁なようだが、思い出してみれば記憶はまだ新しく、ハイと言えば冷徹、残虐非道な暗黒魔王ハイ様。

”暗黒魔王ハイ様”が声高らかにアイセルに忍び寄る情景を瞬時に想像した、身震いし冷汗が額から流れ落ちる。

「い、いや、ざ、残念だけど遠慮します。仕事がありますので、これでもね」

そうですか、と残念そうに瞳を伏せたアサギには申し訳ないが自分の命が優先だ。沈黙。

アイセルがココへきたのは別に偶然ではない、朝から探していた。正直ハイが居ては不都合だった、一人になる隙を探していた。そんな好機など滅多に訪れないのは百も承知だが、こうして今二人きり。唾を、大きく飲み込むアイセル。言うべきか、まだ、待つべきか。目の前の少女は、あまりにも非力だ。とても、運命の少女には見えないが内に秘める最強の”魅力”こそが捜し求めていた人物。

度胸を決める、頑張れアイセル！ 再度、大きく喉を動かして固唾を飲み込みアイセルは口を開きかけた。

「……アサギ”様”、お話がありまして」

「待たせたな、アサギ！」

ドゴン！

全速力で走ってきたハイは、アイセルを左に蹴飛ばしアサギの正面に立った。

「ごふう」

「アイセル様!？」

ずしゃあ、と地面に壮大に叩きつけられたアイセル。誰も知らなかった、暗黒神官魔王ハイは腕力もあつたらしい。悲鳴を上げたアサギと、突つ伏したアイセルを気にも留めずハイは上機嫌で笑う。

「よし、さあ歩こうか。アレクには許可を貰ってきたぞ」

「いえ、あの、アイセル様が倒れてらっしゃるんですけど……」

「疲れたらいつでも言うが良い、負ぶってやるからな」

「あ、あの、ですからアイセル様が」

「ああ、その籠は私が預かるう。重たかるう？」

「あの、ハイ様」

なんとというハイのスルーぶり、アイセルは突つ伏していたが起き上がれなかった。というのもハイから出される怪訝で陰鬱なオーラ

を直に受けているからだ。圧力で立ち上がれないのだ。冷汗を流しつつ、引き攣った笑みを浮かべるしかない。

アサギには大方笑み満開なのだろうが、なんという器用さだろう左側からは凍結の空気を放っている。

恐るべき魔王様。こうなれば、一気に逃亡が利巧だ。気にかけてくれるアサギには申し訳ないが、これ以上心配されると余計にハイの機嫌を損ねそうである。

深呼吸。畏怖の念を抱きつつ、アイセルは一気に腕に力を籠めると地面を全力で押し返して跳ね上がる。

「おはよーございまーす、ハイ様！ いよおつ、今日も男前素敵い！ じゃあ、さよーならあぁあぁあつ」

海老が水上に打ち出されたかのごとく、跳ね上がって後方にかさかさとして逃げる。猛スピードだ、追って鉄槌を食らわそうかと右拳に魔力を秘め始めたハイだが大袈裟に舌打ち。

「ちっ、逃げ足の速いこそ泥め」
悔しそうに睨みつけているハイ、不安そうに消えたアイセルを見つめていたアサギ。

「あの、ハイ様。嬉しいのはともかく人にぶつかったら謝らないといけないと思うのです」

「うんうん、うんうん。そうだな、アサギの言う通りだな、アイセルには悪い事をしたな。今度会ったら謝ろう」

一度ぶん殴ってから。

と、心の中で付け加えてハイはにっこり、とアサギの右手をとる。ある意味恐ろしいままの魔王だ、感情の起伏が激しすぎる。

「じゃあ、行きましょうハイ様！」

小首傾げて手を引いて走り出したアサギに、瞬時にハイの脳裏からアイセルの罪は掻き消えた。なんという単純っぷり、それが2星の魔王ハイ様。

「ああ、良いよ良いよ。二人で行こうな二人で」

上機嫌なハイである。鼻の下を伸ばし、傍から見たらいかかわし

い光景だった。

アレクとの話を終えてアサギを見下ろせば、何処かで見たような黄緑の髪がアサギににじり寄っていた。先程の光景を思い出すと腸が煮えくり返る。怒涛の勢いで駆け抜けてきたわけだ、自分を差し置いて何を二人きりで語っていたのか気になるが。

その頃アイセルは荒い呼吸で命からがら逃げてきたわけで、冷たい廊下の壁にもたれつつ、深い溜息を吐く。

「ぞっこんにも程があるでしょ、ハイ様」

想像以上にアサギに近寄る事は難しいらしい、命が幾つあっても足りない。ぞわわ、とアイセルの脳裏に迫り来る魔王ハイが再現された。

だが、待ち侘びたアサギが来たのだ。話をしなければならぬ、アレクも動くだろうがアイセルには”マビルを紹介する”という使命がある。

多々諸々。

機会を待ち、出かけた二人の後を追うなどということはする筈もなく、アイセルは立ち上がると首を鳴らして歩いていった。

「今日はもう、寝ようかなあ」

疲労感、120%。苦笑し、大きく伸びをしてゆっくりと歩くしかなかった。

出掛けた二人は、何処までも続いているような道をひたすら歩いている。城を出てから暫く、青々とした山が見える小道を歩いていた。緩い坂道になっている道、登りきれば森の小道へと誘われ。小鳥の囀り、陽の光、まるで御伽話のよう。

思わず、眠り姫を連想させる。森の中、木々と花々、そして森の動物達に護られながらずっと”その日”が来るまで待ち続けている可憐で綺麗なお姫様。王子は、導かれるがまま森の小道を進むだろう、そんな木漏れ日が優しい森の中を姫の元へと。

「綺麗……」

アサギは心酔し、うつとりと溜息を吐く。思わず伸ばした両手、その掌にも一筋の光が降りてきていた。それを捕まえるようにして、手を動かしてみる。何度か繰り返し、アサギは小走りになりながら進んでいった。

柔らかな表情でそんな様子のアサギを見つめながら、ハイも小走りになった。苔に覆われた石の道、大きく聳え立つ木々、僅かな光でも煌びやかに咲き誇る地面の花たち。不意に姿を見せる艶やかな蝶、謡うように囀る鳥達の心地良い合鳴。

瞳を周囲の風景に奪われながら、約二時間半。ハイの目的地に到着である、啞然とアサギは立ち尽くしたまま息を飲み込んだ。

楽園、と言っても過言ではない風景だ。小道の終点は、故意に作られたかのような場所。アサギの背ほどの高さから落ちる細くて小さな滝が、浅く広く広がる泉を造っていた。ここから先は地層が若干高くなるらしい、なんとも言いがたい神秘的な水音が周囲の大木に反響する。その滝に差し込む、一筋の光が泉で泳いでいた魚の姿を映し出した。驚くほど澄み切っている泉、思わずアサギはしゃがみ込むと手を伸ばしてしまう。冷たいが、思わず顔を綻ばせる。滝の下へと駆け寄り、滑り落ちる水を両手で丁寧にすくうと口へと運ぶ。喉を軽やかに流れていく水、大地の味がした。

全身を駆け巡る衝撃、思わず身震い。目頭が熱くなる、命の源、生命の糧。大地に包まれて一体になったような、感覚だった。

木で覆われた空を見上げてみれば、葉を掻い潜って一羽の純白の鳥がやってきた。躊躇することなく旋回した鳥、アサギの肩に止まると頬に擦り寄る。水面では魚達がアサギの足元に集まり、紫色の蝶達がアサギの髪に止まる。

滝から掬い取った水滴を指先に、鳥の嘴に近づければ美味しそうにそれを飲む。嬉しくて、アサギはそのままくるくと廻っていた。言葉を失ったハイは、暫し呆然としていた。溶け込みすぎていた、アサギに。ああもすんなりと森の守護者達に受け入れられるとは、思いもしなかった。

昔から知っていたように、寧ろ、待ち侘びていたように。森全体がアサギを歓迎しているようで、ハイは眩暈を起こす。

これが、勇者の魅力？ 神々しく、絶対領域の女神のような目の前のアサギに敬いたくなる。

大木の根がまるで自然に出来たベンチのように、ハイはふらつきながらそこに腰掛けると無邪気なアサギの様子を飽きもせずに見ていた。微笑を絶やすことなく、眩しい目の前の娘を一心不乱に。

連れてきて正解だったようだ、とハイは安堵の溜息を漏らした。大きな瞳がくるくる良く動いて、光り輝く。しなやかな手足が、舞の様にも思えてくる。柔らかで弾んだ声が、木霊する。瞬きするのも正直惜しい、ある意味これは芸術作品だ、切り取って絵画にしたいくらい。

「!？」

光が、アサギの全身に降り注いだ瞬間。ハイの瞳にアサギの姿が変化して見えた、瞳が周囲の木々に同化する様な豊かな緑色に、髪が若々しく瑞々しい若葉のような緑色に。

森の妖精、大地の女神。深い川底、光を受けて輝き放つ緑の水。

アサギの表情とて、何か違って見えて仕方がない。

平常と変わらないはずだ。見て来た笑顔、自分に斬りかかってきた時の気丈な強さ、瞳を潤ませ唇を嚙締めていたあの時……いや違う。

もっと、もっと。

「な……」

幼いアサギが、自分よりも年上の女性に見えるような圧倒的な抱擁感を放っていた。全てを委ねてしまいたくなる、安らぎと多少の後ろめたさと。硬直したようなハイを正気に戻したのは、アサギの身体がぐらりと揺れ、泉に倒れ込んだ音だった。

「あ、アサギ!？」

水滴を髪に、手足に舞わせて濡れた衣服で。アサギはくすくすと愉快そうに笑うと、泉の中に「ごめんね」と話しかけた。魚に謝っ

たらしい、飛び立っていった鳥にも、離れた蝶にも同様に謝る。

立ち上がり、舌を出して濡れた上着を脱ぎつつハイに視線を投げかけたアサギ。

「濡れてしまいました……、ごめんなさい」

なんとという色香。初々しさの残る女の色気、水も滴るイイ美少女。知らずハイは喉を大きく鳴らした、息が止まるほどに。呆気にとられていたハイだが、頭を振って滴を飛ばすアサギに大股で近寄ると細い腕を掴んでくるり、と。

怪我がないか診たのだった、安堵で胸を撫で下ろす。

「苔が柔らかいです、絨毯みたい！ だから大丈夫です。お日様の光に当てたら服も乾くかな？ 寒くはないんですけど」

脱いだ上着を手頃な木の枝に引っ掛けたアサギ、ハイに振り返ると微笑。なんとという扇情的な。露出された肌の健康的な色、柔らかで艶やかな肌は滴が魅惑的に乗ったままだ。滴が真珠にも見える、海から出でた人魚姫の如く。露出された肌、チューブトップなので無論鎖骨も肩もへそというか腰も露出。

なんとというけしからん光景。

しつとりと軽く髪、肌に浮かぶ水滴、まるでシャワー後のような大きな瞳が、ふ、と伏せ目がちになれば淫蕩な空気が流れたようで。ごっふ！

思わず口元というか鼻を押さえるハイは、熟れたトマトの様に真っ赤である。

いかん、いかん、鼻血が出そうだ！

思わず空を仰いで後頭部をトントン、と。異様なハイの行動に、アサギは首を傾げて籠を手にするるとハイに近づいて引っ張った。先程ハイが座っていた木の根のベンチである、並んで仲良く座り込むとアサギは籠をあけた。歩き回って飛びまわって、お腹が空いたらしい。

中を見て、アサギは歓喜の声を上げた。可愛い中身だった、まるで遠足時に母が作ってくれたような。りんごウサギも、たこさ

んウインナーまで入っているではないか。ふわふわオムレツに、鳥のから揚げに、サンドイッチ。

母親を思い出し、アサギは籠を思わず抱き締める。急に、会いたくなくなった。家族に会いたくなくなったのだ、こんなにも会わないことは初めてだった。

「？ どうしたアサギ？ 嫌いなものがあるのか？」

不安になり、アサギの肩に腕を回すと覗き込むハイ。アサギは首をゆっくりと横に振ると、多少の涙目の鼻声で、ぽすん、と広いハイの胸にもたれかかる。

そつと、躊躇いがちだが。

「ハイ様って、お父さんみたい。……ちょっと違うかな、なんだろうな」

お父さん。

勇者アサギの一言、魔王ハイ・ラウ・シュリップにクリティカル！ 吐血しかかったハイだが、蘇生の呪文がかかっていたらしく辛うじて命は取り止めた。

……父親か、まあ、歳が離れているし当然かもな……

頂垂れたハイだが、慕われていることに変わりはないだろう。嫌わないでいてくれるのならば、それで良い。いきなり攫ってきたのだが、普通に会話し笑って、言葉を理解してくれる。

これ以上のことはないだろう、それ以上を望んだら幸福が壊れそうだ。

「そなたが、傍にいてくれるのならば。……それで十分だ」

言い聞かせるように、ハイは呟く。その呟きが、はっきりとアサギの耳に届いた。アサギがハイを見上げれば、ハイがアサギを見下ろし。

風が森を吹き抜ける、純白の鳥が何羽も透き通った木々の上空の青空に舞った。滝の飛沫の音が、何重にも響きわたるように鳴り響くように。

「ハイ様？」

アサギの唇、ほんのりと染まる桃色の熟す前の甘い果実のようなハイの姿を映す大きな瞳は、純粹で美しくハイしか当然映しておらず。アサギの抱き締めていた籠が、ハイによって地面に下ろされた。「アサギ」

ハイの全身が、アサギを欲する、アサギしか見えていない。はつきりとしたハイの声に、アサギは返事をしようとしたのだが、開きかけた唇を硬く閉ざした。

そう、ようやく雰囲気が違うハイに気がついたのである。乙女の本能。

「アサギ、アサギ、アサギ！」

大きなハイの声、驚いたアサギは身体を一瞬引き攣らせ微かに抵抗するように離れようとした。が、アサギの抵抗など全くの無意味。自分の両腕にアサギを抱え込み抱き寄せると、ハイは再び名を呼んだ。

アサギ、と甘い声で憂いを含んで。何かと見上げたアサギの顔に、ハイは徐々に顔を近づける。

その頃。

「クレシダ！ 速度を上げろっ」

「何事ですか主」

「デズも、オフィも！ 急ぐぞ！」

「何事ですか！？」

「アサギの貞操の危機だっ、嫌な予感がするっ」

「……は？」

トビイが大空を舞いながら、憤怒して相棒の竜を攻め立てていた。……あの幼女趣味大馬鹿変態魔王が、何かやらかしている気がするっ

恐るべき、トビイの直感だった。

魔王様の淫……ではなくて陰謀

魔界イヴァン、魔王アレクの城の周辺には巨大な湖が存在する。マリアナ湖、と名付けられているその湖にはこの時期になると水浴びを愉しむべく魔族達が氾濫していた。

海に囲まれている魔界イヴァンだが、波もなく穏やかで美しい湖なので海水浴より人気がある。のんびり、まったりと各々に愉しんでいる魔族達に混ざり、魔王リュウが一角を陣取っていた。

リュウに気付いた魔族達は慌てて敬礼をし離れていくため、リュウの周囲だけは広々としている。魔王なのだから一般の魔族には恐れ多い存在、遠巻きになるのも納得。

別にそう気兼ねしなくても良いのだけどなあ、とリュウは小さく零すと溜息混じりに離れていった魔族達を見やった。手の中のグラスの中に入っている、白濁した桃色の液体を一気に飲み干すリュウ。「リュウ様、イチゴミルクのお替りは如何致しましょう？」

空になったグラスをリュウが差し出せば、にっこりと微笑み傍らの女性が再び並々とグラスにイチゴミルクを注ぐ。

「さあさ、どうぞ召し上がってくださいまし。まだまだありますし、本日のイチゴは朝露を浴びて極上の宝石の様に、皆輝いておりましてだからおいしゅう御座いますよ」

ん、と軽い返事を一つ。リュウは再びグラスを空けると、直様同じ様にお替りを所望する。空になったグラスを片手に、賑わう湖を眩しそうに見つめていた。

光の加減で反射する水、風によって起こる波が心地良い音を奏でる。小さな欠伸を一つ、リュウは静かに、ゆっくりと重たくなった瞼を閉じ始めていた。

注がれたイチゴミルクには口をつけず、傍らのテーブルにそれを置くとゆっくりと背を倒す。傍らに控えていた男が、そっと日陰を作るように傘を差し出した。

別に、リュウは水浴びを愉しむ為にここへ足を運んだわけではない。チェアー式ベッドに、大きなパラソル、テーブルにティーセットを用意して傍らには無論『リュウ七人衆』。日光浴兼昼寝である、大掛かりな。

暖かな陽射し、心地良い耳音、自然に瞼も閉じていく。脳の活動も停止する、考えなければいけないことが多々あるのに。うとうと、うとうと。

寝息を立て始めたリュウに、胸を撫で下ろした七人衆は寝顔を覗き込むと互いに微笑む。安堵した七人は、その場に腰を下ろして和やかに空を見上げた。

「リュウ様の寝顔。変わってらっしやらないなあ、昔と」

「ええ、本当に可愛らしい事。昔はよく、木の上で眠ってらっしやったわよね。バジル様に怒られていたわ、ふふふ。それが、こんなにも大きく逞しく立派に成長され、私達を救ってくださった」

七人同時に、言葉が途切れた。

黙り込んだまま七人は遠くから聞こえてくる魔族達の声に耳を傾ける、懐かしい情景だ。皆が皆、思い出に耽っていた。

故郷を離れようと、主は常に傍らに、必ず恩を返そうと助けようと支えになろうと皆で誓った”あの日”。ここは安息の地、4星クレオの魔界イヴァン。故郷ではなくとも安息の地。

七人衆は魔族ではない、皆異種族である。暫しの、沈黙が続いた。突如立ち上がった男に、他の6人は怪訝な瞳を投げかけたが気にせずに語り出した男。

「リュウ様は、思い出してはおられぬ。過去に捕らわれてもいない。故郷を捨てたわけではないが、今を大切にしたらっしやるのだ。ならば我らもそれに従おう、この方を全力で護るのだ」

6人は、俯いた。

”故郷”。ここより遠い、遠い場所。”もう、戻れない”場所だとは皆十分承知だった、何故ならば故郷への扉はリュウの手によって閉ざされているからだ。

リュウが自ら扉を開くことはないだろう、リュウにとってそれが最大の責任である。だから、誰も何人たりとも”故郷”へは行けない戻れない。家族が、恋人がその地で待っているだろうが、無理なのだ。皆理解していた、これが最善であると。

男は、そつと陽射しに姿を現した。全身を茶羽に覆われた、亜種である。両の脚にはやたらと深い傷があるのだが、随分と過去のものだ。鋭い瞳は猛禽類を彷彿とさせる、”故郷”では山岳地帯に住んでいた。

故郷を思い出している他の6人を励ますように、声高らかに明るい声を出す男。

「そついえば、今日はリュウ様はハイ様にお会いしていないが。どうしたのだろうな？」

返事し易い会話への流れだ、皆、躊躇しつつも皆会話に加わっていく。慌てて同じ位の歳の男が立ち上がると、嬉しそつに語り出す。「そつだよな、どうなされたのだろうな。ハイ様くらいしか心を開かれていないのに」

「アサギ様が来られて、拗ねてらっしゃるのでは？」
尽きる事ない会話が始まる、憶測開始だった。

「ハイ様の存在が、リュウ様に生きる希望を与えたのだ。途中から現れた”人間”の”勇者”にとられては面白くなかるうよ」

一瞬、空気が淀む。

「で、でも、リュウ様もアサギ様の事は気に入ってらっしゃるみたいよ？ 確かにあの子はふわふわで可愛らしいわ」

「でも、”人間”の”勇者”で」

「ゆ、勇者には到底見えないけれど！」

皆、夢中だった。だから、誰もリュウが薄つすらと瞳を開いた事になど気付いていなかった。目が覚めたリュウは、気配を悟られまいとして微動だせず耳だけ傾ける。七人の愉快そつな会話と弾む声が聴こえてきて、軽く口元に笑みを浮かべた。

謎の影

風が、一瞬止んだ。

「アサギ、アサギ、アサギ！」

「はい、はい、はい！」

ハイに呼ばれた分だけ、返事を返すアサギだが、正直戸惑いを隠せずに居る。ハイの瞳は、虚ろだ。出合って数日だが、確信を持って平素のハイとは違うと断言できる。

というのも、リュウが混ぜた媚薬のためだ。それでハイの思考回路がおかしくなっているのである。が、そんなこと二人は知るはずもない。

乙女の直感、目の前”男性”は危険過ぎる。すっかり、アサギの小さな身体はハイに覆い隠されてしまっていた。傍から見たら、アサギの姿など見えず。

大木の根に抱え込むようにして押し倒されてしまったアサギは、ハイの瞳を見つめると思わず困睡を飲み込んで身を小さくする。が、身体を縮こませたのがいけなかった、ハイはさらに体重をかけて圧迫させる。

「あ、あの、ハイ様！ もしもしっ」

アサギの上擦り焦燥感の混じった声に、一瞬ハイは瞳を軽く開く。が、右手でアサギの髪に触れて頭部を撫でつつ顔を、唇を近づけた。硬直。

思わず、瞳を硬く閉じたアサギだが混乱しつつも何処かで冷静だった。叫んでも、誰も来ない。体格の良いハイが相手では、アサギの力など微力。以前習った痴漢撃退法をやってみるべきか、いや、しかしハイは痴漢ではない。

思考回路、半崩壊。

落ち着きなくしたアサギの脳裏に、何故か三つの影が浮かんだ。思わずアサギは手を伸ばしていた、一人はミノルだったが横を向

いている。

もう一人はトビイだった、手を伸ばしてくれている。

……え？ 誰……？ だ、れ……？

そして、もう一人。明らかに人影だった、おぼろげだがじつところらを見据えている様に思える。顔までは見えない。影は次第に大きくなった、いや、近づいて来ていた。

すると、ミノルとトビイが影が近づくとたびに透けていき消えてしまった。啞然としてそちらを見たアサギだが、目の前の影から突き刺さるような視線に息を飲んで振り返る。

一つの影が、こちらを見ていた。片想いのミノルではなく、憧れのトビイでもなく。

だあれ？ ハイ様ですか？

呼びかけてみた、が、影は怒った様に身体を揺らすだけだった。激しく首を横に振っているようだ、否定している。

「解らないんです、誰？」

不思議な感覚だった、正直な気持ちだが心のどこかでは目の前の影が誰なのか知っている様な気さえして来る。挑むようにアサギは両手を広げると、影を見据える。

もどかしい気持ちなのは何処かで”憶えているから”。解らないはずなのに、知らないはずなのに、それでも……”憶えている”。

記憶の片隅、忘却の彼方、箱の奥底。

影は、揺らめいた、一瞬だったが。紫銀の短髪、トビイに似ていて非なる少年が姿を見せる。少年と言ってもアサギよりは年上だ、トビイくらいだろう。

息を飲み込んだ、知っている気がしてならない、懐かしい気がしてならない、愛しくて仕方がない、それでいて罪深くて……。

「オレ以外の男に近づかないで、約束だ」

はつきりと、声が聴こえた。聞き覚えのある声だった、懐かしくて涙が零れそうになった。低くもなく、高くもなく、愛しいとさえ感じる声。やはり、知っている声だったのだ。

姿を現したその少年の綺麗な瞳は鋭くて、それでいて幼く。抱きつきたい衝動にさえ駆られた。

「懐かしい……っ、待って、待って！」

思わず、声を張り上げて瞳を開くと零れるほどの深緑が瞳に飛び込んでくる。森の中の大木の上だった、吹き出た汗をそのままに我に返った。ハイが、いない。

「ひあっ!？」

小さく叫んだアサギ、首筋に柔らかい感触と同時に軽い痛みを感じて思わず声を出す。ハイが首筋に舌を這わせ、きつく唇で吸っていた為だ。だから、ハイの顔が上にはなかったのだ。

「っ! やあっ!」

身体が跳ね上がる、大きく瞳を開いてアサギは震える右手でハイの胸を押し返そうと力を入れるが微力である。乾く口内、言葉が出てこない。全身が痺れていく感覚、吸われる度に身体は跳ね上がるのだが、脳まで痺れていくようで。粘膜が擦れる音が耳に響く、急速に力が抜けていく。

世界が、廻る。上下が反転するように、木々が覆い被さるようにおぼろげに、見上げる空はざわめく森の檻の様。

助けて

助けて? オレの言う事を聞かないからだろ? 何、殺されたいの?

再び、”あの”声が聴こえた。間違いなく先程の男である、弾かれたように瞬きするアサギ。

「ま、待って、嫌わないで！」

小さく叫んだアサギは無我夢中でもがいてみる、必死にハイの身体を押し返すように。落胆気味の、蔑んだ様な男の声だった。喉の奥で悲鳴を上げる、今この状況を抜け出さなければ、あの男に嫌われると感じた。

焦燥感に駆られてアサギはハイの胸板を叩く、徐々に意識は鮮明になった。半泣きで懸命に抵抗を続けることしか出来なかったが、

まるで今隣にその男が立っついて冷やかな視線を浴びせられているようだった。

と、下からの抵抗にハイの身体がようやく起き上がる。静かに、崩れ落ちるように大木から地面に転がるようにドサ、と落ちたハイ。荒い呼吸を繰り返すアサギは、それでも自分に覆い被さっていた体温と重心が消えたことに胸を撫で下ろす。嫌な汗が流れていた、ハイが怖かった、というよりも何故か他の感情が支配している。

「……あの人に、嫌われる」

あの人、が誰かも解らないのだが、嫌われると直感した。それだけは、避けたかった。

ひんやりとした首筋に指を這わせれば、空気に冷えたねっとりとした唾液が糸を引く。虚ろな瞳で、アサギはずり落ちたハイを見つめた。気だるそうに、微かに首だけを動かし大木に寝そべったまま、それが扇情的だが、今のハイはそんなことどうでも良い。顔面蒼白で、口元を押さえたままハイは泣いていた。細い瞳から、幾つも涙の筋を作り、嗚咽を堪えて片手で顔面を覆い隠して泣いている。思わず、顔を顰めてアサギは重い身体を無理に動かし手を伸ばした。迷子の子供、親に叱られた子供の様にハイが見えて、可哀想で、だが、痺れが取れないアサギの身体は痛々しくしか手が伸びず。それでもハイは気付いた、気付いて空いている片手でそれを制する。

沈黙が流れる、風も止んだ。

大の男が、大泣き中だ。辛うじて声だけは堪えているが、羞恥心に罪悪感に押し潰されそうなハイだった。

数分後、ようやくハイは唇を噛締めアサギへと視線を向けた。視線が、交差する。

大きな瞳でハイをじっと見ていたアサギだ、交差しないわけがない。交差した、瞬間だった。

「申し訳ない！ 申し訳ない！ 申し訳ない！」

森に木霊する大声、鳥達が驚いて飛び立ち木々が揺れる。連呼す

る、ひたすら謝罪を連呼。地面に土下座し額を擦りつけて謝罪をするハイ、呆気にとられてアサギは何も言えなかった。

暫しどう対応してよいのやら解らずに、そのまま眺めていた。だがこのままでは良いわけがない、ゆっくりと指先から動かしていく。未だに軋む身体を起こし、アサギは大木に座ったままハイを見下ろした。脚を、ぷらぷら、と揺らす。

時折咽ながらも、一向に謝罪を止めないハイ。惨めである、何処まで惨めな魔王だろうか。ハイらしいといえば、ハイらしいが。

「勇者に謝る、魔王様。子供に謝る、大人の男の人」

ぼつり、とアサギが呟く。それでも、耳に届かないハイは叫ぶように精一杯謝罪をしたままだった。先程の違和感を微塵も感じないハイ、震える身体は怯えているからだろう。時折嗚咽しながらも、謝罪を止めないハイの姿を見ていれば誰でも気の毒に思えてくる。例えそれが、今し方襲われかけていたとしても、だ。

アサギは一つ小さく溜息を吐くと、勢い良く立ち上がりハイの腕を両手で掴んで引つ張り上げた。驚き、慌てて顔をそらしたハイだがアサギはしゃがみ込んでハイの身体を抱き抱えるように起こそうと力を籠める。無論、起き上がるわけではない、ハイの力が勝っている。

「す、すまない！ あ、合わせる顔がなく。その……申し訳ない！」

「あ、あの、もういいです。立つてください、その」

「い、いや！ それは駄目だ！ 謝らせてくれ！」

パシ、とアサギの手を払い除け、再び地面に突っ伏したハイだが今、払い除けた手を思い出した。慌てて見上げれば、アサギの右手が微かに赤くなっている。謝る事に必死で、アサギの手をはたいてしまった。

「す、すまない！ い、痛かつたらう！？ い、今回復の呪文を」

「呪文なんて使うほどじゃないです」

僅かに赤くなっていたアサギの手を優しく強引に掴んだハイだが、苦笑いしてアサギはそれを制した。

「す、すまない、すまない！ 本当に申し訳ない！ ああ、私はどうしたら良いのかっ」

「あ、あの、ホントにもう良いですから」

二人共、自分の意志を撤回することはない。数分言い争いが続いた、だがハイが突然アサギの両足に思い切り抱きつく。意外な行動にアサギはバランスを崩したが、倒れこむことはなかった。

別れ話を告げられた軟弱男と、女……的な構図だが26歳の男と12歳の少女なところが如何わしさ大爆發だ。ハイは、必死だった。アサギの生脚にすがり付いているが、意図的ではない。

「アサギ！」

「は、はいっ」

「私はどうかしていた……意識がなかったような気もするが、先程の愚行は事実だ、偽ることなど出来ぬ、言い訳もせぬ！ ……怖かったらう？ 嫌だったらう？ だから、私にアサギも同じことをするが良い！」

「……………」

ハイは必死だ、決して意図的ではない。下心があって言っている訳ではないのである、真剣だった。

アサギは、面食らった。本来ならば飛び上がって、ひっくり返っていたらう。赤面したアサギは、首を横に振る。

「む、無理です、出来ませんっ」

つまり、ハイを大木に押し倒して首筋に舌を這わせて嘗めて吸え、ということだろう。……無理に決まっている。寧ろそれではハイが悦ぶだけで、アサギにはなんの得にもならない。

「では、私を思う存分殴るといい！ アサギになれば殴られても本望、どちらかという大歓迎。さあ、先程の怒りを振り払うように！」

「え、ええ！？」

奇怪な構図になってしまった。目の前のハイが別の意味で怖くて顔を引き攣らせる。

アサギは、露出度の高い光沢ある衣服に身を包んだ美女と、縛られて鞭を振るわれている男を想像した。SMである。

それを、自分とハイに攔きかけて……みたが慌てて消去する。冗談ではない、そんな趣味はもちろんアサギにはない。赤面したまま、困り果てたアサギは俯いた。

寄りすがつているハイが、小さく見える。気の毒で、哀れで、それでいて何故か可愛らしく。

アサギは、根性を出す、肝を据えた。両手に、息を吹きかけながらハイを見下ろした。

「解りました、手を離してください。瞳をよく瞑って歯を食い縛ってください。一撃で行きます」

観念したようなアサギの声、ハイは何度も頷くとそっとアサギの脚から手を離す。

「さあ、遠慮なく！」

アサギの本気の一撃を覚悟し、ハイはドン、と顔をアサギへと突き出した。これで先程の事が赦して貰えるのならば、お安いものである。というか、寧ろ光栄だった。……光栄というのもどうかと思うが。

「いいですか？ いきますよ？ ……セーのっ」

風が、ハイの顔を撫でる。身を硬くしたハイの耳に届いたのは”ぺちん”というなんとも可愛らしい音だ。おそろおそろ、瞳を開いた。

「ぺ、ぺちん？ ……え、あ？」

アサギが微笑み、じっと見つめていた。小さな手でハイの頬を包み込み、慈しむように優しく目の前に居るアサギ。思わず、固唾を飲み込む。なんと慈愛に満ちた瞳だろう、柔らかな笑顔だろう。

「これで、終わりです。お腹空きましたね、ご飯食べましょう」

掌をそっと離すと、アサギはにっこりとハイに微笑むと頭を二回、撫でた。お弁当が入ったバスケットを両手で持ち上げ、大木に腰掛ける。

啞然と見守っていたハイはくすぐつたい、未だに残る頭部の感覚に顔を赤らめる。柔らかで暖かな掌、子供の頃、両親に撫でられた時のような。そんな懐かしい温かみだ。懐かしくも、恥ずかしく、それでいて心がじんわりくる。

赤面したまま慌ててハイはアサギの後を追う、しどろもどろと語りだす。

「あ、アサギ？ 先程のあれでは……」

すっかり冷静さを取り戻したアサギは、一人でハイを無視しバスケットを広げて中のサンドイッチを手にすると口へ運んでいた。もぐもぐもぐ。

慌てて隣に腰掛けたハイは、身振り手振りで弁解を開始した。

「あ、アサギ。怒っているのは解るが、だからこそ私に」

横目でハイを見たアサギは、ハイの口から揚げを放り込む。もぐもぐ、ごつくん。

「あ、美味しいなこれ」

ぼそ、と呟いたハイに息巻く様にアサギがサンドイッチを突き出す。

「もう終わりにしたんです！ これ以上まだ何か言うなら私、ホントに怒りますからね！？」

硬直したハイ、確かにアサギは怒気を含んだ声と表情だ。項垂れるハイの目の前で、アサギは僅かに赤面してそっぽを向く。

「……私、恥ずかしかつたんですから。思い出さたくないんですっ」弾かれたように、アサギを見た。そうである、今回得たのはハイだ。誰がどう見ても、ハイである。自分の意思ではないとはいえ、心の奥底には願望があったのだろう。男だ、雄なのだ。

謝罪し罪滅ぼしをしたいが、実際ハイ的には……嬉しかったりする。というか、幸運だ。不謹慎だが。

頬を赤く染めて恥らいながら憂いを帯びたような表情で瞳を伏せるアサギ、胸が締め上げられる。それを振り切り、素に戻そうとしているアサギにも心打たれる。軽蔑しても良いのに、アサギはそう

しなかった。こうして普通に應對してくれる事に、感謝した。

途中までは確かにハイの意志はあった、台詞まで忘れて貰っては困るので慌ててハイは声を張り上げた。

「わ、解った、解ったから最後に聞いてくれ！ 私が言いかけたことを、聴いてくれ！」

むっとして目じりを上げて怒りかけたアサギの表情が緩む、ハイの真剣な眼差しを受けたからだ。開きかけた口を閉じ、アサギは小さく頷いた。安堵に胸を撫で下ろし、ハイはそつと躊躇いがちにアサギの髪を撫でる。

「私はアサギの事をとても大切に想っている。傍に居たい、居て欲しい、護りたい。だが、アサギの気持ちは無視できない、無理強いはしない。強引に攫ってきてしまったのだ、帰りたいだろう。あの時は、アサギに会うことしか考えていなかった、後先考えずに行動した結果がこれだ。私は自分の事しか考えていなかった……」

アサギが嫌ならば、魔王とて辞める、何でもしよう、だから……」
「私、護って貰いたくないです。自分は自分で護ります。でも、ハイ様の事は好きだから傍に居たいし、魔界の皆さんも楽しいから好きです、ここに居るのは苦痛ではないです。でも、みんなは心配。私は勇者で、ハイ様は魔王」

二人の視線が交差した、時が止まった様だった。引き寄せられるように、二人は見つめ合う。

それは、ハイにとっては願ってもない時間だった。自分の愛する楽園に相応しい森の中で、愛しい娘と二人きりこうして互いに見つめ合う。もう、このまま時が永久に止まってしまえば良いとさえ思えた。

しかし、それはそれとして。

ぐーきゅるるるるるるるるるる！

静寂と甘い雰囲気をぶち壊した、この音に思わずアサギが爆笑する。ハイも、照れ笑いを浮かべて自分の腹を擦った。ハイの腹の虫が鳴いたのだ、生理現象は抑えられない。

折角の甘い雰囲気を……この空気を読まない腹虫めが！

ハイが自身の腹を軽く殴ると、答えるように再び腹の虫がけたたましく鳴く。再び吹き出したアサギ、ハイも肩の荷を降ろして思わず笑ってしまう。愉快そうに笑っているアサギを、暫し見つめる。

なんて楽しげに笑うのだろう、こちらまで笑いたくなる。不思議な感覚だった。

理由はどうであれ。自分が原因でアサギが笑ってくれることが、ハイにとって幸せだった。

「早く食べましょう！ さ、ね？」

微笑んだアサギ、ハイの口元に再びから揚げを近づける。

……森の片隅、静寂の帳。二人から少し離れた場所の地面の草が、何かに、踏まれた。異質な感じにハイが顔を上げたが、何もなく。それでも、そこに、何か”いた”。

勇者の思いと魔王様の思い

アサギとハイの空腹は満たされ、今は滝から零れ落ちる清水を掌で掬って飲み、喉を潤したところである。二人は大木の根に再び腰掛ける、先程中断した話の続きをするつもりだった。

腹が空いていたので、数分前まで無言で食べていた。その間全く会話がなかったのだ。

先程の雰囲気と内容的に切り出し難く、ハイはたじろいだがアサギがすんなりと語り出した。

「私は、イヴァンへ来て驚いたことが沢山あります。魔王、って単語だけ聴かされてましたからみんな悪い人達ばかりだと。でも、違いました。みんな、全然悪くないみたいで。確かに、まだ出会って間もないですが、でもっ」

興奮気味に、アサギの口調が強くなる。両手の拳をきつく握り締めた、微かに肩を震わせる。声をかけたたくとも、かけられない雰囲気。ハイは目を細めてアサギを見つめる。

「教えて、ハイ様。本当にあなたが2星ハンニバルを襲撃したのですか？ リュウ様は？ アレク様は？ ミラボー様は？ どうして私に優しくしてくださるのですか？ 何が正しくて、間違っているのか解らないのです。」

ハイ様魔王にみえません。……なら、2星ハンニバルの魔王って誰ですか？」

ハイの眉が引き攣った、真っ向から質問されると答え難い。口籠っているハイ、それでもアサギは続ける。

「私達の世界には、本当はみんなのお手本にならなきゃいけないのに悪い事をしている人達がたくさんいます。」

人は完璧じゃないから、失敗します。それでも、解ってて、直そうとせずに悪い事してる人達が本当にたくさんいるんです！ 私、それが嫌いなのです。見て見ぬ振りをするのもいけないけれど、勇

気がない人だつてたくさんいます、立場が悪くなる人だつています。それに、軽々と誘いに乗つてしまう人もいるし、正そうと懸命に頑張る人は圧力で身動きが取れなくなつてしまつて……。あ、これは私の国の政治家さん……。えっと、偉い人達の話ですけど。

でも、子供に”苛めは駄目”といいながら、大人の間でも虐めがあつて。それなら子供は「大人がやつてるならいいやー」つてなると思いませんか？

つまり、人間つて悪い事、つて解つているのにやつてしまつてすよね。私だつて偉そうなこといえません、きつとどこかで悪い事してしまつているのです」

キィ……カトン……。

何かが何処かで軋む音が聴こえ、アサギは怪訝に顔を上げた。

……つ……それ……たのつ……お……

「……………?」

そつと耳に手をあてる、聞き取るうとしたが以後聞こえない。不思議そうにハイが覗き込んだ。

「どうした、アサギ？」

「あ、いえ、なんでもありません。ちよつと、声が聴こえたような気がして」

「風が出てきた、上空の葉のこすれる音かもしれないな」

肩を落としているアサギに、遠慮がちにハイは語りかける。目の前のアサギは、消え入りそうだ。俯いているアサギの表情は見えないが、暗い影が落ち微かに震えている肩が切ない。

思わず、ハイは肩に手を回して自分のほうへと引き寄せてしまつた。

「だから……人間は嫌い」

ぼそ、とアサギが呟いた。声的には大きくなかつたのだが周囲が静寂に近いので大きく、聴こえてしまふ。聞き取るには十分過ぎる声だつたため、思わずハイはアサギを離し肩を強めに掴んでしまつた。

「今、今……なんと云つた？ 私の聞き間違いか？」

人間の勇者。召喚された、異世界からの勇者。その、勇者が人間を”嫌い”だと……？

思わずハイは固唾を飲み込む。先入観からの、考え。

アサギはハイに対し”魔王”という単語から、暗く恐ろしく残酷なイメージを抱いていた。当然だろう。

ハイも、アサギが”勇者”ということから、人間の味方で自分の敵である、と思い込んでしまっていた。人々を助けた功績から、勇者と呼ばれるようになったわけではない。突然召喚された娘、勇者と呼ばれ先入観から悪事を働く魔王に、矛先を向けた。魔王を倒すために、状況の把握さえ出来ずやってきた、勇者。幼い少女。

だが、形式には当てはまらない。魔王ハイが勇者アサギに一目惚れをし、連れ去ってきた。勇者と魔王が手を組む……という言い方は悪いが、親しく共存しても何の問題もないだろう。現状として、二人は親しい。

確かに魔王だ、2星ハンニバルを壊滅状態においやった暗黒神官魔王ハイで間違いはない。

そして、人間に救いを求められ異世界から召喚された勇者アサギで間違いはない。

けれども二人は、楽園のような森林で肩を寄り添い、こうして語っている。二人が、打破すべき”単語の意味”。

「私、人間が嫌いです。勿論、人間にだって良い人はいますよ。でも、悪い人達だってたくさんいるのです。単に……悪い人が嫌いなのかな」

過去の自分を見ているような気分になったハイ、目の前のアサギを瞳を細めて見つめる。だが、アサギと自分で異なる点が。

あの時、ハイには信頼できるニンゲンなど一人も存在しなかった、全てを悪と決め付けた。

だが、アサギは違う。アサギは人間を信じてもいるし、自分を嫌悪してもいるだろうし、絶望を感じているかもしれない。けれども全てを否定してはいなかった。

ハイは、断固として人間の存在を否定した。生の輪にあつて、不要で醜悪な存在だと認識した。

「……私が魔王と呼ばれるわけを話そうか。

私は元は2星ハンニバルの神官の家系に産まれたのだよ。そして何不自由なく厳しい勤勉と教養の中で育ち、行く行くは立派な神官になると……信じて疑わなかった。私が路を逸れたのは、人間の”悪”……いや。”負”の部分垣間見てからだろうか。あの日は、一人散歩に出ていた。ああそうだ、丁度アサギと同じ年頃だったかな」

ハイはアサギの頭部を撫でながら、ゆっくりと瞳を閉じた。微かに瞼が、引きつく。記憶の片隅に追いやった、思い出したくないあの日の出来事は鮮明に。

唇を嘗めて湿らすと、封印していた過去を紐解く。

「池があつた。深くも、浅くもない池だ。大きな葉が浮かび、鮮やかな花が中央で咲き誇っていた。近くに大木が悠々と生えていた、それはそれは見事な木で、この大木よりも立派な木だった。何処からでも良く見える木で、皆それを目印にして天候が悪くとも歩いただろう。偉大な、大木だ。

私はそこへ行く為に歩いていて、小高い丘を越えれば、池が見える。澄んだ色合いの池には多種多様の水鳥も寄ってくるからそれも楽しみだった」

じつと、耳を傾けているアサギの表情は誰からも見えない。ハイの広い胸に、すっかりと埋もれてしまっている。

「丘を下りきつた時だった、池の周囲に数人の子供がいたんだ。子供、と言っても私よりも年上だった。楽しそうにしていたから水遊びだと思っただ、混ぜてもらおうと思った。少々、騒がしかったがね。だが、妙な胸騒ぎに、空気の振動。

ふと、私は上空を見上げたんだよ。池ノ上、二羽の鳥が舞っていた。その時期は、親鳥が雛を育てていた時期で、子供達が騒がしくて付近の巣に戻れず、餌が与えられないのだろうと……思っただ」

アサギの身体が、硬直した。内容を悟ったのだろう、僅かに震え始める。ハイは、落ち着かせるようにアサギを抱き締めていた。

自身をも、落ち着かせるように。

「子供、達は。鳥の巣を池に浮かべて遊んで、いたんだ」

アサギは、思い切りハイの服にしがみ付いた。嗚咽が聞こえる、ハイは遠くを見つめ、あの日の光景を思い描きながら淡々と語る。

「私は、助けようと走った。が、目の前で巣は、池に沈んでいった。そうしたら次は上空を飛んでいる親鳥に石を彼らは……投げ始めたのだ」

ハイの瞳に、憎悪の光。あの日に感じた殺意が、甦る。

止めようと一人の少年に飛びかかった、唇を噛締め奇声を上げた、”あの日”。

「気付けば、私も殴られ気絶していたらしい。その場に残されたのは無力な私と、石に潰された親鳥と。無我夢中で池に飛び込めば、底に沈んでいた三羽の雛鳥。冷たい冷たい、池の底で息絶えていた生を受けたばかりの雛鳥だった」

「赦さないんだから……！」

アサギの、絶叫が響いた。

森が静まり返っていたのは、その鳥達を偲んでか。

ハイの腕を振りほどこうと、渾身の力で暴れるアサギを落ち着いた様子でハイは抱き締めている。ああ、昔の自分が目の前に、と。

あの時、誰かに自分もこうして欲しかったと、思った。だから、今目の前のアサギに自身が望んだことをしている。

アサギを抱き締める、強い腕で抱き締める。大丈夫だと、抱き締める。壊さないように、一心に抱き締める。

泣きじゃくるアサギを、我が子の様に抱き締めた。背中を擦り、ここに自分以外の誰かがいることを、覚えて貰う為に。人の温かみを、忘れない為に。

「私はその後、鳥の亡骸を大木の根本に埋めた。辛うじて一羽の親鳥は息があったので習いたての回復魔法を使い、自宅にひっそりと

持ち帰って世話をした。

侘びにもならないが、せめて助かった命だけは救いたかった……。回復して飛び立った鳥を見送ってからというもの、私は人間の醜悪な部分を見つける癖が出来てしまった。

神官の家系に産まれ、本来ならば人々を安息させる身分でありながら……墮落した神官達を見てきた。それで、人間不信になってな自身も人間である事を恥じ、あの鳥の様に大空に舞いたいとさえ、願うようになった。人間、という自分から逃れたかったのだ。出来るわけがないのにな。

その結果、人間を殺戮し始め……魔王に至る。全ての人間を抹消したところで、何になるというのだろうか。だが当時は、それが自分の全うすべき使命の様に感じていたのだよ。愚かにも。

……私が何故、魔王となったか。これが答えだアサギ」

自嘲気味に笑ったハイは、アサギの顎に手をかけると上を向かせる。大人しくなったアサギは、素直に上を向いた。

ハイの瞳に、涙で真っ赤にした瞳のアサギが映る。苦痛と、悲痛と、憤怒の籠もったアサギの真っ直ぐな瞳にひきつけられたハイは、そっと唇でアサギの涙を掬った。

ごく、自然に。

ハイ様、と呟いて再び胸に埋もれたアサギを抱き締めながら。

「私を止めてくれる者が、いなかった。信頼できるものなど、父も、母も、友人も……存在しなかった。私が全てと関わりを隔てていたからな、存在しないと決め付けてもいた。もし、もし、誰か一人でも私が信頼できる人物さえいれば……その者が止めていたら、魔王という存在にはなっていなかっただろう。しかし、不謹慎だが後悔はしていない。

なぜならば、魔王になり、4星クレオに来ていなければアサギ、そなたに出会うことなどなかったろう。私の人生で、それだけが唯一の光の様に思えてきたよ。

今、ここに誓おう。

アサギ、魔王とか勇者とか。そんなものは関係ない、私達は……その、友達になれるだろう？ いや、友達だろう？ 勇者と魔王ではなく、アサギとハイ、で考えてみてくれないだろうか」

ハイは、”友達”を強調した。自分に言い聞かせるためだった、友達でよい、恋人でなくとも良い、目の前の小さな存在が笑っていてくれるのであれば。

「私も……酷い事をしたものだ。鳥は庇ったのに、同じ命を持つ人間は庇わなかった。2星ハンニバルの住人には酷い事をしてしまった。私と同じ思いを抱いていた人間も……今なら解る、いただろうに。」

だからまず、魔族と人間、魔王と勇者が隔たりをなくそう。痛みも思いも分かち合おう」

「無理だと、思います……」

鋭い、アサギの声。軽くハイが瞳を開く。

「無理です！ 魔王の皆様、魔界の方々はみんな優しかった！ けれど、人間は無理です！ 恐怖の対象で仲良く、なんてみてくれないのっ。必ずどこかで歪みが起きるっ。」

……私の住んでいた地球だって。生まれ立ての仔猫を川に捨てたりとか、首を切ったりとか、ゴミの日に出したりとか、玩具の標的にして遊んだりとか！ もちろん、酷い事をしない人だっていますよ、でも、全員が全員、そんな人達じゃないんです！ だからきっと、魔族の中にも人間が嫌いな人だっているだろうし、人間だってそう。自分達と違うから、恐怖に怯えて廃除したくなる。……人間同士でも差別があるのに、他種族と仲良くだなんて……夢物語です。でも、私は人間で、どうにかしたいのに、どうにもならなくて、何をしたらいいのかも解らなくて！」

興奮しているアサギ、喉の奥から声を振り絞り叫ぶ。初めて見た、アサギの取り乱した姿だ。

ハイは、ただ、黙って抱き締めるほかなく。それでも、アサギの気持ちは解っているから、と。きっと他にも同じ様に思う”存在”

がいるから、と。少しずつ、解き解していくしかないのだ、と……。
そう思いながら、抱き締める。

無理にアサギを落ち着かせたくない、気の済むまで泣かせてやりたい。傍にいて、直ぐ傍にある温もりを与え続ける事……それが大事なのだ。ハイは思った。

どのくらい時間が経ったのだろう、アサギは必死に耐えながら涙を拭き、肩を震わせながらハイを見る。

「ごめ、ごめん、な、さい……すいま、せんっ」

「気にしなくて良い、気の済むまで泣けば良いのだ」

言いつつ柔らかな声と穏やかな笑みで、ハイはアサギの頭部を撫でた。

やはり、まだ子供だ。可愛いことこの上ない、この愛しい感情が恋愛なのか別のものなのか。大粒の涙を零しているアサギ、
『弱い女性は自分が護らねば』的な男の本能を刺激する。

両手で懸命に涙を拭きながら、謝罪を続けるアサギに眩暈。申し訳ないと思いつつも、思わず喉を鳴らした。思い切り抱き締めて、口付けしたくなったのは媚薬の効果が残っているのか本能か。

そもそも服装自体が刺激的だしっ、と唇を噛締めて堪えるハイ。

慌てて乾かしていたアサギの上着を取りに立つと、肩にかけてやる。

「そ、そろそろ陽も落ちてきた、寒くなるから着ておきなさい。帰ろうか、今日は、その、あまり楽しくなかったかもしれない、がな」

苦笑いしたハイに、アサギはぶんぶんと首を横に振って否定した。

それはハイの思い違いだった。

「しょ、しょんなこと、ないです！ た、楽しかった、ですっ」

アサギの舌の廻らない言葉に思わず吹き出したハイ、いい子いい子、頭を撫でる。

また一緒に来よう、いつでも何度でも来ることが出来るから、と。

「眠っていると良い、疲れたらどう？」

アサギを背に乗せ、返事を待たずに歩き出すハイ。

「自分で歩けます、大丈夫です」

「いや、泣くというのは結構体力を消耗するものだ。遠慮せず、眠りなさい」

「……はい、ありがとうございます」

少々考え込んでいたアサギだが、小さく頷くと欠伸を一つ。瞳を閉じてハイの背にくっつき眠り始める、数分で眠りに落ちていった。安堵したハイは、周囲の木々を見つめながら歩き出す。軽いアサギだ、負担にはならない。

リスが、木々を走り回っている姿を発見した、笑みが零れる。「可愛らしく、元気一杯なところがアサギにそっくりだな」小さく微笑した。

次の森の間はウサギだ、道を横切り一目散に何処かへ走っていた。

「ああ、なるほど。ウサギか。ふわふわでぴよんぴよんはなるし、仕草が可愛い。リスと違ってどことなく色気すら感じるなあ、成程」

背にいるウサギ……ではなく、アサギに思わず話しかけてしまう。

「おや？ ウサギ？ アサギ？ はは、名前もそっくりだ！」

愉快そうに歩いているハイ。勇者を背負い、歩いている魔王。今回の件で二人の仲がぐんと縮まった気がする、心が通い合えたようにハイは嬉しかった。心の奥につつかえていた棒がアサギに話したことで、とれたようだ。誰にも話す事がなかった、自分が暗黒面へと墮ちたあの日をようやく。

しかし。重大な事が起きていた、ハイはそれに全く気付いていなかった。

アサギの首筋には、無数のキスマークがついているのだ。紅く、紅く、点々と。

魔族達の各々の事情 1

アサギとハイが出掛けている最中。

魔王リュウは水辺でのんびりと休憩中、魔王ミラボーは以前として勇者達の状況把握に下卑た笑いを轟かせ。そしてもう一人、魔王アレクは腹心のスリザを呼び出し言付けを頼むと、自室の転送陣から消えていた。

魔王アレク、不在。

別に大した事ではない、時間さえあればアレクは出掛けて行く。

スリザが頭を垂れたまま、数分。一人きり、静まり返った室内で知らずスリザは溜息を吐いていた。

ふっ、と消えてしまったアレクの姿を追うように、残像を思い浮かべながら唇を噛締める。

微かに笑みを浮かべていたアレク、それは最愛の恋人に出会えるからだった。行き先は恋人、ロシファの元であることなど周知の事実。

スリザはようやく顔を上げた、踵を返してアレクの室内を出ると持っている鍵で施錠する。アレク以外に所有しているのは、スリザたった一人だ、騎士団長が代々預かっている魔王の間の鍵である。

紅玉が施された古めかしくもうっとりとする光を放つ鍵を、スリザは徐に首から下げる。チェーンがついているので肌身離さず、入浴中も睡眠中も所持している。

深く一礼すると眉を吊り上げて、大股で歩き出した。女だてらに血族ゆえ騎士団長を任されているスリザ。決して気を抜くことはない。

ふと、楽しそうな笑い声に廊下から下を覗き込めば女官と下っ端の騎士が和気藹々と、数人で会話している。頬染めている女官、おそらく誰かに気があるのだろう。

思わずスリザは、強張った口元を緩めていた。

羨ましい事

本音だった。

アレクが幼い頃から、仕えて来たスリザである。年上のスリザは、幼いアレクを弟の様に、それでいて敬いながら共に居た。

美童のアレク、人形の様に綺麗な主君。肌とて髪とて、スリザよりも女らしく感じられた、か弱き魔王。

だが、時が経つにつれて魔王アレクは男らしさを垣間見せるようになる。憂いを帯びた表情はそのままに、しかし筋肉とて目立ちはないが十分につき、背丈もスリザを超えていた。

護りの対象は、羨望の対象へと。

スリザが恐れ多くも恋心を抱くことになるのは、必然である。けれどもアレクには恋人が居た、麗しいエルフの姫君だった。

ごつごつとした自分の掌とは違い、柔らかな手と身体、流れるような髪の毛の似合いの二人。

「お傍でこうして成長を見届け、お役に立つだけで幸せなのだ。本来ならばこうして会話すら出来ないだろうに」

ぼそ、と呟いたスリザは眉を再び吊り上げると歩き出した、だが。「何者だ！」

歩き出したように見せかけ、腰の剣を二刀同時に引き抜くと後方の影を確実に捕らえ喉元に剣を突きつける。

喉元と刃の隙間は、ない。僅かな振動、呼吸をすれば皮膚が切れるだろうそんな間隔である。

スリザは鋭い眼光で、先程から自分を尾行していた相手に声を荒げていた。

「何用だ、アイセル。部屋を出た当たりから貴様の気配を感じていたが……、アレク様に何か用でも？」

喉元に剣先を当てられているアイセルは、苦笑いである。唇を動かせば、振動で喉が振るえ確実に、切れる。

しかし、解っていないながらスリザは全く微動だせず剣を離す気は全くなかった。先程の自分の小言を聞かれていたら困る、という思

考回路が働いたのかスリザは睨みをきかせたままだ。

見つめ合う二人、諦めて折れたアイセルが口を開く。

皮膚が切れ、微かに血が剣に滲み始めるがアイセルは顔を歪めることなく真正面からスリザを捕らえる。その流れ出た血液を見ても、冷めた瞳のスリザは剣を変わず構えたままだった。

「辛いんですよ、アレク様を見るの」

しかし、そのアイセルの意外な言葉に思わず張り詰めた糸が緩んでしまう。

それをアイセルが見逃すわけもなく、己の強固な手甲で剣を両側に弾くとそのままに宙返り、するりとスリザの背後に下りたアイセルはスリザの首筋に右手を押し付ける。

形勢逆転だ、スリザは舌打ちし両の肘をアイセル目掛けて素早く叩き出した。

だが、アイセルの左腕でがっしりとスリザの身体は腕ごと抱き締められた、途中で身動きが出来なくなる。再度舌打ち、まさかこのような失態をする羽目になるとは。

「俺、スリザちゃんを傷つけるつもりはないから。ただ、聞いて欲しい」

「この羽交い絞め行為が、既に私の精神を傷つけているんだが」
不貞腐れたようなスリザの声に、アイセルは苦笑いだ。

「ごめん、でも、たまには誰かに頼りなよ。こうして誰かに支えられなよ。スリザちゃんは一人で気を張るほど、強くないよ。頼ってもたれかかる相手を作りなよ……出来れば今みたく、俺であつて欲しいんだけど」

「私は私だ。大体偉そうに、先程から何を上司に説教たれているのだ？」

「……辛そうなスリザちゃんを、見ていたくないんだ。アレク様のこと、悩む姿を見ていたくないんだ」

アイセルの声は、切なく、悲痛。表情とて真剣そのものだが、生憎スリザはどういう心痛な表情でアイセルが語っているかなど知ら

ない。

「喧しい。私がいっつ、どこでアレク様の事で悩んだと？ 勝手なことを言わせておけば」

鼻で笑い、スリザは渾身の一撃でアイセルを腕を振り払おうとした。先程から、アイセルの体温が非常にくすぐったいのだ、不愉快だった。耳元で囁かれる様な息も、非常に気に入らなかつた。

しかし、腕は更にきつくなる。

思わずスリザは小さく呻いた、苦しすぎるほどの抱擁と、耳元にかかる息で背筋が寒くなる。

もがいた、が、びくともしないアイセルの抱擁に正直、スリザはプライドに傷をつけられた。男に羽交い絞めにされるなど、思ってもいなかつたことだつた。血の気が失せていくのが、スリザにもわかる。

おまけに、相手は自分の部下だ。見下していた部下なのだから、当然だ。

「もはや、私の力も限界……そろそろ隊長交代の時期か」

「そんなわけないでしょ、男と女の違い。俺にだってこれくらい出来るよ、惚れた女一人組み敷けない様じゃやってられないからね」

自嘲気味のスリザに、アイセルが無常な言葉を投げかける。

女ながら、隊長の座に就任してから、長い。が、結婚すらしていないスリザには当然跡継ぎなど存在せず、養子をもらうべきだとも話が浮上していた。しかし、そこまでの高年齢ではなくまだ、十分現役でいられるだろう。

アイセルに組み敷かれたのが、非常に不愉快で仕方がないスリザ。思わず右脚を動かしアイセルの足を踏み潰そうとしたが、彼の右腕によってスリザの脚は封じ込められる。

びくともしない、我武者羅に動いてもどうにもならない。

力任せに行つては駄目だと、頭ではわかっているが焦燥感かられてスリザは力任せに身体を動かす。屈辱だ、こんな間抜け面の部下にいいように扱われるなんて。

悔しさに涙が溢れそうになった、惨めで仕方がない。何度も男を打ち負かしてきた、そのたびに優越感に浸れた。

「しょーがないなあ、スリザちゃんは本当に強情なんだから……無理だつて、言っているのに」

呆れたような、アイセルの声が耳元で聴こえたかと思えば眩暈。冷たい背中が、硬くて痛い。

それが床であると認識できたのは数分後だった、床に押し倒されていた。一気に身体中の血液が逆流する、沸騰する、赤面する。

「本当に、いい加減にしないと殺」

震える声が途切れた、精一杯の抵抗が掻き消された。

アイセルの唇が、スリザの言葉を掻き消した。

かっと思いを開く、引き攣り、以後硬直。悔しさで思わず瞳を閉じた、まさかこんな状態で男と口付けなどと。

手馴れているのだらう、スリザの身体が跳ね上がるうとも、アイセルは痛めつけないように最低限の力でスリザを拘束している。

口付けとて、慣れていていると思った。と言っても、スリザは男と口付けを交わしたことなどない。

自身の取り巻き少女達とは何度か、軽く口付けをしたりもしているのだが。

唇をこじ開けて入ってきた舌の感覚に、背筋がざわめく。呼吸が出来なくて、顔を歪める。

「スリザちゃん」

一瞬、アイセルが名を呼んだ。

その隙に思い切り呼吸をしたが、直ぐに再び塞がれた。呼吸のタイミングがわからず、ただ震えて瞳を固く閉じていた。熱いアイセルの舌が動けば、粘着音が耳に届く。微かに離れた隙に息をすることが、スリザにとって精一杯だった。

抵抗する力がなくなり、強張っていたスリザの身体がゆっくりと床へと重心を預ける。

どうしてよいやら解らず、なすがままのスリザからアイセルが離

れたのは数分後の事だった。スリザの唇から零れる唾液を、そつとアイセルは拭いとる。

どちらのものなのか、解らない。

むせ返るスリザを暫くそのままアイセルは見つめていたが、ぎこちなく腕を伸ばすと抱き締めて身体を起こした。

「ごめん。まさか廊下でこんなことする気はなかったんだけど……。でもね、スリザちゃん。スリザちゃんがアレク様を見てきたように、俺もスリザちゃんを見てきたんだよ。愛して、るんだ、スリザのこと、愛しているんだ！」

耳元でそれだけ叫ぶように告げたアイセル、そのまま立ち上がり走り出す。一瞬、弾かれたように顔を上げたスリザが見たアイセルは。

耳を真つ赤にし、悲痛そうに泣きそうな迷子の子供のような表情で。

目を合わせることなく、俊足のアイセルはするり、と廊下から庭へと滑り落ちるように。

「……何を」

馬鹿なことを、と呟いたスリザ。

一人残されたスリザは、気だるく起き上がると自身の唇を押さええる。力任せに唇を擦った、嗚咽した。

ケガラワシイ！

舌の感覚が残っている、吐き出そうと指を口に突っ込んだが、吐けない。惨めな自分に、押し掛かるプライドの塊。

低く、泣き声を噛み殺しながら蹲っている自分の姿を誰にも見られたくない、見られては生きていけない。

その時だった、アイセルの声が響いたのは。

「スリザちゃんがアレク様を見てきたように、俺もスリザちゃんを見てきたんだよ。愛して、るんだ、スリザのこと、愛しているんだ！」

スリザは、擦って腫れた唇に恐る恐る再び指をあてた。そつと、

瞳を閉じればそこだけ、熱い。摩擦のせいだ、と思った。
が、鼓動が速くなった、切なくなった。

「……アイセル？」

気の迷いだ、年下で格下の男だ。常時おどけてばかりいる、嫌悪感の対象だ。

自分がアレクを見ていた感情と同じならば、それは崇高の対象である筈である。

「私はアレク様と口付けをしたいなどと、思わないっ！」

見ているだけで、十分だ。満ち足りた幸福だ。

『でも、それはおそらく恋ではないのですよ』

「!??」

床に転がっている自身の剣を即座に構えた、今の声は誰の声だ？
高い、少女の声だった、聴いた事があるようなないような。

誰かに見られていたのか？ 慌ててスリザは立ち上がると気配を探して瞳を走らせる。

が。……誰もいなかった。

スリザの殺気を感じし数人の衛兵が走ってきたところだが、他に逃げ去る影などない。

「どうされました、スリザ隊長！ 剣を構えるなどと」

「……問題ない、多少違和感を感じ探っていたところだ。持ち場にもどれ」

「はっ！」

緊張した面持ちで、けれども平常心を忘れずにスリザは颯爽と衛兵に声をかけた。

再び静まり返った廊下、スリザは一人軽い溜息を吐く。平素と違った雰囲気ではなかったか、緊張し声が震えていなかったか。

嫌な汗が突如噴出した、スリザは疲れ切つてずると壁にもたれかかる。震え出した身体を、腕で必死に押さえ込む。

寒くはない、これは何の感覚か。

「これから……アイセルとどんな顔をして会えばよいのか」

解らない、恋愛ごとは、疎い。気にせず平素の様に振舞えば良いのだが、上手くこなせる自信がない。

異性に告白された事も初めてだった、そんな日が来ると思っていなかった。

アイセルの視線の先には常に少女がいた気がする、自分ではなくレースの似合う可愛らしい少女たちが。だから何故、自分なのか検討がつかない。それ以前にからかわれたのだろうか、とも思った。

悔しくてギリリ、と唇を噛締めるが、アイセルのあの表情が。床に押し付けられた際のあの、アイセルが。男らしくて、胸が高鳴った……気がした。熱っぽい腕と身体は、女にはなかったものだ。

「ち、違う！ 誰が、誰が！」

身体を竦めて、膝に顔を埋めたスリザ。

『愛してるよスリザ』

声が、聴こえた。

魔族達の各々の事情2

その頃、アイセルは自分の表情を誰にも見られないようにして足早に城内を徘徊していた。普段お茶らけている自分がこんな辛気臭い顔をしていては、誰かに突っ込まれる。

途中の水鏡を覗こうとしたが、舌打ちしてやめた。今の表情、情けないことこの上ない。

スリザの姿を見つけて、声をかけようと追っていた。アレクの部屋から出てきたスリザが酷く寂しそうで……儂げで。

魔王アレクに嫉妬した、あんな表情にさせる事に苛立った。同時にスリザのその色気に欲情し、結果が先程の……あれだ。

美しい、孤高の女性。身体つきは筋肉質で確かに女性らしくはない、それでも鍛え抜かれた女豹の様にしなやかなで美麗なスリザ。

アイセルは先程アサギと出合った庭の噴水に頭を突っ込む、瞳を何度か瞬きした。ひんやりした水温が、アイセルの紅潮した頬を冷やす。

甘い、スリザの唇は。

「っ！ 何やってんだ、俺っ」

波の立つ水面に映った自分の顔、何時もと変わりはない……筈だ。両手で頬を力任せに叩く、いつもの自分に戻る為に。喉もとの切れた傷口に水をあてた、ヒリヒリと染み渡る痛み顔に顔を大袈裟に歪める。

「いってー……」

思わず、大声を発したアイセル。

よし、良い調子だ、いつもの自分に戻ってきた。この、大袈裟な立ち振る舞いが自分だ、ここでの、自分だ。……思いながら自嘲気味に微笑んだ。

水滴が、地面に染み込んで行く。アイセルはそっと噴水を離れると拭くものを探して思案した、何処かで借りられなかったか。乾く

だろうが、何かで拭きたい。

「何やってんの、お前」

丁度良い足音と声に、嬉しそうに振り返ったアイセル。呆れた口調は、友人のサイゴンだ。最も望ましい相手だった、自分の強運に感謝すらしたくなる。

芝居がかつた口調で語りつつ、ふう、っと大袈裟な溜息一つ両手を広げる。

「何か布はないだろうかね、サイゴン君」

「何があつたんだよ」

懐を探りながら訝しげに、サイゴンは首を傾げた。

「いやー、スリザちゃんにさ、ちよつと攻撃を喰らつたんだよね。

見るよ、この喉元」

サイゴンに近寄ると上向きになり喉元をサイゴンに見せ付ける、ぱっくりと開いた傷口があった。痛々しげにサイゴンは目をそらすと、げんなりと布を差し出してくる。そのまま首に巻きつけ、縛り付けてくれた。きつめに。

「ごっふ！ 苦しんだけどー」

「我慢しろ、俺傷口見るの苦手だつて知ってるだろ」

こんの、一流剣士が何を傷口程度でぐだぐだとつ、と突っ込みたくなつたが止めておいた。

多少緩めた布、不恰好ではあるが傷口は見えなくなった。赤の千鳥柄、ああ、こついうお洒落もいいな、と呟きながら水面で姿を映すアイセル。傷も隠せた、立派なカモフラージュだ、サイゴンしか傷について知る者は居ない。

「ったく、スリザ隊長にちよつかい出すからこついうことになるんだろ？ 見境ないお前の女好き、どうにかしろよ」

「やだなあ、相手はこれでも選んでいるつもりだよ、サイゴン君」

「女なら誰でも良いくせに」

「はっはっは、若いなあサイゴン君。それだから未だに童貞なんだよ、うん」

「……貴様、その布返せ」

喚きながらサイゴンは無造作に剣を引き抜いて切りかかる、爆笑しながらアイセルはそれを手甲で受け止めた。

喧嘩友達だ、気の知れた二人だった。

けれど、サイゴンにすらまさかスリザに強引に口付けしました、とは言えなかった。今日のことは、二人以外誰も知らなくてもいい。アイセルは、そう思いながら楽々とサイゴンの剣を避けつつそのまま移動していく。

「そういえば、ホーチミンは？　一緒じゃないとは珍しいね」

「逃走中だ」

「あ、そっ」

魔族達の各々の事情3

すっかり辺りが暗くなった頃、アサギを背負ったハイはようやく城に帰宅する。ぐっすりと寝込んだアサギ、起きない。寝かせる為に、ハイはアサギの部屋へと急いでいた。

その途中で、ハイはリュウに遭遇した。

城内には暗くなると様々な場所に設置されている蠟燭や油種に火を灯す係りが徘徊している、擦れ違いざまに挨拶する者達の中にリュウが混じっていたのだ。無論、リュウはついてきた。

背のアサギを覗き込みながら、リュウが小声で訊ねてくる。

「アサギ、寝ちゃったぐ？」

「ああ、見れば解るだろう、疲れたんだ起こすなよ？ 食事前には起こそうとは思っているが」

今日のハイの機嫌は最高潮だ、誰にも邪魔されず二人きりだったのだから。ついつい、思い出すと顔が崩れてしまう。

不本意だが柔らかなアサギの首筋にも唇を這わせたりとか、柔らかな肌をこっして実感していたりとか。

そんなハイの様子を見ながら、リュウはリュウで、ほくそ笑んでいた。

何かあったに違いない、二人きりでいらただけにしては、ハイの表情が……気味悪すぎると判断。”あの例の薬”が効いたのだろうか？ 効果を発揮したのなら二人は男女の間柄に？

リュウはたまに立ち止まり、再びハイの後をつけたり、前に進んだり、反対側にくるり、と移動しながらついていく。

普段ならばハイはこれで切れそうだが、鼻歌交じりで上機嫌のまま、気にも留めていない。身体全体が弾んでいる、スキップしているのだ。

決定的だ、絶対に何かあった！ それが何か知りたいっ！ 明らかに浮き足立っているハイに満足そうにリュウは喉の奥で笑った。

リュウは、必死にアサギを凝視した。着衣の乱れがないか、その他諸々。

アサギの首筋のキスマークが、リュウの角度からでは見えないのが残念だ、いや、幸運なのか？

ハイの鼻歌が忌々しくなってきたリュウ、特にアサギには何もおかしなところがないようだ。

だが、あの薬は実はリュウが調合したものであり、性能に自信があった。

「……わざわざ早急に調合したのに、失敗したぐーか？」

ぶつぶつ、小声で呟くリュウには全く気にも留めずアサギの部屋の前に到着したハイは、ドアを丁寧に開いた。背からするり、とお姫様抱っこへと変更する。

その瞬間、僅かコンマ数秒。

「お、おおおおお！ 成功なのだー！」

リュウは見逃さなかった、成功したのだと瞳を光らせて微笑む。見えたのだ、無数の紅い点……首筋にくっきりと残るキスマークが、思わず跳ね上がった歓喜に打ち震えたリュウを、不思議そうに一瞬見たハイ。だが、無視してアサギをベッドに横たわらせると幸せそうにじつと見つめ続ける。

その時にでもハイが、せめてキスマークに気付いていればよかったのだが。表情を見つめているハイには無理な話だった。

床に座り込み満足そうに見つめているハイの傍ら、リュウが踊り狂っている。

すきつぶ、すきつぶ、たーん、たーん、じゃんぷじゃんぷ、フィニーシュ！

踊りながらハイの横にすとな、と座り込んだリュウ。にたあ、と顔だけハイに向けて笑う。悪寒が走った、さすがのハイもこれには硬直するしかない。

言葉を詰まらせたハイに、地底の底から来るような低い高笑いを発するリュウ。

空いていないか？ 食堂にでも行くこうか？」

「……食堂。食堂！ あ、お城の中の魔族達が集まる食堂ですね」
昨日、皆と会話していた際にアサギは城内に非常に興味を示したがそのうちの食堂になれば直ぐに行けそうだったので、提案したハイ。嬉しそうにアサギは頷いた。

早速二人は部屋を出る、目指すは食堂だ。

ハイは今まで一人で食事か、リュウが勝手に押し付けてきて二人で何かしら食べていたので食堂へ行った事はない。馴れ合いなどしなくてもよかったので、行く必要がなかったのだが今日からは別だ。アサギが気になる場所へは何処へでも連れて行く、それがハイの今後すべき事だと妙な使命感に燃えている。ところが、ハイは部屋を出て数歩で足を止めた。

「はて、困った。食堂の位置が解らぬ……」

魔族達の各々の事情 4

平素城内を徘徊しないハイにとって、城内の位置は主要部以外把握できていない。

ともかく、誰かに会えばどうにかなるだろうと正面玄関を目指した、それくらいならばハイとて解る。

行く途中、都合よくアイセルにサイゴン、ホーチミンの三人に遭遇した。思わず表情を明るくしたハイと、お辞儀をしたアサギ、それに姿勢を正した三人。

案の定サイゴンはホーチミンにべったりと腕を掴まれている、逃亡出来なかったのだ。

「あれ？ ハイ様どうされました？ 夕食のお時間では？」

「うむ、アサギが様々な場所を見学したいと言っていたのでな。今日は食堂へ行こうと思ってな」

怪訝なサイゴンは無視し、ホーチミンが小首傾げて聴いてみればそんな返答だ。

ああ、なるほどと納得した三人、苦笑いするホーチミンは、ちらりとアサギを見つめる。本当にこの子にべったりなんだ、と。

普通に判断するならば勇者に城内を案内しているわけで、非常事態な気もするが……。

五人は一路、食堂を目指すことになった。

「ですが、食堂は逆方向ですよ？」

サイゴンの問いに、アイセルとホーチミンは解りきった答えに肩を竦める。素直にハイは、包み隠さず答えた。

「迷子になっていたんだ」

「そ、そうでしたか。申し訳ありません」

ハイが城内に疎いことなど、周知の事実だ。サイゴンは軽く青褪める。

だが、ハイは特に不愉快そうにはしていなかった。アサギと手を

繋ぎ大人しく前を歩く三人についていく、真実なのだから仕方がない。

今までは恐ろしく近寄りかたかったが、ハイもこうしてみると付き合いやすい人物だったのだな、と魔族三人は微笑してた。

「楽しいですよ、食堂は」

「そうか、ならば良い」

振り返ったホーチミン、にっこりとアサギに微笑むとアサギもにっこり、と笑う。

その、瞬間だった。

びくり、とホーチミンが引き攣り立ち止まる。

「? どうした、ミン?」

「……なんでも、ない」

サイゴンが腕を引つ張る、アイセルが立ち止まり振り返った。が、ホーチミンは静かに微笑むと歩き出した。何事もなかったかのように、するり、と。

アサギの首筋に何やら紅い点が見えたように思えたホーチミン。虫に刺されたわけではないだろう、無数に存在した……気がした。となると、それはもはや原因が一つしかなく。

もう一度、ちらりとアサギを盗み見るが見えない。

ハイと楽しそうに会話をしている、特に不自然な様子はない。歯痒くて、確かめたくて、うずうずしているホーチミンに、思わずサイゴンは眉を潜めた。

「トイレなら行って来いよ、男用なら直ぐそこに……ぐっ」

思い切り脚を踏まれたサイゴンは、低く呻く。ホーチミンのハイヒールが突き刺さった。

ようやく食堂に到着した五人は、重たいオリブドラブの扉を開く。途端、良い香りが漂い始めた。騒がしい中、大勢の魔族達が既に夕食を摂っていた。

物珍しそうにアサギは周囲を物色する、目を輝かせている様子にハイも大満足である。

直様ホーチミンが説明を始める、大人しく聴くハイとアサギ。食堂は大混雑だ。利用者は特に選ばない、城で働いている者は勿論商人の魔族やら、町からわざわざ食べに来てにいる者……様々である。

値段は下町に比べれば高いが、料理長の腕は間違いなく美味さは魔族一であるだろう。昨夜アサギが食べた物も、本日の昼食もこの料理長プロデュースである。

サイゴン、ホーチミン、アサギ、ハイ、アイセル、という順番で並んで一列に歩く。

「ここでトレイを取るのよ。それで、好きなものを好きなだけ乗せてね。勘定は最後だから……あ、今日はハイ様の奢りってことで」ちゃっかりと精算はハイ任せ、上司に無礼な、とサイゴンは思ったがハイは全く気にしていない様子なので有り難くご馳走になることにした。

パールピンクのトレイをホーチミンに渡されて、アサギは嬉しそうに笑う。釣られて笑う、ホーチミン。地球の飲食店にも同じ仕組みのものがある、何処でも一緒なんだと思うとアサギは嬉しかった。この並び方、実は故意である。

サイゴンはともかくとして、ホーチミンはアサギの首筋に非常に興味があった。ハイはアイセルに本日昼間のお小言というか、文句を言いたかった、しかしアサギとは離れたくなかった。

……となったので、この並びになつたわけだ。

じい、と、不自然にアサギに魅入るホーチミンだが生憎見えない。歯痒いが獲物を狙う肉食動物の如く瞳に光を灯してホーチミンは隙を待っていた。

「……おい」

その後方ではアサギに気を使いつつも、「本日のおススメメニュー」を一心不乱に見ていたアイセルに低くハイが声をかける。飛び上がる勢いでハイを見たアイセル、引き攣った笑みを浮かべる。

まさかこんな場所で昼間の続きを開始するつもりなのか!? 睨

みを利かせるハイに乾いた笑い声を出すしかないアイセルだが……。一瞬鋭く睨みを利かせるとハイは、それ以後アイセルを無視。それどころではないのだ、アサギが最優先な為、ある意味アイセルはアサギに助けられた。

「ハイ様、これに食べたいものに乗せるのだそうです」

「おお、そうか、アサギは賢いな！ どれどれ」

アサギにトレイを手渡され、上機嫌。でれつでれのハイである。

「私が居た場所でも、こういう雰囲気のところがありました。つい、食べ過ぎてしまっんですよね」

「あらそうなの、ふふふ、一杯食べましょうね。デザートも充実しているわよ？」

「わあー！」

女ではないが、女のようなホーチミンにすっかり気を赦しているアサギ。それがハイには多少不服だが、女なら仕方がないな、と思っていた。魔王ハイは、ホーチミンの性別を知らないのである。

食堂はスムーズには進まない、夕食時で大混雑、しかし待っている間も会話が出来て面白いものである。ちょっととした楽しみだ。

ホーチミンは必死にアサギの首筋を見ようとしている、気付かずにアサギは嬉しそうに会話を愉しんでいた。遠くのほうまで続く行列に、アサギは身を乗り出して躍る胸を押し殺すことなく。

飲みたくて味噌汁を探すが、流石にない。こんなに飲んでいないのは、産まれて初めてである。ほぼ毎日の様に飲んでいたので、恋しくもなる。白米もだが、米自体はパエリヤなどで食べている。

落胆したがそれでも自分が手にしたものは美味しそうである、ハイに勘定を任せてサイゴンは席を取りに行った。

ハイの存在に慌てて主任が飛んで来たが、雰囲気味わいたいからと用意してもらった別席を辞退しサイゴンが確保した六人テーブルに、五人は着席する。

ハイとアサギの向かいに三人が座れば、いただきます、の挨拶と共に食べ始めた。

アイセルは毎晩のことながら大ジョッキのビールを片手にまずは、景気づけだ。黙々と食べ始めるサイゴンを横目で軽く見つっ、ホーチミンの視線は真正面のアサギに一点集中する。

「あら、そのパスタ。私も迷ったの……少し貰ってもいいかしら、アサギちゃん」

「あ、はい！ どうぞ」

目ざとくアサギの持ってきた料理に目を光らせたホーチミン、最も取るのに時間がかかりそうなパスタで勝負に出る。くるくる、とフォークとスプーンで取りながらホーチミンはにこやかにアサギに笑いかけた。

「ツナがたっぷりで、とっても美味しいです！」

「今日のパスタは皆美味しそうだったものね、このスープツナパスタと迷ったのがこれよ。アサギちゃんも食べてみて？ 柚子胡椒とベーコンのフィットチーネよ」

「わあ、嬉しいです！」

自分の皿を差し出しながら身を乗り出すホーチミンだが、やはり見えない。

舌打ち。もどかしさ、大爆発である。

「ど、どれアサギ。私のも食べてみると良いぞ！」

ハイは自分のピザを進める、蟹と海老を惜しげもなくあしらったサラダ仕立てのマヨネーズピザのようだ。アサギとハイの会話を眺めつつ、パスタを頬張りつつホーチミンはじと目で首筋を睨みつけたまま。

ガリガリ、ガリガリ……。

隣で野菜スティックを齧っているサイゴンのこの音が、苛立ちを倍増させる。

「うふふ……まだデザートまで時間はあるものね……何があったのか、おねーさん、知りたいわ……うふふ……」

おにーさんだろ、とソラマメのポタージュを飲みながら、恍惚の笑みを浮かべているホーチミンにサイゴンが突っ込みを入れていた。

キスマーク？ キスマーク！

ビールを数杯飲み干してようやく食事に入っていたアイセルに、アサギは声をかける。先程まで豪快に飲み干していたので、声をかけることを躊躇していた。それこそ、ツマミなどそこそこだ。

「アイセル様は何を食べてらっしゃるんですか？」

にっこりと微笑み興味津々で目を輝かせているアサギだが、アイセルは軽く引き攣った笑みを浮かべた。ハイが瞬時に奇怪なオーラを放ったからである、非常にアイセルは目をつけられているようだ。本日のあの庭での会話が、余程ハイには気に入らなかったのだろう。「お姫様、俺に敬語は止して下さい。アイセル、で良いですよ」

「でも、年上の方ですし。呼び捨てで呼ぶことは出来ません。それに、それを言うなら私もお姫様じゃないです……け、ど」

「ん……困ったなあ、様づけなんて呼ばれたことがないから歯痒いのです、俺的にも」

困惑気味にアサギが瞳を伏せたので、アイセルは慌てて立ち上がる。

「あ、いえいえいえ、お姫様の呼びたいように呼んでくださればつ。なので、俺もお姫様、って呼びましょう。お相子です」

ガッ！

ハイが、手にしていたフォークをテーブルに突き刺した、ミシイ、と音を立ててテーブルに罅が入る。怪しく光る、何の変哲もない普通のフォーク。凄まじい凶器に早変わりだ。

『アサギに軽々しく話しかけることも、哀しませる事も、一切禁止だ貴様』

……と、ハイの漆黒の瞳が物語っていた。アイセルだけでなく、ホーチミンとサイゴンも背筋を凍らせる。思わず全力で頷く三人の魔族達、和やかな食事の場が台無しである。

「え、えーっと、あ、あはははは！ あ、そうそう、俺の食べてる

ものでしたね？　これは、豚の挽肉とキビを練りこんで油で揚げた肉団子だと思ってもらえれば。この辛目のソースをつけて食べるんですよ。ビールのツマミには最適です」

「わぁ……。１個、貰ってもいいですか？」

「どうぞどうぞ、よかつたらハイ様も一緒に」

「うむ、では戴こうとしようか、アサギ？」

上司に気を遣わねばならない、厳しい社会の現実である。

いそいそとアイセルから肉団子を貰うと、アサギの皿に乗せて上機嫌のハイ。

自分には災いが降りかからないように、性急に食事を続けるサイゴンを尻目に仲良さそうに食べているハイとアサギを見つめるホーチミン。

宙を見つめながら一人、陶醉モードである。

「うふ、うふふふ……。いいわよねえ、年上男と幼女の恋物語。そそられるわ……」

首を左右に振りながら、恍惚の表情で天井を仰ぐ。隣のサイゴンが思わず口に詰め込んでいたパンを吐き出しそうになった、嫌な予感しかない。

ちらり、とジト目でホーチミンを見つつ、深く溜息を吐き続けたサイゴン。

手に取るように現状のホーチミンの心境が解る、自称乙女心を持っているホーチミンは恋話が大好きだ。ハイとアサギに感化されたのだろう、詳細を知りたいのだろう。そうなってくると、サイゴン自身にも災厄がやってくることすら、予想済みである。

がっくり、と肩を落としたサイゴンの予想通り、ホーチミンは胸を弾ませていた。

魔王の恋だけでも、十分に興味を惹き付ける。が、その相手が人間の勇者でおまけに飛び切りの美少女、歳の差激しく。妄想も膨らむ。

「あぁん、もう、想像しただけでミン、困っちゃうっ」

身体を震わせて身悶える、何を想像したのかは当人だけが知っていた。

静まり返っている暗闇の一室、来訪者は首を傾げていた。

一人、ガラガラとワゴンを引いてハイの部屋を訪れたリュウ。ワゴンの上には三人分の食事が、てんこ盛りである。

「やつほー、だぐー！ 一緒にご飯食べるぐっ」

が、ハイの部屋は静まり返っている。アサギの部屋も、無論静まり返っていた。

「ぐ」

呆然と立ち尽くしたリュウ、かくり、と肩を落とす。三人分の湯気たつ料理も、何処か影を帯びて悲壮感を漂わせていた。

「ご飯を粗末にはいけないのだぐ、勿体無いお化けが出るのだぐーよ」

ガラガラ……ワゴンを引きながらリュウは仕方なく自身の部屋へと戻っていく。折角急遽作らせたのに……小言を言いつつ魔王は、食事を一人寂しく運ぶしかなかった。

「寂しいのだぐー！ 一人でご飯だぐー！」

流石に一人で三人分を片付ける事は無理だ、リュウは壁に同化して成り行きを見守っていたリュウ七人衆に軽く声をかける。

「そっとうわけだぐ、皆で食事だぐーよ」

「はっ、畏まりました候っ」

壁から姿を現し、ぞろぞろとリュウの背後に続く七人衆。全然一人で食事ではない、が、誰も言い出さなかった。言い出せるわけがない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1747u/>

DESTINY 第一章～それぞれの路へ～

2012年1月14日07時46分発行